

北アルプス登山史資料 1

— 鹿島槍ヶ岳登山史 —



鹿島槍ヶ岳奥壁

平成 22 年 (2010)

大町山岳博物館
Omachi Alpine Museum

北アルプス登山史資料 1

— 鹿島槍ヶ岳登山史 —

平成 22 年 (2010)

大町山岳博物館

Omachi Alpine Museum

発刊にあたって

大町山岳博物館では、北アルプスで繰り広げた近代を中心とした登山史について、改めて資料を調査・収集し、残された報告書などを読み直すことによって、後立山で展開された登山史とその意義を考えてみる必要があると考え、平成 20 年より、登山史に詳しい先生方にご協力を仰ぎながら準備を進めてまいりました。広範囲にわたる北アルプスにあって、先ず一番目に取り掛かったのが、鹿島槍ヶ岳の登攀史でありました。後立山山域にあって、もっとも過酷な登攀史を刻んだ鹿島槍ヶ岳の登攀は、冬山での技術の習得、経験を身に付け、その後ヒマラヤ登攀への足掛かりとなった登山史が見えてまいりました。詳細につきましては、平成 21 年企画展に反映され、企画展解説書『アルピニズム誕生 昭和初期の鹿島槍ヶ岳登山史』に詳述いたしましたので、そちらをご参照頂ければと思います。この際、様々な文献資料を収集致しました。今後の研究の更なる進展のため、鹿島槍ヶ岳登攀史に関わります収集した資料の中で、とりわけ欠かせない重要な文献を中心に、ここに資料集として出版いたします。収録致しました文献の中には、現在ではほとんど入手することも困難な各大学の部報なども収めさせて頂きました。関係機関の皆様には御礼を申し上げますとともに、あとがき部分に掲載させて頂きました。

なお本編は「北アルプス登山史資料 1 ー鹿島槍ヶ岳登山史ー」として、収録させて頂いたものです。今後続編として（仮称）「白馬岳周辺登山史」「黒部川側からの北アルプス登山史」「後立山南部地域」などの登山史についても順次まとめてまいりたいと考えております。

今後とも皆様からの情報提供並びにご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

大町山岳博物館館長 柳澤昭夫

凡 例

1. 本書は「北アルプス登山史資料 1 ー鹿島槍ヶ岳登山史」として、鹿島槍ヶ岳を中心とした大正時代から昭和 40 年代の冬季登攀を中心に関連資料を収録したものである。
2. 本書に収録した資料は、各編冒頭部分に記載したほか、これら資料の総論として、平成 21 年（2009）6 月 25 日発行の『山と博物館』第 54 巻第 6 号に掲載の、柳澤昭夫による「鹿島槍ヶ岳の積雪期登攀とアルピニズム ～大正末から昭和初期の鹿島槍登山～」を冒頭に加えて、これを編集したものである。
3. 文章・用語については、次の方針に沿って編纂した。
 - (1) 本文の叙述は基本的に原文を尊重、発表時の文章を記載した。しかし難解な用語や旧字については、常用漢字や現代かなづかいを用いた部分も稀にある。
 - (2) 江戸時代以降各時代にわたって慣用されていた語彙は、そのまま本文のとおり使用した。それゆえ一部に今日的にみれば差別的用語があるが、歴史的文脈を尊重しそのまま使用した。
 - (3) 度量衡については、その時代に使用していた単位を用い、メートル法等に換算していない部分もある。
 - (4) 原文に明らかな誤字、脱字がある場合には、これを補い加筆、訂正した。
4. 本文の配列は年代順を基本とした。
5. 各資料の尊重によって、記載された年号は西暦、和暦等混じっているがご了承頂きたい。
6. 本書の企画、編集は山岳博物館館長・柳澤昭夫、副館長・宮野典夫、登山史担当学芸員・清水隆寿が中心に行い、学芸員清水博文、千葉悟志、事務員岩田直美、北村洋子がこれを補佐した。原書からのパソコンデータ入力、編集作業、掲載許可事務手続き等は平成 21 年～22 年度ふるさと雇用再生特別事業の「山岳文化創出事業」を受け、これを山岳博物館友の会に委託し、選任された宮澤陽美が専らこれを行った。
7. 資料に転載あるいは本書作成にあたり様々の方にご協力を頂きました。あとがきにご芳名を掲載し御礼に代えさせて頂きます。

目次

鹿島槍ヶ岳登山史

- 発刊にあたって (柳澤昭夫)
1. (総論) 柳澤昭夫「鹿島槍ヶ岳の積雪期登攀とアルピニズム
～大正末から昭和初期の鹿島槍登山～」『山と博物館』第54巻第6号 大町山岳博物館 (1)
 2. (天保14年) 中島正文「黒部奥山廻り役について(抜粋)」
『北アルプスの史的研究』桂書房 (6)
 3. (明治42年) 辻本満丸「後立山連峰縦断記」『山岳』第6年第1号 日本山岳会 (9)
 4. (明治43年) 中村清太郎「越中アルプス縦断記」上・下
『山岳』第6年第1号・第7年第2号 日本山岳会 (28)
 5. (明治44年) 中村孝二郎「五龍、鹿島槍間の縦走」『山岳』第7年第2号 日本山岳会 (67)
 6. (明治44年) 榎谷徹蔵「後立山山脈 峰伝ひの記」『山岳』第7年第2号 日本山岳会 (70)
 7. (大正6年) 田部重治「小川谷より針ノ木峠まで」
『日本アルプスと秩父巡禮』北星堂(覆刻・大修館書店) (92)
 8. (大正8年) 山崎安治「黒部川の仙境」『山の序曲』朋文堂新社 (98)
 9. (大正10年) 榎有恒「アイガー東山稜初登攀」『榎有恒全集』1 五月書房 (102)
 10. (大正10年) 榎有恒「アイガー東山稜初登攀」『山行』改造社(覆刻・大修館書店) (111)
 11. (大正15年) 石原巖「雪の鹿島槍ヶ岳」『一高旅行部五十年』第一高等学校旅行部 (121)
 12. (昭和2年) 山田二郎「第四回大澤小舎生活の潰滅」
『リュックサック』第6号 早稲田大学体育会山岳部 (123)
 13. (昭和3年) 高木英二ほか「記録 白馬岳」『針葉樹』第5号 東京商科大学一橋山岳部 (136)
 14. (昭和5年) 宍戸文太郎「三月の白馬より唐松へ」『炉辺』第5輯 明治大学体育会山岳部 (138)
 15. (昭和5年) 逸見眞雄「三月の鹿島槍ヶ岳」
『立教大学部報』第2号 立教大学学友会山岳部 (143)
 16. (昭和5年) 堀田弥一「三月の唐松・白馬尾根伝ひ」
『立教大学部報』第2号 立教大学学友会山岳部 (150)
 17. (昭和5年) 田中伸三「春期後立山連峰概観」
『関西学生山岳連盟報告』第1号 関西学生山岳連盟 (155)

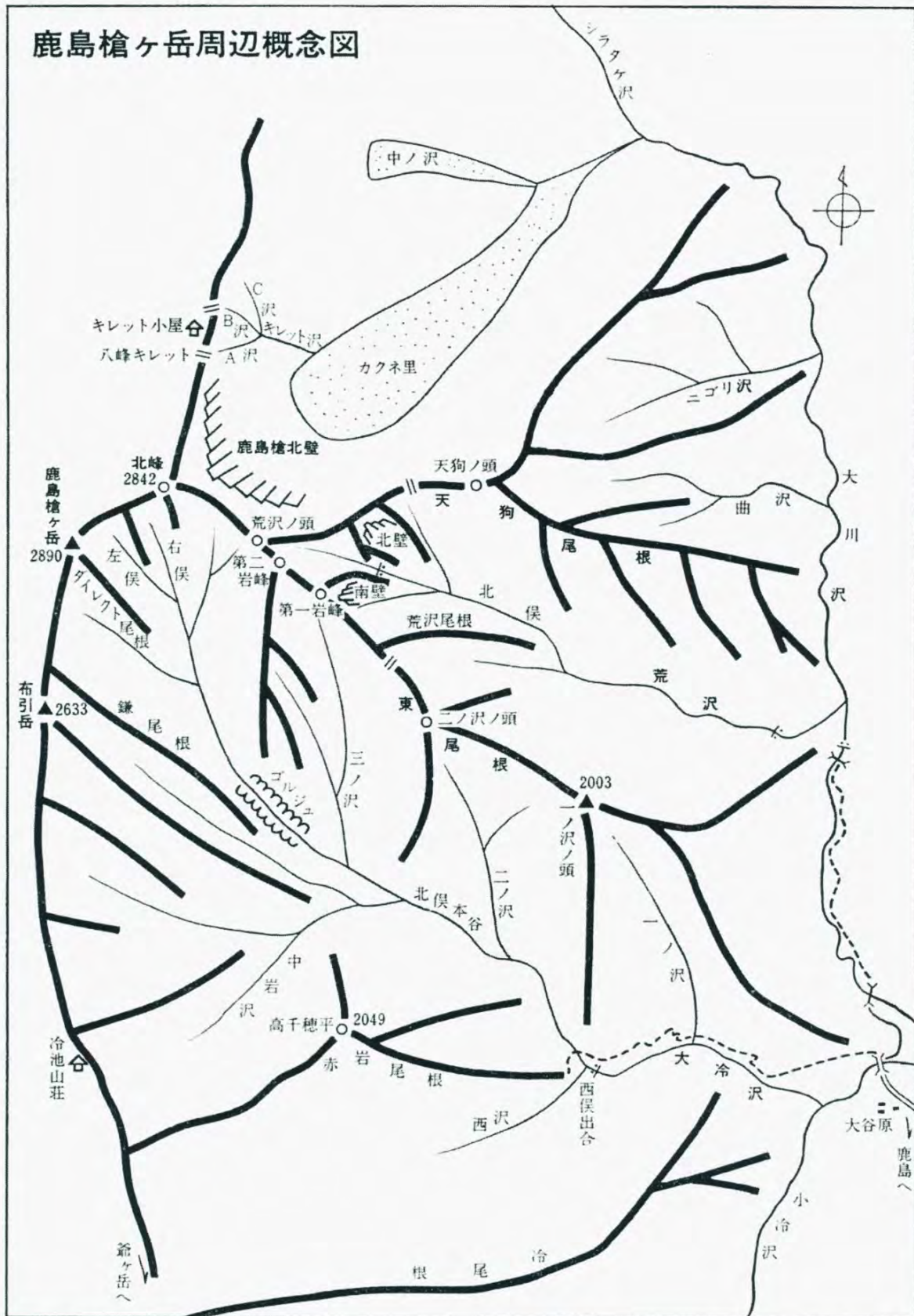
18. (昭和5年) 堀田弥一「十二月の鹿島槍と爺越え」
『立教大学部報』第3号 立教大学学友会山岳部 …………… (157)
19. (昭和6年) 磯野計蔵「鹿島鎗岳」『岳連報告』第3号 関東学生登山連盟 …………… (164)
20. (昭和6年) 加藤文太郎「鹿島槍ヶ岳」『単独行』 朋文堂 …………… (166)
21. (昭和6年) 堀田弥一「早春の黒部川側より鹿島槍ヶ岳及び五龍岳」
『立教大学部報』第3号 立教大学学友会山岳部 …………… (167)
22. (昭和6年) 工楽英司「春の五龍鹿島縦走」『関西学連報告』第2号 関西学生山岳連盟 …………… (183)
23. (昭和6年) 平吉 功「カクネ里より鹿島北槍登攀」
『関西学生山岳連盟報告』第3号 関西学生山岳連盟 …………… (188)
24. (昭和7年) 大塚信久「厳冬期鹿島北槍の登頂」『山』No.456 日本山岳会 …………… (194)
25. (昭和7年) 湯浅 巖「冬の後立山縦走」
『立教大学部報』第5号 立教大学学友会山岳部 …………… (196)
26. (昭和8年) 小原勝郎「三月の鹿島カクネ里附近」
『立教大学部報』第5号 立教大学学友会山岳部 …………… (202)
27. (昭和8年) 近藤 實「四月の鹿島槍東尾根」
『関西学連報告』第4号 関西学生山岳連盟 …………… (208)
28. (昭和10年) 前田光雄ほか「大川澤源流」
『関西学生山岳連盟報告』第6号 関西学生山岳連盟 …………… (212)
29. (昭和11年) 山崎安治「厳冬期鹿島槍北壁の完登」『穂高星夜』 朋文堂 …………… (218)
30. (昭和11年) 小西宗明「厳冬期の鹿島槍北壁」
『リュックサック』80周年記念号 稲門山岳会 …………… (224)
31. (昭和12年) 小谷部全助「記録 荒沢奥壁北稜」『現代登山全集』第4巻 東京創元社 …………… (227)
32. (昭和16年) 佐谷健吉「積雪期の鹿島槍荒沢奥壁南稜」
『日本山岳会会報』第107号 日本山岳会 …………… (237)
33. (昭和31年) 勝沼 将(登嶺会)「鹿島槍北壁正面尾根」
『岳人』第114号 中部日本新聞社 …………… (240)
34. (昭和41年) 阿部和行(紫岳会)「鹿島槍荒沢奥壁」
『岳人』第218号 東京中日新聞社 …………… (243)
35. (昭和42年) 長沢修介・千々岩玄(大町山の会)「爺岳西俣奥壁奥ノ稜」
『岳人』第239号 東京中日新聞社 …………… (250)

36. (昭和 42 年) 伊藤 弘・内田博文 (大町山の会) 「鹿島槍ヶ岳一周」	
	『岳人』第 239 号 東京中日新聞社 (253)
37. (昭和 42 年) 上田勝則 (門司山岳会) 「鹿島槍ヶ岳北壁」	
	『岳人』第 248 号 東京中日新聞社 (257)
38. (昭和 43 年) 岩崎元郎 (昭如山岳会) 「鹿島槍荒沢奥壁北壁」	
	『岳人』第 262 号 中日新聞東京本社 (261)
39. (昭和 44 年) 元井芳正 「天狗尾根から荒沢スキー滑降－荒沢尾根」	
	『岳人』第 309 号 中日新聞東京本社 (264)
40. (昭和 45 年) 山本 淳 (山口大学) 「後立山縦走」『岳人』第 294 号	東京新聞出版局 (268)
41. (昭和 46 年) 鳥屋部忠治 (東京緑峯山岳会) 「鹿島槍荒沢奥壁」	
	『岳人』第 298 号 東京新聞出版局 (272)
42. (昭和 47 年) 森田正行 (関西クライマースクラブ) 「厳冬期不帰二峯東壁下部・上部三角形岩壁」	
	『岳人』第 308 号 中日新聞東京本社 (275)
43. (昭和 48 年) 近藤和美 (東京こぶし山の会) 「鹿島槍ヶ岳荒沢尾根」	
	『岳人』第 331 号 中日新聞東京本社 (280)
44. (昭和 49 年) 倉下秀洋 (大町山ノ会) 「屏風尾根－スバリ岳中尾根登攀－爺ヶ岳縦走」	
	『岳人』第 331 号 中日新聞東京本社 (284)
45. (昭和 54 年) 竹中 昇 「鹿島槍より剣へ」上・下	
	『岳人』第 385 号・第 386 号 東京新聞出版局 (286)
あとがき (295)

鹿島槍ヶ岳の登山

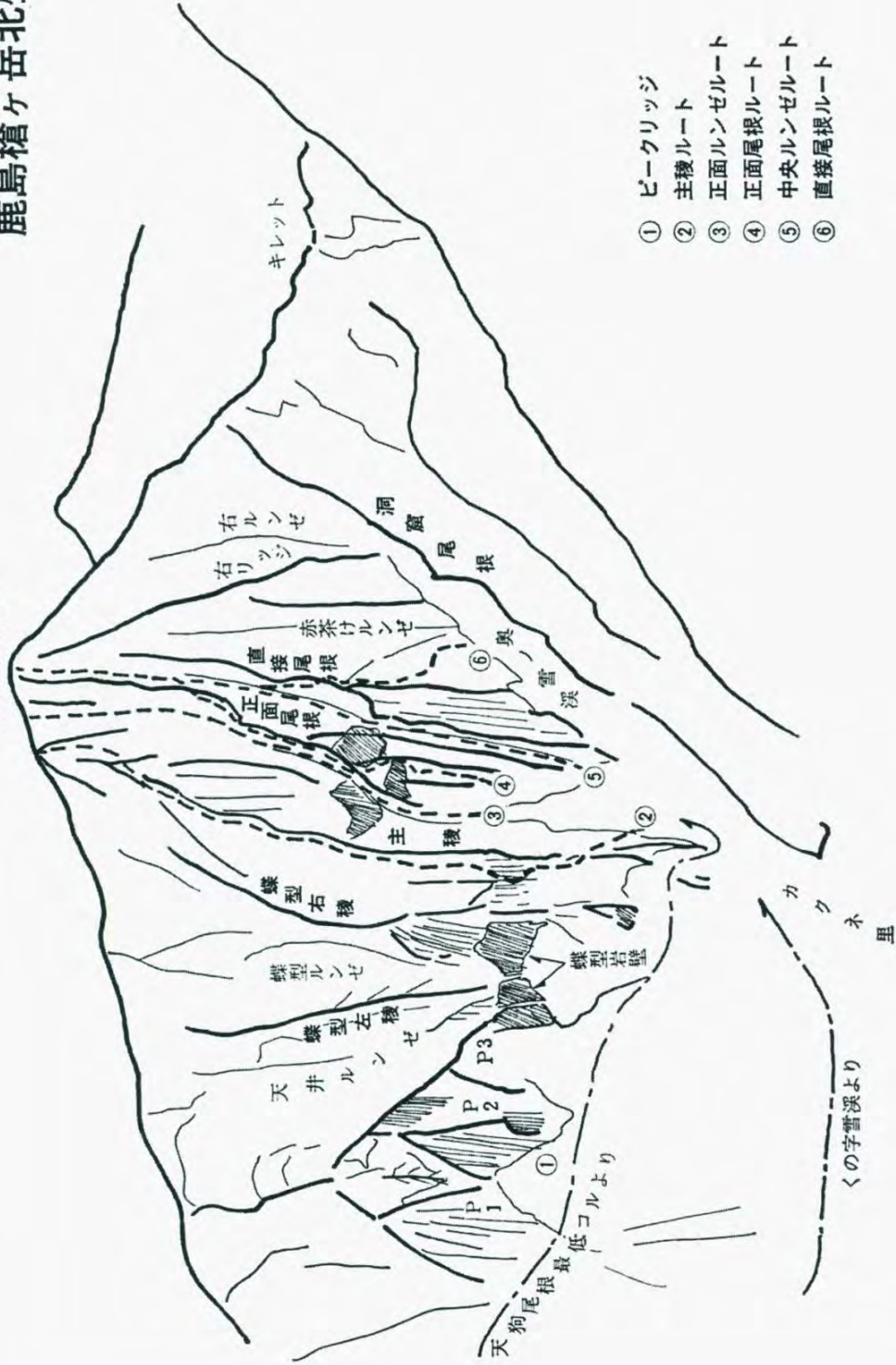
No.	年代	事象	報告者	資料名
2	天保14(1843)年 7月	後立山(鹿島槍)検分登山、小川温泉から	佐伯有次郎	『北アルプスの史的研究』『山岳』
3	明治42(1909)年 8月	鹿島槍ヶ岳登頂、大黒銅山から	辻本満丸・三枝威之介	『山岳』第6年第1号
4	明治43(1910)年 7月	鹿島槍、針の木、五色ヶ原、薬師、槍縦走	中村清太郎	『山岳』第6年第1号・第7年第2号
5	明治44(1911)年 7月	鹿島槍ヶ岳登頂、大黒銅山から	中村孝二郎	『山岳』第7年第2号
6	明治44(1911)年 8月	鹿島槍ヶ岳から槍ヶ岳縦走	榎谷徹藏	『山岳』第7年第2号
7	大正 6(1917)年 7月	後立山完全縦走	田部重治・小暮理太郎	『日本アルプスと秩父巡禮』
8	大正 8(1919)年 7月	北アルプス横断(剣沢～牛首尾根)	山崎安治	『山の序曲』
9	大正10(1921)年 9月	アイガー東山稜初登攀	楨有恒	『山行』
11	大正15(1926)年 3月	鹿島槍ヶ岳北峰登頂	石原巖	『一高旅行部50年』
12	昭和 2(1927)年12月	針ノ木雪渓遭難	山田二郎	『リュックサック』第6号
13	昭和 4(1929)年12月	白馬岳登頂	高木英二ほか	『針葉樹』第5号
14	昭和 5(1930)年 3月	白馬岳～唐松岳縦走	矢野文太郎	『炉辺』第5号
15	昭和 5(1930)年 3月	積雪期の唐松岳～白馬岳縦走	逸見真雄	『立大部報』第2号
16	昭和 5(1930)年 3月	鹿島槍ヶ岳登頂、大黒銅山から	堀田弥一	『立大部報』第2号
17	昭和 5(1930)年 4月	鹿島槍ヶ岳鎌尾根登頂	田中伸三	『関西学生山岳連盟報告』第1号
18	昭和 5(1930)年12月	鹿島槍ヶ岳～爺ヶ岳縦走	堀田弥一	『立大部報』第3号
19	昭和 6(1931)年 1月	厳冬期の鹿島槍ヶ岳	磯野計蔵	『関東学生登山連盟報告』第3号
20	昭和 6(1931)年 2月	厳冬期の鹿島槍ヶ岳単独行	加藤文太郎	『単独行』
21	昭和 6(1931)年 3月	黒部～鹿島槍ヶ岳、五龍岳	小原勝郎	『立大部報』第3号
22	昭和 6(1931)年 3月	唐松岳～鹿島槍ヶ岳縦走	工樂英司	『関西学生山岳連盟報告』第2号
23	昭和 6(1931)年10月	鹿島槍ヶ岳北壁主稜登攀	平吉功	『関西学生山岳連盟報告』第3号
24	昭和 7(1932)年12月	厳冬期鹿島北槍初登攀	大塚信久	『山』No.456
25	昭和 7(1932)年12月	白馬岳～種池縦走	湯浅巖	『立教大学部報』第5号
26	昭和 8(1933)年 3月	天狗尾根～鹿島槍ヶ岳北峰、北壁試登	小原勝郎	『立教大学部報』第5号
27	昭和 8(1933)年 4月	三の沢～東尾根～鹿島槍ヶ岳	近藤實	『関西学生山岳連盟報告』第4号
28	昭和10(1935)年 3月	積雪期の鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁初登攀	前田光雄ほか	『関西学生山岳連盟報告』第6号
29	昭和11(1936)年 1月	鹿島槍ヶ岳北壁主稜登攀	村田愿・山崎安治	『穂高星夜』
31	昭和12(1937)年 3月	鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁北稜	小谷部全助	『針葉樹』第9号
32	昭和16(1941)年 3月	鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁南稜	佐谷健吉	『日本山岳会会報』No.107
33	昭和31(1956)年 6月	鹿島槍ヶ岳北壁正面尾根	登嶺会	『岳人』No.114
34	昭和41(1966)年 1月	鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁南稜の成功と北稜の遭難	紫岳会	『岳人』No.218
35	昭和42(1967)年 5月	爺ヶ岳西俣奥の稜	大町山の会	『岳人』No.239
36	昭和42(1967)年 5-6月	鹿島槍ヶ岳一周	大町山の会	『岳人』No.239
37	昭和42(1967)年 5月	鹿島槍ヶ岳北壁中央ルンゼ	門司山岳会	『岳人』No.248
38	昭和43(1968)年 5月	鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁の北壁	昭和山岳会	『岳人』No.262
39	昭和44(1969)年 5月	天狗尾根～荒沢<スキー>荒沢尾根	元井芳正	『岳人』No.309
40	昭和45(1970)年12-1月	後立山縦走	山口大学	『岳人』No.294
41	昭和46(1971)年 3月	鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁南稜	東京緑峯山岳会	『岳人』No.298
42	昭和47(1972)年 2月	不帰二峯東壁・上部三角形岩壁	関西クライマーズクラブ	『岳人』No.308
43	昭和48(1973)年12-1月	鹿島槍ヶ岳荒沢尾根	東京こぶし山の会	『岳人』No.331
44	昭和49(1974)年 1月	スバリ岳中尾根～爺ヶ岳	大町山の会	『岳人』No.331
45	昭和54(1979)年 3月	鹿島槍ヶ岳～剣岳	竹中昇	『岳人』No.385・386

鹿島槍ヶ岳周辺概念図



鹿島槍ヶ岳北壁

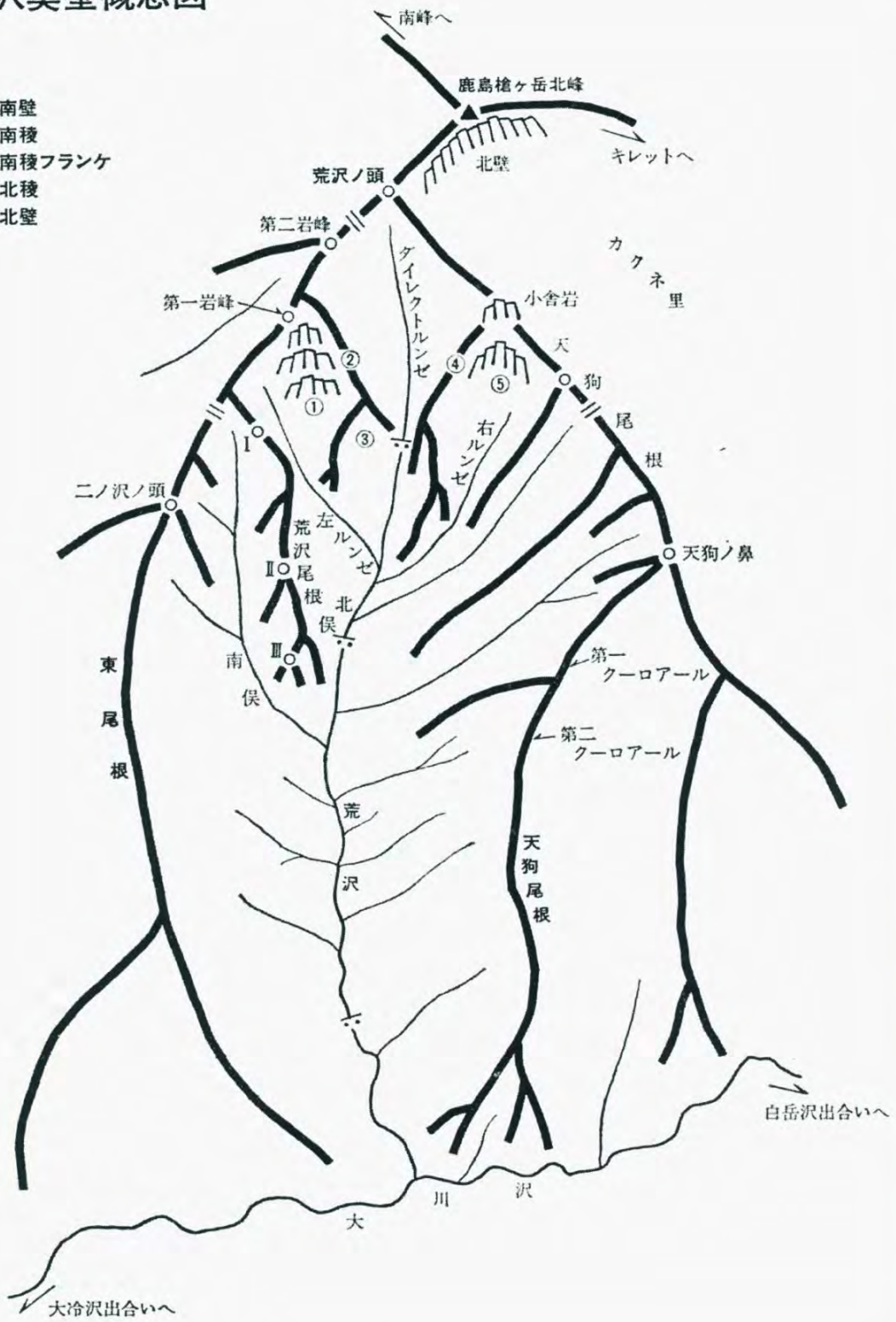
鹿島槍ヶ岳北峰



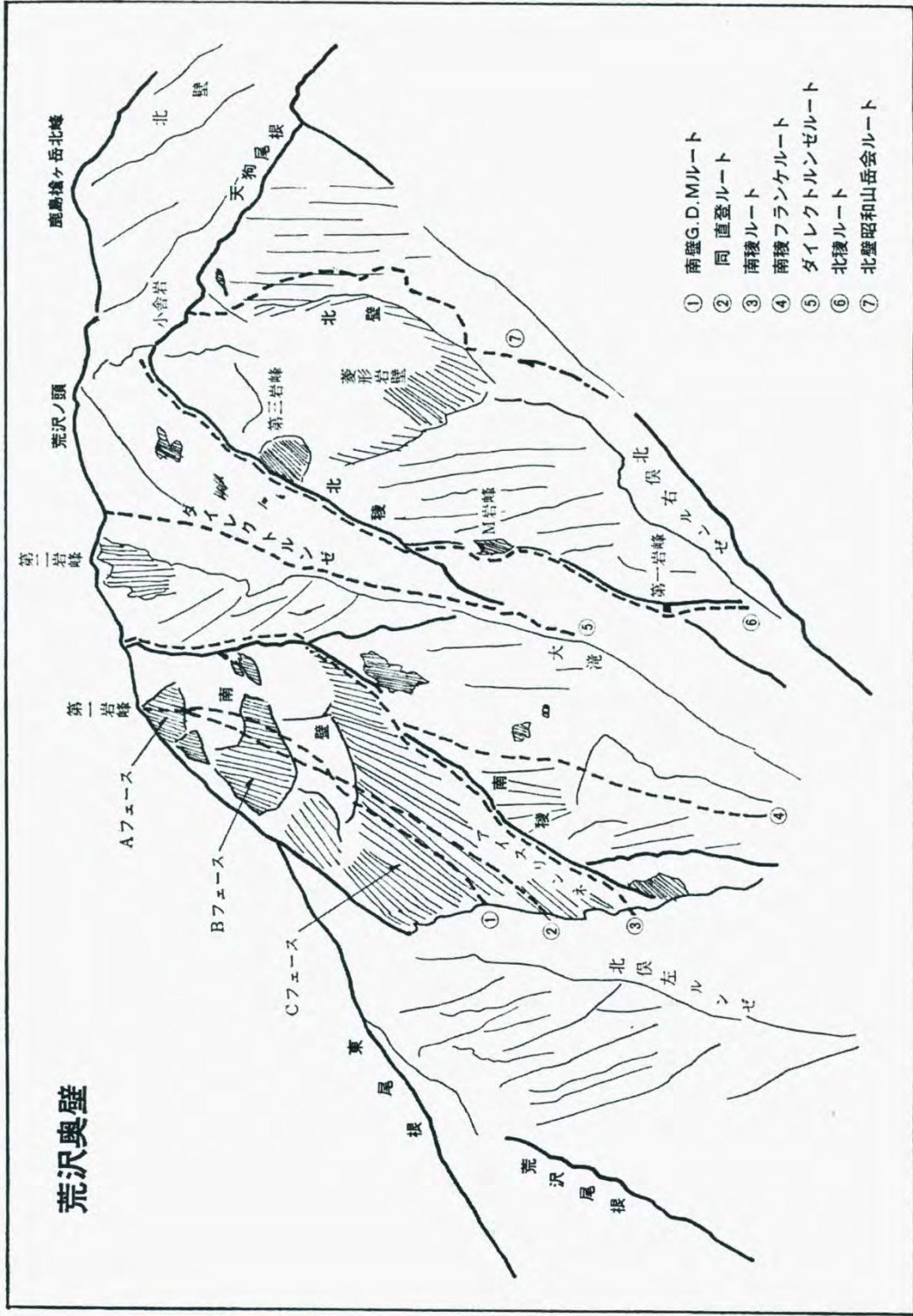
- ① ピークリッジ
- ② 主稜ルーツ
- ③ 正面ルンゼルート
- ④ 正面尾根ルート
- ⑤ 中央ルンゼルート
- ⑥ 直接尾根ルート

荒沢奥壁概念図

- ① 南壁
- ② 南稜
- ③ 南稜フランケ
- ④ 北稜
- ⑤ 北壁



荒沢奥壁



- ① 南壁G.D.Mルート
- ② 同直登ルート
- ③ 南稜ルート
- ④ 南稜フランケルルート
- ⑤ ダイレクトルンゼルート
- ⑥ 北稜ルート
- ⑦ 北壁昭和山岳会ルート

1. 鹿島槍ヶ岳の積雪期登攀とアルピニズム

～大正末から昭和初期の鹿島槍登山～

柳澤 昭夫

アルピニズム誕生

ヨーロッパでは、アルプスは、信仰の対象ではなく、むしろ、山は悪魔の住むところとして恐れられていた。こうした山が、遊びやスポーツの対象として登山されるようになるのは、世界に先駆けて産業革命に成功したイギリスのブルジョワジーが世界旅行とともにアルプス登山にスポーツとして挑戦したのが、近代登山のはじまりと言われている。つまり、ブルジョワジーの一種のステータスとして登山は始まったと言える。もちろん、アルプスを郷土とする地方の人々がアルプスの高峰登山のパイオニアであったことは間違いない。しかし、1850年代に入り、植民地政策に絡んだ冒険精神と産業革命を成功させた社会的繁栄も影響して、高峰のスポーツ的登山をリードするのは、世界最古の山岳会を誕生させたイギリスの人々である。登山の黄金時代と言われる、アルプスの高初登頂時代は、アルフレット・ウイルスのヴェツターホルン（3701m）の登頂に始まり、ウィンパーのmatterホルン（4478m）の登頂で幕を閉じる。ついで、処女峰でなくても未踏の山稜や、岩壁を登攀する時代がくる。1882年、ダン・デュ・ジェアン（4013m）双頭峰初登頂までの銀の時代を経て、ガイド無しの登山、ピトンやロープを積極的に用いて、鋭い岩峰や岩壁を攀じ登るスポーツ的な登山の時代に入る。

この時代を代表するクライマーが、A・Fマンメリー（現在はママリーと訳されている）（1855～1895）である。matterホルンのツムット山稜やシャモニー針峰群のエギュー、グレポンの初登攀を行い、コーカサスからナンガパルバットに向かい、彼の地に逝った。彼は、初登頂の時代は終わっても、困難な岩壁に無限の領域があり、そこにスポーツ登山の課題を求めた。こうした主張は、登山界にママリズムとして大きな影響を与えた。ママリズムは、より困難な岩壁や厳しい積雪期の登山を追求する、アルピニズムとして近代登山の一大潮流になる。



鹿島槍ヶ岳北壁

日本における登山が、信仰のために、立山や、御岳に登った講の登山に変わって、遊びとしてあるいは、スポーツとして山登りをするようになったのは、ウェストンらの影響を受けた明治以降のことである。もちろん、講の登山にも、信仰のためばかりでなく、物見遊山的に楽しむ側面も持っていた。明治以降の登山は、「講」の登山も続いていし、学術的調査研究登山や測量のための登山が行われるとともに、スポーツ的登山が展開され、日本アルプスの初登頂や積雪期の登頂が展開される。日本の近代登山は、当時日本に産業技術の指導等で来ていた外国人による日本アルプスの登山やヨーロッパから帰国した人の知識や技術、用具の影響が大きい。同時に、当時の大学山岳部員や日本山岳会員は、「山人」達の支えと山での生活の知恵や経験を学ぶとともに、洋書文献を取

り寄せて読み、恐らく手探りで学習した知識や技術によって始まったと言える。

1921年(大正10年)榎有恒は、アルプス中の最も難しいとされていたアイガーの東山稜を初登攀した。世界的にも大きく評価される登攀であるとともに、榎のもたらしたアルピニズム的登山の方向、知識、技術、用具などに関する影響は大きかった。榎の出身である慶応大学山岳部はもとより、日本山岳会や各大学山岳部は、未知な領域での、困難なクライミングを求めるアルピニズムを目指し大きく舵を切ってゆく。日本アルプスの積雪期登山や岩壁のクライミングがアルピニズムの課題として、雪中露営や登攀技術、用具について研究され、ピトンやロープを使う登山が展開された。

その頃、学生登山のバイブルとして読まれていたママリーの「アルプス・コーカサス登攀記」の影響を強く受けて、明治時代に始まった近代登山黎明期のピークハントから、早くも大正末期から昭和の初めにかけて、より峻しい岩壁や岩稜を攀じ登る、ヴァリエーションルートに登攀する登山へと急速な展開をみせる。瞬く間に、夏の穂高、北岳、劔岳の岩壁や岩稜が初登攀され、昭和に入ると早くも積雪期に岩壁や氷雪壁の登攀が試みられる。むろん、当時の登山が、全てアルピニズム的登山であったわけではない。信仰に関りの深い「講」の登山も植物や地質地形を研究するための登山も行われていた。こうした登山を支えたのは、山を生活の場としていた猟師や岩魚釣りなど「山人」である。ルートを設定し、山を案内し、荷物を運ぶだけでなく、地理、地形、天候、雪崩等に関する蓄積した経験や知識と判断力。山歩きの技術、焚き火や小屋がけの仕方など、山での生活技術や知恵が登山者を支援し、都会から来た登山者に大きな影響を及ぼした。山麓の登山基地となる旅館の営業、山小屋の建設、登山道の整備とともに測量が進み、地図や案内書が市販されるようになってきた事情がある。もちろん、当時の近代化政策や、大正デモクラシーの影響は無視できない。

昭和初期の後立山をめぐる積雪期の登山

立教大学〔堀田、小原、(人夫・山本、佐々木)〕は、昭和6年3月20日から4月9日に掛けて宇奈月から、冬の黒部川を40回にわたり渡渉して、新鐘釣から不帰谷を登り、百貫と不帰の間のコルを越え、祖母谷温泉に入る。温泉から南越、餓鬼の田圃を通り、餓鬼谷の岩小屋(小屋掛けして)に入る。そこから東谷尾根を越え東谷に入って小屋掛けをする。ここまで9日を要した。東谷の仮小屋から鹿島槍と五龍に登頂する。まさに積雪期にテントを持たず、粗末な小屋掛けによる、未知なる谷越え、山越えの登山であった。

同年3月26日から4月4日にかけて、京大(伊藤、工楽、長谷川)は、五龍から鹿島槍へ積雪期の縦走し鎌尾根を下る。唐松小屋を利用しているが、その先は、烈風の中で壮絶な3晩のツェルトビバークであった。この時、東谷にいると思われる(五龍山頂で人影と名刺を見ている。)立教(堀田ら)の野営地に逃げ込むことさえ考えている。立教〔湯浅、斯波、(人夫・横川)〕は同じく、昭和7年12月から翌年1月5日に掛けて白馬から爺ヶ岳へ縦走する。猿倉小屋、白馬山頂小屋、唐松小屋、キレット小屋を利用しているが、やはり2晩のツェルトビバークを余儀なくされた。この京大、立教の二つの縦走は強風の吹き荒ぶ後立山の縦走である。ツェルトビバークによる驚異的な記録と言えよう。昨今は、装備やテントは格段に進歩した。にもかかわらず、縦走を試みるものさえいない。

1935年(昭和10年)3月、旧制浪速高校山岳部の今西寿雄、中村英石は、谷口千之吉、吉田達三のサポートを受けて、鹿島槍北壁の初登攀が行われた。遠見尾根にベースキャンプを設け西遠見付近から白岳沢を下りカクネ里に入り、北壁を攻撃した。カクネ里でサポート隊と別れ、雪崩に洗われてカチンカチンの右ルンゼに取り付く。塵雪崩と格闘しながら登攀し、北槍下約130mの主稜線に出た。吹雪の中下降しキレット小屋に入る。翌日サポート隊と合流しカクネ里経由でベースキャンプに帰る。

翌1936年(昭和11年)1月行われた早稲田大学山岳部の主稜の登攀は壮絶でさえあった。早稲田は1934年(昭和9年)12月に第1回目の北壁攻撃を試み、この時は、白岳にキャンプ

を進めたに終わったが1935年3月には主稜線を縦走してキレットからアタックする予定であったが、悪天候のため、大遠見から落ちる支稜にキャンプを設けて攻撃したが失敗した。1936年の攻撃はなんとしても完登するぞと言うすさまじい闘志を持って行われた。12月31日難波、小林の2名が攻撃するが積雪多量のため、100mほどの登攀で終わる。この日、

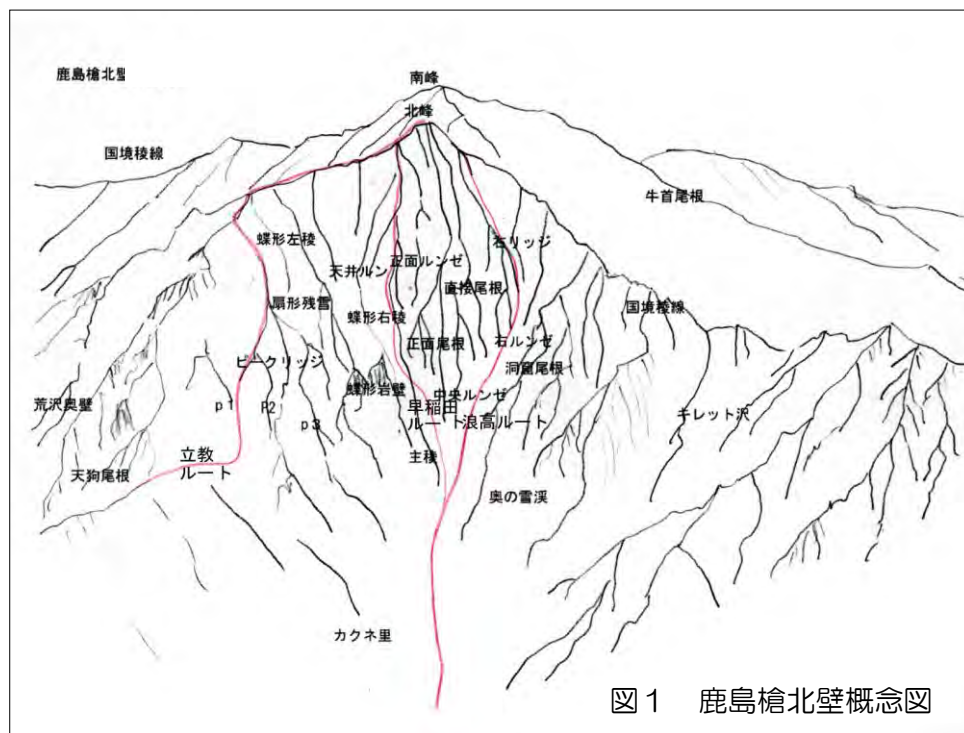


図1 鹿島槍北壁概念図

尾関、山田の2名がキレット小屋にサポート、食料を荷揚する。1月2日小西、村田の両名により2回目のアタックが行われた。31日の難波らによる苦闘のラッセルに助けられ順調に進むかに見えたが、降雪が始まるとともに、深い雪のラッセルと塵雪崩に苦闘する。頂上下50mほどの傾斜の緩い雪稜上についたのは、午後7時そのままツェルトビバーク。しかし、それから後が大変であった。翌日は吹雪の中、キレット小屋を目指す。荒れ狂う風雪の中、ルートの判断に苦しみながら午後1時過ぎには、キレットのおりくちに着くがおりくちが分からない。風が収斂して通りぬけるキレットは、すさまじい風雪、困難な通過になった。悪戦苦闘の末またもやキレットの底でビバークになる。その夜はことのほか辛いビバークになった。翌日も吹雪、やっとのことでキレット小屋にたどり着く。12時を回っていた。そこには、明大山岳部と慶大医学部と人夫がいた。食糧は、サポートが上げた5箱の携行食のみ、彼らの好意に甘えるより仕方がなかった。

1937年(昭和13年)3月には、北岳の登攀で力をつけた東京商大山岳部の小谷部全助と森川真三郎のペアによって、難関、鹿島槍荒沢奥壁北稜が初登攀される。小谷部らは、神城から入山し、今の五龍遠見スキー場、地蔵の頭付近にベースキャンプを設け、大遠見に第2キャンプを設け、前進基地とする。そこからカクネ里へ下り、カクネ里をつめ、「く」の字の雪渓あたりを登って天狗尾根にでて第3アタックキャンプを設けた。天狗尾根から荒沢北俣へ下降し北稜に取り付いた。

アタックキャンプを出発したのは、早朝5時。北稜に取り付いてから、M岩峰まで8時間かかった。M岩峰の登攀に苦労し、北稜を登り終え、小屋岩についたのは23時、4時間ほど休憩し、天狗尾根をくだり、アタックキャンプに帰還したのは、翌日の11時30分であった。じつに30時間を越える壮絶な、初登攀であった。

因みに、荒沢奥壁北稜の第2登は18年後の1955年4月である。第2次世界大戦をはさんでいるとは言え、第2登まで、これだけ時間のかかったルートも少ない。今日でも困難なルートであるが、いかに困難な初登攀であったかを物語っている。

鹿島槍荒沢奥壁南稜を初登攀したのは、昭和16年、浪高、甲南OBの東大(佐谷、伊藤)パーティーである。

アプローチと登攀ルート

小谷部全助の山日記を手懸りに、当時の積雪期鹿島槍登山のアプローチや登攀ルートを追ってみ

た。

昭和初期の鹿島槍の登山は残雪の多い、谷やルンゼにルートがとられている。大冷沢側では西沢、中岩沢、布引沢、北俣本谷、同二ノ沢、同三ノ沢であり、荒沢では本谷南俣、そして北俣、同左ルンゼ、同右ルンゼ、そして、白岳沢、カクネ里である。

こうした彼らの足跡をトレースすることで、当時の世界的水準を超えたとも言える積雪期の困難なクライミングを考察してみた。

多量の積雪を見る鹿島槍周辺の谷は、谷の両側の斜面から落ちる雪崩で、非常に大量のデブリ（雪崩で運ばれ堆積した雪）で埋まる。積雪の安定する四月、五月は雪崩をさけることは比較的容易であり、多くの谷の初登が六月になされていることを見ても、六月になればブロックの崩壊はあってもほとんど雪崩を心配せずにすむ。急斜面の雪は雪崩れ落ち、谷を埋め、多くの谷は最大でも四〇度で比較的傾斜が緩い。したがってデブリに埋まる谷は登りやすく、登頂ルートに設定しやすかっただろう。

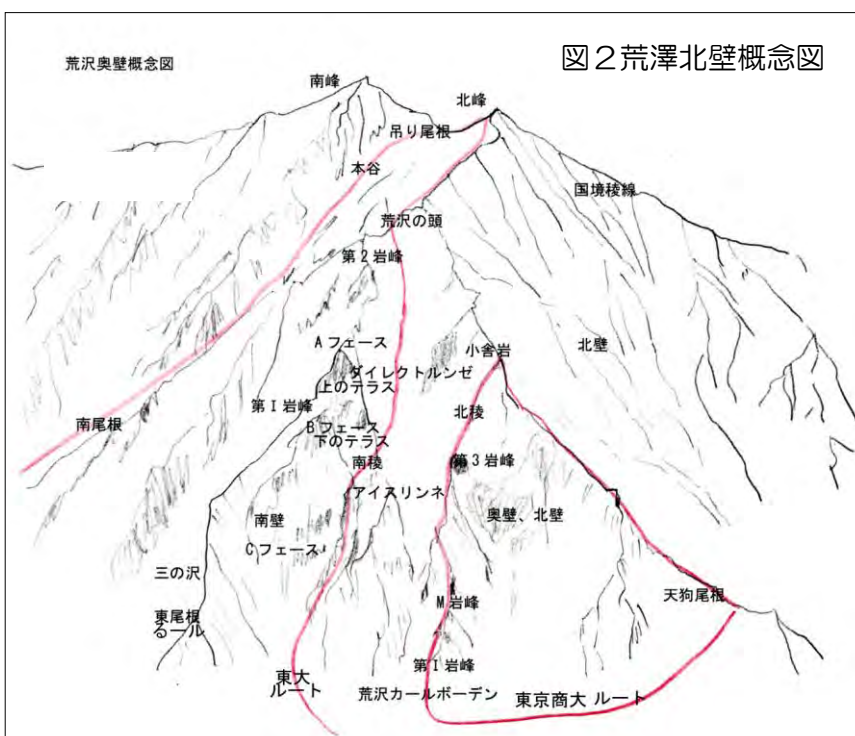
鹿島槍は、まず、西沢をルートにした。赤岩尾根上部にでて、主稜線伝いに登頂している。

そして、本谷と周辺の、中岩沢、布引沢などがルートに取られた。西沢同様山頂へは、主稜線を經由する。最も多く取られたのは、本谷である。残雪が繋がる七月頃までは、山頂への最短時間のルートである。夏になれば滝や岩場も出現し、雪渓は切れるが、例外として北俣本谷三ノ沢をのぞけば、困難な滝や岩場は出現しない。三ノ沢といえども残雪が多く、一箇所出現する滝を除けば、ほとんど七月までは雪で埋められているので登りやすい。しかし、十月の三ノ沢は、いくつもの滝が連続して現れるし、雪渓はズタズタに切れ、不安定なブロックが狭いルンゼに引っかかるように残り、何時崩落するか知れず、危険極まりなかった。本当に彼らはこの谷をアプローチに使ったのか信じがたい。主として、三ノ沢、二ノ沢は東尾根へのアプローチとして使われたと共に荒沢奥壁登攀後に下降路として積雪期に使われている。

鹿島槍東尾根の初登攀は、黒部で名高い冠松次郎である。昭和五年八月、大冷沢北俣本谷の二の沢を詰めて、一ノ沢の頭と二ノ沢の頭との間にでて、東尾根から登頂した。下部の樹林帯の藪漕ぎを避けたと言うよりも、沢筋をルートにすることで登頂までのルート全体を把握しやすかったと考えられる。

昭和九年の立教大学山岳部の積雪期初登攀は、東尾根末端からである。東尾根の概要が明らかになったからである。なお、甲南、立教などは、積雪期も二ノ沢を登下降している。東尾根には、第一岩峰、第二岩峰の難所があるが、第一岩峰手前から、又は、第二岩峰で三の沢へ入り、第一、第二岩峰を左から巻いて南尾根のコルへ出ている。また、第二岩峰は右から巻いて本谷ルンゼを登っている。雪崩を見極めなければ取れないルートである。

荒沢最初の大滝は左岸の岩棚をへつっている。荒沢の南俣は両側を岩壁にかこまれた狭い谷であるが八月でも残雪がつながり、荒沢から東尾根へと登下降されている（九月以降は検証していない）。現在、南俣はほとんどトレースされない



が、情報が少ないことと冬季は雪崩の危険が大きいことによるのだろう。今では、情報の多い東尾根が冬季は使われている。

荒沢北俣本谷は荒沢尾根の末端をまわり込んだところで八月以降は連続した七つほどの滝が出現し難儀する。浪高パーティーはこの滝を、荒沢尾根側をトラバースして南俣に出て下降している。多くの場合は天狗尾根側のハイマツ伝いに高巻きしている。我々もそうした。この滝の上は荒沢奥壁直下のカールボーデン（氷河が削ったお椀のような地形）である。七月頃までは滝もです全くスムーズに谷を登下降できる。カールボーデンを中心に、左ルンゼから東尾根へ、右ルンゼから天狗尾根へと登下降している。（小谷部山日記・三高生の遭難の頁参照）。この時、小谷部らは、荒沢から入山し、上の大滝は、天狗尾根側を高巻きし、カールボーデンに出ている。そして、右ルンゼから天狗尾根を登り、山頂から冷池方面に向かう途中、山頂付近で遭難者を発見している。

カクネ里へは遠見尾根から入りやすく浪高や早大パーティーら多くのパーティーが北壁へのアプローチにしている。小谷部らもカクネ里から天狗尾根に登り荒沢へ下降し奥壁北稜を初登攀した。カクネ里へは大川沢をアプローチにすることも困難ではない。ことに残雪期、四月頃までは荒沢出合からカクネ里まで谷は雪で埋まっている。

カクネ里から後立山主稜線へはロノ沢、中ノ沢、キレット沢（奥の雪渓はまだ検証していない）、夏でも（八月末でも）残雪の谷をルートにすることができた。当時も今も情報の少ない、未知な領域と言えるが残雪の谷はルートを設定しやすかったと言える。

しかし、未知であるが故の困難をとまなうだけに、アプローチにおいて実践的にロープの技術やルートを設定する能力を鍛え、高めていくことができたと考えられる。彼らはグレンデで技術訓練するより、実際の山で、そのアプローチで山の概念を把握し、技術的訓練を行い、クライミングルートを設定する力を培ったと思う。

現代の我々は多量の情報をもとにし、東尾根や天狗尾根に安全なアプローチを設定できる。しかも、それが当然のように。そしてその情報の範囲から未知の領域へと一歩も範囲を越えられない。なぜなら情報が自分で経験し集積した情報でないからである。

昭和初期、全ての谷や尾根、岩壁が未知の領域で冒険的であった。だからこそ彼らは、アプローチで、技術を訓練し、状況を判断する力を養い、自分で経験を集積していった。その延長上に荒沢奥壁や北壁の登攀が存在した。

最も驚くことは冬季も雪崩が収斂（しゅうれん）するこの谷をアプローチにしたことである。どこかで雪崩の危険に対する判断力、雪崩を回避する知恵を身につけたのだろう。

雪崩に関する多くの科学的知見を手に入れた現在でも、雪崩が出るかも知れないという予測は高めることはできたが、依然として雪崩は出ないという確信は得られないまま谷底へ下降し岩壁に取り付いている。科学的な予測というよりも雪崩の観察、多くの冬山経験の集積による「勘」で状況を判断している。全く彼らと同様である。彼らは恐れを知らない、恐いもの知らずの無鉄砲なクライマーではない。むしろ知的で文献を読み、一步一步経験を積み重ねた、極めて慎重なクライマーであった。未知の本谷、荒沢、カクネ里をアプローチにして、鹿島槍周辺のこの谷を登り降りする過程で、力を高めていったのだろう。

登山における困難な課題を解決してきたのは基本的には安全性を高める防御の力であろう。それは技術的には確保技術の展開であり、状況を判断する力や荒天の中で生き抜く生活の知恵であり、雪崩を回避する知恵である。実践的に経験を集積し山を捉え、ルートを設定し、山登りを構成する力を高めてきたからである。

現代の登山にみられるように情報を集積し、知識を習得し、訓練で技術を身につけても経験という検証を経ない情報、知識や技術は、知恵として生きてはこないだろうし、山登りを構成する力にはならないのではないだろうか。

（大町山岳博物館 館長）

2. 中島正文 「黒部奥山廻り役について」『北アルプスの史的研究』
昭和六十一年七月十五日刊 桂書房発行

要 約

加賀藩では、前田利家が広大な黒部奥山が軍事及び経済上に大きな価値があることに着目した。寛文5年、ここを巡廻管理するために「奥山廻り役」という特別の職制が確立した。加越能三国の国境監視の任務を帯びた「奥山廻り役」は年1回、8月から9月にかけて隔年で上奥山と下奥山を巡廻していた。しかし元禄時代以降、奥山の各地に討伐等が起るに従い、毎年上奥山、下奥山の両方を見廻るようになった。案内や人夫には各地の一流の山男を指名して、総勢40名に近い人数をそろえて、さながら大名行列のように黒部山中を巡廻したという。

日本三名山の中、立山と白山の二つを封境に持つ加賀藩では、早くからこの二つの地域を奥山と呼んでいた。即ち黒部奥山、吉野奥山（峡奥に吉野村あり）である。しかし吉野の方の白山峡谷は谷も浅く規模も小さいので、後世一奥山といえ専ら黒部の方を指すことになった。

この黒部峡谷奥の拡大な地域に聳立する山々を巡廻管理するために「奥山廻り役」という特別の職制が、いつしか加賀藩に生れた。加賀藩の民政は初期は武士階級が直接に当っていたが、次第に十村（大庄屋）肝煎（庄屋、村長）という民間人に置き替えられ、藩は各所に郡奉行、改作奉行などを置いて統治の大綱のみを握るに止めた。これは何れの藩も大体同様であつたと思う。これらの職制の大半を整備したのは加賀藩三代の前田利常の頃である。

はじめ前田利家（初代）が黒部奥山の軍事及び経済上に大きな価値のあることに着目して、この区域の管理を越中新川郡浦山村の松儀傳右衛門に命じたのは慶長三年のことである。

次いで民政に熱心な三代利常が寛永十七年十二月、役に内役という名称を与えてやや制度化を計つたのである。その時に下附した文書は、

「黒部奥山は深山幽谷であつて山賊や浪人が忍び込んで居たり、また他国へ通路する徒輩もみろ様子であるが、以後嚴重に警備して入山せしめてはならぬ。然かも黒部奥山の情況など一切他言無用である」

という厳格なものであつた。かくてこれ以後、黒部奥山は藩公の許可なしには一步も入山できぬ神秘境となつた。この禁令はその後に頻々と起る信州人の盗伐者や、岩魚釣りの越境事件のために、更に嚴重に励行せられて明治の解放期に至つた。

職制として奥山廻役の名称の確立を見たのは寛文五年十月のことである。この年、加賀藩は加越能三国の林制の整備を期して山廻役制度を確立し、民間有力の人士を抜擢して、これに任せしめた。領内山野の七木（松、杉、檜、檜、櫟、栗、櫟）の伐採や他国商用の七木の取締りを兼ねて、いろいろ領内の雑役に服せしめた。

奥山廻役の制もこの時に確立し、定員三名（後に正員四名、加人二名、山廻足輕二名に増員した）に改め、主として越後、信濃、飛騨の国境を巡廻監視する黒部奥山国境目見分登山を役目とし、その他に領内の雑役に服することは前記と同じであつた。

彼らが国境監視という重大任務を帯び、時として隣国の役人達と折衝することもあるので、普通の山廻役に比して俸禄も大きく待遇も上位であつた。

その任命も特殊地域といい、国境監視の重大なことなど、こうして世襲制を採ったようである。然し時として新人を抜擢した例も少ない。

黒部奥山国境目を巡廻見分するのは年一回で、八月下旬から九月上旬である。この頃は天気も晴朗であり、徒渉も容易であつたからと思われる。

初め広大な黒部奥山を重点的に一挙に巡廻したが、後に上奥山（平小屋より上流）と下奥山（平小屋より下流愛本橋まで）を隔年に巡廻することにした。が元禄時代以降、奥山の各地に盗伐事件が起るに従つて年々上奥山、下奥山の両方へ一隊宛の国境見分登山を施行することに改めた。

さらに在来二名の奥山廻役と八名の人夫を以つてしたものを改めて、二名の奥山廻役、二名の山廻足軽、三十名の人夫という四十名に近い人数を揃えて、大名行列のように黒部山中へ繰り出すことになった。

この時は案内者や人夫達は指人といって前もつて各村内の一流の山男を指名して引率した。しかも黒部奥山は秘境であるがために山中の状況は、一切他言せぬという神文誓詞を彼ら人夫達からも取り上げて同行するという慎重さであつた。

登山日程は上下、黒部奥山国境目見分いずれも二十日間を予定し、山中での必需品、飯米、油桐紙、綿入れ胴衣、鍋、釜など日数に準じて適宜携行した。

また、奥山廻役自身も帯刀を許され、犯人逮捕用の手錠、捕縄も用意したことはいうまでもない。大勢の信州盗伐者に対しては実力行使を常に必要としたので、これに対処するために、用意は非常に嚴重なものであつた。

さて、元禄年間の頃までは、上奥山国境目見分として、針ノ木峠と有峯から薬師岳に登つて展望するのを定例とし、下奥山国境目見分としては、境川国境の山々と、小川温泉を起点として上駒ヶ岳（白馬岳）に登つて展望し、いずれも国境に異変なきやを確かめ見分するのが主な目的であつた。故にその頃は登山日数も十五日間くらいに過ぎなかつたが、後に越境事件などの頻発によつて、日数も二十日余りとなり人夫も増して、深山幽谷の中を隈なく検察することになつたのである。

故に彼らの足跡は、下奥山においては南方の鑓ヶ岳（白馬鑓）から進んで後立山谷（棒小屋沢）を溯つて後立山（鹿島槍）にまで延長した。また上奥山においても針ノ木峠へ登り、それから南方の峯々を縦走して鷲羽岳に達し、さらに一転して薬師岳をへて有峯に下り、大多和峠を越えて飛驒へ出るという、大縦走を決行するということにもなつた。元禄以降一各時代の黒部奥山の古絵図や日記、古記録を繙くならば、後立山方面の人跡未踏といわれていた高山峻嶺が、早いものは徳川初期、遅くとも文化、文政のころには越中の百姓である奥山廻役の国境目見分の草鞋の跡が印されていたと思うと実に感慨深いものがある。

また黒部の秘境といわれた黒部大川の流域辺も、奥山廻役が縦横に歩き廻つていた足跡を古絵図や記録中に発見すると、更に大きく感興を沸かせてくれるのである。

さて、四十人に近い大部隊が悠々二十日余も費して三国々境の山頂を練つて行くのであるから、まことに壯観なものと思う。特に両刀を帯びて先登する奥山廻役の得意や“思うべし”である。

後年白馬岳で、ある財閥が三十余名の人夫を狩り出し、風呂桶までかつがして登山してくる有様を見て呆れ返つたが、加賀藩の奥山国境目見分もこれに劣らぬ豪華さで正に「下たに一下たに一」と制止触れをかけんばかりの有様であることも面白い。

彼らの日記や手記を見ると、見分登山の実態がほぼ判る。悠々とした登山ぶり、雨や風の時は急

造の小屋の中で腰を落ちつけて、晴天を待つという、決して無理をしない態度など学ぶべきであろう。

下奥山見分登山では上駒ヶ岳(白馬岳)へ登り、境界の標木を建てた日などは目出たいとあつて、ボタ餅をつかせ、人夫達にも酒を振舞い踊など踊らせる。また、自分達も酒や菓子や餅などを用意してくつろぐのである。

安政三年六月、下奥山国境目見分に登つた奥山廻役竹内氏の日記には、この日二人の横目足輕を招いて酒宴を張つたとある。当日の御馳走は次のようなものであつた。

お茶、お菓子、お酒、取合(柚餅子、くるみ、いび)皿(茄子、さしみ)皿(あんこうのすじ)碗一素麵、山中としては非常にぜいたくなものだと思う。それから興にのつて俳諧の附会まで試みるという寛闊ぶりである。

流れのみ聞く淋しさや夏木立

義平

【註・義平は相役の脇坂氏である】

涼風忍ぶ風炉先の絵

常右

黒部奥山や奥山廻役のことについては藩庁から一切他言を禁ぜられているので、巷間の噂さに上ることが稀であつた。僅かに二、三の書物に奇怪な想像的なものが掲げられているに過ぎなかつた。

『肯構泉達録』の中には、

加州の村史に山廻りといふあり、境を廻る者なり、黒部山中へ入るには道をひらき川には大木を伐りて橋とし過ぐるなり、信州境までに至るに種々の所あり、赤牛岳といふは、朱の如く赤き山なり、又た半里四方も明礬ある山あり、又た半里余も葱を生じ、長六七尺許り、茅原のごとし、又た水晶を生づる山もあり、一里許り二尺廻りの竹あり、又た薬草多し、是は小又村の者予に語れり、此の者山廻りに従ひ、兩三度も此所へ至りしが始め立山より入り、信州境を廻りて有峯より長棟へ出で帰ると云ふ

云々とある。

この種の半端な記録くらいの知識では大衆も満足できなかつたであろうが、封建制下の旧藩時代で、しかも他言無用の秘境の状況はこれらの知識ですら、よほど高度のものであつたらうと想像される。

さて、奥山廻役は明治三年に廃止となり黒部奥山は挙げて官林に編入されて今日に至つた。

奥山廻役を勤めた名家の数軒は今日では他へ転じてしまつたが、松儀、浮田両家など三百年伝統の名家は今も栄えて、その豪壮な邸宅は訪ねる人の眼を瞠らせずにはおかぬものがある。

だが、こうした伝統ある由緒深い建築物を放置してある状態は寒心にたえない。そこで旧藩時代の百姓代官のモデル邸宅として、県史蹟の指定を申請して保存を計っている。が、ただ残念なことは数多の古文書や古絵図や記録の大半が散逸して往時を詳に知るこのできないことである。

(『岳人』八七号・昭和三十年七月)

3. 辻本満丸 「後立山連峰縦断記」『山岳』第六年 第一號

明治四十四年五月五日刊 日本山岳會事務所發行

要 約

明治 42 年 (1909) 8 月 3 日～6 日の記録。大黒鉦山より鹿島槍ヶ岳登頂。

メンバーは、三枝威之介。

行程は、8 月 3 日 大黒鉦山－五龍岳より黒部方面に分岐する尾根－南五龍沢。

4 日 南五龍沢－鹿島槍頂上附近。

5 日 鹿島槍頂上附近－鹿島槍頂上－冷沢。

6 日 冷沢－鹿島谷下り－大町。

※後立山登攀のうち、鹿島槍ヶ岳の初の記録。

三枝氏は、この鹿島槍登攀をなしたが、記事は発表していない。

***** ***** **** ***** *****

要 約

明治 43 年 (1910) 7 月 16 日～23 日の記録。鹿島槍から蓮華岳縦走。

メンバーは、三枝威之介、中村清太郎、辻本満丸。

行程は、7 月 16 日 大出－白沢のドウ－扇沢のドウ－扇沢河原にて野営。

17 日 滞在。

18 日 野営地－棒小屋乗越－祖父ヶ岳－大冷沢の頭野営。

19 日 野営地－布引の頭－鹿島槍ヶ岳－野営地－祖父ヶ岳－棒小屋乗越。

20 日 棒小屋乗越－岩小屋沢岳－新越乗越。

21 日 新越乗越－鳴沢岳頂上－赤沢岳－スバリ乗越。

22 日 スバリ乗越－大スバリ岳－小スバリ岳－針ノ木岳－針ノ木峠頂上下。

23 日 針ノ木峠－蓮華岳－針ノ木峠－大出－対山館(辻本)白馬登山へ。

－ダイラ(三枝、中村)アルプス縦走続行。

※大塚専一理学博士が『地学雑誌』明治 23 年に「信飛越山間旅行談」として針ノ木峠・黒岳登攀の記録を発表。

三枝威之介

中村清太郎

工學士 辻本 満丸

一、後立山なる名稱及其境域

越中の巨流、黒部川の谿谷を隔て、立山連峰の東方、信越國界に連亘する一帯の列嶂あり、其名甚だ世に顯はれざるも、山勢豪宕秀拔なり、地質學者は立山と共に之を黒部山脈と稱し越中人は後立山と呼ぶ。

後立山なる名稱は名詮自性、越中の用語にて、信州にては絶えて此名を聞くことなし、名稱の由來は明かに知り難きも、越中人が立山山上より黒部谿谷の東方に當り高峻立山に劣らざる大山脈の蜿蜒するを望み、而かも個々の山名を明かにし得ざるに因り、後立山なる概括的名稱を與へしこと蓋し其濫觴ならん(富山市附近より後立山は立山連峰に遮られて全く望見す可らず)今日立山に登

る人は先達祠官等が山上にて此名を呼び居るを氣付かるゝことなるべし。

後立山は一山一峰を指せる名稱ならぬこと、先以て確と云ひ得べきも其境域に至つては甚だ漠然たるものあり、小島烏水氏は本誌前號所載『日本北アルプス風景論』中に後立山々脈なる新名稱を造られ、次の如く記されたり。

「第六（後立山々脈）は黒岳山脈の最短なるに反して北アルプス中最も長大の脈で、私は總括して後立山々脈と呼んで置く、勿論越中方面からいふ「後」で信州方面からは立山の前に當るのであるが、立山が最も古くから知られ且つ開かれた名山であるのと、後立山なる名が早くより往々地理學者に呼ばれてゐるのと（その癖、後立山といふ一個の山體の存在は未だ何處だか確かには解らないのである）に敬意を表して、さう言つて置く。

烏水氏の後立山々脈は蓮華岳（信、飛、越界）以北、信越國界を経て（但し同氏の所謂黒岳山脈を除く）白馬岳に至り更に二分して日本海に入る迄の山脈（左、才兵衛岳、雪倉岳、右、小蓮華、乗鞍岳等）を一切總括されたるものなり、同氏の北アルプス山脈分類は將來此山地の記載、稱呼に多くの便利を與へられたるものと云つて然るべし。

自分等は烏水氏の記されたると同様の理由を以て本文に後立山なる名稱を使用することゝなしたるが、自分等の後立山連峯は同氏の後立山々脈に較べて、其境域余程狭きものなり、即ち此處に所謂後立山連峯とは南は北葛乗越（乗鞍岳、針木蓮華岳間）を限とし、北は鹿島槍、五龍二岳間の隙罅を以て界としたる信越國界の連嶺を指すことゝす、之を西方、立山連峯と對照するに佐良峠以北、劍ヶ岳に至る立山本部に侷抗する部分に當るものなり。

近頃、鹿島槍北方のゴリウ岳（北城村の割菱岳）を後立山と書き、後立をゴリウと音讀すること大分流行の様子なるが、ウシロタヤマと云ふ總括的の大名を何故、鹿島槍の如き高峰を措きて、北方に偏り、而かも比較的微小なる此峯に與ふことゝなりしか、甚だ怪むべし、如何にも立山をリウザンと讀むことはあるやうなれど後立山まで音讀するは、似非漢學者流の筆法と思はれて、頗る附會の嫌あり。亦た五龍の二字は元と三枝が與へたる宛字なれども（『山岳』第四年第一號一〇三頁、三枝は五龍岳の下に「宛字」と記し置きたるを印刷の時誤脱せり）本文には暫く之を採用し置けり。

後立山連峯は北より數へて、鹿島槍ヶ岳、祖父岳、（扇澤岳）、岩小屋澤岳、鳴澤岳、赤澤岳、スバリ岳、針木岳及蓮華岳の八秀峯と、山路の險惡を以て夙に愛山家間に其名を知られし針木峠の高嶺を含む、最北（鹿島槍）、最南（蓮華）二峯と雖ども直径四里を出でざる近距離にあれども、山嶺の屈曲甚だしく且つ嶮峻を極むる故其縦斷には多くの時日を費したり。

二、後立山の登山記録

古き昔のことは知らず、自分等の知る處にて、後立山登山の古き記録はO・Sの記名にて理學博士大塚專一氏が『地學雜誌』第十九及二十卷（明治二十三年）に掲げられし「信飛越山間旅行談」なり、其行程に曰く

「山脉跋涉の手始は九月七日なりき、信州北安曇郡野口村より籠川谷を昇り、針木峠を越へ、越中立山に至り同山より後立山に出で、黒部川を折り、黒岳に登りて再び野口村に歸る、露宿

十日間を、費せり（中略）針木峠は海拔二千五百米突なれども其北に連なる祖父ヶ岳、鎗ヶ岳共に三千二十米突に達する峻嶺にして絶頂の谷間には積雪解けずして氷河を爲す（中略）次は野口村より其北にある鹿島谷入を登り信越國界の骨髓とも云ふべき秀峯の鎗ヶ岳、乗鞍岳、不歸岳、祖父岳、祖母岳、蓮華岳等を乗越へ越後西頸城郡大所村に出でたり、此露宿日數十四日間たり、此山岳は名にし負ふ高山峻谷多く谿間は斷崖多く又た累年の積雪結んで尚ほ解けず進路極めて困難なれば山脊に攀登り峯又峯に亙り行くを尤も好とす、然れども絶頂四近には植物帶第四に屬するハヒ松繁茂すれば歩行難澁なり鹿島谷入より四日間を費し花崗岩の地を経て針木峠より連なる火山脈の鎗ヶ岳に達せしは九月二十四日頃なりしが時に烈風降雪の難に會ひたり、實に高山降雪の早きに驚きたり、同岳より乗鞍岳に至り乗鞍岳の西邊に不歸岳あり、祖父谷、硫黄澤あり、共に黒部川に注入する谷なるが、兩谷は立山續きの火山脈なり」云々

記事簡單にて行程の詳細を知る能はざるは、甚だ迷憾なれども、博士の後立山なるものは信越國境の峯に非ずして立山の背面、黒部西岸の或山を指されしものに非ざるなきか日數比較的少なくして黒岳にも登山せられしことは殊に此疑を深からしむるなり、鹿島谷入の記事中にある、鎗ヶ岳は恐らく鹿島槍ヶ岳のことなるべきも、乗鞍岳なるものは不明なり、又た祖父岳は鹿島槍の南方に位する著名なる祖父ヶ岳とは相違するものらしく（山名記載の順序より考へて）、祖母岳も明かならず、蓮華岳は大蓮華即ち白馬岳のことならん。

爾後、十幾年間、自分等の寡聞なる絶えて後立山登山に關する記録あるを知らず（針木越の記事を除く）、山岳會設立後も此方面は久しく困却せられたり、辻本は明治四十二年七月、祖父ヶ岳に登り概況を『山岳』第四年第三號に登載せり、三枝は同年八月越中方面より鹿島槍ヶ岳に登攀したるが其記事は發表せざりき。（後文「鹿島槍ヶ岳」の項参照）

三、東京より信州大出^{オホイデ}に到る

三枝、辻本の兩人は明治四十三年七月十三日午後十時、上野停車場出發、翌十四日早朝篠ノ井驛に着す、之より曩き中村は同月五日東京を發し、戸隠、高妻、黒姫、飯綱の諸山を窮め、十四日午前六時三十五分長野發の汽車にて篠ノ井に向ひ、停車場にて前記の兩人に會合せり、八時四十分明科驛に到着す。

明科館に憩ひ、九時二十分、馬車を雇ひて大町に向ふ、有明の翠嶂面前に峙ち、大アルプスの連嶺は殘雪皚々として雲間に隱顯す、池田を過ぎ、大町に近づけば高瀬の大流左に近く、後立山連峯中の蓮華岳、岩小屋澤岳、祖父岳等次第に雲表に現はる、十二時大町に着く。

此處にて一行出迎の爲め大出より來りし遠山兵三郎（主任導者）に會し、對山館樓上に休憩す、大町の人家、屋上に大石を置き、家屋のたゞずまひ自ら山國的なるは嬉し、町内にて登山用の罐詰、干魚、菓子、鍋など買求め、三時過、大出へと出で立つ、道路粗惡、馬車馳ること甚だ遅し、野口村にて天照天神を祀れる鎮守の森中を過ぎ、路少しく下りて鹿島川の橋を渡る、河原廣く、水流滔々たり。是より道路著しく上りとなり、大出の人家程なく眼前に現はる、青田に戦ぐ夕風漸く涼しき頃、村内に入りて遠山家の客となれり。

四、大出の一日

大出は大町を西に距る一里十町、高瀬入葛の湯へ二里、祖父ヶ岳支脈の麓にあり、戸數二十二の小村ながら、西に信越境上、屏風のの大連峯を繞らし、高瀬、籠川、鹿島の三大谿谷を控へ、誠に後立山登路の咽喉を掩せるの地勢なり、村民は七分農作、養蠶、三分山稼ぎと云ふ割合にて戸數は少なけれども家屋は孰れも大なる方にて、見苦しき程の荒家もなし。

十五日は人夫の雇入、其他準備の爲め大出に滞在す、此日屢々雨降り雲脚忙しく梅雨の天候未だ去りしと思はれず、午後は高瀬の河原に遊び、夜は品右衛門老人より山の話など聽きて暮したり。

此行最初の豫定は先づ蓮華岳に登り、夫より國境山脈を縦斷して、大黒鑛山に至り、三枝、中村は此處より黒部川を渡り小黒部谿谷より劍ヶ岳登山の能否を試むるにありしが、本日品右衛門等の語る處に依り、鹿島槍、五龍間の山脊傳ひは嶮峻にして行ひ難く、小黒部方面劍ヶ岳登山も頗る絶望的なること分り、計劃全く齟齬したり、然し兎に角後立山蓮峯の縦斷は是非遂行することと定めたるが之も荷物運搬の便宜上より鹿島谷入を廢し、棒小屋乗越より祖父ヶ岳を経て鹿島槍ヶ岳を征し、夫より山嶺を遂行して蓮華岳に至ることゝなせり。

人夫は案内者たる兵三郎の外、大町より大西又吉、宮田榮吉の二人、大出より仁科春吉、遠山龜次の二人、合計四人を雇ひ入れたり、又吉は兵三郎の姉婿とかにて年は四十余り、體格兵三郎を凌げる大漢なり以前は獵もやり、駒草採りなどにも山を歩けるものなりと、榮吉（三十五歳）は高瀬方面の外は全く經驗なき様子なりしが屈強の男、春吉（三十五歳）は測量員と共に此邊の山を歩きしことあるものにて甚だ忠實なる男なり、龜次は二十許りの若者にて後立山は此度が最初の登山なりと云ふ。

一行の携帶品は天幕、携帶天幕、油紙、米三斗、味噌一貫匁、大町買入の食料品以外、三枝が東京より準備し來れる罐詰類、飯盒、鍋、毛布、寫眞器、氣壓計等なり、登攀用具としては三枝、中村は歐州アルプス氷河用のアルペンストックを携へ、辻本は大町にて造らしめたる鳶口を富士金剛杖に附着して持參せり、金カンジキは一行皆な用意したりき。

五、「黒部の主」^{ヌシ}遠山品右衛門翁

大平晟氏は『山岳』第四年第二號に「穂高の仙人」上條嘉門次翁を紹介せられたり、嘉門次翁に匹敵するアルプス北方のオーソリチーは「黒部の主」の稱ある我、品右衛門翁を措て他に其人なかるべし。

翁は戸籍上の姓名を遠山里吉と云ふ、本年六十一歳なり、家は信州北安曇郡平村（大出）第四百七十番地にあり。年々冬はアルプス連峯の雪に獸を獵り、夏は黒部の清流に岩魚を釣る、黒部河畔ダイラの小屋は翁が山林局より保營を依託されたるものにて、此處を根據地として釣魚に従事すること三十七年の久しきに及ぶ、「黒部の主」の名ある亦た宜ならずや、而かも翁の足跡は黒部附近に限られず、南は槍ヶ岳方面、西は有峰附近、北は白馬の諸峰よりアルプス以外の戸隠方面にも及べり、高瀬川の谿谷の如き大小谿流幾數十の多きに達し、之を圖上に點檢するさへ容易の業ならざるに、一度之を翁に質せば、其名稱、方向、前後、左右等を即答すること掌上の紋を指す如きに至つては正に一驚せざるを得ず、翁、體軀大ならず、寧ろ小男の部に屬する方なれども、多年山岳の

秀靈に親める身は自ら俗惡の氣なく、極めて圓熟せる山人の風骨を見る。

翁は好んで自己の冒険談を語らざるより、詳しきことは知り難きも兵三郎等より聞き取りたる一二を記せば、或年針木峠に獵し、獲物も多く、一同山幸好きに喜び居たる折なりし、俄然大雪崩起り、翁は夫共に峠より大澤のドウまで押されたり、此時全身雪中に堆もれ、僅に左手の指先きのみ雪面に出て居りしを、同行せる弟等尋ね出して掘り起し辛くも生命を取り止めたりと、此時獲物のシ、十二、獵犬二鐵砲一を紛失せりと云ふ。又た明治二十八年頃、高瀬入、葛の湯の上手、二里なる東澤にて熊を撃ち、命中して倒れしかば、全く死せるものと思ひ、棒にて頭を打ちしに、其熊猶ほ殊せず、忽ち翁の向脛に噛み付き、其爲め大負傷を受けたりと云ふ、其熊は二十四貫匁ありしと。

針木峠に就き翁の談話を聽くに峠路は金澤の士族某等主唱し十一人合資して社を組み開鑿にかゝりしものにて明治三年着手し同八年に出来上りたり、此時川田、丸石、白澤等には休茶屋あり、ダイラには七間に四間の立派なる旅舎あり（今の小屋は其木材にて造りしものなりと）路は廣く牛馬も通れり但し通行人より路錢五錢を要求せしと、此道路は十三年迄通行出来しが其年大破し、次第に荒廢して現状に至りしと云ふ、又た峠路の出来たる頃、川には岩魚甚だ多く一網にて五十七尾を得たることもあり、^{ヌクイダニ}温谷を渡るに魚が脚につゝかゝる程なりしとぞ。

翁に三男あり、兵三郎は二男なり、通稱兵二又兵吉とも云ふ、同人母方の叔父は若島と名乗りし東京力士にて同人も又た若島の名にて村相撲の大關となり、大町附近に其名を知られしものなり、長男作十郎も山に精しき様子にして前年東京の鑛山師中井某を案内して立山方面に至りしは同人なり（祖父ヶ嶽登山記事中、兵三郎を此時の案内者なりし如く記せるは誤謬なり、辻本）、三男は海兵として目下横須賀に奉公中なりと、翁は笑ひながら「わしや小さくても、伴は大きうがす、かゝに似たのでしょ」と云ふ、兒孫に擁せられたる翁は今は樂隱居の身分に當れど、當年の豪氣猶ほ衰へず、アルプスの雪中に狩り暮すこと昔しに變ることなしと云ふ。

六、籠川谷を溯る一扇澤の滞在

十六日朝天霽れ、蓮華、岩小屋、祖父、鹿島槍の諸峰皚々たる殘雲を帯びて近く天半に連亘するを望む、午前七時十分、一行八人、大町を發して愈々後立山縦斷の途に登る。

村を離れて爪先上りの緩斜地を西北を進む、樹林中に立派なる路あり、七時三十五分、山の鼻と云ふ處を過ぐ、此邊より高瀬の谿谷を望めば、餓鬼嶽の支峯なるノロ澤の頭（シンスケの頭）、ヨタ澤の頭など云ふ峻峯高く聳え、猶ほ其の奥の方には五郎嶽附近と覺しき殘雪鹿子班の高嶺連続して現はる。少時にして籠川の流左に見え來り、一行は何時しか其谿谷の人となる、樹木は減じて草地多くなれり。谿谷の前方には蓮華嶽、祖父ヶ嶽の側尾幾重ともなく重り合ひ、正面には岩小屋澤嶽高く天際に聳え山脈左に延びて鳴澤嶽に連なる、三枝、中村の二人は此谿谷の景色、赤石山下の小澁川に似たる處ありと評し會ふ、右にシリナシ澤、ナル澤、イキトメ澤、口元へビ澤、奥へビ澤、左にトヤ澤、ハウノキアラシ、犬右衛門アラシ、ハ、キ澤、ナゼアラシ、ヤマハナアラシ、ツチアラシ、カマアラシ等の澤々を迎へ送りて、九時山の神を祀れる小祠ある處に達す、黒澤の手前にて河に近き處なり、元と此處に偉大なる栗の木とエンダラとあり、殊に栗は幹徑六尺に近き大樹にて山下村落にて誰知らぬものなき名木なりしが、近頃村費補助とかの名目にて、僅か七兩のかたに截

り倒され、針木山路中、紀念すべき天然物は惜氣もなく殄滅され終えぬ。

ヨセ澤のドウ附近にて一二回渡渉す、水左して深からず、此附近猶ほ道路あり、右方に鬼岩といふ岩石を見る、籠川の谷は漸く西方に迂曲し、岩小屋澤嶽は右手の屋根に隠れ、鳴澤嶽の左方に赤澤嶽見え來る、岩小屋澤嶽乃至赤澤嶽附近の山嶺は山勢連綿、屏風の列嶂を造る故、大町方面にて此邊の山を總括し、屏風嶽の名を以て呼ぶことあるものゝ如し。

九時四十五分、白澤のドウに着す、祖父ヶ嶽の一峰其峽間より見ゆ、之より路全く絶え、磊々たる籠川の河原を辿り行く、十時四十分右手山麓に岩小屋と云ふ岩窟あり、近づきて之を見るに奥行は浅けれども、間口六七間あり、岩石稜々、稍々崩壞の眞なきにあらねど其中に野營することを得べしと思はる、此附近の河原に憩ひて中食す。

此頃より天候次第に不良となり、澤々より起る白霧は須臾にしき狭き谿谷の天を蔽ひ、雨降り始む、一同雨具の用意して十一時三十分此處を出發し、同四十五分、畠山の小屋を過ぎ、十二時三十分扇澤のドウに着す。

扇澤は信越國境の棒小屋乗越附近に發源し、籠川支谿の最も大なるものにて、殆んど本流を凌駕するの概あり、此澤は時としてオホキ澤とも呼ばれるれども、實はワウギ澤にて、此澤に植物黄著の類を産すること多かりしより其名起ると云ふ之を扇澤と記すこと頗る當らずと雖も、前人針木越の記事中往々此字を用ゐたるを見る故、今之を襲用せり。

雨は一時小休みとなりしが、此頃より又た降り出し來れり、扇澤のドウより籠川本流の針木路に分れ、右折して扇澤を溯る、河原の傾斜頓に増加し、谿流深からざれど、水勢甚だ急なり、一時七分、口元小澤のドウを過ぎ、同四十分、奥小澤のドウに近き雪谿の下手に近づくと、降雨は益々烈しく、嶽嵐に連れて吹き付くる勢は面を向くべきやうも無くなれり、本日の豫定なる棒小屋乗越に至るには猶ほ扇澤上流の大雪谿三時間餘の登攀あり、此風雨中の登攀思ひもよらざるに因り、至急此附近に野營地を選定し明朝雨止むを待ちて登山を續くるの止むなきに立ち至りたり。

此邊の河原は兩側急立せる山脚にて何等の餘地なく、河原は大小の岩石累々たる斜面にて適當の野營地を得しに困難したりしが、今は猶豫すべき場合ならねば、谿流の左方なる、とある地點をトして、降りしきる雨中に野營工事は着手せられたり、人夫等鉈を振ひて樹木を截り、岩石を取り去りて地を準すなど、夫々忙しき中に、兵三郎が金剛力もて、邪魔せる大岩を易々と轉び落せしは目覺しかりし次第なりけり、彼是二時間近くもかゝりし後には、一行兎に角、天幕内の人となりて焚火の烟に咽びながらも、濡鼠の難を免ることを得たりき。夜に入りても雨は少しの休みなく、風聲、雨聲、谿聲に塞されたる扇澤の夜は次第に更け行きたり。

翌十七日は雨中に夜明く、雨霽るゝ見込なきに依り本日は滞在と決定す、天幕内より前面に眺めらるゝ蓮華嶽の丸石澤は恰も瀑布の状態を以て嶽腹を奔下し、扇澤も水量著しく増加し、濁流滔々渦巻き流るゝ様凄まじき限りにて、今は山下に引き返さんにも其渡渉は容易ならぬことゝなれり、雨は引き續き休みなく降りしが、茲に晝前頃に至り濁流天幕内に襲來せる一事件出來せり一同大に狼狽し、荷物を高處に移すやら、水源探檢に出掛けるやら中々の騒ぎなりしが、結局天幕内の中央に溝を造りて水のはけ口を付け、其上に大イタドリ、ダケカンバなどの枝を架し渡し、事僅に治まりたり、されど一同下を水流るゝと思へば餘り良き心地はせざりき、それより一同半眠半醒の状態

にて茫然其日を暮せしが、山路の動的困難より此靜的忍耐こそ登山修行中、最も苦痛なる科目なりけり。

幸にして雨は夕刻より収まり、峰頭の雪脚箭の如く迅けれども天候は次第に好望となり、後には青空さへ處々は現はれ始めしかば、天幕内は俄に色めき來り、暮色谿間より始まるや、一片の弦月、蓮華嶽の左肩に澄み、夕榮の色は美しく雲端を染め、梅雨霽の天候最早疑ひなき様子なるに、一同是に於てか漸く重荷を卸したる心地して、扇澤の重禁錮僅か一日にして無罪放免の幸運に會せしことを喜び合へり、晚餐には此附近に生じたるウトブキ、コウミ等を汁の菜となし、種々の雑談中々に賑しく時の移るを忘れて、人夫等天氣の良否を卜する一二の兆候を聞くに、飯を焚くとき、米粒鍋より飛び出づること多き時は明日天氣悪く、又煙草に點火する時一方のみ燃えて穴出来る時は翌日雨降ると云ふ。

此夜小雨ありしも左して氣にかゝる程のことなく、昨夜と違ひ、石の枕も心安く眠につかれたり。

七、棒小屋乗越より祖父ヶ嶽の縦斷

十八日、午前四時二十分起床、谿谷には雲あれども、天霽れて、豪壯なる蓮華の大嶽高く雲表に聳立す、一昨日來のしこりに屈したる脚踏み延し一行前進の準備に忙殺せらる、七時即ち此處を出發す。直に雪上の登りとなり、程なく左方より一雪谿の來り合するものあり是れ扇澤の一流、奥小澤なり、其ドウを過ぎて雪一時絶え、溪流となる、左方の岩壁に細き瀧あり、渡渉一回にして溪流は隧道狀の雪下に終り（七時四十分）、之より連續せる雪谿を登る、前方には祖父ヶ嶽より棒小屋乗越に連なる國境の山嶺、堤防狀をなして行手を遮り、後方には蓮華嶽愈々高く天半に連亘す、仰角甚大にして高峻極りなきを覺えしむ。

七時四十五分、雪谿左折して西北に向ひ、傾斜著しく増加す、谿側巉岩露出し、高山植物の花は美しく其裂罅を飾る、天界漸く咫尺の間に近づき來れるなり、白根葵殊に多く、淡紫の大輪は屢々行人の足を止めしめたり。

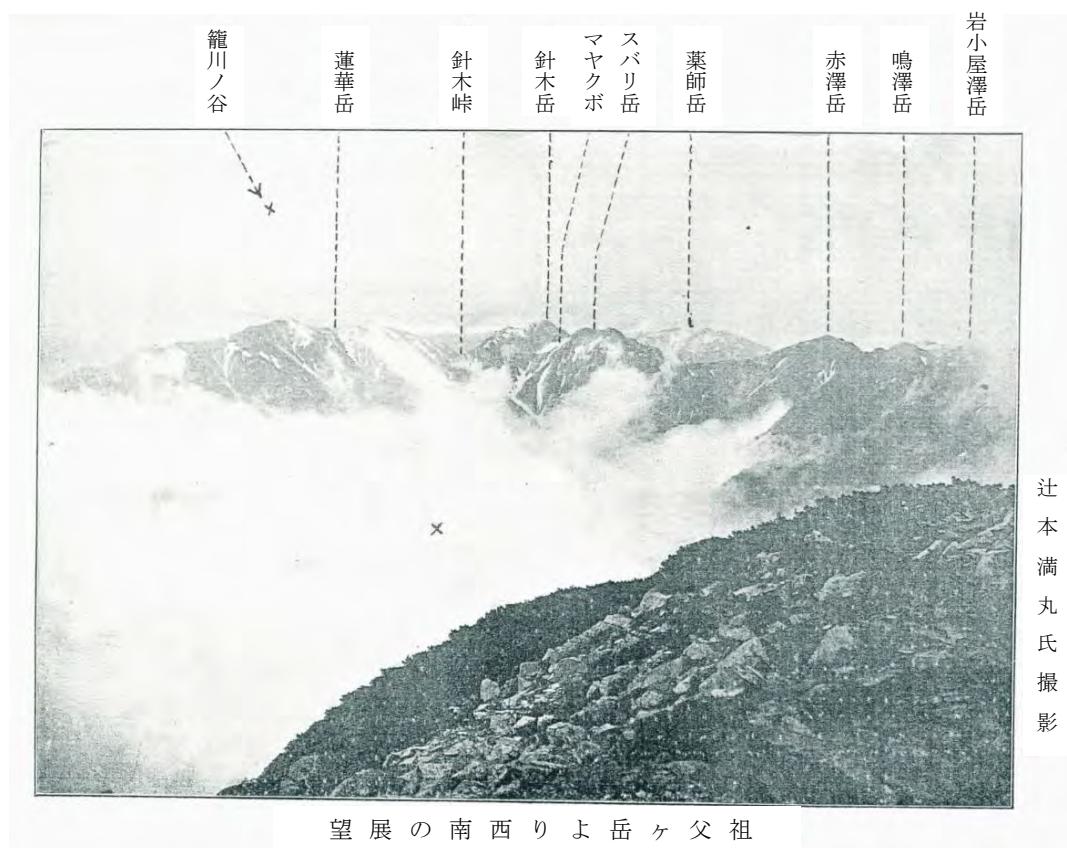
八時四十分、谿二岐す、右股、左股と云ふ、左方、左股に入る、此邊にてカンジキを着用す（四十二年夏、始めて祖父ヶ嶽に登りし時には、カンジキ無かりし爲め、此分岐點附近より右方の側尾根を攀ち、雜木中を押し分け、直接國境の山脊に登れり。『山嶽』第四年第三號参照、辻本）。左股の入口に傾斜七十度近くもある雪の壁立部面あり、三枝と中村とは携帯せるアルペンストツクの効力を試験する爲めなりとて眞先に之を登り大に得意がる。雪谿は次第に右方に曲折し、九時四十五分、谿又た二岐す、左は隧石ありて危険なる故、右を取ることにし、少時間の休憩を行へり、顧みれば祖父ヶ嶽頂上に近き岩崩れの場處に熊兒を伴へる熊の通過するを認めたり。

是より谿の幅狭まれども傾斜頗る急にして針木峠の雪谿を凌ぐ、カンジキ無くんば登攀甚だ危険なりと思はる、雲霧徂徠の間、雪谿を登り盡して十時四十三分、信越國境の山脊に達す、左に突立せるは後に扇澤嶽と命名せる峰にして、右は山嶺蜿々として、祖父ヶ嶽に連なる前方は黒部川の支流、棒小屋澤なり、一行の今到着せる地點は、信州獵夫等の棒小屋乗越是なり、海拔八千尺内外とす。

山上一帯に偃松多く、越中側に針葉樹林あり高山植物は脚下に開發せり、浮雲山頂に綿纏して展

望充分ならざれども、不良の天候ならざると、風物已に高山的の豪景なるとを以て一行の意気大に揚がる。山脊を辿りて一二町東北に進めば凹地に雪消の水をたゞへて小池を造れる處あり、此附近稍々平なる箇所あり、一行本日祖父ヶ嶽を越え、明日鹿島槍ヶ嶽を窮れば、再び此處に戻る豫定なる故、不用の荷物を一切此處に止め置き。前年辻本が兵三郎と共に宿りし小屋は此附近にありしが、今は全く倒壊せり。

中村は此處にて一種の蝶を捕獲せり、歸來研究の結果 *Euchloe cardamines* L なることを確め和名をクモツマキテフ（新稱）と命せり。（本號雜錄参照）



休憩中食を認め、十二時五分出發、祖父ヶ嶽に向かふ、嶺上屢々雪を踏む、嶽に近づきて、山脊平坦草短かく、絶愛すべき地域あり、此處に長方形の小池二つあり、總括して種池タネイケと呼び、一を祖父ヂイの池一を祖母ババの池と云ふ、蓋し岳名の基ける種蒔き爺ババに由來せるものならん。（辻本曰く、前記せる側尾根を攀れば此處に出づ）。

棒小屋乗越より此邊に至る迄の間の高山植物にて記憶に存するものは、キヌガササウ、オホバキスミレ、シラネアフヒ、タカネキンパウゲ、シラネニンジン、ハクサンチドリ、ミヤマキンバイ、ミヤマクハガタ、シヨウジヨウバカマ、タカネスミレ、サクラサウ、サンカヤウ、キングルマ、チングルマ、アオノツガザクラ、ミヤマダイコンサウ、ミツバワウレン、ヨツバシホガマ等なり。

午後一時二十五分、祖父ヶ岳南峰（第二最高點）の頂に達す、農商務省の三角標あり。一行到着して間もなく強き西風は濛々たる山巔の雲霧を吹き拂ひ、眼界突如として開く、後立山の連峰は白雲充滿せる籠川の谿谷を繞りて馬蹄狀の大屏點を造り、スバリ岳の右に薬師岳、針木峠の凹處に赤牛岳現はれ、槍ヶ岳、穂高山は蓮華岳の背部より遙かに神秘の山色を漏す、西に黒部川を隔て、壯嚴なる立山の連峰あり、北に豪岩なる鹿島槍ヶ岳あり、此行初めて遭遇せる壯景のことゝて、一同

皆な雀躍感極りて恰も酔へるが如し。

二時二十分、山頂を辭し、北を指して下り、最高峰の登攀は明日に譲ることとし、其西面即ち越中側を絡み進む、一帯に偃松繁茂し、岩石磊々たり、祖父ヶ岳の北方に連なる一峻峰の頂上間近の處を過ぎ次第に下りとなる、途中切り開けの跡あり。(此峰は其絶頂更に二尖峰に小岐す、山下の住民等は之を祖父ヶ岳より除外する如くなれども、寧ろ此峰と他の二峰とを總括し、祖父ヶ岳を三主峰より成るものとする方便利ならん。辻本)。稍や下れば巉岩曝露、赤裸々たる處あり、之より山側の横過は止みて山稜に沿ふ、右(信州側)は斷崖絶壁直ちに冷澤の上流に向つて薙ぎ落ち、左(越中側)は稍や緩斜なれども偃松密生し、之に針葉樹林を交えて全然横過すべからず、過ぐる處は理論的の國境山稜なり信州側に一步を誤れば生還到底見込なし、信越の國境は同時に死活の境界なり、一行憚々焉として下る、下り切りて山稜の鞍狀部に達したるは、恰も午後四時とす。

信州側は依然嶮惡を極むれども、此處は山稜の上部にありながら稍や廣き平坦地をなし、而かも東西の二面には堤防狀の隆起ありて中窪なり、尾根の方向に小さき池三つあり、樹木は針葉樹に白樺などを交ゆ。今日の豫定は成る可く鹿島槍頂上に近づく迄前進するにありしが、此處の地勢如何にも野營に好適と思はれ、且つは兵三郎の言に依るときは此先き適當なる野營地なしとの事に遂に此處に宿泊することになれり、翌日の經驗に依れば槍への距離も左程遠からず。

地は祖父ヶ岳、鹿島槍間の最低處附近に當れど、信州側よりの登攀不可能なる故、何々乗越と云ふ名稱もなし、人夫等は此處を大冷澤の頭なりと云ひしが、此名稱は寧ろ鹿島槍の一異名とすべき物ならん、池は淺く水も清からねど、飲用水に供したり(虫など浮びありし故布にて濾し用みたり)一行之を冷^{ツメタ}の池と命名せり、池水の冷きに非ず、冷澤の上部にあるが故なり。

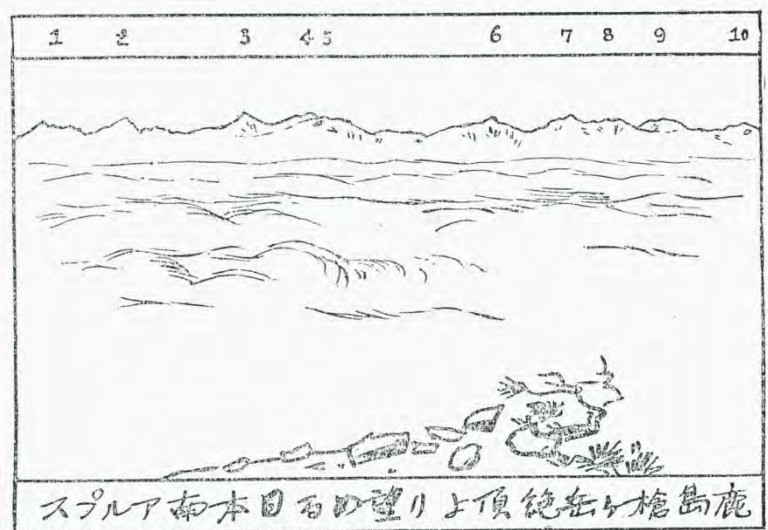
暮雲漸く収まるや、鹿島槍の尖頭は近く頭上に兀立す、東方は果しもなき大雲海にして、安曇郡の地は其名に相應しき海底に没したり、淺間、四阿の連峰其表面に頭髻を擡げ、戸隠、妙高、火打(赤倉)、燒山の群峯波濤を突て秀立す、妙高火山彙中、火打岳最も高く、其頂は乳房狀に尖れり。

立山雄山の東側なる大殘雪中に信州獵夫等の猿股と云ふもの見ゆ、雪中に突起せる岩石にて其形の類似せることより此名あり、岩石と云えば小さく聞ゆるも實は岩山と云つて然るべく、樹木繁茂せり名山の山腹に猿股の懸れることは如何にも不調和の極なれども實物を見れば、誠にそれらしく思はるゝなり。

此夜快晴にて、野營地は豫想の如く風當りもなく、樂々と一夜を明かすことを得たり。

八、鹿島槍ヶ岳

十九日快晴、午前五時五分出發、



- | | |
|-----------|--------------|
| 1 地藏岳及鳳凰山 | 6 赤石間ノ岳 |
| 2 駒ヶ岳 | 7 惡澤岳 |
| 3 白峰北岳 | 8 魚無河内岳及西河内岳 |
| 4 白峰間ノ岳 | 9 赤石岳 |
| 5 仙丈岳 | 10 星岳 |

鹿島槍ヶ岳に向ふ、人夫大西又吉は熊を獵る可く、銃を携えて先發し、仁科春吉は野營地に止まり、一行歸着迄に、天幕其他を整理し且つ中食の飯を用意することの任に當る。

野營地より山稜に沿ふて北行す、信州側は昨日の如き懸崖にして歩々注意を要す、暫時にして少しく登れば懸崖の傾斜は稍や減ずれども、屢々雪消の滑り易き山側を横ぎる、小峰を越ゆる三回(途中小屋の遺跡あり)、遂に大に登りて布引の頭ヌノビキ アタマ(海拔凡九千尺)に達す、此峰は鹿島槍より南方に分岐せる國境稜山中の一支峰にて祖父ヶ嶽より遠望する時、鹿島槍最高點の左方下部に現はるゝ、金字の隆起是なり、此峰より棒小屋澤に落下する溪流布を懸けたる如き觀あるに因りて此名ありと云ふ、地質調査所二十萬分一圖に記されたる布引嶽なるものは恐く此峰を誤りたるものならん、同圖赤鬼ヶ嶽(此邊に此の如き山なし)は略ぼ布引の頭の位置に當る。

時正に午前六時、天色晴朗、朝日は斜に一行の右側を照し、顧れば悠々たる雲海を隔てゝ、富士を中央に左に八ヶ嶽、立科、金峰、國司甲武信の連山、右に地藏、甲斐駒、白峰、仙丈、赤石、聖等南アルプスの秀峰連綿として雲表に屹立するを望む、先發の又吉は此處にて焚火し暖を取り居れり但し獲物は皆無なりき。布引の頭より少しく下りて一隆起を過ぎ、峨々たる岩石を踏み分けつゝ、次第に登りて六時五十五分無事絶頂、二等三角櫓下に到着したり。

鹿島槍ヶ嶽(『日本風景論』には鹿島鐘ヶ嶽と書せり)は今回縦斷を試みたる後立山連峰の最秀點を成し、最近の測量に豫れば海拔九千五百三十七尺(二千八百九十メートル)に達す、此山は大町邊にては鶴ヶ嶽と呼び或は略して單にツルとも云ふ、晩春山腹雪消の部分、鶴に似たる形を顯す故なりと云ふ。又た北城村にては背競べと云ふ、山頂の二峰高峻を競ふが如き形ある爲めならん、山麓なる野口、大出邊にては鹿島槍ヶ嶽の名一般に用ゐられ居れり。偕て信州より此山に登るに凡そ二つの路あり、(一)は

祖父ヶ嶽より尾根傳ひに登るもの、今回一行の採りたる進路は即ち之なり(二)は鹿島谷を溯り大冷の澤に登り山頂附近の國境山稜に出で(此處にて(一)の路に合す)それより頂上に登るものなり。此他北方、五龍嶽よりの山稜縦走は先づ行ひ難く西方黒部川方面よりの登山は困難なれども不可能に非ず、三枝



(筆氏郎太清村中) 望南の上頂岳ヶ槍島

は明治四十二年八月三日大黒鑛山を出發し、晝頃五龍嶽より黒部方面に分岐せる尾根の上部に達し、下りて、南五龍澤に野營、四日同上より雜木中の困難なる登攀をなし、鹿島槍頂上附近の山側に一泊、翌五日絶頂を極め、冷澤に下りて一泊、六日鹿島谷を下り午後大町に到着したり。

鹿島槍ヶ嶽の頂上は二峰に分る、第二の峰は最高峰の殆んど東方(北八十八度東)にあり、少し

低く其差は約そ百五十尺内外なるべし。頂上二分せる本山を槍と云ふは不自然なりとて、鹿島入嶽の轉化に非らずやと云ふ説あれども、二峰共相應に尖り、且つ品右衛門、兵三郎等は特更ら「の」の字を付けて「鹿島の槍」と呼び居ることなれば、入の誤りならぬことは確かなり、槍にも十文字槍、鎌槍、鍵槍など色々の種類ありて強ち一尖と限らず、或は複數の意味にて二本の槍と考ふるも宜しからん。

國境山稜は第二の峰を経て五龍嶽に連なる、此山稜は岩石突兀、而かも幅甚だ薄きが如く、縦走は如何にも出來難く見受けらる同じ峰より鹿島本谷と冷澤との間に突出する尾根も凄まじき急斜を以て落下す。鹿島槍と五龍との間には南五龍澤あり、祖父ヶ嶽との間には棒小屋澤あり、此二つの澤の間には山頂より西に派出せる一大山脊ありて之を分つ。

本山の西南方なる山側にカンカン平と云ふ處あり、冬季雪硬くカンジキも立たぬと云ふ、一名^{オホバミ}大食とも云ふ由。

總じて後立山連峰は其東方（信州側）懸崖絶壁にして恰かも山脈の東半面を削り取りたる如き觀あり（以北白馬山に於ても亦た然り）、鹿島槍の東南、冷澤に面する處は此例に漏れず、傾斜急峻を極め、而かも積雪甚だ多し、北アルプスの連峰、雲の帳をかゝげて、其雄姿を現すの日も、此處許りは白雲蒸々として起り、鹿島槍の東面を蔽ふこと殆んど慣例なり。

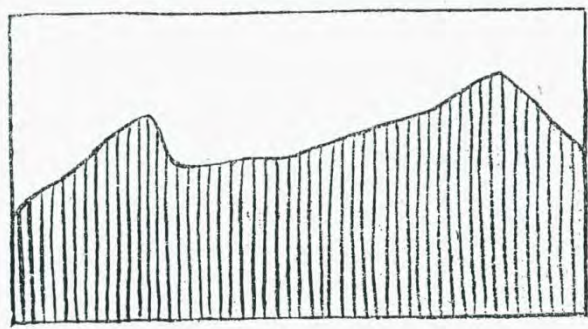
されど、今日は無上の好天氣のことゝて、冷の澤にも未だ一點の雲なく、四方展望の雄大開豁なる確かに第一流以下に下ちず、北アルプスの諸山は御嶽、乗鞍、笠ヶ嶽等を除きて殆んど見えざるものなく、殊に後立山登山中の最呼物と稱すべき、立山連峰の壯觀は遺憾なく眼前に展開せられ、其距離最も近き劍ヶ嶽の豪景に至つては實に天下無敵の感を起さしめざれば止まざるなり、常念嶽の左に信州駒ヶ嶽見え、其左に南アルプス、富士、八ヶ岳等連亘す、東方に淺間、四阿の連山あり、東北に妙高火山彙あり、雨飾と覺しき峰の北方には低けれども槍を欺く許りの尖峰嵯峨として連なる、北方には黒部川口の平原脚下に見え、日本海に浮ぶ、眞帆片帆さへ、明かに望見することを得たりき。

此方面山岳の通例として斯程の高峰にも何等の神佛の祀られたるを見出さず。高山植物は相應にあり、クロユリなども目に觸れたり、されど豊富と云ふ程ではなかるべし。

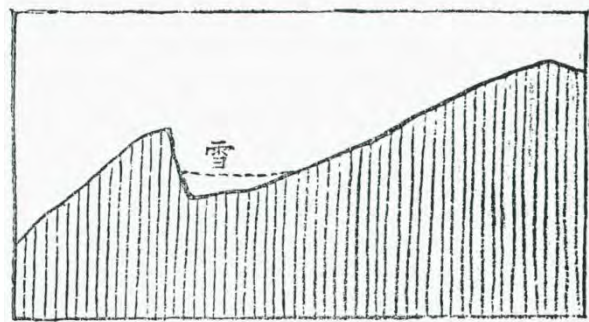
一行最初は第二峰をも極むる考なりしが已に最高峰に登りたることゝて今更彼處まで往復する特志無くなり且つ其間可也時間を要すべく見受けられし故、遂に割愛し、八時三十分下山につき元の路を戻りて九時三十五分冷の池に歸着せり。

十一時二十五分野營地出發、昨日の途を逆行す、祖父ヶ岳の第三峰に近づける頃より、雲霧の襲ふ處となり全く眺望を失ふ、午後一時十五分、祖父ヶ岳の最高峰（八千八百十一尺）を窮む、昨年七月下旬、第一回登山に際し、辻本が三角櫓に記せる姓名は朧げながら猶ほ讀むことを得たり、二時七分種池に着す、雲は山上に綿纏すれども、薄日漏れ來り、扇澤の雪谿は眼下に現はれ前日の野營地など明かに指點出來たり、谷間より鶯の聲長閑げに聞ゆ、一行此處の草原に横臥し暫し時間の移るを忘れたり。

祖父ヶ岳より棒小屋乗越に連なる山脊は幅も相應に廣く、平坦の處もありて、蓮華岳の山頂を除けば、後立山連峰中、最も平穩無事なる場處なり、自分等は之を種池平^{タネイケダイラ}と假稱せり、此山脊より



冷の池附近雪壕断面想像圖



種池附近雪壕断面想像圖

棒小屋澤に突出せる側尾根を^{モチコオネ}持子尾根と云ひ、其西方にギジダルの澤あり元と棒小屋なる名稱は此澤より木材を切り出せるに基けるものにて、持子尾根は人夫等が之を負ひ登りたる處なりと云ふ、ギジダルのギジは三十年許以前、此處に横死せる大出の獵夫義次(當字)なるのゝ名を冠せるなり。

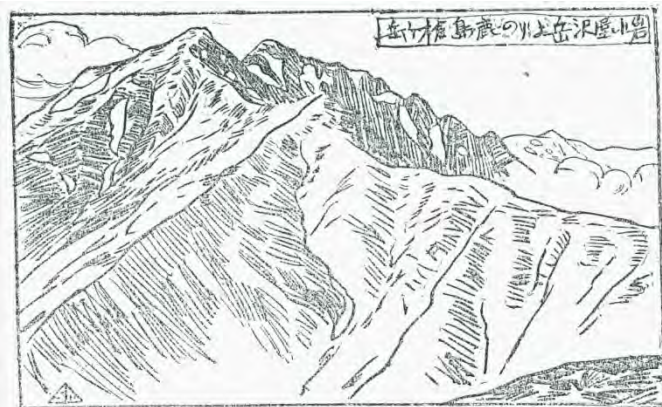
偕て此山脊に「^{ヂイババホリ}祖父、祖母の壕」と云ふ面白き地形あり、尾根に沿ふて縦に長き凹處にして、尾根の頂上より少し下の北側にあり、元來雪の爲に造られしものと覺しく、内には殘雪多し、其横断面は凡そ圖の如き形を成し、内壁の内、尾根の頂に遠き方は殆んど直立し、近き方は割合に緩斜す、雪の削磨烈しくなり外壁取り去られなば、所謂カールとも成るべきものらし、此地形は北アルプスの他山にも往々認めらるゝ故、一行雪壕と命名したり。(冷の池及棒小屋乗越にある堤防狀の壁、越中薬師岳の一の堀など多分雪壕の一種ならん)。

二時三十五分、棒小屋乗越なる荷置場に着す、本日之より前進するも適當なる野營地なしと云ふに因り、此處に一泊することに決定す、種池附近と違ひ山脊狭く凹凸ありて一行八人を容るべき余地を見出すに苦みしが、辛くも樹木など切り開きて天幕を張ることを得たり、飲水としては山脊の凹處にたゞへたる雪解の水を用ゐたり、此夜又た快晴にて左程寒からず野營の夢は圓かに結ぶを得たりき。

九、^{シンコシノツコシ}岩小屋澤岳及新越乗越

二十日快晴、昨日は雲の爲め氣附かざりしが、天幕内より居ながらにして、正面に富士を眺め、其右に南アルプスの連峰、左に八ヶ岳、金峰山等を望む、山脊の凸部に登れば日本海、能登半島鮮やかに下看せらる、此地の眺望斯程開豁なるべしとは思ひ設けざりし處なりき。

午前七時二十分出發す。棒小屋乗越の西方(微南)、國境山稜上に聳える小峰あり、頂上三分す、兵三郎は奥小澤(扇澤)の頭なりと云へり岩小屋岳峰に一支峰とも見做し得べき小突起にて、一山



とするも鳥澁がましき程なれども、其間兎に角、低處ありて之を分離せる故、自分等は之を扇澤岳と名けたり。行路は此峰の北面(越中側)を絡み進む、切り開けあれども、不充分にして雜樹と偃松とに妨げられ、進行稍困難なり、扇澤岳より西北に分岐せる尾根の上部に達するや、立山連峰は何の障害物もなく、

突如として眼前に開展し、光線の工合か、距離の近き爲めか、後立山縦斷の旅行中、此時程此連峰の壯美を感じたることなし、立山の左方遙かには、白雪班々たる雄嶺あり、地圖を按じて加賀の白山なることを知れり、進路はこの處を過ぎて愈々雑木の煩累甚だしくなりしかば、山側の横過を廢し、急斜面を強行して八時五十分扇澤岳の頂に出でたり、之より國境の山稜に沿ふて進むに左方信州側は岩石崩壊せる絶壁的急斜をなし、殘雪處々にあり、一行辛くも其上部を辿り行くに信州側の餘地少なき所は、越中側の偃松を命の綱と頼みて蟹行す、越中方面には切り開けの遺跡残れる箇處ありしも、山脊に近き處は大抵跡を止めず、是れ山脊の上部年々信州方面に向つて陷落消失する爲めと覺し、山脊の彎曲甚だしく案外時間を費し、十時三分漸くにして岩小屋澤岳の最高點に達したり。

此處海拔八千六百七十九尺、陸地測量部の三等三角標あり、標高稍や祖父ヶ岳に譲るも後立山連峰中、亦た壯大なる一峰とす、北に祖父ヶ岳以北、鹿島槍、五龍、八方、鑓、白馬、朝日の連峰并列し、東に籠川の谷、大町の平原を下看し（東微南に日光男體山かと思はるゝ圓錐形の峰を遠望す）南に蓮華岳、針木岳、スバリ岳、赤澤岳、鳴澤岳等を望む、西方立山連峰の眺望は重ねて言ふまでもなし。

立山別山の東方。黒部川の西岸に信州獵夫等の所謂別山（黒部別山と假稱す）なるものあり、其名の示す如く黒部谿谷内に兀立する岩壁の一別峰なり、此黒部別山と立山別山との間に内藏之助平スケダイラと云ふ平地あり、斯る山谷にありながら案外廣き平地なりとは、豫て兵三郎の語る處なりしが、岩小屋澤岳の頂上より明かに看下することを得たり、平には樹林（笹なども多しと）あり、草地あり、谿流あり、此方面より劍ヶ岳登山を試む人あらば、屈強なる根據地なるべし。

岩小屋澤岳の點標（三角櫓）には落雷の跡と思はるゝ破れ目二三ヶ處あり、雷鳴の時、山頂に止まるは餘程危険なるものと斷じて可ならん。

山上にあること一時間許りにして下山に着き、少しく下りて南方なる一尖峰の頂にて中食を爲し、ひた下りに下りて十二時三十分、新越乗越に着す。

乗越は岩小屋澤岳と鳴澤岳との間にあり、信州側は傾斜急にして殘雪、涎掛の如く山側に懸れど、越中側には平坦地あり、其以下は樹木繁れり、標高、棒小屋乗越より少しく高しと思はる、白馬の諸山、大町の平原、針木峠、立山の連峰等皆な望見する事を得。内藏之助平は此處より北五十二度西に當れり、山脊の上部に一小池あり、新越シンゴンの池と云ふ。

標木あり「角田技手八月十二日出立、針木の越に向て進む」と記せり、測量員の殘せしものならん。

本日の到着時間甚だ早かりしが、連日登攀の勞を醫すべく早泊りにすることに相談纏れり、寫眞を撮すに奔走するもの、スケッチに熱中するもの、或は手足延して天幕内に午睡を貧るものなど、新越乗越に於ける一同の行事は頗る呑氣なるものとなれり、長き登山旅行に斯る早泊りの休養は大に必要のことなりと信ず。

されど呑氣なる野營地の光景も、夕暮より西風大に起るに及んでは、焚火の烟、天幕内に吹き籠り目を開くことすら出来ぬ、みじめなる有様となれり、新越と烟との間に切ても切れぬ關係あるかの如く今猶ほ思はるゝは不思議なり、更け行くまゝに寒氣も又た堪へ難かりき。

十、鳴澤岳及赤澤岳

二十一日、夜半降雨あり、焚火は全く消え、寒氣身に沁む、早味起床、西風強し、國境山脈以西は黒き雲に充され、風物頗る慘憺たれども、信州側は一天拭ふが如く、旭日麗に山下の村落を照し、穩なる夏の朝景色なり、七時頃より立山の峰頭、雲間に現はれ、越中側の雲漸く薄らぐに安堵して結束、八時行程に上る。人夫の春吉は一行の出發に先だち、米其他雜品買入の使命を帶び、信州側を下りて大町に向へり。

新越乗越より鳴澤岳頂上に至る間は偃松との惡戰苦闘なり、信州側は例に依つて峭崖急斜し、越中側は偃松、峰より谷に亘り、寸歩の余地をへず、一行の辿る處は一縷の國境山稜なり、前年參謀本部測量部員等の造りし切り開けも僅に痕跡を止む事のみにて殆んど用をなさず、後立山連峰中、登路困難を極めたるは實に此間を以て第一となせり。支峰を越ゆること數回にして九時五十分漸く鳴澤岳の絶頂に到着す、山林局の三角標あり、頂上割合に狭く、東面は大急斜を以て鳴澤に望む、正確の標高不明なれども、氣壓計は約八千六百八十尺（二千六百三十メートル）を示したり、眺望の開豁なる岩小屋澤岳に譲らず、殊に針木峠の雪谿は其全長を開展し、壯觀名狀すべからず。

頂上にて展望に耽る内、偶々針木峠の雪上に二人の登山客を發見す、二人共に、相當の荷物を負ひたる事より、兵三郎は指折り數へて、多分父兄の黒部に越ゆるものならんと判定せしが、二十三日一行針木峠に到着せる時、頂上標木に記るされたる時日と「遠山二人」の署名に依り、正しく品右衛門、作十郎兩人なりしことを確め得たり。

十時二十五分、鳴澤岳を下り山稜に沿ふて赤澤岳に向ふ、巉岩稜々、嶮峻を極むれども此方面は偃松少なき故、進行は困難ならず、危然たる赤澤岳の雄姿、眼前に迫り、岩石其名の如く赭赤色を呈し、突兀たる山容は八ヶ岳の秀點赤岳に類似す、山頂より黒部方面に分岐せる山稜は岩石嵯峨として鑿もて削れる如く物凄き計りの光景なり。

鳴澤、赤澤二岳間の鞍部（名稱なし）を過ぎて、赤澤岳の傾斜にかゝり、十一時三十分其絶頂を窮む、途中ムシトリスミレあり、山頂附近にはツマトリサウ多し、頂上には陸地測量部の三等三角標あり、海拔八千八百三十七尺とす、頂下北方に野營の跡あるは蓋し測量部員の遺物ならん。

赤澤岳の東面（籠川方面）に赤澤あり、是れ岳名の基く處にて或は赤澤の頭とも云ふ、黒部方面にも又た赤澤あり、西南、スバリ岳との間には大スバリ澤あり。

赤澤岳一名牛小舎岳の稱あるものゝ如し、明治九年針木峠の道路開鑿されたる時には牛馬も峠を通過したる由なれば其當時此岳下に牛小舎などの建築されたるものありしならんか、されど兵三郎等は絶て此の如き山名を呼ぶことなかりし。峠の道路は其後雪崩れの爲め全く荒廢に歸したれど、今日赤澤岳より下看するに雪谿の右方上部の山側に其痕跡を認むることを得たり。

北方には白馬岳以南、信越國界の連山一眸の裏に開展す、鹿島槍ヶ岳は岩小屋澤岳の左に峙ち、祖父ヶ岳は其の右方に當つて遙かに東方に突出す、近き鳴澤岳の頂は鹿島槍、岩小屋澤兩岳の中間にあり、西に立山の連峰あり、東に籠川を隔てゝ蓮華の大岳あり、南方スバリ岳、針木岳は漸く近く、猶ほ黒部の上流に當りては、藥師、赤牛、黒岳、五郎の諸峰雲間に隱顯し、奇怪なる形狀を呈せる烏帽子岳（兵三郎の所謂濁^{ニゴリ}のヨボシ岳）は低く峽間に現はる。

西風強く撮影には少なからぬ困難を與へたり、一同頂上の東面に下り偃松の焚火に暖を取り、晝

薬師岳

越中澤岳

越中澤乗越

奥大鷲岳

五色ヶ原

大鷲岳

小スバリ岳より越中アルプスを望む



中村清太郎氏筆

越中澤

温谷

御山澤

餐を認む、本日豫定の峰は之にて終りたれば、長時の休憩をなし、一時五分出發、山稜に沿ふてスバリ乗越に下る、途中岩石の色俄然變化し、是迄の赭赤色は暗灰色となる處あり、スバリ岳、針木岳、蓮華岳等皆な此岩石より成るものゝ如く遠望鼠色を呈せること其特色なり、可憐のコマクサは處々に花を着く。三時スバリ乗越に着す。

スバリ乗越は赤澤岳、スバリ岳間の最低部より少しく南方に登りたる處にて、此處信州側にスバリ澤あり、乗越の名はあれども、獵夫の捷路たる以外、普通人の通過すべき處に非ず。野營地は山稜を少し許り西に下りたる山側にて、獵夫等が岩石を排列して造りたる掌大の平坦地なり、偃松の外には之と云ふ樹木なく、稍や槍ヶ岳の坊主小舎附近に似たる地勢なり、天幕の柱は、三枝、中村兩人のアルペンストックを結び合せて之を建つ。

中村は山稜の上部にて、荷物を開き居りし内、如何にしけん、虎の子然と秘藏せる蝶の標本（前日棒小屋乗越にて獲たるもの）を包紙のまゝ、立山嵐に吹き飛ばされ失望落膽、余處の見る目も氣の毒なりしが、人夫の一人之をスバリ澤（信州側）の雪罅中に發見し、一同愁眉を開くことを得たりき。

此邊の岩石にはイハブスマ多く附着し、晚餐の汁は之に依りて好味を加へたり、其味ワカメに類して一層淡白なるものなり、而かも其海底産物ならずして高山特産たることは一同の最も珍重したる所以なりとす。

籠川源流の谿谷を隔てゝ蓮華岳は高く天半に聳え、東南の方、針木峠は已に甚だ近く、呼べば答へんとする許りの巨離にあり、標高は我に比して稍々劣るものゝ如し。野營地の四邊にはコマクサ、イハウメ、タカネスミレ、ムシトリスミレ等岩間に點綴せり。

十一、大スバリ岳及小スバリ岳

二十二日、今霄も又た降雨あり、夜明けても霧深かりしが幸にして追々霽摸様となり八時頃より全く晴天となれり、九時出發、待ちに待ちたる針木岳登山の當日とて一同の胸は異様に躍る。

スバリ乗越より山稜の右側に沿ふて、ひた登りに登る、前方上頭を壓する尖峰は本日最初の目標たる大スバリ岳なり、右の方大スバリ澤は藥研の如き狹谷を造りて黒部川に傾斜し、左は即ち信州側の慣例として屏風の急斜面を以て籠川源流に望む、目覺しき迄、壯快なる山脊は嶮峻と云ふ形容詞の敬意を拂ふに値すること充分なれども、偃松の障害なき故歩行は却て容易なり、山頂に近づきて山側を右方に絡み、更に左折して、大スバリ岳の頂下に出で、遂に磊石累々たる急斜面を攀ち、十時五分其絶頂に達す。

頂上は岩石峨々として突立し、僅に偃松の之に纏着するを見る、氣壓計に據れば海拔約八千九百尺とす。

南方には針木岳の峻峰、巍然天空を摩し、近く其左方に小スバリ岳聳ゆ、針木、小スバリ及大スバリの三峰に擁せられたる脚下の狹谷は嶮峻大スバリ澤に劣らざる小スバリ澤なり。

大スバリ澤を下り、山脊の鞍部を経て小スバリ岳に登る、高さ大スバリ岳に伯仲し、嶮峻は稍々之に譲る、兩岳共に三角標を認めず。

大スバリ及小スバリの二峰は距離甚だ近く一山塊を形ち造る故、寧ろ總括してスバリ岳と呼ぶを便利とすべし、元來確定せる名稱なかりし山にて、今回の登山に際し、大スバリ澤に近き峰を大スバリ岳、小スバリ澤の源に當る峰を小スバリ岳と命名したり、信州の方言スバルは狹まるの意に當るものゝ如く、此附近の山谷の急峻なることを形容するものゝ如し、一行は用意の小板に山名を記し、夫々頂上の岩石に結び付け置きたり。

十二、針木嶽マヤクボ（麁窪の頭）

小スバリ岳より南方に下る山稜は頗る嶮峻なり、下りて山稜の東面に出づれば、脚下の信州側山面に殘雪の大なる傾斜地あり、人夫等は之をマヤクボ（麁窪）と云へり、山崎理學士の「高山の特色」（『地學雜誌』第百九十三號）に依れば信州の獵夫の言葉にてマヤと云ふものは所謂カールなる由なれば、此マヤクボは一個のカールなるべし、同學士が「信濃から越中へ越す有名なる難路針ノ木峠の西北にもある」と記されたるは恐らく此マヤクボのことならん（同雜誌一五頁）

一行少しく山側を下り遂にマヤクボの上部を横斷す雪硬からず、足場悪からざれども、傾斜急なる故注意して過ぐ、中村は雪片を喰みてマヤの雪の味は亦た格別のものなりと獨り大に喜ぶ。

スバリ岳、針木岳間の鞍部を過ぎ、少しく登りて、十一時十分、針木岳直下に當る稍々平坦なる場所に着せり、休憩中食を認む、此處より一行二分し、自分等三人は兵三郎を件ひて針木岳を極め、他の人夫三人はマヤクボを横ぎり針木峠に直行することに定む。

十二時三分同上出發、愈々針木岳の登りにかゝる、大體國境の山稜に沿ひ、少しく其右方を登るなり、此附近に特有なる鼠色の岩石（石英粗面岩）は大小不規則に累々として堆積し、次第に増加する傾斜は嶮峻壯快を極め、信飛界槍ヶ岳の登攀を憶ひ起さしむ、三枝の提出せる針木槍ヶ岳の名稱必ずしも不當ならざるを覺へしめたり、十二時二十五分絶頂に達す。

山頂丸くして餘地少なし、國境山稜の方向を除き、其他は薙ぎ落たる急斜面なり西に小スバリ澤、

元ザクボあり、南に空谷あり、孰れも急峻なる狭谷とす。絶頂は海拔實に九千三百〇九尺、後立山連峰中、鹿島槍ヶ岳に亞ぐ秀峰なり、三等三角の測量標は破損しながらも嚴然として此處に峙てり、此櫓の柱にも落雷の遺物と覺しき破れ目ありしは無氣味を感ぜしめたり。

スバリ岳の双尖は北方に突立し、殊に小スバリ岳北方の山稜は岩石峨々として急斜し、良くも彼處を下りしものよと思はしめたり、立山の雄山は距離甚だ近く、雄山澤、タンボ澤、御前澤等の雪谿長く山腹に引き黒部の大流は物凄き碧色を脚下に顯す、東南には七倉岳方面の尾根を越えて高瀬川の佐平河原白布の如く見ゆ、生憎先刻より増加せる雲霧は其他の大觀を妨げたれども、自分等は前日來の登山にて此地方大體の眺望を承知し居ること故、左したる遺憾を感ぜざりき。

針木岳は割合に高山植物に豊富なる方にて濃艶なる紫瓣を天風に搖がせるミヤマオダマキを始めとし、コマクサ、タカネスミレ、シコタンサウ、チシマアマナ、ミヤマダイコンサウ、ミヤマタネツケバナ、イハベンケイ、ハクサンイチゲ、コケモモ、コメバツガザクラ、イハワウギ、タカネウスユキサウ、イハウメ、ミヤマシホガマ、ミヤマキンバイ、イハツメクサ等は頂上附近に各々其美色を競へり。

本山は從來定まれる名稱無く、兵三郎等も確かなる山名を知らず、強て尋ぬれば、マヤクボの頭なりなど、答ふれども、それすら左程普通ならぬものゝ如し、此山の東方には名高き針木峠あり、峠を夾んで蓮華岳對峙す、夫等の關係より蓮華、針木の二峰を包括して針木岳と呼ぶものあれども、蓮華岳は紛れなき名稱なる故、自分等は本山のみに針木岳なる名を與へたり（『山岳』第四年第三號五七頁參照）。針木岳は大町附近の街道にては蓮華岳の蔽ふ處となり、針木峠の山道に於てすら、前山に妨げられて殆んど其全容を認め難く、越中越の旅客は佐良峠を登りて始めて之を仰ぎ得べきのみ若し夫れ夏期登拜の盛大を極むる越中立山は黒部の狭谷を隔て、針木岳に最も接近すれども、越中人士は所謂後立山なる敬遠的名稱の下に此方面の山岳を總括し且つは雄山々頂の展望餘りに開豁にして無数の山岳を一眸の裏に収むること故、普通登山客は針木岳に向つて注意を與ふべき餘裕あるべしとも思はれず、從來立山を攀ち、針木峠を越へたる愛山家の數少なしとせざるに係らず、針木岳が殆んど無名の一峰として閑却され來りしもの深く怪むに足らざるなり。

午後一時三十分、頂上を辭す（三角櫓の柱にハシノキ岳と記せる木板を釘付にし置きたり）東南方面なる國境山稜に沿ひ少しく下りて其肩部に達す其左側面には殘雪多し、猶ほ下れば巉岩突起して通過し難き處あり、即ち其左側（北面）を絡み、一二回雪を横ぎり、マヤクボの奇形を脚下に望み、二時三十八分、針木峠の頂上に到着したり。

今宵の野營地は峠の頂上より僅に南方（越中側）に下りたる處にて、猫額大の平地に過ぎざれ共八人の寢所としては左迄狭からず、水は峠の北面に豊富なる千古の積雪を融解して用ゆ、顛倒せる國境の標木は天幕押へとして一夜借用せり、展望雄大、赤牛岳、黒岳、五郎岳、烏帽子岳、槍ヶ岳等指呼の間に迫る、快晴ならば富士山を望むべし。後立山縦斷の旅行も已に九分通りを終り、所謂「惡絶嶮絶」を以て聞えたる針木峠とは云へ、愛山家の屢々通過することある場處に出で、は何となく天下の大道にある心地して一同の心中自ら長閑なるものありき。

是より曩き、針木岳の肩部を下る時、遙に峠の雪谿を登り來る三人影を認め、其一人は多分春吉ならんと思はれしが、他の二人は何者とも分らず、孰れも少なからぬ荷物を負ひたる點より普通の漫遊者ならぬことだけ判定せられたり、數日來同行者以外の人面を見ざる一行は多くの好奇心を以て峠の鞍部に登り、雲立ち迷ふ雪谿を下看す、時刻移りて漸く雲中より顯れ來りし三人の一人は豫

期の如く果して春吉なりき、彼が米一斗の買入及其他雑多の使命を果し約束通り本日峠に登り来りし忠實なる労働は頗る賞賛に値せり、同行の二人の内、一人は四十位の男にて大町の菊とか云ふもの、一人は二十位の若者にて其同伴者なり、登山の目的は駒草採りの爲めと聞いて興醒めたり、烏水氏の所謂「植物死刑執行人」等の語る處に依ればコマクサの相場蔭干としたるものにて百匁二圓なりと云ふ、彼等は今日蓮華岳にて野營する由にて暫時休憩の後、岳上に登りて去れり。

偕て此縦走旅行も明日の蓮華岳登山を以て愈々一段落を告げ、一行二分するこゝとて、今夕は各自送別の意味もてコマクサの大振舞を成し、春吉買入の食料品も到着したれば晚餐は大に賑へり、夜に入りては月、黒部谿谷の天に澄み渡り、夜色沈々として幽寂の氣、身に沁むを覺ゆ、此夜露殊に多く、天幕はしとゞに濕へり。

十三、蓮華嶽

二十三日、早味霧深きこと昨朝の如し、午前五時四十五分出發、蓮華嶽に向ふ、針木峠より國境山稜に沿ふて直に登りとなる、傾斜稍や急峻にして偃松多し、登ること暫時にして左方に迂曲す、此邊より漸次緩斜となり、偃松稀粗、歩行容易なり、頂上は幅廣く連續する岩原の觀あり、野營好適地と思はるゝ場所少なからず、途中霧の爲め一度方向に迷ひしが、兎角して其最高點二等三角檜ある處（九千二百三十七尺）に達したるは六時四十分なり、峠より一時間弱にして到着す。

到着後、間もなく山頂の霧次第に晴れ、海拔約八千尺内外以下を封鎖せる雲海の表面に連々たる北アルプス群峰を展望す、南に常念、大天井、穂高、槍、五郎（野口）、鷲羽、黒、赤牛、西に薬師、立山の連峰、一段近く針木、スバリ、赤澤、鳴澤の連脈、北に朝日、白馬、鎧、五龍、鹿島槍、祖父の列嶂、孰れも旭日に其半面を照され山色雪光の壯美を極む、後立山掉尾の眺望は斯くして大に振ふことを得、一行の満足此上なかりき。

最高點は頂上の餘程東方にあり、大象の背に似たる蓮華の山頂は一般に急峻削るが如き後立山連峰中、獨り異彩を放てるものにて、其山躰の鼠色せる岩石（針木、スバリ嶽等と等しく石英粗面岩なり）より成るも誠に象皮に相應しき色なり（尤も最高點より東方に連なる山脊に著しく赭き部分あり）。此處より針木嶽を望めば山頂兀立、少しく北方に傾き、蓮華を象背山とすれば差當りアルプスの名稱に因みて Rhinoceroshorn（犀角山）とても云ひたげの山容なり。

山上にて目撃せし植物はタカネスマレ、イハベンケイ、タカネウスキサウ、ミヤマキンバイ、ガンカウラン、イハカヅミ、コマクサ等なり、三枝は白花のコマクサを獲て大に珍重したるが、左して珍奇なるものならぬこと後に分りて失望せり、昨日登りし駒草採等は絶頂附近にて盛んに死刑執行中なり、此附近の山中に餘命を保てる可憐の珍草も蔭干百匁二圓の仕事の爲めに哀れ絶滅せらるゝこと近き未來にあるならん、蓮華登山中、唯一の不満足は此一事なりき。

八時二十分下山に着く、雲の帳は再び大アルプスの壯觀を蔽へり、同五十三分針木峠に下る。

今回豫定せる後立山連峰の縦斷は蓮華嶽登山を以て其終りを告げたり、十六日大出々發以來、七泊八日間に亘り、鹿島槍、祖父、扇澤、岩小屋澤、鳴澤、赤澤、スバリ、針木、蓮華の九峰を縦走せり。扇澤谿谷の一日を除き天候極めて順調なりしは無上の幸運とす。一行は比較的時日に關せず、悠々たる進行をなしたる故、距離に比して多日を費したる觀あるも、若し荷物少なく前進容易なる登山隊なりせば一二日（滞在を除く）を短縮すること敢て困難ならざるべし。

十時過、荷物の整理終り、一行茲に二分し、互に成功を祝して南北に袂を分つ、三枝、中村は兵

三郎、又吉、春吉の三人を伴ひ、アルプス縦走を續行すべく、針木澤より黒部川のダイラに下り、辻本は白馬登山の目的を以て榮吉、龜次と共に信州側を下り、夕刻、大出なる遠山方に達し、此處にて暫時手間取りたる後、夜に入りて大町對山館に到着せり。

十四、餘 録

○後立山地方にて用ゐらるゝ二三の山詞

初心の人々の爲めに此地方にて用ゐらるゝ山詞の説明を記す、山嶽通の方々は勿論先刻御承知のことゝ存ずるなり、他日本會に於て「山嶽語彙」編纂の舉あらんこと自分等の切望する處なり。

ア タ マ (頭) 谿谷又は谿流の源に當る峰又は隆起を指し、其谿谷又は谿流の名を冠して之を呼ぶ、大抵某山、某嶽と云ふべき程度ならぬもの(例、布引の頭)又は名稱確定されたることなき山にて山下の住民が便宜上之を呼ぶ時に用ゐらる、時として凸起ならざる尾根の上部にも適用せらるゝことあるものゝ如し。

ア ラ シ 澤の小なるものにて傾斜烈しく、平時多くは水なきものを云ふ(高瀬入、籠川谷等に例多し)。

カ ベ (壁) 岩石壁の如く直立せるを云ふ、黒部の河岸に多し。

カ マ (釜) 溪流集りて淵状をなしたる處を云ふ、北葛乗越の信州側にはカマ多く夏季は通過す可らずと云ふ。

タイラ (平) 字義の如く平坦(少くも急斜ならざる)なる處を云ふ、場處、廣狹には別段制限なし。

タル (垂) 普通の詞のタキ(瀑)なれども、必ずしも九十度近くの傾斜に限らず、急斜の溪流にも用ゆ。

ド ウ 二流の合一點を云ふ、其内支流の名を冠して之を呼ぶ、扇澤のドウと云へば扇澤が本流なる籠川に合流する處を云ふなり、ドウは同、又は溪流の激することに基きたる韃ならん。

ナ ゼ 雪崩れを云ふ、越中にてはノマと云ふ由なり。

ノケ(クツレ) 岩石の崩壊せる個處を云ふ。

ノツコシ(乗越) 山嶺を一方より他方に乗り越す處を云ふ、峠と殆んど同意義なれども、路の有無を論ぜず、越せば越さると云ふ程の處にて、獵夫等の捷路なり、峠に較べては余程粗野なる意含まる、通常一方の澤、又は附近の高峯等の名を冠して呼ぶ(棒小屋乗越、新越乗越等、信飛槍ヶ岳の肩に槍ヶ岳乗越あり)或は一方の廣き地名を附することあり(高瀬入りの奥に飛驒乗越上高地乗越あり)。

ヒラ (平) 山の側面を云ふ(鹿島槍のカンカン平)。

マ ク リ 降雨の爲め谿流氾濫し俄然土砂岩石を押し流すことを云ふ、降雨中谿谷の野營には最も之を恐る。

ラウカ(廊下) 二つの岩壁(カベ)平行して連りたるを云ふ、黒部川に此の如き場處ありて著名なり

○中村は大町の人より蓮華岳を白蓮華とも呼ぶことあるを聞けり。

○『山岳』第四年第三號所載「祖父ヶ岳の二日」中には誤謬の箇處二三あり本文中にも訂正し置きたるが三枝氏の登山を記せる文中、大黒岳より尾根傳ひに鹿島槍を窮められたる如く書きしは聞き損じにて同氏は越中方面を迂回されたる已に記せる如し(辻本)。

○標高は陸地測量部三角測量の結果(メートル)を尺に換算せるものなり。

○本記文は辻本執筆し、三枝、中村之を校訂増補せるものなり。(了)

4. 中村清太郎 「越中アルプス縦断記 上」『山岳』第六年 第一號
明治四十四年五月五日刊 日本山岳會事務所發行

要 約

明治43年(1910)7月23日~26日の記録。針ノ木峠から越中澤岳縦走。

3. の「後立山縦断記」の後の部分を記したもの。

メンバーは、三枝威之介、中村清太郎。

行程は、7月23日 針ノ木峠—紫丁場—川田の御助小屋—黒部の平の小屋。

24日 滞在。

25日 小屋—温谷峠—佐良峠—五色ヶ原—大鷲岳—奥大鷲山への鞍部野営。

26日 野営—奥大鷲山—越中澤岳—薬師岳に向う鞍部にて野営。

※地名・山岳名等、定まったものではなく、その地域での呼び名によるものが多い。
今とは違う呼び方と思われるものもある。

三枝威之介

中村清太郎

前 記

此の一篇は昨四十三年夏試みた日本北アルプス縦横断の後の部分を記したものである。此の山行は信州北安曇の大出から始まったので、一行は辻本満丸、三枝威之介、中村清太郎の三人に人夫遠山兵三郎以下五人を加へて計八名。籠川の谷から扇澤を登つて祖父ヶ岳、鹿島槍ヶ岳、岩小屋澤岳、鳴澤岳、赤澤岳、大小スバリ岳、針木岳、蓮華岳等の所謂後立山の連峯を縦断して、針木峠の頂上に至つて一段落を告げ、辻本氏は北の方白馬へ向ふ爲め人夫二人を随へて峠を大町に下り、我々は残り三人の人夫即ち遠山兵三郎、仁科春吉、大西又吉と共に峠を黒部川に下り、佐良峠を上つて五色ヶ原の高原を通り、大鷲岳、奥大鷲山(新稱)、越中澤岳(新稱)から薬師岳の長い連嶺を縦断し、猶山稜について越中飛驒の國境をなす峯つゞき、上ノ岳、赤城岳、黒部五郎岳等を越えて蓮華岳に達し、今度は飛驒信州の國境の連嶺に移つて、双六岳から槍の鎌尾根にかゝり、上高地乗越(槍の南肩)を越えて信州上高地に下り、茲にこの山行を終つたのである。

この始めの部分即ち初頭から針木峠頂上迄の部分は、本誌巻頭の辻本氏の手についた紀行がその委曲を盡してある、而して後の部分が即ち本篇なので、辻本氏のと接續して前記の山行が残らず記され終ることとなるのである。

そして茲に越中アルプスの名を用ひたのは窮餘の假稱で、別に嚴正な意味で用ひたのでは無いのである、この山行の主要部が大部分越中に屬し(五色原續きの山脈から薬師岳の連嶺)、或は越中に縁の深い(上ノ岳黒部五郎岳)爲めに、總括して漠然この新名を用ひたのである、若し越中アルプスの名許さる可くば鳥水氏の所謂立山火山帯(前號同氏「日本北アルプス風景論」参照)に當るであらう、この山行に立山が入つてゐない爲やその他で標題にこの好新稱を得用ひなかつたのは残念である。

附記す、この紀行は前半が辻本氏一人の手についた如く全部予一人で書かなければならなかつた、

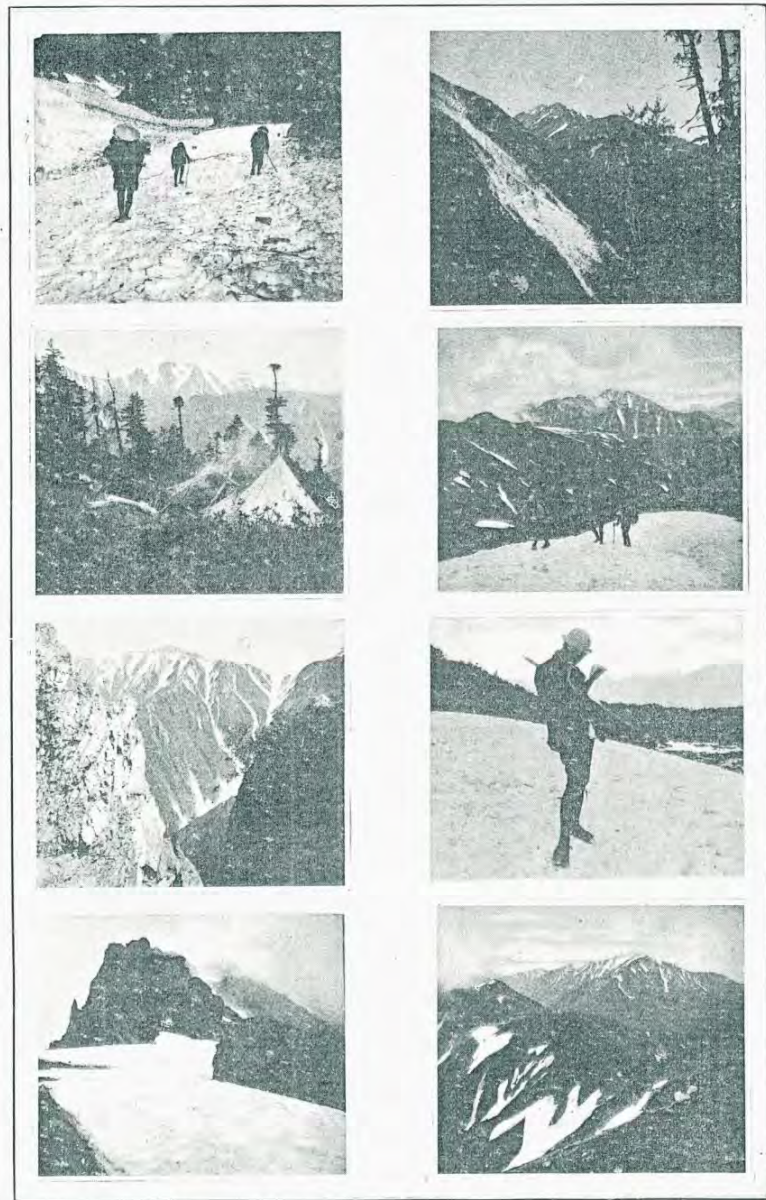
但最後に三枝氏の一應の校訂を経た、よつて茲に筆者を表はして責任の歸所を明かにする(中村)。

一、黒部川の谷

七月二十三日ー針木峠の頂上の幕營(黒部に向つた方の斜面に張つた)を出て、朝の中、程近い蓮華岳の登攀を濟ませた、天氣は少し荒れ模様で雲が非常に騒いだ(辻本氏紀行に委し)。

辻本氏が人夫二人を伴なつて「カンヂキ」と鳶口で峠の雪溪を北に下るのを見送つて、峠の上の幕營を撤し、一行五人となつて峠を黒部川に向つて下り始めたのが十時二十五分であつた。急に寂しさを感じた。此處から佐良峠迄は先行諸氏の紀行に精しいが連絡の爲ざつと書いて置く事を許されたい。正面に堀澤不動の頭(兵三郎に依る、これは蓮華岳から山脈が南方にS字形を畫いて烏帽子岳に連なる其中の峯で連峯中最低さうに思はれる、乗鞍岳一名北葛の頭の直ぐ南につづくものであるがこの邊の山名は甚だ明瞭を缺くのでこれも確なものとは斷言が出来ない)を雲の晴れ間に眺

め乍ら草と灌木の谷を下つて紫丁場に着いたのが十一時十分。針木岳の方から來る澤について三十分許り下ると小屋の跡を左に見て北葛の頭の方から來る谷へ出た。水上は昏かつた。水は中々多い、眞向ふには不動の頭の方から來る澤が黒く茂つた山の間に雲の奥深く陰つて見える、澤の右岸を少し下つて川田の御助小屋に着いた。黒部の方から來る人々の爲めに道標を立て、置いた、晝食、十二時半此處を出た、川を左にして川原の草の露を振つて下つて行く、やがて左手からフナクボ船窪(當字クボは澤と略同義であらう)が合する、河原には落葉松や楊が水分をたつぷり含んでまばらに立つてゐる。十二時五十分空谷が右から來る、少し下



「記斷縦スプルア中越」 「記斷縦峰連山立後」

8 三枝威之介氏撮影

ると空谷の左股の上北に當つて搔き取つた様な岩壁のつつ先きに三角標がうす黒く煙つて見える、針木岳の頂上のに違ひない、この邊凡て針木岳の方の斜面が極めて急で樹木も少ない、之に反して左岸の山は樹が隙間もなく埋めてゐる、河原にはヤシヤが多い、山人はサワフサゲといふさうだ、谷はこの邊から大分西に向て、雲が段々低くなつたと思ふと煙る様に雨が來た。

一時半、路（右岸）の左に大きな岩小屋のある所へ出た、やがて牛小屋澤が右から來る、河原は廣くなつて榛の大木が細かい葉を繁らして白くされた針葉樹の立枯と一緒に石原の中にまばらに立つてゐる間を澤の水が幾派にも分れて流れて行く、折から黒部川の谷の雲があがつて龍王岳の南東に續く鋼色の岩の峯が雪に埋れて榛の梢から仰がれた。

二時、小南澤の落口を左に見て行くとやがて大南澤の合流するのに會ふ、何れも烏帽子岳附近から出る澤で之を溯れば烏帽子岳に登れるさうだ、一ノ瀬、二ノ瀬、三ノ瀬（何れも川の曲折する部分をいふらしい）を通つて黒部川の本谷に出たのが三時二十分、折から日が當つて川下の狭い紺青の空に寒水石の様な雲が固まつてゐた、籠渡で黒部川を渡る、青に紫や赤を縋ひ交ぜた掬のかゝつた様な水が金玉糖の裂け口に似た面を作つて流れてゐた、そして川の左岸に寄つた部分だけは澁の様に濁つてゐた川上を見ると程近い越中澤（佐良峠つゞき五色ヶ原の南端から發する澤）から吐き出される水がその色であつた、果して後に品右衛門に聞くと彼は越中澤で釣つて居たのだが雷が鳴つて大さう荒れたさうだ。

籠渡を渡つて崖の上を少し川下に下ると平タヒラの小舎へ着いた、小舎は二軒、母屋には串に刺された岩魚が一ぱいに爐に掛つてゐた、品右衛門と長子の作十郎が來てゐる事がわかつた、夕方二人とも重い魚籠を下げて歸つて來た、曩日鳴澤岳から見た針木峠の雪の上の人影は果して彼等二人であつた。品右衛門は黒部の主である、この峠の道が開かれない前だといふからもう四十年から毎年夏になるとこの谷に入つて釣り暮らしてゐる、だから黒部川沿岸の山は掌を指す様に知つてゐる、彼が不用意に地面などへ描き去る山の圖が往々にして其正確を極むるのに驚かれるのも尤もであらう、彼は實に上高地の嘉門治と南北に對して双壁の山雄である、唯共に稍頽齡に入つて激しで山歩きを欲しないのは惜む可きである、さはれ我々は品右衛門の二子を得て満足を感じ又多くの未來を彼等に期待するものである、今この二軒の小屋は彼等父子の所有に屬する、籠渡も彼等の設けた處であるさうだ。

兵三郎が久し振りで腕の冴えを見せた岩魚に舌鼓を打つて、連日の天幕に引かへ小屋の板敷に快い眠を食つた。

七月二十四日－黒部の平の小舎に滞在、食料がもう残り少なくなつたので、越中澤の木挽小屋（越中の人々の營む所）へ行つて米や味噌を買はうといふのである、今日は好く晴れた、龍王つゞきの岩山が狭い谷の空から覗いてゐる、釣に行く品右衛門と連れ立つて春吉を連れて越中澤を溯つた、柳の絮がふわふわと飛んでゐた、半道許りで澤の右岸に木挽小屋があつた、快く米二斗と味噌五百目程を分けて呉れた、米一升が二十二錢に當る、高い事は高いが場所を考へると値段があるのが勿體ない位である、實の所勇氣が大いに加はつた、色々山の話なども聞いた、皆若い人々許りであつた、書いて持つて來た葉書を持子に托した、大概毎日材木を脊負つては立山温泉の方へ出るのださうである。

夕暮近く空は神立の景色になった、大粒の雨がパラパラ來たが間もなく歇んだ、併し川は三尺許り増水した、水上は荒れたのであらう。夜は星が細い空を埋めた、品右衛門父子と七人、火を圍んで山の話に夜を更かした、外には黒部川が一年中の最高調を以て鳴つてゐる、品右衛門によると佐良から薬師迄の間に左の如き山がある、^{ヌクイ}温ノ頭、^{スゴ}敷河ノ頭、^{ロウカ}中廓下ノ頭（當字）及び岩井谷ノ頭、そして佐良の南は五色ヶ原といふ一面の雪と花の廣い原であるといふ。

二、佐良峠

七月二十五日一門出の今日も亦晴天である。品右衛門父子に見送られて五人揃つて平の小舎を立つた（七時三十五分）、すぐ小舎の後ろから峠の道になる、小笹の中の小徑には冷たい水が溜つて處々小流が横ぎつてゐた、越中澤を左に瞰下ろして見上げる様な山毛櫨の間を蟬の聲に包まれながら行く、路はよくなつた。

樹の間から越中澤の對岸に残雪を装つた峯が近く東西に連なつてゐるのが見えて來た、（この尾根が越中澤岳から出る事は後に知つた）、鼓動が激しくなつて來た、紋の様な雪の周りに赤ちやけた岩の肌が露出してゐて、それを更に淺緑と濃緑とが遠巻きにしてゐるのは何時見ても胸が躍るやうだ、間も無く澤に段々離れて西から北に振れて尾根に登つて行く、澤の中に昨日の木挽小屋が瞰下ろされた、上流にはまだ七つ程木挽小屋があるさうだ。

黒部の谷を振り返ると、木の茂つた越中澤對岸の屋根の上から肩の怒つた、眞赤な肌へ白の縦縞を入れた怪しげな峰が顯はれて來た、頂上らしい凸點の下にある二つの雪の白紋が怪物の眼を思はせた、赤牛岳である、その左りに三ノ澤の頭（野口五郎岳）、二ノ澤の頭（眞砂岳或は三ツ岳？）と後立山々脈（小島氏による）の南部が雲を脱いで顯はれて來たが烏帽子岳と思はるゝあたりから以北は未だ亂雲の裡である、九時十分無名の一小澤を越える、黒岳山脈極北の怪物は段々胸のあたりを顯はして來た、むしり取つた様な血の滴りさうな絶崖は見えて力が湧いて來るやうだ、南から見た優しい山容では到底こんな荒くれた姿は想像もつかない、彼處から出る澤にはタル（澤の瀑をなせる處をいふ）が多いさうだ、現にタル澤といふ名があるのでも知れる（圖参照）、品右衛門にこつち（即北面）からこの山へ登れぬかと聞いた時彼はむづかしい顔をした。

九時半に尾根（^{ヌクイ}温谷即ち中ノ谷と越中澤との間の）の頂上に達した、此處が温谷峠（一名刈安峠）の絶頂である。正南赤牛の左に黒部川の東澤を圍む連嶺が見える（黒岳は見えず）、烏帽子岳及其の西北に續く三角標のある峰も残りなく晴れた、北を向くと脚下の温谷（又中ノ谷）の上に立山が間近に立ちはだかつて、金字に聳えた雄山の頂上の祠や三角標が手にとる様に見える、その左には目前に龍王續きの岩山がある、この龍王の山塊と雄山の山塊とが左右に凹字形に聳えてゐるその間の鞍部は即ち御山澤で、之を越えて直ちに室堂へ行けるさうだ。

徑は又西向して温谷の上流を向いて下りになる、忽ち今迄木立と尾根に遮ぎられてゐた北東の眺望が開けて來る、後立山々脈の中堅が南から順に針木岳、スバリ岳、赤澤岳、鳴澤岳と蜒々と連なつて見える、針木岳以南、鳴澤岳以北共に亂雲の裡である、殊に鹿島槍と思はるゝあたり雲の運動が最も甚だしかつた、既に鳴澤岳も屢侵略を蒙つてゐた、此の間中東面許り見てゐたせいか西面からの此連嶺が甚だ珍らしく望まれた、雪はこの方面に殆無いが赤澤岳と針木岳の山側を形造る岩壁、

殊に後者の灰色に尖った鱗の様な大岩壁は盛んな見物である、何だかつい数日前の旅が遠い過去の様に思はれた。

行手を見ると温谷の雪溪が眞直に濃い青空から垂れてゐる。亂石の山足を谷に下りた、かくて又残雪帯に達したのである、何となく安心した焦い様な氣が鎮まつた、しかし雪を上る迄もなかつた、溪の左岸に立派な林道が通じてゐる、却てうらめしくもあつた、この林道は四十二年中に開通したものであるさうだ、顧みるとうす昏い黒部の大谷を隔て、この中ノ谷一ぱいに針木岳と乗鞍岳（或は北葛の頭、これは何れも信州方面の名である、頂上が際どく二又に尖つて見える）が立ふさがつてゐる、その間の黒い山の裾の組合はされた處が針木澤であらう、溪の向岸即右岸には深い急な谷が幾つも見えて高い巖の間から細い瀑などが掛つてゐた、その上は五色ヶ原の高原に當るのである。やがて雪溪が二股に分れる、(十時五十分)、右の方について少し登り、之を横ぎつて界の尾根を越えて左溪の左岸に行く。雑木の間から鶯が鋭どく鳴く。日が照りつけて暑さが段々加はつて來た、凄い許りに黒ずんだ紺青色のきめの細かい空が眞白な雪と濃緑の山際に重なり合はん許りに垂れかゝつてゐる。振り返ると視界が大分南へ延びた、二ノ澤三ノ澤の連脈（烏帽子は又雲の中であつたが）が塚から掘り出された埴輪土器の様な色を見せて雲に浮んでゐた、その中雪溪が盡きて偃松が顯はれて來た、草も葉の厚い丈けの短かいのが多くなつた、シラネアフヒが偃松の蔭に紫の大辨を翳してゐた、澤狀の窪地を西北指して上ると佐良峠の頂上へ出た（十二時五分）。

北は直ちに龍王岳の南東に續し見上げる様な名稱不明の岩峯で、三つ許り立派なピイクが見えてゐるがその北端は雲が絶えず包んだり開いたりしてゐる、この岩の峰は峠と接する前に黒部の方へ高い岩の尾根を派出してゐる、これが中ノ谷と御山澤とを分つてゐるもので、この尾根の爲めに峠の頂上からは後立山々脈の北の部分を見ることが出来ない、此處からこの岩峯を越えて龍王岳へ出ることが出来るさうだ、兵三郎は確かに行けると言つてゐた、西の方は急な坂になつて、湯川の谷を隔て、彌陀ヶ原の高原の上に大日續きの尾根や富山平原の一部分が望まれた。南東は少し高まつて五色ヶ原の一端になつてゐるらしい、そこには三角標が一つ望まれる。東面は依然烏帽子の連脈、見る見る濃い霧が湯川の谷から吹き上げて來た、そしてこの峠續きの山稜の高さを超えると強い南東の風に吹き捲かれて蓬々と亂れて渦を巻いてゐる。空盒晴雨計は二四七五米を示した。(之は高過ぎる)。

此處で晝食を認めた、時々鶯の聲に交つて何とも知れない聲が聞える、風に揺れるチングルマなどの花の上に羽蟲が飛びながら一つ處に止まって太く低い聲であたりの空氣を顫はしてゐる、岳雀が折々偃松の間から出たり入つたりして岩の間を躍つてゐる、氣がずうつと落ついて行く様で、ひょいと首を擧げて遠く重なり合つてゐる山々を見ると何か知らず頼りない様な感じに包まれる。

これから愈々道を捨て記録を捨て、雪の中の山稜を遙か南の方へ志すのである、偃松の木影へ横になつて鼾聲を擧げてゐる人夫共を起して出立した、しかし幾度か北の岩峯が顧みられた、この峠の「みね」で登山家の心をひくものは實にこの岩の峰であらう、その向ふにはわが立山の峰々が聳えてゐるしかし吾々が間もなく南の方五色ヶ原の原頭に立つに及んでこの心はすつかり醫された。

三、五色ヶ原の高原—大鷲岳

前に峠から南に三角標が見えるといった、吾々はこれを目あてに峠の頂上から偃松の中を衝つ切つて山稜を傳はつて上つた（一時十分）。

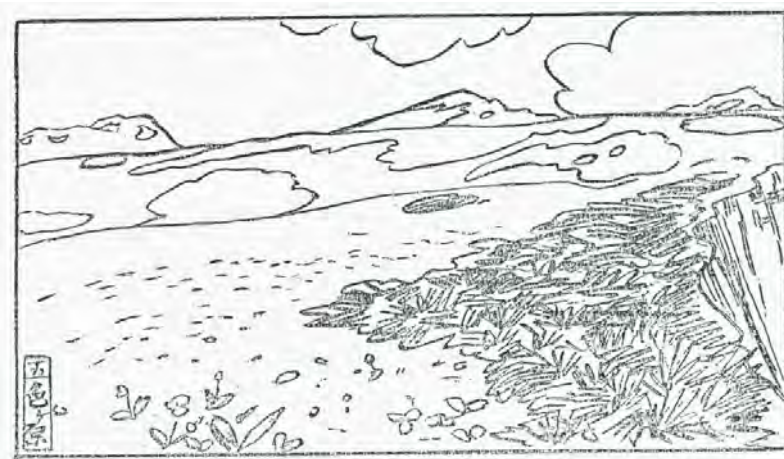
左は傾斜のゆるい偃松の斜面であるが、右は赤く白く瀧の様に崩れた急斜面である、火口の縁を歩いてゐるやうである、そしてその底には一面の白霧が冷たく沸騰してゐる。そしてこの火口の縁の様な山稜は西の方へ廻つてゐるからその赤く禿げて横に層をなした紋理に、縦の裂け目を無数に入れた火口壁の様な斜面が雲の上によく見える、この縁には「切開け」があつて文字の磨滅した小さな標木が立つてゐる。

正東に針木岳が又見えて來た、やがて漸次南方の見渡しが廣くなつて三角標（農商務、次、山）の處へ出た、テエブルランドの一端である。

唯見る前方（即ち南方）は目も遙かな一面の原で、ゆるく東の方黒部川の方へ傾斜してゐる。残雪が急な峰の側面や縦谷などゝ違つて、ほしいまゝの處々に擴がつてゐる。そうしてそれから搾れた水であらう原の小凹凸に支へられて色々な形の池を湛へて限りない青空と峰の雲とを浮べてゐる。この流れた様なゆるい残雪の置き具合は後立山々脈を歩いて居た時から立山の南に接してよく望まれたので妙に心をひかれたのである。雪でない所は一面の緑で、濃いのが偃松、浅いのが高山草である、浅緑の中には色の小紋が満ちてゐる。

ナンキンゴザクラ、ハクサンイチゲ、イハイテフ、タウヤクリンダウ、ハクサンフウロ、ハクサンチドリ、シナノキンバイ、バイケイサウ、シヤウジャウバカマ、イハツメクサ、ゴゼンタチバナ、ツマトリサウ、イハカバミ、ミヤマリンダウ、などの外名も辨へない草が各瑞々しい色を誇つてゐる。そうしてこのなだらかな高い大原が廻りの峯の三角波と微妙な調和となしてゐる。五色ヶ原の名のいはれを予は知らない、併しいかにも相應しい名だと感じた、そして神話の舞臺に最適してゐると思はれた。佐良峠を過る登山家はこの神仙境に遊ばんが爲めに僅かの勞を吝まざらんを疑はぬ。

この原を取まいて見える峰々の中、最近いのが西南に當つて原の最も高まつた所に兀立する三峰である。最右のが最近く漸次南へ遠く連なるらしい、皆多少圓錐形の類型を持つてゐる。この三峯は名稱が甚明瞭でないが北から順次に大鷲岳、奥大鷲山（新稱）、越中澤岳（同上）の名を宛てる（後出）（後に考へたのであるが本誌紀念號所載吉田氏劔岳紀行の中に入れられた石崎氏の寫眞『劔岳頂上の南望』の薬師と浄土山との間の小さい三つの峰がこれであるらしい）これ等の峯又この邊



一帶の地勢は後立山連峯中の小スバリ岳附近からよく見えた（本號辻本氏紀行参照）最南の峯即ち越中澤岳は残雪の多い尾根を東に曳いて原の南を限りかなりの一山脊を起して（後に考へると之が「コビキ」黒「ピンカ」などいふ峯らしい）黒部に臨んでゐる、これが佐良峠の登り口から越中

澤を隔て、望んだ尾根であつた。その東黒部の奥は西に傾いた雲の平の上に蓮華岳らしい峯と黒部五郎の尾根が見える許り後は一面に曇つた、其中から黒岳山脈が走り出て正南に赤牛岳が黒部の谷にのしかゝる様に臨んでゐるその南に赤牛岳が黒部の谷にのしかゝる様に臨んでゐるその右肩に黒岳の尖頂が仄見える東澤を隔てた連脈も朧ろに見えて東に針木岳が眺められた。不圖東澤の奥、赤牛と野口五郎との間に高い斜塔の影が浮み出た槍ヶ岳であつた。後ろは立山、まだ全容を顯はさない。大鷲岳の右は原の延びた末が俄然井戸側の様に切り落されて、その縁にまた小さく三角標が一つ雲に出入してゐる。井戸側はやはり赤肌に縦横の紋理を示してゐる、さつき吾々の通つて來た縁は即ち今我々の居る三角標の間近（西）を通つてこゝに連なつてゐるので、縁がこの邊では山脈の最高部をなしてゐる。我々地學に暗い者にはこんな谷の成因が何であるか到底判断がつかないが、五色ヶ原といひ大鷲岳などの山形といひ甚だ火山の聯想を惹き起さしめた。この深谷から吹揚げる霧は南風の弱つたのに力を得て非常な勢で高くはびこつて來た。原は雲の影で更に模様を複雑を加へた。

吾々は此處で四十分許り費して又そろそろ前んだ、偃松を除けては絶壁の縁に近く辿つた、今見た三峯を順次に南に傳はふとするのである、今日は先づ大鷲を上つて奥大鷲の下あたりに野營と決めて、大鷲へ出るのは廻りだから人夫等は原を眞直に奥大鷲の麓の方へ進ました、大鷲へ登るにも原を突切つて行くのが最近さうに思はれたが少し廻りでも縁を通つて三角標に寄つて大鷲にかゝることにした。處が原は通くで見た程歩きよくない、偃松の繁茂してゐる處は大迂回をしなければ横斷は中々難かしい。そして絶崖の縁に近い部分には縁と並行した溝が出来てゐて踏むと柔かく、所々に大きな深い穴が明いて居て水などが流れ込んでゐる、慥かにこの縁は年々かなり削り去られるのではあるまいかと思はれる。

先刻見た三角標に達した、(三時)、測量部三等三角、景第十一號、二五三三米と測られてゐる。西北數歩ならずして絶崖である。大鷲はもう西微南に程近い。この山は南北に長く東西に比較的細い、東の裾が長く曳いて原に連なつてゐるのだ、偃松の少ない東面から草と雪の急な斜面を登る、廿分足らずで頂上へ出た。頂上は南北に長い、高い所が二箇所許りある、三角標は無く、何れも偃松が縦横に蟠屈してその中に切開けがある、さつきの三角點と通じてゐるのかも知れぬが偃松の爲めに明瞭に分らない。この峯は或は品右衛門の所謂温ノ頭なるものであるかも知れぬ。之を大鷲と呼ぶのも比較的根據に乏しいのである、この名は日本山岳志にも見えてゐない、農商務の四十萬と廿萬富山圖幅には記されてあるが前者のはどうも位置が不明瞭で後者の方が比較的よくこの峯に符合する様に思はれる、それに大鷲といひながら小鷲が無いのは變であるが、辻本、南日兩氏の談によると、越中では單に鷲ヶ岳と呼んでゐる様である、しかし前日越中澤の木挽(越中の人々)は大鷲といひその位置は佐良の西で温泉(立山)の南に當り、佐良から薬師の方に行くのはその東を通るのだといつてゐた兎に角こんな風に至つて要領を得ないが農商務廿萬が比較的正しく大鷲の名も相當に知られて居るので之を用ひた次第である、而して鷲ヶ岳も大鷲も同一山でそれがこの山に當ることは略誤まりがなからうと思はれる、(本誌三年三號辻本氏越中小鷲山初頭参照)。一體この邊の山名は、あれば大概越中から命じたものであるから信州の人夫に通じてゐるものがないのは致方がない、後出の峯々の名と共に若し後來適當と思はれる名稱が分明したならば改ためるとし

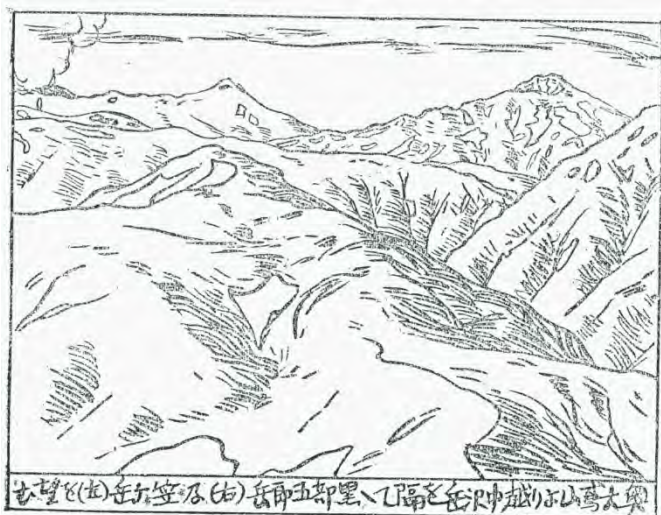
やう。(高さは…晴雨計は餘りあてにならぬのでわざとこゝ迄携へてこなかつた…後に考へた所によると凡二千五百六七十米と思はれる)。

殆眞南に奥大鳶山が東面に長く雪の裾を曳いてゐる、その左に越中澤岳がこれも残雪を浴びて立つてゐる。遠い山はすっかり曇つた、立山さへも亂雲中である。こゝから奥大鳶へは山稜が一時大分低くなる、やはり五色ヶ原の一部である、その邊で今夜は野營することにして三時半山を南方に向つて下りた、切明けがある、「査十一號」など書いた小さな杭が朽ちてゐる。サイレンで下の原を蟻の様に匍つてゐる人夫と呼應する。十分足らずで奥大鳶との鞍部へ下りた、人夫も間近に来てゐる。尾根を少し東に下つた原のかなり高い部分で平らな處を選んで天幕を張つた、南と北に雪田がある、その雪消の水で煮炊に不自由しない、西から南は尾根を負つてゐるが東北面は五色ヶ原が末ひろがりになだれて行く上に、針木岳の連脈と立山の山塊が叢雲の底に横はつてゐる。灰色の夕空を鳶が高く輪を描いて舞つてゐる。人夫の話では鳶や鷲は岩巢(岩多き所の義)の棲むものでこの邊には岩巢があるせいか鳶や鷲が多いさうである、實際この山續きに大鷲とか大鳶とか小鳶とかいふ名のあるのもその爲めであるのかも知れない。夕飯に越中の味噌を試みたが頗る美味であつた、信州のものとは雲泥の差がある。黒部川の大谷から吹き揚げる凍つた様な風に天幕が絶えずハタハタと鳴る。

四、奥大鳶山(新稱)―越中澤乗越

七月廿六日―黒部の谷風は徹宵幕營を敲いてみたが曉天に至つて霧小便(これは人夫等の慣用語で雨にしては軽く霧にしては粒の粗い時に用ひられる、そして往々雨を自ら或は他人に向つて慰める場合にも供用される)を落して來た、併し程なく歇んだ。バロメータは二五五〇米を示してゐる。天幕を出て見ると天氣はどうやら見込がありさうだ。原の上へ又昨日の如く立山後立山の長大な兩大山脈が幾重にも峯を疊んでゐる、そしてまだ銀鼠色の薄絹の様な雰圍氣がそれを柔かに包んでゐた。

七時五分に幕營を徹して行を起した。勿論南へ、山稜を、といふ約束がある計り、泊りも何處と定めることは出来ない。先づ手始めに昨日見た第二の峯即ち奥大鳶山へ登り始める、草と雪の緩い斜面で至つて樂だ、唯原を高く押し上げた様な山である(後立山連峯の各處から望んだ時その圓錐形



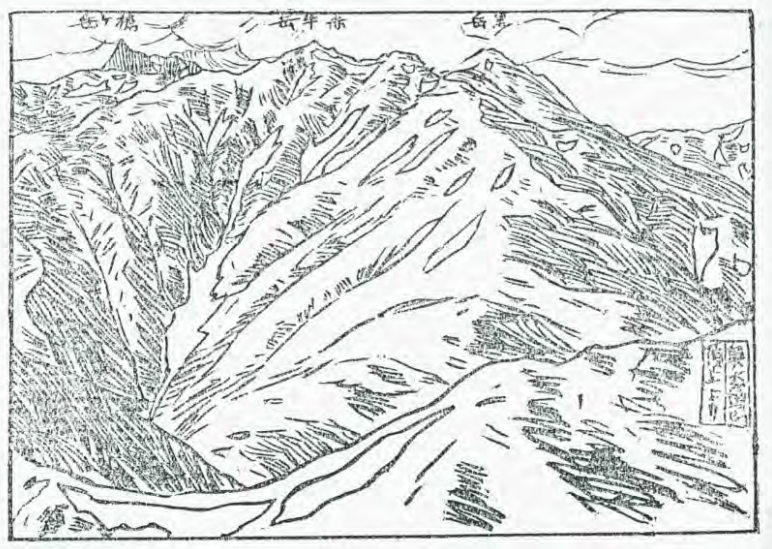
の優しい姿が四周の武骨な岩峯と一種の對照をなして見えたのはこの山であつた)。一步は一步毎に見渡す山の數が増える、劔ヶ岳が立山の左に少し宛尖頭を顯はして來た、しかも雪も少なく至つて平凡である。立山も一體に比較的平凡を免れ難い(之は獨り立山ばかりでなく、日本アルプス南北を通じて一般に南西面の眺望は特殊の場合を除いては北東面のそれに比しこの弱點を免れないと思はれる)。卅分程で頂上に達した、三角標が

立ってゐる（農商務主、山）、氣壓計は二六七五を示したが之は勿論高きに失する、頂上は平凡ではあるが岩石が露出してゐる。

山はかなりよく晴れた。北には脚下に擴がる五色ヶ原の大高原を隔て、立山群が折り重なつて聳えてゐる、雄山が中央に三尖頂を据えその左に少し低く龍王岳がごつごつした岩の大塊を押立てゝゐる、その巒は斜に朝日を受けて一本一本生きて來た。その左は浄土山の比較的なだらかな尾根が靡き落ちる上に右の方へ傾いた劔ヶ岳が鮫の齒の様な輪廓を示してゐる。猶西へ廻ると間近に大鷲岳が三角形に聳えてゐる後ろから湯川の深谷を隔て、又浄土山尾根から彌陀ヶ原つゞきの臺地が斜に緩やかな線を西へ曳き落してゐるその上に、丁度眞北に當つて毛勝岳が顯はれて雪の銀光が鋭く眼を射る、その手前から左に奥、大、小、大日の連嶺が彌陀ヶ原と並行して西へ雪崩下ると其末は薄緑の富山の平原で、常願寺川や神通川が絹糸の様に細く光つてゐるのをたぐるとその先きに日本海が淡い海岸線を描いて薄赤い靄の底に沈んでゐる。双眼鏡で見ると富山の町らしいのも見える。近くは西方に鋤崎山が全山に眞黒に森林を帯びて鯨の様な背を横たへてゐる、その北麓を眞川がうねつて行く。すぐ眼下には大鷲山らしい（後に考へると）圓顛と小鷲山らしい木のまばらな残雪の少しある低い尾根が北に連なる（その大鷲の尾根はこの山と低い尾根で連なつてゐた様に思はれるがこれは實は甚だ確かでない、今に及んでその觀察の粗漏なのを悔むのみ）その向ふが立山温泉だと兵三郎が指示すその左右にはかなりの池が二ツ見えた。

少し南へ振れると白山が遙かに眞白に浮んでゐる、その左肩には大分雲が起りかゝつた。

その左が直ちに薬師の大岳である、長さも長い幅も随分廣い山塊である、頭は略三ツに分かれてその間に大きなサアカス或はカアルが見える、これはその左にまだ二つ許り見えてゐる、左の頭の方が少し高くこれが薬師ヶ岳の頂上で、右の頭は誠に盛んな岩山だがこれが品右衛門のいふ岩井谷の頭ではあるまいかと思はれる。これから辿らうといふ尾根は脚下から南西に續いて低い峯頭を經、一旦低下して又一小峯を起し、それから昨日見た第三峯即ち越中澤岳になだれ登る薬師の尾根はその尾根に隠れて兩山の間はどうなつてゐるか見ることが出来ないが大分低いらしい。薬師の左肩にはわが黒部五郎岳が雪に輝いて特有の圓錐形を顯はしてゐる、數日の中にあの上へ行かれるかと思ふと筋肉が顫動するのを覺えた。その左が丁度正南に當つて雲の平がへの字形に横たはつてゐる（其高い部分は辻村氏の所謂祖父ヶ岳）上に蓮華岳と笠ヶ岳の連脈が重なり合つて大笠は秀麗なしかし平凡な圓錐形を黒部五郎岳と並べてゐる、小笠の上には燒岳の烟が赤銅色に立昇つてゐた。又左へ轉じると赤牛岳がのさばつてその右から黒岳、左から槍ヶ岳が覗いてゐる。そこから東澤を廻つて後立山の連嶺が野口五郎岳から三ツ岳（眞砂ヶ岳と同名？頭が略三ツに分れてゐる）



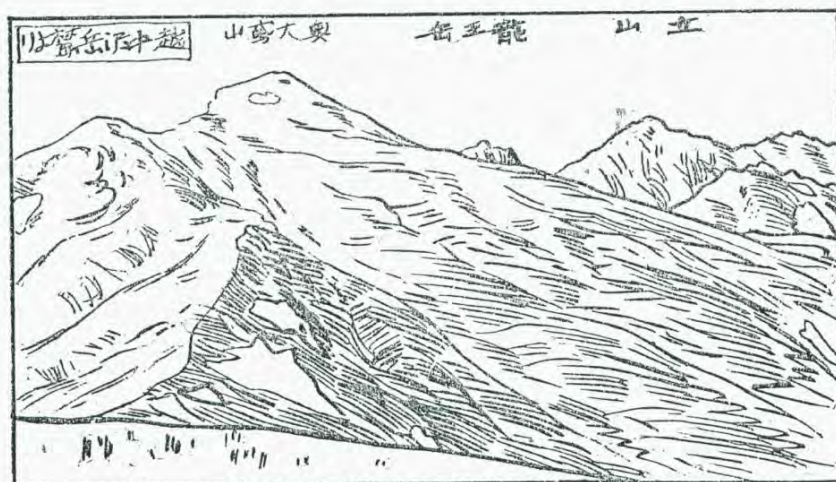
る) 烏帽子岳、乗鞍岳(北葛ノ頭)、蓮華岳、針木岳、スバリ岳、赤澤岳、鳴澤岳、鹿嶋槍ヶ岳、五龍岳と北を指して眞一文字に横走して立山に隠れてしまう、但し祖父岳(鹿嶋の)附近には局部的の雲が厚く屯してゐて明瞭に見えなかつた。

初めは之が大鳶山ではないかと思つたが地圖(農商務四十萬及廿萬富山圖幅)によるも辻本氏によるも《同氏直話及文章—後者につきては本誌三年三號同氏越中小鳶山(三七頁終り)参照、その大鳶山より遙かに高い三角標ある一大山背といふのが多分この山であらうと思ふ或は後に記す越中澤岳であるかも知れぬが參謀廿萬富山圖幅の鬼ヶ岳といふのはこの山か越中澤岳か甚だ明瞭でない》又不完全ながら前記の眺望によるも大鳶山はこの連嶺より西の方へ外れてゐるらしいのでこの山に假りに奥大鳶の名を命じたのである。それに品右衛門の所謂數河^{スゴ}の頭といふのが、頗る不分明ではあるが、或は此處ではあるまいかと思はれる(後説)。

黄鳳蝶^{キアゲハ}が颯々と風に乗つて舞つて來た。九時、南西へ向つて切開けを辿つて頂上を下りる、間もなく上から見た小峯頭に達した、五十米突位低さうに思はれる。越中澤岳は正南に當る。急な下りとなつて又少し上り、第二の小峯頂を越えると奥大鳶、越中澤岳間の尾根の最低所で、馬鞍状をなした小平地に達した(九時四十五分)。ミヤマキンバイやシナノキンバイが咲き續いてゐる。左は越中澤で東に向いて五色ヶ原の南端を黒部に奔下してゐる、右の谷は誰も名を知るものが無かつた、傾斜はかなり急で末は眞川に落ちるのであらう(後に考えると之は數河谷^{スゴ}の上端であるらしい、さうすれば吾々のいふ奥大鳶は品右衛門の所謂數河^{スゴ}ノ頭であるかも知れない)。この鞍部は越中澤乗越といひ杣が往々通行する處ださうだ、氣壓計は二四二五米を示した、ヒメヒオドシか風を切つて飛んでゐた。

五、越中澤岳(新稱)

十分許り休んで越中澤岳へかゝつた。この邊尾根は廣く緩慢な傾斜で、小草の間に唐檜や白檜の矮林が疎らにある。切開け(この邊とには往々草間の細徑)が幽かにあつて『查丙八四號』などいふ古い木片が立てゝある。ミツバワウレン、ミヤマリンダウ、リンネサウなどが星の様な花を點じてゐる、大分暑くなつて來た白檜の矮林を脱けると傾斜の極めて緩い綺麗な廣場へ出た(十時廿五分)、今水は無いが池の跡の様に草が禿げてゐる處が所々にある、芝生の様な草間には殊に目立つ



て蟲取藁が濃紫を撒き散らしてゐる、そして偃松が此處の一團彼處に一團と植えられた様に點在してゐる、極めて呑氣な處で野營には好適であらう。人夫も昨日から道が樂なのと眺望が好いので「越中はいゝ處だ」と口癖の様に言つてゐる。春吉などは今朝漂渺と綠に霞む越中の平原を見下ろして、双眼鏡で家の白壁

などを見つけ出し、溜息をつきながら、あゝいふ處へ行つて見たいものだともまるで魂を奪われたやうであった。

間もなく一高處へ出る、此處が前日眺めた越中澤の南に連なる尾根の基點である、此尾根は間近に頂上に三つ白い尖つた石のある峯頭を経て東方に一時馬鞍狀に低下し、少し南に彎曲して赤牛岳と相對して黒部川に臨んで終わつてゐる（この中の「コビキ山」と稱する部分に參謀本部の三角標があるこれは越中澤岳の下り路からよく見えた、）この終點は嶮しい岩峯で兵三郎によると黒ペンカといふ名を有つてゐる「ペンカ」とは岩壁の義ださうだ、即ち黒い岩壁が直ちに黒部川に臨んでゐるのである、《かういふ嶮惡な川岸を黒部の山人は「ロウカ」（廊下）と名けてゐる、黒部川にはこの廊下が三つある、一つは平の小舎の下手の川の左岸即ち遠山一族の所謂別山（立山の北に續く別山とは異つてそれと黒部川との間にある低い岩峯で我々が黒部別山と假稱したものである、本來の別山との間に内藏之助平の小高原を抱く）の裾にある、此處のは中廊下と呼ばれ、猶奥廊下といふのが更に上流藥師の裾にあるさうだ》。前記の馬鞍狀の部分は一つの乗越であつて、兵三郎は越中澤からタル澤への乗越であると言つたが所謂タル澤は今その位置が明瞭でない、兎に角黒部上流と越中澤との間の捷路には違ひない。越中澤岳の頂上の破れた三角標がもう間近く見える。この邊尾根が廣いのでいつか黒部川寄りの方を來たが、今度は越中平原の見える尾根の頂上へ出て、小さな雪田を越え、巨岩の積み重なつた一峯（小さな無字の標木あり）を越えると越中澤岳頂上二等三角標の下へ出た（十一時）。標は甚だしく破損している。柱に細く比較的新しい裂け目が出てゐるが落雷の爲めであるらしい。附近には蟲取董などが咲いてゐる。晝食。

この山の名稱に就いても疑問が多い、農商務廿萬富山圖幅には鯉鮒岳（讀方は同圖歐字のものに依る）といふ名が丁度この邊に記されてある、（尤同圖はその直ぐ南で切れ次の高山圖幅は出版されてゐないから充分な事は解らないが）併し吾々が直接聞いた所では品右衛門始め誰も知つてゐない、之はまだしも辻本、南日兩氏も越中方面で嘗てこの名を耳にしなかつたといふ事である、河田氏は之を音讀みに「リフ」として立山を「リウザン」といふのから轉じたので、製圖者が山の見通しの時往々例がある様に同方向の爲めに誤つてこの峰にこの名を附して斯かる字を當てたのではあるまいかといはれた。到底鯉鮒の名は一個の疑問であるらしい、同好者の研究を俟つて早く解決したいものである。又參謀本部陸地測量部ではこの三角點の名に梅山ツガの名を用ひてゐる、南日氏その他の人の言によると立山温泉では梅山の名を呼んでゐるさうである、併し果してこの山かどうか保證は出來ない。今は稍近い澤の名をとつて假りに越中澤岳と呼んで置く、勿論後來適當な名が定められれば撤回するに躊躇しない。それに品右衛門の所謂中廊下ノ頭がこれであるらしい。兎に角前記三峰の中では一番高いと思はれる、測量部の調査は二五九一米を示してゐる。

日が陰つて來た、雲が八方に蜂起する。従て山の目錄的眺望はよくないが晴れても奥大鷲と大差は在まい。北が今越へた岩峰を隔て、見える、奥大鷲の、左へ引いた尾根に當る、同山は北方から見たのと少し形が違ふ、此裾にまつはつて大鷲小鷲らしい尾根が雪を持つて低く連なつて居る。大鷲岳も奥大鷲の右に見える後立山々脈は北に少し延びて、五色ヶ原の上に五龍岳の北に續いて八方の連嶺が朧氣に見える。鹿島槍は頂上を雲に没入してゐる。蓮華乗鞍が眞東に當る。東澤對岸の連嶺悉く雲中、正南が雲ノ平、そして赤牛岳、黒岳、蓮華岳、黒部五郎岳等はまだ雲に侵されない。而して茲に一つ大いなる異ひがある、それは愈々益々大きさを増して來た藥師の大山塊に殆んど何等の遮ぎるものなく直ちに西南に向ひ合ひてゐることである、但し此方の顔が先方の胸に對する位

の割合である。五色ヶ原の山脈は棹尾にこの山を振り起して一度茲に勢を収めるからである、向ひ合つた薬師の東北の尾根は象の額の様な木山、草山、岩山をもくもくと畳み重ねた天邊が絶大なサアカスで、之を挟んで左に薬師ヶ岳の頂上、右に岩井谷の頭が相對峙した所は力の満ち々々た景色である、サアカスはまだ岩井谷の頭の北に一つ頂上とその南の峯との向にも一つ見える。そしてこれ等から黒部川に落ちる櫛の齒の様な縦谷にはコオリイフラワアの様な雪の象筈がある。吾々はこれで殆一週日、毎日幾分宛かの近づきを以てこの山の雪を眺めて來た、そしてその日々に幾分づゝかを減じるのが耐まらなく惜かつた。しかし吾々は漸くこの間近迄辿りついた、そしてこの盛んな雪を仰いだそれを踏むのも明日か明後かと思ふと多少氣が鎮まつた様に感じた。

その中ち空は一帶に藍鼠色に變つて來た、と同時に眞川の谷から非常な勢で暗色の霧が舞上がつて眼下の尾根を跨いで黒部の谷へ躍り込まふとすると、忽ち吹上げる谷風に颯られて巴形に逆流しながら薬師の半面を隠してしまつた。黒岳山脈も葡萄色に變つた。前程が大に心配になつて來た、脚下から續く尾根は一旦殆んど正南に大彎曲を描いて低く薬師の北東の尾根と握手してゐるらしい、兎に角薬師の上り口はこの北東の尾根より外にないからよく注意して見ると前に言つた象の頭の様な尾根の重なりが麓から岩井谷の頭まで凡そ八ツある、その第五番目の上に三角標が望まれたので更に意を強ふした、併し困るのは之に吾々を導く山稜である、今言つた眼下の尾根は餘りに低くすぎるから若しやこのまだ西に薬師と連なる尾根があるのではないかと疑つたが、どうも一面の霧で分明しない、昨日から時々山の間に見た所ではそんな尾根は無い様にも思はれた、始めは呑氣な顔をしてゐた兵三郎等三人も茲に至つて大に眞面目になり、兎に角この眼下に見える霧と黒部川を界してゐる尾根を下ることにした、十二時五十分頂上を見捨てゝ程を急ぐ、銀鼠色の空は山を蔽はん許りに低れてゐる、南微西に突起した一山嘴へ出てそれから殆んど正南に向つて、眞面に赤牛岳の赤黒い怪貌を仰ぎながら急なそして極めて細い山稜を下る、幸ひ切明けはある、岩塊の上を偃松の白けた骨がのた打つてゐる、脈が迂回するので段々薬師へ遠ざかる様に感じられていやな氣がする、今にもあれ西の方へ高い尾根が顯はれはしまいかと霧のむらにも眼が鋭敏に働らく、その中一つの險惡な Gap に會した（一時卅五分）、細い尾根は一旦低下して更に向ふに幾塊かの巨岩の累積が筈形に聳へて山稜を鋭どくしてゐる、辛ふじてその巨岩の眞川に面した方に纜かの足がゝりがあるのを見出して、背を擦るやうにして漸く此處を通過した、かういふ際荷物を背負つた儘苦もなく演じ終る兵三郎の離業は見てゐて小氣味がいゝ。越中の平原に當つて石臼を挽くやうな遠雷の音が聞えて來た。

又急な、細い、偃松で縁を取つた石稜を下つてゆく、折から眞川谷の大霧が少しく卻いて西南に薬師の全容が再び顯はれた、今辿つてゐるこの尾根が慥かに薬師に連なる唯一のものであることが分明になつた、(農商務四十萬や參謀廿萬高山圖幅のこの邊の山脈一夫々鯉鮒岳や鬼ヶ岳とあるものゝ南西の曲り具合は丁度實際と正反對である)、併し連嶺は眼下南微西に一小峯を起してそれから甚だしく低下し、辛ふじて前記薬師の尾根へ連なつてゐる、その交はる馬鞍狀の部分にはかなりの平地が見下ろせた、どうかして今夜は彼處迄下り度いものだと考へた。猶細い骨張つた岩と偃松の尾根を下つてゆく、右はやはり數河谷らしい、左は名が明瞭でないが之も一つの深い澤で前記の無名の乗越に通ずる物である、越中澤岳とその尾根（コビキ、黒ビンカ）に抱かれて越中澤と背中合はせになつてゐる。折柄又雷鳴がより近く聞えて、冷たい水粒が時々身體に音を立て始めた。

その時後ろで突然急な叫聲が聞えた、「走つた走つた」と、振り返るとそれは一行の殿となつて

みた春吉で、延び上つて黒部川に落ちる前記の急な谷を見下ろしてゐる。後ろから二番目に居た又吉が見えぬ。落ちたのだ、忽ち先登の兵三郎が荷を抛り出して偃松の斜面に没した、春吉が續いた、俯瞰すると急な斜面に透間もなく蟠まつてゐる偃松や岳樺の間から遙か下に赤い岩塊の亂れた残雪のある澤が見えた、もう人影は見えぬ、萬事了れりと思ふと頭が空虚になつた様に思はれた。三枝氏と一緒に聲を限りに呶鳴つた、サイレンを吹いた、しかし人の聲は答へない、雷鳴が近くなつて雨滴が強く體を打つ、刻々に昏くなつて來た泥の様な空に輪を書いてみた驚が凄まじい糞きと共に間近の巨巖に舞ひ下つた。延び上つて谷を瞰下ろすと、動くものに對して鋭敏になつてみた眼は忽ち谷の残雪の上に黒い物の動くのを發見した、双眼鏡で見ると熊である。何物かを嗅ぎ乍ら右往左往してゐる、併し幸い人の落ちた部分からは少し隔つてゐる、吾々は益聲を揚げサイレンを鳴らした、やがて熊は偃松の茂みに見えなくなつた。漸く遠い人の聲が答へた、偃松の間から人の頭の動くが見えた、それが落ちた又吉のであつた、立つてゐる様子に吾々は顔を見合はせて安心した。やがて體は痛めたが大丈夫だといふ兵三郎や春吉の聲が聞えた。暫くして又吉は二人と一緒に少し遠廻りをして傾斜の比較的緩い斜面を杖一本持つて上つて來た。吾々は喜んで迎へた、彼も意外だといふ顔をしてゐた、元氣はまるで失せた。

兵三郎さへこれは到底駄目だがせめて死處でもと思つて下りたと後に話したが、それが無事であり且顔と脚に多少の擦過傷をうけ手を少し挫いた外格別の怪我のないのは寧ろ過分の幸福であつた、一同は心から之を祝した、雨の中を尾根の上で暫く休ました。彼は躓づいて落ちたと思ふと偃松を捉へたが皆もぎれてしまふ、突嗟に荷が離れたと思ふと體が軽くなつて偃松に縋つたが前後して落ちて來た荷に打たれて又落ち岩の谷の二三間上の偃松の枝で漸く止まつたのであると語つた、そして下の谷を見てもう少しであつたが若しあすこ迄落ちたらと思つて竦然としたと付け加へた。後の二人は更に遠く落ちた荷を拾ひに行かなければならぬ、彼の荷の重要な品物は米と空盒晴雨計であつた。時計は三時四十分を指してゐる、椿事が始まつてから一時間半を經過した。こんな譯でとても思ふ様に前進は出來ぬから最近の便宜の處で野宿するより仕方がなかつた。南に續く一峯との間には更に小瘤起があつて小さい鞍部が二つ見える、その何れかには泊る位の餘地はあらふと思はれたから二人は荷を拾ひ集めて第一の鞍部（手前の）迄登り、吾々三人は尾根をそこ迄下つて一緒になることに手筈をきめた二人は又谷へ下りた。一時信州の方へ移つた雷鳴は今度は藥師の方に當つて聞えて來た。やがて吾々も徐々に尾根を下る、間もなく第一の鞍部に達した、兵三郎と春吉も落ちた荷を纏めて登つて來た、背負梯子は谷の岩で微塵になつてみたさうだ、米の「カマス」は無慘に破れてしまつたが幸にも米がとある岩の間に一團まりになつて溢れてみたのでそれを集めて來たさうである、併し途中で落ち散つたのが四五升はあつた様だ。バロメータアに至つては更に深く谷に陥つたのをやつと見出したといふ見ると蔽革の爲めに形骸は存してゐたが又物の役に立つべくもない。

けれども此處はいかにも尾根が鋭どくて天幕を張る餘地が無いので、更に偃松の中を小峯を越えて第二の鞍部に出た（四時十四分）。此處は稍廣く、眞川向きの澤（これも數河谷の一つの澤らしい）には矮樹が茂つてみたが黒部川向きの方は草の疎らな岩片の斜面で、残雪さへ少しあつた、此處に天幕を張つた、北は今下つた尾根、南は直ちに一峯が高く眼界を遮ぎつてゐる、狭いながら少しく開けた東西の谷には何れも雲と霧のみが狂つてみた、日はそのまゝ暮れた。夜は一同今日の出來事を話してまだしもの幸福を喜んだ、そして又吉に黒部川へ下りて川づたひに平の小舎へ歸ることを勧めたが彼は頻りに大丈夫だと言つて隨伴を欲するので、吾々は危ぶみながらも許さざるを得なかつた。

要 約

明治43年(1910)7月27日～8月3日の記録。薬師ヶ岳から上高地までの縦走。

4. 「越中アルプス縦断記」の後半の部分を記したもの。

メンバーは、三枝威之介、中村清太郎。

行程は、7月27日 野营地—数河乗越—間山手前の窪地野営。

28日 野营地—間山—岩井谷の頭—薬師ヶ岳—薬師峠。

29日 薬師峠—真川黒部川分水嶺—上ノ岳麓で野営。

30日 野营地—上ノ岳—北俣岳—赤城岳—黒部五郎岳山麓野営。

31日 野营地—黒部五郎岳—蓮華岳—三ツ又三角点野営。

8月 1日 滞在。

2日 野营地—双六岳—西鎌尾根—前縦沢岳—左俣岳—飛騨乗越—梓川左岸。

3日 梓川左岸—上河内温泉。

三枝威之介

中村清太郎

六、薬師ヶ岳の北面—其一、^{スゴ}数河谷の頭

七月廿七日—この曉耳を貫ぬいた第一聲は数河の谷底から叫ぶ杜鵑であつた、それが刺すやうな谷風に乗つて來るのを聞くと骨の髄にでも觸はられる様な氣がする。もう薄鼠に夜の色は褪せたらしく、朝の光りがそことなく天幕を透して染み込んでくるけはいがする。四時であつたらう、匍ひ出て見ると東の谷間から覗いて居る黒部の空はポーツと卵色に明けて、木挽山(當字)の尾根と烏帽子の連脈(三ツ岳烏帽子岳及び南澤岳)とが二段に流れて澱んでゐる。

西の谷に振り向くと、南へ寄つて高く有明月が濁みかゝつて力ない淡黄の光りを放つてゐる下には、西微北に鋏崎山がまだ夜の色を残して横たはり、富山の平原からかけて能登半島が仄かな綿を引いて、水銀を盛つたやうな日本海と界してゐるのである。見てゐる中に東天を蔽つた鱗雲は底から焼け爛れ始めて、一しきり四方の山々に血のやうな色を迸しさせた。何かの凶事を告げるやうに。この附近の草で眼に留まつたのは、キバナノシホガマ、ミヤマリンダウ、ゴゼンタチバナ、アヲノツガザクラ、チングルマ、キングルマ、ミヤマダイコンサウ、ダイヤモンドサウ、ネバリノギラン、アカモノ、ツマトリサウなど。

七時卅分には荷を纏めて此處を立つた、又吉は荷も碌々背負へず、しよんぼりした姿である。直ぐに南を限る左迄高くない一峯を目がけて登る、もう切り開けも無いやうだ、丁度この邊は薬師の方の測量と五色ヶ原の方の測量との中間に挟まれた區域だからであらう。偃松や種々の灌木が茂り合つてゐる中を押し分けて、その西北の肩へ出ると、黒部川源流の荒らくれ山は、昨の如く吾儕の眼の前に展けた。

赤牛を先鋒とした黒岳の山脈と、岩井谷を前立ちとした薬師の連嶺とが黒部の峽谷を昏い道に押

し挾ばめて、門柱のやうに並び立つてゐる。其の裾と裾とが互に襞を重ね合はせてゐる間に、黒部の谷水は斷續して、琉玕の曲玉を落したやうに沈んでゐる。此兩大山脈の間には一段遠く雲の平が略水平な強い一線を張つて、黒部五郎岳と笠ヶ岳との各特色を持った圓錐體を載せてゐる。五郎の城壁に似た斜面に、投げ付けられたやうな残雪が確かりと喰ひ込んでゐるのが、見てゐて身顫ひが出るやうだ。それに比べて笠ヶ岳が何といふ貴やかさであらう。



薬師の雪を仰ぎながら、西南指して昨日見た鞍部へ下る。一面に堆積した大岩は、厚い天鵝絨のやうな苔と、のた打ち廻る偃松とに隠れて、踏む脚は往々脆い苔の橋を破つて、深い大穴を覗かせる、青白い苔の絲が顫へて、古い秘密の匂ひが襲ってくる。何年とも知れない前から封ぜられてゐた妖氣が今逃れ出るのであるまいか、山人はかういふ處を「ゴオト」と呼んでゐる。

下るに従つて柵などの低い針葉樹の間をくゞる、それを抜け出るとイハイテフの一面に敷き詰められた小さな原で、廿分許り腰を下ろして、靜かに又黒部川の奥を眺めた。その峰々は恐ろしい迄に靜まり返つてゐる。唯溪々の水音が、他界の消息でも聞くやうに、傳はつて來る許りである。

やがて薬師との間の鞍部の最低處に下り着く。九時廿五分。空を蔽ふ薬師の大岳は西北に向つて熊手のやうに數知れぬ尾根を分派してゐるが、振り返ると越中澤岳の山脚も之と對ひ合つて幾脈の尾根をば派出してゐる。そして其の中の最も東即ち最も黒部川に寄つた一脈が、辛くこゝで手を執り合つてゐるのである。脚下から西に陥る數河谷はこの兩山の尾根の、樹々を蒼々と鎧つた裾から裾を右に左に曲りくねつて、水も見えない迄に深い。東は直ちに黒部の谷へ向つて、遙か下まで草山である。ツボスミレ、ヒメイチゲ、アヲノツガザクラ、バイケイサウ、チングルマ、カラムツサウ、シヤウジャウバカマ、マヒヅルサウなどが咲き續いてゐる。此處は大分低いらしく、思ふに越中の獵夫などの通路であるらしい。一箇所測量部員の泊つた跡らしい所もあつた。吾儕は之を數河乗越と呼んでおく、黒部川の瀬音は鐘の音のやうに唸りをもつて地を揺がしてくる。

愈々一步を薬師の斜面に投ずる、灌木に交つて笹がつかましい花を持つてゐる。その蔭にはオホバキスミレがぱつちりと、闇の中の灯のやうな懐かしい色に咲いてゐた。時に藪を出ては矮草の斜面を通る。百四十號、百三十九號など、記した小さな木片が、乾からびて散つてゐた。始めは西へ向いて居たのが、段々南へ振れて來る。この邊が北から見た時の第一の高まりであるらしい。藪の間から東南に烏帽子、野口五郎の連脈が赤黒くされて見えた、北の空はまだ何といつても越中澤岳が支配してゐて、纔かにその左肩口から、仄かに大日續きの峰々が覗くばかりである。キヌガササウ、アカモノ、クワンザウなどがチラチラ眼に入る。

又灌木と針葉樹を分けて、九時五十五分、第二の隆起へ上つた。日が照つて、暑さがそろそろ加はつて來た。西南薬師の本岳に面した尾根の一部分に、イハイテフの小さな殖民地がある。此處か

らも東から南へ掛けて烏帽子、三ツ岳、野口五郎岳、赤牛岳、黒岳、雲の平、蓮華岳、笠ヶ岳などが黒部川を周つて眺められた。薬師はもう頂上は岩井谷の頭に隠れて視界を去つた。眉を壓して岩井谷の頭あたり薄紅の岩の膚が匂ふやうに近く、吾儕はもう其の雪の模様を散らした袖の裡に、慥かりと抱かれたのを覺えた。助かつたといふやうな氣が自づと全身の筋肉を緩めるのである。

これから山稜に沿ふて切り開けらしい跡が處々あるが至つて不完全で、針葉樹（唐檜が多い）の交つた藪をくゞるのに中々骨が折れた。木を伐つた痕の高い所から察すると春雪の多い時分測量したものかも知れない。やがて雑木の間の草に蔽はれた小窪地を過ぎる（十時十五分）。ミヤマカタバミ、ヨツバムグラ、キバナノコマノツメなどが見える。唐檜の茂り合つた矮林をくゞり抜けると樹の下枝が冷たく頬を撫でる。眼を落すと木蔭にはコフタバランが仄かな花に咲いてゐる。木洩日の光りを命に生きてゐる爲め、あんなに葉も花も一樣にうす青いのであらう。

十時卅六分。東に向つた美しい小草の斜面に出ると、俄かに夜明けのやうな氣分になる、北稍東に昨日越えた奥大鷲の峯が越中澤岳の後ろからヒヨイと顯はれ出た。黒岳に續いて、鷲羽が小さく尖つて雪の小紋をチラチラ輝やかし始めた。日は直上から照つて、汗がしとゞに衣を濕ほす。オホミゾホ、ヅキはしかし、冷しさうに谷風に揺らめいてゐる。

斯うして第三の隆起に達したのは、やがて十一時になる頃であつた。そこには黒部谷に對つて灌木に囲まれた草の廣場がある、水は無いが晝食にした。見上げるこの山の尾上には、黒部に隔んだ崩れの頂きに、見覚えのある琴爪の形した残雪が見える。實際この地方の山の特徴を捉へるには残雪が役立つ場合が多い。曇り日の常で山々の頂きは一樣に雲の厚衾を引被いでゐる時にも、峯腹に湛へた残雪が嚴としてその峯の所在を語つてゐることは屢々ある。たとへ晴天でも遠望する時には峯の空線は往々空と溶け合つて捉へ悪くいが、残雪はかなり明白に顯はれてゐることがある。それに残雪は其山の地貌を正直に發表するので、見てゐて中々興味がある。來し方五色ヶ原の峯々はもう一目に見渡せた。遠く大日の峯續きが平原に走り下るの見える。黒ビンカの峯を超えて南澤岳から烏帽子、三ツ岳、野口五郎、赤牛、黒、鷲羽などが段々罅隙にポーズと霞を罫めて來た。

ミヤマナ、カマドの花盛りをイチモチセ、リ蝶が氣ぜはしさうに飛び廻る。くり色の短かい翅が酷く風を截つて鳴ると、寂しさは更に加はるやうだ。キアゲハも舞つて來たが見る見るうちに遠い尾根の木立に行衛は失なはれてしまふ、日本アルプスの高山ではよく出合ふが、彼も裡に抑へ難い漂泊の性を持つてゐるやうだ。何だか暫らくは霞に包まれて酔つたやうな氣分のうちにうつらうつらとして過ごしたが、肌寒いので覺め心地になると日は蔭り勝ちになる、見渡す山々に、いつかむらむらと纏はつて來た雲も氣を急がせた。偃松の蔭にまだ夢半ばの兵三郎たちを無慘に起して出掛ける。十二時廿分。

オホバキスミレを踏みわけて行くと、又百卅號と書いた木片が落ちてゐる。小池が二ツあつたが、水は何れも濁つてゐた、臆測圖に薬師ノ池としておいたものだ。最早木立も疎らになつて、黒部向の斜面に、この山最初の残雪を邀へた。やがて草間に池の痕らしいものがある所へ出る。イハイテフが隙間もなく茂り合ひ、マヒヅルサウ、ツマトリサウ、ゴゼンタチバナ、チングルマ、ヒメイチゲなどゝ共に白い花がチラチラと眩ゆい、ムシトリスミレやアヲノツガザクラ、キバナノシホガマなども交つてはゐた。

暫く唐檜の疎林を分けて上ると、又青草の小平原へ出る。遠巻きに立つてゐる矮い木々の梢から擴がった越中の平野は、薄緑の果が灰色にぼけて、日本海も朧ろに、常願寺の川筋ばかり、ところどころ湖のやうに日を映し出す。

黒部川向ふの山々が白く化けて一里も向ふへ退いたかと思ふと、大粒の雨が青草に音を立て、眞川の方へ段々移つて行つた。その後から黒ビンカの左肩に、蓮華岳や針木岳が始めて濡れ顔をサツと現はした。見ると足元に白山風露が一輪俯向いて痛々しさうに花瓣を顫はす。オホバキスミレ、カラマツサウ、アヲノツガザクラ、ヒメイチゲ、チシマゼキシヤウ、ヤマウイキヤウ、ヨツバシホガマ、ミヤマキンバイ、コキンバイ（？）コガネイチゴ（？）ベニバナイチゴなども咲き續く。

一時十四分には残雪を下にして腰を下ろした。眼下に黒部川が東へ廻つて流れ下るのを眺める。山々は多くはもう厚い雲をば纏ふてしまつた。又登ると偃松が始めて出て來た。やつと爪形の雪に達したのが一時廿三分であつた。四邊にはツガザクラやアカモノが矮く岩間を蔽ひ、鶯が何處とも知らぬ偃松の茂みにさゝ鳴いてゐる。

暫らくは偃松を分け上るが、ぢきコケモゝの斜面に出た、第四の峯はもう眉に迫つた。北望して立山彌陀ヶ原の美事な一線を眺め得た時は、急に頭の清々しくなるのを覺えた、海もまだ雲の隙に陰つて窺はれるのである。南に向つてムシトリスミレ、ミヤマダイコンサウ、コメツ、ジなどを踏んで上ると、一時五十分第四の峯頭に立つた。見上げるこの山の上半身も、今は薄墨の雲の垂幕に蔽はれた。コメツ、ジやコケモゝの細葉は、一面に南京玉のやうな水滴を飾つて、踏み分ける足袋の紺色に痛く染み込む。

西南指して行くと、ハクサンイチゲ、タカネウスユキサウなども咲き出した。急な谷間を傳つて黒部川の轟音が脅やかすやうに上つて來る。うす昏い水の處々は燐光を帯びてぬらりと光る。皆の心が自ら今夜の泊りを思つてゐる。そのうち尾根の右下に窪地が見下ろせたので、偃松を亂して下りて見ると、誠に絶好の野陣場であることが解かつた。尾根に沿ふて北東から西南に長い、瓜を縦に割つたやうな窪地で、中央をチヨロチヨロと小流が草間を分けて走り下つてゐる。それを眼でたどると上は一面の雪田で雲で限りは知れないが、これ迄遠望した所では、その上が恰かも三角標を持つた第五の峯であると思はれた。時は二時少し過ぎではあるが、この上程を貪ることも無いので、今夜はこの樂園に宿を借ることゝ決めた。

ぢきに天幕は流れの左り岸に張られた。四時頃から霧小便が來たが五時過ぎにはあがつた。眺めは自然北面に開ける。遠く祖父ヶ岳、赤澤岳、鳴澤岳、鹿島槍ヶ岳、五龍岳、立山、龍王岳、劔岳、大日諸峯、近く五色ヶ原の三峯が葡萄鼠に暮れて行つた。

七、薬師ヶ岳の北面一其二、岩井谷の頭

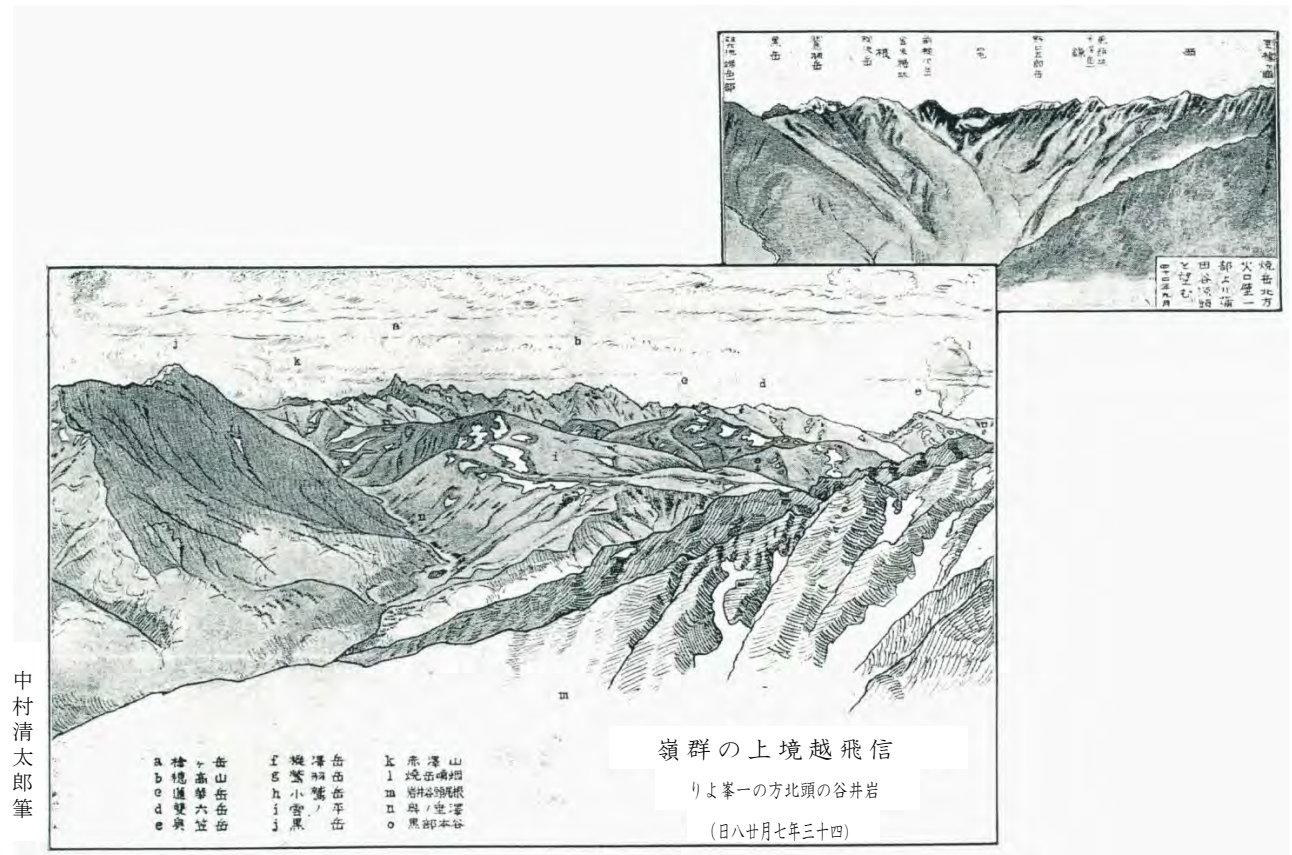
廿八日。一此夜の寒さはひどかつた。それは一時頃であつたらう、早くも私の夢は破られてしまつた。天幕の入口からは強い緑光が射し込んで、白くほうけた灰を被つてゐる燃えさしの偃松と、人夫の一人の下半身とをかつきりと照らし出してゐた。恐る々々首を伸ばすと光の主はまだ高かつた。東の尾根の上には一團の星も顫へてゐた。今日は愈々薬師を乗越す日なのである。とろとろといつか假睡したが、夢は猶二時間とは結ばれなかつた。今度は天幕を忍び出たが、外は前よりも昏

かつた。

空は一面に氣味の悪るい段だら雲が布き詰めて、星の数も稀である。はつと思つた。かういふ雲は後立山々脈を歩いてみた時にも棒小屋乗越に野營の日一度見たことがある。鱗雲ではあるが、その雲の一團一團が、互に海月のやうな手を出して、絡み合ひ、纏れ合ひ、溶け合つて、もやもやと灰色の怪しい網の目をば作つてゐる。又吉はそれが風か雨を豫報するもので、獵師が蛇腹雲^{ジャバラ}といつて恐れるものだと言つた。それでも立山は雲の底にくつきりと獸の齒のやうな輪廓を見せて、如何な嵐でも身じろがないとやうに落着いてゐる。

朝のけはひが廣がつて來ると、空の地は普露西亞藍を流して、怪しい雲もいつか姿を消したらしい、遙かに日本海が赤味を帯びて朧ろげにふうつと顯はれた。水が自由なので朝食も早く終ることが出來た。かういふ峯から峯への旅には、殊に水の充分使へる處へ泊るのが有利である、少し位餘計に前進して雪許りの處などへ泊るよりも、早くとも水の多い地に宿つた方が却つて翌朝の出立に暇を取らなくていゝ。

五時卅分。程に上る。流れについて西南指して殘雪の左り側を攀ち、程もなく小さな峯頭へ出た。三等三角標がある、二五八五米！名は間山とあるものだ。大空は淺葱色に澄んで、爽やかな山の朝である。立山は奥深く峯と峯とが重なり合つて來た、雄山が恐ろしく高く八字の峯頂を抜き上げ、西に寄つて前に龍王淨土、後ろに別山が一段低くそれを圍んでゐる、劔岳の輪廓は小刻に顛へて眼に泌みるやうだ。五色ヶ原の連嶺と越中澤岳とは遙か立山の裾に額を鳩めて固まつてゐる。大日連嶺の背には毛勝岳（瀧倉岳）が銀冠を輝やかし始めた。それにつれて黒部川の下流を距て、後立山の連峯が名の如く立山の後陣を承はつて押並んだのが、一步毎にスルスルと手繰り出されて來る。脈管に波を打たせながら猶西南指して攀ち登る。有明月がうそうそと額を覗く。チングルマ、ミヤ



マダイコンサウ、タウヤクリンダウ、ミネズワウ、ムシトリスミレ、ヤマウイキヤウ、タカネウスユキサウ、イハカヅミ、イハイテフ、ハクサンイチゲ、シナノキンバイ、アヲノツガザクラ、ツマトリサウなどが一面に朝風に顛へて、葉末の露がキラキラと眼に痛い。

六時十三分。六合目の峯に上り着く、峯の下黒部川向きの斜面にはL字形の残雪があるので、遠望して著しく目についた處である。右に落ちる澤は未だ數河谷の領であらう。何よりも先づ岩井谷の頭が、荒れに荒れた岩塊の集落と瀑布が雪と噛み合つて互に齒を剥いてゐるのを、弾力のある強い一線で高く金字に統一してゐるのが、痛くなる迄、吾儕の首を撓めさせずには置かない。その左の肩には薬師の最高峯が、まだ新しい祠殿と三角櫓とを載せて、なだらかな尾根を深く深く黒部の谷へ引落としてゐる。それに乗つて笠ヶ岳が張りのある背を東に伸した處、奥笠の肩から何かの塑像のやうな焼岳の烟が一團重く立ち淀んで罨の毛に似た横雲を棚引かせてゐる。天半を領して穂高、槍の連脈が牙を鳴らしてゐる下には双六岳、蓮華岳、鷲羽岳、小鷲（志村氏による三年二號十七頁参照）などが、その六七合目のところへ靡き伏してゐる、雲の平などは、もう背を投げ出すやうに沈んでしまつた。黒岳はしかしさすがに高い、三角櫓が稍低い岩角に頭だけ出してゐるのが、双眼鏡で見られた、乗鞍岳も雲に薄れた姿を、時々笠ヶ岳の本岳に重ねてゐた。赤牛も最早溫和しさうな貌に變はつた。この黒岳の山脈と並行して野口五郎のつゞきが、書き損こなひの假線のやうに重なり合つてゐる。その南寄りに獨り離れて、常念岳が特有の尖塔を押立てる。又赤牛の左手からは三ツ岳、烏帽子、南澤岳から不動、舟窪、堀澤、北葛などの頭、蓮華、針木岳、スバリ岳、祖父、赤澤岳、鳴澤岳、鹿島槍、五龍、八方、唐松、不歸などの峯々が手を連ねて揺らめき合ふ。それが立山の背後に姿を消さうとする前に、一段高い卓子狀の峯を擡げるのは恐らくは白馬の鐘ヶ岳であらう。三ツ岳烏帽子兩山の峽からは、高瀬向ふの唐澤岳や餓鬼岳杯がほの見える。そこへは蓮華（針木）から掛けて、雲の海の波濤が音もなく寄せてゐる。このほの白い大溟の果てには、淺間、四阿、草津白根、岩蓼（？蓮華と北葛の頭との間に當る）などの連山が沖を行く大船のやうに浮んでゐる。淺間は白い烟をぽつぽつとのんきさうに吐き始めた。立山の方は前と變りもない。

苔桃の柔かい萼を踏んで又少し登ると、左下黒部谷に面して残雪を湛へたカアルらしい地形がある、尤もこの上のものに比しては甚だ小さい。仰げば七合目の岩峯が、ザカザカに荒れた膚の大岩壁を打ち立て、大童になつて行手をば遮ぎつてゐるのである。之れを自然西に避けると又稍や小さな岩壁が續き、大岩壁との間に岩塊のゴロゴロした坂を作り濠狀を呈した處に入る。此處を過ぎると大石の斜面に移り、西南に廻つてやがて七合目の峯頭に導かれた。六時四十四分。墓石の様な巨岩が將基倒しに倒れ伏してゐる。岩井谷の頭は胸苦しい程近い。南々西に薬師の頂上がかアルの上に載つてゐる。

少し下り氣味になるが、間もなく西南に八合目の小隆起へ出る、この邊ゴウトが多い。此處を下りて愈々岩井谷の頭へかゝることゝなる、黒部川に沈んで、かなり大きなカアルが瞰下ろせる。もう數河谷の領分は脱して、岩井谷のうちへ入つたらしい。さすがに登りは急になつて来る。黒部谷方面と違つて眞川向きの山側は傾斜も緩く、雪も見えず、岩といへば細かい破片ばかりで、偃松は盛んにのた打ち廻つてゐるが、ミネズワウ、タウヤクリンダウ、コメスゞキ、タカネウスユキサウ、イハウメなどがその枝影に咲き満ちて餘程長閑な觀を呈してゐる。

漸くこの岩井谷の頭に匍ひ登ったのは、七時五十三分である。見ると峯は南北に伸びて三ツ程の小さな高まりを作つてゐるが、何れも根張りの頑丈な巨岩から組み立てられてゐる、その三ツのうち最南に位してゐるのが一番高いやうだ。その頭に登つて覗ふと、薬師の主峯がすぐ眞向ふに（南微西）比較的優しい八字を畫し、その西の翼は伸びて高い一個の縦嶺となり、この岩峯へ慥かりと結び付けられてゐる。

この主峯と縦嶺と、今吾儕の立つこの岩井谷の頭との間は、東黒部谷の空に向つて恐ろしく大きなものゝ手で掬ひ取られたやうな一ツのカアルである。岩の瀑布がその底を目がけて注ぎ込み、その上を蔽ふて雪が海嘯のやうに溢れ、唯瀑布の源をなす骨張つた岩筋ばかりを櫛の齒形に残してゐるが、その岩の影は雪の膚にくつきりと堇青の怪しい色に鮮やかな隈を落してゐるのである。まるで絶大な蟻地獄だ、底には堆石の堤防が爬蟲類のやうにのたくつてゐる。見入つてゐる中に廻りの岩がかけ崩れていつか自分も落ち込むと、その儘あの細長い怪物に吞まれてしまうのではあるまいか。流石白牡丹の花弁に見るやうな素直な脈を入れた雪も一旦之にぶつかるゝと渦を巻いて身をよぢり苦しうな皺を寄せてゐるのである。

笠ヶ岳の後ろへ乗鞍がだんだん競り上がつて來た。薬師主峯の右腹には、飛驒國境の上ノ岳と赤城岳とがひしやげてへばり附いてゐる、東南の空に槍と穂高は見てゐるうちに益々尖つてくるやうだ。白山は西南の空際から鋭どい光りを放射してゐる。北方の山々はいつの間にか盛んに雲の泉を噴き始めた。キアゲハが岩間に咲くアキノキリンサウを掠めて、何かの使命を帯びてゐるやうに、風に乗つて北の方へ過ぎて行つた。

八、薬師ヶ岳の頂上より南面

南を望んで吾儕は前記の縦嶺傳ひに薬師の主峯に急いだ、八時卅分。途中には小さな隆起が三ツ程ある。雷鳥が舞ひ出した。岩蔭にはイハウメが珍しい大きな花をパツチリと浮き出させる。岩ひげも銀鈴を振ふ。エキゾチックな匂ひを持つたミヤマウスユキサウもあつた日盛りの破片岩の上を錆色の小蝶がヒラヒラ舞つてゐるのが、見ると自分には始めてのもので、中々活潑で捉へることが出来ない。人々はもう頂上の方へ見えなくなつた。仕方なしに喘ぎながら跡を逐ふ。大岩の堆積した山稜を南向きに攀ち登ると、やつと頂上の祠が眼の先きに立つて居た。九時廿分。祠の東寄りには二等三角櫓がある。標高二九二六米。三部に分たれた白木の祠殿は新造らしく、年代の前に痛ましい迄荒廢の姿を曝してゐる此山巔に、人の手に削られた生々しい木の香を撒き散らすのである。側には小さな劔が幾つも岩の上に錆びついてゐる。（かういふものを、山神に奉納する習慣は年々に少なくなつて行くさうである）。また氣が着くと莫塵や草鞋の破れたのや、蠟燭の燃えさしなどが、其處此處に轉がつてゐた。流石に大分人臭いと思つた。後に聞くとつひこの間の祭日（舊六月十五日とか）には、有峯からの參拜者が大分あつたさうで、それ等の人々は日歸りの者は少なく大概是頂上の祠前に一夜を明かして行く由である。

頂上の南側は岩間を草の花が咲き綴る清らかな斜面である、ヒメクワガタ、ハクサンイチゲ、タカネウスユキサウ、イハカヅミ、ノギラン、イハヒゲ、イハウメ、コメバツガザクラ、ミヤマダイコンサウ、タウヤクリンダウ、イハツメクサなどがある、先刻の蝶の事が氣にかゝるので餘り進ま

ない人夫を語らつて又そこ迄下りた。三人で手を盡したが、やつと兵三郎が偃松の間に菅笠を伏せて大聲に呼ぶ迄には大分暇がかゝつたのである。手に取つて見ると全く今まで見た事もない珍しい種だつた。(この蝶は後に *Oeneis jutta* Hiibner.の名を持つてゐるものでこの山續きの處々に産することも知れた、詳細は六年一號雜録一七六頁参照)。

霧が眞川といはず黒部川といはず、一面に擴がつて來た。頂上へ歸つたが、霧の隙びまに黒岳、赤牛、穂高、笠、蓮華、黒部五郎などを覗ひ得たばかりであつた。しかし予は充分満足した、夢にも忘れ難いかの黒部五郎が、この頂上に連なる一峯と肩を並べて、そこに嚴として確かに立つてゐるのである。想ひ起す、先年(四十一年)始めて白馬へ登つた折、遙かに立山の南に當つて、この山の姿を眺め得たが、その時分は今程も山名などは判まへてゐなかつたので、藥師かしらむなどゝ漠然思つてゐたが、その暗示的な形容は深い印象を止めたのである。その後上河内に遊んだ時、嘉門治老爺からその黒部五郎なる名を持つた山であることを聞いて、是非一夏そこへ行かうといふ約束をした事があつたが、今度の山行が北から始まつたので、自然かういふ順になつたのである。尤も斯うやつて遠く山の峯を傳ひ傳つて來たのも、一つは彼の引力であることを認めずにはゐられない。何となしに故郷へ歸るといふやうな懐かしみの胸に湧くのも、不思議ではないと思はれた。霧の一進一退する間には立山、後立山つゞき一帯、皆峯頂かけて百足のやうに雲が匍つてゐた。岩井谷の頭はこゝからでは荒れた所も見えず、比較的平凡である。カアルも亦さうだ。どうしてもこの連嶺は北から望まなければいけないと思つた。キアゲハが又飛んで行く。

霧に包まれた頂上で晝飯を濟まして、ぼんやり休んでゐるうちに、兵三郎が耳を立てゝ人聲がするやうだといひ出した。程なく南の方から白霧の中に人影が滲み出て來た。霧も白いが人もやはり白い。行者だ行者だと誰かゞいつた。皆はいかにその姿を、懐かしみと怪しみとを以て眺めたらう。近づいた時に白衣の上に、思ひがけない南日君の顔が顯はれた。呼吸を切らして登つて來た氏も我々を見て、急には頭が纏められないといふ風に見えた。氏の同行三人は遙か後から來着された。忽ち我々は三角櫓の下で山の談しに時を移した。同君は此の山へはこれで二回目の登山であつた、去年は辻本君の登られたちき後にやはりこの絶頂に立たれたのである。今年は黒岳、鷲羽の方へ行かれる筈であつたのを、有峯の案内者の違約から目的を達せず、今朝甥御三人と有峯から案内無しで登つて來られたのであるといふ。生憎の霧である。同君は去年の時も此處から槍ヶ岳を望むことが出来なかつたのにと嘆息して、ひたすら濛々と湧き返る霧の中をば見入つてゐた。

一同頂上を辭することゝなつた、南日君の一行は今日どうしても有峯へ歸らなければならないので、同君は丁寧この山麓の露營地の模様などを話して聞かして呉れた。そのあと霧の中で會つた人々は霧の中で別れることになつた。十一時十五分。絶頂の南に續く稍低い峯の西側を廻行して、尾根を西々南指して、左手に畑のカアルを見ながら下つて行く、程もなく又他のカアルを瞥見して、藥師の一支脈黒部谷へ落下する尾根が、主脈から分岐する點へ出た。脚底霧の中を藥師澤の右俣が白絹の糸の纏れるやうに、蒼い木山の裾深く、南へ流れ下つてゐる。西の尾根(主脈)には南日君の一行が小さくなつて、ヒヨイヒヨイと小蛙のやうに飛び下つて行くのが見える。吾儕はしかし霧の晴れ間を待つた、もう一度黒部五郎を仰ぎ度く思つたからである。しかし終に絶望と知つた時には遙かに雷鳴が起つて、雹に似た雨さへ岩を叩き始めたのである。

十二時卅分にこゝを出掛けて南西指して下ると、小さな岩峯につき當る、こゝから更に西に外れて、細かい破片岩がモザイクの様に布かれた圓い尾根を行くうち、段々又南へ向き直る。時には砂を布いたやうな處もあつた。霧がもう四邊一面に重く澱んでそれが極めて緩やかに動揺すると、その底に一面のタカネスミレが濡れ髪をゆさゆさと振ふ。蝶が重さうに翅を揺すつては偃松の茂みへ落ちる。先刻大男が三人もかゝつて逐ひ兼ねたそれと同じ種とは思はれない位である、濠のやうになつた地形が、それでも二箇所は眼に入つた、下の方が少し長く雪が溜まつてゐた。其外壁を夫れ夫れ一ノ堀、二ノ堀、三ノ堀などゝいふらしい。之は嘗て後立山々脈で見た「祖父祖母の濠」と同じ種類のものであらうと考へられる（六年一號、後立山連峰縦斷記十八、十九頁参照）。之からは餘程西へ迂回するやうになる、足ざはりにもう岩といふ感じは失せて、泥のやうな氣がする。池の跡の澤山ある高原様の處を過ぎる。辻本君の紀行に見えた風穴雷穴などいふ處はこの邊であるらしい。針葉樹が疎らに立ち始めた。又南西に向いて下ると細い谷に導かれる。石が轉々してゐて水は少ない。兩崖は針葉樹林が深い。谷は西へ向いてゐる。稍下ると樺も交つて來た。去年辻本君の露營した處と思はれる森林中の小平地を左に見る。水つぼい空溪は泥沼のやうに溼る。

俄かに天が明けたと思ふと我々は小さな平地へ吐き出されてゐた。一時四十五分。南日君の一行は此處で未だ支度をして居られた、見ると杭に別れの言なぞが書かれたまゝ、まだ立てられないであつた。南に小さな草の丘を控へてゐるが、こゝも藥師峠の一端なのである。時こそ未だ早い吾儕は此處に泊らなければならない。食糧は残り少なになつた。明日はどうしても眞川へ下つて側師から米を買はなくては南進は續けられぬのである。笠を戴だいた南日君の一行は間もなく草山の頂きに見えなくなつてしまつた。

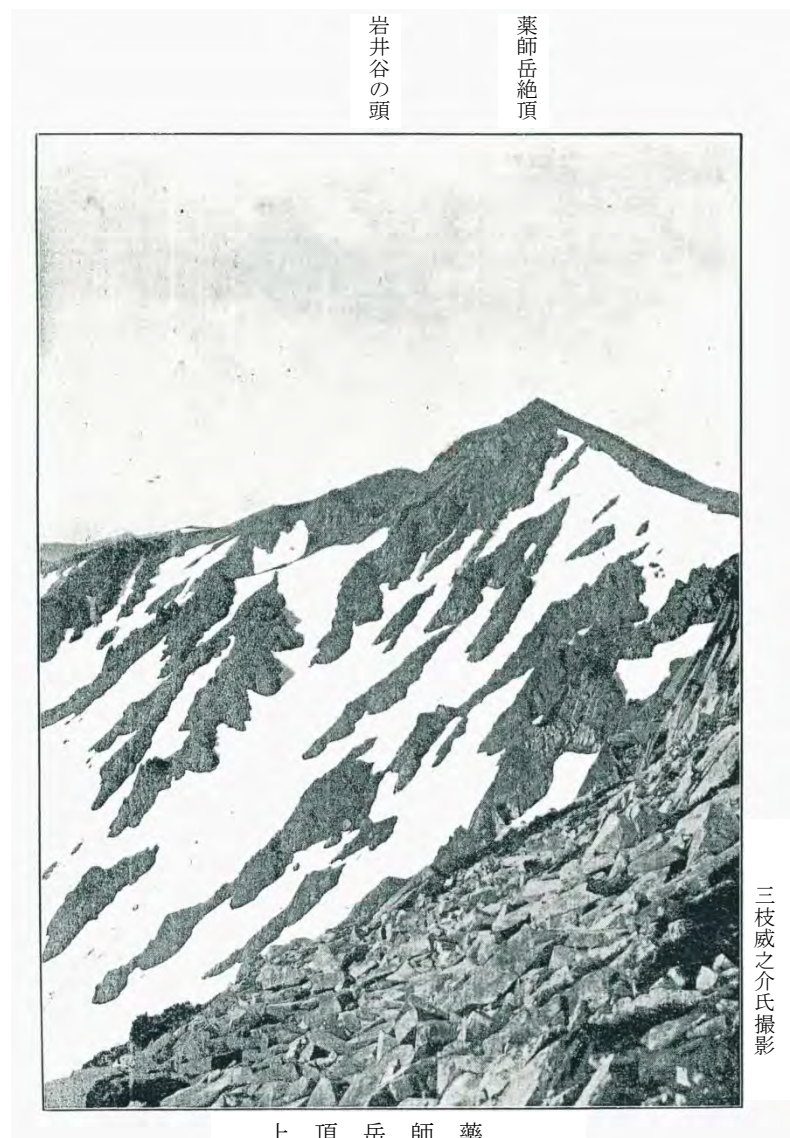
降り途で見た草はタカネスミレ、タカネウスユキサウ、イハカドミ、チングルマ、ミツバワウレン、イハイテフ、キヌガササウ、キバナノコマノツメ、アヲノツガザクラ、ツガザクラ、ネバリノギラン、ミヤマリンダウ、ミネズワウ、シナノキンバイ、コガネイチゴ（？）サンカエフ、ミヤマカタバミ、ハクサンバウフウ（？）ミヤマキンバイ、ヨツバシホガマなど。あたりはかなり廣い草原で、風當りも強くないらしく、偃松は疎らながら庭木のやうに繁つてゐる。水はしかし東の方の澤へ少し下りて求めなければならない。池の痕があるが羊糞のやうな泥が干割れてゐる計りであつた。二時半頃から又一しきり強い神立が來た。これは間もなく歇んだが、遠雷は絶えず脅やかすやうに西の空を轉がつて、小雨は夜に入るまで續いた。兎に角吾儕は藥師の南面には聊か失望したのである。

九、藥師峠の高原

廿九日一朝の空は冷やかに澄んだ、チラと天幕を覗く山の影に吸はれるやうにのめり出ると、他ならぬ黒部五郎岳が空の南東隅を眩しい許りに飾つてゐるのである。頭は此處から見ると一段鋭どく尖つて東に傾き、紫黒色の膚はきめが荒けて、ゲジゲジのやうな雪が固く獅噛みついてゐるのがもうつい鼻の先きに來てゐる。前山の藥師の尾根がその重みに撓はみはしまいかと危ぶまれる。續いて西へかけては赤城岳が銀覆輪の小鞍を置き、上ノ岳は支峯が幅廣く肩を張つて頂上は見えないが、落花の如く點々と雲を浴びてゐる。藥師そのものは此處からは唯中腹の森林が見える許りであ

る。七時十三分此處を引拂ひ、眼の先きの二段になつた小丘を越えると廣い藥師峠（太郎兵衛平）本部の高原が行く手に開ける。ムシトリスミレの紫が深い、ミヤマリンダウは時々白い花も咲いてゐた。原のたゞ中に三等三角標の立つてゐる處へ來たのが八時。之は二三七三米と測られ太郎といふ名を付せられてあるものである。その東側を通るやうに幽かな小徑が跡つけられてある。段々遠い見渡しが利いて來た。槍の穂先が蓮華の頭上にスツキリと朝の空氣に磨き出された時はハツと思つた。上ノ岳頂上の三角標も顯はれて來た。黒部五郎岳はギン鮫の様な齒を持つた顎を長く突き出してはゐるが、それでゐて左右をば端嚴な八字の太線に收めてゐる。それと左に並んで双六岳が三ツ、蓮華岳が二ツの頭を鳩め、脚は長々と西に伸ばして寝そべつてゐる。雲の平が右肩下りに奇妙な高原を盛り上げた上に、鷲がヒヨイと嘴を尖らす、その北には小鷲がピンのやうな頭だけ際立つて黒い。その又北の二つの隆起は赤岳かとも思つたが後に高野辻村兩氏の言に依ると赤岳よりも少し南方に當るものらしい、赤黒く兀げた山續きである。黒岳は地震計が描いたやうな輪廓を長く引き伸ばしてゐる。振り向くともう藥師も頂上迄見えて來た。妙に平たく押つぶれて、瓜の種ほどの雪が心細げに山の壁を頼んでゐる。膚に光りも何も失せて土器色にくすぶつて如何にも古い匂ひのする所が、或は輪廓の鈍いところが、又は箒で掃いたやうな山の皺波が野口五郎岳から烏帽子にかけての連嶺とよく似てゐる。さつきから黒部五郎と双六との山の峽にギザギザの峯がイライラ眼に觸はるのが何だか解からなかつたが、双眼鏡で見ると三角標が灰かに見えた。どうも穂高の岳川岳ではないかと思ふが、しつかりは解からない。南西の天際には今日も亦、白山が雪山の教義を平原に傳導してゐるのが望まれる。

僅かに爪先が下ると道側に、「眞川黒部川分水嶺」と書いた小札が建てゝあつた。左側には草の斜面に一帯の雪が残つてゐる（五年一號十八頁に面した辻本氏撮影の寫眞藥師峠とあるものに寫つてゐるのがそれである）。やがてこの大原の中程へ來た。有峯への道は此處から右に岐れるので、南日君の建てて行つて呉れた道しるべの杭が生々しい木の色を見せてゐた。四方の山々は依然として明らかだが、上ノ岳の頂は早くもその



北肩に隠れてしまった。槍の尖頂が今度は蓮華の右肩を破つて出て来た。西北に當つて富山灣が湖のやうにうす光つてゐる。白山は獨り茫々海のやうな南西の空間を生かしてゐるのである。

此處へ一と先づ荷を下ろして眞川の岸迄米を買ひに下りることになつた。そこには古代遊牧民の^{ガワシ}佛を残した側師が幾人か小舎を建て、曲物を作つてゐるのだ。今夜は上ノ岳の麓あたりへ泊ることにして、吾儕は春吉を連れて眞川へ行く、兵三郎と又吉とは荷を護つて此處で歸りを待つてゐると手筈をきめた。八時廿五分であつた、三人で西を指してこの高原を下つて行く。青草の斜面に通じた道は赤兀になつて留度もなく迂る。眞川對岸の木山が霧の底に低く烟つてゐるが、有峯はどの邊かわからない、唯鮮やかな緑が山間に一と流れ流れてゐるのが人の棲む村里らしく思はれる。飛ぶやうに下りると傾斜愈々急になつて針葉樹林の中を貫ぬいて行く、間もなく小さな原へ出て来た、一面じめじめした處で、草の色が殊に若々しかつた。辻本君の紀行に見えた池ノ段といふ處であらう。又樹林の中の急な空溪に陥つてしまふが、はや斧の音がそこともなく聞えて来る。生木の強い匂ひが迷つて來ると、ぢきに小川(眞川)の向ふ岸に側師の小舎が四五軒並んでゐるのが顯はれた、新らしい材木や鉋屑がキラキラと眩しい。大石を傳つて川を越すと、すぐ取りつきの小舎を訪ねた。主人は中年の親切な人であつた。早速山歩きの次第から米の缺乏を手短かに話して、米一斗の讓受を懇請した。兼て飛驒高山の會員住廣造氏が好意を以て與へられた添書を差出した。主人は自分では餘分の米を持つて居なかつたが元締から早速取つて來て呉れたし、味噌は自分のを大きな樽から分けて呉れた。これで始めて吾儕が南進の計畫は安全にされたので、住氏には深く感謝する次第である。

吾儕は久し振りで入つた廣い小舎を、珍らしく眺め廻はさずには居られなかつた。小舎は古いが其處ら中に積み重ねられた曲物や細かい材木の類ひが黄ろく光つて、内部は案外賑やかである。主人は棚から茶道具を下ろして取つときの茶を入れて呉れたが何處からか岩魚迄出して來て、圍爐裏で吾儕の爲めに焼いて呉れた。久しぶりで甘い食事をした。こゝは冬でも里へ下りずに軒上迄も積る雪の下に、人々の生活は續けられるのだといふ。これから下流にはまだ多くの小舎が建つてゐて百何十人といふ人が材木の伐出しやら曲物細工やらに従事してゐるのださうだ。尤も年によつて小舎の位置や人数に増減があるのは常であると。

指を折つて數へて見ると、上河内を立つた高頭、小島、高野三氏の一行が最早昨今この邊へ來られる日取である。その事はもう途中始終吾儕の噂してゐた事なので、どこかでヒョいと逢ふやうな氣迄してゐた。聞いて見るとまだ一行は此處へは來ないらしい、そこで我々の山行の經過やら何やら紙片へ書いて、小舎の主人に托しておいた。吾儕は勢よく又薬師峠指して馳せ上つた。十時十五分。十一時十六分には池の段、十二時廿分には薬師峠の留守番の處へ歸着した。この草の斜面ではチンマセキシヤウ、ニガナ、キンカウカ、モウセンゴケ、イハイテフ、コメツ、ジ、アヲノツガザクラ、キングルマ、ダイヤモンドサウ杯が見えた。歸るといきなり留守に誰か來たかと聞いたが、誰も來はしなかつた。そこで此處へも一行に向つて山行の概畧を記し、且つ今日之を見たらこの向ふの上ノ岳の麓に泊るから會ひ度いと棒杭に書いて建て、おいた。何れ一行は薬師澤から上つて來るものと假定して、成るべく眼につくやうに工夫もした。双眼鏡で木の蒼黒い谷間を物色したが動いてゐるものは熊一匹居なかつた。

少し休んで今夜の泊り場所を探り乍ら、南々東の上ノ岳指して上り氣味に進んで行くと、直きに澤状の窪地に出る、今こそ水は碌に無いが、上ノ岳の前峯から發して薬師澤に注ぐ一澤ではあらう。之に沿いて少し上ると小さな残雪の懸かつてゐる所へ出た。それから搾れた水がピチャピチャと悲しさうな音を立てゝはゐるが、流れる程ではない、いつか岩間に影は吸はれてしまふ。泊りはこゝと極まつた。側の樺の木が枝をさし出す下あたりに、天幕は樂に張られた。此窪地の一部分にはミヤマキンポウゲが群をなして嫋々と戦いでゐた。こゝからは山は何一つ見えない。眼の前の原の一端へ上ると東北に薬師からかけて黒岳が見える許りだ。今にもあれ、かの一行が草原を横切つて茲へ來るやうな氣がして、上つて見たのも幾度か知れない、誰か冗談に、あ、來た來たなどゝいつても、すぐに嘘にしてしまひ度く無かつた。こんな山の中で偶に來た人間同志が會へるなどゝいふことはありさうも思はれないが、又考へやうによつてはありさうにも思へる。一種の好奇心迄手傳つてくる。一つは薬師の頂上で思ひがけない南日君に逢つたので味を占めたものであらう。

十、上ノ岳及び赤城岳

卅日一三時にはもう眼が開いた。魂は夢の裡に抜け出していち夙く黒部五郎岳に迷ひ上つてゐるのである、鱗雲がうす紫に匂ふ下に、黒岳がほの暗く横たはつてゐる。原は一面に朝風がサワサワと青草の上を渡つて行くばかりで、昨日のやうに靜寂である。あの一行にもとうとう會へなかつたのだなと稍はつきり氣が付いた。幕營を撤して側に戦ぐミヤマキンポウゲの一もとをひそかに手打つて衣兜に收め、五時五十分こゝを見捨てた。

緩やかな草の斜面を南々西に向つて上ノ岳を志す、暫くして段々南に振れてくる。白山の姿を見付けた時には何んとなしに安心を覺えた。終に草山は窮まつて偃松の逆茂木が行手を遮ぎつてゐる。かなり長大なもので、嘗て始めてこの山へ登つた辻本君を、一方ならず苦しめた偃松である。氏の忠言に従つて右の方の雪溪目がけて、この針の山を抜き足で横切つた。偃松の斜面から溪の雪へは少し許りの崖をなして、嗜蔭性の青草がもやもやと茂つてゐる。(六時三十分)。雪は半町許りで盡きて又草山になる。雷鳥が一羽一行の先きに立つたが、殘忍な人間の手の及ばない先きに偃松の茂みへ隠れてしまつた。此處に至つて始めて頂上の三角櫓が間近く南々西に顯はれて來る。それに薬師峠から望む時この山の絶頂を蔽ひ隠くす支峯(といふ程でもないが)が今迄東の方の眺望を妨げてゐたのが、茲に至つて既に眼下になるので見渡しが大分利くやうになつた。急ぎ足に三角點へ着いたのが七時十分。

何よりも先づ眼の向ふ處は黒部五郎岳である。今更ながら壓迫を感じず程近い。山は驚く可き程根張りが廣く、ほの暗い黒部谷から性急に引き上げた一線は一折して齒のこぼれた鋸の様なギザギザを描き、この山の著しい特徴の一つなる、かの北方の大巖壁の頂を限つてゐる。そして双六谷から一氣にのし上がった他の斜線と觸れんとするや、一躍して特有の奇尖な峯頭を作り終るのである。雪も皆刺だらけな輪廓を曝らして痛々しい程岩膚に喰ひ込んでゐる。この斜面を見てみると何となく荒れた西の國の廢墟の壁が思ひ起される。双六谷の尾根が優しい姿をこの上に重ねる、動もすると霧を破つて穂高の鋭どい肩(岳川岳の一角?)が又その上に顯はれる。双六と蓮華との間に當り、飛び離れた雲の上に、海中の孤巖を見るやうに衝き立つた黑影は、槍ヶ岳の天邊であつた。笠ヶ岳

もかなり近いので、單に秀麗といはんには餘りにディテールが眼立ち過ぎる、黒部五郎に比べては論無しであるが。乗鞍と御岳とは夫々東西に裾を連ねて、胸を一抹の横雲に引はへてゐる。黒部五郎とこの山とを連ねる山脈は低く西よりに彎曲して、五ツ程の波の小うねりを擡げる許りである。其中での高い双峯が、蓋し、赤城岳の名を戴くべきものであらう。

一旦來た方を顧ると、藥師も恐ろしく兩翼を擴げて來た、之は頂上の南方から起つて黒部谷にのめり込んでゐる高い岩壁を、殆んど眞横から眺める爲めである、従て頂上は甚だ西寄りに顯はれてゐる。山容の尠大なことは同じ山の北面にも劣らない位であるが、それを統一する線は餘りに弱く、彼が如き氷雪に奢つた深大な縦谷の幾並びをば持つて居ないのは致方がない。藥師の西側からは劔、大鷲(?)大日の連嶺などが大波を捲き、又その右肩に當つて一尖峯が霧に滲んだり消えたりしてゐるのは、恐らく針木岳であらう、北から東にかけては赤牛、黒岳の大山壁が太い一文字を引く。黒岳の紫黒色の山腹には、無数の細い、深い、而して直線的に鋭どい皺を刻んでゐる。雪が少しも見えないのは元來此方面に少ないからではあるが、在つてもその底深く藏せられてゐるからであらう、頂上は獸の牙のやうに二叉に岐れて尖つてゐる。長壁が一旦仄かに背を沈ませる處から北は、自ら赤牛の山體であることは其暗赭色に變つて行くので分明である。峯頭はしかし、もう緩やかな双の高まりになつてしまひ、澤も餘程曲線を書いて柔かく、口元のタル澤を抱いて北面した、あの威嚇的な形容は、想像するさへ難かしく思はれる。この山には谷筋に白いものがチラチラ見えた。この兩山の間からは三ツ岳らしいのが額を伏せてゐる。雲の平は黒部の谷へ乗り出して奇抜なプラツトフォームを湛へてゐるが、縦に見る爲めか案外凹凸が甚だしい。その奥には黒岳に續いて赤岳(?)、赤岳の南に續く赤い双隆起、小鷲、鷲羽、蓮華の峯々が、この黒部の大峽流の源を繞つて立つてゐる。

三角點は三等、高距二六六一米と測られてある。その名稱は北俣岳。恰かも飛驒越中の國境に位してゐるのである。(藥師ヶ岳頂上より此上ノ岳に至る間は「山岳」六年一號卷頭辻本氏の紀行に委しい、同氏の直話と共に吾儕の受けた益は大なるもので、感謝に耐えない次第である、併せ讀まれんことを願ふ)。さらでも昏い黒部の源流は、今又雲を起して更に凄さを加へた、鷲が最先きに葬られやうとする。

七時四十五分に頂上を去つた。これより又頼るべき記録もない飛越の國境を、南東指して迎るのである。少しく下り氣味となつて、小さな峯を三ツ許り越す。廣い尾根は一面の矮草で、コケモゝとムシトリスミレが殊に多い。廿分許り費やすともう赤城岳の北の隆起(嚴密にいへば北西だが比較上)へ着くのである。何の奇もない、なだらかな、青草と偃松の峯頂である。茲でこの山の名に就き一言しなければならぬ。この山は恰かも地質調査所豫察四十萬に赤城山とある邊に當る、嘗て平の小舎で品右衛門に此の邊の山谷の事を種々聞いた間に、この名をも質した所が、彼に依るとアカキ澤といふ澤があつて黒部川へ落ちる、その頭は藥師へ出るか又は双六よりも下に出る、この名は稻核や島々の獵夫も呼んでゐるとの事である。今から考へると、その位置に關しては頗る疑があるが、兎に角前記四十萬の赤城山とはこの澤の頭に當るものらしく思はれる。茲に注意すべきはその發音がアカキと清むことである。參謀輯製廿萬には上ノ岳の南に横岳の名があるが之は農四十萬には遙か西寄りになつて居り、此方が正しいと信ずるから、多少位置に曖昧な處もあるが、姑らく

四十萬に據て赤城の名を用ひたのである。しかし赤城山では上州の有名な赤城山と擬ふ恐れもあり、且高距も上ノ岳（二六六一）と大同小異であらうと思はれるから、岳の稱を用ひても強ち不當でもあるまいと思つて赤城岳と呼んで置いたのである。

これから馬鞍の背を渡つて此山の南の峯へ出るのである。その間には山稜に沿つてその黒部の側に堤防状の雪が横たはつてゐる。南北兩峯の間は廿分を費やした。南峯は磊岩を偃松で以て綴つた、尖つた小山で、北峯よりは稍低いであらう。これから稍下りとなつてミヤマキンバイの群がり咲く草原を通る、此邊は斷續して黒部谷方面に緩やかな山稜に沿ふて残雪がある。やがて又一ツの小木標を持つた、さゝやかな峯頭に達する。もう吾儕の位置が大分低まつたので、當面偃松に鎧はれた小山の上から、黒部五郎岳は胸毛が觸れん許りにのしかゝつて來た。後ろは上ノ岳が低い。笠岳、白山、鷲などをも眺めた。又少し下ると雪解から程もないやうな沮洳の小平地へ出た、九時三分。ヤマウイキヤウ、タウヤクリンダウ、ミヤマダイコンサウ、チシマギキヤウなどがある。

一つ小さな峯を攀ち上る。頂は一面の偃松ばかり。直ぐに續いて又次の峯頭に出て、黒部五郎の峯腹に對し乍ら晝飯にした、十時。いつかうとうとしたらしい、眼を覺ましたのは十二時過ぎであつた。どうせ今夜は此巨人の裾の片隅へ假寝の床を借りるのであるから、氣がすっかり緩んだものらしい。ゆるゆる此處を出て岩の小峯を乗り越え、尾根の端の小山嘴（標木がある）を左りに下り切ると、廣い青草の原めいた尾根になる、この邊は既にもう黒部五郎岳の山足になつてゐるのである。自分の胸は怪しく躍つた。

十一、黒部五郎岳

此處、夫の巨人が西北に捌いた長衣の裾の一端、黒部に向つた低所にはかなりの殘雪があるのが途中からよく見えたので、ひそかに今夜の野營地に擬して來たのだが、行つて見ると水が乏しいので、又少し上つて見た。やはり尾根の左り下に淺い窪地が續き、雪田から集まる冷やかに澄んだ水が、青草に綴られた岩間をば隠れたり現はれたりして、銀のやうな音を立てゝゐる。その側には偃松の斜面があつて、平らな處としては無いが、上はもう恐ろしい破岩の瀑布が、逆落しに懸かつて居るので、此處へ宿ることにした。偃松の薄い處を少し切り開けて天幕を張る丈の場所は得られた。この近所ではミヤマリンダウ、ハクサンイチゲ、ミヤマキンバイ、ゴゼンタチバナ、チシマセキシヤウ、チングルマ、ニガナなどが咲いてゐた。

今やもう吾儕は久しく戀がれた山の、その裾の中に入つてしまつたのである。此處の眺望は、それ故廣くはないが、赤牛からかけて來し方の薬師ヶ岳、上ノ岳などが、特別の懐かしさを以て飽かず眺められたのである。薬師の大岳が黒部谷から湧きあがる闇に溶けてゆく時、暮合



黒岳

槍ヶ岳

穂高岳

笠ヶ岳



む望を南東りよ頭の谷井岩

三枝威之介氏撮影

の重い空気を揺がして大砲を放ったやうな音が續けざまに二三度響いた。かういふことに耳さとい山人共は、一様に、山鳴りだ々々々と何かを恐れるやうに囁やくのである。「山が鳴る」と後に天氣が變はるのが定であるさうだ。その正體の何であるかを予は知らない、況や天候との關係をやであるが、これはしかし不幸にして讖をなして翌日から續けて三日、山上に辛い晝夜を送らなければならなかつた。

卅一日一朝開の風は甚だ濕氣を帯びて、

氣味悪く膚を侵す。夏山の習ひで、先づ晴天でも眺望は朝の内丈けに限られ、晝頃からは深い霧が捲くのであるが、この數日は朝の晴れ間が一日一日と短くなり、霧の捲き方が段々と早くなる、凡そ一時間位宛の割合で進んで來たのである。それに今朝のは何となくどんよりとして、さらでも一足をこの戀がれ切つた山に投じて興奮の極にある所であるのに、又一倍氣を忙はしくさせた。天幕の跡片付や何かを又吉と春吉とに頼んで、兵三郎と三人驀らに磊岩の崩落する斜面を、息もつがずに攀ち登つた。五時四十五分。北東の空から白馬、鏝、朝日、西南から白山の雪が稻妻のやうに眦に忍び入る。赤裸々の山腹愈々急斜になつてからは、西寄りの、偃松が枝を延し合つた山稜に入つて、ひたすらに匍ひ登り、頭を擧げてそこに頂上の三角標を得た時には、安心に伴ふ疲勞をまかなりに感じたのである。

まだ六時十七分であるのに見渡す山々のあちこちには、はや、原生動物の様な雲が引掛つて、もやもやと手足を伸ばし始めてゐる、槍穂高が至高至大な岩の大舞臺を築き上げて、怪雲の幾群を其上に躍り狂ふに任せてゐるのが、先づ眼のあたり仰がれるのである。双六も蓮華も笠ヶ岳も驚、黒岳も、之に比べては遙かに下風を拜してゐる態が甚だ明かである。双六の影から笠ヶ岳への尾根が走り出てゐるが、笠ヶ岳プロバアへ接する前に、左程著しくはないが一つの峯を起してゐるのが覗はれる。之は二五八八米の三角點を有する（名稱中平）ものらしい。嘉門治は、嘗て先年私が上河内に遊んで一緒に燒岳へ行つた時、この峯を私の質問に應じて双六池ノ端岳と教へて呉れたことがあつた。笠ヶ岳は頂上からも、奥笠（小笠といふのと同物であらうか、之は頂上と高い尾根で連ねられてゐるかなり角度



高野賢藏氏撮影

岳郎五部黒るめ望りよ原ガベカ



の多い輪廓を持った峯で、此處からでは笠らしい形貌は備へてゐないが、遠く五色ヶ原から薬師以北では、多少大笠と似通つた形を呈した、前出の池ノ端岳へ向つては直角に近い、切り断つたやうな崖を剥き出してゐる) からも多く他に比類を見ないやうな、尨大な尾根を双六谷に向つて擴げてゐる。細かい谷に依て複雑な彫刻をされて居ないので、甚だ容積の大きな感がある。双六谷はこの黒部五郎と笠との裾合の、木山の間陥つて眞暗である。笠の右に頭を並べて乗鞍御岳が雲の上にある、流石に見一火山の類型を持つてゐるものゝ、乗鞍の輪廓や山皴の複雑多岐は、御岳の均齊に近いのと、又その辨柄色に熱を合んだのは、彼の比較的冷かなのとかなり著しい對照を現はしてゐる。雪は何れも甚だ少ない。南の空は北とちがつてカラリと晴れてゐる。

奥笠と穂高の岳川岳との間の狭い空の谷あひに、霞澤の一角を壓して遠い連山が雲かと擬ふ計りに横走するのが、赤石の連峯であるといふことを認め得た時には懐かしさに耐えなかつた。それは北から悪澤岳、魚無河内、西河内岳、赤石山、聖岳（これはこの中で最も怪しいものだが大概是さうであらうと思ふ）の峯々なのである。

それでは、後に考へると、前年赤石山脈縦斷の山行で、やはり時も間近の七月二十七日の朝、西河内岳の蔭の露营地を立つて赤石本岳に志す道すがら、山稜の頂上から北アルプスの大連嶺が蜷々と雲の海に浮ぶのを見て雀躍したのであつたが、その折穂高と笠との間から、僅かに尖頭を覗かしてゐたのはこの我が黒部五郎岳であつたのであらう。當時の手帳を探つてその一頁に鉛筆でなぐり書きのその山を見出した時は聯想に聯想を生んで懐かしさは更に募るのであつた。

思はず話しが「やまみち」深く外れ込んだが元へ戻つて、幸は之に止まらず笠ヶ岳の高い尾根に重なり合ふ木曾駒山脈をも覗ひ得たのである。焼岳はどうも見えないやうだ。今朝はあの大坂から烟一筋立たせてゐないのであらうか。

北の空は之に反して、又何たる陰さであらう。黒岳、赤牛は一様の灰色にされてしまつた。赤牛の右肩から針木岳、蓮華岳（或は南澤岳か、恐らくは前者であらう）が紫に閃めく、雲の平は、しかし、少しも雲が無く、だゞ廣い高原をダラダラと黒部谷へ流し込んでゐる。鷲羽は悠つ



たりと圓錐狀に整つた貌を示してゐるが、右の斜面には池を抱いてゐる態が明らかに認められる。そこを超えて鋸齒狀の峯の仄見えるのは燕岳、蛙岩^{グエロイハ}の連脈であらう。立山、劔岳等は一帯の暗雲に蔭つてしまひ、間近の薬師や上ノ岳さへもう沈んだ色に浸つてゐる。蓮華には絶えず、雲が狂つてゐる。常念らしいのが、その右肩からふつと顯はれたかと思ふと、搔き消えてしまつた。

親しくこの頂上に立て眺めると、益この山の比隣に類の無い奇狀を呈してゐるのが明らかになる。峯の大體の根張りは馬蹄形をなして、内にまるで火山の噴火口か或は絶大なカアルとでもいふやうな絶谷を抱いてゐるのである。この谷は丁度鷲と蓮華との間に向つて、眞ともに大口を開いてゐる。そして上顎に當る谷の上端には白齒のやうに、幾つかの小カアル形の雪を懸けてゐるのである。峯の雪水は集つて、谷底を白糸に纏れて、かの馬蹄形の一端北方の盛んな岩壁の鼻を迂曲して、末は遙かに深い黒部の谷に落ちるのであらう。蓮華へ連なる南の尾根は、之に較べては餘程低く、且殆んど蓮華とは縁が離れてしまふ程一旦低下するらしい。そこに三角櫓が一つ極めて寂しさうに立つてゐるのが見える。

頂上附近は一面の岩塊で（岩片の積り方は薬師の南面や極北の諸峯に見るやうな、モザイク狀をなす迄に敗滅を極めてはゐず、もつと自由に荒らかに、のさばつてゐたと記憶する）偃松がその上を縦横にのた打ち廻り、その間に僅かの矮草がつましましやかに色を點じて、甚だ高山頂の相を具備してゐる。植物は割合に少ないやうに思はれた。登り口から頂上へかけ見分け得たものは、チングルマ、アヲノツガザクラ、ハクサンイチゲ、チシマセキシヤウ、コケモ、ツガザクラ、ミヤマキンバイ、シナノキンバイ、ミヤマダイコンサウ、ミヤマタネツケバナ（？）ハクサンバウフウ（？）ミヤマリンダウ、イハカゴミ、ヒメクハガタ（？）位なものである。

三角點は三等、名稱は黒部と命ぜられ、高距は最近の調査二八四〇米を示してゐる。併しこの山が連嶺中の峯に似合はず、殆んど孤立に近い形貌を具へてゐるせいか、遠望上は甚だ高く見えるのである、或は實際も少し高いのではあるまいかとさへ思はれる。三角櫓は一脚を失ひ勁風に顛動してゐる。残つた柱にも細い裂痕のあるのは落雷の爲めらしい。北の峯角にも一ツ小さな風見形の測量標が建つてゐた。心が落つくと櫓の下に柱狀の自然石が二ツあるのが眼をひいた。よく見ると模糊たる墨痕が残つてゐるのには、聊か意外の感がしたのである。又それを辛うじて辿ると、一は〇〇山祇大神としか讀めないが、一方は「中之俣白山神社」とあるではないか。之には二人とも顔を見合はせた。この荒山にもさては祭神があつて、賽者もあるものと見える。しかし祠らしいものは終に見出すことが出来なかつた。中之俣とは無論双六谷のであらう。按ずるに飛驒の金木戸の方からでも登るものであらうかと思はれる。それにしても今祠もない所を見ると、其後登拜する者も絶えたのであらうか。兎に角、双六谷からこの山への登路は、歴史的にも、地理的にも、甚だ興味の饒いことゝ信ずる。

此山は従來北アルプスの中でも最不遇の山であつた、日本山岳志にも見えない。紀行の中にも最近迄は殆んど顯はれたことがなかつたやうだ。參謀輯製廿萬には、この邊と思はれる所に高辻山の名が記されてあるが、之は同圖の横岳と共に農商務豫察四十萬の位置の方が正しいと認めるから取らず、後圖には明らかにこの邊に五郎岳と記名されてある。蓋し五郎岳とは古い山人の稱呼で、野口の五郎と區別する爲め黒部の稱を冠させたものらしくさう信ずべき理由がある。前に薬師の眺望

の折一言した如く、自分は始めてこの名を老山雄嘉門治から聞いて心が躍つたのを覚えてゐる。

嘗て志村氏が始めて烏帽子の連嶺を縦走して鷲羽岳に達した時、そこで笠ヶ岳に就て類藏と争つたことは三年二號十八頁に出てゐるが、その類藏が指して笠ヶ岳と主張したものは、推察するに恐らくはこの黒部五郎岳に外なるまいかと考へられる。今その笠ヶ岳と類藏の主張した山に就て志村氏の記述する所を該紀行から抄出すると、

『鷲羽岳の西南深谷を隔てゝ一大連脈あり。残雪非常に多く、峯頭廣くして、何等の奇趣なしと雖も、亦一名山たるを失はず。(中略)今白雲に蔽はれて、見るよしもなけれど、笠ヶ岳は、此連脈の彼方にあり。曾て立山の絶頂より、或は槍ヶ岳の山巔、遙かに望みし笠ヶ岳は、其の形容の端正なる秀峯、今目前に、見るものゝ如きものにあらず(中略)笠ヶ岳は、如斯不格構のものにあらず』。

聊か腑に落ちない所もあり、或は蓮華、双六の連嶺ではないかとも思はれるが、而かも猶此の山と見當のつかない事もまた無いのである。

兎に角此の山と笠ヶ岳とは多少の類型を持つてゐるにせよ、彼は形容單一にして整齊、之はその複雑にして不均齊を極めて居ることは争はれない。前に標高の處でも言つた通り、連嶺中の山は往々にして高さは高い乍ら、比隣の峯との關係上、境域が曖昧であつて、嶄然頭を抜くことが出來ず、徒らに大連嶺を形造るためのみじめな犠牲になつてしまつて、一個の山岳としては總てが甚だ貧しく、一言に言へば個性を失なつた態があるのに比べて、此黒部五郎岳は、連嶺中に位しながら、連嶺の約束に囚はれず、立派に自らの個性を發揮した天才の倂がある。自分はこの山が實に好きで耐まらないのである。(自分が南アルプスの多くの山々が好きな理由の一つも茲にある)。序であるが「山岳」五年一號廿四頁に面した石崎氏の寫眞中、薬師岳と笠ヶ岳との間に顯はれてゐるのは此の山である。

若し此の山の地質上の問題に至つては、吾儕は一言を挾むことが出來ぬのである。唯、種々な變化を呈してはゐるものゝ大體の山容は圓錐形に近く、直ぐ氣のつく素人觀では、如何にも火山を聯想するのであるが、之は唯それ丈けの事で、その外貌が四隣の山に比して種々特異な印象を與へるので、地質的にも研究の興味頗る饒かではあるまいかと、私かに臆測する許りである。

日頃の望みは斯くて得られた。三角櫓の下に跼まつた吾儕は、しかし、急には動きさうにもしなかつたが、見る見る中に双六谷から蓬々と、風に乗つて捲き昇つた大霧は瞬間に、四邊をば混沌たる灰白の界に化してしまつたのである。今はもう去るべき時であらう。思ひ切つて此處を離れたのが八時十七分。霧の底に四葉鹽竈が獨り華やかな色彩を残してゐる。ツマトリサウ、ミネズワウ、ゴゼンタチバナ、ウラジロタデ(?) ヤマゼンコ(?) などもある。頂上から南々東を指して岩の斜面を下ると、測量杭のある峯端へ出る。所がこの尾根は中央の大谷へ向つて盡きてしまふことが解つたので、更に南方に尾根を求めて切り明けを得たから之を南東指して傳ひ下る。一帶の山稜には巨岩が算を亂して累なり合ひ、衝き合ひ、偃松が其周りを絡み合つてゐる。山稜の北側には、中央の絶谷に向つて處々、かなりの残雪がカアル状を爲して危ふく懸かつてゐた。風物何となく穩やかならず、霧を驅つて偃松に鳴る風の音が凄ましい。或處は北側の谷沿ひに恐ろしく大岩が人立してゐた。霧にほうけ切つた双六谷の底から、杜鵑が一聲叫んだ。霧の球は大粒になつて來た。岳雀

が忙たゞしく鳴き騒ぐ。少し偃松と矮草が多くなつたかと思ふと（タウヤクリンダウ、ハクサンイチゲ、ヒメイチゲ、ミツバワウレン、チングルマなど）又巨岩のヌクヌクと衝き立つた尾根を乗り越す。この邊で、とある偃松の根方から澤山の蟻が顯はれた。思ひもかけぬ人間の足に、自分達の巢を踏み荒らされて狼狽を極めて居るらしい。予はその數頭を齎らし歸つたが、後に矢野理學士に依て、それが我國に所産を知られてゐない種であることがわかつた。まだ詳細の調べはつかぬさうだが、何れ發表の機があることゝ楽しんでゐる。次で立烏帽子形に尖つた一岩峰と、も一つ些やかな岩山との、各左側を通り越すと、漸くにして坦々たる廣い草尾根に吐き出される。バイケイサウやチングルマ、アヲノツガザクラなどが多い。間もなく、上から見下ろした三等三角點に下り着いたのが九時四十三分。高距二五一九米、名稱西又。

此處を立ち出ると直ちに、一面の大雪田に逢着した。切り明けはその左側の、偃松の海の中を通じて居る。此の邊晴れたらどうであらうか、霧に遠巻きにされた今は、尾根といふよりは見る限りの廣い原といふ方が、ほんとうらしく思はれる。それでも少し下ると、今の雪田から流れ出す小澤が草間に土の段を作つて、淀んだり流れたりして行く。岳樺や唐檜の大きいのがあちこちと霧の中から顯はれ始めた。稍急な灌木の斜面を下り切ると、吾儕は中々廣い一個の高原の中へ立つことになつたのである。（十時十八分）。

眞向ふは更に木立の多い、急な山側になつてゐる、察するところ之が蓮華の西北へ引いた山脚の極處に違ひない。然らばこの高原一といつても尾根の延び方と反對に、寧ろ南北に長く、東西兩壁が高いから「切り通し」といふものに似てゐる一は丁度、黒部五郎岳と蓮華岳との結節點になつてゐるわけだ。原の中央にさゝやかな標木が建てゝあつて、

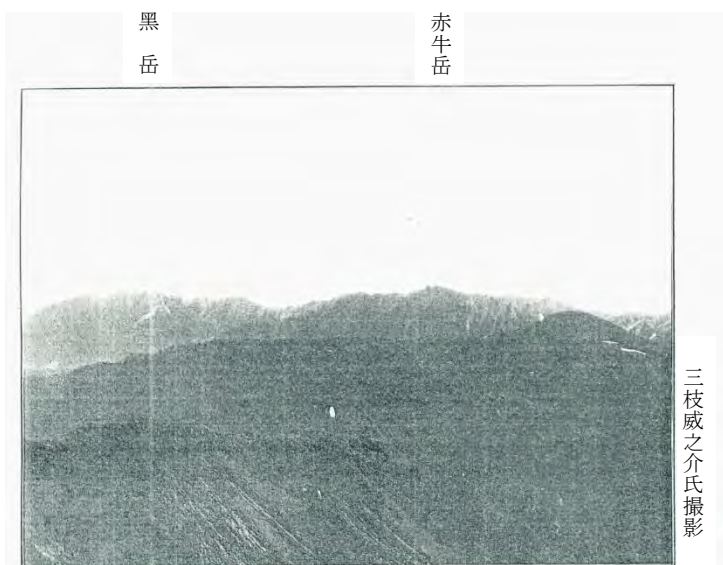
字西又谷（峯○分界）、左越中國、
境界査定官吏井上樽吉建之、

と讀まれた。西又谷（先刻通つた三角點の名も西又である）とは双六谷の一支流であらうか。思ふに此處は双六谷と黒部谷の間の獵夫漁夫などの往きかふ乗越ではあるまいか。又双六谷方面から黒部五郎岳へ登るのは、或はこの邊へ出て來るのではあるまいか。V字に劃された双六谷も、黒部谷も、雲と霧の亂舞を見る許りである。原は一面の青さで、イハイテフ、バイケイサウなどが水分

をたつぷり合んでゐる。偃松も中々ある。そして原の中程には幾つかの小池が青草を浸して湛へてゐた。餘り適當ではないが、吾儕は之を黒部平、黒部の池等と呼んでおかう。

十二、蓮華岳及び双六岳

蓮華の尾には、中邊に切り明けらしいものが、急ではあるが付いてゐるのを見出したので、之に入つて、迂り乍ら樺や唐檜の枝などに頼つて、登り始める。（十



む望を岳牛赤及岳黒りよ岳郎五部黒

時卅分)。山櫻かと思ふ樹が既に實つて、棗に似て細長い實をほんのりと紅らませてゐる。オホヘウタンボクが薄白い異形な花を暗い葉蔭に光らせる。ヂメヂメした山膚にはユキザヽが茂つてゐた。偃松の大きいのが混り始める。雑木の暗を匂ひ出ると、陰つた日でも眩ゆい位である。もう偃松と小笹の斜面で、少し登ると小杭があつて、卅七年八月十一日と書いてある。此處で晝食を済ませた。十一時。

卅分許り憩ふて又程を進める、稍東北指して行くと、双六谷の側に大きな残雪がある、その末は舞ひ昇る霧に溶け合つて見えない、双六谷の水音が白濛々の裡から、地響を打たして聞えてくる。この雪の近くには、奇怪なスフィンクスのやうな形の岩があつた。七八八と記した杭もある。十一時五十分には、偃松に蔽はれた岩だらけの小隆起に達した。今度は黒部の瀬音が陰々と唸つてゐる。左手にも小隆起があるが、之は黒部谷へ派出された小尾根らしい。右のが主脈である。此處は、双六谷方面は賽の河原とでもいひさうな處で、なだらかな薙の面には近頃迄雪が残つてゐたらしい、海草のやうな枯草の側に、チングルマや、アヲノツガザクラや、イハカヽミなどが咲く。小雨が絶えず狂はしい風に吹き廻されて襲つて来る。緩やかな登り許りで、杭が處々にある。(その一つ七八二號など)。稍高い一峯に出ると、東方に向つて雪を持つた薙がある。直きに一隆起へ上る、ミヤマダイコンサウ、キングルマ、ミツバウレン、ウラジロタデ(?) ツマトリサウ、ゴゼンタチバナ、マヒヅルサウ、クロウスゴ、ツマトリサウ、ヨツバシホガマ、ミヤマリンダウ、ハクサンイチゲ、アヲノツガザクラ、コガネイチゴ(?)などがこのあたりに見えた。

此の邊一帶の山稜は右が緩斜で偃松が叢生し、左は切り明けを残して直ちに赭黒く薙ぎ落ち、斷續して雪が堤防状に懸つてゐる。その末は霧がムクムクと湧き返つてやはり白い。この地形

はもう蓮華の本岳へ掛つてゐるといふことを確かめさせるのである。イハツメクサやダイモンヂサウがぬれそぼちて痛々しい。暫らくにして傾斜が稍急になり、東を指すやうになつて、中々高いらしい一岩峯に上つたのが十二時四十三分。杭がある。之を越して又東を指して尾根を行くと、今度は段々南へ振れて来る。左手の薙には又大きな残雪が白く畑つてゐる。身體が大分冷えて来た。

査七六三と書いた杭を見て、一つの隆起を越え、少し北向きに進むと霧の中から三角櫓が出て来た、三等である、一時五分。尾根茲に窮つて、更に右に走るらしい、左の斜面は總て急で、霧の海の底に消えてしまふ。之は察した通り、蓮華岳の頂上であることが後には解つたが(即ち高距二八四一米、三角點名三ツ又)この時は半信半疑であつた。三角點附近には東向きの崖側に残雪があつて、その邊から處々に新らしい大きな人間の足跡がある。之は例の一行のであらうと推察した(之



乗鞍 御嶽

三枝威之介氏撮影

む望を岳ヶ笠りよ岳郎五部黒

は果してさうであつた)。此處でも藥師のと同種の蝶を獲た。タカネウスユキサウが寂しさうに咲く。雷鳥が霧の中を高い霧をして舞ひあるく。此處は兎に角高處ではあり、且雨中甚だ惡寒を覺えるので、凹地でもと思つて少し南進して見たが中々無い。止むを得ず又戻り、三角點附近を物色して、その間近の南方に、測量員でも泊つた跡らしく、偃松の枯枝が少し布いてある處があつたので、遂に是非なくこの曝露した山頂の一部に天幕を張つた。岩又岩で天幕は裾の杭が打ち込めず、大石を寄せて之に縛りつけ、又は裾へ石を置いたりして、不完全極まる情けない山上の假寢の床は成つた。雨は作業半ばから愈勢を増して、風に乗じて横さまに天幕の腹へ打ち當り、ハタハタと絶えず物悲しい音を立てさせる。

八月一日一風雨は長い夜を通じて吹き狂ひ、日を變へても中々止みさうな氣色も見えない。大きなものが息をする様に、天地が稍明るみを潮して雨が小歇みになるかと思ふと、忽ち物を締めるやうな暗さが何処ともなく襲つて來て、風に乗つた雨が峯を擦つて降り荒れる。岩間に溜まつた水は蘚を浸して來た。天幕の鳴る音がハタハタと絶えず續くが、天氣のいい時と違つて、村の鎮守の祭りに大幟が奏し出す音樂に似てゐるものゝ、時といひ處といひ肅殺の氣をば充分に合んだものであつた。

午前は、しかし、まだ雨も間歇的であつたが、午後になつては更に一倍の連續を以て暴威を振つた。皆でこれからの行程に就て、種々協議しないではゐられなかつた。一つは未だこの場所が何處と斷定出來ないのが甚だ心許ないのである。凡てが暗いのである。米も最早残り少ない。今日は勞働しないから二度に減食した。すくむやうにして又一日は過ぎた。

二日一そのまゝ夜は更けたらしい。青い光りが頻りに天幕を透して鋭どく射し込んで來るので、眼は冴え返る。時は午前一時であつた。雨はいつか餘程鎮まつて來たやうだ。時が甚だ長い。そのうちに、三時過から極めて仄かに始まつた雷鳴は、段々と大きな響を持つて來た。一同は憐れにも之を晴天の兆だといつて寧ろ喜ぶ始末である。天幕から幾度顔を出したか知れないが、五時半であつた、南東の空に槍ヶ岳の影法師がふうつと霧の中へ映し出された、鎌尾根の一部も微かに覗へたのである。之は極めて瞬間の異常な觀物に過ぎなかつたが、一同に或る力を與へるには充分であつた。今一行の居る場所に就て山人等は早くも多少のヒントを得たらしく、こゝはモミ澤の頭だといふことに一致したらしい(併し後考によれば此處は蓮華の頂上故、嚴密に云へばモミ澤の頭より少し北方に當るのであるが)。

けれども期待した如く風雨は早く収まらない、雷鳴も少し遠のいたかと思ふと、忽ち間近に聞えるので、一同の少し宛生じかゝる希望は、充分生長しない中に、夙く既に打ち破られるのである。そのうちにキラリと射した稲光りは異様に赤味を含んだと思ふと、金屬の大鐘でも落としたやうな、寧ろ軽い音響が痛みを感じずやうに鳴つた。(五時四十五分)。一同極めて暫らくは口も利かなかつたが、後で兵三郎と春吉とは圓い火の球が眞直ぐに降つてふうつと横に走るのを見たと思つて言つた。吾儕と又吉とは天幕の蔭でそれは見なかつたが何でも間近に落雷したものらしい。三角櫓かとも思つたが後に考へるとそれでは餘り近過ぎるであらう。それからは併し、雷鳴は甚だ稀になつた、而かも困る事には風雨はまだ決して歇む様子が見えないのである。

吾儕が先進の望みは絶ゆるに垂としてゐる。米はもう餘す所僅かに一升二合には過ぎない。數日

來の路を逆に返へして有峯に下らうといふ議が餘程勢を得たのは、怪しむに足りまい。しかし之とて決して容易い仕事ではない事勿論である。思ふに鎌尾根から槍へ出て梓川へ下るのも、距離から言つて左程ではあるまい、併し一行の各が一人として生路でない者はないのが實行難を嘆ずる大なる原因である。風雨の荒れ廻る音を聞くと誰の足も躊躇するのは餘義ない次第ではあるが。心に妙な一種の鎮まりを感じずるやうな幾時かゞ立つうち、風は依然として勁いが、雨の量は著しく減じて、霧の大粒がサツサツと天幕を打つのと代はつた。吾儕の心の裡でかなり久しく醸されて、しかも風雨の爲めに外に露はれる機會を見出すことを制せられ制せられしてゐた望み―最後の方を出して不知案内の山稜を突切つて上河内を志すといふ―が此聊かの外界に生じた變化に乗じたらしく、微妙な一致を以て皆の口から迸り出た。最も強く有峯逆戻を主張してゐた兵三郎の口からさへそれが叫ばれたのは、大に心強く思はせた。さうなると妙なもので、何か大きなるものに必ずさうしなければならぬと暗示されたやうに、行くといふことが定まつてしまつてゐた事の如くなつて、皆一時に立つて匆々に荷を纏め、この恐ろしい旅寢の床を逃げるやうに見捨てた、八時五分である。(之から鎌尾根へ掛けては先行諸氏の紀行に出てゐる所であるが行きがより上再記することを許され度い)。

暫らく尾根を傳つて、東向きに屋の棟状をなした雪の上を、南を指して程を進めた。雷鳥が幾羽か群れて舞ひ歩くが、誰も餘り眼をくれなかつた。稍暫らくして今朝瞥見した、この山脈の高瀬川方面の中段ともいふべき部分へ道を來めやうとして、尾根の切り明けを離れ、急な雪田の南側を薙いだ石溪に沿ふて下つたが、三町程も下つたと思ふ頃、まだ平らしいものに出ない、少し形勢が變だと氣付いた時、南方の霧の隙に、熟した荔枝の口を開いたやうな赤黄ろい大崩が斜めに、唯それ丈け、ポツと顯はれた。私は何のことゝ知らず胸騒ぎがした。よく感ずる何かの凶事を前表するものゝ一つに、不圖思ひ合はせたものらしい。人夫は口々に、そりや硫黄澤の崩れた、下り過ぎたのだと罵り騒ぐ。逐はれるやうに又尾根へ戻り始める、さうより外に術は無いのである。下つたのより少し南の急な石溪を懸命に上り、偃松の山側を越えて、尾根の測量道へとつて返へしたのが九時廿分。勿論前に捨てた地點よりは南に來てゐるのである。稍南行すると小高い、偃松を被むつた隆起の上に杭があり、その少し下にも杭があつて、之を見通して東寄りに尾根を探り出し、切り明けを見付けて又南進した。

これからは多くは尾根の東側、高瀬川に面した方を辿り、草原を過ぎると小高い峯の東側を掠める、蓮華の南峯であらう。以後段々足指仰ぎ、尾根は漸く尨大になる。後に高野氏の所謂「上双六平」とはこの附近であらうと考へる。眞南を向いて稍急な登りとなり、石の堆積した斜面になると、卅七年八月十日と記した小標木があつて、又少しく東南に轉ずる。と右に三角標が朧ろに現はれたが、そこへ上つて見ると(九時五十五分)二等三角標であつた。双六岳であらうと見當をつけたが之は當つてゐた。高距二八六〇米、中俣岳三角點。柱は四本共生新らしい裂痕が口を開いてゐる、落雷の爲めらしい。此處から南に僅か下ると、廣い尾根に破片岩がモザイクのやうに布いて(恰度針木蓮華の頂に似てゐる)緑の岳草が沙漠の緑地を見る如く、處々に團落をなしてゐる處を行くのである。雷鳥がその間を、あちこちと霧にまぎれて舞ひあるく。測量杭が霧の取り巻く眼界の恰も端位みに顯はれて、うまく一行を導いて呉れる。暫くして杭に従つて東に轉ずる、之は双六岳から、

南、双六谷方面へ出てゐる大きな尾根へ迷ひ入らない爲めである。偃松を切り明けた急な逆落しの下りとなり、少しく東微北を指すと、下り切つた所は雪があり、石が轉々して、偃松に依て四方を圍らされた棚状の小窪地である、十時廿分。

偃松は段々深くなつて切り明けは續いてゐない、下を見ると一面の蒼黒い偃松の海である、少しく惑つたあと、左を取つて深い偃松に没したが、猶左手に草の斜面が見透かせたので、そこへ下つて行くと、折から行手、東南方の霧はむらむらと湧き揚がつて、高瀬川が東に流れ（後考によると湯俣の一部らしい）鎌尾根の一端が残雪を群らがらせて、高く颯がつてゐる、恰かも夢中のに似た景色を現じた。東北に大きな澤が見えたのを兵三郎たちに尋ねると、カラ谷、（東寄り）ワリモノ（北寄り）と教へられた。鎌尾根の突端に向つて小さな澤状の處を下る、その信濃金梅の色は眼の底に強く残つてゐる。右に登つて偃松を横切り、鎌尾根續きの低い山背へ、切り明けを見付けて攀ち上る。兵三郎等は先刻の澤と思ひ合はせて、之は飛驒の魚釣の通路であらうなどゝいつた（彼等はこの高瀬の入りはかなりよく心得てゐるらしい）。尾根へ出るとそこは廣い偃斜地で、直ぐ南に池があつた。十時五十分。此處が双六平で、それが双六ノ池といふことは、かなり確かに信ぜられたのである。池の上を見ると、今下つて來た尾根はこの方面に偃松が薄かつた。

十三、西鎌尾根

一體この山脈は嘉門治等に依つて鎌尾根と呼ばれてゐるのだが、鎌尾根といふ意味は、元來、銳どい山稜を指すのであるから、同じく槍から大天井へ連なる尾根も此兄弟と見て宜いと思はれたので、例の地圖を作る時、辻村氏と二人相談して、この二つを夫れぞれ東西の字を冠して呼んだのである。この連嶺に就ては、前に辻村氏の紀行及直話を頭に収めてあつたので、大に便宜と安心とを得たことを同氏に謝するのである。

登り口には、下つた人の足跡が斑々と残つてゐた、之も一行のであらうと心強い。霧が少し退くと、水俣、湯の合尾根らしいのが赤く兀げて、脅やかす様に光る。急な上りとなつて西方に笠ヶ岳への尾根が、薄鼠色に残雪の白紋をつけて、雲の中へ走り入るのを見た。二度許り一寸した上り下りをする、笠ヶ岳へ續く尾根の分岐點を通る。「信濃國………」と書いた標木が立てゝある。直きに際立つて細い尾根に房々と草の茂つた處に行く。左に一澤が見下ろせるが、モミ澤のうちであるらしい。一上一下暫らくする、之が小島氏の所謂樅澤岳であらうと後に考へる。次で急な一峯にかゝる、ザクザクの岩砂が深い斜面を、飛驒領の腹にからむ。草が砂の中に叢生してゐた。そのうちにオヤマノエンドウやシコタンサウなどがあつたと記憶する。之は後考によると小島氏の所謂前樅澤岳であるらしい。此處を横切り終つたのが十二時。嘉門治の金米糖坂といふのはこの途中であらう。草が丈け長く、トリカブトの紫が色彩に餓えた眼に強く映つた。ハイノジヤウの野陣場とはこの邊であらう。窪地があつて、岩の間に穴がある。此處を過ぎて残雪を下ると、其下が小池をなし、之を挟んで尾根が二重になつてゐるやうな所へ出る。之も嘗て、六年一號、後立山連峯縦斷記、十八、十九頁に記された、雪濠の一種であるらしく思はれる。そして濠と迄は行かないでも蓮華、双六間の棚状の雪、又以南此鎌尾根にも見られるそれ等（高山深谷第二輯、）高野氏印畫「雪と人」の残雪はその一つであらう）も、やはりこの雪濠の地形に關係があるらしく、或はその前身ではあ

るまいかと思はれるのである、従て又所謂カアルの地形にも関係があるらしく思はれてならないのである。

その兩尾根のうち、高瀬寄りの圓い尾根を上つて、小高い處に出ると尾根が茲に二岐する、左りの方のものは几げて先きに霞の中から高い尾根が續く様に見えるので危ふく進みかゝつたが、磊岩の海老殻色で硫黄岳と悟り、引返して右の偃松縦横の三尖をなした鋭どい山稜に入る。行く行く、赤い崩れを二度越す、始めのは左下に俯瞰して過ぎ、二度目のはその上端を横切るのである。この邊が辻村氏の紀行に所謂大煎餅坂かも知れない。十二時四十分偃松を踏み分けて三角點を過ぎる。櫓は一足を失なつてゐた。二六七四米、名稱左俣岳、直ちに急な磊石のひた下りになる。此處が辻村氏の紀行に見えた所謂小煎餅坂なることは疑ふ餘地がなかつた。併し小島氏は（日本アルプス第二巻で）之を煎餅坂とし、辻村氏の所謂大煎餅坂を却て小煎餅坂とせられたやうである。併し大體これ等の地名は嘉門治がつけたのかどうか知らないが、地名として餘り面白いものではないし、こんな事を穿鑿するのは餘計なことだが、自分が餘り夢中で歩いたので、少し記憶の順を立てやうと思つたら、こんな差違が偶然目についたから一寸書き添へた迄である。之も畢竟霧に閉ぢられて、眼を樂しませる眺望が無かつたせいであらう。

又上りとなつて偃松の中に圓形の凹地がある所を見出した（一時五分）。未だ新らしい鐘詰の空殻やら足袋やら草鞋やら、生々しい紙片やが捨てられてあるのが、周圍の凡てと不調和に、いかにも汚らしい。人間臭い氣があたりを生ぬるく漂つてゐるやうな氣がした。しかし山神はぢきにこれ等の醜穢な物をも、その聖い吐息を以て純なる原性に還してしまふであらう。こゝは後に聞くと、やはり夫の一行が泊つた跡であつた。これより上、左は高瀬へ向つて一面の殘雪で、黒紫色の岩が筍形にボツボツと突立つてゐるのが、妙に寂しい印象を與へた。こゝは千丁の頭であらう。この邊に小さな草原があつて、ゴオトの野陣場といふのださうだが、何處とも氣がつかずに過ぎた。左手高瀬の谷合に稍遠く、赤兀の一峯が瞰下ろせたが、兵三郎は之を赤ピンカだといつて、嘗て一年彼が其處で大猪を打留めた時の記憶を樂しさうに引出しては喋舌るので、暫らくはまぎれて進んだ。

この山は今無論硫黄岳（二五七四米）だと思ふ。尾根は此邊から著るしく巖の部分を増す、稍南西に曲ると小さい峯を越える。そして一個所、山稜が雷光形を描いて、徑は自ら小さなガツプを通つて、高瀬川方面から蒲田谷向きへ入るやうな處があつた。（二時）。風が俄かに強く吹き當てゝ、この惡路は糧道を扼された今の吾儕にとっては、かなり



高野鷹藏氏撮影

（望所腹中岳羽鷲） 岳郎五部黒

應へたのである。辨當は用意してあつたが、兵三郎の忠言で食ふのはよした。それは止まつて食つてなぞ居たら、火が充分焚けないから、凍える恐れがあるといふのである。又一時緩やかな尾根となつて、左に草青く、雪白い床しい澤が見下ろせたが、天上澤のうちであらう。この途中で大きな樽の轉がつてゐるのを見付けた、まだ新しい。兵三郎は忌々しさうに「越中の野郎共（獵夫を指す）：こんな所で酒を飲んだもんだ」などゝ呟やいたが安ぞ知らん、之も夫の一行が東京から態々この山上迄、落して兎に甜めさせる爲めに、遙々運んで來た醤油であつたさうだ。

霧は益深くなり、尾根は又漸く凹凸を増す、もう槍裏であらう。冷氣の甚だしいので餘程の高處へ來たことが解かる。やがて飛驒乗越（槍の南肩の更に少し南方）らしい鞍部が仰がれた。蒲田谷を隔てゝ、笠ヶ岳の雪を浴びた連脈が通り雲のやうに、霧の中に出て又消えた。之字形の足痕を拾つて乗越に登つた、見下ろす谷間には一面に白い物が横たはり、澤は東南指して走るのである。まだ此時は半信半疑で或は槍よりはまだ北に居るので、これは高瀬の水俣のうちではあるまいかと鬼胎を抱いたのである。澤が南を指すのと、兵三郎が足痕を探して受合ふので梓川と極めて下つたが、残雪は先年槍登山の時に比し甚だ多いやうであつた、併し行手の空に赤澤山と常念の姿が仄見え、坊主小舎が谷の側に見出せた時にこそ眞に吾儕は救はれたのであつた。残雪を下り切つて澤が一旦更に南へ曲らうとする前、左岸に少し許りの、草に蔽はれた岩原を作る。そこへ荷を下ろした春吉の顔は、泥色に濁つて、萎びた眼が前進の覺束なさを訴へるやうだ。この地がまだ高く、下にはいゝ草原が見えてゐるけれど、もうこの上進まうと言ふ勇氣は吾儕には出なかつた。雨が一しきり來たが、大きな火が久しぶりで焚かれて、衣服も久し振りに乾た。この一夜は前數日の夜に比べて如何に賑やかだつたことであらう。

三日一もう書くべきことは終つた。この日が晴れてはゐたが雲の多い日で、行く行く河原で坐眠をしたり、放牧の牛馬の慕ひ寄るものにも、細い白樺の幹の膚がうす光るのにも、木の間の草の花にウスバシロテフの顫へてゐるのにも、再生の喜びを以て對しながら、悠々歩を拾つて、一時は幻の國の景色と思ひ浮べた上河内温泉の建物を目のあたり見出した時、そして其處で山川、辻村二君に久しく耳に遠かつた懐かしい言葉で迎へられた時には、全く嬉しさに得耐えず、そして、しみじみと人間の弱さを感じたことを附加さして貰へれば寧ろ過分の幸ひである。（完）

附記

六年一號所載の當紀行上編中、四十九頁の越中澤岳の項で、鯉鮒岳を地質調査所地圖歐字のものに據てコイフナと訓する由を記したが、之は當時記憶をそのまま記したので、後で山川兄から注意されて廿萬歐文を見たところが、この山名は廿萬和文に出てゐながら歐文のには出てゐないことが解かつた。尤も四十萬の歐文は其後まだ見る機がなかつたが、或はどうも何か自分の思ひ違へてゐたことではないかと危ぶんでゐる。さうであつたら讀者には甚だ濟まない次第である一言茲で辨じる。

次に御詫をしなければならないのは、例の日本北アルプス一部臆測圖が當紀行の前編と一緒に出てゐながら、續編が自分の怠慢の爲めに遅れたので、この部分で新名や何かを明らかにしやうと思つてゐたことが時機を失して、或は看者諸氏を惑はすやうなこともやりはしまいかといふことであ

る。それで遅ればせながらあの地圖の獨斷的な新名や何かで、紀行の中に言及しなかつた分に就き、一寸述べて置き度く思ふ。

後立山々脈で、七倉岳とあるものは大出の遠山家で尋ねた時も、山上で兵三郎に聞いた時も、どうも定まつた稱呼がなく、北葛ノ頭、乗鞍岳、大白澤ノ頭、七倉ノ頭などゝも種々に呼ばれてゐるやうであつた。乗鞍岳といふわけは大出の方から見ると（大出から計りさう見えるのではないが）頭が際どく二ツに見えるからであるさうだが、遠山家の人々に依ると舟窪の頭と七倉ノ頭（即ち北葛ノ頭）とが重なつてさう見えるのだといふけれども、之は諸處の異なつた方向から見て餘り此山の山容に變化がない處から推して、ちと肯がはれぬのである。それで兎に角名稱は地圖に載せる際、便宜上最も宜ささうな七倉を用ひ、高さや形容から岳の名を付してもいゝと思つたので七倉岳として置いたのである。尤も農商務廿萬には、この邊かと思はれる處（稍北に寄り過ぎてはゐるが）に小白澤岳の名があるが、大出あたりではこの名を稱することはないらしい。

不動堀澤の頭以南、舟窪ノ頭、不動岳、南澤岳等の名も至つて無責任なものであつて、一體この邊の峯の低くて複雑した外貌は一見中々判定がつかぬのである。兵三郎に山を指して尋ねてもとても確かとした名は得られなかつた。尤も固より彼等山人は、そんな細かい處に小面倒な幾つもの名を定めて、それを大切に守るなどいふ必要を見ないのであるから。それで前二者は怪しい乍ら兵三郎の言をそのまゝ、後二者は私が勝手に兵三郎の言を材料に岳名を僭稱したのである。乗越の名亦然りで、彼等山人は北葛乗越を除いては何々乗越といふ風に定められた名は決して呼んでゐなかつたのである。それ故あゝいふ風に書いて置いたものゝ、實際彼等の慣用する稱呼とは一致しないかも計り難い。この邊一帶私の不案内の處だから追て材料が集まり次第訂正を屢しなければならぬと思つてゐる。

三ツ岳はその名の由來を知らないから何とも云へないが、嘗て大天井から望んだ時も、此山行で針木附近や五色ヶ原連嶺から見た時も、峯は三ツ許り（無論小さいのはもつとあるやうだが）を數へ得た、大きい山だと思ふ。それで地圖には三角點の處計りを指すやうに見えるがも少し南方迄、書いた當時含ませる心持であつたのである。

次に鷲羽岳の北にその一支峯ともいふ可き峯があつて、志村氏に依て始めて小鷲と呼ばれた事は、三年二號に發表されてあるが、之は大天井の絶巔や、この山行の諸處から明らかに認められた、峯頂の黒ずんだ一尖峯であるらしい。之を地圖に現はさん爲め、鷲のすぐ北に、二八〇〇米の一線が原圖には描いてあつたのであるが、急いだ爲校正の際粗漏にも落としてしまつたことを、後に至つて發見したから、茲に追加する。

西鎌尾根では、小島氏に依て前樅澤岳といふ名も發表された、之は地圖に無い。其他この邊は悪い所を處々に發見したから、更に訂正を重ねることを要する。

此稿を終つてから七年一號は發行せられ、榎谷氏が實査に基づく有力な新説が續々發表せられて、あの粗末な地圖にも色々と是正の勞を吝まれなかつたのは、甚だ感謝に耐えない所である。天上澤の項に就ては該地方を實査せられてあの地圖に甚大の材料を供給せられた辻村氏が、自ら意見を書かれるさうである。猶書きたい事が數項あるが今締切りが急がれるのでこれで擱筆する。

本編も前編同様自分が筆を執り三枝氏の校閲を経た。（中村記）

要 約

明治44年(1911)7月24日~26日の記録。大黒鉾山から鹿島槍ヶ岳。

メンバーは、中村孝二郎、松本三郎。

行程は、7月24日 大黒鉾山-五龍岳-五竜岳より二つ目の峯の下露營。

25日 露营地-八峰-鹿島槍ヶ岳北槍-ヒシの頭露營。

26日 露营地-冷沢-大町。

※大黒鉾山から五竜岳に登り、八峰を通過し鹿島槍ヶ岳に達した。

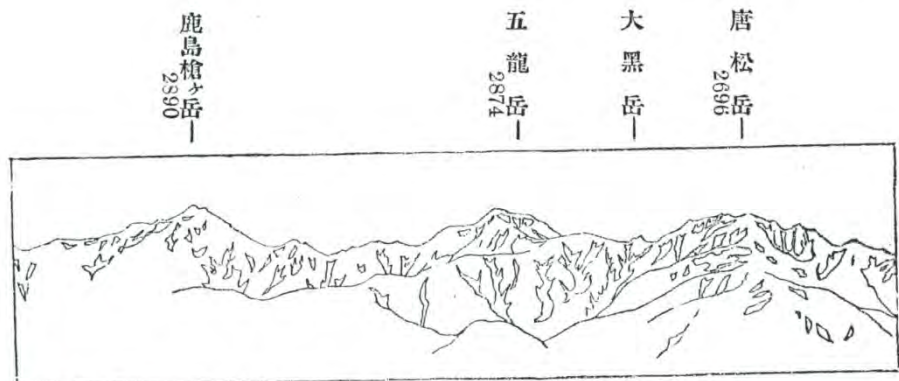
	中村 孝二郎
同行	二高二部乙生徒 松本三郎
	北城村細野強力 磯吉
	全 嘉吉
	全 利雄

明治四十四年七月廿四日朝八時。大黒鉾山飯場を出發し、午後一時半五龍岳の三角臺下に到着す。五龍岳より鹿島槍ヶ岳の北槍に至るリツヂは鋸の齒を三つ南北に並べたる有様をなし、表側(信州側)へ多少蔽ひかゝつた様な一種特有な形狀を備へて居る。此のリツヂが北槍に達すると東西線に近き方向をとり南槍から又尾根が北に延びて五龍から南西に出る尾根と相對し、其間を槍ヶ岳から出る澤が流れて居る。(日本北アルプス部臆測圖に一寸現はるゝ澤)

双眼鏡に映じたる所にては、通過し易さうなので、此の縦走が既に成功せるかの如く勇んで五龍岳の南肩を下る、ザクザクした岩の間を下るので時間が割合にかゝり全く下り終わつたのが二時四十五分、下りてから振り返つて見ると傾斜も可成急にしてよく下つたと思つた位に見えた。

これから鋸の齒と見えたリツヂの第一の峯を通る、五龍岳の上から見たのでは悪い場所も無い様だつたが、實際來て見るとかなりの悪路で、時間が中々かゝる、豫期しなかつた爲か不歸を平氣で通つて來た、強力が不平を云ひ出した位である。其第一の峯の中頃に來たのが五時であつた。其先に赤禿の悪場が見えたので、此所にて一寸辨當の残りを食つたが、其悪場は比較的樂に通つた。此あたりに來た時、表側(信州側)の霧が晴れて、五龍岳から東に延び平川と鹿島川との分水界を成す尾根も見え、遙かに北城の松川や、又淺間山や、長野平も見えた。斯くて露营地を求めながら進みて二つ目の峯の終に近く東側に一寸傾斜の緩やかな地があり、薪も豊富だし、水はないが雪はあるので此所に宿營地を定めた、時に午後六時。

此所は五龍岳、鹿島槍ヶ岳間の唯一の露营地らしい、雪は八月に入つたら或は少なくなるかも知れぬ、黒部の谷から吹き上げる風は、避けらるゝ、眺望もかなりいゝ。



(筆氏郎太清村中)(日三十月七年三十四) む望りよ近附上頂山綱飯

七月廿五日、宿營地を出發したのは七時半、偃松の中を通つて第三の峯を越える、北槍（低い方の槍）の下と思つた所に取り付いたのは九時四十五分。此所迄も悪い所は可成あつたが、此の先に比すると樂な所である。實は此あたりが鹿島槍ヶ岳と、今迄通つて來た三ツの峯を連ねるリツヂとの接合點と思つたから、リツヂの切れた所でもあれば此のあたりにある筈で、此の先は容易に北槍迄達し得らるる事と思つた。出發の際の豫定にては正午迄には、鹿島槍ヶ岳の三角臺下に到着し得ると思ひ、雪で炊いた飯は甘くないと云ふ強力の言を用ひ、晝食の辨當を造らずに出發したのであつた。先づ其所の小さな灌木の生へて居る岩を登り、二三間行つたら岩から成るリツヂか、甚だ薄くなつて居て、且つ表側（信州側）の方が凹んで居て先に行つた強力は、足がすくんだと云つて引き返して來た、其の先に一間ばかりリツヂが切れて居る。とても通れぬので裏側（黒部川の方）を一寸からむ事にした。其裂目をからむ時足場が悪くて嘉吉が先づ空身にて通り、足場を造り次に利雄が荷を着けたまゝ助けられて通り、次に自分が通り、上に登つて再びリツヂを四五間行くと、又裂目がある、此時十一時。

三人の強力が、表側の方をからまふとしたり種々と試みたが何所も通れさうもない、尤も表側の方は、下から霧が巻いて來たので、充分見えなかつたから案外此の側に通り易い所があるかも知れない。

（翌日鹿島村を通る時道傍の老人に五龍岳から鹿島槍を通つて來たと云つたら驚いて、よく八峰ハチミネを通つて來たもんだと云つた。其八峰は案ずる所此所らしい、其所は昔から誰も通らず、只鹿島村の八と云ふ漢が一度通つたきりだから此名があると話してくれた）。

兎に角リツヂの所では裂目は水平距離が、二間ばかりだが、とても飛び移る譯には行かず、其岩壁を下る事もかなはず遂に此の西に折れて居る所に沿ふて、少し下の方をからむ事に定めた、最初の觀察では此裂目は、殆んど谷底まで、下らなくては通れない様に思はれた。裂目に離れない様にして下りて行くと其先に灌木の生えて居るかげになつて居る所がある。裂ケ目に沿ふた方は、粘板岩の様な茶褐色をした岩石の壁で、高さ五六間もある、少し上手の方の黒色の岩石から成る壁との接合線について下れば下れない事はない。但し此の岩壁を下り裂ケ目に下りても向ふ側が昇れるか何うか疑問である、霧が全くかゝつて雨さへ降つて來た。

此の裂ケ目に下りて無理にも谷を下り昨日見た五龍岳から南西に出る尾根と南槍から出る尾根との落合に出で、其所から南槍の三角臺の所まで尾根づたひに昇れば行けさうだが、若し其落合へ行く迄に瀑があつては進退谷まつてしまう、此時食物は一日分しか残つて居ない。但し此落合の谷からは、北五龍の尾根を越して行けば、空手でも大黒鑛山へ行つて、倉庫の米と味噌とを一時借りられるから先づ大丈夫であると思つた。

然し遂に來路をたどつて、昨夜の露營地に達し、鹿島谷に下る事に一決した、かくは定めたものゝ残念なので其まゝ休んで居たら、其時幸運にも霧が急に晴れだした。見ると裂ケ目の向ふ側の急斜面に赤色の岩石の露出した空瀧がある、其瀧を無理にも登らうと決した。

先づ利雄が足場を造りながら下りて行き、皆なが此の裂ケ目の底に下つたのは一時であつた。晝食は今朝の不覺から準備してない、然し一同氣が立つて居るので一人として空腹を訴ふるものがなかつた。其裂ケ目の底にある一間半ばかりの空瀧を下り、北槍の方の側の空瀧の下に着た、其を昇り始めたが、此空瀧登りは左迄困難ではない、空瀧の中程迄昇つて左側の僅かに小さなヒバが生へて居る急斜面を攀ぢて、偃松の生へて居る所迄來た時は蘇生の思がした。此偃松の中を登つて元のリツヂの續きに出たのが、二時半であつた。此れから先が中々長くてあれが北槍の頭と思つて行くと其先に又頭が現はれる、幾度か失望した、此時四時になる、急に空腹を感じたので吠から米を出して嚙んだ。其所からもう一つ突起を越して眞の北槍の下に來た。昨夜の露營地から、双眼鏡で見たら北槍の此方側が岩壁になつて居て他所へ廻らなくては駄目かと思つて居たが來て見たら、どうにか、かうにか登れる北槍の上に立つたのが四時半、霧が深くて何所も見えない。

暫時して霧が少し晴れたら、南檜に通ずるリツヂも見え、其左側に雪溪も見えたので、北檜を下り雪溪の上まで来た。南檜の三角臺も見えたが折から又雨が降って来たので、此の雪溪を下りたら冷澤に出られることと信じ、雪溪を下りかけたが仲々急だし様子が分らぬので、急に恐れて南にある尾根に上つて其尾根を下つたら、遂にヒシの頭に出てしまった。其所はもう偃松が終つて雑木も生へて居るので、其中で雨中の露營をして、翌日更に南の雪溪に出て其を下り冷澤に出で、鹿島村を通りて其夜の中に大町に着た。

* * * * *

單に五龍岳から鹿島檜ヶ岳に至るならば、五龍岳から南西に出る尾根を谷まで下り、南檜から出る尾根を上るのが安全だと思ふ、此の道をとるならば、大黒鑛山を朝早く出れば、五龍岳に登り其日の中に谷まで下り、其所に宿營し、翌日尾根を登つて南檜に達し、冷澤の雪溪を下つて雪溪の盡きた所に露營する事が出来る。

あく迄リツヂに沿ふて縦走して行くならどうしても、八峯を通らなくてはならない、其には勇敢な強力を選定して連れて行かなくては成功は期せない。但し多人數の通路には危険が生じ易いと思ふ。

聞く所によると數年前に長野と富山との大林區署で立會つて國境の標木を立つるときにも八峰以北は北城より入り、八峰以南は鹿島谷から入つたと云ふ事である。

今度余等の伴なつた、強力は既に道も充分知つて居る、但し鹿島檜ヶ岳以南は全く知らない、三人の中にも磯吉と嘉吉は最も勇敢で信賴が出来る。細野の人夫の賃金は食事を此方にて持つときは一日五十錢の規定なれど、白馬の鑪ヶ岳の南、天狗から、唐松岳に至る間は不歸があるので特に一日八十錢取る、余等の出發前は八峰の悪場は知られざりしを以て皆の賃金も五十錢の約束であつたが、來て見て前記の如く困難であつたので、特に不歸と同等の賃金を支給した、今後も同地は必ず同じ賃金を取る事と思ふ。(完)



三枝威之介氏撮影

五龍岳中よ見ると鹿島檜ヶ岳

6. 榎谷徹藏

「後立山山脈 峰傳ひの記」『山岳』第七年 第二號

明治四十五年七月十五日刊 日本山岳會事務所發行

要約

明治44年(1911)8月11日～14日の記録。鹿島槍ヶ岳から槍ヶ岳縦走のうち、蓮華岳から烏帽子岳まで。

メンバーは、榎谷徹藏。

行程は、8月11日 鹿島槍—蓮華岳—北葛乗越の鞍部下露営。

12日 露营地—七倉岳—不動澤岳—船窪乗越。

13日 船窪乗越—船窪岳—不動岳—南澤岳—東南の肩露営。

14日 露营地—烏帽子岳—

※『山岳』第7年第2号の記録はここまでで終わっている。その後、三ツ岳—野口五郎岳—鷲羽岳—蓮華岳—双六岳—槍ヶ岳を経て18日、上高地に下る。

一、蓮華岳

鹿島槍から、長い長い脊梁を南へと辿って来た私は、蓮華岳の頂上に差掛つた。(経歴の梗概は「山岳」第六年第三號二〇四、五頁参照)

狭霧の裡を自分獨り丈け絶巔に向ひ、二人の人夫はそのピークを横に絡んで、標下の南方尾根を目指した。折角剥げかゝつた霧は、又々深くなつて、振返ると、茫つとぼかされた灰白色の尾根の向方、今しがた歩いて来た邊りは、もう一面の濃霧に暗み果て、その霧の裡から、二人の高調子な話し聲が、切れぎれに聞こえる。私は三角標から南方尾根の頭へ出る迄、成らうことなら、せめてあの話し聲だけでも、絶えず聞こえて欲しかった。

雷鳥がばたばたと、つひ眼近の偃松の中から立つ。續いて二羽、又二羽、左の脚元から立つた。親鳥と思はれるのは、二三間先の岩の上に止まつて、横向きになつて此方を見てゐる。私は別に石礫を投げようとも思はなかつた。一つ世界に共棲する鳥と云つたやうな念が、胸に蟠つて居たからなんだらう。

臆て三角標の下に着く。丁度午後二時七分。相變らずの濃霧々々。瞑晦な世には眺望も何もあつたものでない。雷鳴は間斷なく西の空に響いて、時々思ひ出したやうな猛烈な奴が鳴りはためく。丁度大天井の絶巔に獨り立つた時と同じやうな状態である。けれどあの時よりは、感覺が遅鈍になつたのか、あれ程の物凄さとうら寂しさを覺えない。

絶巔から觀望することの出来る重なる山岳の推測表を作つて見る。一方は概畧を示す。

(北方) 白馬、旭、鑓、五龍、鹿島槍、祖父、岩小屋澤、鳴澤、赤澤、スバリ、針木等。

(南方) 七倉、不動堀澤、東澤、舟窪、不動、南澤、烏帽子、三ツ、三ノ澤、野口五郎、赤、黒、



辻村伊助氏撮影

む望を岳劍山立りよ岳華蓮

赤牛、鷺羽、樅澤、左俣、硫黄、槍、穂高、唐澤、餓鬼、東澤、燕、中川屏風、大天井、常念、赤澤、有明（餓鬼の左肩に遮ぎられるかも知れぬ）焼岳の噴氣、乗鞍、御岳（以上の三つは槍の右方側線に一部を遮ぎられるかも知れぬ）等。

（西南から西北）黒部五郎（頂邊丈け）薬師、越中澤、立山、劍等。

（東南から東北）木曾駒（常念の左肩に遮ぎられるかも知れぬ）南アルプス、駒岳山塊、富士、八岳、浅間、吾妻、白根、妙高火山彙等。

記載だけを済ませて、直ぐ南方に向つた。がらがらした破片岩計りの斜面をひた降つて行く途中で、右の方を振り向くと二人の男は今丁度、例のピークを半ば以上横ぎつた所で、霧の裡に極めて朦朧と、そのてくてく歩いて来る貌が見える。私は別にこんな所で待ち合はす必要もないと思つたから、紛れもない國境の背を辿つて、すたすたと先きへ降つて行つた。此邊の駒草の多いこと、實に驚くばかり。その道の商人連も、三角點以西を探るばかりかして、株は中々大い。優にスバリ乗越附近以上の豊富さである。

暫くすると、この岩屑さくさくの幅廣い尾根の傾斜が俄に加はつて、三十五度以上になる。前途を見下ろすと、ずつと下の方へどこ迄とも知れず其の尾が薙ぎ落ちて行つて、果ては暗い霧の底へぼかされてゐる。私は一氣に四百七十尺許り降つて、一寸緩やかな地點で二人を待つた。雷鳴は益ひどく、峯から谷、谷から峯へと居堪らない程の亂暴なこだまを傳へてゐる。此時私の胸には、前途を思ふ様々な念が、ごたごたになつて溢れ返つた。そして今朝針木岳の絶巔から觀望した以南の連山の有様が、頻りに眼の前にちらつく。その時の日記には次のやうなことを書き付けて置いた。

『北アルプスの殆ど全部は、心地よく見直すことが出来た。中に就いても、特に深大な興味を覺えさせるものは、蓮華以南の記載なき峯々の連りである。これ等の山岳は、いづれも標高に於いてこそ著しく劣るけれども、脊梁線の意外な變化に至つては、他に類似を見出し得ないと云つて宜い。成る程あの容子では、未だに處女で居るのも無理はないと思つた。先づ左端の北葛乗越の落ち込み具合からして、既に甚しく奇抜である。それに七倉乗越の鞍部の危さは、實際驚嘆の外はない。いづれ風雪作用の結果ではあるが、能くもあんな不思議なことになつたものだと、双眼鏡で覗いて見ると、如何にも危い。刃狀に裸出した、薄い尾根の頂から、峻直に削り落ちた側面の物凄さ、ぽつぽつと小さく浮き出て見える澤山の岩石が、どうしてあのざらざらの崖面に止まつて、轉げ落ちないんだらうか、想像が附かない。一體あんな所を渡れるだらうかと思ふと、俄に神經過敏になつて了ふ。

脊梁線の最も振つてゐるのは東澤ノ頭（今回自分の假に命名したもの）である。低くて小さい癖に、恐ろしい凹凸だ、その上一面の繁みと來て居るから、定めてあすこは一方ならず手古摺ることだらうと思はれる。しかし舟窪以南になると、此處からの模様では、左程困難とも見えない。先あ何しろ蓮華から舟窪迄の間が、今回の縦斷旅行中、隨一の難場らしい、あれが果して渡れるか、渡れないか、今更のやうに氣に懸つて堪らなくなつた。

狭い窮屈な、岩だらけの絶巔を飾る色古丹草の白葩は、絶えず冷やかな微風に揺らめいて居る』。

「蓮華の南は寄つ付けない」。位の獵師達の威し文句では、どう寄つ付けないのか解らない。而も今、既に其一步を踏み入れて居るのだ。これから果してどんな恐ろしい障礙物に出喰はすだらうか。更に南へ遠く脊梁を傳ふとなると、數年前、測量當時に使役された人夫の外は、滅太に踏み込んだ者が無い上に、當時切り開いた跡は、間斷なき崩壞作用の爲めに、現今全然その名残を止めないといふ。又北葛澤の方面には、所謂七釜の險があつて、冬期でさへも溯行は絶対に不可能だから、獵夫共も決して行かないさうで、つまり此邊一帶の脊梁線は、純然たる未踏の地域に屬する譯であ

る。大町で聞き及んだ話によつても、或者は鎌尾根が長く續くと云ひ、或者は叢で仕方がないと云つた。然しいづれも舊時の模様を又聞きしてか、或は想像の説に過ぎないことだから、何ういふ具合か、本當の所が解りさうにもない。私は早くその未踏の地域に横はる障礙物に逢ひ度いといふ念やら、縦斷の成敗を氣遣ふ考へ^おやらの混淆した、特殊の期待心に充された。

暫くして二人はやつと後から下りて來た。恐ろしく歩きづらい「ごとう」だつたと、頻りに溢^{こぼ}して居たが、私は身輕な爲めか、左程の難場とも思はなかつた。これから尾根の幅は著しく縮まつて、烈しい巉巖の頭が兀々と脚下に、霧の中から仄見える。もう頂上附近のやうな、廣やかなゆつたりした眺めは全で無くなつて了つて、ひたすら峻險な、物凄い景象となる巉巖の隙間や肩のあたりには、短い偃松が絡まつてゐて、一方ならず下降の妨害をするやうに見えてゐる。

私達は只管脊梁と思はれる所を辿つた。しかし絶対には傳へない。巨大な巖の頭へ下り着いて、行く先きの容子を覗いて見ると、脚の下は恐ろしい斷壁を削り立てゝ居て、到底降れない。又吉と玉作とは、其巖頭の突端に、駒犬のやうな姿勢をして噛り着き乍ら、霧に仄暗んだ脚底を見下ろして、頻りに右へ廻る方が好いとか、左の方が樂だとか云つてゐる。此二人の信賴すべきクライマーに、行動のことを一任し切つてゐるつもりの私でも、この容子を見ると、聊不安の念に襲はれざるを得ない。

やつと側方の急斜面を廻つて崖下に出ると、脚の下からは又違つた形の巖頭が、によつきり突き出てゐる。其れの頂に下り着くと、又々脚底は削り落とした如うな絶壁で、下降を阻礙される。先つきのやうにして側方を廻る。恚うして幾つかの巖壁を下つて、崩壊し易い岩屑の、巖壁に蓄つた所へ出た頃、又ばらばらと雨が濺ぎ掛つた。三人は桐油を擴げて、岩角の偃松につかまり乍ら小くなる。

霧は大に薄れて、越中澤岳と思はれる邊に、悽愴な雨の脚がどす黒く立つた。赤牛あたりの見當にも亦、暗愴とした雲間から、茫々と仄白けた雨が、斜に降つてゐる氣勢。満目の山溪は實に形容し難い物凄さと恐ろしさととの形相を現示した。晴れ渡つた時の爽々しい、桔梗色は何方に向いても、もう全で見ることが出来なくなつた。あの猙獰な雨脚が、此處へも襲つて來るやうになつたら、何うすれば宜からう。こんなことなら連華の頂上で、よし水が無くつても、小舎掛けをすれば宜かつたになど思つて心細くなつた。

雷鳴は愈烈しく、今にもこの偉大な山體が、破裂しはすまいかと思ふやうな轟き方である。ぎゅつと寄り添つた三人は、ひたすら沈黙を守つてゐる。

しかし我々は幸にしてその烈しい驟雨を免れることが出来た。と忽然頭上高く、針木岳の尖巔が素晴らしい風采をして聳えた。然し蓮華の三角點は、先つきから幾つともなく下つて來た斷巖の、折り重なつた向方になつて、もう見えさうもない。東の空は非常に透いて、川中島あたり一帯の川や野や山などに、午後の烈日が強く當つてゐる。大町、池田、松本附近の高原や、高瀬、鹿島、籠川の一部なども、雲翳に暗んではゐるが、中々鮮明に見える。東南の方を望むと、南安曇の可なり高い峯々には、晴れやかな日が射しかゝつて、その上には赤熱したやうな大量の積雲が、もう積亂雲になりかゝつてゐる。

それでも黒部に臨む對岸の高大な連山は、相變らず猛烈な暴れ方だ。雲か山か、分らなく混淆^{ごつちや}になつて、暗い暗い鼠色に蒸し返へされた容子といふものは、何うでも焦熱地獄を連想せずには居れない。

雨も小降りになつたから、又前進を繼いだ。七倉の蒼翠は最早當面眼近かに聳えて、此方へ曳いたその美しい深緑の尾根は、つひ脚の下で岩の向方へ隠れてゐるから、その絶端が此處の脊梁と、

どんな風に繋がつてゐるのか分らないが、この模様では多分甚しく峻嶮な切れ込みをしてゐるに違ひなさうだ。悪絶を以て名高い北葛乗越の地形を、一刻も早く見度いものだと思つた。

次々と迎へて来る脚下の巖頭は、段々大きく、巖めしくなつて、それが一時に五つも六つも、不規則な束ね方をして突き出す。どれを絡んで下つたら宜いか、全で見當が付かない。もう斯うなると、二人は先つき迄の如うに、駒犬みたやうな姿勢で俯瞰する位では、迎も埒が明かないから、別々に左右へ廻つて、下れさうな所を探して見る。

恚うしてやつと一つの斷巖を下ると、又ごたごたと新しいのが脚底から崛起する。短い偃松や、岩層その繼目を綴つて、少しも我々をして、氣を許して休憩するの餘裕を得させない。絶壁の下降が一段落濟むと、すぐ偃松、或は塊礫。そして又直ぐ新しい斷巖。これでは今日の夕方迄に、北葛乗越へ下れるだらうかといふ不安の念が、強く胸を襲つた。

時々振り返つて來た方を仰ぐと、灰白色の峻しい嶺巖が、頭上へ崩れ落ちんばかりに、轟々と細重してゐて、能くもあんな所が下れたことだと驚くばかり。そのうち丈け二三尺に過ぎない、枝振りの頗る奇怪な落葉松が、こゝそこの岩角に、躍つたやうな風をして樹つてゐるのを澤山見るやうになつた。どれも不思議と半ば立枯れのやうな氣味で、白骨のやうに乾びた枝が、葉を着けたのに交つて、ぼりぼりに亂出してゐる。

「こんな松を鉢植にして、庭前へでも置けや、面白う御座んしずい」。

一步を誤つたら、五體が微塵にならうといふ際どい折にも、玉作はこんな風流氣が出ると見える。先つきから右手に高く聳え立つてゐる針木岳は、愈高峻の威風を逞うする。

黒部方面の夕立が、漸次にその勢を改めて、幽暗な亂雲の影響の爲めに、陰鬱であつたこの邊の光線も、次第に明るくなると、頭上や脚下に、窮極する所を知らず連続した無数の巖巖は、非常に面白い明暗を拵へて、中には是非スケッチでもやり度いと思ふ程、堪らなく好いがある。

そのうち、脚の眞下にずつと低く、多大の望みを囑して居た北葛乗越の凹鞍部が見え出した。針木岳から眺望した形状と大差はなく、唯近づいてゐる丈けに、四圍の風物が甚しく壯大であるのが違ふばかり。

尚暫くの間、懸崖面を一しきり下降して、やつとその鞍部に下り着いたのが四時二十分。

二、北葛乗越

そこは一笏の平地を作つてゐて、兎に角悠寛足^{ゆつくり}を伸ばす位の餘裕はある。玉作と私とは、やれやれとそれへ躍り下つて、今來た巖壁を見上げた。丁度そこへ、草鞋を履き更へてゐた爲めに後れた又吉が、ずつと上の方から、よたよたと降つて來る。見て居ると實に危い。あの踏んで行く岩の角が、一寸でも剥げるか、ぐら付いたらもう如何なことが有つても、彼れの形骸は全きを得ない。それに自分のやうなものが、能くもあんな恐ろしい所を下降し得られたことだと、今更のやうに熟々驚いた。

此處には疎らに喬木が有つて、小舎掛けは充分出来るけれども水が無い。成らうことなら汁も啜り度ければ、煮き立ての飯も食ひ度いから、どちらかへ少しばかり下りて見たらどうだらうといふことにする。然し東の方面は、見る通り北葛澤の源頭を割截した凄然たる斷壁で、到底駄目だから、西の方へちつとばかり降りて見ようと、白樺、夜叉、岳山椒などの狼藉した間を分けて下る。測量當時と覺しい鉞の痕が、所々の枝先に残つてゐて、當時は充分山路と云つて宜い程の切り開きをやつたらしい形跡が明らかに見える。しかし何分にも現今では、其幽暗な木下闇一面の雜草で、その下蔭には、泥のやうな土がぬるぬるしてゐるから、迂ること甚しい。所々に朽腐した老幹の水苔に

被はれたのが、だらしなく横倒しになつてゐて、上を越さうか下を潜らうかと、一寸足場に迷うやうなのが澤山ある。

半時間足らずも、こんな所をぐたぐた降つて行くと、雑草は愈深くなつて、全身は名残なく隠れて了ふ。水々しい深緑の葉をばさばさ掻き分けて、尚少しく降ると、ごろた石の細長く連続した、溝のやうなものが見え出した。之に沿つて三四十間許り行つたら、もう本ものゝ澤の形になつて居て、白けた圓石がごろごろしてゐる。

さうかうするうち、その積の石の間から、美しい水が滲み出て、段々と末になる程、さゝやかな流れを作つて、つひ眼の下の、大い巖の突角の邊では、もうかなりの量を湛へてゐる。紛ふ可くもない針木澤の本谷である。澤の兩岸は鬱蒼とした雑樹で、何處になりと野宿をやり次第だ。

「好い野陣場が幾つからでも有るに」。

「測量にや屹度野郎共此處に小舎掛けをしといて、終始^{しよつちゆう}あれを往き來したゞわ」。又吉は後ろを向いて、今降りて來た方を、顎でしやくつた。

暫くあたりを尋ね廻つて、最も恰好な地點を看出した。其處は澤の曲り角から、右岸へ五六間雑木の間を這ひ登つた所で、五六坪程土地を平準^{なら}した具合は、慥に餘程の以前、小舎掛けをやつたらしく思はれる。二人が大い樺の幹を七八本伐つて、丸小舎を建てゝゐる間に、私は鉋であたり一面の雑草を拂つて、それから焚物を聚めに掛かつた。

雨雲は全く霽れて、夕に近い紅の日光は、背後に高く峭る、先つき降りて來た大懸崖の上半を、鮮やかに染めてゐる。此方から概觀的に仰いだ所によると、蓮華の南方に曳いた脊梁は、全部峻々とした巖壁であると云つて宜いと思ふ。成る程あの通りの壯大な岩山だから、一方ならぬ困難をしたのも無理はないと、又つくづく來路のことが想ひ出される。そして何んだかあれを踏破したといふ回顧的な快感が、胸も狭しと溢れ返つた。

峽間の日は早くも暮れて、澄み切つた虚空に閃く星影は、限りなく美はしい。焚火は熾に燃えて、これに向ふ私達三人の半面は、眞赤に彩られてゐる。

このあたりには「鹽辛^{もぐ}」といふ、花蟲のまだもつと小さい、目に見えない程の奴が澤山居て、意地悪く頭の毛の中へ無數に潜り込む。そして幽かな、鋭い刺し方をするものだから、癩癩が立つて、焦れたやうな氣分になる。それでも焚火に當つてゐる間はまだよかつたが、愈火を消して寢に就かうとすると、さあ大變、何處から恚うも澤山寄つて來るんだらうと思はれる程、多數に襲來して、その癩羽音一つ立てず、黙つてちくちくと頭を刺すもんだから寢られない。「えい」とか「やい」とか云つて、我れと我が頭を掻き篋りたくなる。二人も頻りに各自の頭を叩いたり搔いたりしてゐる。

私はハンカチーフを頭からすつぽり被つて、やつと寢に就くことが出來た。何んしろ今夜は餘程暖かで、足先なんかほかほかする位だから、寢袋は要らうまいと思つて、傍へ押しやつて置いたが、それでも夜が更けて來ると、段々寒氣が増して來て、何時頃だつたか分らないが、ふと目を覺ますと、裾が冷々^{ひやひや}してゐる。早速袋に這入つて、それからは終夜、充分の熟睡が出來た。

十二日の明け方、小舎の入口で二人が焚火をし乍ら話してゐる聲に目を覺ました。空は心地よく晴れ亘つて、有明月は西倚りの空から、微弱な光を投げかけてゐる。

「能く休ましやつた嘯い」

山へ這入つてから、毎朝私はこの辭を以て迎へられるのだ。いつもいつも彼等より先きに目を覺ますことの出來ないのが残念でならぬ。二人は昨夜の地震のことを頻りに話して居たが、其う聞くと、夢現の如うに、極く微かな記憶が残つてゐるやうだ。

熱い汁の煮え上る頃、頭上を壓して峭り立つ蓮華岳の高い高い巖壁の上部へ、朗らかな朝日がばつと射して、うす紅に燃えた。これから辿らうとする處女の峯々も、今頃嘸美はしい色彩に匂ふてゐることであらうと思ふと、一刻も凝乎^{じつと}して居れなくなる。

此處を立つたのが七時。きのふ降つて來た足跡を頼りに、北葛乗越迄逆行する。その凹鞍部へ這ひ登る迄、丁度半時間かゝつた。

三、七倉岳

此山の一番強い印象と云つては、對山館の三階から見た時のことだ。頭の小さい、綠色をした凜々しい貌は、いつ迄経つても、決して忘れられない。殊にあの時は、實地踏査といふ立ち入つた考へが頭の奥に在つたものだから、唯何彼なしに打ち仰いで、その美に撲たれたといふ位では濟まされなかつた。北葛乗越へしたゝか落ち込んだ大脊梁線の雄々しさに對しても、あれを本當に登るとなると隨分骨の折れることだらうが、鹿島槍から峯より峯へと亘つて行つた揚句、果して能くあれを踏破し得られるだらうかと云ふ頼りない念が、兆さんでもなかつた。

その尾根先へ掛る時が今となつたのだ。未記載の山岳を踏むといふ無限の快感が、胸も狭しと溢れ返る。日は心地よく白樺を漏れて、幹の半面は目映い程強く反射してゐる。幾度び打ち仰いでも、烈しい感興を惹くので、私は暫く蓮華岳の、きのふ降つて來た絶壁を、又熟々と眺めた、その堅緻な斷崖から續いて、北葛澤の源頭近くを壓迫する物凄い巖骨が、脚の下へ長く長く連つてゐる。

けふはこの數日來に珍らしく、空氣に薄濁りの氣味があつて、大町近くの高原や、その後ろを繞る丘陵山脈などは、仄んのりと弱い明暗を描いてゐる。暫く休憩の後、愈七倉の登りに掛る。幅の狭い急峻な尾根先には、夜叉や樺や岳山椒や落葉松などが狼藉して、左の脚下は幾千尺とも分らない一帯の大懸崖である。三人はうごうごし乍ら、その樹叢と崖頭との觸接點を辿つて行つた。然し憊うした苦行は一しきり宛途切れて、高山植物の美しく擴布した斜面が、時々その間に顯はれ出すので、我々はこれに依つて、一方ならぬ慰めを得る譯である。けれどこの斜面を横行するのには、餘程注意をせぬと、又してもつるつると辻つて仕様がな。又吉と玉作とは交互に面白く轉がる。傍^{はた}から見てみると、如何にも愉快さうな倒れ方をして、横の方へ一二間辻り落ちるが、それでも本人達は非常に厭なことかして、轉がる度に「えい」とか「糞つ」とか云つて、隨分鋭い懸け聲をする。私は大切な器具を帯びてゐるから、倒れては大變である。充分の注意を拂つて進んだもんだから、やつとその器具を傷けずに濟むことが出來た。

縦に波状をうねらした尾根筋を暫く登つて行つて、珍車の一面に密生した緩斜面へ出ると、七倉の高大な肩骨は、つひ眼の前に聳えて、何んとはなしに「高い山懷の温かみ」といふやうな特殊の快感を感じる。然しこの邊からは、もうそろそろと偃松が意地悪く前進を阻み初める。信州側の懸崖は無くなつた代りに、これで一と息苦しまねばならぬ形勢だ。

立泳ぎ又立泳ぎで隨分骨が折れる。それでも新越方面からの鳴澤の登りよりは、幾分安樂なやうだ。この偃松が一しきりで絶えると、がら石と稚草との交つた所に出る。やれやれと思つて登つて行くと、又偃松が初まる。こんな具合で、偃松とがら石との交互に迎へて來るのを、一つ一つ丁寧に経過すると、玄い色をした數十尺の巨巖が、裾を偃松にべつたり蔽はれて、つひ頭の上へ疎らに突立つてゐる。日はもう餘程高くなつて、その上攀登動作の繼續で、身うちは焦々と暑い。

やがては頂上に近かゝらうし、脊梁線さへ見失はないやうにすれば、逸れるやうなことは無からうと思つて、二人の餘り緩漫な登り方に、多少焦れ氣味の自分は、先きへ登つて行つた。下から見上げると、今言つた疎らな立巖のうちに、最も目立つて立派なのが二つ並んでゐるその凹間の部が、

どうやら登れさうなんで、其處を目掛けた。所が近寄つて見ると、中々大變な偃松で、殆ど何處をどう行つたら好いか分らない。鳥渡立ち悩んだが、漸く思ひ付いて、左方の巖下へ長大な偃松の群集が被ぶさりかゝつてゐるその縁邊を躡ることにした。巖面には幾らか小さい皴はあるけれども、全體が壁立状になつてゐるから、逆もそればかりを絡む譯に行かない。全身の中心線をその巖の方へ寄せ付けて、厭に弾力の強い偃松の枝を、次から次へと踏ん張つて行つた。

やがて松も段々短矮になつて、至極登り易くなつたが、振り返ると、ずつとずつと下の方で、二人は今丁度、自分の弱つた巖の裾を躡つてゐる所だ。松の枝が邪魔になるかして、可笑しい程両手を動かして悶^{もが}いてゐる。攀登の苦悶といふものを傍觀する面白さに、私は暫く立ち止まつて、彼等の動作を見てゐた。やがて二人はその最も困難な箇所を脱し得て、二三回荷物を揺り上げ乍ら少しく傾斜の緩やかな部分に掛つた。そこは一面の低い偃松で、此處から見ると美しい緑の絨氈を敷き詰めたやうであるが、先きに立つた玉作は、胸から下を松に没して、五つ歩六歩覺束なく前進しては、右へ寄つたり又左へ曲つたりして、安樂さうな場所を探してゐる容子。何のことはない、河を涉つてゐる通りの姿勢だ。あの美しい偃松を分けるのでさへ、あれ丈の苦しみをせなければならぬのかと、熟々不思議に思はれる位である。

傾斜は又急になつて、殆ど絶えず偃松と闘ひ乍ら、やつと頂上に達したのは九時二十分。巖は小さく三分して、高さはどれも殆ど同じやうだが、東が一番秀で、西が少しく劣るやうだ。三角標槽はその最秀巖に、中央標石の跡を止めてゐるばかり。窮屈な頂邊にべつたりの偃松で、殆ど足を投げて身を寛がすの餘裕が無いと云つて宜い位。國境線は中央の巖から西方のを通じてゐる。私は其處らを見廻はしたが、中央の頭が一番氣に入つたから、そこへ尻を据えて、あたりの眺望を恣にした。

一番目立つのは、無論蓮華岳と針木岳とである。殊に偉大な蓮華の絶巖から曳き落とした、猛烈な尾根先きの、著しく斷巖を露出した所を見ると、又きのふのことが思ひ出されて、堪らない程の感興が湧いて来る。針木峠の頂も、此處からでは中々高く見える。そして赭土の上を疎らに掩ふた偃松の間には、幾つも屈折した山逕の跡が彰々^{ありあり}と分つてゐる。

針木岳の右の肩からは小スバリ岳の上半が聳えて、右の方には稍距つて雄山連壁が峭る。針木以北からでは水平のやうであつたのに、どういふ譯か雄山の頂よりは、富士折立の方がずっと高く見える。立山の左へ龍王岳、大鷲岳、奥大鷲岳、越中澤岳へかけての大波線がのたくつてゐる具合や、一段隔つた薬師岳の際立つて明るい色調や、頂邊のカールや、黒岳山脈の連り方など、針木岳から見ると、さうひどい違ひは無いと思つた。唯これから辿らうとする峻悪な峯々の位置が、大分變つて来て、つひ眼の下には不動堀澤岳の眞直な大い頭がどつかりと蟠り、舟窪岳がずつと右の方へ寄つて、不動岳が又うんと逆に左へ脈を曳いてゐる。

烏帽子岳から三ツ岳へ連つて行くあたりは、殆ど眞横に見る形で、三ツ岳の右肩に見える三澤岳と、左肩の野口五郎岳とで、以南の列高岳を遮ぎつてゐる。五郎の左方から兀々した西鎌尾根が現はれて、獨特な槍に及び、その下に硫黄岳を踏ん張つてゐる。

南方の脚下に縦糸を伸べた高瀬の深谷を挟んで、國境山脈と對峙した常念山脈は、北端の前衛と云つた形勢の唐澤岳から、複雑な山梁線を曳いて、大天井岳の赤頭に及んでゐる。その他南アルプスや、富士、八岳、淺間、吾妻、白根、妙高火山彙の一部などを望見する模様や、大町附近の原野を俯瞰する状態は、この邊のどこからでも餘り大した違ひが無いから、従つて印象も鮮明深刻でない。

私が主要な部分のスケッチをやつてゐる間に、二人は登つて來た。そしてあたりの眺望よりも何

よりも、先づきのふ下つた蓮華の岩尾根を指し合つて、色んな追懐的の會話を初めた。誰れの頭も、感じ方はさう違はないものと見える。

一時間餘りして脊梁を西南へ、七倉乗越に向つて下り初めた。この下りが又頗る難澁で、偃松や「ざく」の猛烈な障礙物だらけだから、きのふのやうな斷崖下降とは、又趣を異にしたものである。差し當つて前途に蟠つたものは、即ち急傾斜の尾根先と云はず、側面と云はず、べた一面に被ぶさつた偃松である。然しこれを潜るやうにして下降して行くことは、逆に登つて來るのに比べたら、幾ら容易いことか知れない。又吉などもさう云つた。登るんだつたら、どれ丈け骨が折れて、どんなに時間が掛るか知れたものでないと。

ずつと下の方に不動堀澤岳の、灰白色に薙ぎ落ちた廣大な斷崖の鋭い頂縁が、國境線となつて、ぐれぐれと此方へ伸びてゐるけれども、何處でどう繋がつて、七倉乗越へどんな風に落ち込んでゐるか全で見えない。丁度蓮華尾根の中途から、北葛乗越が見えなかつたのと同じやうな地貌状態である。

困難な偃松は時々絶えて、迂り易い稚草の斜面が、その繼目のやうに現はれる。しかし憊ういふ箇所でも、中々尻を落ち付けて休憩することなどは出来ない。唯單調な困難の間々に、少し宛の變化を與へて呉れる迄である。それでも全體を概観すると、その變化が矢張り千篇一律だから、つまりは單調といふことになる譯だ。この間に私は、感興上左程の刺撃を受けなかつた。山梁縦斷といふ大い樂しさと希望とには、絶えず憧憬れてゐるけれども、目先きの手近かな、強い興趣といふものは、殆ど無いと云つて宜い位である。

憊うして同じやうな調子に、餘程長い間下ると、傾斜は頓に増加して、「ざら」の崖面を墜下するやうな形勢になる。足懸りが悪くて、殆ど困り抜いたが、稀々な白樺や落葉松が、曝露し勝ちな斜面にあるので、餘程手助けとなつた。しかし俯向きになつて、迂り落ちるやうにせねば、何うしても下れないやうな所が尠くはなかつた。

やつと七倉乗越に滑り下つたのが十一時十五分。

四、七倉乗越

針木岳の絶巔から此處を見た時の恐ろしさは、何時迄経つても忘れられぬものである。あんな所を渡ることが出来るだらうかと、甚しく神經過敏になつたことも、永への印象である。そして、今實際その場に臨んで見ると、當時幽かに胸の奥に潜んで居た、楽しいやうな豫期の感も、全つきり無くなつて了つて、ひたすら危惧の念に襲はれざるを得ない。

何んしろ崩壊し易い白色の、尖鋭な裸出尾根で、左右は截然と、底ひも知れぬ深澗に削り落ちてゐるのだ。憊うも烈しい崩壊作用を受けた現今の状態では、乗越すことなど到底思ひも寄らぬ。

憊うした刃状の部分は、僅々十數間に過ぎぬけれども、中々容易なことで歩を運ばず譯には行かない。それは單に刃の切先を、馬乗りになつて躡つて行くやうな、やさしい仕事では濟まされないからだ。切先にはまだ崩落し切らない丈許の巨岩が、まことに危険な状態になつて、不規則に並んでゐるといふよりは、残つてゐるんだから、逆もそんな上を這つて行くことなどは出来ない。それかと云つて、こんな岩を頼りに、その皴角へひよいと抱き着きでもしようものなら、それこそ大變。岩質の堅緻さうな風貌は、全然虚偽の装ひで、脚底に頼れ落ちてゐる所の山民の所謂砂糖岩と等しい性質のものだから、可なり大い突角でも、忽ち搖ぎ出して、ごろごろと崩れる。

又吉は先きに立つて、少しく右倚りの方へ絡み氣味で、一と歩宛、その砂糖式懸崖の面へ、足掛りを刻んで行く。右手は今言つた崩れ易い岩へ、身體の中心を失はないやうに、そつと當てがふの

だ。玉作は後ろから、私の監視的保護を司る。しかしロープで繋いでゐるのでも何んでもないのだから、特に充分の注意を要することは言ふを俟たない。私はこの危機一髪の危険な際に臨んで、様々の感が一時に胸元へ襲ふて來るのを覺えた。

僅かの間でも中々時間がとれて、辛つと之を亘り了ると、直ぐ不動堀澤岳の瘠尾根に掛る。

五、不動堀澤岳

不細工な程大い、屋梁状の頭をした蒼い山といふことは、針木岳以來の印象である。この山は標高こそ四邊の列岳に比べて劣るけれども、體軀の恐ろしく偉大なことは、何處から見ても著るしく目立つ。

七倉乗越の刃状脊梁を亘つて了つた時からして、早くも此山の特徵ある頂に、見えない乍ら憧れる念を止め得なくなつた。けれど登りは頗る悪い。そして殆ど終始危険が伴ふのだ。私達がこれから方にその峻嶮な瘠尾根に掛らうとする時、最初の取付きの難澁さに、先づ度膽を抜かれた形だ。胸を壓せんばかりに壁立した白色の巖崖高さ數丈。足懸りになるやうな凹凸は、無いでもないが、岩質は至つて脆弱だからして、迂つかり搔き登ることが出来ない。加之此邊僅かばかりの間は、例の七倉乗越の崩壊に連続した地形で、意地悪く頼りにするやうな樹の根などが、全で見當らないから閉口した。脚の下を見ると、「ざく」の崩崖何千尺。今踏んでゐる岩の角が剥げでもしようものなら、あの絶底へと思ひだと氣が付いて、慄然とした。

落ち付き拂つた攀登振りをする又吉でさへ、縦に搔き取つたやうな凹みを目掛けて、試みに先きへ登つて見て呉れる風を下から仰いでみると、随分險難さうである。一步を移す毎に、石礫がどたどたと轉落するから、續いて登る譯に行かぬ。五六間ばかり無理やりに搔き上つて、稍確かな足懸りを得た彼は、何んだか懸聲をした。すると、巧砂な確實なクライマー＝玉作は這ひ上り初めた。手を掛ける毎に、足を運ばす度に、此處は恚ういふ風にとか、此處でひよいと身體に機からだ はづみを付けるのだとか云つて、下にゐる私に教へて呉れる。しかし石塊の歩々に轉落することは無論である。祖父岳の扇澤本谷で、あの猥惡な雪解と斷巖と飛瀑とに充ちた絶谷を溯つた時も、此の流で導いて貰つたんだが、私は何んだか登山術講習の、實地研究でもやつてゐるやうな氣がした。そしてこの良好な講師（普通の獵夫が三日の山路を、平氣で一日に通すことの出来る健脚家）にばかり着き切つて、せめて一ヶ月程、難澁な作業を實習しようものなら、充分技術の進歩を自覺するに至るだらうと思つた。近來歐米で流行の、ロツク・クライミングの記事や寫眞などを、色々と想ひ出さずには居られない。

「綱を下ろしてお上げ申さずか」。

「なーに大丈夫！」機械體操では、先づ先づ引けを取らないつもりの高慢心が有る爲めか、此場合にも尚豪らさうなことを云つてゐるのは、我れ乍らに可笑しい。辛つと登り切つて、不圖脚底を顧みた時は、何んだか悽絶無限と云つたやうな感にうたれた。これが年々に崩壊して、もつともつとひどく砂糖岩が露出するやうになつたら、面白からうと云ふやうなことを、想はんでも無かつた。

これから本ものゝ大脊梁に掛る。左方＝信州に向つた側面は、例の通り長く連続した、崩壊し易い白色の大絶壁。越中側も亦懸崖と云つて宜い位の急斜面を立てゝゐるが、其處には短矮な雜樹が隙間もなく繁茂して、この絶壁の頂に及んでゐる。而も人間の辿り得べき、その樹叢と崖頭との境界線は、甚しい急勾配で、這はねばならん程である。その上獸の足跡さへも絶無なんで、硬い痛い枝が、ぼりぼりと無遠慮に崖頭へ張り出してゐるから堪つたものでない。全く危険状態だ。

私達の歩速は、實に遅々たるを免れなかつた。それに恚うした形勢が、厭き厭きする迄長く續く。

しかし私は時々立ち止まつて、矮樹の枝をしつかり握り乍ら、西北の空に高く連る立山連脈の壮麗な面影や、針木、蓮華の立派な骨格に對して、恍惚とせざるを得なかつた。東を向くと、七倉と餓鬼との凹間から、池田附近の平野が、遠景の落ち付いた、淡い色調を見せて、靜に横はつてゐる。

脊梁は相變らずの危険な片靡きばかりで、その間に小い尖峯を三つ四つ越した。正午に近い日光は、愈強く射しかゝつて、手の甲などひりひりするやうだ。この月の三日以來、完全に入浴しない身は、よし朝夕の寒い山岳生活を續けて居ても、晝間の強烈な日光に當てられて、随分發汗を覺えるものだから、頸筋と襟との觸れ合ふ所などは、厭にぎしぎしして心地の悪いこと無類。殊に今のやうな暑さでは、一入不快を覺える。顛顛の邊の、一と所汗が乾いた部分へ指を當てゝ見ると、砂でも着いたやうな感じで、ざらざらしてゐる。穢い話だが一寸嘗めると、全くの結晶した鹽である。こんな山躰れのした風貌を見せたら、六年越しの戀も醒めるだらう。或は特殊の哀感にうたれて、泣いて呉れるかも知れないなどゝ、勝手な空想をする餘裕は有つた。

しかし飯をやらうぢやないかと、少しく足懸りの確乎した所で中食を初めた。水など無論一滴も有らう筈がない。つひ眼の先の燕岳の頭から大天井岳へかけて、いつの程にか濃厚な霧が靡き初めた。藥師岳の大頭も、次第にかき消されやうとしてゐる。

私達は又登つた。けふのうちには、大概なら烏帽子迄抜けられるかも知れないといふ豫想であつたが、この模様では中々どうして、まだ不動堀澤の頂にさへ達して居らんのに、もう晝を過ぎてゐるんだから、これからまだ舟窪、不動、南澤と、次第に高度を増して行く連峯を越すことは、どうやら至難らしい。すると其の間で何處か露宿地を見付なければならんが、今夜は逆も水なんかと、贅澤なことを云つてゐる所であるまい。せめて小舎掛けでも出来るやうな場所があつたら、充分それで満足せんければならんと思ふと、變に心細い、頼りないやうな氣分になる。

竟に絶巔に達した。一時四十分だ。頂は南北に長く、十町程も伸びてゐる。幅は至つて狭いが、比較的平坦であつて、所々偃松の疎らに禿げた部分から、灰白色の巖石が露出してゐる。最高點は北端の、私達が這ひ登つた所だけれども、何等の目標も、人工の跡も無く、永への寥廓と寂莫とに領じ盡くされてゐる。この峯頭を南の端迄、ゆつくり暢氣に辿つて見たら、随分面白からうが、今は時間に餘裕が無い。ぐずぐずして居て、夕暮にでもなつたら大變だから、早く露宿地を見付けるやうに前進せねばならぬ。

それでも三人は、絶巔に尻を落ち付けて、半時間ばかり眺目に費した。概況は七倉と大差が無く、しかもあすこより低い丈けに、従つて大分視界が縮まる譯である。大町の人家や、附近の原野なども、穏やかな調子に横はつてゐるが、これから以南の峯々では、もう全く見えなくなるらしい。蓮華の頭には、先つきから霧が斷續的にばつばつと掛つて、その餘勢が時々針木の峯頭に及んでゐる。

又吉と玉作とは、私の双眼鏡を交みに覗き合つて、行く先の地形に就いて頻りに評議をしてゐる。分けても眞下にずつと低く、我が不動堀澤の山裾に觸接せん計りの形勢で、南北に伸びてゐる尾根が、最も彼等の疑問とする所であつたらしい。東澤の頭へは、どうあつても西へ向はんければならぬ筈の尾根が、何故あんな風に、思ひも寄らぬずんと南の方から、北に向つて曳いてゐるんだらうと云ふ。然しあれの南の端へ下り着いてからでなければ、東澤の頭へは這ひ上れないやうだといふ。行程のことは任せ切りにして、ひたすら眺望を恣にしてゐた私も、何んだか氣懸りになつて、此の議に參與した。成る程意外な方向に横はつた尾根ではあるが、どうしてもあれの南端から辿らんければならんことは明白に思はれる。一體極端に意地悪く屈曲した馬鹿尾根だと云つて、三人は笑ひ合つた。

それに此處から見ると、東澤の頭や舟窪や不動の、不動谷に面した山體は、一面の猛烈な大崩壊

で、直下何百米突といふ白色の懸崖が、半椀形に長く連つてゐる。国境線はいづれともあの崖頭ばかりを通つてゐるに違ひあるまいが、ひどい所を行かねばならぬことだと思つた。

周観スケッチは、七倉からので充分と思つたから、やらずに置いて、記載だけで済ませた。これから行く先は稚草の間に樺、落葉松等の疎らに生ひ立つた急斜面で、それを南へ斜に下降する。先つき言つた脚底の南北尾根は、段々近づく程、複雑な屈曲形態を示して来て、仕舞にはどんな風になつてゐるのか解らなくなつた。

やがて新しい狭長な崩壊面に出喰はした。しかし此處は轉墜した所で、危険が伴はないから、随分荒つぽい下り方をした。それでも俯向けになつて、迂り下るやうなことや、歩々に足懸りを刻んで「^つ斫る」やうなことを幾度びもやつた。こゝを一しきり降り切ると、例の尾根の南端とも思はれる邊へ出る。そこには不動堀澤の山體から岐れて行く境目のやうな地形で、暫くの間、傾斜は至つて緩漫であるが、喬木がうるさい程繁茂してゐる。

この尾根筋を、先つきの計劃通り北へ迂ると、暫くで不動澤の一支流、東澤に臨んで矗立する白色の壯大な斷壁の頭へ出る。同時に脊梁の下向傾斜は頓に加はつて、短い熊笹、夜叉、唐檜、落葉松、白樺などの乾びた枯枝は、右手の側方から、殆ど隙間なくのさばり出して、その崖頭を覺束なく縫ひ乍ら、下つて行く人を悩ませること甚しい。

此邊は崩壊作用が殊に頻繁激烈であるらしく、草の細長く塊つた部分を、何の氣なしに踏んで行き乍ら、通つて了つた後で、ふと見返ると、その下は一帶に割られたやうな土砂の凹みになつてゐて、それから直ぐ例の大絶壁に削り落ちてゐるといつたやうな工合なんで、思はずぞつとすることなど度々ある。その他落葉松や白樺などが、根から掘り起こされたやうに、横倒しになつて、今にもこの恐るべき大澗谷に墜落しかゝつてゐるのも澤山ある。唯さへ通過の困難な崖頭は、こんな障礙物の爲めに、一入骨が折れる。

何んしろ此處等一帶は、總て恚うした危険な斷崖の連続だからして、その頭を辿るのに、中々意想外の時間が掛かる。やつとのことで無名の鞍部に來た。東澤乗越とも云ひ度い所だが、逆も乗越せることでなく、又腰を下ろして休むことさへ至難な位である。

六、東澤の頭

從來一定の名稱もなく、又獵夫共からも注意されずに済まして來たピークで、標高も低く、山容も比較的矮小であるが、經歷の困苦と危険とを覚えさせることに於て、附近山岳中隨一である。針木岳から見た具合では、一面の蒼翠で、ひどい凹凸で、隨分齒應への爲さうな風であつたが、實際は中々、遠望の想像以上に瘴惡な山岳である。何んしろ山體の南半面は、完全に削磨せられた、例の大絶壁の一部を形成して居て、その上最も恐るべき鋸齒式の刃状脊梁に富んで居るんだから、随分閉口せざるを得ない譯だ。

東澤の頭といふと、直ぐ滅茶苦茶に意地の悪い山、手に負へぬ腕白小僧の如うな山といふ感が、私の頭に浮んで來る。前記無名の鞍部から、直ぐ是れの登りに掛ると、暫くは不動堀澤式の地形で、人間が辿ることの出来る唯一の箇所と云つては、例の通り信州側に薙ぎ落ちた、凄然たる大懸崖の頭ばかりで、越中側（北方）の急斜面を濃密に被蔽した樹叢の縁邊は、鋭い無数の枝を、その崖頭へ矢鱈に張り出してゐるから、幾度ともなく反身になつて、枝を掴み乍ら、何千尺とも分らない絶壁へ、後向きに上半をぐいとめらさねばならぬやうな目に遇ふ。

足元には一瞬の間も注意を怠ることが出来ず、手先も迂つかり枯れた脆い枝などを握る譯に行かず、つまり有らん限りの注意力を、間斷なく全身に拂はねばならぬ状態である。恚うして暫くの間

極端な苦闘を續けると、臆て此方から數へて、第一番目の峯頭に達することが出来た。もうこれ以後は少々の登降があつても、つまりは舟窪乗越へ降つて行くんだから、其處へさへ行けば、何處か小舎掛けをする位の場所は見付かるだらうと、暢氣な考へで、第二峯頭に移らうとすると、さあ大變。前途の偵察旁、五六間先きへ進んだ又吉は、つひ眼の先の巖頭に佇んで、

「これや恐かねえ瘠尾根だなあ」。と顧みて難かしい顔をする。私は刹那に、譬へ難い不安と心細さとの念に襲はれた。

見ると成る程恐かねえ所だ。七八十間といふもの、白色に裸出した、屈折の多い刃状尾根が行く手に伸びて、一體どうあれを亘つたら宜いだらうかと、鳥渡思案が付かない。岩質は無論脆弱で、全然土砂を固めたやうである。左右兩側面とも、勿論懸崖斷壁を削り立てゝ居る、風もないのに、どさどさと岩石の墜落する悽愴な響が、滿山の寂寞を破る。

言ふ迄もなく此處は、七倉乗越と同じく、馬乗りになつて、切先を渡り續けることは、斷じて不可能であるから、私達は一步一步に足懸りを刻んで、其崩落し易い岩石に、そつと左の手を當てがひながら、守宮の様にして躡り過ぎた。恚うやつて漸くこの最も危険な部分を通過すると、直ぐ又崖頭傳ひの急峻な登りとなつて、雑木の枝のうるさい妨害は有つたが、先づ先づ第二峯頭に登りおほせた。

東澤の四分した峯頭は、高さいづれも伯仲の間にあつて、元より何等人工の加はつた跡も、著しい目標もなく、どれが最も秀でゝ居るか、一寸見分け難いが、目測した所では、此處か第三の巔か、最高點をするものであらうと思はれる。

西の方には霧が大分捲いて来て、時間も段々遅くなるやうだから、充分な眺望もせずに、前進を繼續した。しかし記載丈は矢張り缺かさずにやつた。此度は玉作が先きに立つて、前途の偵察をやつたが、相變らずの片靡きの脊梁を少しく傳つて行つた時、不意と巖頭に蹲つて、下を覗き乍ら、「迎もへえ駄目駄目。でつけえどつ窪だに」。

元氣の充ち充ちた、敏活な彼の顔にも、失望の色が仄かに漾ふた。そして彼れは十數歩引き返した。私はどんな具合かと思つて行つて見ると、如何にも甚いことになつてゐる。急に下向した薄つぺらな尾根先は、俄に恐る可き斷絶となつて、逆に内方へ剝られた巖壁が、向方と此方と對立してゐる。兩壁の間は纔に一丈と離れて居ないけれども、人間の力を以てしては、到底之を渡ることが出来ない。

何うにも仕様がなから、少しく越中側に下つて、石瀑状に懸つてゐる無名の澤の源頭を横過してから、更に脊梁線を目掛けて登ることにした。所がその澤の源頭を下る迄が、よし僅かの間でも、困雜無類だ。上から見下ろした容子では、喬木の幹や枝が、變な具合に纏れ合つてゐて、傾斜は存外急なやうであるから、どういふ風に足を懸けたら好いか、鳥渡見當が付かない。玉作は空身になつて、偵察的下降を初めた。

「降れるづらい」。又吉は「及腰」になつて見下ろしてゐる。

「大丈夫大丈夫。さあ先生降りて來さつせえ」。元氣な聲が繁みの中から聞こえる。私は靜に降り初めた。所が驚いたのは、斜面が餘り急で、殆ど垂直状になつてゐることだ。逆しまにのさばつた枝や、横さまに張り出した幹を掴んでは、樹から樹へと、完全な中吊り状態。何のことはない、猿の動作そつくりだ。一と所太い幹に縋み着いて、踏み止まれる箇所が有つたので、それへ私を待たせて置いて、玉作は復荷を取りに登る。

其れから今言つた澤の源頭を斜に横斷するのが、大分骨だ。勿論一滴の水すらない、石瀑状の所だから、足懸りはあつても、亂雜に重累した大小の石礫は、幾らでも崩れて崩れて始末に終へない。

這はんばかりにして、やつと之を通つてから、更に獐猛な亂暴な攀登を敢てすること少し許り。脊梁に這ひ上つて、尚少しく登ると、第三峯の巔に出る。

こゝも前二峯の頂の如くに、雜樹の疎らに生ひ立つた、幅の狭い窮屈な所で、別に休憩したり、眺望を恣にしたりするやうな氣が出なかつた。それよりは、ちつとでも早く前進し度いといふ念のみが、胸一杯に溢れてゐる。巔から少し許り進むと、又々尖鋭な、屈曲に富んだ、赤裸々の鎌尾根が前途に横はる。恁ういふ風に續々とひどいのが迎へて來ると、初めの間のやうな鋭敏な、刺戟を覺えなくなつて了つて、又うるさいことだと云ふ位な、遲鈍な感覺に過ぎなくなる。例の通り足掛りを刻んで、覺束なく渡る。

西の空に瀰漫つた亂雲は、愈濃厚になつて、重々しい雷鳴が聞こえ出した。間もなく第四峯に達して、それから少しく雜木の中を分けると、鞍狀の低地がある。それを過ぎて尚少しく上下すると舟窪乗越だ。不動堀澤と東澤との間にある無名の鞍部から、こゝ迄僅かの距離を、殆ど三時間程も費して了つた。もう五時を大分過ぎてゐる。

七、舟窪乗越

此處も名稱の如うな、乗越らしい地貌を爲さぬ。然し今朝から亘つて來た乗越中では、一番穩やかな所である。何んしろ今夜は、是非この邊で露宿をやらなければ、もつと先きへ進んだ所で、果して適當な地點が見付かるかは疑問であるし、今朝來の經驗から類推しても、到底覺束ないことは、殆ど明瞭な事實のやうに思はれるから、如何にかして小舎を造らなければならん。所で人間本來の階梯的累進の慾望は、何れの場合にも發露するものかして、成らうことなら、熱い飯と汁とに有り着き度いといふことになつた。今朝立ちがけに、針木澤の源で、綺麗な水を水筒に一杯詰めて置いたんだが、そんなものは私一人丈の飲料にすら足らない。特に遠慮ばかりして、一滴もその供給を仰がなかつた二人の男は、朝來完全に何等の飲料を用ゐて居ない。彼等の甚だしく渴を覺えてゐることは言ふ迄もないが、其能く此處迄耐へ忍び得た體力の強さには、全く驚かざるを得ない次第である。そればかりでなく、斯く迄謙讓の態度を持した兩者の美德に對して、私は感謝の念を捧げるよりも、寧ろ其聖い心靈を仰ぎ度いと迄思つた。

地貌偵察の爲めに、又吉は北方へ、玉作は南方へ、壁を立てたやうな斜面を下つて行つた。私はその薄つぺらな脊梁の上に、一切の荷持と共に待たされた。その間にも、どちらから良好な地點を見出して呉れれば好いと思つて、切りにその報告を待ちあぐんだ。大凡十五六分間も経つてから、玉作は掻き登つて來たが、「水は有るが、迎もへえ野宿は駄目で御座んしづ」。今迄これ程態度を崩して疲勞の狀を現はした彼を見たことがない。急に凹んだやうな感じと、衰へたやうな底光りとをした彼れの眼元には、それでも微笑が漾ふて居た。彼れの云ふ所に據ると、つひこの下の茂みを一としきり突切れば、もうずつと赤裸々の懸崖ばかりで、五六町躡り降ると、少しばかり美しい水が流れてゐるけれども、若し雨でも降れば、何時土砂が崩壞して來るか知れないから、小舎掛けなどは危険至極だといふ。

所で又吉は何うしたのか、一向歸つて來ない。定めて水が見付からないんだらうが、ぐづぐづして居つては日が暮れて了ふから、無理にでも此處へ小舎を掛けて、飯だけ今の所で煮いて來るやうにしたら宜からうといふことに二人の話が決まつた。幾ら疲憊しても玉作は矢張り快濶だ。伸び上つて大聲に連呼した。私も大に呼んだ。すると遙かの下で、幽かに答がある。水は有るかと聞いて見るが、どうも明らかに通じないらしく、頻りに駄目駄目と云ふやうな答が聞こえる。

臆てやつて來た。どうもあちら（北方）は、幾ら行つても中々容易なことで、水を得られさうに

ないと云ふ。それでは矢張り今言つたやうに爲ようと云つて、その窮屈な狭い尾根へ小舎を造ることにした。玉作は鍋に米を入れて、先つきの所へ下つて行つた。又吉が獨りで丸小舎の骨格を建てゝゐる間に、私は地平準ならしとさうして焚物集めとをやつた。出来上つた小舎の眞後からは、直ぐ壁立状の斜面が落ち込んでゐて、若し暴風でも襲来しようものなら、一と堪りもなく、深澗の底へ吹き落とされさうな模様だ。

暫くして玉作は、湯毛の立つた鍋を下げたて歸つて來た。日は既に蒼茫と暮れかゝつて、こゝ幾十里に亘る無人寰は、愈々閑寂深沈の至境に入る。今夜程悪い場所は無いが、それでも先あ憊うやつて、悠寛身體ゆっくからだを休めることが出来るのは、何よりの幸福だなどゝ話してゐるうち、遽に濃霧が襲来して、先きの程から大分途絶えて居た雷鳴は、一時に激烈な騒ぎ方を初めたかと思ふと、大滴の「霧小便」を先驅に、素晴らしい驟雨となる。三人は桐油めいどの「前戸」を深く垂れて、丸くなり乍ら、屋根裏からぶら下げた提燈の明りで、暖い晩食を濟ませた。雷鳴は峯々谿々に間斷なく轟き渡つて、時々この哀れげな小舎も破裂するかと思はれる程の強烈なのが交る。この時の雨量は、恐らく非常なものであるらしく、屋根の桐油を鈍染にじんだ滴りが、ぽたりぽたりと座上に落ちかゝる。飯をすっかり拂ひ盡くした空鍋を、外へ抛り出して置いたが、束の間すくに八分目程も雨水が溜つた。空罐に白樺の枝を突き刺した杓で、その水を掬つて一口飲んで見ると、氷のやうに冷い。

「この神立あすで、明日の陽氣も好からずい」。

さしも悽烈を極めた大雷雨は、九時前になつて、ぼつたり歇んで了つた。すると冬の空に見るやうな、沍え沍えした月が中天に凝つて、谷風はぞつと膚に寒い。

二人を先き寝させて、私は獨り紀行の整理をやつて居たが、九時過に玉作はひよいと半身を起こしてぢつと額を壓へ乍ら俯向いてゐる。どうしたかと尋ねると、腹が痛むと云つて、大分苦痛の模様だ、朝來の食物では、別に何も變つたものを取らないし、これは屹度生水を飲み過ぎたんだらうと氣が付いたので、さう云つたら、如何にも先つき、餘り喉が乾いたので、思ひ切り飲んだんださうだ。私は用意の藥品を與へて、兎に角凝乎安靜じつとにして居つたら宜からうが、寒いやうなら外套を貸して上げやうかと云つたが、そんなにして貰はなくても好いと云ふ。

暫く經つてから、便を催ほして來たと云つて、小舎を出て行つた。先あそれにしても、彼の體格の強健さは驚く可きもので、一度通じがあつてからは、頓に元氣を恢復して、平常と異なる。今のは能く利くお薬だなど云つて、頻りに感心してゐるのが可笑しい。

此の夜も充分熟睡することが出来て、十三日の朝が仄々と小舎を包んでゐるのも全く知らなかつた。二人の話し聲にふと目が覺めると丁度五時だ。曉の空には、一片の浮雲もなく、脚下遠く縦に展ける高瀬の深壑の向方、槍ヶ岳を中樞にして、左右へ伸びた連山は、まだ曙のうす色に、仄青く静まり返つてゐる。玉作は昨夜の態度に似もやらず、至つて元氣で、又吉と二人して、ゆふべタ立に濡れ盡くした薪へ、火を點けようとして、頻りに苦心してゐたが、やつと焔の上り初めた頃、槍の半身が旭にぱつと紅く匂ふた。續いて大天井、燕、三岳、不動の頭も、眞紅の華やかな輝きを發つた。小舎の背後から高く威壓してゐる蓮華、針木の半面も、等しく朝日の強い紅に燃え立つた。

八、舟窪岳

舟窪乗越の幕營を徹して、いざと立ち上つたのは七時三十分。けふこそは烏帽子迄抜けられるだらうが、數日來概觀して來た所によると、南へ行く程、山は漸々高くなつて居て、その上脊梁が馬鹿に長いやうだから、案外經歷は困難であるかも知れないなど云ふやうな感が起きる。けれどこの爽快な天日に支配せられてゐる影響で、何といふことはなしに、限りの知れない快さが胸一杯に溢

れて、如何にも勇氣凜々といふ心地がした。

けふの手初めは舟窪岳であるが、一體この山は、遠望した所で、まことに平凡な圓い貌であつて、東南、不動澤に面した部分が、烈しい懸崖を削り落としてゐる外、満山總て蒼翠に包まれてゐる。此方からの登りは、それでも中々急峻だ。左の脚下は東澤に臨んだ例の大絶壁で、右は雜樹鬱密、到底足を踏み込むことは出来ない。丁度きのふの不動堀澤の下りを逆にしたやうで、その崖頭傳ひの危険は、昨日來少しも變らぬ。一步を誤つたら、生還復期す可からずといつたやうな形勢にばかり、間斷なく壓迫されづめである。

時々稚草に被はれて、至つて迂り易い、胸を突くやうな急斜面が現はれて来る。這麼ところを斜にでも突切るんだつたら、迎も前進は不可能と思はれるが、眞直に登るのだから、まだしも堪へられたものだ。先へ行く又吉の踵が、又しても私の額へ當りかゝつて困つた。憊うした單調な繰り返しを、厭き厭きする程長く忍んでみると、やつとのことで最高點に登り着けた。それが九時十五分。

頂は随分大きく、草地に唐檜が群れをして並立つてゐる。けふは早くから積雲が湧いて、薬師、赤牛、黒岳附近は、もうその上半を、蒸し暑さうに蔽はれてゐる。針木蓮華にも白い輝きのある霧が、蓬々と靡き掛る。私は此處で別に展望の絶大觀を期待するやうな心はなかつたから、山に霧の掛るのを左程厭なことゝも思はなかつた。緑の美しい草の上へ尻を下ろして、南方の一部をスケツチした。それは不動岳と南澤岳とが眼近に高く對聳してゐる凹間からの烏帽子岳が、堪らなく面白かつたからである。何んのことはない、紫褐色の葉牡丹が満開した所を、横から見たやうな具合に、上開きになつた所謂烏帽子岩の骨格の奇は、恐らく決して他に索めることが出来なからうと思はれる。

半時間餘りしてから、不動乗越に向つて下つて行つた。脊梁の左靡きになつてゐる状態は、例の通りであるが、測量當時に切り開いたらしく思はれる跡が、唐檜の木の間に残つてゐるのを見つけたから、少しく右倚りに、その深叢の裡へ這入つた。此時私は偉大な救助でも得たやうな心地になつて、大安定といふやうな感が意味もなく溢れた。その上、今迄照り付けられて、焦げさうだつたのが、急に木蔭に入つたものだから、清澄な冷やかな空気は、快く膚に觸れて、天界の森の床しさと、静けさとを、熟々味はずには居られない。

これが爲めに、餘程助かつたけれども、時々新しい枝が出て居たり、灌木がうるさく邪魔をしてゐたりするので、その度毎に、已むなく危険崖頭を傳ふた。這麼ことばかりを繰り返すんだから、全體から謂つて單調ではあるが、既に一昨日來の、困難な危険な長い長い脊梁傳ひを経て來たことであるから、現在の安樂さに思ひ比べて、少しも不平は兆さない。憊うして不動乗越に下り着いたのが十一時十五分。

此處は尖鋭な、山脊の凹鞍部に過ぎなくつて、迎も尻を落ち付けて休憩などする餘地もなく、又乗越せさうな地形でもない。唯冬期積雪の多量な時にばかり、少數の獵夫が、不動澤から南澤へ越すさうだ。又吉も幾たびか是れを越したことが有るといふ。

九、不動岳

不動堀澤岳や、東澤ノ頭や、舟窪岳あたりから此の山を仰ぐと、如何にも骨組のしつかりした、堅牢な風貌を備へてゐて、殊にその薄つぺらさうな頂の、平らかな線條や、巔邊の少しく赤禿げてゐる色調などは、稍著るしい特徴として、いつも私の頭に往來してゐる。

前にも言つた通り、一體不動堀澤から是れへかけて、不動澤の源流地域を半碗狀に包んだ一帯の大側面は、總て白色の斷壁であるといつても宜い程で、きのふの午後、不動堀澤の巔を後にしてからは、殆ど絶えずこの崖頭の縁邊のみを半圓形に縫つて來た譯である。

不動乗越から直ぐこれの登りに掛る。一般の状況は、舟窪の下りと同様で、あれを逆にしたやうな具合である。そして切り開きの跡を辿ることが、煩雑な枝の爲めに、甚だしく阻害されて、時々その恐ろしい崖頭の縁邊へ出なければならんやうなことも、全く同じ型だ。

恚うしてずつと登ると、途に小い尖峯がある。頂には農商務省三角點の中央標石ばかりが残留してゐる外、別にこれと云つて著しいものは何んにも無い。近くの深叢の裡に、餘程の以前露營したらしい一笏の平地がある。多分測量當時の遺跡だらうと思はれるが、普通行客では、到底こんな所で充分な野宿は出来ない。焚物は幾らあつても、水に困るからだ。

此處で暫く休憩して、更に急峻な脊尾根の攀登を續ける。東澤や舟窪あたりから、斜に見たこの脊梁は随分長かつたが、倅實際を踏むに及んでは、愈その長いのに驚く。危険な、單調な、厭き厭きする心持を忍び乍ら、ひたすら登つて行つた。そのうち絶壑を隔てた不動堀澤や、その左肩から突立する七倉の頭に、重々しい霧がずつしりと掛つた。當面に打ち仰ぐ我が不動の頭にも、濃霧が静々と去來してゐる。

何んでも晝にはあの頂上でと、豫定して置いたんだが、中々さうは行かぬ。今言つたやうに、傍から見て想像したよりは、案外手間が取れて、まだ乗越から半分程しか登つて居らんと思ふのに、もう晝を過ぎた。それで脊梁の一と所、僅に腰を下ろせる程の地點を見付けて、水無しの中食を済ます。此の數日來、中食にいつもこの流だ。烈日は又しても濃霧に閉されて、微弱な、冷い冷い風が、深谷の底から掠めかゝる。

思つて見れば、今時分に此邊迄でも登つて來られたのは、距離の割合から云つて、全く非常な好成績とせねばならん。昨日來經過したやうな状態であつたら、迎も迎もこの半分さへ難かしいのに、絶え絶え乍らにも、あの切り開きがあつたならこそ、大に助かつた譯である。私達は食事の最中にも、絶えずこんな事を話し合つた。

大に登つて、もう頂上に間が無からうと思はれる邊から、猛烈な偃松が初まつた。例の切開きの遺跡として、鉈の痕が所々の枝に名残を止めてはゐるけれども、餘程古いものと見えて、何の役にも立たぬ。私達は何處をどう掻き分けて行つたら宜いか、殆ど手の着けやうが無いので、一方ならず手古摺つたが、仕方がないから、よい加減の所を矢鱈に突切つて進むことにした。ゆらゆらと長い、横倒しの枝を踏張つて、獰惡な立泳ぎの苦行を、暫くの間試みたが、段々と密集の度が加はつて來て、迎も埒が明きさうにないから、一寸左に切れて、斷崖狀の危険な斜面を横に「斫つ」た。一時は肉體の動作に變化が出來たので、やれやれと思はぬでもなかつたが、何んしろ手も足も、間斷なき充分な注意のもとに動かさねば、身命の危険といふものが、絶えず窺ひ寄つてゐることであるから、甚だ心苦しい。

こんなことなら、まだしも偃松の方がましだと云つて、又その密集團に闖入した。大分登つて行くと、二三丈の岩石が、頭の上へぬつと低く突き出て居て、その下には疊一枚程の廣さに、砂を平準して少しく凹ませた跡がある。熊かくらじゝかの寢所だといふ斷定は、又吉と玉作との一致する所であつた。

此の岩の横から廻つて、その頭に這ひ登り、又長い偃松を分けて泳ぎ登る。この邊からは、切開きの跡が著しく明瞭で、幅三尺ばかり一直線に開いてある。しかし徑四五寸の、先きをぶつ截りにされた幹や柯が、鹿柴式に隙間なく下向してゐるから、唯うるさい葉が無いと云ふ丈で、骨の折れることはさう違はない。と左手つい脚の下の崖に、鳥渡した凹みがあつて、何にか褐色のものが丸くなつてゐる。

「やい、こら」と玉作は、杖で松の枝を叩き付けて怒鳴つた。刹那に私は大いくらじゝの寢てゐ

るのだといふことを知った。ひよいと頭を上げた奴は、驚いたの驚かないの、灌木の茂みの中を、ヒューヒューと妙な聲で鳴き乍ら、飛んで行つた。背中の毛皮は大きく縦に波を打つて、面白い程巧妙に疾驅する。見るまに七八十間程も向方へ突進したが、大い崖の端へ出たかと思ふと、ちつと立ち止まつて、耳を二三回ぱたぱた動かさせ乍ら、靜に此方を見てゐる。

「手を舉げて振つてゝやれや、へえ何時迄だつても、凝乎見てやがるに」。

又吉が恚う云つたので、私は手拭を高らかに翳して、打ち振つた。成る程見てゐる哩。又吉も振つた。玉作も大に振つた。三人は暫く立ち止まつて、這麼娛みに餘念がなかつた。私は双眼鏡で熟々と彼れの相貌を覗いた。恚ういふ具合だつたら、何の雜作もなく撃つことが出来ると又吉は云つた。

行く手を見上げると、偃松はまだまだ長く續きさうだ。之れでは中々骨が折れるから、しゝの逃げて行つた跡を辿つて、登つて行かうぢやないかと、左に切れて、その灌木の中を進んだ。所がしゝの飛んで行つた容子では、何んでもないやうだつたが、人間が歩くとなると、中々どうして實に惨いものである。夜叉の枝が縦横に手酷しく妨害をして、一と歩進むことさへ非常な手数と苦心とを要するので、殆ど前進が出来ないと云つて宜い程だ。時々左へ外れて、削り立つたやうなざらざらの崖面に、足掛りを刻んでは登つて行つた。

恚ういふ風に、色々なことをして變化を付けないと、實際單調な、長い長い間の、而も苦闘は到底忍び難いものである。やつと少しばかり傾角の緩やかな、砂地の斜面へ出た。今んまの先掻き登つて行つたらしくらじゝの蹄の跡が、幾つも残つてゐる。この斜面へ登り着いてから、間もなく頂上の中央部へ這ひ登ることが出来た。丁度三時だ。

頂は東面の幅員が狭い代りに、南北へ大分長く延びてゐて、附近一帶、老人の禿頭のやうな色をした淡赭色の砂が擴布して、偃松は極く疎らである。そして所々、壯麗な岩石が著しく露出してゐるが、北方に偏した部分では、稜々とした一大巖頭の形勢を呈してゐる。此處がこの峯の最高點であらうと思はれるけれども、三角標の跡すら見當らない。

この頂は、以北數峯に見ることの出来ない、床しい高山相を、確に具備してゐると思つた。三人はあたりに腰を下ろして、一服やつてゐるうち、霧は愈濃厚になつて、西南の空、自身達より一段高い南澤岳の頭を、たまさかにばつばつと現はすばかり。そのうち不動澤の大斷谷から、颯々と霧雨を冷く齎して來る。所で何處かに水は無からうかと、廣い頭を歩み廻つたが、ずつと南へ倚つた所で、圖りなくも三角標櫓の儼立してゐるのを見つけた。

「這麼低い所に三角點があらす」。玉作は見下げたやうな云ひ方をした。

標櫓の近くは、一帶の長大な偃松で、何んだか水でも溜つて居さうな所が有るやうな地形なんで、あちらこちら探して見た。松の下蔭には、巨大な岩磐が一面に起伏して居て、恐ろしい窪みが、無數に暗く裂けてゐるけれども、一滴の水すら認めることが出来ない。

標下で又尻を下ろした。霧は時々窓のやうな隙を明けて、あちらこちらの山容をちらちらと見せて呉れる。双眼鏡で覗くと、南澤の肩の邊に、大分多量の雪があるやうだけれども、霧の爲めにどうも思はしい觀察が出来ない。又吉と玉作とは、けふ中には是非ともあの雪の所迄「はたき」上げねばならぬなど、快濶な調子で語り合つて居た。

半時間足らずで標下を辭した。もう三時半になりかつゝてゐるが、夕方迄にあの雪の所へ這ひ登るのは至難らしい。若し途中で日が暮れたら、生米でも噛んで、一夜を凌がねばらんかと思ふと、馬鹿に心細い。それに霧雨は厭にしとしと繁吹いて來て、何んだか自分の心境を象徴してゐるやうに思はれて仕方がない。

南方の脊梁を下り初めると、もう直ぐ長大な偃松が、伏兵のやうに前後左右を取り圍む。然しこゝ

にも三尺幅程の切開きの跡が歴存して、傾斜もさ迄急でないから、極端な苦闘といふ程のことはない。

それでも例のぷつ截りにされた太い枝が、無数に乗出している上を、ゆらゆらと覺束なく踏んで行くんだから、さう容易くは抄取らない。私は愈不安の念に襲はれた。

一としきりこの獰惡な偃松を潜り抜けると、ざらざら石の崖や、滑り易い草の斜面や、ぱりぱりになつて、衣服を引き裂くに妙を得た夜叉やらが、交みに前進の邪魔をする。それでも先あ、以北の數峯を亘つて來た時のやうな大危険、大困苦といふものは無いんだから、幾分安樂と云はねばならん。

然し前途にまだ南澤といふ、不動以上のものが傲兀して居て、それを征服してからでなければ、露宿は出來ないといふ場合なんだから、不安で不安でどうにも仕方がない。

やつと濁乗越に下り着いたのが、四時三十五分。此處も不動乗越に能く似て、唯尖鋭な凹鞍部といふに過ぎない。一寸立ち止まつて記載を濟ませたゞけである。

十、南澤岳

唯もう今夜の露宿のことばかりが氣になつて、仕方がないものだから、直ぐ南澤の登りに掛つた。ざらざらの急斜面や、偃松や灌木などが、交互に攀登を妨害して、その上しとしとした霧雨が、殆ど絶えず濺いでいるので、不安と杞憂との念が、烈しく湧いて來る。然し攀登の程度は、一昨日來の惡戦に、色々な道具で、充分攻め盡くされた揚句のことであるから、さ程難澁とも思はなかつた。

私達は沈黙の儘、ひたすら登りに登つた。そして五時過、漸う南澤の二等三角點に這ひ登ることが出來た。此處も頂上は砂地で、可なり廣やかである。雨は歇んだが、霧は相變らず深い。南の方に、烏帽子岳の奇形が、ぼつとほんの一瞬間見えた切り。あたりは茫々とした灰色の世界だ。

此處から觀ることの出來る重もな山岳の推測表は次の通り。但し不動とさう違はない。

(北方) 白馬、旭、鑓、赤澤、スバリ、針木、蓮華、不動堀澤の一部、舟窪、不動等。(七倉は不動の爲めに見えない)

(南方) 烏帽子、三、三澤、赤、黒、赤牛、赤澤(三岳の左肩に遮ぎられたかも知れぬ) 大天井。中川屏風、燕、東澤、餓鬼、唐澤等。

(西北方) 黒部別山、劍、立、龍王、大鷲、奥大鷲、越中澤、藥師等。

(東方) 淺間、吾妻、白根附近であるが、此の方面は甚だ頼りない。

それにしても今時分に、此處迄來られたのは、意表外の好成绩で、從來の状態から考へると、如何なことがあつても、登る途で日が暮れて了ふか、事によれば、濁乗越迄にもう暗くなるかも知れないといふやうな、心配は有つたんだが、こんなに早く埒が明くなどは、實際不思議でならぬ位である。三人は標櫓の下に尻を下ろして、頻りにこんなことを語り合つた。

休憩十分間の後、直ぐ東南の肩部を目指して、露宿地點を見付けに下る。先つき不動から、霧の間に見た雪のある所を、何うでも探し當てねばならぬと、ざくざくの砂に被はれた急斜面を、一しきり迂り下ると、少しく緩やかな山懷のやうな所に出る、霧は徒に蓬々と彷徨ふて、どうも思はしく附近の様が見えないが、何んでもこの邊から南の方へ少しばかり行けば、屹度見付かるに違ひないと云ふので、狭霧の仄暗い裡を、すたすたと南に向つた。

間もなく、我々の期待して居た地點に出喰はした。其處は非常に具合の好い所で、東の大斜面には巨量の殘雪が堆く懸り、西には一體の長大な偃松が、濃やかに連なつてゐる。そして中間は一帶の平地で、綺麗な御影の砂が、心地よく擴布されてゐる。この地形を一瞥した刹那、今迄の烈しい

杞憂の念が、倏忽と消え去つた反動として、私は限りなき大悦の念ひに、胸が迫る程の感を抱いた。悦しいも悦しい本當にこれ程嬉しい思ひをしたことは、決して無かつた。祖父の種池附近で、又吉に邂逅した時も、自分はなぜ這麼に泣蟲になつたんだらうと訝つた程、強烈な喜びの哀感に撲たれたが、今はあんな鋭い、閃きのやうな感味で無い代りに、底力のある、永續的な快感が渾身を領じ盡くしたのだ。

残雪の下端に當る所の砂地に穴を穿つて、飲料の準備に、水晶のやうな雪解の水を溜めたり、小舎掛けをやつたり、焚物を集めたりしてゐるうちに、日は蒼茫と暮れた。霧は名残なく霽れて、星影は美しい。葉末の露に霽れた衣類を干して、山のやうに積んだ薪を熾に燃やし乍ら、ゆつくり之に當つた時は、全く形容の出来ない、大安定といふやうな心地がした。眞實山に入つて以來の大快感である。既往の複雑な、長い長い經歷を回顧するの快と、もう此處迄來れば、以南はよし少數の登山家によつても、兎に角討査された地域であるから、概況は分つてゐるし、困難な所は一つも無いといふやうな安らかな念ひとが、混淆ごつちやになつて絶えず頭を往來してゐる。連日の疲勞ちつとなどいふことも、これが爲めに名残なく打ち消されて了つて、もうもう嬉しくて嬉しくて、殆ど凝乎して居られない程である。二人の男も矢張り同じやうな心持であるかして、頻りにそんなことを語り合つた。

高山の闇は刻々と深くなつたが、その闇を破つて、景氣よく燃え立つ焚火の有様を、遠方から誰れかゞ見てゐたら、嘸面目いことだらうと思つた。そして何んだか針木岳の、マヤクボベースで露營を張つた時と同じやうに「陣營の篝火」といふ感が意味もなく溢れた。記載や紀行の整理に大分手間が取れて、寢に就いたのは十時前。沍え沍えとした月は、いつの程にか寒く中天に凝つてゐる。

十四日午前五時過、いつものやうに、小舎の外で焚物に火を付け乍ら語り合つてゐる聲に目が覺めた。ほかほかと暖い寢袋から出るのが懶かつた、が矢張り大自然の曙の風象に憧れる念ひの方が強烈なので、直ぐ飛び出した。日はまだ昇らないで、深沈と静まり返つた冷い空は、實に快く晴互つてゐる。不動岳の左の肩先から、高く峭り立つた蓮華岳は、全く透明な桔梗色に染んでゐる。顔を洗はうと思つて昨夕堀つて置いた雪の下端の穴の所へ行くと、水は皆砂地に滲み込んで了つて、一滴もない。夜の寒氣にかつちり氷り着いた雪は、日が高く登る迄、もうその珠のやうな水を滴らさないのだ。

荷物の整理をしてゐるうちに、旭は後方に高く突立つた南澤の美しい頭を淡紅に染めた。大虛の一角に結晶したやうな少量の卷雲も、ぱつと紅い輝きを發つた。食事の濟んだ頃、日光は既にこの小舎の邊迄も氣持よく射しかゝつて、都の冬の晴れた朝のやうな心地がした。

けふは野口五郎迄の豫定だから、別に急ぐことは要らないと、ゆつくり煙草を吹かし乍ら、暫くは既往の經歷めいめいに就いて、各自の斷片的な感想を語り合つた。此處を引き上げたのは八時五分前。これから以南の山脊傳ひは距離の長いに關はず、至極安樂で、全く別な世界へ抜け出たやうな心地である。殊にこゝから烏帽子迄の間といふものは、遠望しても解る通り、一帶の寛大な平坦地であつて、神苑でも辿つて行くやうな感じがする。

十一、烏帽子岳〔前號圖版「烏帽子岳」參照※〕

自分がこの山に就いて、甫めて具體的な考へを有つたのは、この度の旅行中のことで、又吉や玉作から、細かい物語りを聞いた時以來である。そしてその眞體を明らさまに觀望し得たのは、赤澤岳（スバリ岳の北）の絶巔で、更に詳細な眺を恣にすることの出來たのは、針木岳の最高點であつた。その時からして、この山の獨特な風貌＝つまり平つたい、寛つたりした緑の山脊へ、石筍

式の絶大な立巖が一基、轟乎と突立つてゐるといふその奇姿は、絶えず自分の頭を去らなかつたのだ。殊に舟窪岳から望んだ時などは、前にも記したやうに、立巖の頭が上へ擴がつてゐて、全く天に向つた巖の花の満開といふ、奇抜絶特な形態を示してゐたものだから、一方ならず心が動いた。

三段に分けて見た今回の計劃中、最も困難な第二段落も、既に圓滿な完了を告げて、これから最後の、一番平易な、第三段に入らうとするのであるから、無限の快感は、昨夜來少しも減退せぬ。此の心は確に永續的のものに相違ないと思つた。

[『山岳』第7年第1號より ※]

南方に向つて少しばかり、偃松の切り開いた間を行くと、當面には烏帽子岳峯頭の、灰白に輝いた大巖柱が突立つてゐて、その左の肩から赭い三岳と三澤岳との頭が見える。それから更に左へ倚つては、燕から餓鬼唐澤へかけてのぎざぎざした頭が、つひ眼の先に峭り立つてゐる。高瀬の谷へはまだ日が射し込まないで、深い谷間は、灰白けたやうなコバルト色を刷いてゐる。



辻村伊助氏撮影

烏帽子岳

偃松を抜けると、廣い緩斜面の砂地になる。此處を猶少しく南へ進むと、烏帽子岳の東方に傾いた、平遠寛大な山懷には、無数の小隆起、小窪地があつて、青草や偃松の群團などが、美しくこれを飾つてゐる。そしてその窪みの所々には、さゝやかな綺麗な涯水が、幾らとも知れず、明鏡を磨き出してゐる。全く天界の樂園だと思つた。

憊うした地形は、以北の山脊に絶えて見ない所で、恰好の「野陣場」は、幾らあるとも知れない。這麼ところに小舎を作つて、ゆつくり滞在でもしたら、何んなに面白からうなどゝ、三人は語り合つた。晩秋のやうな爽やかな日光を満身に浴びて、柔い青草の上を音もなく、靜に歩み乍ら、此處を南に貫いて、砂地の快濶な小隆起上に出た。烏帽子の絶大な巖峯は、日光を眞面に受けて、もうほんの頭の上に聳え立つてゐる。

此處に一切の荷物を置いて、玉作と私と二人で、その巖壁に向つた。餘り人の行かない所と見えて、岩の裾は何處もひどい偃松や、密集した灌木だらけである。これを一としきり潜つて、南の方から掻き登ることにしたが、眞下から仰ぐと、巨大な岩角が、今にも剥げて頭上へ崩れ落ちさうである。そして巖面には、どこにも足擦れの痕が無いから、槍岳の穂先より少し困難なやうに思つた。それで僅かばかり西に廻つて、比較的突角の多い部分から這ひ登り初める。玉作は先きに立つて、クライミングの模範を示して呉れるのだが、さなきだに巧妙な彼れは、全くの空身と來たのだから、その角を掴んで、するすると登つて行く具合は、全く猿の如うだ。この邊はどこの部分でも、無論危険が伴ふけれども、是非通過しなければ、先きへ行けないと云ふやうなのと違つて、唯登つて見

る丈けなんだから、胸中に不安の念は少しも無い。

十五分間足らずで最高點に着いた。そこは巨大な巖皺が縦横に裂けて、寛やかに腰を下ろす程の餘裕すら無いから、況して三角標などの立つて居さうな筈もない。展望は非常に快濶で、西北の空高く聳拔する立山は、連日眺め來たのと、ずつと違つた形になつてゐる。劍も無論輪廓の烈しい突兀は失はないけれども、感じは餘程變つて了つて、立山の右肩から、一劃の區別を付け乍ら、上半を躍出してゐる。

つひ北方の眼下に當る南澤から不動、舟窪、不動堀澤、七倉へかけて、ひどい脊梁の屈曲を描き乍ら、蓮華、針木の双壁に結び着く。針木の左肩からは大スバリ、赤澤、ずつと遠く鑓、白馬、旭の列岳が、今紫の透明な陰影を染めて、鮮やかに連る。針木峠の上方に見えてゐる鹿島槍が、スケツチの間に雲の被ふ所となつたのは残念だ。

黒岳山脈も餘程近くなつたが、殊に赤牛の赭い頭は、もうほんの鼻を突き合はさんばかりの位置にある。大天井から中川、燕へかけての連峯も、ずつと近づいて來た。しかし南方は、三岳、三澤の赭色をした嚴つい肩骨が高く連つてゐるので、以南の峯々は見えない。

今度は北東の方から廻つてずり下つた。この方が先つき登つて來た所より樂なやうである。赤裸々な巖壁状の部分の部分を少しく下つて、灌木や偃松の密集した急斜面を、僅かばかりの間下降すると、間もなく荷を置いといた所へ歸り着けた。其處には又吉が、くらじゝの毛皮を砂の上へ敷いて、暢氣さうに煙草を吹かし乍ら待つてゐる。餘裕のある行樂といったやうな感じがした。

又南進を續ける。前方の聊左寄りには、破片岩ばかりで築かれたやうな、小さいピークがある。南方から縦走して來る人々は、烏帽子を打ち止めとして、あれの頂上に登り、今私達が踏んで來た、所謂烏帽子岩の天柱を、其處から見物するのださうで、天柱の頭へは餘り登らないといふ。私はそのピークの頂へ、態々登つて見度いとも思はなかつたから、右側を南方へ貫いた。すると廳て偃松に取り圍まれた平坦な場所に出た。こゝは先つき通つて來た、天界の樂園式地點に次いで好野宿地で、駒草採りの連中は、高瀬川の葛湯からこれへ登つて、陣を張るんださうだ。

食糧の缺乏を補ふ爲めに、玉作を此處から葛湯へ遣はした。草鞋、鑓詰などの一部を桐油で包んで、偃松の陰に隠し、残りの是非無くではならぬ物丈け＝それでも中々重量がある＝を又吉一人に背負はせて、南へ南へと爪先登り。別れしなに玉作は、けふ葛湯で買物を整へといて、あすは必ず黒岳迄追ひ付くといふ。幾ら健脚だつても、葛湯から黒岳迄、然も重い荷物を背負つて、一日に通すことは出來まいから、あすは一日五郎で畫でも描いて待つてゐると云つたが、五郎で何の畫を描くやうな所があるものか。それより黒岳へ行きや、幾らでも好い所が有るから、さうした方が好いと云ふ。又吉も傍から「この男は脚が丈夫だで、按じは無えだ」といふ。乃ち行動に關しては、一切彼等の劃策する所に任かせた。

北を向くと烏帽子岩は、舟窪あたりからの上開きと違つて、鋭角三角式の絶大な尖巖を峭り立てゝゐる。餘程硬い、剛直といったやうな感じの風格である。あれで今一と息高かつたら、もつと威嚴を備へ得たらうと思つた。北西に連る立山々脈のうち、越中澤岳が別けても私の眼を惹いた。それは連日眺めて來たのと、全で違つた形相を見せてゐたからである。鮮麗な綠色の被髪を飾つた幾つかの大支峯が、左右からも前から、靠れ掛るやうに主峯を護衛してゐる状は、從來に見られなかつた森嚴の態である。

行く手＝南方＝には三岳の崇高なる尾根が、幾重にも疊み返へされて、赭く立ち蟠つてゐる。「あゝ見えても、行つて見れや、存外樂だに」。又吉は荷の重くなつたのも、一向苦にならぬ風である。

けふくらみ暢氣な歩き方は、實際無いと云つて宜い。ざくざくの砂や、地盤に締り着いたごろごろの岩や、可愛い高山植物などを踏んで、緩漫な脊梁をてくてくと靜に登つて行く。昨日一昨日あたりの悪闘から比べると、全で公園でも歩いてゐるやうな心地である。

○會報 會員登山報

○榎谷徹藏氏は國境脊梁縦斷の目的を以て八月三日大町より籠川峽谷に入り、豪雨の爲め白澤附近に於て滞在全二日半。六日扇澤本谷を溯りて祖父岳の種池に出で、附近の山梁に露宿。七日祖父岳の南北兩峯、布引ノ頭、鹿島槍岳を窮めて、再び前夜の地點に露宿。八日岩小屋澤岳に登りて新越乗越に露宿。九日は風雨の爲め蟄居。十日鳴澤岳、赤澤岳、大スバリ岳、小スバリ岳を亘りてマヤクボのベースに露宿。十一日針木岳、蓮華岳に登り、北葛乗越より針木本谷の源に下りて露宿。十二日再び北葛乗越に逆行し、七倉岳、不動堀澤岳、東澤の頭の脊梁を傳ひて、舟窪乗越に露宿。十三日舟窪岳、不動岳、南澤岳を越して、その南方肩部に露宿。十四日烏帽子岳を南方より迂廻して登り、三ツ岳、野口五郎岳を亘りて、その南方肩部の窪地に露宿。十五日再び野口五郎岳の絶巔に登り、眞砂岳、火打岳の嶺邊を掠め、赤岳の肩よりその西北方なる山梁に出で、露宿。十六日は暴風雨の爲めに蟄居。十七日黒岳を往還し、赤岳、割物澤岳、鷲羽岳、蓮華岳（三叉岳）双六岳、樅澤岳。前樅澤岳を踏破して、硫黄澤源頭に露宿。十八日左俣岳、槍岳（第二回）を越えて梓川を上高地に下らる。此行、北は鹿島槍岳より南は槍岳に至る迄、國境脊梁に沿ひて、殆ど完全なる縦斷を遂げ、三十餘座の峯頭を窮められたるものにして、水彩畫、周觀寫生畫、スケッチ等繪畫に屬するもの七十三個の外、尚若干獲物ありたる由。

（『山岳』第六年第三號 二〇四，二〇五頁）

7. 田部重治 「小川谷より針ノ木峠まで」『日本アルプスと秩父巡禮』より
大正八年六月八日刊 北星堂発行
昭和五十年十月十四日刊 大修館書店（日本山岳会創立七十周年記念
出版 覆刻 日本の名著）

要 約

大正6年（1917）7月23日～8月2日の記録。後立山完全縦走。

メンバーは、田部重治、小暮理太郎、森喬。

行程は、7月24日 泊驛—小川谷—越戸峠に至る途中で露営。

25日 露营地—越戸峠—恵振谷。

26日 恵振谷—朝日岳。

27日 赤男山—雪倉—鉢ヶ岳—白馬岳。

28日 白馬岳—唐松岳—大黒銅山。

29日 大黒銅山—五龍山（五龍岳）—信州側にて野営。

30日 野营地—鹿島槍ヶ岳—冷の池あたりにて野営。

31日 冷の池あたり—祖父岳—岩小屋澤岳と鳴澤岳の間の新乗越

8月 1日 新乗越—針ノ木岳—針ノ木峠—岩小舎。

2日 岩小舎—野口—大町。

※「…おぼろげな記憶を呼び起こして書いた部分が多いため、定めしの粗漏が免れないことと信ずる。大体において作者は、秩父を描くことに力を入れて、日本アルプスを紹介する事におろそかであった傾きのあることを認める。それは日本アルプスはずで多くの人によって紹介されているが、秩父特に奥秩父は、いまだ記録が少ないと信じたからである。」自序より

泊驛—小川谷—越戸峠—北叉谷—恵振谷—朝日岳—赤男山—雪倉岳—鉢ヶ岳—白馬岳—杓子岳—鍵ヶ岳—唐松岳—大黒鑛山—五龍山—八峯—鹿島槍—祖父岳—岩小屋澤岳—鳴澤岳—赤澤岳—スバリ岳—針ノ木岳—針木峠—大町

シロウマ

白馬の頂上に立つて北望するとき、残雪斑々たる秀峯が、幾つとなく國境に沿ふて聳立して日本海に向つてゐるのを見るであらう。其北端にあつて尚ほ八千尺以上の高度を保持し、嘗て人間の訪づれたことのない幽境を形作つてゐるのは、朝日岳である。木暮君と森と私との三人は、越中の小川谷からはいつて、此の朝日岳へ登り、そこから國境をずつと針ノ木峠まで行かうと云ふのが今度の山旅の計畫であつた。成る可く人の行かないところを行つて見たい。と云つて白馬から針ノ木までも一度通つて置きたいと云ふのが私等の考であつたが、朝日岳から白馬までが、特に重なる目的として、私等の心中に特別の旋巻をたてゝ居たのは云ふまでもない。

七月の二十三日の夜上野發の汽車に乗じて、私等三人は越中、泊まで乗つた。此の度も長次郎外二人を頼むことにして、手紙を出して置いたが、今度は此の前ほどは心配せずに、長次郎が屹度来て居て呉れるだらうと思つた。此度の旅も大抵天候が具合よく行くに相違ないと云ふ希望は、何となくあつた。泊の停車場へ着くと、長次郎外二人は来て居る。金作が飛驒の山へ伐木には入り込んだので居ないが、山田と云ふ剛の者がそれに代つて、外に長次郎の義弟と云ふのがついて来た。

トマリ

泊の町で買物をすると、町が小さい爲め、一品を買ふにも残らずの店を探さなければならないので時間がとれて、買物を終る時分には、晝飯をそこで喰はなければならないことになつた。

こゝから三里の小川温泉の元湯へ行くには、道が二つあつて、山の手の方は道もいくらか近く涼しいとのことで、そこに行くことにした。

今日も片貝谷を登つた初日のやうに暑い。行く手には、朝日岳から白馬までの諸山隠見して、残雪あざやかに見えるので、木暮君は一刻も早く、小川の谷へはいり込んで、残雪へへばりつきたいと云ふ。^{カタクヒダニ} 蛭谷から小川を向ふ岸へわたつて、荒れすさんだ川岸の道を行くと、一里位で小川温泉が見えて来る。こゝは元湯で、昔は、それから二三町奥で営業して居たのが、洪水のため押し流されて荒廢に歸し、泊町まで湯を引いて営業をする傍ら、こゝにも営業することになつたのである。丁度こゝは、綺麗な溪流が右の谷間から小川へ流れ込んで、温泉では其の水を使つてゐる。温泉を通り抜けて、私等は河原に行く。嘗て小川温泉のあつたところは、何の跡方もない一面の河原で、只だ向ふの山側に薬師堂のあつた小高いところが残つて居るのみである。少し行くと右に残雪が土まみれになつて、龜の甲のやうに横たはつてゐる。河原には道らしいものが見つゝいてゐるのは、黒部の谷に砂防工事があるのと、此の奥に炭焼小舎があるからであらう。

温泉を通つた時は、もう四時頃なので、私等は野營の場所を探しながら行つたが、水が濁つて居るので泊れさうなところはどこにも無い。途中川上から下りて来る人にあつてきくと、小川の谷を上り切つたところに、^{コイド}越戸と云ふ峠があつて、そこには小舎があると教へて呉れたが、そこまでは到底覺束ないので、途中に泊る積りで居た。丁度尾安谷の一つ手前の溪の下あたりに草原があつて、そこに綺麗な流れが平たい草原を流れて居るので、そこに泊ることにした。其時は六時過ぎであつた。こゝからは日本海が、溪の末に青く見えてゐる。

私等は初め東京から出る時に、地圖の上で小川谷と黒部川の北叉谷との間の分水嶺をこゝらあたりから越えて、北叉谷の魚止瀧のところへ出て、更に^{エブリダニ}惠振谷を登つて朝日岳に出ることを考へたが、こゝへ来て見ると、それは不可能ではないが、こんな急なところを人夫に荷物を背負はせて引張り上げて、又急なところを下るよりは、^{コイドタウゲ}越戸峠から迂回した方が遙かに時間の上から云つても、早いだらうと思はれた。こゝは未だ低いので其夜は温たかであつた。

七月二十五日。今日も昨日に劣らぬ上天気である。こゝから越戸峠まで近いやうで中々遠い。綺麗な冷たい水はこゝから先の道のほとりにいくらかもある。峠の頂上からは、白馬の朝日岳一帯の山が、俄然として残雪うるはしくあらはれ、そこから越中へ引いて居る嶺が長くこちらへつゞいてゐる。流石はこゝから白馬へ取附いて、信州へ抜ける昔からの道の如何にも自然的であることを想はせる。こゝに立つて小川谷と北叉谷とを比較して見ると、何と甚だしい相違が兩者の間に見出されることであらう。小川谷は見渡すかぎり荒れ切つて、目立つて立木らしいものとはなないが、北叉谷はそれと打つてかはつて、見やる隅々翠緑したゝるやうな潤葉樹と針葉樹との鬱蒼たる潤ほひをもつて蔽はれてゐる。

私等は峠の頂上の小舎の前から、北叉谷へ降りかけた。すぐ下に溪流が潺々の音を立て、其上の方に小舎のあとがある。それから、しばらく此溪流に沿ふて下ると、あたりは見るからに涼しい木立である。北叉谷へ降りついて見ると、それは想ひがけぬ大きな河原をもつた、ゆつたりした溪流なので意外に感ずる。そこから私等は、溪流を北より東へと遡つて行く。流れは中々水量が多くて、急なところは徒渉六ヶ敷く、一度、私は危ふくも流の真中で腰挫けやうとして、案内者の差し出した杖によつてやつと事なきを得た。時とすれば、岸が狭り合つて、水勢急に、時とすれば岸が開けて、それが緩に、しかし大體に於て事なく一里位も行つたと思ふ頃、河が急にうねつて、それから先は盛んな絶壁の間を物すごい瀨をなして、其行方はどうなつて迂ねつて居るか窺がふことは出来ない。

私等はそこの広い河岸で休んで、晝飯を喰つた。山の根方にはウドが澤山あつたので、それを味噌の中へ入れて煮て喰つたのは何よりの御馳走であつた。こゝは朝日岳と白馬との間の嶺つゞきが見える河中には珍らしいのびのびした廣場で、野營でもすれば殆んど理想的なところと云つてよい位の好位置である。私等は前途に行く先を塞ぐものがあるにもかゝらず、一層の愉快を以て之を見つめて居た。可なり休んでから、川の東岸の國境からせまつてゐる嶺へ小さな澤から登つて、其様子によつて行く先を決することとして、私等はそこをがむしやりに登つた。そして、やうやう今迄見えなかつた奥の方が見えるやうになつて、見やると驚くべし、此の長い瀬が、うねうねと、嘗てより誰にも窺はるゝことなく限りなく迂つて、其兩岸はいつ行つて盡るか分らない壁をなしてつゞき、其壁の上の立木は、つかまつて行くことは殆んど時日の上に於て不可能であるほどに繁り合ふて、やがては流が其間に行方が知れずなつてゐる。

そこで思案の末に、私等は、私等の登つてゐる嶺を高くへと登つて行けば、惠振山について、更に朝日岳の西より少し南にある二千九十八米突の高地を経て、朝日へ行くことが出来るにきまつて居るから、そして行けば、どこかのたるみに水があるだらうと云ふ見當をつけて、嶺を無暗に立木を分けつゝ進んだ。しかしこゝを登る辛さは、一通りではなかつた。別に切分があるでもなく、たゞ眞一文字にそこを登山の初めの元氣に任せて、枝にぶつかつてはそれを折り、下草はそれを踏みしだいて登るのであつた。時々誰か分けて行つたと想はるゝところが無いでもないが、それはさうでなかつたらしい。

丁度夕暮に迫つて來た時分に、前方に霧の間から殘雪らしいものがあらはれて來たので、それを力にして行くと、下の方から長次郎が私等を呼んでゐる。木暮君が下りて聞くと、長次郎の考では、此嶺を登つて朝日岳へとツづくのは、非常に困難である。又今夜の夜營地と定むべきものが、果して此の嶺にあるかどうか分らない。それよりも、此の嶺を左に降りて、一つ小高いところを越すと、朝日岳から出ている溪流が見えてゐる。それを行く方が、此の嶺を苦しんで登るよりも、遙かに得策であると云ふのであつた。折角こゝまで來たのを、溪へ下るのは惜しいやうな氣がしたが、私等のこゝを登るのも、實はとりとめもない考であるし、且つは長次郎の行かうと云ふ惠振谷は、矢張りこゝまで登らねば、下の方からはとても行けさうにもないから、こゝでまで來たのも損はないとあきらめて、急なところを木につかまりながら左へ下りた。

しばらく下りると澤があつて、甘露のやうに冷たい水が流れてゐる。それを飲みながらしばらく休んで、小高い小さな嶺を一つ越すと、すぐ惠振谷へ來る。丁度、ついたところが平らだつたので、そこにテントを張つた。まだ暮れるには時間があつたので、人夫の一人がヨシナをどつさり取つて來て、それで味噌汁をこしらへた。ここは北叉谷の更に支流ではあるが、水量の多いこと驚くばかりで、流れの兩岸の翠綠が驚くばかり豊富に、潤葉樹が空を蔽ふてゐる有様は見事で、私は秋の紅葉のどんなに美はしいだらうかを想像せずには居られなかつた。そして私は、私等がはいり込むことの出来なかつた北叉谷の奥の深さを考え、未だ人跡の到らぬ黒部川の流れの先々の神秘的なところを考へて、殊に黒部川と云ふ流れの支配してゐる力の偉大なることを、感ぜずには居られなかつた。

七月二十六日。今日も矢張り天氣である。木立の茂みで蔽はれてゐる川面が、ほのぼのと明けゆく。私等は七時前に出立して、川傳ひに上りはじめた。水は深くて氷のやうに冷たい。岩は大きく早月川のそれにも劣らない。途中雪溪が落ちたばかりのところがあつて流れが濁つてゐる。河は二つに分れて右に行く。しばらくすると瀑又瀑がつゞいてゐる。斯う云ふところはとても眞直には上れさうもないが、長次郎にはそれが最も得意のところなので、殆んど傍へからむやうなことはさせないで、先に立つて私等を引張りあげて呉れる。雪溪へかゝつたのは午後であつた。

丁度雪溪の終る時分に、私等は休んでゐると、長次郎と岩次郎とが、右の方の小高いところへ行

つて地勢を見て來ると云つて登つて行く。しばらくすると、岩次郎は熊だ！ とよぶ。驚ろいて仰ぐと「そこへ子を連れた熊が行く」と云つて、私等の上の梓や偃松の間を指さして居る。私等は急いでそれを見に行くほどの勇氣もなく、ぢつとしてゐる。二人は上つて、五六町右の高い平原状の上に休んでゐる。しばらくして二人は歸つて來る。「どうだ、面白さうな山か」と問へば、「こゝは熊の山だ」と云つて、長次郎は遠いところに三十貫ほどの熊が草を喰つて居るのが見えたと話す。私等はそこから左の方の草の斜面を上つて行つた。登つたところは、美はしい草原状をなして、それから更に上ると頂上は右の方に見える。

頂上へついて遠望すると、こゝは思ひがけぬほど美はしい山である。北の方に梅らしい針葉樹で一面に蔽はれた面積の大きい山が見えるのは、長梅山ナガツガヤマであらう。北叉谷はそこから出る水を集め、それから更に北の方奥深くまで入り込んで、神祕不可思議の絶壁の間を流れて居るのであると思へば、益々黒部川の神祕の無盡藏であることを想はせる。東南には、姫川の支流大所川の別れが蛇の様に喰ひ込んで、深い溪谷を形造つてゐる。白馬一帯の山々は、白雪洗つたやうに冴えて、暮れかゝる空に、清浄無垢な姿を聳びやかし、越戸峠を越えて私等の登り來つた溪谷は、豊富究まりなき深林を以て埋もれて居る。そして見廻はすこゝの山の近くには、あちこちに高原らしいものが取巻いて、小さな池がそちこちに明鏡を開いてゐる。しかし私等は此山を訪れることは如何なる方面からするも、容易でなく、勞多く、且つ危険であることを知つて、それだけ、こゝにゆかしさを感じざるを得なかつた。私等は野營地を探したが、もう暮れるには間もないので、こゝから赤男の方へ降りて行く方に残雪が多く、其の傍らにある草地には、丁度、水があるに相違ないと思つて降りた。果して水があつたが、草地だと思つたところは、凹凸が多くて多少困つたが、今更、仕方がないのでそこで泊ることにした。

暮れるにつれて、そこから見た白馬一帯の山々は、益々残雪あざやかに冴え來つて、凄慘の色彩に一種の身震ひを感じしめる。全く、その一夜は寒くて寝られぬほどのものであつた。

七月二十七日。こゝまで來るのに豫定以上の時間を要したので、今日は無理しても白馬まで行かなければならない。こゝから、藪と残雪とを少しく降つて、又残雪と藪の間をのぼる。一峯を越えると間もなく赤男山にかゝる。赤男山から向かふは、山がだんだん険はしく、一峯を越えると又一峯があつて越後側に美はしい平があつて池がある。それから愈々雪倉にかゝつて登り切ると、彼是れ正午である。雪倉の雄秀な姿を歎美しながら、頂上から、白馬を見やると、登山客が、頂上を上下してゐるのが小さく見える。東京から出立する際は、丁度今日あたり白馬に登る豫定の海軍經理學校の學生が數人あつて多分それらしいと云ふので、雙眼鏡で見ると、洋服が白いので果してそれと判断する。雪倉から鉢ヶ岳ユキクラまで來る途中、右に残雪があるのを融かして休んで晝飯を終る。鉢ヶ岳から白馬へかゝると、白馬にある一行がそれを知つたらしく、こちらの方へやつて來る。會つて見ると、まさしく一行であつたので、互ひに無事を祝しあふ。

頂上へついて、越して來た方を見返へり、又南方の諸山競ふて立つてゐる有様を見ると、何とも形容することが出來ないほど豪壯の感じに打たれる。以前、來た時には霧で見えなかつた杓子岳、鑓ヶ岳カシマヤリ、鹿島槍ヶ岳タケ一帯は云ふまでもなく、立山、劔岳の一帯も悉く一瞬の間に浮んで、劔戟を連ねてゐる。しばらくして、そこからすぐ下に新らしい木造小舎が立つてゐるところへ行くと、一つばいの人で、舊小舎もはいる餘地もないので、あちこち探したあげくに、遂に信州への降り口から少し横へはいつて岩の蔭になつてゐるところに野營することにしたが、こゝもテントを張つて見ると平らでなく、且つ思つたほど温かではなかつた。

七月二十八日。私等は、今日は大黒鑛山まで行く豫定を立てた。併し私等の本當の目的は、昨日で終つたことを感じた。之から先き針ノ木峠までは、あまり珍らしく無いほど人が通つてゐるので、私等も只一度通つて見てもよい位の氣持で出掛ける。丁度テントをたゝんで出掛けた時には、經理

學校の一行も、亦、鑿ヶ岳を越えて其下にある温泉で泊るべく道連れとなつて出掛けた。杓子岳を越え、鑿ヶ岳を越えて、天狗ノ小舎場と云ふ平らな水のあるところへ出て、こゝで一行と別れて、私等だけ晝飯を喰つた。こゝまでは白馬からは三時間位のものである。私等は、此日は、いつもよりは遅く出掛けたのである。こゝから出て、唐松岳^{カラマツダケ}までは、今にも岩石が落ちて来さうな危ない斜面を逃げるやうに通つて行く。唐松岳へついたのはもう四時頃で、大黒鑿山事務所へ行くことも分らないで、まごついて嶺通を行くと、そこに鑿山への道をこしらへてゐる人が居て、嶺へまはらないで直接に行く道を教へて呉れたので、それを下つて行つた。少し降りると、鑿山事務所が谷深くに見えるが、こゝからはなかなか遠い。日が暮れる時分に、残照の間に立つてみた立山、劔岳の印象的な鋭い光景は、今も尚ほ忘るゝことの出来ないものである。途中ですつかり日が暮れて、細い小道から新道^{フガハダニ}にうつつて、大分かゝつてやつと事務所に達した。私等は事務所で感じのよい待遇を受けて、小川の谷以來はじめて、あたゝかい一夜を味ふことが出来た。

七月二十九日。今日の出發は可なり遅れて八時過ぎになつた。私等は五龍山^{ゴリウザン}に登らんがため、そこを流るゝ澤を上つてしばらくして右をのぼつた。初めは草の斜面を登つて、終ひには針葉樹の間を分けた。道はつゞいてゐる。それについて行くと、やがて偃松があらはれる。五龍山の頂上へついたは彼れ正午であつた。そこで残雪を融かして晝飯を喰つてから、偃松の間の尖岩多い危ないところを幾度となく通る。八峯の嶮を通らなければならぬことを知つて居るので、又しても八峯かと思つて通ると、案外造作ないので、もう八峯を通り過ぎたのではないかとも思ふ。こゝいらでは中々泊まるによさゝうなところが無いので、せめて雪でもあつて平らなところがあれば、とまることにして、丁度、五時過ぎに信州側に平らなところがあつたので、そこをならして泊ることにした。そこが殆んど嶺の上とも云ふてよい位高いので、其夜はこゞえる位寒い思ひをした。

七月三十日。今日こそ八峯が無くてはならないといふ感じが皆の胸にとゞろいた。そこを六時四十分頃出立して三時間位行くと、一難所がある。それを越すと、突然、山の裂目があらはれて、私等の進行はすつかり杜絶されて仕舞つた。それが八峯だつたのである。私等は其一端の一方の偃松に坐して、長次郎がどう始末をつけるか見て居た。長次郎は荷物をそこへ置いてそこを降りかゝつた。岩次郎はそこから下の方の降り口を捜しに行つた。長次郎はその岩につかまりながら裂目の間に降りて行つたと見ると、姿が見えなくなつて仕舞つた。私等は上から其裂れ口の底を見やうとしたが、そこからは見えない。しばらくたつと、長次郎は猿のやうに向ふの壁を登つて居るのが見えたと思ふと、もう向ふ端に登つて仕舞つた。私等は大聲で「行けるか」と云ふと、「行ける、行ける」と答へる。しばらくすると、彼は「こゝは八峯ぢやなからう。もう少し先へ行つて見て来る」と云つて、ずんずん進んで行く。岩次郎は少し下から廻つて、向ふ峯へついて、長次郎のあとへついて行く。私等は其の間休んで居る。大分経つて今度は、二人とも長次郎の通つたところを眞一文字に返つて來た。そこで問題は、どうしてこゝを六人とも通るかにあつた。長次郎はこゝを通ることを主張したが、岩次郎は危険だから少し下へ廻らうといつた。尤も岩次郎でも、綱さへあれば、上を通ることに反対は無かつたのであるが、生憎、短かくて仕様の無い細引が一すぢしかないので、大勢は少し下へ降りてそれを越すことに決した。私等は先づ晝飯を喰つて、そこから二三百尺降りると、丁度、岩次郎の越したところがある。そこも中々容易ではなかつたが、殆んど二人の力で向ふ岸へ渡ることが出来た。しかし向ふ岸へ達しても、それから上へ登るのは容易ではなかつた。荷物を背負つては登れないところがあるので、三つの荷物を剛力の岩次郎が代り代りに細引で引張りあげる。こんなことで大變時間がとれて、嶺へ登りついたのは大分遅かつた。嶺へついてから人夫は水が飲みたいと云つて、雪を見廻せどこにもない。しばらく鹿島槍^{カシマヤリ}の方へ登ると、信州側の斜面に雪が少し見えた。しかしとても人間では降りて行かれさうにもない。長次郎はそれを見ると、取つて來ると云つて、飯盒をもつて斜面を飛ぶやうにして、雪を一つぱいつめてもつて來たのには

全く驚いた。

雪を喰つて元氣づいた一行は、しばらくして鹿島槍へ急いだ。頂上へのぼるまでの途中は、流石に高山的な面影をもつてゐる。頂上は流石に寒いので、焚火をしながらあたりを見廻はすと、今まで窮屈な思ひをしながら、こゝへ来て、流石にのんびりした雄大な高山的な心地に打たれる。そして私等は、こゝでむしろ信州の平原の方の日に日に變つて行く光景や戸隠方面の眺望にみとれた。日が暮れかゝつてきた。冷タノ池で泊まる豫定で急いで行くと、私の足袋がこれまでにすっかり破れて、岩角で指を痛めて居るので、それが偃松に觸れると屹驚するほど痛い。丁度、途中右手に平らな草原がゆつたり開けてゐるところに、人夫が谷を指さしながら熊が見えると云ふ。私はあせりながら進んだが、足が痛い爲め後れて、到頭それも見損なつた。前方には祖父岳^{ヂイダケ}方面に黒雲がかゝつて、電光が閃めいて雷鳴がして居る。木暮君が獨り先を急いで、もう姿が木の間へ消えて行く。冷タノ池らしい處へ来ると、水がなくて雪が一つばいに蔽ふて居る。ひどく失望したが、外に泊るところもないので、そこに一泊することにした。

七月三十一日。明くれば、天氣である。野營地から祖父岳へ行く間には、非常の偃松があつて、其間を辿ると、大きな味噌の固まりが、偃松の間に落ちて居る。あとで針ノ木峠の下で、越中の案内者、平藏に會つてきくと、平藏が落したもので、どこで落したか、それも知つて居なかつたと云ふことであつた。祖父岳から向ふは、國境がぐるりと西南の方へ一大迂回をしてゐる。

大黒鑛山から此の方水がなくて、雪を融かしてばかりゐたが、今日は午後に越中側の草柔かい窪みに水の流れてゐるところがあつて、附近には岳蕨の多いので、はじめてそこで晝飯を甘く喰ふことが出来た。それから先は霧がかゝつて来て、岩小屋澤岳^{イハゴヤサハダケ}と鳴澤岳^{ナルサハダケ}の間の新乗越でとまつた時分には晴れ上つた。そこから見た立山、劔岳の姿は、今迄の内で最も近く最もあざやかなものであつた。しかしこゝでも雪を融かさなければならなかつた。

八月一日。縦走には大分飽きて來たので、今日は針ノ木の下まで行くかと思ふと嬉しくもある。鳴澤の頂上まで偃松を分けて、それから先は岩石に變つて行く。赤澤岳からスバリ岳に行くと、巨岩累疊して、イハブスマが一面についてゐるのを、人夫等は水を吹きかけて、巧みにとる。ここで温かい日に晒されながら、岩に腰を打かけて晝飯を喰つて、そこから先は、人夫は三人で直接に信州側を降りて籠川谷^{カゴガハダニ}に行き、私等だけ針ノ木岳に行くことにする。そろそろ霧がかゝつて來た。峯頭らしい所を一つこえて險峻な斜面を可なり登ると、針ノ木岳の頂上に達する。こゝは流石に此の山脈中で鹿島槍ヶ岳に次ぐほどあつて、其器が頗る大きい感じがする。私等はそこをしばらくで下り、東南に降つて、更に岩の危ないところをからんで針ノ木峠へ下りることが出来た。峠から蓮華岳を仰ぐと、曇つて居るし、且つ時刻も早くないので、峠を信州へ降りかけた。雪溪は初めは急で危ないから其縁を傳つて行くと、右側には岳蕨が多いので、それをつんで飯盒の中につめて行く。それから先の傾斜が緩なところを走つて見ると、大分雪になれたと見えて、少しも危なくない。丁度雪溪の終るところまで峠の頂上から三十分で來て仕舞つた。信州で拵らへた小舎はそこから間もない。丁度、長次郎外二人が道の入口で待つて居たので、一所に小舎へはいる。平藏も二人の客をつれて、もつと下の方でとまると云ふことで、一寸立寄つて行く。其夜は随分温かく、夜半に驟雨が降つて、春のやうな氣持で目がさめる。

八月二日。今日は大町まで行けばよいのである。小舎から先は、立派な林道が出来て、足をぬらすやうなところはない。道の兩側は針葉樹から潤葉樹、潤葉樹から草へとかはつて行くにつれて、人里に近づきつゝあることを示す。野口へついて、又、以前の茶屋で飯を頼むと、養蠶のために忙がしいとて斷らる。朝のあまつた御飯と、駄菓子と御茶とで一時の間に合せをして、大町の對山館へついたのは三時頃であつた。(大正六年夏)

8. 山崎安治 「黒部川の仙境 近藤茂吉氏の黒部初横断」『山の序曲』
昭和四十二年九月十五日刊 朋文堂新社発行

要 約

大正8年(1919)7月16日～24日の記録。北アルプス横断(剣沢～牛首尾根)。

メンバーは、近藤茂吉。

行程は、7月16日 別山乗越～剣岳。

17日 剣岳～剣沢雪渓を下降～小黒部山頂(池の平か)。

18日 小黒部山頂～池の平山～仙人沢を下降。

19日 仙人沢の下降～黒部川との合流地点。

20日 黒部川横断。

21日 黒部川沿いのルート。

22日 東谷～牛首の尾根。

23日 牛首の尾根。

24日 鹿島槍ヶ岳。

※剣岳と鹿島槍ヶ岳を結ぶ日本アルプス縦断の初の記録。

牛首尾根からの初登頂である。

黒部川渡河の最初の記録、というよりむしろもっと大きく見て、剣岳と鹿島槍ヶ岳を結ぶはじめての日本アルプス縦断記録として登山史上からみても極めて重要な記録である近藤茂吉氏一行による大正八年七月の登山の詳細は今日まで、まったく知られていなかった。その概要は、わずかに冠松次郎氏が山岳第二十二年第二号に発表された「黒部川探勝の経過」の中で「大正八年七月、会員近藤茂吉氏は、剣沢を黒部川に降らんとして果さず、仙人沢を下り、その落口の上手にて、崖上より川中に筏を差し出し、冒険的渡河を強行して、対岸に移り、東谷落口付近を経て、棒小屋沢落口まで入らんと企てられしも、食糧の不足のため、牛首岳の尾根を鹿島槍ヶ岳に登り大町に降られた。」とふれられてあるものによって、うかがい知るのみであった。近藤氏はいまなおお元気で、山岳会の会合にもよく顔を出されるが、黒部川渡河の困難だったことや、牛首尾根の途中で昔の盗伐のあとらしいひとかかえもふたかかえもある巨木が切れ、切り株だけ残されていた話など、しばしばうかがっていた。

黒部川は大正八年夏、古河合名会社の探検隊が剣



大正八年、(1919)七月、黒部川初横断に当り、剣岳頂上に立つ近藤茂吉氏(右端)一行。ドント氏が撮影したもの。中央の坊主頭が平蔵

沢落口付近の水測のため棒小屋沢落口の数丁下まで道を拓き、それ以後次第に人が入るようになったと冠氏も述べておられるが、近藤氏一行の劔沢下降は、その先鞭をつけたものであった。

最近たまたま手に入れた“INAKA”第十一号（大正八年十月発行）に「黒部川の仙境」（Fairyland of the Kurobegawa）と題し、近藤氏とのインタビュー記事が載っているのを見つけた。これは一九一九年七月二十九日付北陸タイムスの記事を抄訳したもので、英訳に当っては、一九一九年八月十五日夜神戸経済会で行なわれた近藤氏の幻灯講演会を参考にしたとスミヨシ・ゴートというサイン入りで注記されている。またそのはじめに、大町にたどりついた近藤氏が劔で別れたドント氏（“INAKA”の編集者）あての手紙（英文）が載せられ、牛首尾根からの鹿島槍の登りの苦心をしるしており、劔岳の頂上での若かりし日の近藤氏の写真（当時三十六才・写真参照）をはじめ、三窓雪渓、黒部川、鹿島槍頂上などの近藤氏の撮影された珍しい写真が飾られている。

北アルプスにて、JAC 近藤茂吉

一九一九年七月二十五日、大町

親愛なるドント氏

ようやく今朝午前九時五分当地に到着いたしました。黒部川渡河は死にもものぐるいでした。黒部を離れてからの二日間は、ほしいで露命をつなぎ、鹿島槍頂上近くまで水を得られませんでした。しかし小生の登山は、黒部川の素晴らしい眺めや、岩や、巨木によって十分につぐなわれました。来月また神戸でお会いし、今月十七日キャンプでお別れ以来のつもる話をするのを非常に楽しみにしております。

明朝東京に向うのでこのノートを残しておきます。五色ヶ原、針の木の山々で存分楽しまれるよう心から望んでおります。

草々

黒部川の仙境

日本山岳会の近藤茂吉氏は、去る七月十二日上野を出発、秘境黒部溪谷を探り、一昨晚帰京された。同氏にインタビューしその登山の模様を語ってもらった。

七月十六日朝、別山乗越の第一夜のキャンプを出発、足ならしに劔岳に登った。翌朝目的とする黒部川を目指し、劔沢雪渓の下降を開始した。十町ほど下ると谷の兩岸は狭まり、黒部別山と仙人山（注・現在の南仙人山であろう）との間の峻しい断崖がせまってきた。この地点から先への前進は、断崖と奔流のためまったく不可能となった。そこでコースを変え池ノ



黒部川付近略図

----- は近藤氏のルート

平山（注・現在の仙人山であろう）を乗越すことにしたが、池ノ平山は唐檜、樺の古木、竹などびっしり繁っており、方向をたしかめるためしばしば木に攀じ登らねばならなかった。このような有様で一時間わずか百間（約二百ヤード）ほどしか進めなかった。遅くなりすぎるのでこの登路を断念し、小窓雪溪を登り、小黒部山頂（注・現在の池ノ平であろう）にテントを張った。

翌朝、池ノ平山の頂を通過し、黒部川に向かって仙人沢を下降した。下るにしたがって十間以上もある巨岩が立ちふさがり、ガリーの雪溪の下端には無数の滝があらわれ、そのため容易な下降ではなかった。ついに七月十九日午後六時二十分黒部川に達し、人夫たちとともに萬歳を叫んだ。仙人沢と黒部川の合流点付近は、八つの巨大な滝がかかり、四番目のものが最も素晴しく（高さ約三百フィート）水量は華厳の滝に匹敵した。この滝に仙人滝と命名した。

それよりも私は、こここそ日本の登山者によって、かつて一度も足跡をしるされていないところだと頭に浮べていた。

七月二十日、私たちは、黒部川を渡河する適当な地点はないかと懸命に探し求めた。河巾は十四、五間から四十間ほどで、兩岸は約千五百フィートから千六百フィートの高い絶壁となり、その上から無数の滝がかかっていた。川の水はエメラルド色で、眼にも止まらぬ早さで流れ、雷のような轟きと、白い飛沫をあげていた。如何にして渡河するか大問題であった。普通なら長い竹ざおで飛びこえられるが、まずいことにその用意がなかった。そこで五間から八間の木を数本切り倒し、切りそろえて筏に組んだ。この筏を適当なところにすえ、その一端を断崖の端から約三間ほど水上につき出し、もう一端を下の峡谷に落ち込まぬよう重い岩石などで重しをのせた。この仕かけは水中に飛び込む飛込板の一種ともなり、同時に横断する河巾を狭めることにもなった。強力の一人在背中にロープの端を結びつけ、激流に飛び込んだ。はじめ彼が荒れ狂う渦の中に巻きこまれはしないかと心配になった。（問題の飛込板からすぐ下の河の中に滝があった）この渦巻は大部分流れの中央部に沈んでいる巨岩と急な河床のためであった。彼は中央に半ば沈んでいる岩をぬって、十間ほどを二十二秒で安全に泳ぎきった。

次に重要な仕事は、八十フィートの二本のロープで、縄梯子、または空中ロープウェイをかけることであった。それによってまず荷物を渡し、ついでつる草であんだ急造の籠で全員を運ぶことであった。実際の渡河に要した時間は二時間であった。伐採作業にとりかかったのは午前八時で、最後の一人が安全に対岸へ渡り終えたのは午後四時—正味八時間を要した。

二十一日、黒部川沿いに岩石の間をぬい、岸の森林中を進んだ。行進は遅々としてはかどらず、しかも骨が折れた。六時間の苦闘の後私たちは僅か十町先の東谷の出合いに荷をおろした。東谷の奥は薄暗く、底力ある音が聞こえ、近づいてみると高さ約百間の三つの滝を発見した。一つはいま一つの上におおいかぶさり美しい水しぶきをあげていた。その奥には、まだ滝があるように思われ、前進は阻止された。そこで引き返し、再び黒部川沿いに溯行し、かつて一度も人間の侵入を許さなかった原始林の中を登っていった。残念ながら食糧の不足と人夫の疲労のため、木暮、中村両氏が探検を企てていることはすでに耳にしていたがこの地点を離れることにした。

（訳注・近藤氏一行と時を同じくして木暮理太郎、中村清太郎の両氏は、鐘釣温泉より樺平に至り、黒部川左岸沿いに仙人沢落口付近に達し、仙人沢の雪溪を登り立山に出ている。一行は最初平の小屋までの溯行を試みる計画であったが通過困難なため断念した。）

鹿島槍を出発して二十四日大町へ下る途中人夫の一人が急崖を約二百三十フィートも滑落したが、幸いにも頭部に軽傷を負っただけですんだ。

（ついでながら、この旅行における近藤氏の案内は、“ブルドック”として知られている芦嶽寺の

佐伯平蔵であった。彼は四十二才、この仙境の最もすぐれた案内者であり、北アルプスの越中方面における権威である。小窓、薬師、穂高、鷲羽、烏帽子、甲州駒ヶ岳、針ノ木、大黒にとくにくわしい。)

〔付記〕 この会見記には、黒部川を離れてから牛首尾根を攀じての鹿島槍ヶ岳登頂、ついで大町への下山については略されているが、文中の日時から推定すると、二十二日の先から牛首の尾根に取付き、尾根の途中に二泊、二十四日ようやく鹿島槍の頂上に立ったようである。途中“ほしい”で辛くも腹をみたし、鹿島槍頂上近くまで水を得られなかったというから、まことに困難な登攀であったといえよう。近代登山史上牛首尾根からの初登頂ということに勿論なるが、巨木の切り株が残されていたということは、かつてこの尾根に足を踏み入れた者のあったことを裏書きしている。このあたりは加賀藩の黒部下奥山廻りの行程に入れられており、天保十四年齋木有次郎の下奥山廻り日記七月十二目の項に「晴天なり、祖父の踊場出立、それよりがきの谷道下り昼弁当。登りそれより後立山谷下り、此道も雨天の節は通路となり難き道なり。後立山登り申すべしと存じ候ども、雪はなはだしき候につき、後立山川原に野宿いたし、翌十三日祖父の踊場へまかり帰り申し候事。」（「黒部奥山と奥山廻り役」中島正文氏・山岳第三十三年一号）とあり、後立山とは越中側での鹿島槍の呼称で、後立山谷とは現在の東谷、祖父谷温泉を基点に祖父の踊場を経てがき谷をこえ、東谷に入り、牛首尾根から鹿島槍に至った奥山廻り役はかなりいたのではないかと想像される。

(一九六四・七)



立山から

9. 榎 有恒 「アイガー東山稜の初登攀」『榎有恒全集 I』

一九九一年五月二十八日刊 五月書房発行

要 約

大正 10 年 (1921) 9 月 9 日～11 日の記録。アイガー東山稜の初登攀。

メンバーは、榎有恒。

行程は、9 月 9 日 アイスメーヤーカリフィルン—東山稜南側岩壁下—山稜露営。

10 日 露営地—ジャンダルム—アイガー山頂—モレイン—

11 日 —アイガーグレッチャー—到着。

※アイガー東山稜の初登攀に成功、反響を呼ぶ。

スイス、ツーン湖畔、紺碧こんぺきの空の下にしばし佇たたずんで東方を仰ぐ時、誰しも氷雪の三峻峯が中空高くそびえるのを見逃し得ないであろう。この三巨峯はユングフラウ、メンヒおよびアイガー(50)である。アイガーは三者の左端すなわち北端に位している。海拔三九七五メートル、形状三角錐をなしている。全山、結晶質の石灰岩より成って、このことはアルプス中でもまれな例とされている。これに登るに南、メンヒの山稜からするものと、西、クライネシャイデックからするものがある。この両者は常に人の登るところであって私も昨年試みたのであった。残された一つの山稜が東山稜である。

いったい、アルプスにおいての先人未登の山頂を極めることは、ウィムパーによるマッターホルンの登攀をもって、だいたい終りを告げたものといつてよかろう。その後の登山者に残された問題は、同じ山であっても、前人未踏の山稜から登ることであった。

このことは未踏の山頂を極めるのに較べて、華々しくはないが、残されたものだけに実際の登攀の困難はまさるとも劣らない。アイガーの東山稜はブリュックナー教授の言葉によれば、アルプス中最も難しいものとのことである。そしてこの山稜は、北側のグリンデルヴァルトの村に対して約一万尺の断崖だんがいをもって屹立きつりつしているので、早くから多くの登山者の心を惹いたものらしく、これを試みた記録は五十年来近くも残っている。

私は一九一九年の秋、グリンデルヴァルトの村に入った時から、一度はこの山稜を自分も試みてみたいと思った。しかし、自分の力がそこまでゆくには、充分鍛えなければならないことでもあり、また研究もしなければならぬとも考えた。谷の反対側に立つファウルホルンへしばしば登っては、望遠鏡を通して岩の様子などを眺め、果たして可能であるかどうかなどを独り空想しているのであった。

二一年の六月、所用あってベルリンに行っていたが、夏の生気がいっせいに野山あふに溢れるのを見ては、山への帰心矢のごとく、前のグリンデルヴァルトの村に帰って、それから二週間ほど毎日のように二五〇〇メートル前後の山に登って、大きな登山へと体を錬った。そして懇意なフェレルのエミールに、アイガー東山稜登攀とうはんの希望を相談した。エミールは言下に、私の技量については問題はないが都会生活後は高山の寒気などに体が慣れておらぬからまず、マッターホルン等へ登って準備してはどうかという。もっともな忠言に、ツェルマツト方面へ登山に出かけようとした時、エミールは不幸にも盲腸炎わづらを病んで、手遅れとあって、重態の床に横たわっていたのであった。見舞いの私を眺めた眼を窓外のアイガーにやって、流れ出る涙を止めかね、榎さん再びといいながら両

手をさしのべて岩登りの様をしていた。生まれ落ちる時から山の中で育っているの、山に飽いてでもいそうなものを、重病の床においてさえ山を思うエミールも、ほんとうに山好きに徹底した男である。私はストイリとブラヴァンドの二人を連れて、ツェルマットに向かい、その地方の登山をした。この方面の登山は、さして困難なものではなく、ただ激しい雪降りのために、天気との根気較べをしたのが、主な重荷であった。

ツェルマット地方の登山は、悪天候のために予期した半分も登れなかったが、帰途、アレッチホルンを登り越えて、グリンデルヴァルトに帰り、再びアイガーを仰いだ。

しかしその岩壁は、新雪に薄化粧されて、美しい夕焼けをしていた。このため、私の希望は消えようとしたというのは新雪の下で、この山稜を試みることは不可能であることを、誰も知っていたからである。だが私はついに試みることに決心して、ただちにブラヴァンドを呼び、私の計画を語った。ブラヴァンドはヴェッターホルンで雷死した名フェレルの子供で、現在村の小学校に職を奉じていた。同君はただちに快諾し、他にツェルマットに同行したストイリをも誘った。ストイリはスイス、屈指のフェレルであって、四〇〇〇メートル級の山を、すでに四〇〇回以上も登っている名案内人である。この二人は常に私と一緒に登山をしているので昵懇の山友達であるが、いまだ一度もともに登山をしたことはないが、どうしてもこの計画から除くことのできない、もう一人のフェレルがあった。それはアマターといい、やはり屈指の案内人であり、フィンスターアールホルンの東壁の初登攀をした記録をもっておった。ことにこのアイガーの東山稜⁽⁵¹⁾に関してはハスラー氏とともに、再度試みていまだ成し得ず、これを一生の念願としていた。九月七日の夕方、三人を私の宿のアドラーの庭に集めて、細々と準備について相談をした。そして翌八日の夕方には準備は全部具わっていた。準備した用品には普通の登山に用うるもの以外特に考案したものがあつた。それは鈎⁽⁵¹⁾の類であつて、村のピッケル作りの名人シェンク 爺さんが、八日いっぱいかかって作り上げてくれた。

一、長さ六メートルばかりの丸大棒。上端に鈎をつけ、下端に三本の石突を作り、その一本は根本を輪にして自由に回転するようにした。これは、岩壁の傾斜面に対し、いつも三本の石突⁽⁵¹⁾を確実に用いるためである。

二、岩の隙間に打ち込んで、手がかりや足がかり、または縄を確保するために用うる鈎四種類、約三十本、おのおの大きさ約二十センチ、それからこの鈎を打つための金槌一挺、他に岩と鈎との間を埋める木製の楔等。

三、縄三〇メートル二本、六〇メートル一本、いずれも英国山岳会証明付きの登山用縄。

四、露営用具、天幕は重いので山稜⁽⁵¹⁾が狭くて張ることができないので持参しなかった。毛布二枚、靴を穿いたまま上から穿く毛布製のカバー人数分、また自分用として皮製シャツ、スウェーター、毛シャツ、ズボン下、毛厚靴下三足、皮手袋、防水布製手袋、防寒帽、新聞紙若干（防寒用）等。

五、コッホアパラート⁽⁵²⁾、一リットル分および四分の三リットル分おのおの一個、アルコール二リットル、魔法瓶半リットル入り二個、一リットル入り一本、ランプ二個。

六、食料としては、生玉子二ダース、焼鶏、焼肉、ハム、ソーセージ、ビスケット、レモン、バター、ジャム、食パン、砂糖、ブランデー、紅茶等。

以上が準備品の大要である。八日の夕方、四人連れ立ってシェンクの家⁽⁵²⁾に鈎等を受け取りに行つ



上端



下端

た。いずれも山にかけては誰にも引けを取らない剛の者であるが、さすがに緊張を感じて沈黙に過ぎることが多かった。

同宿の一英人に諧謔^{かいぎやく}に富んだ人がいて、私に何か形見を残してゆけという。もし墜死したら水晶の箱に納めるといので、その時は側に、彼の顔は日に焼けておったと書いてくれとって笑い合った。いつかベルニナの峠を越してヴェネツィアに下った時、山の強い日に真っ黒に焼けていたので、インドから来たかと問われたことがあった。宿のおかみさんは、このことを傍で聞いて非常に気にし出し、それに明日は金曜日だという。

自分の室にすわって赤黄金色に夕映えするアイガーを仰いではいまさらのように、弱い心に不安が忍び寄ってくるのをどうすることもできない。虚栄のための登攀か、野心のための登山か。そんな気持もどこかの隅にいくらかあるであろう。だがそれが動機ではあり得ない。どうしても登らずにはおられない気時である。それほどに山の魅力は私にとって宿命的というほかはない。一生懸命に力をつくして登る時のことを考えると不安はどこかへ消えて朗らかな、のびやかな気持になった。

九月九日。よく晴れた朝である。片雲すらない空に立つアイガーの頂から煙が昇るように見えるのは雪煙である。森も清^{すがすが}しく、流れの音も冴^さえて聞こえ、日光も震えている。もう何と言っても山里は秋だ。ブラヴァンドは早くから来て、何くれと品物をルックサックに詰めている。私もトリコニ⁽⁵³⁾の^{びょう}鋏を打った靴に足を固め、上衣のポケットに入れる品々まで細かい注意を払って身仕度をした。

宿の主人の幸あれという固い握手。おかみさんはどうしても生きて帰りなさいという。娘さんはカペル⁽⁵⁴⁾に祈るといふ。心温かい人々に送られて、希望に一杯の私は元気よく停車場に向かった。ストイリは一つ前の電車で丸太棒を持って出発した。電車がアマターの家の傍を過ぎる時、家内総出で見送っていたが、妻君だけは地下室の戸を少し開けて心配そうに見送っていた。

八時十五分に村を出た電車は遊覧客や私らを乗せて上り一方で、シャレ⁽⁵⁵⁾の散在する牧場や、唐檜^{とうひ}の林の間を通り、灌木帯^{かんぼく}に出てシャイデックへと行く。この辺は六月中旬から八月上旬へかけては、見渡す限りのお花畑であるが、九月に入っては花も少ない。ただいつも変わらない牛の鈴の音が美しい。スキーによく登る山続きのチュッケンの峯の上に糸のような一筋の白雲がたなびいた。私はそれを見て明日の天気を危ぶんだ。

シャイデックで、ここまで見送ってきてくれた、土地の人々や英国の人達と別れを告げて、ユングフラウ鉄道に乗り替えた。この鉄道は人も知るように、アイガーとメンヒの山腹にトンネルを通じてユングフラウヨッホ（三四五七メートル）に達し、そこからユングフラウやアレッチ氷河の壯観を眺める遊覧鉄道である。このトンネルがアイガーの腹中を過ぎるとき山の東側の絶壁に窓をあけて、下の氷河や、シュレックホルンの雄姿を眺める駐車場がある。アイスメーヤといい、ここで私らは電車^{はつらつ}を棄てて先着のストイリと一緒にになった。初めて四人だけになった私らは元気に潑刺と^{はつらつ}していた。

少憩の後、駐車場の窓のためにあけた絶壁の穴から、崖^{がけ}を縄に頼って下の氷海（アイスメーヤ）に降りた。アマターを先頭にストイリ、私、そしてブラヴァンドという順に縄で結びあつて北東に氷雪の上を進んだ。アイガーの東山稜は、眼前に、灰白色の堅い岩膚を鋭い日光^{さら}に曝^{ごうごう}している。轟々とどこかで氷河の崩れる音がする。動物もおらねば植物も見えない。生物の見えない世界は峻巖^{しゅんげん}で荒寥^{こうりょう}としている。アイスメーヤを東北の方向に登って、さらにカリフィレンに出て、ついにアイ

ガ一東山稜の南側の岩壁の下に達した。各自、分担した荷は三貫目を下らないので、岩壁を登るのに足下に十分に注意を払わねばならなかった。

前述のように、アイガーは石灰岩である。概して岩の面が平滑で堅く、手足のかかりが少なく、登りにくい。この辺は、分厚なスレートの層を斜めに重ねたような感じである。こんな岩壁を登る時は、鋏を打った靴は不向きであって、よく滑る。だからたえず前後の者が注意し合って、滑ったときには、すぐに縄を引き締めて止める。傾斜は六十度ぐらいもあろうか。最後に続くブラヴァンドが、ふと足を滑らした。その打撃で丸太棒は肩から飛んだ。この瞬間、彼はやにわに丸太棒に飛びついて、抱き止め、一緒になって、滑り落ちる。もちろん、すぐに私も他の二人も、縄を引き締めたので、ブラヴァンドは止まった。見れば左腕一体を岩で擦り剥いて、血が滴っていた。この出来事は瞬間のことであった。大事な道具をここで失うことはできない。しかしブラヴァンドのこの勇敢な行為は、捨身でなければできないことだ。簡単な、些細なことではあるが、私は彼の責任の強いのに激しく打たれた。四人は、別段に慰め合うこともなく、あたかも何事もなかったかのように無言で登り続けた。

傾斜は次第に度を増してはきたが、じりじりと確実に登りつめるうちに、午後二時過ぎついに尾根に取り着いた。尾根に出ると豁然として、眺望が開けた。緑の牧場に囲まれた広い平和な谷が二〇〇〇メートルも真下に、途中、何の遮るものもなく展開した。谷の中には赤褐色の屋根が点在して、白い道路がその間を縫っている。グリンデルヴァルトの村である。村の北は牧場が、なだらかに高くなって、ファウルホルンやレーティホルンなどの山続きに陽ざしが美しく輝いていた。微風を受けながら、わけもなく景色に見とれた。こんな高い所から眺めると、人の世界も、縁側からあり蟻の世界を見るよりも小さく、その中の生活も、めいめい勝手な理屈をつけてはいるものの、結局は、大きな自然の懐に、何の区別もなく一様に抱きかかえられて、その摂理のままに生きているのではないか、などと遠い村の印象を思っていると、険しい山稜が、足下から西へ、威圧するように一線を描いて、現実が強い力で迫ってくる。

ブラヴァンドが茶が沸いたと告げる。この山稜は鋭くそげているので、またぐことができるほどに痩せたところも少なくない。休んだ場所も、こんな所であったので、沸かす者も、飲む者も、自分の足場に囚われて思うように動けない。生玉子をすすり、食事をすませて、魔法瓶に熱い茶とコーヒーとスープとを作って入れた。そして四人はふたたび縄で体を結び合って、西に山稜を登り始めた。人の通らない山稜なので、足下から岩石が崩れたり、あるいは逆に出了た岩角を肩を借りて越したりした。出発のときチュッケンの峯の上に現われた雲の予報は事実となって、オーバーメンヒヨッホやエヴィヒシネーフェルト辺から強風が一陣また一陣と襲い出した。そのうちに黒雲の一团が先駆となって、フィンスターアールホルンの頂に当たって逆巻いている。余勢をかった雲は、疾駆して次の大シュレックホルンに当たって乱れる。鋭い岩角の山に当たって狂う雲の有様は爽快、雄大な景観の一つである。不動の堅い山と、奔放な雲との争いは、スケールが大きいだけに痛快である。午後五時、山稜の一地点は、南面して間口が二尺ばかりで奥行が四尺ばかりの穴が、自然にできているのを発見して、ここを露営の場所と決めた。そして居場所を拓げるためには、四人精を出してピッケルを持って、石片をかき集め、幅一尺ばかりの台を穴の口の前に積んだ。こんな仕事もみな傾斜が急なため体を結びあって、各自の足場を守り固めながら、身近の意思を手渡し合って作るものであった。この上にルックサックを置き、穴の中には毛布を一枚敷いた。私が一番優遇されて、一それ

に小さいので、頭を奥にして横になる。私の裾すそにストイリが体を寄せて斜めになる。アマターとブラヴァンドとは台の上に腰かけているのだ。黒雲の群れが切れ間もなく、西南から湧わいて東北に走る。しかし幸いなことには停滞することなく、轟々と、おおぎょうな音をたてて行きすぎるだけであった。この分なら天気も保つのではないかと思われた。

短くなった日は暮れて、余光が薄く雲間を彩る。居場所が、もう少し、ゆとりがあれば山上の夜もいくぶん、気やすくなるだろうに、なにぶんにも窮屈なので、冷たい、峻厳しゅんげんな力が私らを、しっかり包んでいる。不自由やみな闇の来る前にと、焼鶏をむしり、スープやコーヒーを飲んで美味い夕食を終えた。ストイリとアマターは空になった魔法瓶からに、再び茶やスープを沸かして入れた。日が暮れきると風も雲もだんだん烈はげしくなって、雪さえ降ってきた。粉雪が目にも耳にも吹き込む。私らは持ってきた防寒具を全部身につけた。蓑虫みのむしのようになって、お互いに笑い合っている。岩陰のピッケルにかけた山ランプだけが懐かしく光る。時折、雲が切れる。黒い空が現われて星が輝めく。みんな喜びに声を挙げて、ヨーデルを歌う。ブラヴァンドは喉自慢のどである。ストイリはかすれ声で合わせる。アマターはホホーと合ふいの手を入れる。するとまた吹雪が寄せてストイリのパイプの火だけが赤い。

アマターは、一個の山ランプをとぼして、山稜の北側の雪に穴を掘り、その中に置いた。村から見えるようにと考えたのであるが、強い望遠鏡で認めたと後で聞いた。ブラヴァンドと私とは山稜に立って美しく輝く村の燈火を眺めた。道端の電燈くびは頸飾りのように連なっている。村も安らかに、一日の勤労を忘れようとしている。すると村の北側の牧場の中に突然に強い光の燈火がついた。ブラヴァンドは許嫁いいなずけのとぼした火だといって、じっと見詰めている。またその時、村から花火が揚がった。一つ二つ三つと、紫に赤に黄に、細い尾を引いて消えた。音は聞こえない。今度は、ぱつと青色の火が燃えてだんだん赤色に変わってゆく。場所は宿のアドラー辺りである。これはホテルの客達や主人が、庭に集まって私らの行を盛んにしてくれたのであった。

村の燈火は次第(56)に消える。マーク・トウェンの口調を借りるならば、世の人々は皆、温かい眠りにつくものを、何の因果で、この山稜の寒風さらに曝されて夜明かしせねばならぬだろうというところである。しかし私らはそれどころではない、明日を期して緊張して待っているのだ。

私らは山稜から下りて穴の中に身を横たえた。ストイリはもう高たかい躰である。アマターとブラヴァンドとは黙然としてすわっている。一時間ほどうとうとして眼を醒さますと、二人はすわったまましきりに腕を振って寒さをしのいでいた。雲間からは半月が凍ったように現れる。三人は思わずブラヴォー、天はまだ己達おれたちを見捨てないぞと叫ぶ声に、ストイリも醒めて一杯飲もうと言う。お酒ではない。脂肪分の勝った熱いスープを魔法瓶から飲んだのである。ストイリとアマターとは席を替えた。こんな風に終夜、二時間ごとに温かい飲料をとり、ヒュレル達は交互に席を替えて休んだ。私も交替しようと申し出ても、ヘル(57)はそこだとばかりに聞き入れない。すまない思いをしながらも前後四時間ぐらいは眠った。この露营地は雪線の上に出ているので寒さがきびしい。ことに風に曝されるときははなはだしい。三枚の皮、毛、防水布の手袋を重ねた上に靴下までまとうても手が凍えた。

九月十日。朝は晴れやかに静かに来ることを欲する。しかし天は凶暴な日を与えることもある。この朝はまさしく荒々しいものであった。私らはただ与えられた天気みちに柔順に服して、力を尽くすだけが許された途であった。午前六時、毛布等の露営具を穴に残して四人は結び合って行動し始め

た。アルプスではたいてい早朝からランプの光を頼りに登り出すのであるが、この山稜は、それには危険すぎたのでこの時間まで待ったのであった。狭い稜線の上を雲の走る崖がけを両側に見下しながら渡ったり、突き出した岩角を登るのに肩を借りたり、それでも手がかりのないときは頭の上にまで立って越したりした。およそ三〇メートルばかりの突起を越して小さな鞍部あんぶに達した。標高三五〇〇メートルぐらいの所であろうか。この突起の所をジャンダルム(58) (Gendarm 前衛) といっている。ここまでは、今までのこの山稜の登攀とうはんを試みた人達は登っているのであるが、この上に急に、そそり立つ瘦せた絶壁やがこの人達を追い帰した難場である。私らはこのサッテルで小憩した。下のアイスメーヤの上に乱れる雲に乗って山鴉やまがらすが三羽ひるがえっては輪を描いていた。ここで私らは隊伍の順位を変えて、先頭をアマター、次がストイリ、三番目がブラヴァンド、そしてしんがりそが私といった順にした。今まで使っていたのは三〇メートルの縄であったが、倍加して六〇メートルとした。この陣立ては各自仕事の分担から作ったのであった。いうまでもなく四人一隊となつての協力一致の行動ではあるが、主として第一を第二が、第三が第四を補助して難場に当たろうというのである。私らはすっかり身支度を終えて登り出した。岩壁の傾斜は八十度に近いだろうか。私らは屹立きつりつする瘦せ尾根の稜線より少し北側に寄った壁を登るのである。それに層が下に向かって傾いているのですこぶる難物である。石灰岩のために、岩の表面は割合に手がかりや足場が少ない。あるいはまた、凍結してようやくついている岩片が、体重をかけると剥脱はくだつする。ことに逆層の断面の大きなものは、我々の身長では攀じ登るにどうしようもないので、この時に丸太棒を使った。丸太棒を岩壁に立てかけ、石突を確実に岩の隙間すきまに立てて、二番のストイリが体の重みと力を尽くして寄せて支える。第三と第四と一緒に支えれば好都合なのであるが、三人集まるだけの足場がないので、おのおのの場所で、縄を岩の角にかけて、第一と第二の動作を警戒して備える。ストイリに支えられた棒に先頭のアマターはストイリとの間の縄を長く延ばして、その中間を棒の先のかぎ鉤にかける。これはアマターが登るときに万一足を滑らしたり、手がかりを失って落ちることがあっても、その強い打撃が、直接に足場の悪いストイリに来ることなく、まず鉤によって、勢いを殺ぐためなのである。このようにしてアマターは、棒と縄とに頼って登り足場を求める。凍りついている不安定な岩石片をピッケルで打ち落とすのであるが、それが下の三人に当たる。三人は狭い足場に立って岩壁に身を寄せているので、これをかわすことができず、顔や手の甲に当たって傷つく。アマターが片足をかけるだけの足場を見出すか、または作ると、それに片足を与え、体を棒に寄せながら、さらに他の足場を探したり、作ったりする。もし足場がどうしても悪いときには、岩の隙間に鉤を打って楔くさびで止めてそれに依る。そしてストイリのために足場を作る。それができるとストイリは棒を伝ってそこに達する。あるいはまた岩壁の傾斜がはなはだしくて、棒を立てかけるだけの傾斜のない場合には、輪のついた鉤を岩に打ち込んで、その輪にさらに縄の輪をつける。その縄の輪に棒の石突の三股みつまたを引っかけ立てかけるのである。それをストイリが支え、アマターは心配気もなく登って手がかりを探している。アマターが確実な足場に立つと、はじめてストイリもそこに登り、次にブラヴァンドの登るのを助けるのである。第四番目の私は登りながら棒を持ってゆく。片手では登ることができないので、さらに補助縄を上から下ろして私の体に結ぶ。そして上の三人が助けて、引いてくれる。であるから私の体は、時折宙に浮いて釣り下がることがあった。このような労作を寒気と風との激しい中で繰り返して、わずかずつではあるが、確実に登りを進めた。時間を忘れ、恐怖を忘れ、四人はただ一生懸命である。一五〇メートルを登った。その間一回、岩

壁に擦り寄ったまま食物を取った。また各種の鉤をそれぞれ必要に応じて使った。そしてその後五〇メートルの最も急峻な、ほとんど直立といった感じを受ける場所に達した。ふと耳をそばだてると遠雷の音がする。こんな所の雷はまったく避けようのない危険なものだ。おい、ブラヴァンド、雷が来たようだと言いかけると、耳を澄ましていた彼は、否、雷ではない、私らの落とす岩石片が宙を切る音だという。言われてみればいかにもそうだ。そのとき、突如としてアマターのルックサックが宙を切って、唸りをあげて雲の中へ落ちていった。カタストロフ！と稲妻のように頭の中に光って、手の縄を固く引きしめた。アマター、どうしたと叫ぶ。するとアマターは上方、岩の陰になって見えないが一向に落ちついた声で、何、ルックサックが落ちただけだ。ヘルはどうかという。元気だよという声にまたも労作を続ける。この難場の二〇〇メートルを登り終るのに、朝の九時から、午後の五時までかかった。ついに山稜の傾斜は次第に緩やかになってきた。

私らは勝った。その岩壁に、ストイリは一九二一年九月十日と刻した。二〇〇メートルを八時間の登攀は、一時間ほどの長さにも感じない。緊張の仕事は時間から超越する。私らはブラヴォーを呼んだわけでもない。ただ四人互いに固く手を握り合った。ここでストイリは棒を短く切って、その端にハンケチを結んだ。アマターは石を積んでその棒をたてた。残った鉤や金槌等は皆棄てて、ルックサックを軽くした。雲が切れて東方に大シュレックホルン。そして東南にフィンスターアールホルンが夕陽を浴みていた。しかし夕映えの景観も、すぐに雲に蔽われてしまい、私らは再び登り出して雪の山稜に達した。午後七時十五分前、ついに頂に立った。日はすでに沈み、メンヒの頭に近く半月がかかっている。西方、足下に一六〇〇メートルばかりの崖下に、クライネシャイデックとアイガーグレッチャーの駅の燈火が見える。フェレル達三人は声を合わせてエホーを送った。かすかな返事のエホーが下から返った。私らは頂上に五分とは立っていなかった。順をアマター、私、ストイリ、ブラヴァンドという風に変えて、西の山稜の氷結した斜面を下りた。雪や氷の場所は光線の反射で足下も明るい。一度、岩壁にかかると、時刻が山歩きには遅いのを痛感する。それに、日中、解けた雪の水が、凍りついて、岩面をエナメルのように薄く覆っているのは足場に悪い。アマターが山ランプをさげて下るが、その光は、三番、四番の足下までは届かない。最後のブラヴァンドは一通りの苦労ではない。このアイガーの西の稜は、クライネシャイデックから仰ぐと、傾斜五、六十度ぐらいの様な壁のように見えるが、実際はそう簡単ではない。私らは暗いために、山稜の辿り方を誤った。左すればアイガーグレッチャーの三〇〇メートルぐらいの断崖にはばまれ、右すればグリンデルヴァルトの谷へ直下する一〇〇〇メートルからの絶壁の上に出て、前には二〇〇メートルからの崖がかかって、どうしても下ることができない。私らは少なくともここで、一時間半以上も再三登り、再三下りして行き悩んだ。ルックサックの中には僅少の食物が残るばかりである。飲料はブランデーはあるが他に何も無い。それにアマターのルックサックが落ちてしまったので、欠乏が予期以上にはなはだしい。私は烈しい渴きを覚えた。ストイリはバタをすすめてくれた。バタが渴きを癒すことはこの時はじめて知った。闇の中を下るのはなかなか思うように進まない。月光が洩れるときは助かるがすぐに隠れる。雪もちらつく。右に左に四人の姿が動いているが判然としない。岩の暗さに吸い込まれた影のように動いている。思い靴の鉤が時折、火花を散らす。だいぶ下った。そして夜が更けて曇りが降る。岩で擦り切れた洋服が固く凍りつく。朝から小止みなく動きつめた体にさすがに疲労を感じる。

私らはずいアイガーグレッチャーの下端のモレインまで下った。そこで縄を体からはずして、ていねいに輪を巻いて担った。すでに崖を降り終ってその裾^{すそ}に来たのである。頂上に立ったときから始終隠見しておったアイガーグレッチャーの停車場に着いたのは、十一日の午前三時であった。停車場には電燈がこうこうとしていたが、人の気配がないので、呼ぶとレストランの人達が飛び出してきて、おめでとうという。鉄道関係の人達が、いち早く乾盃^{かんぱい}をすすめる。私達は賞讃する人々に取り巻かれて、葡萄酒^{ぶどう}を、心ゆくばかり飲んだ。一睡後午前九時、起きると、ヒュレル達は人の群れの中に立って、手柄話の最中であつた。十時過ぎ電車に乗ってクライネシャイデックに下る。村の山岳会支部はじめ多数の人が、中に礼装した人さえ交えて出迎えてくれた。予期しないことで、大袈裟^{げさ}にすぎるとは思ったが、喜んでくれる人々に祝辞^{うれ}を述べられて、嬉しかった。ストイリの妻君も四人の子供^{はれぎ}に晴衣を着せて来ておつた。クライネシャイデックで乗り換え、グリーンデルヴァルトに向かった。車中、山岳会の幹事^うの人が、東山稜登山の歴史を示してくれて、これでお前の名が初登攀者として記されることになったなどと語る。アマターもブラヴァンドも黙ってパイプをくゆらしていた。ストイリは子供に残りのビスケットなどを与えて話^{すがすが}している。電車は牧場の朝の清



アイガー登頂後の四人。左からブラヴァンド、
禎、ストイリ、アマター

い中を下っていった。何もかも喜びに輝いて見える。アルピグレンの停車場には、アマターの一家が出迎えて同乗した。グルンドの駅で写真に撮され、スウェーデンの画家のエムブロム君が来ていた。電車が村に着くと花火^{とどろ}が轟いた。広場は人の群れだ。何事だろうと思う間もなく、人々に引き下ろされて胴揚げをされ、肩車にかつぎ上げられてしまった。争って握手を求められた中に年若い婦人がこの子の幸福のために握手して欲しいと、可愛い女の子^{かわい}に楓^{もみじ}のような手を出されたこともあった。-

村の代表者があらためて祝辞を述べて、シャンパンの盃をあげる。コスチュームに着飾った娘さんが赤い薔薇の花束をくれる。山岳会や村の人達によって設けられたテーブルでまた祝盃をあげる。老宣教師が、酒攻めから私を救い連れて、宿のアドラーに帰る。アドラーの入口や戸は、同宿の人達の作った歓迎の花文字で飾られてあつた。宿の娘さんが、祝辞を述べてまたシャンパンである。爺^{じい}さんは、よくやったと涙ぐんだ。お客の代表者からも長い祝辞を受ける。その夜は、花で飾られた食卓に心尽くしの歓待を受けた。

村の山といつてもよいアイガーの、それも村の上に全線を示している東山稜が、長い間登られずにあつたというのだから、村の人たちが喜んでくれたのは、もっともだと思ふ。しかし、私は自分の好きな道を勝手に行つたにすぎないのだ。それに、この温かい、親切な評価は、ありがたいが、私には過ぎたことであつた。

翌日から、私には苦手な、署名を強いられたり、話をさせられることが続いた。

一日、フェレル夫妻達と卓を囲んで語った。ストイリの妻君もアマターの妻君も九日の夜は心配で一睡もせず、またブラヴァンドの許嫁いいなずけも不安に徹夜しておったという。十日には私らは墜落したという噂が立ったというのであるから、家族も心を傷めたことであろう。

翌日、アマターは登攀とうはんの際に落としたルックサックを探しにいった。そして一個のアルミ製魔法瓶の蓋を拾ってきた。板のように潰れてつぶいたが、不思議なことにはその中に腸詰の一片が入っていた。アマターのいうところによれば、腸詰はルックサックの内部に入れてあり、魔法瓶は外部のポケットに入れてあったのだという。空を切って落ちる間に岩角などに当たって四散しながらも、こんな離れ業わざをするはずみというものは、まったく不可解である。

二週間ほどの後、私はグリンデルヴァルトを後にした。人々が見送ってくれて、いつまでもハンケチや帽子を振っている。電車が丘の端を回った時、アイガーの全容が、まざまざとそびえた。これこそ、二か年の間、明け暮れ無言の友であった。思えば星降る夜半の氷に光る姿よ。さらば、永久に若きアイガー。われは定めなき道に。ただ、行く限りなんじ汝が幻を憧れ追うであろう。

そして、幸深くあれ、心厚き人々のグリンデルヴァルトよ、そは、私の第二の故郷。いつかは、また、春に帰るつぼめ燕のように喜びの羽ばたき軽く飛びかえって、その温かいふところ懐に抱かれて物語ろう。

注

- (50) アイガー山頂から派出する一岩稜で“ミッテルレギ山稜”とも呼ばれるが、くわしい登山史は松方三郎著『アルプスの山と人』にある。著者榎有恒の若き日の快心の登攀であり、日本人によるヨーロッパ・アルプス初登攀として日本の近代登山史上に貴重な一頁をつくった。またこの登攀は“岩登り”など技術的な問題の輸入に関し多くの功績がある。この間の事情は著者の『わたしの山旅』にくわしい。因みにこの山稜上のミッテルレギ小屋は著者の大半の寄付により建てられたものである。
- (51) グリンデルヴァルトに住んでいたピッケル作りの名人。もともとは山の町の鍛冶職であった。スイスの最も代表的なピッケルとして珍重されているが、今は亡く、ベントがシュンクに代わっている。手作りのピッケルとしては世界的に有名であった。因みに著者の持ち帰ったピッケルがモデルとなり我が国でも普及するようになる。
- (52) Kochapparat [独]「料理道具」の意。
- (53) 革底の頃の登山靴に打って使用した鋏の一種。大小幾種類かあって“セブン”(七号)などというのはかなり大きい。クリンカーとともにかつての登山靴のなつかしい鋏名とされている。
- (54) Kapelle [独]「礼拝堂」の意。
- (55) スイスなどアルプスに散在する山荘で、丸太づくりの建物はよく風景にマッチしている。
- (56) 一八三五～一九一〇。アメリカの作家。作品に『トムソーヤの冒険』『ハックルベリフィンの冒険』『ミシシッピ川的生活』などがある。
- (57) ガイドに対する備い主。つまり“旦那様”といった意。著者はこの地でしばしば“ヘル・マキ”と呼ばれていた。
- (58) “護衛兵”といった意味もあり、主峰のすぐ近くにある副峰のこと。日本アルプスの穂高にもこの名前の所がある。東尾根におけるジャンダルムも難場で、いまは太いザイルがつけられている。
- (59) Katastrophe [独]「終局」または「破局」の意。

10. 榎有恒 「アイガー東山稜の初登攀」『山行』

大正十二年七月一日刊 改造社

昭和五十年十月十四日刊 大修館書店発行（日本山岳会創立七十周年
記念出版 覆刻 日本の名著）

要 約

大正10年（1921）9月9日～11日の記録。アイガー東山稜の初登攀。

メンバーは、榎有恒。

行程は、9月 9日 アイスメーヤーカリフィルンー東山稜南側岩壁下ー山稜露營。

10日 露营地ージャンダルムーアイガー山頂ーモレインー

11日 ーアイガーグレッチャー駅着

※アイガー東山稜の初登攀に成功、反響を呼ぶ。

前項と同じ記録であるが、表現がずいぶん違う。

瑞西ツーン湖畔紺碧の空の下に暫し佇んで東方を仰ぐ時、誰れしも氷雪の三峻峯の中空に狂踏するのを見逃し得ぬであらう。此三巨峯をユングフラウ、メンヒ及びアイガーとなす。アイガーは左端即ち北端に聳ゆ。海拔三千九百七十五メートル米突、形状三角錐をなす。全山の質、結晶質の石灰岩より成る。之れアルペン中の稀なる例とせらる。之れを登攀するに南メンヒよりの山稜よりするものと、西クライネシヤイデツクよりするものとあり。此の両者は私も昨年試みたのである。而して三角錐の他の残されたる山稜を東部の山稜となす。

抑もアルペンに於ける先人未登の山頂を極むることは、千八百六十五年七月のウイムパー氏によるマツターホルンの初登攀を以て、大體終りを告げたるものと云ふて可からう。其後のアルピニストに残されたる問題は先人未踏の山稜より登攀することである。

未踏の山頂を極むるに比して、花々しからざれど登攀の困難はまさるとも劣らず、アイガーの東山稜はブリュクナー教授の言に依れば、アルペン中の最難なるものとせられてゐる。而して此の山稜は、北面してグリンデルヴァルトの村に屹立一萬尺の壯觀を呈するにより、早くより我れと思はんアルピニストを魅したるもので、其試みの記録は五十年來残つてゐる。

事の成るや偶然に非ず。千九百十九年の秋グリンデルヴァルトの村に入った、其の時より此の東山稜の登攀は考へに往來して其ためにフアウルホルン二六八四米突に十四五回も登つて望遠鏡を手にして其岩層の登攀に果して不可能なるか否かを考へてゐた。

廿一年の六月所用あつて伯林に行つてゐた。けれども夏の生氣が一齊に溢れ出たのを見ては、一時も大都會に居れぬ。早速元のグリンデルヴァルトの村に歸つて二週間程日毎二千五百米突前後の山岳に登つて大きな登山へと身體を錬つた。そして懇意なフユレルのエミールにアイガー東山稜登攀の希望を打ち明けた。然るにエミールは、一言の下に私の登攀の技術に就いては申すことは無い、唯都會生活後は高山の寒氣に慣れてをらぬ。故に先づマツターホルン等へ登つてはどうかと云ふ。尤もなる忠言にツエルマツト方面へ登山に出懸けやうとした時は、不幸エミールは盲腸炎を病つて其手術手遅れとなつて明日を知らぬ細い命を辿つてゐた。エミールは見舞の私を眺めた眼を病室外にそゝり立つアイガーにやつて、流れ出づる涙を止めかね、榎さん再と云ひつゝ疲労に廻らぬ詞を棄てゝ兩手をさし述べ岩登りの様をしてゐた。

血の底から登攀する者よしお前の望みは己れが達してやるぞと固く握手して、ストイリ及びブラヴァンドの兩名のフユレルを連れて ツエルマツトに向つた。

此の地方の登山は、人の云ふ如くに艱難なるものでは無かつた。然しモンローザは登るに三日、マッターホルンに登るに三日、何れも激しい雪降りて小さい小屋場に、もぐり込んで氣の毒がるフユレル共に、「天候は如何せん術もないから何でも無いさ」を繰り返へし繰り返へし彼等を勵まして、悪天候と根氣較べをしたのが主なる苦しみであつた。

ツエルマツト地方の登山は、此の悪天候のために豫期の半ばも登れずアレツチホルンを登り越えて、再びグリンデルヴァルトに歸へつて亦アイガーを仰いだ。

狂つたやうにそゝり立つ其萬尺の岩壁は、新雪に鮮かに薄化粧して、夕日赫々と映えてゐた。望は消えんとした一と云ふのは、若し新雪ありとせば此の山稜の登攀の試は不可能と云はれてゐるからである。けれども試みるか否か、不可能でもいゝ試みやう、試みて失敗するは耻でない、險難の前に怖れ戦いて尻込するのは、耻だと決心して直ちにブラヴァンドを呼んで計畫を語つた。ブラヴァンドはヴェツターホルンにて雷死した名フユレルの息子で、村の小學教師をしつゝ一方フユレルをしてゐる。生れ乍らのアルピニストである。初めは私の執念強いのに驚いたやうであつたが、ブ君學校を棄てゝ行くか否か尤も命懸けの仕事だ、然し成し遂げれば一生の愉快だと速答を促すと忽ち諾と云ふ。他にツエルマツトに同行したストイリ、此のフユレルはアルピニストの中に知らざる者無き程の名を有す。而して四千米突前後の山岳を既に四百回以上も登つてゐると云ふ。他にもう一人のフユレル、名をアマターと云ふ。彼れも同じく一流の者であつて、フィンスターアールホルンの東面の斷崖の初登攀其他大いなる記録を有し、此アイガーの東山稜も瑞西の名のあるアルピニストのハスラー氏と共に、二回試みて未だ成し遂げぬ遺憾を持つ者である。三人を呼び集めて九月七日の夕べ、私の宿のアドラーの庭前に細々準備に就いて相談をした。而して翌八日の夕べには、準備品は全部具つてゐた。準備した登山用品は、在來のものとは趣を異にしたものがある。特に後に述ぶる鉤の類は、ピツケル作りの名人シエンク爺が八日終日の勞作である。

一、長さ六米突餘の丸太棒に上端に鉤を附し、下端に三本の石突を附し、其中の一本の足は根元を輪にして、自由に回轉するやうに作つた。これは岩壁の傾斜面に對し、何時も三本の石突を確實に用ひんためである。

二、岩壁に打ち込んで、手懸りや足懸り、又は繩を確保するために用ふる鉤四種類、約三十本各々長さ約二十センチ米突、及び石屋の用ふる金槌一挺、他に岩と鉤との間を埋むる木製の楔等。

三、繩三十米突二本六十米突一本何れも英國山岳會證明附の登山用繩。

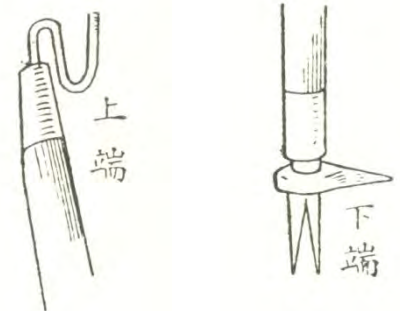
四、露營用具、天幕は重量の點と山稜の兩面急傾斜にて張るに由なき點とより不持參。毛布二枚、靴の上より蔽ふ大いなる上靴（毛布製）人數分、又自分用として皮製シャツ、スウエーター、毛シャツ、毛ズボン下、毛厚靴下三足、皮手袋、防水布製手袋、防寒帽、新聞紙若干（防寒用）等である。

五、コツホアパラート一リットル分及び四分の三リットル分、各々一個宛、アルコール二リットル、魔法瓶半リットル入二個、一リットル入一本、ランプ二個。

六、食料生玉子二ダース、金箱入燒鶏、燒肉ハム、ウルスト、ビスケット、ツイトロン、バター、ジャム、食パン、ブランデー、砂糖等。以上は準備品の大要である。

八日の夕方、四人連れ立つて、シエンクの家へ鉤等を受取りに行つた。彼等は何れも何人の前にも一歩も引けを取らぬアルピニストではあるが、流石に胸中の緊張を蔽ひ切れず互に沈黙に過ぎた。

同宿の一英人があつた。諧謔に富んでゐる人で、私に何か形見を残して行けと云ふ。與へたものは若し私が墜落して死んだならば、水晶の箱に入れて床間に飾ると云ふ。私は其側に「彼れの顔は



日に焼けてをつた」と附記して呉れと云ふ。何時かベルニナの峠を越してヴェネツィアに下つた時だ、山の強い日に眞黒に焼けてみたので、印度から来たかと問はれたことがあつた位である。宿のお神さんは、此事を傍で聞いて非常に気にし出し、それに明日は金曜日だと云ふ。己が室に獨り座して赤黄金色に夕映えするアイガーの頂を仰いで、今更の如くに深き不安と寂寥とが轟々と胸に迫る。

險難の登攀、それは虚榮か、非ず、野心か、非ず只無限の前に眞實の命を盡さんとする努力之れのみである。生くる者は死の約束の下に在る、死期は神の御手にある、登高、然うだ生くる間の努力である、とかく思ふ時心は平らかに熟睡を擅にした。

九月九日、透徹な朝である。片雲すら無い、黒い迄に深い空の下にアルペンの諸峯が漸くに醒め行く。大地の尊嚴と威力とを示してゐる。アイガーの頂は黄金色に燃えてゐる。その頂から煙の如く上騰するのは、雪が強風に巻き上げられてゐるのだ。グリンデルヴァルトの谷を蔽ふ森は清々しく静まりかへつて、其間を縫ふシユヴァルトツチネの流れが朝の喜びに歌つて行く。併し何と云つても秋だ。晴朗な寂しさが日の光にさへも震へて、山稜といはず農家の炊煙と云はず、凡てを蔽ふて我等の心の髓までも染み入る。

ブラヴァンドは早くから来て、何呉れと登山用品をリュツクザツクに詰めてゐる。私もトリコニの鋼鐵鋏を打つた山靴に足を固めタツシエの一つに入れる品々迄細かい注意を拂つて身仕度をした。

さらば險難の試練へ、宿の主人は幸あれと只一言、熱情と不安とに充ちて手を握る。お神さんはどうしても生きて歸へりなさいと云ふ。娘はカペルに早速我等が幸を祈りに行く。路傍に咲きおくれたゲンテイアナの空色の小花が我慢の出来ぬ程に愛らしい。

門出、死を懸けての試みへの出立。望みと惱みとが焰となつて胸を焼く。情は命の哀音を奏でて歩を重くする。意は飽く迄登行へと命令する。そして遂に満ち充ちた意力は情を壓して金鐵の響をあげる。

私等二人は人達に見送られて、停車場に向つた。ストイリは一つ前の汽車で人目に立たぬやう、例の丸太棒を持つて出發した。アマターが居た。汽車はアプト式のレールの齒を軋つて徐やかに行く。アマターの家の傍を過ぐる時、家内の者が總出で見送つてゐる。只妻君のみ一人地下室の戸をかすかに開けて、心配げな寔れた顔を出してゐた。



アイガー東山稜の一部

汽車の過ぎ行くアルプの牧場には何時も美しい牛の鈴の音が漂ふ。私は此の時痛切に三人のフユレルの命を預かっているのだと云ふことを感じた。午前八時十五分にグリンデルヴァルトを出た汽車は他の登山客や私等を乗せてシヤレの散在する間を過ぎ、唐檜の森を登り灌木帯に出でて、南方シヤイデツクへと登つて行く。此邊一帶は六月中旬から八月上旬へかけて見渡す限りのお花畑である。併し九月となつては花の数は少ない。山羊が峯から寄する冬に追はれて、枯草の間を谷へ谷へと彷徨ふて下る。今迄澄み切つてゐた空に、恰もチュツケンChutzkenの峯の上に糸のやうな一筋の白雲が棚引いた。明日の天気は危ない。

シヤイデツクで、此處迄見送つて来て呉れた心厚い英國の人や、土地の人々と別れて更らにユングフラウ登山鐵道に乗り替える。此の鐵道は人も知る如くアイガー及びメンヒの兩峯の腹中にトンネルを穿つて、ユングフラウヨツホ

(三四五七米突)に至るものである。此大トンネルがアイガーの腹中を通過する時、其東側の絶壁に穴を穿つて、下方に懷亂する氷河や、又はシュレツクホルンの雄姿を眺むるやう展望のための停車場を作つてゐる。アイスメーヤと云ふ。此處に下車して先着のストイリと會ふ。郷を離るる時の哀愁の齎す沈黙は此處に至つて全く破れて潑漑たる四人の元氣の前には何物も無い。

少憩。此のアイスメーヤの停車場の穴より、東面の斷崖を繩を便りに直下して下の氷海（アイスメーヤ）に降る。永遠の氷雪の海の上をアマターを先頭にストイリ、私そしてブラヴァンドと云ふ順に、繩で珠數繋ぎになつて北東に向ふ。アイガーの東山稜は灰白色の堅い岩膚を曝して屹立する。日光が針の如く鋭い。シュパルテの深い間隙は死の如く冷やかに蒼い。何處で崩れるのであらうか、氷河雪崩が轟々とこだましてゐる。植物も無い。動物も生きてをれぬ。只荒寥の氷雪の狂亂する海と峨々たる山岳のみの世界だ。其中を這ふやうに進む。四人は眞に小さな姿である。併し此の小さな一列の精神は躍動している。アルペンの大氣の如くに喜びに踊つて朗らかである。アイスメーヤを東北に登つて更らにカリファイルン（カリ氷海）に達し、遂にアイガー東山稜の南側の岩壁の下に至つた。各自の肩には三貫目を下らぬリュツクザツクが負はれてゐる、岩壁を登る足元に注意を拂ふ。

前述の如くアイガーは石灰岩である。石灰岩質の山岳は登攀に最も苦しい。岩壁面が堅く平滑であつて登るに手足の懸け處が少ない。厚層なスレートを斜に重ねた感じが石灰岩質の岩壁である。かゝる岩壁を登る時靴の鋏が止め兼ねて一足や二足を踏み滑らすのは止むを得ない。只かゝる際には斷えず前後のものが注意し確保し合つてゐるので、直ぐに繩を引き締めて墜落を防止するのである。此の岩壁は六十度を越えてをつたらう。最後に登つて來るブラヴァンドがふと足を滑らした。そして擔いでゐる丸太棒は肩から飛んだ。此の瞬間彼れは矢庭に己が身を丸太棒の上に捨て、抱き付き乍ら滑り落つる。勿論打撃を感じて直ぐに私も他の二人も繩を引き締めたのでブラヴァンドは止められた。見れば左腕一體を岩で擦り剥いて血汐が點々と滴れてゐる。此の出來事は一瞬時であつた。だが若し此の丸太棒を落して失へば私等の此行は半ば失敗になるのである。落した場所は身を棄て、之を止めんには命懸けの處である。一行の成敗の依る器具のために棄身を以て之を止めたブラヴァンドの精神は貴くも強い。彼れの美しい愛人は村の牧場に心を傷めてアイガーを仰いでゐやう。彼れの望みも努力も皆戀の焰に燃えてゐるのだ。春の夢のやうな愛の籬から、生死を睹する登攀へ自ら進む彼も亦苦闘する者の一人である。そして今あつたやうな貴い行も無限の中に一小事として葬られ忘れられて行く。思ひ出を語る老齡も來やう。又百年と経たぬ中に白骨にも化せやう。そして知る者ありとせば只永遠の神のみである。嚴かにも悲しい人の世、人の運命だ私は獨り涙を秘め隠さうと努めた。しかし山人等はかゝる際に互に慰め合ふやうな感傷を持たぬ。四人共に無言に何事も無かつたかの如くに尚ほも登攀を續けた。

登るにつれて岩壁面の傾斜は、度を増して登攀に困難を覺えて來る。併し私等の心は望に緊張してじりじりと確實に重荷を脊負ふて登りつめる。午後の二時過ぎであつたらうか、遂にアイガーの東山稜に取り着いた。北面約二千米突餘の崖下に若緑の牧場の谷が展開する。赤褐色の屋根瓦の家々が點在して、白い道が其間を縫ふ。これこそグリンデルヴァルトの村である。其北にはフアウルホルンやレーテイホルン一帯の山岳が起伏して日を浴みてゐる。此のアイガーの東山稜は鋼鐵のやうに固い。鋭い山稜に跨かれば



アイガー東山稜の一部

一脚はグリンデルヴァルトの村の側に一脚はアイスメーヤの側に垂れ下るといふ程に瘦せてゐる。颯々として高空を行く微風に吹かれて、遙かなる人里を下瞰する。美はしい山懐に熟睡せる如き音無き人の住む郷、其處には喜びも嘆きもあらう。だが此高處からは之等一切の現世的存在の事實は、遠く離れて只幼兒の夢郷のやうに神々しく見える。すると自分の腦中に其の静かな人里が忽然として活動し始めて、千萬の形象が活動廻轉して行く。激動の中に辣腕家や才子達が渦巻き反へつて、他人の頭上に出でよう出でようと争つてゐる。偽善は儀禮と見られ、亂暴は勇氣と思われ阿諛は親切だとせられてゐるやうだ。而も凡ては同じく何時かは滅ぶべき地球の上の存在だ。私は悲憤慷慨家でないので、面白いことだとその幻想に耽つてゐると、ブラヴァアンドが茶が沸いたと云ふ。山稜の急峻な爲めコツホアパラートで沸かす者も飲む者も皆各自の足場に立ち切りで身動きが難い。生玉子をすゝり軽い食事を濟ませて、魔法瓶に熱い茶とカフェーとスープとを沸して入れた。而して再び四人は繩で互に身體を繋ぎ合つて、更らに西に向つて其山稜を登り始めた。或る場合には崩壊した岩石が凍結してをつたのが、人の重量で急に落下したり、或る時には地層の逆な(Rückseite)急斜な岩壁を他人の肩の上に立つて登つたりした。云ふ迄も無く左右の兩側は見下ろすやうな絶壁が千米突以上も切り立つてゐる。こんな處で足元がふらついたり、眩暈を感ずるやうでは山登りの資格が無い。急がず休まず驚きもせず確實に登つてゐるのである。出發に際してチュツケンツツケンの峯の上に現はれた一筋の白雲の豫報は事實になつて來た。オーバーメンヒヨツホツツホ或はエヴィヒシネーフツツネーフエルト邊の西南から、強風が一陣又一陣と襲ひ出した。忽ち黒雲の一團が先驅となつて、東南に聳ゆる三角錐のフインスターアールホルンツツホルンに當つて怒り逆巻く。山は默然として堪へてゐる。倒し兼た餘憤は更らに疾驅して大シュレツクホルンツツホルンの峨々たる頂へ狂ひ攻むる。然し己れは大地の骨だよと云はんばかりに、徒らに雲をして自由の狂奔を許してゐる。山上の怒る天候程爽快雄大なものは無い。併し登攀は非常に苦しみ深くなる。午後五時、山稜の一點に岩石が崩壊の作用に依り、間口が二尺ばかり奥行が四尺ばかりの間隙が南面してあるのを發見した。此處を露營の地點と定めた。そして其口の前に四人精を出してピツケルツツケルにて石をかき岩を積んで、幅の一尺ばかりの台を作つた。此の動作の間とて身體を結び合ひ各自自身の立場を確かめて立ち乍ら一人より次ぎへと石片を手渡して最後の者が積むと云つた仕方である。岩の間隙より出でて上方の山稜に這ひ上れば、村が指呼の間に見ゆる。此の地を均して作つた台の上にリュツクザツクツツツクを置き、間隙の中には毛布を一枚敷いた。私は茲に頭を奥にして横はる。私の裾の邊りにストイリが體を寄せて斜になる。アマターとブラヴァアンドとは、作つた台の上に腰を懸けて憩ふ。つまり四人同時に横臥して休むことは出来ないのである。黒雲の群れが引つ切りも無く西南から湧いて走る。只幸なことにはその雲群が停滯しない、轟々と山稜に當つて東北行する様は本能寺は私等ではないらしい。

夜は來らんとしてゐる。短い秋の日は追はれて餘光が薄らかに雲間を彩る。山々は本然の死に歸らんとして氷河は一しほ蒼白の冷やかさに深み行く。私は瞑目して耳を澄ました、飄々の風の聲のみである。寂しい大地に力の限りに抱き付いて、己れは太陽の子なのだ、溢るる愛の光に溺れたいのだと叫びたい。併し母なる自然は峻巖に只殷々と雪崩を遠鳴りさせてゐる。堅くあれ堅くあれ、山を仰いだニイチエは人の世にかく叫んだ。

やがて私等は夜の來る前に鳥の丸焼をむしり食ひ、魔法瓶の熱いズツペやカフェーを飲んで、美味い夕食を終へた。ストイリとアマターとは空虛になつた魔法瓶に茶やズツペを沸かして入れてゐる。日は去つた。雲の怒濤は烈しくなつて來る。轟々として四人を脅やかす。雪が卍巴ツツバに降りしきつて何も見えぬ。灰のやうな粉雪は目と云はず耳と云はず、遠慮も無く入つて埋めやうとする。四人は持參の防寒具を身にまとうた。山岳會の小屋場なら汗になつた下着を着換へるところである。然し立つ傾斜面が急な爲に身動きをすると危い。日中着てをつたものの上ツツに下着でも皮のシャツで皆囊虫のやうに付けた。そして脚には毛布製の大きい不恰好な上靴を穿いた様子は、かゝる環境の生む一種の畸形兒だ。その四人互に他を顧みて笑ひ合つてゐる。傍らの岩蔭に山ランプ一つピツケ

ルに懸つて、平和にとぼる。雲が切れる、黒い碧い空に星が輝めく。フユレル達は喜びに聲を擧げてヨードラーを歌ふ。ブラヴァンドは村の喉自慢である。ストイリは顔に皺を寄せて掠すれ聲で合はせる。アマターはホホゝーと合の手を入れる。すると亦吹雪が一切を蔽ふて終つて唯ストイリのパイプの火が赤い。

アマターは一つの山ランプを山稜の北側の氷雪を堀つて其穴の中に置いた。村へ示す爲にしたのであるが小さい光だ併し後に聞いたが此の燈火をば強度の望遠鏡で認めたと云つてゐた。ブラヴァンドと私とは山稜に立つて美しく輝く村の燈火を下瞰してゐる。

道端の電燈は頸飾りのやうにも見える。村は夜の子守歌に安らかに一日の勞を忘れやうとしてゐる。すると谷の北側の牧場の中に急に一個の強い燈火がついた。ブラヴァンドは許嫁のとぼした火だと云つて、身動きもせずに見詰めてゐる。君の去り給ひしより待つ時の長きよ、熱き口づけも今は思ひ出に、君は死の登攀に、あはれ悲しみに泣くわが心を忍び給へと云はんばかりに其火が輝めく。

咄、花火が擧る。一つ二つ三つ、紫に赤に黄に小さい尾を引いて消えた。音は聞えぬ。再びぱつと青の火が燃えて暫くにして赤に變る。場所は宿のアドラー邊りである。これは後に聞いたのであるが此時ホテルの客や主人迄が宿の庭に集まつて私の行を盛んにするために花火を擧げたのだと云ふ。

村の燈火は次第に消えて行く、マークトウエンの口調を借りるならば、世界の人々は皆温い眠りに就くものを、何の因果で此山頂の寒風に曝らされて夜明しせねばならぬだらうと云ふところだ。併し私等は夫れ處では無い、鐵火をもものともせぬ意氣である。

私は下りて岩の隙間に身を横へた。ストイリは私の裾でもう高敷である。アマターとブラヴァンドとは坐つて黙然としてゐる。一時間ばかりうとうととして眼を醒ますと、二人は頻りに體操をして體温を高めやうとしてゐる。場所を替へやうと幾度云つてもヘルは其處だとばかり聞き入れない。雲間から半月が凍り付いたやうに浮び出てゐる。三人思はずブラヴオー天は己れ達を見棄てぬぞと叫ぶ聲にストイリはさめて何れ一杯飲まうと云ふ。酒ではない、脂肪の勝つたズッペを飲んだのである。ストイリはアマターと席を替へた。かくの如く終夜二時間毎に熱い飲料をとり且つフユレル達は交互に席を替へて休んだ。私は意氣地無い思ひをし乍ら、固く拒むフユレル達の厚意で同じ場所を占めつゝ前後四時間位は眠つた。

雪線上の寒氣は烈しい、例へば私は皮、防水布毛の三枚の手袋の上に、靴下までまとうて未だ手が凍える。特に風に曝される時は堪へ難い程である。

九月十日。

朝は晴れやかに歌と共に靜かに來るべきである。平和の光を人は望む。併し天は狂暴な啓示を與へることがある。特に山岳の天候に於て然うである。正しく此日の朝は一種革命的のものであつた。電光のやうな暴君の敏捷さと在來と云ふ名目の下にある、凡てのものを否定して何ものも其前に抗し難い力とを以て蔽ふ限りの天を亂した。そして其下に不安と憫れみとを以て仰ぐ人のさゝやかな情調を一蹴して嚴然として己が意思を擅にしてゐる。

初めは情を求めた心も、其神秘的な眞實の前に敬虔の念に頭を低うして途に黎明の叫びをあげて立ちあがる、克難の秋に喜び勇む心、それはわれに山中鹿之助ありと云ふべきである。午前六時、毛布其他露營に用ひた品を岩の隙間に残して、再



アイガー東山稜登攀

び四人は繩で體を結び合ふて登る。アルペンでは大抵夜の白む頃から山ランプを頼りに、登攀を始めるのが習はしである。併し此の山稜は未登のものであつて、薄明の中に登攀を試むるには餘りに危い。やがて山稜の傾斜は益々度を増して來る。

或る時は刃渡りのやうに鋭い稜の上を兩側に雲の狂ふ斷崖を見下ろして渡り、或時は數米突の岩壁に突き當つて他人の肩や頭の上に立つて登る。併し未だ例の鉤や丸太棒は用はぬ。凡そ三十米突ばかりの岩の一角を登り終ふせて小さいサツテル(凡そ三五〇〇米突)(肩)に達した。此處をジャンダルム Gendarm 前衛と云つてゐる。此の處迄は之れ迄此の山稜の征服を試みた人達が登つてゐる。此の上から急にそゝり立つ絶壁が、凡ての猛者を追ひ歸へした難場である。私等は此のサツテルに暫し憩ふた。下のアイスメーヤの上に寄する雲に乗つて、山鴉が三羽或は輪を畫がき或は翻へつてゐる。その鋭い鳴き聲が此の時に一しほ緊張した私等の胸に凄慘な印象をえぐるやうに與へる。私等は隊伍の順を變更して、先登はアマター、次ぎがストイリ、三番がブラヴァンド、そして殿が私となし今迄三十米突の繩を用ひてをつたのを倍加して、各自の間を結んだ。此の陣立は各自負擔の分業から作ったのである。勿論四人は互に注意して協力すべきではあるが、主として第一を第二が第三は第四を補助する仕組である。岩壁の傾斜は八十度に近く地層が下に向つて斜に垂下してゐる。此の逆な層を登攀することは、手懸りや足場の間隙の極めて少きと既に崩壊したる岩石が結凍に固つて附着してをり、體重の之れに懸ると共に落下することである。夫れに前述の如き急傾斜と加ふるに強風と吹雪とさへ襲ふて來る。私等は戦闘準備を完全に具へた。登る方向に逆に下つてゐる地層の断面の大きなものは、仰向いても攀づるに由が無い。此の時に丸太棒を用ふのである。斜に岩壁に立て懸けて下端の石突を確實に岩の隙間に突き込み、第二のストイリが全身の重量を寄せかけて力を盡して之れを支へる。第三と第四とも之れを補助すればよいのであるが、三人一緒に此棒を支へる丈けの足場が無い。第三と第四とは第一と第二との萬一の場合を警戒して、繩を岩の角にからめて用心する。かくて支へられた棒に第一のアマターは己れとストイリとの間を結ぶ繩を長く延ばして其の間を棒の上端の鉤に懸ける。之れはアマターが登る際に萬一滑り落ちることがあつても、其強い打撃が直接にストイリに來ずに、先づ棒の鉤に來て勢を殺ぐ爲めなのである。かくして第一は棒と其繩とに頼つて登り乍ら足場の間隙を作る。ピツケルにて打ち落す岩石片が飛ぶやうに落ちて來て下の三人に當る。之を小さい足場に漸くに立つてゐる三人は避けることも出來ず顔や手の甲が傷いて血が滴れる。

アマターが片足を懸ける丈けの足場を見出し、又は岩を碎いて作ると夫れに片足を與へ、身は丸太棒に寄せ乍ら更らに他の足場を作り求める。若し足場が悪い時には岩の間隙に鉤を打ち込み楔で止めて其れに依る。そして第二のストイリの爲めの足場を作る。夫れが出來るとストイリは丸太棒を登つて其處に達する。或は又岩壁の傾斜の度合が殆ど直立に近くて、立て懸ける丸太棒に傾斜を與へることが出來ない場合には輪の付いた鉤を岩壁に打ち込んで更らに夫れに繩の輪を付ける。其の繩の輪に棒の下端の石突の三股を引つけて立てかけるのである。

それをストイリは支へ、アマターは心配氣も無く登つて足場と手懸りとを見出す。かくの如き勞作を寒氣と風との中に繰り返す。而してアマターが確實な足場を見出して、初めて第二も其處に登り、第三の登攀を助ける。第四の私は登り乍ら丸太棒を持つて行く。片手では登ることが出來ない。こんな場合には更らに他の繩を一本加へて體に結ぶ。そして上から三人が助けて引く。であるから私の體は時折宙に釣り下る。繩二本が命であつて足元には二千米突の斷崖に雲霧が狂ふてゐる。時間と云ふ觀念も無い。怖しいと云ふ危懼も無い。只阿修羅の如く登る。併し進まぬ、此の際誰れか一人一步を滑らして倒るれば四人の命は先づ無い。極度の緊張と激勞との中に四つの精神と身體とは、渾然として一つの確實な調律の下に登つて行く。

百五十米突同じやうな動作で登つた。其間に一回岩壁に擦り附いたまゝ食物を取つた。又各種の鉤を各場合に用ひた。そして此の後に五十米突の間、今迄よりも遙かに急峻な殆ど直立と云つていゝ場所に達した。ふと遠雷の響がする。かゝる高所にての雷は非常に危険で、危険を避けることが出来ない。「おいブラヴアンド雷が来たやうだな」と云ひかけると彼は耳を澄してゐたが「否雷ではない、あれは私等の落す岩石片が宙を切る音だ」と云ふ。云はれて見れば如何にも然うだ。轟々と宙を切つて落ちて行く。突然アマターのリュックザツクが宙を切つて唸つて雲の中へ落ちて行つた。

カタストロフ！稲妻のやうに頭の中に光つて、手の繩を固く引きしめた「アマター何うした」と叫ぶ。するとアマターは上方岩の陰になつて姿は認めが一向に落ち着いて「何リュックザツクが落ちた丈けど、ヘルは何うか」と云ふ「元氣だよ」と云ふ聲に又も労作を續けてゐる。二百米突餘を朝の九時から午後の五時迄かゝつて登つた。遂に山稜の傾斜が幾分緩漫になつて來た。

私等は勝つた。其處の岩壁にストイリは千九百二十一年九月十日と刻した。二百米突を八時間の登攀は、私等四人には一時間程の印象も残らない。緊張して仕事に向ふ精神は時間の觀念から離れて活躍する。私等は勝つた、併しブラヴオーを叫んだ譯でもない。只四人互に手を固く握り合つた、そしてストイリが只一言「ヘルは之れで世界の人となつた」と云つた。雲が一時晴れた東方に大シユレツクホルンが赫々と夕陽を浴みて聳える。東南にフィンスターアールホルンが雲を吐いてゐる。その西の面の白雪が洩れた光に輝く。メンヒが白光と化する。歌へ、歌へ、聲を限りに歌へ、すれば心は光りの如くに打ち震ふて爽やかに躍るであらう。

氷雪の山稜に黒金のピツケルを振へ、憎しみ嘆き嫉み病ひの凡ての陰濕な影は消えて、晴朗な響に心は酔ふ。若き心、永遠に登高する若き精神、そは飽く迄危険と闘ふて止まぬ固き心でなければならぬ。此處にてストイリは棒を短く切つて、其端にハンケチを結んだ。アマターは石を積んで之を立てた。残部の鉤や金槌等を棄てゝリュックザツクを軽くした。

然し夕榮の大景も暫にして雲霧に蔽はれて終ひ、私等は再び登り出して雪の稜に達した。相當に險しいがもう其後は情勢にまかせて登り續け、午後七時十五分前遂にアイガーの絶嶺に立つた。頂は鋭い雪の稜に過ぎない。日は沈み去つた。雲がいら立つてゐる。メンヒの頭に近く半月が輝く。西方足元の千六百米突餘の崖下にクライネシヤイデツクとアイガーグレッツチャースタツイオンとの燈火が見える。フユレル三人は聲を合せてエホーをするかすなエホーが下の燈火から答へた。

山巔に立つ念ひ、それは誇りと云つては徐りに淺薄である。輕々しい笑ひや淡い哀愁と云つたやうな永續性の無い感情の閃きから自らに超越して仕舞ふのである。そして只大いなる自然の中に深い信仰的な生命を見出す。此の瞬間の精神の自由は全くアルペンの高空に舞ふ荒鷲にも等しいものであらう。私等は寄する寒氣と夜との爲めに頂上には五分と立つてをらなかつた。順をアマター、私、ストイリ殿がブラヴアンドと云ふ風に變へて、西の山稜の氷結した斜面を下り出した。雪や氷の斜面は光線の反射で足元が確實に見ゆるが一度岩壁面にかゝると時間が既に山歩きには遅いのを痛感する。それに日中解けた雪の水が凍り付いて岩壁面をエナメルやうに蔽ふてゐる。アマターが山ランプを下げて先きに下る。然し其光は三番四番の者の足元を照らす力は無い。ブラヴアンドは一通りの苦勞でない、此のアイガーの西の山稜はクライネシヤイデツクに立つて仰げば、恰



山頂の夕焼 アイガー東山稜よりフィッシャーヘルナーを望む

も傾斜六十度位の一枚岩の壁の如く見ゆる併し實際は然う簡単ではない。私等は山稜の辿り方を誤つた、そして左すればアイガーグレッチャーの少くとも三百米突位の断崖に出で右すればグリンデルヴァルトの村に直下する一千米突からの絶壁の上に出でそして前には二百米突からの崖が懸つて、何うしても下るとが出来ない。私等は此處で少くとも一時間半以上も再三登り再三下りして行き悩むだ。リュツクザツクの中には僅少の食物があるばかりである。飲料はブランデーはあるが他は何もない。それにアマターのリュツクザツクが落ちて終つたので、缺乏が豫期以上に甚だしい。私は強烈な渴を覺えた。ストイリはバタをすゝめて呉れた。バタが渴を癒することは此時始めて知つた。夜の闇を通じて岩壁面を下るのは苦しい。月が雲間から洩れてさすときは未だ好いが、それも束の間丈け氷河や山々の氷雪を蒼く光らせて直ぐに隠れる。吹雪が来る。風が叫喚をあげる手強い岩壁をかすかな山ランプを頼りに右に左に四人の姿が動いてゐるが、夫れも判然とせぬ。岩の暗さに吸ひ込まれたやうに影の如く歩む。歩む足元の重い山靴の鋸が岩に富つて火花を散らす。大分下つた、夜は更けて曇が降る。岩で切れた洋服が固く凍る。四人共に朝から小止みもなく働きつめた激勞に身體の疲勞が幾分か見える。併し精神は未だまだ弾力豊かに奮つてみて身體に鞭を打つて行く。私等は遂にアイガーグレッチャーの下端のモレイン迄下つた。繩を體から外して鄭寧に輪に巻いて負ふた。既に絶壁は降り切つて其裾に來たのであつた。頂上に立つた時から始終隠見してをつたアイガーグレッチャーの停車場に着いたのは、十一日の午前三時であつた。停車場には電燈が煌々として如何にも人住む郷だと云はんばかりである。私等を待ち疲れて轉た寝でもしてゐたのであろうか、併し呼ぶ間も無く直ぐにレストランの人達が飛び出して來てお目出度うと云ふ。登山鐵道の人達がいち早く乾盃をすゝめる。私等は賞讃する人々に取り巻かれて心行くばかりに靜かに飲んだ。側に一人の男が來ていろいろと登山の詳細を聞いてゐた。此の人は鐵道會社が此の行のために待たせた不寢番の電信技師であると後に知つた。

盃を重ねるまゝに温くなつて熟睡した。午前九時起き出ると、フユレル達は人の群の中に立つて手柄話の最中であつた。十時過ぎ此處より汽車にてクライネシャイデツクに下る。グリンデルヴァルトの山岳會支部の幹事や土地の人々が禮装して迎へて呉れる。事が少し大袈裟だと嬉しさと心苦しさとが一緒に交々感ずる。争つて私に握手を求める人々の陰に、ストイリの妻君が四人の子供に日曜の晴着を着せて立つてゐる。

クライネシャイデツクより再び汽車にてグリンデルヴァルトに向つた。車中幹事の人々が登山の書を出し、アイガー東山稜登攀の失敗の歴史を示して、來年の版からは其最初の征服者として私の名が永く残ることになつたと云ふ。アマターもブラヴァンドも無言にパイプを薫ゆらしてゐる。ストイリは女房子供に残つたビスケットを與へて盛んに話してゐる。車中の人の視線が動々ともすると



メンヒの夕焼（アイガー東山稜より）

私に集る。汽車は正によく散歩に來たアルプの牧場を徐やかに下つてゐる。牛の頸に振る鈴の音も晴々しい、遇ふ人は皆懐かしい。木も草も懐かしい。宇宙其ものが美しい愛の調べを奏でてゐる。

アルビグレンの停車場には、アマターの一家が迎に來て同乗した。グルンドの停車場で寫眞におさめられる。スウェーデンの畫家のエムプロム君は此處迄迎に來てみて村の停車場には人が迎へてゐると云ふ。さては幾分異つた登山なので宿の爺さんでも來てゐるのだらうと思つた。汽車は村

に着いた。花火が轟いた。廣場が人に埋つてゐる。何事だらうと思ふ間も無くブラヴオー楨の聲がどつとあがつて、私は自分のピツケルさへ持つ暇も無く、引き摺り下ろされて人々の胴揚げと肩車に乗せられて終つた。胸が騒ぐ、山登りより遙かに苦しい。人々が争つて來て握手を求める。其中に一人の年若い婦人があつた。懇懇に握手を求めた、後此の子の未來の幸のために握手をして下されと云ふ。見れば漸く歩める可愛い女の子が楓のやうな手を出してゐる。私は深い尊嚴の念に打たれて涙ぐましい心持になつた。やがて握手に寄る人達を除けて、村の顔役が村を代表して祝詞を述べて呉れる。そして波々と注いだシヤンパンの大盃を高く捧げた。私はそれを一息に飲み乾す、すると村のコステユウムに美しく装つた娘さんが赤薔薇の花束を恭しく呉れた。出發の際に遺物を所望した例の諧謔家は人込の中から娘さんに接吻しろと叫ぶ。人々はどつと笑ふ。例のレストランには、山岳會の人々が席を設けてをつて、又其處で乾盃を強られる。しかし年老いた宣教師が酒攻めから私を奪つて宿のアドラーに行く。後につく人波におされて過ぐる處拍手を浴みせかけられる。何時も私を見ると親しく寄つて來る村の子供等は今日は不思議さうな顔をして敬遠してゐる。一目アイガーを仰ぎたいのだが、如何にも氣障らしく思へるので見憎い。アドラーの入口や戸は滞在の人達の作つた歓迎の花文字で飾られてある。宿の娘さんが亦祝詞を述べて大盃を捧げる。爺さんは涙ぐんでよく行つたと固く握る手が年の故か震へてゐる。客の一人が長々と觀迎の辭を述べて呉れる。其夜私は花で蔽はれた食卓の前に人々から贈られた花に埋もれて心盡しの待遇を受けた。

夜は更けて凡ては寢沈まつた。獨り座して窓外のアイガーを仰ぐ。古い教會の鐘が響く。

安らかに眠る村の上を幾代の思を秘めて淀むで響き渡る。山に死したる人の墓からは魂が現はれて悲しみ泣くであらう。吹く風すらない。只森の奥の溪流が私語いてゐる。げに人來り人去れどもわれのみは永久に行くに云つてゐる。

翌日から寫眞屋が私等の寫眞を賣り出したために、日毎幾十枚の拙ない署名を強られた。歐洲の國々からの新聞記事が何處からとも無く手元集る。話に呼ばれる。茶の饗應に招かれる。到る處に暖い心の人々の賞讃の的となつた。

花々しい若い時なのだ。有頂天になつて悦びに歌ひたい。併し何うしても出来ない。却つて寂しい、底ひもなく寂しい、誰れの咎でもないのだ、胸の奥に蒼い火が燃えて消やさうとしても消やさうとしても消えぬ何故かは知らない。只永遠に孤獨であると云ふ寂寥が山巔から一度人里に下ると不斷に感ずる。

或日フユレル夫妻達と卓を圍んで語つた。ストイリの妻君は其夜は一睡もせず泣いてをつた。アマターの妻君も不眠の心配の夜を送り、ブラヴアンドの許嫁は不安に堪へず神に祈り且つ取り止めも無い事を終夜書き續けてをつたと云ふ。十日に村では私等が墜落したと云ふ風評が立つたのであつた。

アマターは落したリュックザツクを麓の氷河の邊へ探しに行つた。そして只一個のアルミ製の、魔法瓶の蓋ひを拾つて來た。それは痛く潰れて板の如く不思議なことには其中に腸詰の一片が入つてゐた。腸詰はリュックザツクの内部に入れてあり、魔法瓶はリュックザツクの外部のタツシエに入れてあつたのだ。

其後二週日ばかりにて私はグリンデルヴァルトを後にした。人々が見送つて呉れる。何時迄もハンケチや帽を振つてゐる。姿が遠ざかる、悲しさが一時に込み上げて來て熱い涙が頬を傳ふ。

汽車が丘を廻つた時、嶄然として峻高なアイガーの全姿がまざまざと見送つてゐるこれこそ二箇年が間明け暮れの無言の友であつた。思へば星降る夜半の其氷に光る姿よ。さらば永久に若きアイガー、われは定めなき道に。たゞ行く限り汝が幻を憧れ追はう。

そして幸深くあれ心厚き人々のグリンデルヴァルトよ、そは私の第二の故郷、いつかはまた初春に歸へる燕のやうに喜びの羽ばたき軽く飛び歸へつて其暖い懷に抱かれ物語りをしやう。

11. 石原巖 雪の鹿島槍ヶ岳『一高旅行部五十年』

昭和 43 年 12 月 15 日刊 第一高等学校旅行部縦の会発行

要 約

大正 15 年（1926）3 月 30 日～31 日の記録。鹿島槍ヶ岳北峰登頂。

メンバーは、浜田和雄、塩川三千勝、石原巖。

行程は、3 月 30 日 鹿島部落－尾根まで道踏み－鹿島部落。

31 日 鹿島部落－白沢天狗尾根－爺ヶ岳山頂－冷ノ池－布引岳－鹿島槍南峰－北峰－爺ヶ岳山頂－鹿島部落。

4 月 1 日 休養。

※積雪期の鹿島槍ヶ岳初登頂とされている。

「この頃の記録は旅行部に備え付けた分厚なノートに記されており、それを謄写版刷りの『記録－一高旅行部』2 冊に纏めて配ったが、今は残念ながら四散してしまっている。」（『一高旅行部五十年』より）

パーティ 浜田、塩川、石原

前年のルートにより祖父岳を経て尾根伝いに鹿島槍ヶ岳初登頂。

大正十四年（一九二五）の祖父岳と翌年の鹿島槍ヶ岳、鹿島の狩能氏宅に宿をとり、浜田、塩川、安芸が尾根伝いに祖父岳往復、翌年は浜田、塩川、石原が同じルートを祖父岳へ、冷池を経て鹿島槍まで、ワカンとアイゼンにより十八時間歩き通した。大して難しい登山ではなかったが、積雪期の初登頂とされている。

大正十五年（一九二六年）三月の鹿島槍ヶ岳登山は、積雪期における初登頂ということになっているらしいが、すでに四〇年も前のことであり、しかも東北稜あたりから直接登攀したものでないので、今さら書くのはどうかと思う。しかし考えてみると、この時の三人のうち、浜田和雄（のちの田辺）、塩川三千勝の両先輩は、すでに奇しくも今は亡く、また当時のことを書き残したものがないので、いささかの感慨をこめ、記憶と記録を頼りに書きとめてみよう。

さて、この登山には前年の爺岳登頂が大きく寄与をしている。浜田、塩川両氏に安芸悌一氏を加えた一行三人は、四月一日鹿島部落に至り、翌日は冷沢一帯を偵察したが、地形の難しさと雪崩の危険から鹿島槍ヶ岳をあきらめた。そして翌々十四日、部落の背後から尾根伝いのルートによって爺岳頂上への往復を果たしたのである。そして安芸氏が小生に代っただけの翌年のパーティは、これと同じルートを辿ることになった。

大正十五年の冬は非常に雪の多い年であった。三月三〇日に鹿島部落の狩能久太郎氏宅へ着いた一行は、その日の午後は部落背後の急斜面を尾根の上まで、輪カンジキで道踏みをすることに費した。

三月三十一日午前三時、寒気きびしい。前日の踏み跡をランタンで照らしながら登りにかかる。輪カンジキを穿き、防寒具や食糧など可成りの荷である。踏み跡を越えてからは、ラッセルに苦勞する。一七六六米三角点の手前で快晴の夜明けをむかえた。天の助けである。このあたりから白沢天狗の尾根と合うあたりまでには、鋭いヤセ尾根が幾つかあり、緊張しながら稜線をまたいで進む。

いよいよ爺岳の登りにかかって輪カンジキにアイゼンを併用、相当な急斜面を登りきると頂上であった。午前一一時、これならば行けると判断する。快晴とはいえ、黒部側から吹き上げる風は猛烈で、山稜はときどき吹雪のようになる。この風に抗しながら冷ノ池まで一旦降り、さらに布引岳、鹿島槍と単調な登りを続ける。信州側に突き出した大きな雪庇の上や、黒部側に露出している地肌を上をひたすら登ったが、何処へ行っても風を避けるところはない。

ようやく鹿島槍ヶ岳北峰着。午後二時二〇分。これまでが精一杯であった。小憩の後、来た道を引返す。少し曇ってきたのを気にしながら再び爺岳頂上は午後五時三〇分、風のない信州側へ少し下って一息入れる。すでに下の方は夕闇に包まれはじめている。ヤセ尾根を通る頃には、もう陽はとっぷりと暮れていた。疲れと暗さで急に進行が鈍り、狩能宅へ辿り着いたのは午後一〇時を少し過ぎていた。

翌日はゆっくり休養し、狩能氏の暖かい待遇を受ける。差し出された帳面に何やら感想を認めたが、今でもそれは保存されているだろうか。まだ雪上露営などの技術を知らぬ頃の、それは実に一九時間のガンバリであった。

「大正末期から昭和初年代—あざらし会—のころ—」より



12. 山田二郎 「第四回大澤小舎生活の潰滅—籠川谷に於ける雪崩遭難—」
『リュックサック』第六號
昭和三年十二月十八日刊 早稻田大學體育會山岳部發行

要 約

昭和2年(1927)12月26日～1月2日の記録。針ノ木雪溪の遭難。

メンバーは、

第1隊・近藤正、家村貞治、山本勘二、江口新造、渡邊公平、富田英男、山田二郎、
關七郎、上原武夫、有田祥太郎、河津静重。(12月27日大沢小舎着)

第2隊・森田勝彦、森堅一、木津誠一、二出川勝。(12月30日大澤小舎着の予定)

行程は、12月26日 大町—大出—畠山小舎。

27日 畠山小舎—扇沢—大沢小舎。

28日 小舎—畠山—小舎。

29日 大沢出合附近で。

30日 大沢小舎—赤石沢出合附近にて雪崩にあい、遭難。

家村、山本、關、上原の4氏が死亡。

一九二七年十二月下旬から二八年一月初旬へかけての大澤小舎生活は早大山岳部としては第四回の計畫であつた。冬の大澤小舎入りは第一回以來、その目的に於て、その生活に於て、變化してきたことは事實である。四冬にわたる大澤小舎生活はそれらの一つ一つを切りはなして批判することは許されない。それらは、全體的に、内的聯絡に於て把握されなければならない。私は今第一回以來の變遷を述べることによつて悲むべき結果に終つた第四回大澤小舎生活の現實に移りゆくであらう。

第一回の大澤小舎入り(一九二四・一二・二八—一九二五・一・五)は嚴冬の針ノ木岳スキー登山の爲だつた。その場合に於て大澤小舎は單に頂への鬭争の一つの根據地として選ばれたに過ぎなかつた。しかし乍ら私は、この第一回の人達の記録から後年の發展への若干の萌芽を見出すことが出来る。こゝに「リュックサック」第四號、小笠原勇八氏「一月の針ノ木岳スキー登山」から私達は彼等の意圖が奈邊にあつたかをはつきり察知することが出来る。

「針ノ木岳など、それらの後立山山脈の登山は夏期に於ては殆ど著しい興味を惹起してゐない。況や大澤小舎を中心として冬期の放射狀スキー登山と云ふことは、特にその形式を目的として行はれたことも無い。困難と云ふこともあるがその原因としては人々に氣付かれなかつたことの爲である。

輓近スキー登山の發達につれて各方面に於て色々な形式のスキー登山が行はれて來てはゐるが比較的、かゝる初期時代に於ては先づ初めは容易なる地點に於て拓かれてゆかれるものである。こゝに *la hante montagne* の狭い範圍に限つて見ても立山にせよ、槍ヶ岳にせよ容易く取附くことが出來従つてそれらに對する設備等も次第に考究せらるゝに至つた。スキー登山の初期時代は今も尚ほ續いて今後かゝる山岳に於ても幾つもの新しい登攀が記録づけらるゝであらうが *pionnier* の視野は常により新しき登攀へと求めてゆくのである。大澤小舎を使用して針ノ木連峯に新しいスキー登攀を試みるといふことは私共の豫想もしなかつたことであるが船田氏の何時も確實性ある新計畫によつてこの行程を進めることに決定したのである。そしてその時まで何等想ひ浮ばなかつた冬期の針ノ木岳のスキー登降とアレートに於ける長時間のトラヴェルセとが非常に楽しい想像を巻き起したのである。」(「リュックサック」第四號、二五頁～二六頁)

嚴冬の針ノ木岳を訪れたこの人達は旬日に近い山の生活から何を學び得たか。再び小笠原氏をし

て云はしめるであらう。「大澤小舎を中心とするスキー登山は色々の意味で教へられた。小舎に着く迄の間に一つの前山を越える労力の要らないことが後にこの谷に入る人々に極めて有利である。所謂針ノ木雪溪にスキー練習を試みる爲には誰にでもさうである。殊に登攀を加味するならばアレートに出て尚面白いヴァラツプが出来る。針ノ木岳のみならず、スバリの登攀もやつて見たいと思つた。それ丈でなく尚後立山山脈に幾つもの様な頂を求めることが出来るであらう。それらに對する登路の研究なども之から行はれて行くことゝ思ふ。たゞ大澤小舎が不完全であることが幾分障害であるがそれも人々の努力によつて完備されることゝ思ふ。所謂アルプスを通じて最も入り易い所であるものを直きこゝに得られるであらう。Sans guide と Ssns porteur によつて最も大きな山の喜びを求めることが出来るであらう。更に嚴冬、大澤小舎、平小舎、立山の小舎を連結して新しいルートと興味あるフランシールとを得らるゝ時も遠いことでは無いであらう。」(「リュツクサツク」第四號、六〇頁)

第二回大澤小舎入り(一九二五・一二・二六～一九二六・一・九)は第一回の發展形態であり第一回の人達の認識を通じて、その經驗に立つて意圖されたのであつた。

「然も根據地大澤小舎へは他の上高地や立山方面に向ふのと違つて前山を越す必要がなく容易に到達し得ると云ふ所からして一般部員の山スキー及びアイステクニツクの練習と云ふ意味を兼ねて、大體の計畫を立てたのであつた。従つて豫想参加者の顔振れの中にも多くの新進の熱心な人達を見出した。從來小さなグルツペに依つて行はれてゐたものと異つた大きな團體的のものが行はれる事になつてゐた。結果は兎も角吾々は此の機會をして、有意義なものであらしめたいと希望した。吾等にも來るかも知れぬ機會の爲にもと云ふ大きな望からして其準備の組織にも全然新たなものを試みる事になつた。此以前に第二回の大澤入りを豫想して大澤小舎を中心にスキーコースの調査が行はれることになつてゐたが或る事情の爲に中止された事は残念である。大澤に對山館の手で新しい小舎が増設されたと云ふ知らせは、あの古い石室での吹雪との戦を多がつてゐた吾々の心に大きな氣安さを齎したことは云ふまでもない。」(「リュツクサツク」第五號、三頁、四谷龍胤氏「嚴冬の大澤生活」)

第二回大澤小舎入りは單に頂への鬭争の根據地としてのみの生活ではなかつた。目指す山をやつたら直ぐ歸りゆくのではなくて或る一定の期間を冬の山小舎で過ごす落ついた氣持を伴つたものへと變つてゐた。ストーブは上げられ布團は上げられ、米味噌の類も運ばれ、薪は十分に蓄はへられた。さうして、船田氏をリーダーとして針ノ木岳、スバリ岳及び蓮華岳への登攀をなしたのである。

第三回大澤小舎生活(一九二六・一二・三一～一九二七・一・八)は四谷氏をリーダーとして十二名の大部隊が當時の好晴を利用して所謂大澤小舎を中心としての放射狀の登攀を執行し、針ノ木岳、スバリ岳、蓮華岳、祖父岳、鳴澤岳の登攀を終へたのである。(本文「第三回大澤小舎生活參照」)

第三回の大澤小舎生活が非常な成功であり幸福な生活に始終し得たことは私達の陣營内に於て大澤與し易しの論をさへ提出せしめた。秋になつて第四回大澤小舎生活の計畫も定まり大澤生活の目的や意義について先輩を交へた小さなグループなんかで論争もされた。ある人は籠川谷をめぐる後立山山脈はミツテルケビルゲであり、だからしてスキーの少し出来る人は冬山へ入る第一段階として大澤小舎へ入るべきだと説いた。ある人は大澤附近のスキーの滑降感を讚美し吹雪の山小舎氣分に陶醉することを忘れなかつた。私もかゝるグループの一人であつた。

私達はローマンテイツクな氣分に満ちてゐたのみならず冬期登山に於て貧しい登山理論又登山技術をしかり合せてゐなかつた。だから勢、それはリーダーを頼ることになり、「近藤氏の旗の下に」強固な結束を持つたが、しかしそのことは直接近藤リーダーに背負いきれない重荷を背負はせてしまつた。強固な結束、パーティーの誰もが皆融和してゐたこと、それだけは事實である。山に入る日も近づき組織も定まり食糧、器具等の準備も一應はとゝのつた。これより先十一月初旬からアーノルド・ランの「アルパイン・スキーイング」をテキストとして、相互研究會が開かれたが

こゝでも亦私達の不熱心さが曝露された。

第四回大澤小舎生活は右に述べた様な過程を経て登場した。しかし私はもう一つ加へなければならぬ事柄を持つてゐる。第四回大澤小舎生活は、何を目的としたか。早大山岳部は第四回大澤小舎生活に何を課したか。私達はこの行に於て直接當面の問題として嚴冬の山頂に立つことのみを意圖しなかつた。私達は先づスキー地圖の作製を念頭に置いた。我々の陣營内に於ては未だ曾てこの地のスキー地圖作製については試みられなかつたことである。従つて冬雪崩の研究も此の範圍に於て可能的に行ふ豫定であつたのである。

次に私達は冬期幕營の研究をもなさうとした。これは、積雪期に於て根據地とする小舎の少い我が高連山地に於て冬期登山の發展上重要な役割を演ずるものである。之については係を設け少なからぬ準備はした積りである。かゝる當面の目標をめぐつて山岳スキーの練習、冬期の團體的生活、訓練一軍隊に於ける訓練と云ふ様な意味でなく、山男としての自覺に於ける一をなし、私達の所謂「アルピニズムの旗の下に」結成された前衛分子を養成せんとしたのである。即ち明瞭に云ひ切つてしまへばスキーアルピニストの養成を山岳部は要求したのだ。しかしこゝに山男の養成云々と云へば直ぐ俗っぽい問題として、いやな顔をする人達に一應論述しなければならない必要を痛感する。私達は山と唯一人の人間とのみの世界を即ち抽象的な世界を畫き出すことは出来ない。私達の問題になり得るのは生き生きした現實の社會である。山へ行きたい多くの人々があり共通的な利益の爲にそれが組織化されてゐる山岳部なる形態は必然的な實在である。かゝる場合に於て、登山意識の高い者が、自己のより高いより廣い視野に立てる幸福感からして、登山意識の低い者を、より高く引張り上げようとする人間的な、そして社會的な美しい試みこそ山岳部の存在理由をはつきりせしめるものである。大澤小舎生活は、その最も意識的な具體的な表現形態であつたのだ。

山を、従つて登山を、かゝる社會性に於て把握し得ない人達は現段階に於ける登山から没落してゆく人達である。

私はこれで一應過去よりの大澤小舎生活の推移を述べることによつて悲むべき第四回大澤小舎生活の序曲を奏でたつもりである。

生死の彼方へ、生命の躍動へ。若きアルピニストの世界は嚴冬の籠川谷に展開される。

パーティー

第一隊（十二月二十七日 大澤小舎着）

近藤 正 家村 貞治 山本 勘二 江口 新造 渡邊 公平 富田 英男
山田 二郎 關 七郎 上原 武夫 有田祥太郎 河津 靜重

第二隊（十二月三十日 大澤小舎着の豫定）

森田 勝彦 森 堅一 木津 誠一 二出川 勝
人夫 大和 由松 勝野 玉作 黒岩 直吉 北澤 清志 中村 定治

（大和を除いて他は畠山迄）

各 係

リーダー 近藤
器具係 江口 山田 食糧係 山本 森 會計係 富田
記録係 渡邊 衛生係 有田 觀測係 家村 關 江口
スケッチ係 河津 冬期幕營研究係 森田 山田

器具、食糧は「リュックサック」特別號「籠川谷遭難の真相について」参照。

日 程

十二月二十六日 雪

大町（前八・四五）—大出（一一・二〇～後一二・〇〇）—畠山小舎（五・五〇） 人夫着（八・五〇）

十二月二十七日 雪時々強風

畠山小舎（前一〇・四〇、先發隊一〇・〇〇）－扇澤（後一・〇〇）－大澤小舎（二・五五 先發隊二・五〇）

十二月二十八日 晴後雪

小舎（前九・三〇）－畠山（一一・〇〇～後一・〇〇）－小舎（四・〇〇）

十二月二十九日 吹雪

二十六日 大町から畠山小舎までであるが雪が深くて非常に歩き辛かった。私達はこの行にトボガンを持って行くことを忘れなかった。それは美滿津の伊藤氏が寄贈されたものであるがこんな雪の深い日には、實に引きづつてゆくにも一苦勞であつた。でも愉快的なトボガンの滑走を思へば馬力も出る。

二十七日 畠山から大澤小舎までの行程は家村君の遺稿に詳しく展開されてゐるから省略する。

二十八日 畠山小舎往復。食糧品とトボガンとを大澤小舎に運んだ。下りのスキーの滑走感は實に優秀。私達の此度の冬期幕營は晴天になり次第扇澤を少し登つた適当な場所に行ふ豫定で、その第一回を近藤、家村、山本、江口の四人で試みるべく晴天を待つたが二十九日は朝から吹雪であつた。午前中は最初は大澤出合附近でスキー練習後鳴澤を少し登り又練習。午後大澤出合附近で優秀に展開。大澤を直滑降でブツ飛ばす氣持はちよいと忘れられない。三時頃からトボガンを楽しんだ。三人か四人乗るのだが粉雪が深い爲かスピードの出るに従ひ眞正面から猛烈な勢で粉雪をかぶつて先頭にある者など何が何やらさつぱり分らない。しかし愉快的ことは實に愉快だ。

その夜、吹雪にくれた山小舎のまどひ、ほんとうにのんびりしてゐた。うちとけてゐた。美しいこの表現を河津君にゆづらう。（本文、河津靜重氏「自然に打ちひしがれた人間の記録」参照）

十二月三十日 この日も朝から吹雪いてゐた。これでは冬期幕營は出来さうにもない。昨日はかなりの猛烈な練習であつた。少し倦怠の色が見える。吹雪に閉ぢこめられたせいでもあるだらう。十時頃、近藤氏が本谷をゴルヂユ邊まで行つて滑つて来ようと云ひ出して皆行くことになつた。小舎を出たのは、十時三十分少し過ぎてゐた。臺地を三百米ばかり上つて、それから本谷へ移つて行つた。この日は、リーダー近藤氏指導の下にスキー及び登高法の練習を目的としたのであつた。だから、本谷を電光形に登高してゆく時にも先頭は時々交代したが近藤氏は常に列中の第二位にあつて種々の注意を與へてゐた。一行は赤石澤の出合附近を渡邊、近藤、家村、江口、上原、關、山本、富田、山田、有田、河津の順序にて進行中渡邊君が赤石澤の上部を見ながらキツクターンをして二歩出た時に實にスピードの速い大雪崩が前方より谷一パイに襲ひ來り皆之に卷込まれ、各自雪崩にぶつかつた位置により雪崩の力の強弱もあり、短きは百米に足らず長きは二三百米も流された。雪崩が静止した時に下半身の埋没に止つた河津、有田は自力にて起き上り、先づ渡邊、山田を掘り出し、協力して富田、近藤と順次に発見して最後に全身埋没し既に氣絶してゐた江口を掘り出した。その間に私は近藤氏の命により當時小舎に残つて晝食の準備をしてゐた大和に急報した。大和は直ちにシヤベルを持って現場に赴き近藤氏その他二三の未だ氣力ある人達と共に雪崩の危険あるにも拘らず、必死の努力をもつて遭難地域を駆け巡り、又再三再四、江口君、近藤君の發掘された所を中心として大體四名の埋没箇所を推定し、搜索したが七名の發掘せられた地域でさへ廣範圍にわたつてゐるに拘らず雪崩の静止地帯の最端までは遭難地點より五六百米の長さにわたり且つ幅は約八九十米にわたる故何物をも雪面に発見することも出来ず、加ふるに吹雪は益々つのもり一同も遭難直後とて氣力も漸次衰へ遂に涙をのんで小舎に引き上げたのは午後二時頃であつた。

以上で遭難狀況の概略を一般的に述べたつもりだが、之を個々に具體的に述べることも亦必要である。『普遍は個別（特殊）の中にもみ個別によつてのみ存在する。』だからそれらを遭難者一人一人から答へてもらふことは最も正しい方法であると思ふのである。

それで可成り重複するにも拘らず、雪崩に襲はれた時から小舎に歸る迄の狀況を書いてもらつた。

それには、遭難利那の観察。意識状態。如何なる處置をなしたか。押し流されてゐる時の状態。行動。静止時に動ける行動。誰を助けたか誰に助けてもらったか。凍傷は如何。行方不明者の搜索方法、場所等々が詳細にわたつて述べられてゐる。

但し河津君のは本文「自然に打ちひしがれた人間の記録」に載つてゐるので省略した。

有田祥太郎

本谷に下つて、二番日のラツセルを交代し終へて、列の後から二人目に列んで居た時でした。不意に針ノ木の邊に聞いた短かかつたが力強い異様な音響に、變だなど思つてゐる内に、近藤氏の「來た來た」と云ふ叫び聲で谷の上を見上げた。そしてゴルジュの中央部邊に雪煙を高く上げながら猛烈な勢で進んでくるものを見て逃げやうと思つてスキーを谷の下側に向けやうとすると同時に激しい打撃を受けて轉倒してしまつたのです。其瞬間徑一寸許りのスノウボールが足許に無數飛散したのを感じた。やがて立上らうと、半ば腰を上げたその時猛烈な雪層に飛ばされ、その中に捲き込まれ押し流されてしまつた。そして雪崩に遭つた瞬間から最早どうする事もできなかつた。初めの間は厚い雪層が身體の上を通過してゆくのを感じたが色々の事を思ふ餘裕もなくその内、ボンヤリとしてその後は意識してゐません。それから何分経つてからか、氣がついて上半身が雪の上に出て屈してゐるのを知つて起き上つた。幸ひ脊中には雪を餘り被つてゐなかつたので容易に雪から起き上る事ができた。身體は赤澤岳の方を向き谷の向きと直角になつてゐて左足のスキーだけ附けて下半身は埋没してゐたのです。兩杖は勿論、帽子、雪眼鏡、片方のスキー及び手袋は無かつた。夢中で雪を掘り除いて立上り下に人影を認めて驅け出さうとした時背後から河津君に呼び止められ短い二三の言葉を交して、急いで下りて行つた。そして谷の下に向いてゐた頭の一部以外は全身緩傾斜に突刺した様に雪に埋没してゐた渡邊君を見つけて、少し掘つてから河津君に後を頼んで更の下の方へ行つた。そして、赤澤岳の方に向いてゐた頭と、スキーの抜けた左足の脛から先の外は全身が埋没してゐた山田君を發見して掘りだした。掘りだされた山田君は近藤君の命に依り急を報ずるべく小舎に赴き更に下り赤澤岳の方に向ひて身體が殆んど眞直ぐに突き刺した様に埋り唯薄く雪を被つた顔と右手の手首から上とが出てゐた近藤君を見つけ河津君と共に掘つた。此間富田君は雪に眞直ぐに埋つてはゐたが兩手の自由が利いてゐたから獨力で雪から抜けやうと努力してゐた。そして他の人々を探し求めてゐた渡邊君が偶然にも雪の中から左手を掘り當てゝやがて氣絶して土色に變つてゐた江口君の顔を掘り出した時には、流石に興奮と不安と焦慮とで皆は非常な緊張に包まれ生とか死とかに關聯した短い言葉の交錯のみでその場の空氣は非常に重苦しかつた。一方で盛に掘ると同時に他方では顔や手を雪で猛烈に摩擦して意識の恢復に努めた。江口君は雪の面と平行に雪中約半米の所に頭を谷の上にして全身が埋没してゐた。そして、スキーや折れた兩杖は雪崩でしまつてゐる雪を掘るのには大變役に立つた。雪崩が静止した直後には吹雪も風も止んだのではないかと思つた位に穩であつたけれど又段々吹雪いてきた。富田君の活で蘇生した江口君を小舎に連れ歸る爲に肩を貸しながら、デブリの上を一デブリが終つてからは膝位まで没する深雪に一步步々非常な努力を要しながら本谷を下つて行つた。そして意識が未だ充分に恢復してゐなかつた爲やゝもすれば肩にもたれかゝつて、睡らうとする江口君をたえず呼び續けて勵ましながら本谷から臺地へ上る急傾斜にさしかゝつた頃には江口君もズボンのポケットにあつた毛の手袋を取出して用ひ、又大澤をハツキリと認識できた位にまで意識が確かになつてきた。その内、私は腰迄没する深雪と雪崩に飛ばされた時出たらしい鼻血の爲に極度に疲勞してきて雪の中に坐つてしまひ、此度は反對に江口君に勵まされながら深く潜る雪の中を木から木へと縫ふ様にしながら漸々臺地迄上つた。これより少し前に急を聞いて駆けつけた大和と、シヤベルを取りに歸つた近藤君とが現場に向はれたのを見て、安心しながら匍ふやうにして小舎に辿り着いた。着いて初めて、兩手指先が凍傷して無感覺になつてゐるのを知つたが他には別に負傷はなかつた。(凍傷に關しては別項参照)

山田二郎

小舎を出て三百米ばかり歩いて、臺地から本谷へ下りる所一夏にあつては大澤小舎の用水の引き口で私はこんな吹雪の日に眼鏡—特に私のは濃い茶褐色であつた—をかけてゐることの不愉快に氣づいたので列から離れて、眼鏡を外しポケットに収めた。今迄私の後に居た人達は前へ行つてしまつて私が歩きだした時にはもうパーティーの最後を承つてゐた。若し一寸したかうした事がなかつたらあの時どうなつてゐたかも知れない。赤石澤出合に行つた時には既に一應ラツセルの役割を果たした有田と河津が後に居た。私は前をゆく富田君とは三四米離れてついて行つた。突然「ゴー」と異様な音がした。勿論この日はかなり強く吹雪いてゐたし、そのざわめきが常に私達を打つたものだがこの突如として聞えたものはそれらと全く異つてゐた。しかしその音は今考へると、三月上高地で起きた明神や西穂高にかゝるグルントラヴィーネンの百雷の一時に落ちたやうな音とは全然違ふ。

私が見上げた時、近藤氏の「來た來た」といふ叫を聞いた。これはかなり軽い意味に受け取れた。雪崩！ 吹雪で距離は漠然としてゐるが三百米位前方に、煙幕の如く、土用波のわれる時の波頭の如く、押寄せて來る雪崩を見た。私は逃げようとした。が、しかし、又直ぐ頭に閃いたのは「スキーを脱ぐ」と云ふことだつた。それはどうした効果をもつものかあまり考へて見たことがなかつたが兎に角「雪崩に出會つたらスキーを脱ぐものだ」と云ふことは三月の槍へ行つた時藤田氏に教はつて以來公式的に自分の頭へこびりついてゐた唯一の對策であつた。慌しく、しやがんで左足のスキーのビンディングを素早く外した。その刹那もうやられてゐた。

それは物凄い土用波に巻き込まれた様に、又労働者の演説會が解散を食つて、大衆がデモにうつらうとす時に反動的な幾百もの警官によつて民衆がめちやめちやに突き倒される様に、針で刺す痛さこそなけれ、もつと大きな苦痛を感じながら無二無三に押し飛ばされた。私には直接に雪崩に附隨して起る風—特に私達の出會つた乾燥新雪雪崩には強烈に伴ふ—に倒されたのではない様に思はれる。

私は徹頭徹尾意識は明瞭だつた。「やられた」「駄目だ」「もう死ぬんだ」「雪の山へ來るんぢやなかつた」「死!!」壇の中へ「死」と云ふ液體を入れて無茶苦茶に振りまはす様なものだ。

雪崩は同じ様なスピードで私を運ばなかつた。二三度止まつた様な氣がした。止まつたと感じた刹那、グツと大きなシヨックが來て、又身體はころがつてゐた。流されてゐる時間が相當ながく感ぜられた。まだかまだかと止るのが待ち兼ねた。流されてゐる間はどう廻轉してゐるのか、はつきりしない。又スキーは片方は外したが片方がついてゐるのか、ゐないのか、兩杖をいつ離したのか感じなかつた。

雪崩に巻き込まれてからは逃げようとかどうしようとかそんな氣はちつとも起らない。唯あてもなくもがく一方だつた。こんな大きな力に會つては是非もない。

雪崩は止つた。雪の中だ。心臓が沸騰してゐる。呼吸はできない。死!! 死!! 頭が張り裂ける様だ。苦!! 苦!! さうして文字通り身動きもならない。どれだけの深さにゐるのだからちつとも分らない。雪の壓迫は全面的な展開をなして攻め寄せる。「皆やられた」「皆死ぬのだ」しかし腰から上はほとんど直立してゐて、頭が上だと云ふことだけは直ぐ分つた。その時の最も切實な身體の要求は、口の周圍の雪を開けて一寸でも呼吸をすることだつた。幸なことに兩手が顔の近くに曲げて止つてゐた。腕をのぼし切つてゐなかつたことは動かすのに比較的力が少なくて濟んだ。しかし二つの手を口の所へ持つて來るのが大變だつた。一生懸命もがいてゐた時、ポンと頭の上の雪が除かれて空中へ手が出た。「しめた、助かつた。」暗黒の世界から光明の世界へ。上があいたものだから顔の周圍の雪をかき除けた。でもまだ身動きはならぬ。私はもうかうなつたらできるだけ落ち付かうと思つたが心臓が承知しない。呼吸は火の様に激しい。

誰かが飛び附いて来て掘ってくれた。眼のまはりに雪がくつついてゐるせいかはつきり分らない。顔中血だらけに見える。有田だつた。後から掘ってくれる。私は前の方を掘る。有田が私のルツクザツクー今日の歸りには皆のアザラシ皮をまとめて入れる爲に脊負つて来た一を引張つたら破れてしまつた。腰から上の雪は取り除けた。私はスバリ側の上の方を向いてゐて、左足は前に伸され靴が表面に出てゐたが右足は深く雪の中に突込んでゐた。「右足の方を掘ってくれ。」

私は雪の上に立つことができた。うれしかつた。「有田、有難う。」有田は泣いてゐた。直ぐ向ふスバリ寄りに渡邊君を河津が掘つてゐる。四人生きてゐるのだ。

「有田！ 泣いちや駄目だ。」どなりつけてやつた。それから有田と二人で一散にデブリの上を下の方へ走つた。雪はちつとも潜らなかつた。百米近く下に富田、近藤の二君が並んでゐるのを見た。しかし私が掘り出された所からはデブリの爲二人は見えなかつた。これで六人。有田は近藤氏を、私は富田氏を掘り初めた。富田氏はその時は腰まで掘つてゐて、實に元氣で頼もしかつた。この時第二の雪崩が頭に浮んで来た。「山田、小舎へ行つて大和を呼んで來い。」

せかれるまゝに臺地へ上り出したら雪は腰までぬかる。いくら歩いても大して進んでゐない。「小舎は何處なのだ」小舎より下へ流されたかも知れない。しかし澤に沿つて臺地を下へ進んだ。時々後から早く行けと呼びかけられる。氣が氣でない。凍傷!! 途中でハツと氣がついた。幸ひ巻ゲートルをつけてゐたので早速外して右手に巻きつけた。左手にはスキー手袋がついてゐた。どうしたらもぐららずに早く行けるだらうか。四つ這ひに這つたらもぐらないだらう。手は肘まで足は脛まで雪面につけて這つてみた。前よりは速い。やがてスキーのシユプールを見出し、その中に入つて頑張りに頑張つた。

小舎の赤旗が吹雪の中に見える。大和！ 大和！ 出て來ない。何をしてゐるのだ。小舎についた。臺地へ上つてから三十分位はかゝつてゐる。大和にシヤベルと藥品箱を持つて急行するやうに命じた。大和はあはてゝマゴマゴしてゐた。それから「火の側へ寄つちや駄目ですよ」と言つて出て行つた。氣が氣でない。しかし、もう出掛ける力はなかつた。しばらくして近藤氏がスキーにのつて小舎へ来て江口が見つかったが残りの四人は分らないとシヤベルを持つて出掛けた。不安な變な氣持だ。時計を見た。十二時四十分。一寸小舎から出て見たら江口が有田の肩によりかゝつて這つて來た。

渡邊公平

いつになく元氣のない山本は小舎を出て間もなくラツセルを富田に代つて貰つた。小舎の臺地より本谷に下りてからも富田のラツセルは續いた。キツクターン四回（ラストの位置左向き）で次に有田が代る。ターンが五回（ラストの方向右向き）—この頃小さいデブリの跡が少しあり近藤氏は眼鏡をはづして、よく之を觀察して赤石澤から出た跡だぜと注意した。次は河津がラツセル、ターン三回（ラストの方向右向き）そして私が代つて最後のラツセルをしたのだ。黙々として自分の後にスキーを滑らしてゐた家村と自分との間に近藤氏が入つた。ラツセルは相變らず淺くて樂だ。デブリの跡は新雪の下にチヨイチヨイ見受けられた。ターン三回、三回日は赤石澤を眞正面に仰いだ。そして之が最後のキツクターンだつたのだ。それから右にむかつて五六歩行くか行かない中に「ガランゴウオー」といふ陰にこもつた音を聞いた。凄い音だつた。

雪崩!! 直感にしたものゝまさかそれが本澤を自分達の方に落ちてくるそれであらうとはその瞬間には思へなかつた。そして殆んど同じ瞬間に「キタキタ」といふ近藤氏の叫び聲。今から思へばデスペレーティブな凄壯な聲だつたんだがその時はあんなに悲慘な結果を生むやうな大した雪崩とは思へなかつた。その叫びの終らない中に自分は勿論上方を仰いだ。その時だ。スバリ側から出たらしい表層雪崩が谷一杯に擴がつて煙幕の様になつて奔下して來た。私達の網膜にその煙幕の如

き雪崩の突端が映じた時には既に雪崩はスタートを切つてゐたのだ。だから實に半分も長くはなかつたらう。網膜にはつきりと雪崩を直感してから襲ひ來る怒濤の中に巻きこまれ轉落して行つたのは。息もつけないやうな風の流れ。狂奔落下する雪塊の群。そして亂舞せる雪煙。そこには唯運命を待つことのみが許されたのだ。

三回に別れて轉落して行つた私は雪煙の中に死と母の面影との交錯をはつきりと見た。そして體と雪が止つた時顔の上の雪は幸に淺かつたから自分で口、鼻、目は出した。口の上の雪を無茶苦茶に拂ひのけてはみたが壓しつけられた身體は微動だにしない。焦れば焦る程力は弱つて來た。偶然下りてきた有田に發見され手傳つてもらつて、顔だけ完全に出す事ができた。友は如何にと首を伸ばして見廻したが、死の沈黙、慘憺たるデブリと押し流された土や木の端や、岩片のみだ。河津が來て掘つてくれた。有田は下へ。やつと胸迄出たので河津に下へ行つてもらひ後は獨りで出た。やつとの事で右足のスキーを脱して下りて行つた下に近藤氏は肩のあたり迄有田と河津によつて出されてゐた。山田、富田も少し手傳つてもらつたり、或は獨力で出て來た。富田は一番元氣だつたので嬉しかつた。山田は股迄入る新雪の中を這つて小舎へ大和を呼びに……。出た者皆で極力探したが所持品の一片すら分らない。靴をとられた河津は靴下(片足)で歩きまはつた。他の者も手袋、帽子等を奪はれてゐた。皆が近藤氏を掘つてゐる間に獨りで雪崩の突端近く迄探し廻りながら下りて行つてみたが無駄だつた。併しその歸りに偶然本當に偶然に兩杖の紐の一端をゴミの中に發見した。兩杖はすぐ出た。それで夢中になつてそこいらを掘つて見ると紫色になつた手首が片方出て來た。冷たい。土色をしてる。駄目だ！ 否！ 大丈夫だ、やれ！ 大聲に皆を呼びながら掘る。指は既に凍傷でやられてゐるのだ。堅い雪は思ふやうには掘れない。無意識に動くのみ。近藤氏は手首を握つて家村かと怒鳴る。三十糎許り掘つて見ると胸が出た。まだ誰か分らない。江口と分つたのは顔が出てからだ。叩いても蹴つても反應はない。遅かつたかと思つたが富田の活で眼を開いた。鼻血で弱つてゐる有田は江口を肩に小舎へ。近藤氏もシヤベルを取りに小舎へ。後には富田と唯二人。どう歩いたか、彷徨したか分らない。堅いデブリの上を無茶苦茶に歩き廻つた。二人で平行しても歩いた。併し駄目だつた。大和がシヤベルを持って來た。小舎へ歸つて善後策を講じやう。許される限り雪をかいてはこすつて居たが凍傷の手は早くより痛み出してゐた。途中近藤氏の登つてくるのに會ふ。駄目か？ 駄目だ。

富田英男

赤石澤を正面にして渡邊氏がキツクターンをした。ゴルジュが吹雪の中に霞んで見える。物凄い音がした。雪崩!! 見上げるとゴルジュの直上で入道雲の様な雪煙が上つた。

「いけねえスキーを脱がうか」「此處迄は來ないだらう、大丈夫だらう、でも逃げよう」

一秒とかゝらぬ短い間にこんな事が頭を掠めて結局逃げ出す事にして、眞下に向つて兩杖を力一パイ突いた。もう一度その時、近藤氏の「來た」と云ふ聲を聞いた。今頃氣がついたのかと意外に思つてゐると背部へパラパラと礫があたつて目の前、足の下を四五寸の雪塊が急流の水の様に走つて行くのが見える。「ドン」と恐ろしく強いものがぶつかつたと思ふと一溜もなくのめつてしまつた。

「平泳ぎ、平泳ぎ、かういふ時は」

然し兩足にスキーがついてゐる。足を延ばす時はいゝが縮める時にととても工合が悪い。スキーをはづさうと思つた時急に流れが靜になつた。

「占めた、大丈夫だつた」

立上らうとした。然し此安心は餘りにも早過ぎた。身を起すか起さぬ内に第二の巨弾がぶつかつた。今度の奴はとても凄い。息をする間もなく轉々と猛烈な勢で宙返りをさせられて、平泳ぎもスキーをはづす事もあるもんぢやない。(スキーを脱ぐ事は意識しなかつた) 色々なフラツシュバツクが頭を掠める。

何糞！ 死ぬものか!!

奮然たる元氣が出た。廻轉がやゝ静かになった。両手を締めやうとした。右手は直ぐ引けたが左は引けなかつたが、力まかせに引くと手だけが来るのを感じた。動搖が静かになると共に身體中物凄い力で壓迫される。骨と云ふ骨は盡く折れさうだ。息は全くできなくなつた。漸く目があいた様だが眞暗だ。何糞!! カーパイ腕を突あげた。軽い!! 占めた!! 息だけできるやうになった。できるだけ息を吸つて亂れた呼吸を直さうとしたが胸が押しつけられてゐて、とても苦しい。然し兎も角も肩邊までの雪を拂ひ除けて首をもたげた。此時の身體は谷の上流に向ひ直立して、首をやゝ後へそらし、腕は胸の前へかまへる様に縮めてゐた。面上の雪は二十糎位だつたらう。とても静かに雪が降つてゐた。掘つて掘つて胸邊まで掘つた時、上の方から聲が聞えてきた。腹邊まで掘つた時山田氏が駆けつけてきて腰の廻りを掘つてくれたが間もなく、直ぐ上から近藤氏の聲が大和を呼びに行くやうにとどなつたので右手の臺地を匍ひながら見えなくなつた。それから私の所へ有田氏が來た。續いて河津氏もきたが無理に追ひやるやうにして下の聲のする方へ行つてもらつた。一人で前の様に續けて足まで掘りさげて見るとスキーが兩方ともチャンとついて右足が外方へ捻れてゐた。

下へいつてみると、江口氏が胸邊まで掘りだされて、完全に氣絶してゐる。帽子も眼鏡もない。(その時彼の傍には、河津氏と有田氏しか意識してゐなかつた) 私が足を掘りだしてみると左にはスキーがついてゐて右はビンディングだけだつた。有田氏が小屋へ江口氏を連れてゆくからと云ふので脊負はせようとしたが重いなんの。

「俺には駄目だ。トラチャン、おぶつてくれ」

然し私はまだ歸りたくなかつた。も少し捜したかつたので萬一を頼みに後から抱きあげて、右拳を背に入れた。

「ウン」と江口氏はふいと立上つた。フラフラ歩きださうとする。何を言つても「ウン」と言ふだけ。身體は生きかへつたが意識は十分に明瞭でないらしかつた。それから、有田氏がおんぶして、雪の下の方へ消えていつた。

渡邊氏と河津氏とがやゝ上で雪の下を捜してゐる。江口氏の出た十米位下(雪崩の末端と思はれる所)から上へと捜しながら上つていつた。雪塊の間隙のある所は随分手で起して覗いて見た。近藤氏の處へいつたら彼はスキーを掘りだしてゐた。私も掘らうとしたがとても深いし、氣が引けるやうで掘らなかつた。上は河津氏のでたといふ處迄三人で大體横に一直列になつて、捜しながら上つていつたが何も發見する事はできなかつた。加ふるに先程からの雪で雪崩の上には七八糎も積つてゐた。雪崩の堅さは靴で潜らない程度に堅く所々に氷の様な所もあつた。更に二三回デブリの上を上下した。併し主に谷の我々の出た側をよく見た。特に近藤氏と江口氏との間は念を入れて歩き廻つた。殆んど驅足で走り廻つたので二度目に下へおりてきた時は他の人達(渡邊、河津、近藤諸氏)の状態に氣がつかなかつた。三度目に上へ登つた時だつたと思ふが渡邊氏に行き會つた。彼は帽子も手袋もしてゐない。雪崩のために奪はれてしまつたのだ。そして彼の手の色が次第に變つてゐるので雪で擦るやうに云つてゐる時河津氏も來て足に感じがないと言ふ。彼は靴を履いてゐなかつた。いつの間にか近藤氏はゐなくなつた。雪から出てから一時間にもならうか。この儘では私達まで危険に陥りさうなので、歸る事にして、自分の出た穴と平行に生へてゐる徑四糎程の木を折つて穴へたてようとしたが折れないのでその直ぐ上にあつたやゝ細いのを折つて、自分の穴の上へ立てた。そしてその上の所から穴迄を歩いて計つた。(一二歩と思ふが確かに覺えてゐない) 渡邊氏と河津氏が見てゐた。彼等に自分達の出た地點を覺えておくやうに言つたら河津氏は「あのブツシユの直ぐ傍だ」渡邊氏は「河津氏の直ぐ下だ」と言つた。私の穴の傍に置いてあつた山田氏のリュックは殆んど雪に埋れてゐた。山田氏の越して行つた臺地を先づ河津氏が越して行つた。それから渡邊氏と私とが互ひに助け合ひながら足跡を追ふて這つて行つた。途中(場所は、はつきり覺えてゐない)で大和氏と近藤氏とが谷へゆくのを見た。一言ひ遅れたが、雪からぬける時私は右の手袋は残つてゐたのでそれを時々左右交互にしてゐた。又帽子もなし。右手に兩杖の折れたのがついてゐた。

近藤 正

入山以来スキーの練習で皆かなり疲れてみたし、それに吹雪で冬期幕営にゆく氣もしなかつたので一寸ゴルジュ邊まで行つて滑つて来ようとして出掛けたのです。さうして、登高の時は傾斜面のノウカツトの角度をできるだけ正しくとつてゆくことの練習をしようとしたのです。で本谷へ下つてから先頭は交代しても私だけは常に二番目にあつて、いろいろ氣づいた點を言つて皆に注意しながら登つて行つたのです。丁度渡邊君が先頭にあつて赤石澤の出合へきた時でした。その時は渡邊君だけがスバリ側を向いて廻轉し私達は赤石澤の方を向いてみました。どちらかと云へば私や渡邊君は谷の中心から蓮華側に寄つてみました。その時です。私は異様な風の音に似た音響を耳にして雪崩を直感し、上方を見あげた時、ゴルジュの上に濛々たる雪崩の煙。「きた、きた」と叫んだが自分の所までくるとは思はず却つてスバリ側を掠めて通ると思つた。しかし雪崩はあまりにも物凄く「これはいけない」と思つた時は既におそく、何等の處置をとる間もなく、強風にはねとばされ非常な痛さを覺えたが、それからしばらく意識を失つたやうです。意識づいた時は雪崩の渦の中に巻きこまれて流されてみたがやがて静止した。その時はもう意識ははつきりしてみました。顔には雪をかぶり、たゞ右の手首から先が出てみました。早速顔面の雪を拂ひのけてやつと眼と鼻が出てきましたが何分にも雪はかたくて身動きもならず、段々締めつけられて非常な苦痛でした。身體は斜に雪中にうづもれ左手は下方に深く伸して入つてみたのでどうとも仕方なく唯上方に出てみた右手に満身の力をこめて顔の雪を取り去り首から上が出た時「オーイオーイ」とどなつてみたが何等の返事もなく「皆やられたのだ」と思つた。それからできるだけ早く出て、大和を呼んできて搜索しようと思つて尚も右手で掘りつゞけたが固い雪塊は胸の上にあつて苦痛は甚しかつた。その内有田君が駆けつけてきて早速掘つてくれた。富田君が私の少し下手、スバリ寄りの所に埋もれて腰から下を掘つて、あるのがみえる。山田君が富田君を後から掘つてみた。私は早く大和を呼んできて捜させることはこの場合必要だと考へたので山田君に小舎へゆくやうに命じた。山田君は深い雪を踏んで臺地へ上つて行つた。その内河津君、渡邊君もきて掘つてくれたが雪は堅いしはかどらず又直ぐ近くへ来て掘るものだから強い雪の壓迫で身を切るやうに苦しかつた。漸く掘りだされた。私の兩足にはスキーがついてみたのです。で直ぐそれをも掘りだしました。皆がスキーを失つてゐる時、一臺のスキーでも非常に役だつものだから。

「手が出た」と呼ばれたので少し下方へ走つてゆくと小さい手が渡邊君によつて掘りだされてみました。手首を握つて「家村か」と言つたが掘るうちに顔が出て江口君であつた。既に顔色も變つてみたし、全然意識もなく、駄目かとも思ひましたが、呼吸は、かすかにしてゐるやうだし大丈夫と思ふうち富田君が活を入れて一寸正氣ついたやうでした。それで有田君一この時非常に疲労してゐた一に江口君を小舎へ連れてゆくやうに言ひつけ、私は渡邊富田君等と捜しにかゝりましたが何分にも道具はなく、まだ大和は來ないし山田君の消息も氣にかゝるので旁々シヤベルを取りに小舎へ走りまわりました。スキーのあつたことは實に役だちました。途中大和に會ひ現場へ急ぐやうにいひつけ小舎に到りシヤベルを持つて又出掛けました。その間渡邊、富田、河津君らはあちらこちらと捜してみたが見當らないとのことでした。私と大和とはそれから谷を上へ下へ駆けづりまはり、一寸心當りのあるやうな所は掘つてみたり又江口君の出た近邊に當りをつけて掘つて見ましたが駄目。吹雪は益々はげしく遭難後の降雪で谷の様子も段々變つてくるし、あれからもう二三時間も経つてゐるやうに思はれ、疲労もでてくるし、又小舎に歸つた連中の様子も氣づかはれ涙をのんで一先づ斷念し、救援隊を呼ぼうと小舎へ引きあげました。二時頃。

江口新造

唸つてゐる吹雪の音の中に實に異様な響を聞いた。赤石澤に向ひ、先頭（スバリ側に向ふ）より四番目の私は本谷の上を上半身右上へふりむいた。異様な響をきいた時は雪崩とは思はなかつた。又近藤君の「キタキタ」の叫び聲も記憶してゐない。上をふりむいたその時既に猛烈な速度で白い煙幕が襲つてきたので、ハツ雪崩だと直感した。その時の雪崩がゴルジュ上から落ちてきたか、そ

れともゴルジュ下から落ちてきたかハツキリ分らない。

本谷一パイの雪崩を直感して、私の前邊りで静止しはしないかと頭に浮んで、その瞬間何の處置をせず飛ばされてしまった。その時の意識状態も瞬間的で絶望的である。

もう駄目だと思ひ幾度も幾度も雪中で或は堅いものゝ中（後で考へれば氷塊）で廻轉された。横に廻轉したか縦に廻轉したか記憶なし。勿論スキーを履いてゐたか否か分らない。息づまる感も瞬間的である。

幾度も廻轉されもまれ雪が静止し初めると身體の周圍の雪が掌中の小さな豆を握りつぶす如く壓縮した。その瞬間意識があつたと思ふ。それは、絶望の涙と、母に無理な願ひ迄して冬山にくるのではなかつたといふ心と、自分と同様他の友も同じ運命だといふ氣持とが、フラツシュバツクの如く、浮び消えていつたから。足を眞直ぐにして、上向きになつてゐる事だけは意識してゐる。兩手の位置も分らないし、又スキー、近視眼鏡、スキー、帽子、手袋等の附着か否か全然分らない。唯手を動かしたり靴の中の足を動かしたやうにも記憶してゐる。（これは苦しい壓迫から逃れたいと云ふ本能に過ぎない）けれど壓縮した雪は動かない。その内兩手の内一つが冷たくなつたなと思ふとそれから先きは全然意識がなかつた。又頭が谷の上にあるか下になつてゐるか、身體の上に如何程の積雪があるか、雪の色、兩杖の紐が手首についてゐるか否か—それらは全く分らなかつた。

有田君の肩に脊負はされて或る雪の深い臺地へ這ひ上る頃に意識が段々分つてきた。そして眞先きに自分と有田君だけは助かつた事が分つたので「オイ他の連中はどうした。俺達二人きりかい」とたづねたさうだ。後からきくと水上げの入口の附近だつた。手が冷たいので始めて手袋のない事に氣づいてズボンのポケットから毛の手袋をだしてはめた。その時既に凍傷になつてゐた兩手の蒼白に意識明瞭でなかつたのか氣づかなかつた。私は有田君の蒼い顔に血の染つてゐるのおぼろげに覺えてゐる。そして私が此の臺地を上らずに澤の下の方へゆかうと言つたさうな。それは大澤の出合のブツシュが明瞭に分つたからだらう。臺地への雪が深いので白樺の根元から根元へ枝傳ひに這ひ上つた。急な臺地を上りきると私は元氣づいて介抱してくれた有田君が反對に疲勞の色がみえてきて、私が彼を勵ますやうになつた。有田君がその時手袋をはめてゐたか否か分らない。唯帽子だけはなかつたと思つてゐる。私は又帽子を被つてゐたかどうかこの點は意識不明瞭である。その内夏道に出てそれから歩いて小舎にたどり着いた。

小舎には山田君が、居て早速兩手を雪で摩擦してくれた。その時初めて蒼白になつた自分の兩手に感づき、同時に右靴にスキーのトワイヤンとビンディングが堅くくつついてゐるのに氣づいた。勿論帽子と近視眼鏡のない事もその時分つたのである。目がぼんやりしてゐたのも一つはその爲かも知れない。直ぐ眼鏡だけは備への品を掛けた。それから後氣づいたのはスキー外套の裏がズタズタに裂けてゐた事である。

一同が涙をのんで現場を引上げて小舎へ歸りついた時は午後二時頃であつた。現場の戦場の様なあわたゞしさが直接小舎へも持ち込まれた。生存者は極度に興奮してゐた。一生懸命凍傷をこすつてはゐたが直ぐ泣きの涙になつてゐた。頭髮は逆立し目はつつてゐた。私達は同志であり親しい山友達であつた家村、山本、關、上原の諸君を失つてしまった。空しく彼等を自然のなすがまゝに放任さるべきであらうか。あんなに打ちのめされてそして九死に一生を得た私達はスキーも奪はれ戸外に出ることをさへ許されぬ。そのみならず一同の疲勞は極度に達してゐた。私達は出来るだけ冷靜にならうとつとめた。私達は當面の問題を考へた。四人の行方不明者を索めることはあらゆる状態から押して出來得ないことであつた。當面の問題は誰か先づ下山して救援隊を索めることであつた。一同は相談の結果近藤氏と大和とが行つてくれることになつた。近藤氏も大和も完全なスキーを持つてゐた。近藤氏は埋もれた雪から掘り出された時直ちにスキーをも掘り出した。さうしてそれは壞れてゐなかつた。之は雪崩にあつた時誰もが注意すべき事柄である。近藤氏は入山の折二臺のスキーをこの小屋に持つてきた。救援の爲下山した時は、小舎に残してゐた新調のスキーをは

いて行つた。近藤氏と大和とは二時五十分出發した。私達は二人の大町着を午後の七八時と見てみたが疲勞と深積雪に悩まされ十三時間半も要して翌朝四時半大町對山館についたのである。

左に近藤氏からの當時の状況についての報告を掲げる。

現場で捜索にあつた私外三名と大和とが絶望と見てから小舎に歸り江口君の身體の調子を早く知る可く急いだ。この使命を誰が無事に果すかゞ問題になつた。今私は自ら此のアクシデントに最も深い關係の立場にあるので異議なく即決を見た。然し私一人では萬一を慮り大和を同行する事になつた。私と大和が小舎を出發したのが午後三時前であつた。朝からの吹雪は相變らず猛威を振つてみた。残留の諸君に遅くとも今夜七時か八時迄には大町に着き第二隊として入山する森田君等に救援をたのむ心算で出發した。

自分達が毎日毎日練習場としてみた大澤と本谷との出合附近は一面に今朝からの雪で量を増して日頃のように良く滑らず一步一步登高の場合の如く行進する外はなかつた。谷を挟む峯々の方は相變らず吹雪かれて何だか恐しい音響が耳に入る。早く此の危険帯を逃れたいと心ははやれど足が云ふ事を聞いてくれない。雪は膝を没する位なので互ひにラツセルして降つて行つた。畠山の小舎を漸く發見して空腹を満たす爲又こゝ迄一回も休まず來た疲れを恢復せしめる爲立寄る。時に午後七時頃であつた。いつもなら大澤小舎からこの小舎迄一時半あれば十分であつたのに四時間も費やしてゐる。上の小舎に残つてゐる諸君は今頃自分達が大町に着いてゐると思つてゐるかも知れなかつた。前述の様なコンディションなので私達はこれから先の事には何の豫想も出來なかつた。然し私は今日迄の淺い經驗に依つて考へた事實は皆反對であつたと云ふ簡単な一語に依つて諸君の前に述べる事になつた。

小舎に休憩後大體の見當をつけて深い暗い雪の中に入つて行つた。そして八時半頃白澤を渡り闇の中へ中へと一つのラテルネをたよりに入つて行つたのには、手も足も出なかつた。途中危険な場所が二三ヶ所あつたが、無事にヨセ澤に着いたのは十時半頃。何だか嫌になつてしまつたが小舎に残つてゐる諸君の事を頭に浮べては、何としても私達二人は大町迄と云ふ氣持は失せなかつた。この小舎（ヨセ澤）の中でうとうとやつたので大和に「さあ行きませう」と云はれてもう大丈夫と思ひ乍ら小舎を出發した。

あの廣い原を一直線に迂回せずに横切る事が出來れば、もうなんでもない事だと、思案しながら約一時間行く内に森林の中へ入る道の入口にうまい具合に出た。自分は此の原が大丈夫の様でも心配の一つであつた。その最後の一つを無事に過ぎるともう安心と思ひ心身の疲勞が一時に出了のか今迄互ひにラツセル交代の時「おい變らう」と云ひ乍ら來たのに、今度は黙つて横にのいてコースをあけピツケル（兩杖の代り）を雪にさして一ねむり。「行こう」の聲で出かけると云ふ様にまるで口が利けなくなつた。途中十五六回もチヨイチヨイ休んでは動きして終ひに發電所の電氣の見える所迄來た。その時大和が私に「電氣が見えます」と云つたのでいねむり乍ら時計を見ると午前二時近くであつた。

間もなく大出に着いた。それから野口駐在所に一應の届出をなし（時に午前三時）それから大町警察署（四時）に届出で對山館に着いたのが四時半であつた。

吹雪は相變らず大町の里に迄もきてみた。何の爲か知らぬが消防組の人々が大町を靜かに守つてみた。そこへ私達の姿を見て不思議さうな顔をしてみた。積雪量の點ではヨセ澤附近はいつもより遙かに増してみた。そして所要時間は約十三時間半もかゝつてみたので驚き對山館で森君に會つた時は實に疲れて咽喉もかれて自分の云ふ事を彼が聞きとれたか否か心配した。（近藤正）

近藤氏の下山後小舎に残つた一同は何をしたか。如何なる生活をしたか。私達は常にも増してはつきりと結合してみた。私達はこの場合一致した點は協同して極力自ら養ふことであつた。それは明に正しい方法であつたと思ふ。私達は又お互に當時の状況を語り合ひ記憶を辿つて後日の參考の爲にもと遭難地圖を作成した。

凍傷の手當は最初から連続的に行はれた。江口渡邊有田の諸君は手に河津は足に凍傷し、中、江口渡邊二君は最もひどかつた。一同は非常なシヨツクを受けた後であり疲勞甚しく、中にも氣絶し

てみた江口君の衰弱は極度に達して眠をむさぼった。凍傷にもかゝらないで比較的元氣であつた僕と富田君とで薪割り、食事の準備、小舎の整理などをした。夜に入つて吹雪殊の外烈しく終夜小舎の外に猛り狂つた。私達は殆んど眠らず夢現の境をさまよつてみた。

三十一日雪

前夜來かなり雪も降り積つて戸を開けるにも多大の勞力を要した。一同は落ちつきもかなり出て來た。江口も元氣になつた。しかし皆の凍傷箇所は實に物凄くなつてみた。昨日もつと擦ることを怠らなかつたらあんなにもなるまいと、今更乍ら昨日二三時間位しか擦つてやらなかつたことを悔ひた。今日も亦食事の準備、薪割り、屋根の雪落し等は僕と富田君とがなした。午後行方不明者の持參品の整理を行つた。

救援隊來着の豫想を午後四時か五時頃に見てみたが來なかつた。それは近藤氏達の下山が昨日から今朝にかけて行はれてゐるとは夢にも知らなかつたから。午後八時皆寢ようとしてみた頃聲きこえ八時半森田、二出川君、警察署員、野口消防組員數名來着。午後十一時百瀬孝男氏大町登山案内人十名ばかりを伴ひ第二隊として來着。森田君から凍傷者の手當もなされ又遭難者より種々の報告をなし、翌日より發掘の準備をなして寢についた。

一九二八年一月一日快晴

吹雪は全く止んで私達が山に入つて以來の快晴であつた。若しあの遭難のことがなかつたら、四人の友が生きてみてくれたら、私達は籠川谷をかこむ嚴冬の山々の頂に立つことが山來たであらう。顧みて感慨無量。

この日は搜索隊が發掘を開始した日であり私達は現場にあつて搜索隊の人達に雪崩の状況を説明し搜索方針決定の相談をなした。搜索隊の人達はどしどし入山された。しかし小舎に収容する人数には限度があつた。私達はせめて友達の遺骸と共に下山したかつたが發掘作業の出来ない私達の小舎に残り居ることは搜索能力を思ふ存分發揮せしめることが出来ない事を知つた。それに加へて搜索本部からの指令もあり、斷然下山することに決定した。

夜の小舎は猛烈な煙の襲撃に眼も明けられない。小舎には五六十人の人達が泊つてみた。

一月二日、雪

私達の下山する日である。談笑の往路何ぞ涙と共に歸らんとは。午前九時生存者一同亡友のリユツクサツク登山器具、その他の遺品を取まとめ二出川君、消防隊の人々に附添はれ、下山の途につき、十一時畠山を過ぎ、午後四時半無事對山館着、凍傷者は大町病院長の手當をうけ、夜は遺族、部員の會合に出て経過報告をなした。

私はこれで悲しい結果に終つた第四回大澤小舎生活を一應記述し終へたつもりです。日本に於ける積雪期の登山に於て最初の雪崩による遭難はかくも大きな犠牲を要求した。而してこの悲惨な事實は今後の日本登山界の發展の爲に各方面から批判されなければならぬし又批判されるであらう。私達の陣營内に於てはいち早くこの問題をとり上げて徹底的に自己批判の過程を過程しつゝある。

さうしてこのアクシデントはそれ自身あらゆる諸關係から切り離された獨立の存在として批判の對象となるのではなくして過去三年にわたる大澤小舎生活、延ひては過去十年にわたる日本スキー登山界の發展の具體との關聯に於て取扱はれなければならぬ。

13. 高木英二ほか 「記録 白馬岳」『針葉樹』第五號

昭和五年七月一日刊 東京商科大学一橋山岳部發行

要 約

昭和3年(1928)12月21日～29日の記録。積雪期の白馬岳登頂。

メンバーは、高木英二、赤城鈴太郎、宇佐美敏夫、金田一郎、磯野計蔵、中島嘉一郎。

行程は、12月21日 大町ー四ツ谷。

22日 四ツ谷ー二股ー猿倉。

23日 猿倉ー白馬尻ー猿倉。

24日 雪、滞在。

25日 猿倉ー大雪溪ー猿倉。

26日 吹雪、滞在。

27日 吹雪、滞在。

28日 猿倉ー白馬尻ー葱平ー白馬岳山頂ー葱平ー白馬尻ー猿倉。

29日 猿倉ー四ツ谷。

※猿倉の休憩所を根拠地とする。白馬尻の岩小屋、頂上小舎ともに使用を断念、。

リーダー 高木英二、赤城鈴太郎、宇佐美敏夫、金田一郎
磯野計蔵、中島嘉一郎

一二、二一、晴 大町ー四ツ谷。中綱で自動車が動かなくなつたら、丁度馬櫓が迎へに來た。佐野坂を越える頃から星が見え出した。後立山の山なみが、西の空にくつきりと紫紺の屏風を立並べて居る。冴え渡る冬の夜、櫓のきしる音が一層静けさを増す。

一二、二二、 四ツ谷(七・〇〇)ー二股(九・〇〇～九・二五)ー猿倉(二・二〇)

芦倉の先まで道が踏まれて居た。根據地と定めた猿倉の休憩所は、二方開放ちになつて居るので、夏小屋の材料で周圍を圍んで、屋根の雪を落したら、軒から下はすつかり埋つて、住家らしくなつた。

人夫 丸山静男、松澤嘉一郎、横川藤一、郷津長平、大谷東衛

一二、二三、晴午後より雪 白馬尻往復

今日は白馬尻の岩小屋偵察だ。大谷は約束によつて下山する。他は全部シヤベル等を持つて白馬尻へ。小屋の上を登つて行くと雪崩でブナの大木が他愛もなくへし折られた處に出る。そこを一町も登つてナガシリ澤を渡り夏道よりずつと上を御殿場の上へ出るので。このあたりが通過に骨を折らせる。白馬尻まで約三時間。岩小屋はすつかり雪に埋れて、岩上の木だけが雪の上に出て居る。とても此の小屋を根拠地として使用は出來ない。鍋を堀出すために人夫たちがシヤベルを働かせて居る間、スキーの練習をする。何時の間にか日の光が鈍つて、不氣味な風が雪つぶてを運んでくる。一同追立てられる様に引上げる。歸途も三時間。ナガシリ澤は上下とも最大難關だ。

一二、二四、雪 松澤、郷津は残念乍ら豫定變更の爲歸つて貰ふ事にする。頂上小屋の使用をあ

きらめたのだ。

一二、二五、晴、後吹雪となる。

早朝氣狂ひの様な晴天だ。登路偵察に大雪溪まで進出する。新しく降つた雪も風のため相当硬められて、コンディションは乙上といふところだ。出発も晚かつたが、ナガシリ澤を過ぎて御殿場の上に来た頃から、もう鐘のスカイラインがぼやけて来た。白馬尻に出た頃には、いよいよ雪を飛ばして来たが、三號の雪溪まで登って引返す。今日の結論は大雪溪を登るのは全く樂だと云ふ事に一致した。たゞ雪崩が一番心配だが、降雪量にもよるが、大雪溪に左右から落ちる雪崩は、此の時期では、二、三日間の降雪ならば、概して小さく、而も降雪中か降雪後すみやかに落ちて仕舞ふらしいと云ふ事に見當が付いた。此の事は、登頂の時に正しかつた事を確めた。

一二、二六、吹雪。

一二、二七、吹雪、時々青空を見る。

一二、二八、猿倉（四・三〇）－白馬尻（七・一〇）－葱平（スキーを脱ぐ）（一〇・〇〇）－白馬岳頂上（一一・〇〇～一一・三〇）－葱平（スキーを穿く）（一二・〇〇）白馬尻（一・〇〇）－猿倉（三・二〇）

今日天氣が悪かつたら、そのまゝ下山ときめてあつたので手際よく出發出来た。まだ眞暗だ。ラテルネをつけてナガシリ澤を渡るのは、全く骨を折らされた。白馬尻に出る頃漸く明るくなる。雪の状態も非常によい。大雪溪には既に多くの小雪崩が左右から落ち込んで、スキーのめり込まぬ處もあつた。三號の雪溪で第一回の食事。此の邊から少しづつ電光形に登り始めた。葱平の急斜面は、ところどころ凍結してゐて、カンテの利かないところもある。小雪溪など區別がつかない。たゞ一つの大雪溪があるばかりだ。蠟燭岩の下でスキーを脱いで、アイゼンを穿く。頂上までは何の造作もない。チョンチョンと登って行くだけだ。尾根すぢは殆ど雪が吹拂はれて、夏道もそれと認められる。頂上東側の雪庇が物凄い。頂上についた頃は一點の雲もない。風も此の時期に珍しいなぞだ。實に僕等はめぐまれた。頂上の小屋は全部露れて、いかにも寒そうだ。頂上からの眺めは云ふだけ野暮だ。下りはスキーデポーから直ちに穿いてすべる。其の夜の小屋は、ありつたけの蠟燭をともして、七人の山人の間をウイスキーのコップが亂れ飛んだ。

丸山は夕方急用のため下山。

一二、二九、吹雪、猿倉－四ツ谷

昨日頂上から小屋に歸りついた頃から降りだした雪は、一夜の中に二尺降り積つた。人夫の中、最後の一人になつた横川は、輪カンジキのためぐづぐづして居ては歸れなくなると云ふので、一同支度もそこそこに下山した。そして目的を果たした氣安さに、皆にここにこしながら、四ツ谷の白馬館に迎へ入れられた。

要 約

昭和5年(1930)3月16日～26日の記録。白馬岳から唐松岳縦走。

メンバーは、交野武一、岩崎巖、宍戸文太郎。

行程は、3月16日 細野滞在。

17日 細野—二俣発電所—猿倉。

18日 猿倉—白馬尻—猿倉。

19日 猿倉—滝の沢—猿倉。

20日 滞在。

21日 猿倉—葱平—白馬岳頂上小舎—白馬岳頂上—白馬岳頂上小舎。

22日 滞在。

23日 滞在。

24日 白馬岳頂上小舎—白馬沢の頭—小蓮華岳—白馬岳頂上小舎。

25日 白馬岳頂上小舎—鎗岳頂上—不歸—唐松岳頂上—八方日電小舎。

26日 八方日電小舎—八方岳頂上—細野—四ツ谷。

此のコースは私達の部では二年前から計畫されてゐた。併し昭和四年の一月は交野、赤星によつて決行されたが、白馬の縣營小舎まで強風雪の爲にやむ無く引歸した。

其の後明けて昭和五年一月交野、赤星、白石、と私の四名で同一目的の爲に出發したが、此の度も白馬の縣營の小舎までは來たが冬山特有の強風雪に再び見舞れてやむ無く二度目の敗北をなす外はなかつた。昭和四年には人夫櫻井(大町)を連れ同五年一月には丸山(白馬)を伴つて行つた。

併して第三回目を同年三月決行するまでに至つた。

一行は交野武一、岩崎巖と私の三名に人夫丸山信忠(細野)であつた。

昭和五年三月十四日の夜此度こそはと思つて新宿驛を出發した。十五日十二時當時鐵道の最終點築場驛に着いた。それより所々残雪消えはじめて居る道を馬櫓にゆられながら、小雪の爲ぼんやり霞んでゐる青木湖等を眺めながら白馬館に着いたのは午後三時半頃であつた。

三月十六日

昨日からの小雪はまだ降り續いてゐる。温度は割合に暖かく朝八時には+3℃であつた。

今日は山の神様のお祭りの爲此の土地の人は入山する事を例としないので已むなく、つまらぬ四谷に居るよりも、細野スキー場にてスキー練習をやる。そして細野の丸山氏宅に十六日は宿泊する事とした。

農家の人は親切で無理に御馳走をしてくれるのが氣の毒でもあり有難くもあつた。

三月十七日

昨日の小雪は何處へやら今日は一點の雲すら無い快晴だ。白馬、鎗、杓子、不歸、唐松、五龍等ざらりと頭を並べて朝日に浴して私達の門出を祝福する様に銀色に輝いて居る。十日間ぐらゐの籠城を覺悟しなければならぬので食糧等も相當に持ち、十時丸山氏宅に禮を述べいよいよ山へ入る事にした。道は雪少なく寸時の間スキーは厄介物になり擔いで行く。約一時間ほどして二俣の発電

所の前を通る。其の頃には春陽の爲にすっかり體も汗ばんで來た。發電所上にてスキーを履く。そして北股入澤について夏道どほりに登行する。リュツクの重みと第一日目なので大分へばる。中山平邊から夏道を捨て、一路猿倉の小舎に向つた。

小舎に着いたのは三時頃であつた。小舎の附近の積雪は一月と比較して量に於ては大差ないけれども、斜面の凹凸は無くなつて居る。リュツクを小舎に残して、小舎の上の林間でスキー練習をやる。實に林間なので雪はパウダー其の物だ。下手な私でも雪があまり良いのでスウイングなどは思ふ様に出来る。



一武野交

近附歸不るた見りよ股二

三月十八日

三時半パツクから出て見ると星は空一面に光つてゐる。今日の天氣は晴れだ。併し星があまりにまた、きすぎて居るのは上層の氣流の大分動いて居る事を明に知らしてくれる。併し今日一日ぐらゐは天氣も持ちさうだと思ふので、四時小舎を出て白馬の頂上の小舎に行く事にした。

出發當時の雪の状態はステイツクのスピツエが漸く喰い込む様なマーブルクラスト状であつた。月光を浴びつゝ林間を登行し林を通り脱けた頃、時間にして約三十分距離にして十二、三丁即ち長走澤の邊まで來たが、三名とも身體の具合思はしからず、又天氣模様は可なり良きも馬鹿に山鳴がして居るので、残念ではあつたが小舎に引返す事にした。午後二時白馬尻まで行つて見る事にした。いつもながら雪は良い。馬尻に三時頃着く。途中長走澤に可なり大きな濕潤舊雪表層雪崩かと思はれる跡あり、又大雪溪には澤全體の幅に長走澤と同種の雪崩の跡が歴然とある。此の雪崩は雪面より下三尺位迄の雪をさらつた物である。相當雪崩の出で居る事を知つて四時頃小舎に歸つて來た。

尚今日白馬頂上に向つた同宿の一行は、お花畑附近にて強風雪の爲、山頂に至らず引返して來た。私達に先見の明ありなどと云つて今日頂上の小舎に行かれなかつた事を慰む。同行はすぐ下山した。

三月十九日

昨夜の天氣模様では今日は天氣良ささうであつたが、朝三時頃より雲行悪しく白馬の頂上は全然見えない。今日も駄目だと諦めて再びパツクにもぐり込む。

午前中は瀧の澤の邊に行きスキー練習。午後は中山澤邊にてジャンプヒルなど作り遊ぶ。終日曇り今にも降りさうである。

三月廿日

十七日頃を最上の天氣として段々に天氣は悪い方に向つて來た。今考えて見ると十八日の天氣を諦めたのが、少しばかり癪に障つてくる。今日は到々三時頃から雪が降り出して來た。已むなく休養と決めた。

小舎に風呂がたつた。東京を出てから大分風呂に入らなかつたので實に良い氣持だつた。

三月廿一日

同じく午前三時頃天気はと見ると昨日の雪はすっかり降り止んで居る。晴れて居ると云ふよりは晴れかゝった天気だ。今日から天気が再び良くなってくる様な空だ。風も無い。皆なの氣持でも本日はなんだか頂上の小舎まで行ける天気になりさうだ。かへつてあまり朝から晴過ぎて居る日より此くらゐの天気の方が良くなると云ふので、いよいよ各自荷物を作り又各自の荷物を多少なりとも軽減する爲、人夫一人（猿倉小舎番の高木）を増す事にした。

四時小舎を後にした。雪の状態は昨日降つたばかりの雪なのでスキーのアザラシも十分きく程度である。朧月と雪明りとでラテルネの必要は感じない。皆無言のまゝ登行は續けられ六時馬尻に着いた。そろそろ東の方が明るくなつて來た。うす暗い中から白馬の大雪溪を見上るとなんとも云へない様な氣がする。

是れからは登りらしい登りになつて行く。ラツセルも段々辛くなってくる。數度のキツクターンを重ねて九時十分大雪溪上まで來た。小舎を出た時は寒くて震へて居たが、天気もすっかり良くなり西北の微風は三月らしい。良い天気なのですっかり汗をかいてしまった。上を見ると小雪溪はますます急角度で直立して居る様に見える。丁度大雪溪の上に私達が着いた時一人増した高木がいつに無く元氣がないので聞くと、足部に痙攣が起り、とても此れ以上同行は出来ないらしい。是れから雪溪も急になるし高木を返せば各自今までよりも相當に重いリュックが尚重くなる。併し痙攣するのを無理に伴つて行くのも氣の毒なので、已むなく高木を返す事にした。

高木と別れてから十一時葱平に着いた。白馬大、小雪溪中一番平らに近い場所である。此處にて晝食を取る。いよいよ小雪溪にかゝるのだ。角度は急になるし表面が堅く中の締つてゐる雪状の時、スキーを叩きつけながら登るよりは輪カンジキで爪先を蹴りながら登る方が身動きが樂にできるので、此處でスキーを輪カンジキに代へる。スキーは又リュックの上の荷となる。併し輪カンジキを餘り履きつけない私達には、小雪溪の輪カンジキの登行は大分辛らかつた。十二時小雪溪の上に着く。此の邊より雪状は増々堅くなり風の爲積雪少なく、輪カンジキを再びシュタイグアイゼンに履き代へた。いよいよビオレも必要になつて來た。私達は輪カンジキよりアイゼンの方がずっと樂に登行出来る。縣營の小舎を過ぎ此の日の目的である頂上の小舎に着いたのは一時十五分であつた。

やがて小舎の西側の窓から入るべく掘出しに取かゝつたが、小舎の西側は窓につまつてゐる雪を取去るぐらゐの程度しか風の爲積雪はないので、案外手軽に取去つた。小舎の中は北側に少量の雪が入つて居るぐらゐで比較的完全な物である。少時小舎の中の掃除に費やす。小舎から十分に於て四時四十分白馬岳頂上に着いた。頂上の温度は當時 -13° であつた。白馬岳頂上には大きな雪庇が東側に出來て居た。西側はほとんど山肌を露出して居る。

此の日夕刻の雲海は實にすばらしい物だつた。そして本日の勞を語り合ひ、明日の天気良きを祈りながら床に着いたのは九時だつた。

三月廿二日

天気は晴れて良いが猛烈に強い西北風だ。一足も不用意に小舎から外へは出られない。用をたしに行くにもシュタイグアイゼンを履きビオレを持ちザイルで身を結んで行くより外ない。一日中小舎の内に居て烈風の氷粉を屋根に叩きつける音ばかり聞いてゐた。

三月廿三日

眼を醒すとすっかり曇つてゐる。それに昨日と同様西北の烈風は少しも弱つて居ない。二時頃から雪まで降り出して來た。おまけに三時頃から雷鳴物凄く風雪増々強かつた。夜に至るも治まらず。

三月廿四日

まだまだ食糧は十分有る。少しぐらゐ荒れ續いて籠城しても大丈夫だなどゝ云ひながら天気を見

ると、風こそ強いが昨日の雪は上り晴れて居る。ストーブにあたりながら風の強いのは冬山の付き物だから此の天気を無駄にするも惜しいと思つた。そこで小舎を中心に小蓮華及び朝日岳等へ行く事に決める。先ず頂上の小舎まで来てしまふとスキーは當分必要無しだ。

アイゼンを履いて十時五十五分小舎を出發、實に身軽な出立だ。ビスケットとテルモス一本である。白馬澤の頭から小蓮華までの尾根は、越中側からの強風の爲に形成された堅いウインドクラストと、山肌を表はしてゐる所との連続であつて、信州側は全部雪庇になつて居る。時々やつてくる強風をビオレとアイゼンのツアケンに力を入れて頑張りながら、小蓮華の頭に着いたのは十二時十分だつた。小蓮華から見ると白馬の大池が眞下に見える。一時四十分小舎に歸つた。雪倉岳への尾根は雪少なく、スキーの使用は面白くなさうだ。一休してスキー練習旁々朝日岳へ行く。さしもの強風も大分弱つて来て、小舎から約三十分にして朝日岳山頂に着く。白馬岳と朝日岳との鞍部はスキー練習に良い所だ。

夕刻少し曇つて来たが夜に入り風も無くなり晴れて富山邊の燈火がよく見える。明日はこの分で天気が良ければ、唐松行と決めて早く床についた。

三月廿五日

ねむい目をこすりながら起きて見ると、丸山が良い天気ですと云ふ。その言葉に皆大いにはりきる。外へ出て見ると申分ない天気だ。遠く劔、立山等の山々も朝霧の中に目を醒した様に見える。なんだか馬鹿に良い氣持の朝だ。西北の微風も實に氣持ち良く肌に觸る。近くは杓子岳鎗ヶ岳等がはつきり見える。

小舎をすつかり片付けて残火に注意して荷物を纏めて小舎を出たのは八時十分である。いよいよ白馬から唐松の小舎までのコースに着いた。白馬頂上の小舎から離山と杓子岳の鞍部（大雪溪上）まで約五十分を費やす。是れから杓子岳の西側をまいて杓子岳の鞍部へ出た。

此處にて小憩する。杓子をまく時など實に八本足のアイゼンの有難さをしみじみ感じた。丸山は三本足のアイゼン故に此處をまく時すべつたが大事に至らず止まる。雪はすつかり締つてゐる。杓子の鞍部より尾根通し鎗ヶ岳の頂上（十時十分）に至つた。

鎗を過ぎてからは廣い雪稜の硬雪を踏締めながら、天狗の大下りの上まで尾根通しに行く。やがて私達は天狗の大下りに差し掛つた。注意しながら一步一步下つて行くと、是を登つてくる三人に氣がついた。近づくと丁度私達の逆コースを取つた立教山岳部の一行なる事が解つた。猿倉の小舎を出てから他人に面接しなかつた私達はなんとなく嬉しくなつた。そして晝食をすまし立教の一行に別れを告げて再び大下りを下つた。大下りの下即ち前不歸の下に着いたのは一時だつた。いよいよ不歸だ。岩と硬雪の嶮稜を登る。一つピークを越すといきなり私達の行手を遮る様に十米ぐらゐの直立した岩頂が儼然と立つて居る。とても此のピークのリツジを登る事は出来さうもない。手懸りになりさうな所すら無い。一寸信州側を見ると少しくオーバーハングぎみになつて居る。岩場の途中に偃松の上かそれとも風に吹きつけられてか岩に雪塊がしがみついてゐる様になつて居る。其の雪塊の上には先つき會つた立教の人の通つた跡が有る。それで大分雪塊も崩れてとても私達四人が通過する間持ちこたへさうには見えない。併し越中側を見ると同じく直立して何物も無い。已む無く信州側の雪塊の上を横切る外にはなすべき途が無かつた。

そこで丸山がザイルに堅く身を結び一步一步進んで行く。私達は岩角を利用して丸山の爲に確保して居た。やがて丸山は雪塊の上を横切つて安全の場所に出て、偃松の根元にザイルの一端を結びつけて歸つて来た。そしてザイルは一文字に頭の邊に張れた。そこで私、岩崎、交野の順でザイルを頼りに横切り、最後に丸山が再び身體にザイルを結んで、私達の確保によつて無事に此の場所は横切る事が出来た。が若しもう二、三名、人が多かつたら其の雪塊は崩れてしまつたのではないかと思ふ。

そして又一寸行くと又しても直立した岩に直面した。岩は同じく七、八米位である。見ると今度は岩のリツジを登れば登れさうである。先ずザイルで身體を結んだ交野は一步一步慎重にリツジを

登り始めた。私達は岩角やビオレを雪面に刺して確保に努力した。やがて交野は岩の上に立つた。上からザイルは下された。まずリュックやスキーを先に上げ、岩崎、私、丸山の順で上からザイルで確保されながら登った。其處にて小憩を取る。テルモスの紅茶は實に美味かった。再び雪稜に出た。此の場所が前不歸と奥不歸のギャップである。時間は四時四十五分であつた。



一 武野交

り下大るた見りよ歸不前

雪稜を少し行くと奥不歸の取つきに來た。此處には針金が下つてゐる。注意して一人づゝ登つた。それから暫くは少しづゝ岩場も有つたが、やがて硬雪の雪稜が續いて、まず不歸の嶮も無事に過る事が出來たのだと思ふと一寸氣が抜けた様になつた。そして雪稜の尾根通しに唐松の頂上に着いたのは六時十分であつた。

この唐松岳頂上に着く少し前に私達は山で稀に見るウロアリングを見る事が出來た。自分達の影が直径四、五尺ばかりの虹中に大きく映じ出されたのを。

六時廿五分、八方の日電の小舎に着いた。四圍の山々の夕映は實に壯麗であつた。

今日は一日中アイゼンを履通したので大いに體もへばつた。白馬岳から唐松岳へのコースは順當のコースでは無い。まして荷の有る場合は尚更である事を知る。

三月廿六日

私達は昨日の疲れの爲か皆良く寝てしまつた。それで八方の小舎を出發したのは十時廿五分であつた。

十一時五十五分八方岳頂上に來た。八方の尾根の中繼の小舎の上の三角點にて、スキーを履いた。スキーを履くとやつぱり良い氣持ちだ。昨日はあれほどまでに邪魔物扱ひにしたスキーも今日は之ほどまでとは……。

そしてフィルムクラストに成りかけた八方の廣い尾根は此の上なく私達の最終コースを喜ばしてくれた。

そして細野間近かでスキーを脱いだ。

土の香から離れて二旬、此處に再び蘇りのいぶきに満ちた土の面に接した私達はたゞ悦に入つてしまつた。全く土の上に立つた時は悦しかつた。然し唐松の頂に立つた時とは異なつた、たるんだ様な悦びだつた。

そして満身に春陽を浴びて細野の丸山の家に寄り小憩後四谷に着いた。

(昭和五年三月)



15. 逸見眞雄 「三月の鹿島槍ヶ岳」『立教大學山岳部部報』第二號
昭和五年六月二十日刊 立教大學々友會山岳部發行

要 約

昭和5年(1930)3月22日～24日の記録。鹿島槍ヶ岳及び爺ヶ岳登攀。

メンバーは、小原勝郎、逸見眞雄。

行程は、3月22日 鹿島—大冷沢北俣西俣出合—北俣登行—中岩—国境尾根—鹿島槍ヶ岳頂上—国境尾根—鹿島。

23日 休養。

24日 鹿島—大冷沢北俣西俣出合—出尾根—国境尾根—爺ヶ岳南峰—西俣長ザクを下る—北俣西俣出合—鹿島

※鹿島村から北俣中岩沢をつめ国境尾根に立ち鹿島南槍積雪期第二登。

後立山連峯を遠くから望むと柔らかくしかも急峻な感じを吾々に與へてその名にふさわしく聳え立つてゐるのは鹿島槍ヶ岳である。冬から春にかけて純白の雪に飾られたこの山を望む時、何人をも近け難きその山容は慥かに數多い後立山連峯の盟主としての名に恥ぢない。私はこの山の冬季登山には久しい以前から希望をもつてゐたが登路及び根據地の困難な所からいつも躊躇して居つた。幸ひ今年一月(正確に云へば昭和四年十二月末より昭和五年一月初)に旬日の暇を得て永年希望の冬季登山を志した。併し私達は深雪と吹雪とに敗れて二千五六百米附近から見事に追ひ返へされてしまった。私はその貧しい經驗から三月の登高を再び考へた。そしてこれには自信と確信をもつて出發することが出來た。私は便宜上本篇を「三月の鹿島槍ヶ岳」と題した。併し以下おさむる所は一月の鹿島槍とともに三月の鹿島槍ヶ岳及び爺ヶ岳の登山記録を以てした。

一月の鹿島行

一行 堀田彌一・逸見眞雄 志鷹喜一(人夫)

鹿島槍ヶ岳のスキー登路として私は早くから大冷澤の登路を考へてゐた。併し他に登路を求めるならば鹿島村より爺ヶ岳の東の尾根を登り爺ヶ岳を廻つて至るもの及び鹿島川の營林署小舎を根據とし一の澤の頭から眞直ぐ鹿島槍へ登頂するものであるが何れもスキー登路の對象としてはあまり面白くない。特に前者は大迂廻路であるから十二月や一月の陽足の短い時期には一日での往復は問題にならず、中途野營にも不便である。後者は登路として非常に興味あるものであるが、中途困難な箇所が多く之とても一日の登頂は計り難く思ふ。併し乍ら登路としての大冷澤は又最も甚だしい雪崩の危険が伴ふものでこれを避けんが爲には冬季僅かの快晴の日でも出發出來ない場合が多い。けれども私達は結局早くから考へてゐた様に大冷澤の登路を選んだ。

自分等の出發に際して唯一の参考となつたものは『山岳』第二十三年第二號にある小池文雄氏の「十二月の鹿島槍ヶ岳」であつた。同氏等も吹雪の爲山頂まで達せられず下山されてゐる様であるが、私等と同じく大冷澤北俣に登路を求めて居られるので自分等の出發に際しては随分負ふ所があつたと云はねばならない。

次は根據地であるが、同氏等の如く鹿島村より往復の計劃は現在更に一里奥に營林署の小舎があるから私達は最初から考へなかつた。併し乍ら天候の變り易い一月の時期に於ては出來得る限り行程

を短くすることが僅かの天候を利する點が多い爲に更に一里奥の北俣と西俣の出合に幕營をすることに決めた。實際快晴の日を僅かにしか得られない嚴冬の時期に於ては朝の一時間の遅發がその日の成否を決定する多くの場合がある。

幕營の準備に就ては別に此處に記す要がないが大小二個の石油厨爐を持つて行



鹿島槍・五龍岳
逸見眞雄

つた。これは長い私達の幕營生活の間殆ど寒さを與へない位有効であつた。又元來この行は三月出掛ける豫定であつた黒部川御山谷小舎生活と非常な關聯があつたので人夫は特に芦峯から喜一を呼び寄せた。此の外私達は種々詳細に準備と計劃を行つたけれどそれは此處では省略して置く。

以上の計劃と準備で私達は十二月二十八日夜行で東京を立つた。二十九日は鹿島の狩野久太郎氏方で一泊、三十日は荷物の一部をもつて大冷澤を遡り、北俣と西俣の出合より一町程下流の左岸に理想的な場所を見當て、天幕を張つてもどつた。三十一日は殘餘の荷物をもつて天幕へ入つて一九三〇年の元旦は天幕の中で迎へた。雪で此の日は出られないが、元旦の夜は一面の星空で、私達は翌日の出發の準備を濟してから寢に就いた。尤もこの夜の星はギラギラと耀いて翌日の天氣は長くもたないことを明らかに物語つてみた。

一月二日 朝は思ひの外静かであつた。午前七時スキーをはいて出發した。此の日は先づ冷澤にも雪崩が起らない絶好の日である。大冷澤北俣の中岩を可成り登つてから少しでも雪崩の危險から脱れる爲に左岸の出尾根に登る。この尾根は鹿島村の人達は中岩の日向尾根と云ふ。日向尾根とはこゝばかりを云ふのでなく鹿島では元來東西に走る出尾根が大部分であるから總て日中陽の良く當る南斜面を示すもので、中岩の日向尾根或は西俣の日向尾根などと云へば總て左岸の尾根を意味してゐる。さて私達はこの左岸の出尾根に登つたのであるがこの頃から案の條天候が變つて來た。又著るしく雪が深くなつた。尾根は少し登ると非常な瘦せ尾根で鋭く尖つて居り且つ急傾斜になつたのでスキーなどは覺附かない。輪カンにはきかへて吹雪く山稜を雪をかき分け乍ら登つたのであるが甚だしい所は深雪乳に達し、遂に午後二時二千五六百米の附近から引返した。此の位置は恰度五萬分の地圖立山の東端、平村の「平」と「村」の字の中間より稍々上方に當つてゐる。引返した所は幾分傾斜も緩くなり雪も少なくなつた所であつて、此の時は良く判らなかつたが、三月私が再び出掛けた時見たのによれば當時の雪と吹雪をもつてしても尚二時間あれば十分に鹿島槍ヶ岳の頂上に行き着いたらうと思ふ。私達は翌日を再び期して引返したのであつた。併し翌日もその翌日も旬日に渡る吾々の鹿島生活の間私達は遂に快晴はおろか、陽光を見たのはこの一月二日の午前中の幾時間かに過ぎなかつた。私達は尚滞在を續けるならば必ず快晴の日は得られたであらう。併し數

日降り積った雪の雪崩の危険から逃れる爲には二三日の打續く快晴が要求される。併し定りなき冬の時期に於てそれを期待することは出来ない。私達の一月の鹿島槍ヶ岳、それは見事に敗北に歸して仕舞つた。併し私達は幾多の尊い経験を積んだ。

三月の鹿島行

一行 小原勝郎・逸見眞雄 櫻井一雄（人夫）

一月の敗北は尊い経験を與へたばかりでなく、又私の魅惑は一層強められた。三月には元來御山谷へ這入る豫定だつたのであるが立山劔澤の遭難が直接の原因となつて人夫衆に同行を拒まれた爲に突然延期を餘儀なくされた。それと共に三月の山行としてすぐ私の頭に浮んだのはこの鹿島行であつた。

一、鹿島槍ヶ岳（大冷澤北俣登路）

一月の鹿島槍を見事に失敗した私達は昭和五年三月二十日再び鹿島槍へと東京を旅立つた。汽車は私達の外に不歸の縦走に行く友が二人、不歸の方も十二月に充分偵察してあるので自信が強い。ルックを持つ者はこの外にもう一人、帝大の窪田庄十郎君、乗鞍へ行かれるとのことで車中は可成り賑やかであつた。二十一日は大町對山館でひるまで遊び不歸へ向ふ友と別れる。午後荷物を纏めて鹿島へ行く。私は一月の経験から三月の鹿島行には天幕を準備しなかつたのでおし詰つた十二月の鹿島入とは異つて荷物も餘程少なかつた。折からの快晴に鹿島槍、爺の連山も指呼の中に聳え立ち、二ヶ月前の旬日にわたる苦闘を忍ばせる。此の前はスキーを飛ばしたこの路も既に雪はなく軽い埃さへたつて如何にも春らしかつた。源汲へ通じる二俣のあたりからはやうやく所々に雪を見た。

橋を渡つて鹿島が近づいた頃には雪も始めて一面に敷きつめられる様になつた。久しくスキーを履かなかつたので早速スキーをつけて滑つて行く。薄いフィルムクラストが嬉しい。狩野久太郎氏方では私との再會を大變喜んで下さつた。併しこの日は營林署の小舎まで行く豫定だつたのだが、或理由のもとにこれは固く斷られて仕舞つた。營林署の小舎から往復する豫定であつた私達はひどく失望したけれど、もう三月ではあるし村からの往復もさして困難ではなかつたのでしばらくこゝで御厄介になることに決める。狩野氏方では一月の劔澤遭難を私達と間違つて居られたので殊に私との再會は喜んで下さつた。此の夜は静かな月夜で雪も充分シミ翌日の快晴を物語つてみた。私達は永年憧れの鹿島槍へ翌朝は早速出掛ける計劃を立て、寝に就いた。

三月二十二日 晴

鹿島（午前四・五〇）—大冷澤、北俣西俣出合（六・三〇）—北俣登高—中岩—國境尾根（一一・三〇～一一・四〇）—鹿島槍ヶ岳頂上（一二・〇〇～一二・一〇）—國境尾根の取付いた所に戻る（一二・二五～一二・三〇）—鹿島（五・五〇）

午前三時起床、豫定通り見事な天気である。此の日登るべき大冷澤の登路には充分の成算があつた。少くとも正午までには山頂に行かねばならぬ私達は折からの硬雪でスキーには用がない。軽い防寒具とアイゼンそれにテルモスとザイル輪カンをもつて淡い朝の星を仰ぎ乍ら村を出た。行く道はあまりに堅く十町と歩まぬ中にアイゼンをはく。丸山の麓も近づいた頃春の日の空は初めて明け放れた。

一ノ澤の出合で少憩する。此處から仰いだ爺ヶ岳の一角は Morgenrot に輝いて崇嚴な色彩を

放つてみた。西俣と北俣の落合も近き頃正月の幕營の跡を見出して懐しい。天幕の中に敷きつめたタンネ樹の葉は雪に掩れて見えないが、その爲に伐り拂はれた枝の鈍目が眞新らしいのも、過ぎし日の雪と吹雪に闘つた記憶を今更らの様に思ひ起させる。

北俣の出合に来て見れば一月には未だ水の流れてみたこの谷も今はデブリが一面に傷々しく積重つてみた。雪崩の條痕は北俣を登るにつれて箸しく中岩も近づいた頃には廣いこの谷一面がデブリの巨大な雪塊で埋められてみた。遙かにのぞむ布引の頭からは盛んに雪煙をあげて國境には強い風のあることを示してゐる。何しろ廣く長い谷全體が硬い雪塊にかためられてゐるのだから行程も中々捗らない。私達は只一步步上へとたゆまない歩を運んで行くばかり。西俣の出合から三時間も登つた頃にはもう腰をついて休むのも不便であつた。爺ヶ岳が良く見える。頭上の國境尾根では相變らず雪煙を吹いてみた。私達も相變らず同じ様に眞直ぐ登つてみた。永らく運動をしなかつたので體が思ふ様に動いて呉れない。國鏡尾根に至る最後の一時間は自分等にとつては可成り苦しい登高であつた。谷の雪は此の日は少しも溶けなかつた。アイゼンもやうやくさゝる程で私達は自分のピツケルとアイゼンに頼ると云ふよりは自分自身の外には頼るべき何物をも見出さなかつた。硬く氷つた谷筋を何處までもピツケルとアイゼンで四ツ匍ひになつて相變らず同じ様に眞直ぐ登つて行つた。

一月には私達はこの左岸の日向尾根に可成り下から取り付いたのであつた。自分の頭には過ぎし日の追憶と新らたなる希望とで一杯だつた。一步步國境へと近づく自分の足と共に、私の心も亦一步步と登つていつた。愈々國境尾根も近づいた頃わづかの緩傾斜を見出して足場を作り最後の中食を攝つた。見上げると尾根筋には一様に巨大な雪庇が續いてゐる。幸ひ左岸の出尾根と國境の尾根とが續き合ふ所が幾分小さい。私達はこゝから登ることに決めた。最後の數間をジクザックに足場を切つてから愈々雪庇を崩す。櫻井が最初に登つた。次に私が登つた。最後に小原が國境へ出た。十一時半である。

一步國境へ出て見ると越中側は吹き飛ばされさうな素晴らしい風であつた。小原は犬の皮を、櫻井は牛の皮を、そして私は羚羊の皮をきた。山頂はもう僅かである。各々思ひ思ひの防寒具に身をかためて出發する。急に眼界の開けた嬉しさは又何とも云はれない。立山群峯は正に中天の陽光を受けて耀き映えてみた。二十分で頂上に着く、恰度正午だ。五龍も爺も眼下に見える。寒い山頂を間もなく辭して駈け戻る。此の日は午後になつても雪が少しも溶けず冷澤の下りは登りにも増して苦勞であつた。ひと下り下ると雪もやうやく溶け風もなく雪崩に荒された谷筋を呑氣に下れる様になつた。西俣との出合附近からは雪も可成り深くなつたので輪カンをはく。丸山の麓に來た頃は陽も西山に傾き、鹿島槍の頂上は夕日に飾られて見事であつた。遂ひ先刻まで其の上に立つて居つた山頂が遙か遠いのに今更乍ら驚かされる。自分達で崩した雪庇の所が明瞭りと見えて懐かしい。このあたりから小原と私はぶらぶらと帰路を辿つて鹿島へ戻つたのは六時前であつた。

翌二十三日は休養と決めて緩り起きた。朝の中は又天氣であつたが午後からは曇つて夕刻には雨さへ落す。裏のスロープでスキーをする。夜になると又星が一面に輝き出した。

二、爺ヶ岳（大冷澤西俣登路）

爺ヶ岳の登路としては先づ鹿島のお宮の裏から一七六六・九米の三角點へ出て東西に走る尾根傳ひに至るものと、大冷澤西俣を登るものとが考へられる。前者は慥に爺ヶ岳の積雪期登路としては

近距離な點、危険の絶対ない點から理想的なものであらうと思ふ。この登路は先年三月一高の方が往復された様に聞いてゐる。併し、人夫櫻井は西俣の早い事を主張し、鹿島の狩野氏は最初前者の近い事を力説されたが、結局尾根筋を上下して登るよりは西俣を眞直ぐ登る方が時間にして早いかも知れないとの觀察を述べられてゐた。何れにしても大差ないし、殊に登路としての前者を考へた時、一七六六米までの登りを思ふと私はがっかりして仕舞つた。それよりは西俣の出合まではひと走りで行けるし、昨今の状態では雪崩の心配も先づなかつたので私達は後者を選んだ。一つには北俣と同じ様な廣い明い西俣を谷筋通り登つて見たかつたのである。登路としてはこの外扇澤より至るものが知られてゐるが、これは根據地も全然異なるものであるからこゝでは述べない。

三月二十四日 快晴

鹿島（午前四・五五）—大冷澤、北俣西俣出合（七・三〇）—西俣登高一出尾根（一一・〇〇）—國境尾根（一一・二〇～一一・四〇）—爺ヶ岳—南峯（午後一・〇〇～一・一五）—西俣長ザクの上（一・五〇～二・三〇）—長ザクを下る—北俣西俣出合（三・三〇）—鹿島（五・三五）

前日の滞在は吾々を疲労からすつかり開放して呉れた。夜になつて持ち直した空は全く平靜に返つて爺行には全くふさわしい穩かな朝の星が輝いてゐた。此の日は狩野氏宅からアイゼンを付けて出發した。村人はまだ起きない。歩みなれた大川（鹿島では鹿島川本流のことを大川と云ふ）沿ひの路を急ぐ中に東天は既に紅に染り出す。朝日に映えた鹿島槍の頂には可成り大きな龍巻がこのあたりからも明瞭に見受けられる。此の分では尾根傳ひが難しさうだ。殊にこの日選んだ西俣の登路は長い爺ヶ岳頂上の北端に出るのであるから國境尾根の風は一層案じられる。

前々日の經驗で此の日はザイルは持たなかつた。村を出た時間は殆ど同じなのに、氣も緩んだ爲か北俣西俣の出合に來た時はこの前よりも三十分遅い。谷を越えて愈々西俣に這入る。西俣の出合はちよつとゴルジュ状になつて長ザクから落下した雪崩は長い西俣を滑つて此處で皆な止つてゐる。前日村での雨は此のあたりでは既に雪だつたと見えて二三寸新雪がデブリに積つて歩き難い。輪カンを履いたが固いデブリとその上の新雪には私達も可成り惱されて仕舞ふ。それでも晴れ渡つたこの麗日に明るく開いた谷合を登るのは私にとっては云ひ知れぬ喜びであつた。

大冷澤西俣の登高は北俣の登高に比べては餘程樂に感ぜられた。只此の日は雪も大部溶けたのでラツセルは潜つて辛い。長ザクの國境尾根の所は巨大な雪庇になつてゐるので左岸の出尾根に辿り着く。もう十一時だ。此處から望んだ鹿島槍は素晴しかつた。二十分で國境尾根に出る、アイゼンをはく。朝の雪煙は無憂に期して山では珍らしい和や



爺ヶ岳の一角
逸見眞雄

かな日であつた。長ザクの上に荷を残し、毛皮を着て又出掛ける。爺ヶ岳の頭は三つあるが其の北端のものはほんの一角であるから斷然絡むことに決め、可成り大きく越中側を絡んで頂上へ急いだ。何と縦走にふさわしい麗らかな日和であらう。時間も此の日は充分あるので南峯まで行くことにする。その頂上が一時、風さへない山頂にしばらく座して周囲の景色に魅入る。岩小屋澤から鳴澤、針の木と續く山稜には一兩日の中には自分等もあそこへ行けるのかと特に私は強い興味にひかれた。立山々群の美しさ、鹿島槍の懐しさ。去り難い山上もやがては去らねばならない。荷物を残した長ザクの上に戻つたのは一時五十分で、此處で幾度目かの食事を了へてしばらく休憩した。

二時半愈々輪カンをはいて出發する。長ザクの雪庇を崩して足場を切らうとしたが急緩斜で面白くない。幸ひこの時は雪もひどく溶けてゐたので、輪カンのまゝグリセードで降りた。グリセードと云ふよりはまづ滑り落ちるのである。斯うして四五十間も落ちると日中の腐つた雪では自然に止つて仕舞ふのだ。これからは又輪カンでしばらく面白いグリセードをし、滑らなくなつてからは大股で駆け降りた。朝の苦しい登りも今はもうひと走りに過ぎない。三時半北俣との出合に戻る。もう村へ戻つたのも同じことだ、大川も近づいた頃私達は冷澤のほりでしばらく休んで夕日に映えた鹿島や爺に名残を告げる。村へ戻つたのは五時三十五分であつた。

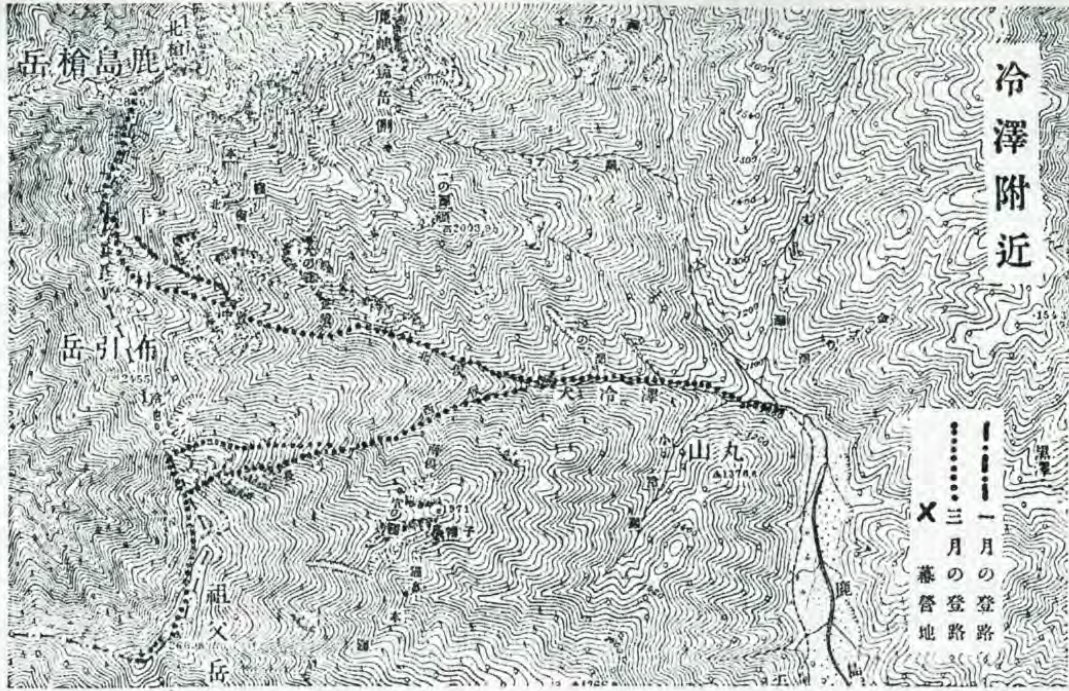
翌日も天気だつた。午後狩野氏方を辭した、對山館で一泊した私達は再び大澤小舎へ向ふ事が出来た。最後に幾度も御世話になつた狩野久太郎氏並に朝早い出發に種々御迷惑を願つた御家族に對し深く感謝します。

結 び

私は最後に鹿島槍ヶ岳の登路としての大冷澤を中心にして多少の感想を記し以つてこの稿を終らうと思ふ。登路としての大冷澤は最も近く又最も早く山頂に達し得る路である。それと共に又最も怖る可き雪崩の通過路であることは今更説明を要しない。實際私達も一月の登高には雪崩を避けることにのみに終始せられた。三月にはこの登路は雪崩も大體規則立つて出るし、天候も一般に定るから幾日かの滞在を見積つて置けばまづ鹿島槍も掌中にあると豫め考へられた。しかも自分等は鹿島村からの往復も容易であつたし(私達は前後十三時間を要した)更らに營林署の小舎まで根據地を進めて置けば一層行程も樂になる。只スキー登路として選んだ大冷澤が今回はあまりに雪の硬かつた爲に全々スキーの使用出来なかつたのを遺憾とする。

大冷澤は冬春の時季には純白の雪に掩はれて仕舞ふのであるから岩・ザイル等の技術は其程要求されない。結局は根據地と雪崩と天候に歸す。この第一の問題は北俣西俣の出合附近に幕營することによつて冬には解決をつけた。勿論營林署小舎からでも又その日の雪質によつては鹿島の村からでも往復は出来るのであるが、冬の定りなき天候の未定による朝の一時間の遅發が稀にしか得られない登頂すべき機会を失するものであるから私達は幕營生活をしたのであつた。次は雪崩と天候の問題で冬季稀に見る快晴の日が雪崩の危険少い日とは限らないのであるから此の點で鹿島槍の冬季登山は少くとも大冷澤に登路をとるならば絶好の機会を待つのに相當の日數を要する。私達が出掛けた一月二日は朝は兩者共可成り恵れた日であつたが(それは深雪と吹雪で登頂は出来なかつた)以來私達は遂にそうした機会を得られずに引上げねばならなかつた。實際幾日も雪が降り續いたのであるから尚幾日かの滞在をするならば吾々は晴天の日を持つたに違ひない。その上絶えず降り積つた冷澤の雪崩の危険を避けるには尚引續く二、三日の晴天が必要であつた。しかも全く定りない冬の空ではこうした機会を待つのは寧ろ僥倖を待つに等しかつた。

然し乍ら私は再び鹿島槍の冬季登山に行く時はやはり大冷澤に登路を求める。それは他によりよ



い登路を見出し得ないからで、前述した様に爺を廻る登路は三月や四月上旬であれば問題でないが、陽足の短い十二月、一月、二月等に於ては先づ登路としての対象にはならない。又一の澤の頭から眞直ぐ登るものは幾多の困難があるにせよ興味ある登路であるが、之に就ては私は知らないし、既に幾年も研究を續けられてゐる方があるのであるから私は自分の憶測などは此處では述べない。

最後に大冷澤の登降路であるが、私達は一月の時も三月も鹿島村の人達の言つてゐる北俣の中岩を登つた。尤も一月にはこの中岩附近から左岸の尾根を辿つたのであつたが、三月は眞直ぐ上まで登りつめた。中岩とは中途大きな岩があるので之を呼ぶらしい。私にはこの中岩の登路が一番樂で又一番近い様に考へられた。之は後になつて狩野氏から聞いたのであるが、羚羊が禁獵になるまでは鹿島の村の人達はやはりこゝを越えて東谷へ入つたと云ふことで古來山の獵人達は最も樂で早い所を通路としてゐるのであるからこの中岩の登路こそ大冷澤の中でも最も樂で早くそして鹿島槍ヶ岳へ登る最も正しい登降路ではなかつたかと思ふ。

〔昭和五年五月稿〕

附記、冷澤附近の附圖に就て 鹿島附近の略圖は詳細なものも既に發表されて居りますが、私は本文中で用ひた地名其他は一切鹿島の狩野氏に據つたもので既に知られてゐると多少異つた所がありましたから讀者の混同をおそれ單に私達の登路を明示する爲に附したものです。鹿島附近の地名では一般に大町方面の獵師、案内者達の用ひる名稱とは可成り異つて鹿島村獨特の名稱があると聞いてゐます。私はこの地圖が必ず正確であると信じてゐるのではありません。何かの御役に立てば結構です。

要 約

昭和5年(1930)3月22日～26日の記録。唐松岳から白馬岳縦走。

メンバーは、奥平昌英、堀田弥一。

行程は、3月22日 四ツ谷－細野－八方尾根－中継小舎－細野。

23日 細野－白馬館－細野。

24日 細野－中継小舎－八方小舎。

25日 八方小舎－唐松岳頂上－不歸－白馬鑓ヶ岳頂上－杓子岳頂上－
白馬岳頂上－猿倉。

26日 猿倉－細野－四ツ谷。

今春は試験終了次第御山谷入りを昨年の春より計画し、食料運搬・人夫の契約も既に終へて居たのであつたが、今冬は積雪が少なくて山が悪い事及び劔澤遭難事件の理由のもとに同行を回避した通信が三月になって喜一から來たので止むを得ず出發を四月六日まで延期した。この事で私達は氣をすっかり腐らせて仕舞つたが、三月下旬の好時期を無意味に都會で過すのはあまりに堪へ難い。私達は速成の山行を考へた時、すぐ頭に浮んだのは云ふまでもなく去る冬悪天候の爲めに敗北した鹿島槍と不歸の尾根傳ひの二つであつた。そして逸見と小原は鹿島へ、奥平と私は不歸へと各々選んだ。

不歸尾根傳ひの準備は大體五龍岳の時に従ひ、唯だ尾根傳ひのスキー運搬と荷物の大量を慮り、是等を唐松から下す可く藤一の外に八方小舎まで別に人夫を一人伴ひそれより先は輪カンを使用する事にした。

1. 八方尾根

逸見・小原の一行と對山館で分れ、私達は白馬館の客となつたのは三月二十一日(昭和五年)の事であつた。それは雪解けの此の頃の常として未だ残雪は所々に其の蔭を認め、橇も自動車も通らない不便な日であつた。私達は其の爲めに更に築場まで汽車に乗り、其の先きは荷馬車の便を借りたのである。附近には點々として残雪のある早春の青木湖は水際一入青く、全く長閑な氣分であつた。山々は未だ冬眠の夢より醒めず、白衣の姿はそれに當る陽を思ふ存分撥返して強い光を射つてゐた。私達は荷馬車の上なるが故に是等を恣にする事が出來たのである。すっかり山心を呼び起されて仕舞つた私達は唯だ翌日の登行を待つばかりであつた。

廿二日。待たれた此の日は天候に恵れ入山の門出を祝福してくれるかの如くである。六時三十分四ツ谷をはなれ、細野村を通つて直ぐ其の裏の小さい谷より尾根に取附く。登行は重ねられるに従ひ、尾根の雑林も段々疎に成り、眺望も次第に擴げられて來る。三月の朝は未だ雪もすっかりクラストとして居るのでスキーを擔いで登つたが、黒檜の下まで來た頃は陽も可成り高く、雪の表面も解け始めたのでスキーを穿いた。雪は締つてゐてスキーは少しも埋らなかつたが、時々クラストに出會ふのでスキーの横滑りに惱される。

お天氣がよく眺望もよいが上の方は風が強い爲めか小蓮華の尾根は頻りに雪煙を吹き揚げてゐる。黒檜の頭に來た頃は何時もながら初日のへばりですっかり參つて仕舞つた。此の分では八方小舎まで行くのは可成り苦しいから中継小舎泊りと言ふ事に決め、人夫等には一足先きに行つて小舎

を掘り出す事を依頼して、黒檜の頭から少し登つた所の土の出てる所でリツクを下し、一時間餘も滑つたり、寝轉んだりして時間を費した。そして遊び飽いた私達は早く小舎に着いてのびる事を樂みに又歩き出した。暫く行くと先きに行つた人夫等が歸つて来る、八方山附近は風が強くてとても駄目だから引き返して來たのだと言ふ。こんな好い天氣に少し位の風でもう小舎を眞近くし乍らおめおめ引き歸へず事は何よりも馬鹿らしい。人夫達をせき立て、兎に角行つてみようと思つた八方山の下まで來ると彼等の言ふ通り物凄い風だ。尾根通りは是だけの荷物を持つてはとても行けそうでない。それで先づ私達は風に對抗する準備として早速スキーをアイゼンに換へ、尾根の南側を横切つて風を避けながら歩を進めた。それでも強い北風は尾根を乗り越えて猛烈に襲つて來る。硬雪さへ吹き飛ばす烈風に對抗しながらどうにか中繼小舎の下まで來た。此處で私達は風の力を弱めた隙を待つて雪庇を割つて一気に尾根を乗り越え、小舎へ駆け寄つたのである。そして烈風に吹きつけられながらも小舎掘り出しに残りの精力を傾けた。併しそれは總て絶望であつた事が直ぐ後で解つた。私達は先づ正面の戸を試みたが逆も駄目だ。それで西側の窓口に廻つて見た。十二月には容易に這入れた此の窓もすっかり雪が詰つて居ていくら掘つても雪ばかりだ。今度は東側の窓へと廻る。奥平は諦め兼ねて未だ西窓を一生懸命に掘つて居る。やがて西窓も東窓も明けられた、併し西側は僅に一人一人横たはるだけの空間しかない、小舎一ぱいにぎつしり雪が詰つて居る。東側は僅に四五人の人が立つて居るだけの空間はあるが圍りは皆雪で屋根裏から煙突まですっかり詰つてゐる。是では野營の準備がなくては逆も泊る事は出来ない。さつきからの奮闘で衣類はもう凍り附いてゐる。木の少い風當りの多い此の尾根では火一つ燃す事も出来ない。私達は全く困つて仕舞つた。今年は食料・燃料・防寒具等を準備し、手も入れたと言ふ此の小舎が斯くもみじめになつて居るとは全く夢想だにしなかつたのである。愈々持つて來た荷物は全部此の小舎に残して細野まで引き返し、明日は一気に八方小舎まで這入る事にして此處を引き上げたのは午後の五時十五分であつた。此の事で落膽と疲れが一時にやつて來た私達は運ぶ足にも力が抜けてゐた。八方山を通り越して暫らくしてからスキーを穿いたが、雪はすっかりクラストしてゐて少しも面白くない。徒らに疲れを増すばかりだ。

一千三百米邊まで下つた時、翌日は朝も早いことだし、雪の硬い事を豫測して不必要なスキーを此の邊の破れ小舎に残した。もう日もすっかり暮れて仕舞つて懐中電燈の明りを頼りに細野村に着いたのは七時半であつた。

二十三日。昨日の疲れを押し切つて朝早く起きて外に出て見たが、天氣は思はしくない。五龍岳の頭は頻りに雪煙を揚げ、いやな雲が白馬の方向一體にある。朝焼けもしていまに天氣が悪く成る事は明かだ。今日は先づ滞在と決めて炬燵に這入つて又寝て仕舞ふ。

午近くに成つて起きて見ると豫想通りすっかり曇つて、黒い雲が凄しい勢ひで走つてゐる。午後は退屈だつたから白馬館まで遊びに行つて來る。黒檜の頭は曇つて見えない、雨も降つて來て明日の天氣を氣遣はせる。

夕方になつてからは雨も止んで何うやら天氣向ひに成りそうだ。ことに私達を喜ばせたのは宿の親爺が明日の天氣を力強く保證してくれた事である。私達は氣になる天氣を見定め様と時々外へ出た。そして先程から親爺の言つた



不歸の一部
奥平昌英

通り天気は益々好くなつて来て、晩は空一面に星は輝いて静である。明日は星光りで出発と定め、早く床につく。

二十四日。好いお天気だ。薄暗い夜明けの空には未だ星が冷く輝いてゐる。今日こそ吾等の八方小舎入には相應しい日だ。五時半細野を出發。昨日のルートを辿つて荷無しの身も軽やかにスキーを置いた所までじきに來て仕舞ふ。雪はすっかり硬く成つて居て今日は大丈夫スキー無しで此の尾根は歩けそうだ。それに八方小舎まで行けば後の不歸尾根傳ひにはそれこそスキーは邪魔物、重いものを背負つて苦勞をするだけ無駄だ。スキーは又と言ふ日に何時でも滑れる。此處に置いて行く事に一決する。其の代りに軽くて便利な輪カンを持たねばならないが、之は昨日の荷物と一緒に中繼小舎まで上つてゐる。

昨日の雨は山では雪であつたと見えて新雪は山々を一層白くした。黒檜を近くした頃は一二寸の新雪を踏んだが、下は硬いのでアイゼンで歩くのはスキーよりも何倍も樂だ。而も此の尾根は早くも所々新雪を吹き飛ばして仕舞つてゐる。八方山附近は雪波がひどく、鱗の様になつてゐるが一昨日とは違つて風のないのは何よりも呑氣だ。雪が硬くアイゼンで歩いて、天気が好くそれに全く空身、良コンディションが揃つて中繼小舎に着いたのは未だ朝の中で八時四十五分であつた。

早速荷物を纏め、食事も軽く攝つて又小舎を後にする。小舎の直ぐ西側のカンバの疎林を抜けると、十二月にはスキーだつたから尾根の左側を横切つたのであつたが、今度はアイゼンだから成可く潜らなくて歩き易い處を選んで尾根通り登つた。急に荷物を擔いだので身體にこたへ、先刻の何分の一しか登行は捗取らない。すっかり汗をかいて身體は急に熱く成つて來る。昨冬來た時よりも雪はずつと多く、五龍岳の姿は一層白くて言ひ知れぬ懐しみが胸一ぱいに溢れてくる。不歸・鏑・杓子・白馬・小蓮華の尾根も斯うして眞白な雪に包れてゐる時は全く雄渾そのものだ。今度こそは私達のアイゼンの跡をあの尾根に刻みたいと希望は一時に燃え上る。

やがて處々の新雪の吹き溜りがもぐるので輪カンを付ける。輪カンと言つても爪のない輪カンで、アイゼンを穿いたまま付けるので硬い雪やちよつとした岩場に差しかゝつてもちつとも不自由な事はない。是は五龍岳へ行つた時も使用して其の効力は充分確めてあつたので、確かに斯うした尾根傳ひには有効なものだ。私達は荷物と新雪で歩行を妨げられる様になつたとは言へ、硬いクラストの上の新雪は乾燥し切つて居て、それ程苦勞もしなかつたのである。小蓮華から乗鞍・大池の方へのスロープはスキーには逆も好きそうだ。スキーが有つたらあれを廻つて下れば良いのだがなどと虫の良い事を考へながら尾根通りもう可成り來て仕舞つた。其の中に唐松岳も其の姿を現して此の日の行程も後僅に成つたのを感じる。唐松の尾根への取付きは雪庇に成つてゐる。スコツプで是を割つて足場を刻んで置いてから此處を通り抜ける。一時に前面の眺望が開け、暫く立ち止つて眺め入る。眞白な立山・劔の偉容、黒部川の深い谿谷を距てゝ毛勝のうねり、何んと自然の秀麗さであらう。

十二時五分、八方小舎到着。今日は色々の好調子で意外に早く來て仕舞つた。小舎は直ぐ掘り出す事が出來て、眞暗な其の中へ懐中電燈の明りで這入る。小舎の中は雪は少しも吹き込んでゐない、さすが日電の冬營隊のみた小舎だ。やがて其の中も整頓され、持つて來た品々は棚の上に並べられる。晩は炭火の頭痛に悩まされながら明日の天気を祈つて寝についたのは九時も過ぎて居た。

2. 不歸・白馬岳

二十五日。ふと目を醒すと藤一も起きたらしい、ぱさぱさやつて居る。一時だ、未だ時間も少し早や過ぎるが早速氣になる天気模様を見に燈りをつけて出て行つた藤一は暫くしてから「どうも天気ははつきりしない、唐松岳が霧で霞んでゐる」と言ふ。それでもう少し眠つてから又様子を見る事にする。

昨日の登行で可成り疲れて居た私達はすっかり寝込んで仕舞ひ、再び眼を醒したのは四時少し過ぎてみたのである。天気は先刻よりもずっと好く成つて来て、唐松岳は明瞭になり、薄い朝霧は却つて此の日の天気を裏書きしてゐる。私達は眠込んだのを悔み、早速準備に取りかゝる。



不歸附近の雪稜
奥平昌英

先づ今日の尾根傳ひには荷物の多い事は何より不便だ。それで兼ねて計劃してみた通り、寢具・餘分な防寒具・諸道具などを全部太田（人夫）に持たせて白馬館まで下す事にし、私達はザイル・辨當・二三枚の防寒具位の極く軽い支度で、今日中に白馬岳頂上を極めて猿倉の小舎まで下ると言ふ豫定にした。昨日到着したばかりで食料は一週間分位はあるが、是等は皆此處に置いて行かねばならぬ、惜しいが天気には代へられない。持つて行くものを準備するやら、下すものを纏めるやら非常に忙しい。私達は太田に小舎の後仕末を頼んで八方小舎を出發したのは既に七時を十五分過ぎてゐた。

晴れ過ぎてゐないどんよりした此の日は却つて安心の出来る好い天気であつた。朝の空氣は未だ冷え切つて居て冷く頬に當る感じは何んとなく良い氣持がする。私達は越中側を横切り、尾根の上へ出て暫く登ると唐松岳の頂上に達した。振り返れば五龍岳は其の純白な姿に朝日の強い光りを受けて其の麗美を誇つて居る。劔・立山の偉容も望む事が出来る。出發の後れた此の日は餘り長く立ち止る事を許さないのさつさと唐松の北稜を下つた。新雪を全く吹き飛ばして仕舞つてすつかり硬雪に成つて居る此の尾根は歩くには好都合だ。私達は唐松岳と唐松岳より第二のピークとの鞍部に出、第二と第三のピークは越中側を絡み、第三と第四のピークの鞍部に出た。其の傾斜は可成り急だが硬雪の此の日はアイゼンのツアツケが良くきいて尾根通り行くよりもずっと樂である。私達は第四のピークは尾根通り越え、第五のピークの上に来て休息をした。そして此の下り即ち不歸のキレットへの下りの爲めにザイルを取り出したり其の他色々準備をととのへたのである。此の下りはワイヤも出て居てさして必要とも思はなかつたが、より安全を期する爲めにアンザイレンをし、安全な場所を選んで岩やワイヤで確保しながら一人づつ動いた。そして再び雪稜に出た時之を解いた。私達は此の雪稜をほんの暫く歩くと今度は七・八米位の二つのピークに依つてギヤツプに成つてゐる所へ出會した。それで最初のピークは捨綱を使つて是を下つたが、次のは岩ばかりの尖りでちよつと手硬い。上るにしても手掛りも足場もとても悪そう。巻くとすれば越中側は岩壁で全然雪は附いてゐない、で是も駄目らしい。最後に信州側を覗くと前者に劣らぬ急傾斜ではあるが、すつかり雪がくつ附いてゐて、多分偃松があるのだらう凸状の傾斜をなしてゐる。そして風で吹き飛ばされる爲めか越中側と尾根上はカンカンの硬雪だが信州側寄りには粉雪で膝を没する。私達は是を利用して信州側を横切る事にした。すつかりザイルで身體を結えた藤一は先に、一步々々慎重に足をのばした。奥平と私は此のギヤツプの安全な場所でザイルの一方を結え、岩角で確保しながら、藤一の爲めに少しづつ是を伸してやつた。ちよつとくつ附いてゐるだけの此の雪は歩む毎に今にも落ちそうで見てゐる目にも危つかしい。彼は岩に齧附く様にして漸く其の危つかしい足場を残し、是を通り抜けた。其の跡を奥平・私と言ふ順にお互に確保しながら一人づつ通つたのである。

斯くして又雪稜に出で割合に緩斜面の峯を一つ越えると天狗の大登りである。私達はほつとした。もう悪い場所は通り越して仕舞つたらしい。後は唯だ硬い雪稜を歩けばそれで良いのだと思ふと一時に何んだか氣抜けがして仕舞つた。そして今通つて來た方を飽ず觀め入つた。

やがて私達は硬雪を踏んで天狗の大登りを七分通り登った頃、是を下つて来る一行が頭上に現れた事に気がついた。歩を止めて待つてゐると、向ふでも私達の側で立ち止つた。明治の一行だ、そして今日不歸を経て八方小舎へ這入るのだそうだ。両方の案内人の間にお互に色々先の事についての對話が交されてゐる間に腰を下して楽しい食事が始められた。

十一時五十分明治の一行とさよならを告げ、再び登行を續けると間もなく是をのぼり切つて廣いのつぺりした尾根に出る。廣々とした此の尾根は眺望もよく、周囲の景色を眺めながら歩は機械的に運ばれた。白馬鑓は其の高い峯を聳えかして私達を待つてゐる。併し不歸を通り越してからすつかり調子が抜けて仕舞つた私達は鑓が馬鹿に遠くに成つて見える。此の廣いすらすらした尾根を中程まで来た頃には薄い雲が劔の頭にかゝり白馬鑓の頂は斷片的に霧で霞められた。それで天氣が變るんぢやないかと心配したのであつたが其の他は全部晴れてゐる此の日の天候は再び持ち直し、鑓の頂上を近くした頃は此の雲も霧もすつかり飛び散つて仕舞ひ、空は益々晴れ亘つて来た。行程が遠い様でも此の上り下りの少い平坦な尾根は歩行が良く抄取つて一時五十分には白馬鑓の頂上に着いた。

直ぐ目の前には朝日岳の輪廓のはつきりした白銀の姿は陽に輝いてゐる。併し私達は直ぐ前方の白馬岳頂上に早く立つ可く此處をも其のまゝ辭して北へと下つた。雪は益々硬く足の痛みさへ感じてくる。更に杓子岳の登りに差しかゝつた私達が先刻からの尾根傳ひに高い所ばかり歩いて來たので最早や杓子岳の頂上はそれ程興味を引かなくなつた。それで此の頂上の直ぐ下を越中側に横切つて二三の隆起を越え白馬雪溪の上の鞍部に出た。

先刻からのアルバイトで可成り空腹をおぼえたので、テルモスの紅茶を傾けながら第二の食事を攝つた。此處から白馬岳頂上迄は一登りだ。歸りは白馬雪溪を下るのだからリツクは此處に置いて白馬頂上に向つた。途中多數の夏期登山者の爲めに設けられた幾棟かの所謂頂上小舎を横に見て白馬岳頂上に着いたのは三時四十分であつた。

長い間憧憬れて居た白馬岳も今こそは其の満足を充す事が出來た。そして又鉢・雪倉、小蓮華、乗鞍の秀麗な雪稜は私に新たな登山慾を要求してゐる。見返れば白馬鑓の傍から槍ヶ岳も其の黒ずんだピークを現して屹立してゐる。私達は暫くそれ等の山々に見とれた後、なごりを惜んで頂を後にした。一走りでもリツクを置いた所迄來て仕舞ふ。

既に陽も低くなり夕日の蔭は白馬雪溪一面に投じられ、私達は思ひ出の數々を胸に秘めて降路を急いだのである。大雪溪の下邊迄來るとそろそろ雪の潜り方も深くなつて輪カンをつける。それから暫く此の谷通り右岸を絡んで猿倉の小舎に着いたのは陽もすつかり没し、四方は早や宵暗も迫る六時半であつた。小舎に這入つて見ると登山者も番人も去つた後らしい、誰も居ない。のんびりと寛いで奥平の作つてくれた晚餐に舌鼓を打つたのはそれから間もなくであつた。晩には蒲團の中で思ふ存分足を伸して寝につく。

廿六日。私達はスキーがないから此の日は朝の硬雪の中に出掛けようと思つてゐたのだが昨日の登行ですつかり疲れて仕舞つて出發も可成り遅れ、八時半ようやく此の小舎を出掛ける。路筋のスキー痕は私達を此の上もなく羨ましがらせ、やがて大平も過ぎ二俣も通り過ぎると雪も處々途切れる様になり、アイゼンばかり使用して來た自分達は唯無心に土の上を踏む事を喜んだ。

暖い春の日和に氣も心も全く晴々して細野村迄來ると太田はにこにこしながら迎ひに來てくれる。細野では先日厄介になつたお禮をのべ十一時には四ツ谷に戻る事が出來た。顧れば此の三日間の好天氣は今度の山行きの喜びの數々を生んでくれ、私達を心から満足させてくれたのである。

〔昭和五年五月〕

17. 田中伸三〔神戸商大〕 「春期後立山連峰概観」『關西學生山岳聯盟報告』第一號
昭和五年六月二十日刊 關西學生山岳聯盟發行

要 約

昭和5年(1930)4月3日の記録。鹿島槍ヶ岳鎌尾根から第三登。

メンバーは、田中伸三、藤井隆蔵、富川清太郎。

行程は、4月3日 鹿島村—小冷沢出合—西俣出合—笹釘—鹿島槍頂上—爺ヶ岳頂上—
小冷沢下—大川出合—鹿島村。

※大正15年(1926)1月、一高パーティによる積雪期の初登。

昭和5年(1930)3月、立大パーティの、鹿島村から北俣中岩沢から南槍積雪期第二登。

我學生山岳聯盟の春期に於ける後立連峰登山に関する記録としては、舊くは京都大學パーティの4月に於ける小日向よりする杓子尾根登攀あり、又昭和3年4月下旬に於ける鹿島營林署小屋よりする五龍岳行がある。

而して最近に於ける記録を時間的に羅列するならば、

昭和4年春期

▲杓子岳主稜登攀、3月26日、神戸商大 パルティ 三名、ポーター 三名。

▲唐松岳行、3月30日、神戸商大 パルティ 二名、ポーター 二名。

▲白馬岳より小蓮華山へ、3月30日、大阪醫大 パルティ 二名。

昭和5年

▲白馬岳、3月21日、三高 パルティ 四名。

▲白馬澤より小蓮華、白馬岳へ、(途中引返し)3月22日、甲南高校 パルティ 六名、ポーター 一名。

▲唐松岳(途中引返し)3月22日、神戸商大 パルティ 三名。

▲五龍岳(平川入廻行大黒經由)神戸商大 パルティ 三名、ガイド 一名。

▲赤澤、鳴澤、岩小屋澤岳、3月31日、京都大學(先輩) パルティ 二名。

▲スバリ、針ノ木岳、4月3日、京都大學(先輩) パルティ 二名。

▲鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳、4月3日、神戸商大 パルティ 三名。

等である。

便宜上此を四つのグループに分つ。

第一を小蓮華以南、不歸以北。

第二を不歸以南、五龍岳以北。

第三を五龍岳以南、爺岳以北。

第四を爺ヶ岳以南、針木岳以北。

とし記録を中心として以下述べて見やう。

*** 中略 ***

第三グループ

A. 鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳。

神戸商大 田中伸三、富川清太郎、藤井隆藏、

4月3日、4.05 鹿島村出発（スキーは携行せず）－5.05 小冷澤出合（アイゼンを穿つ）
－6.20 西股出合－6.45 笹釘－8.55 雪皮下（アンザイレンす）－9.55 雪庇上－10.35
鹿島槍頂上－1.25 爺岳頂上（尾根筋より谷へ下る）－3.05 小冷澤下－4.50 大川出合－
5.25 鹿島村歸着。

30日の偵察により大冷澤北股の笹釘附近迄の地形がはつきりわかつて居るため、時間を可成りセーブする事が出来た。笹釘より上方は殆んどデブリが带状に連続して居る。我々は長岩を通らずに鎌尾根を上つた。雪庇はかなり大きなもので、アンザイレンして叩き壊した。身體を入れるスペースを切りパッキングアップで登る。オーダー田中、藤井、富川。リッジに出れば鹿島槍迄は問題ではない。信州側は殆ど雪庇の連続である。冷池より爺へかけてのリッジは雪庇や雪堤の爲夏期より歩き易い。爺尾根は地圖で見たよりも悪い。梢を渡る様な所が二ヶ所もあつて一寸いやな思ひをさせられた。積雪量も少いので尾根傳ひに下るのをやめて小冷澤へ下る。雪面は日蔭のため、クラストして居てアイゼンのまゝでも比較的もぐらない。澤へ下つたのが三時過ぎ、雪崩の心配は少しもなかつた。此澤で一番大きなデブリは爺ヶ岳より直接此澤の本澤へ出て居るもので、数日前の降雨のため出たものらしかつた。西股（夏の所謂長ザク）には大きなデブリが出て居る。しかし此とても早朝にさへ通過すれば北股同様問題ではないと思はれる。

B. 根據地。

鹿島村及營林署小屋。

旅館はない。農家に泊めて貰ふ。此村より約3軒で大川と冷澤が分れる。大川が大剛澤と分れて、すぐ大川の左岸に營林署の造林小屋がある。此は使用前大町營林署へことわつておかねばならない。

鹿島村を中心としてスキーゲレンデはない。丸山で少し滑れる程度のものである。大川は冷澤より谷筋が狭い。大正三年に創設した林道が川の右岸に沿つてタル澤の附近迄ついて居るが、何分春期デブリのため道は全部傾斜をなして歩み難い。又川原は水量が多くて渡渉は出来ない。若し天狗尾根より遠見に取付くならば矢張オーゴ澤を逆行して扇平から西天狗に取付くとよい様である。問題の鹿島東尾根を採るためには、犬の窪より上方笹釘の對岸邊りのリンネを上るのが最もよいと思ふ。

*** 後略 ***

18. 堀田 彌一 「十二月の鹿島槍ヶ岳と爺越え」『立教大學山岳部部報』第三號
昭和六年七月十五日刊 立教大學々友會山岳部發行

要 約

昭和 5 (1930) 12 月 11 日～26 日の記録。鹿島槍ヶ岳から爺ヶ岳縦走、厳冬期初登である。

メンバーは、斯波悌一郎、堀田彌一。

行程は、12 月 11 日 鹿島造林小舎。

12 日 鹿島造林小舎—大冷沢北俣西俣出合—鎌尾根下—鹿島造林小舎。

13 日～16 日 滞在。

17 日 鹿島造林小舎—北俣—鹿島造林小舎。

18 日 鹿島造林小舎—鎌尾根—鹿島槍ヶ岳頂上—大冷沢—鹿島造林小舎。

メンバーは、斯波悌一郎、堀田彌一、逸見眞雄。

行程は、12 月 19 日 鹿島造林小舎—鹿島村—鹿島造林小舎。

20 日～22 日 滞在。

23 日 鹿島造林小舎—北俣入口—鹿島造林小舎。

24 日 鹿島造林小舎—爺ヶ岳南峰—爺ヶ岳頂上—畠山小舎—大出—大町。

25 日 休養。

26 日 大町—鹿島造林小舎—大町。

※斯波、堀田 2 名で 鹿島槍ヶ岳の登高を終え、逸見が合流して爺ヶ岳を越えて大町に至る。

昭和五年十二月十一日より二十六日に至る鹿島槍ヶ岳及び爺越えの登山記録を記すに先立ち、名稱・登路等に就いて地形の複雑な事が、下手な説明に却つて不明瞭な點や錯誤等を來す虞れがあるので其等は一切省略し、その代りに「鹿島附近概略圖」を挿む事にした。略圖中の名稱其他の事に就いては一切鹿島の村の人等に據つたものであり、必ずしも正確であるか何うかは知らない。唯だ私等の間では再三此の地方より入山せし關係からして是迄此の村の人等に依つて使用されて居た名稱や其他の説明に従つただけである。尚ほ略圖中の點線は次の記録中の登路を示すものである。

一、鹿島槍ヶ岳

一行 斯波悌一郎 堀田彌一 櫻井一雄 (人夫)

私等の鹿島造林小舎に着いたのは十二月十一日の午後二時半頃であつた。小舎の附近の雪は未だほんの少いで漸く冬に入つたと言ふ感じであつた。薪を採つたり、小舎を片附けたり、持つて來た食糧や器具を整頓したりして其の日は暮れて仕舞つた。

十二日は早々良い天氣となつた。併し昨日來たばつかりで何んとなき落付がなく、それに今年の登路の様子や雪の状態に就いては何等の偵察もしてないので登頂は何うかと思つたが、兎に角出掛

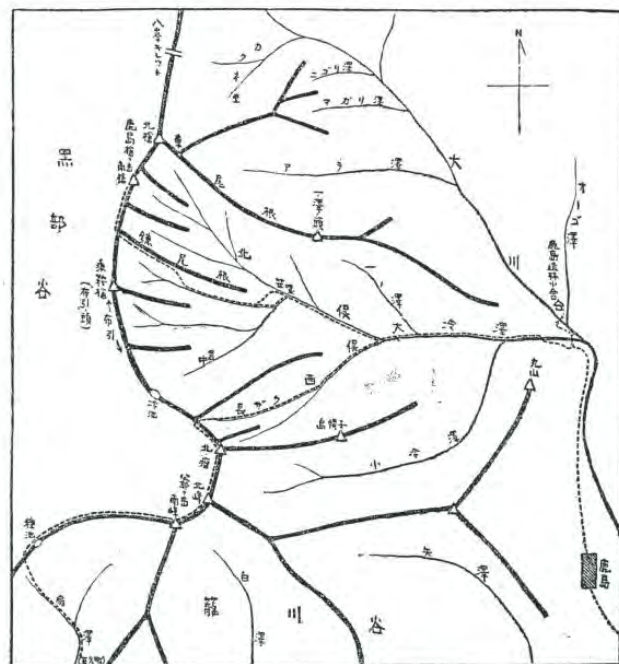
けて見る事にした。午前五時半ランタンの燈で小舎を出發。併し豫想通り冷の川には橋がなかつたり、大冷澤沿ひの林道が暗くて判り難かつたりして案外時間がかゝり、北俣と西俣の出合で既に豫定時間を超過して仕舞つた。北俣に這入つてからも未だ雪量が少く、澤が開いて居たりして鎌尾根の下の臺地に着いたのは十時半頃であつた。此の分では登頂するには時間が少し不足の様だし、之から先豫定日數も十分ある事とて早くも登頂を諦めて仕舞つた。そして櫻井は直ちに下つて鹿島の村へ米を取りに行き、自分等は此處で暫くスキーをやつて遊んで行く事にした。斜面が良いのと久し振りの滑降で仲々面白く、一時頃迄遊んだ。それからぶらぶら滑りながら下つて小舎に戻つたのは午後三時頃であつた。

十三日は曇りで夕方より雪となり、十四日は朝が雪降り^{はつき}で日中は曇り、夕方より又雪が降り出した。此の二日間は天氣が全くぐづいた。斯う言ふ明瞭りしない天候は冬山では一番悪い様だ。

十五日から十六日にかけては烈しい雪降り^{はつき}で、十六日の午後からは吹雪となつた。私等は此の間身體の調子を崩さない様に時々丸山に出掛けてスキーの練習をやり、何時天氣に成つても出掛けられる様に身體の馴化を忘れなかつた。

十七日は愈々好天氣となつた。併し相當に降り積つた雪は雪崩を起す心配がある事、雪が深くて一日の登高としては困難な事、暗い中に出發しなければならないので道踏をして置かなければ歩行が困難な事等の理由で、此の日は登頂を目指す事が出来なかつた。それで道踏と雪の状態・登路の様子等の偵察の積りで北俣の入口迄行つて來た。北俣では(鹿島槍と北槍の間の)釣尾根附近から押し出した雪崩の跡が帯を敷いた様に成つて西俣の出合近く迄續いて居た。そして澤もすっかり埋つて居た。天氣は益々良く成り夕焼がして翌日の好天氣を豫測する事が出来た。それに良く降つた後には大町附近では「暮の三日晴れ」と言ふ事があると聞いて居たので自分等は初めから此の二日目の天氣に期待を掛けて居たのは確であつた。兎に角翌日好天氣でありとすれば注文通りで鹿島槍登頂の絶好の機會であり、之を逃す様では鹿島槍の登頂も出来難いと思つたから準備もすっかり整へて寢に就いた。

十八日、二時半には三人共起きて仕舞つた。外は空一面に星が輝いて微風だにない良い天氣模様で寒氣は身に凍み入る様だつた。準備は昨日にすっかり出来て居たのだつたが、靴や食器類其他少しでも水氣のあるものは全部凍り附いて居たので出發には思ひの外時間が掛つた。服裝を調べて外へ出た



鹿島附近概略圖

昭和五年十二月鹿島造林小舎を中心とするスキー登路

のは午前四時二十分であつた。直ちにスキーを穿き、ランタンと懐中電燈の燈を頼りに昨日のシユプールに附いて靜かに足を運んだ。大川と冷澤の橋を渡り、河原をほんの少し進むと再び冷澤を飛石傳ひに對岸に渡るのだが、石が凍り附いて居て仲々面倒だつた。對岸（左岸）に移つてからも暫らく河原を行き、大冷澤沿ひの林道に附いて進んだ。昨日道踏みして置いたお蔭で、雪で隠れた狭い林道も一二箇所を除けば足下の心配もなく、二個の燈で輕々と足を運ぶ事が出來た。一の澤の一本橋を渡つてからは段々歩き易く成つて來て北俣と西俣の出合に着いたのは六時二十分であつた。此處で私等は燈を消して歩き慣れた北俣を踏み跡に就いて行く事僅にして澤は一面に雪崩の通過跡となつてゐた。雪崩の跡は固く成つて居て何處を歩いても潜る心配はないが、ごつごつして居て何んとなく歩き心地が悪かつた。最早や夜もすつかり明け放れて靜な谷間より望む山頂は朝日に照り輝いて居た。其姿は又新な魅惑と張切つた氣持を呼び起した。時間も大體豫定通りに進んで居るので少憩して簡単に食事を攝つた。私等は斯う言ふ強行の登高には一時に澤山食ふ事は歩き出しが苦しいので休む毎に簡単に喰う様に務めてゐたのであつた。喰ひ終ると又直ぐに歩き出した。雪崩の跡の固い玉で一ぱいの此の廣い谷間は近い様で仲々歩きでがあつた中岩の澤との出合の所から尚ほ少し北俣の本谷について進み、左側の急斜面を細かくヂクザツクに登つて鎌尾根の下の臺地に出た。此處は鎌尾根の南側の谷に續いて居て廣い割合に緩斜面の一見氣持のいゝ所で、雪崩でもないものなら山小舎でも建て、スキーの享樂でもしたら何んなに好いだらうと思はれる處だつた。私等は豫定の如く此の鎌尾根の南側の谷に暫く登路をとつた。谷一ぱいに大きくヂクザツクに進んで行くのだが、何時しか空高く登つた陽の強い光で雪の表面が水氣を含み、段々ラツセルは骨が折れて來た。國境線迄遮るものもなく、良く見通しが利く此の谷筋は近い様で幾ら登つても仲々目的の處迄到達しなかつた。そして登るに従つて傾斜度は増し、登高も辛く成つて來た。私等は最初から此の谷を國境線迄登り詰める意志は無かつた。それは此の谷の上部（國境線近く）は非常に急峻であり、斯う言ふ軟雪状態に於いては登高が困難な事と雪崩を踏み起す心配からであつた。それで適當な處を見計つて鎌尾根に取附く事にしてゐた。併し昨冬の經驗からして急峻で瘦せた鎌尾根は到底スキーの使用が許されない事を豫知して居たので、谷の標高二千二百米邊をスキーデポーとし、輪樫に穿き換えて鎌尾根の登高に取り掛つた。輪樫を穿いて尚ほ腰を没する深雪の中を泳ぐ様にして這ひ登るので登高は遅々として捗取らなく、而も先頭は非常な勞力を要した。鎌尾根に取附いてからも雪の深さは増すばかりで仲々苦勞だつた。それでも時間的に制限されてゐる私等は休憩も十分出來なかつた。唯だ先頭を交代して後になつた時は全く楽しい休息に等しかつた。そして勞れ切つて雪中に俯伏すと直ちに次の者は之に代る様にして、先頭は出来るだけ休まない様に勉めた。又腹の減つた時は後になつた時、勝手に喰へる様にビスケットやパンが各自が都合のいゝ様にして所持して居たのだつた。斯うして努力を續けて居る中に私等は鎌尾根唯一の惡場に出會した。それは非常に細いリツヂの上に軟雪が一ぱいに冠つて居り、何處が岩肌との接觸點か良く見當がつかないので踏み出す足下には充分なる注意を拂はねばならなかつた。而も此の細いリツヂが途中で全く切れて居る様に見えるのだが、幸ひ昨冬の經驗に依り續いて居る事も知つて居たので大膽に進路を取る事が出來た。此の惡場を越せば今度は鎌尾根の登路の中で最も急斜面の處で昨冬は此の僅か數十米の登りに一時間餘も費し、敗北の一原因を成した處であつた。實際かゝる急斜面に於ける軟雪では幾ら大股に踏んでも足ごたへにもならなければ、いくら腕いても仲々上へは進まれない。私等は兩杖を組合せ雪中深くに押込んでそれを手懸りとし、這い上る様にして漸く一步づづを運ぶ事が出來

た。之を繰り返して進むのだから百米に足らざる登高とは言へ、非常な努力と時間を要するのであった。それでも昨冬に比べて天気が非常に良かった事や雪の状態も幾分有利であ



黒部側の鹿島槍遠望

小原勝郎

つたので此の急斜面を登り切るに一時間を要しなかつた。昨冬は此の急斜面を登つてほんの少し行つた處にて引き返したのだつたが其處から先は傾斜も可成緩く成つて居た。併し段々體力を消耗して行く私等にとっては傾斜は緩く成つても深雪のラツセルは矢張り辛かつた。それでも登頂の一念で遂に國境線に達する迄苦闘を押切つて登高を續けた。漸くにして國境線に到達すれば凄しい強風は黒部川より吹上げて、其の隙間に望む劔岳の偉容は實に立派であつた。三十分程頂稜の強風と戦つて午後二時四十五分遂に私等は鹿島槍ヶ岳の頂上に達した。暫くは山頂に止つて綺麗な周りの景色も眺めたかつた。併し強風と戦ふのが勞れて居る私等には餘りにも苦しかつた。黒部側を背にして模型圖の如くに見ゆる鹿島川の流域を一見した後直ちに山頂を下つた。

頂稜の雪は非常に硬かつた。そして氷の場所もあつたので下りと言つてもしつかりと踏締めて足を運ばねばならなかつた。逃る様にして國境線の尾根を離れ、鎌尾根へ下れば此處は全く別世界で風も當らなければ雪も腰を没する軟雪であつた。併し幾ら深雪でも最早や私等は驚かなかつた。階段の様について居る登つた時の踏跡を飛び下りて行くのには何の苦勞も要しなかつた。道をつけた様な長い此の踏み跡もつい先刻迄の努力の賜物であり、見歸る山頂も只懐しかつた。短い冬の日には早や入日近くの陽光で爺岳の綺麗な蔭を寫して居た。スキーデポー迄下つた頃は身體の勞れも一時に出て來て、スキーを穿いて滑降するのが苦になる位であつた。不斷なら滑り加減の好スロープの此の谷筋も幾度も轉び、轉がり落る様にして下る事さへあつた。それでも緩斜面の處は流石にスキーの有難味と愉快さを感じさせられた。西俣の出合附近で各自思ひ思ひに滑つて來た三人が打揃ひ、少憩して雪の割れ間に流れる水を汲み取つて咽喉を潤し、山頂には別れを惜む一瞥を與へて大冷澤の林道を勞れを押し切つて小舎へと歩を運ぶのであつた。ランタンの燈りを頼りに小舎に辿り着いた頃は身體も全く勞れ切つて居た。そして小舎に着いたのは午後七時二十分であつた。

二、爺越え

—大冷澤西俣—爺岳—扇澤—

一行 逸見眞雄 斯波悌一郎 堀田彌一 櫻井一雄 (人夫)

十九日。昨日で無事鹿島槍ヶ岳の登高も終へたのだが、第二次の計畫として西俣より爺を越し扇澤を下つて大町迄一日で出ようと言ふ事に成つて居たのだつた。併し勞れて居る私等は此の日は假

令好天氣であつてもゆつくり休養しなければならなかつた。午近くに成つて漸く起きると、間もなく大町へ逸見が来て居ると言ふ通知を得た。それで私等は昨日で鹿島槍の登山は終つたが後の爺越へは残つて居るから出掛けて来る様に使の者に言つてやつた。そして午後三時頃食糧補充かたがた逸見を迎ひに鹿島の村へ出掛けた。鹿島の村の狩野氏の處で暫く待つて居ると逸見も来たので一同打揃つて造林小舎へ戻らうとした時はもうあたりは宵闇に包まれて居た。懐中電燈の明を頼りに逸見の乗鞍岳の話や自分等の鹿島槍の話で夢中に成つて歩いて居る中に直きに小舎迄来て仕舞つた。その晩は仲間が一人殖えて話題も次から次へと出て来て久し振りで愉快的な夜更しをした。

十九日の天氣は晴れては居たが段々下り空で、二十日の朝は霰が降り其の後降つたり曇つたりして明瞭はつきりしない天氣が二十二日の日一つぱい迄續いた。二十三日は曇り空であつたが段々良く成り、翌日晴れそうな見込みがあつたので午後より西俣の入口迄ラツセルに出掛けた。雪質が良く歸路の滑りは仲々愉快だつた。準備もすつかり終へてから寢に就いた。

二十四日、愈々爺岳を越して大町迄出る長いコースを決行する日がやつて来た。空は薄曇りで星も餘り澤山は見えないが落着いた天氣模様だつたので出掛ける事にした。ランタンと懐中電燈の燈で午前四時四十分スキーを穿いて鹿島造林小舎を出發した。相變らず夜途は歩き辛かつたがすつかり歩き慣れて仕舞つた大冷沿ひの道はそれ程不自由もしなかつた。一の澤を越すと夜も薄明くあけて来たので燈を消した。西俣の入口は狭くてちよつと分り難いが、十分に偵察は重ねてあるので少しの無駄な時間も要しなかつた。狭い緩斜面の西俣を谷筋通り、アザラシを一ぱいに利かせて眞直ぐに登つて行くので登高は氣持よく捗取つた。雪も餘り潜らなく、全く好調子の歩行を續ける事が出来た。暫らく行くと一時に谷は開けて来て一大斜面をなし、遮るものもなく國境線の尾根迄よく見通しが効く様に成つて来た。雪はしまつて固く成つて来た。私等は大きくヂクザツクに進んだ。西俣が此の廣く開いて来た附近では幾つもの枝谷に分れて居た。私等は三月に逸見等の登つた時の様子より、近くて樂な長ザクに登路を求めて進んだ。出發の時から薄曇りであつた空は段々と雲を増すばかりであつた。併し風もなく時間も早いので別段氣にも掛けなかつた。その中に雪は段々深く成つて来るし、斜面は愈々急に成つて来た。そして一行四人のものは交代してラツセルに努めなければならなく成つた。幾度も幾度もラツセルの交代を重ね、遂に國境線の尾根を間近にした時は雪もちらちら降り出して来た。國境線へ取附く處は非常に急で登り辛かつた雪の中へ潜り込む様にして尾根に這ひ上ると一時に強い風は身邊に吹き立てゝ来た。併し未だ時間も早い事だし、身體の疲勞も感じて居なかつた。少し位の吹雪を押し切つても勿論豫定のコースは完成す可きであつた。しつかりとアイゼンを穿き、各自それぞれ毛皮で身を固めた後スキーも動かない様にびつちりと背負つて仕舞つた。十分に用意を整へ、午前十時三十分吹雪と戦つて國境線に沿ふて進んだ。吹き狂ふ風は雪を交へて眼界は全く遮られて仕舞つた。時々風の隙間に數間前後の見えるのは方向の鍵であつた。風さへなければ何等の技量も努力も要さない此の平凡な頂稜が少しも力を緩めないで歩くのだが遅々として捗取らなかつた。しかも此の強風で時々呼吸が苦しく成る位だつた。睫毛は凍り目の開け閉ぢさへ不自由を感じ、見合す顔の頬には白く雪が凍り附いて居た。上の手袋を一枚脱いで中の乾いた手袋で凍り附いた頬や睫毛を解すのも一通りの苦勞ではなかつた。一人が故障を起しても離れる事も出来なく、僅に前のものゝ踵を頼りにびつたりくつついて進むのであつた。そして

各自の元氣を呼び起す爲めに時々聲を掛る位で只管吹雪と戦つた。

私等は此の割合に短距離な爺岳の頂稜を越すのは非常な努力であり、時間も可成り費した。而も何れが頂上か明瞭^{はつき}り分らない位であつた。登り切つて下りにかゝつて初めて頂上を一つ越した事が分るのであつた。併し南峰附近で國境線の尾根も東西に曲り、之を越してからは西より東に吹く風は幾分遮られて急に樂に成つた。一下りに種池附近迄下つた時は時々ひどい風が舞ひ込む位で靜に雪が降つて居るだけだつた。先刻からの苦闘ですつかり腹も減つたので青木の蔭で冷たさの爲め手足の痛むのも押し堪へ乍らテルモスのコゝアでパンを嚙つた。種池の小舎は探して見たが見當がつかかなかつた。それに寒さと疲労も加り、そうした餘裕も十分無かつたので扇澤を指して一氣に下る事にした。午後二時棒小舎乗越の少し手前の處から扇澤へ靜にスキーを滑らした。可成り降り積つた雪は雪崩を起す心配もあるのでスキーは十分飛す事も出来なく、慎重に幾度でもキツクタンを重ねて下らねばならなかつた。暫らく下ると風は全く無くなつたが降りしきる雪は尚ほも前方を霞めて滑るには不自由だつた。岩小屋澤岳の方から落ちる谷との出合のゴルジュの處から下は谷も緩く成り滑る事に依つて起る雪崩の心配は全く無くなつたが、降り續く雪の爲めに遮られて思ふ様な滑降も出来なかつた。それでも靜な谷間では最早や何等の苦勞もなく扇澤を下り切つて籠川谷に出で、畠山の小舎に着いた時はもう周りは薄暗く成りかけて居た。小舎の中へ這入つてお菓子やパンですつかり腹をふくらましてから午後五時又此處を出掛けた。ランタンと懷中電燈の明りを頼りに再び滑走を續けた。瀧の小舎附近迄來ると雪も少くスキーを擔ぎ大出に着いたのは既に午後七時十分であつた。大出では發電所の電話を借りて自動車と呼び無事に此の日の中に大町に下山する事が出来た。

二十五日は大町で一日ゆつくりのびて二十六日に鹿島の造林小舎へ荷物を取りに行つて來た。此の日歸がけに望んだ鹿島槍は夕日に輝いて實に奇麗だつた。私等は振り返つては幾度か其の姿を賞讚した。

*

尚ほ参考迄に鹿島造林小舎を中心として昭和五年暮の半月間の天候日記を付け加へる。

十二月十一日 曇り、午後六時頃よりちらちら星が見え出す。小舎附近は無風なりしが午後五時頃迄は雲が北東に向ひ急速に動いて居た。溫度は午後六時零下一度

十二日 晴れては居たが午後より一の澤の頭に雲が附く、無風、溫度、午前五時半零下三度、同最低零下五度、午後六時零度、同最高二十六度

十三日 曇り、時々青空が見えたり雪がちらちら降つたりしてはつきりしなく、午後六時頃より遂に雪空となる。北東の風あり。溫度。午前五時一度、同最低零度、午後四時四度、同最高十四度、午後九時零下二度

十四日 起きて見ると三寸位の降雪あり、午前八時頃迄雪、後曇り、午後六時頃より又雪降り出す、無風溫度、午前十時一度、同最低零下四度、午後六時零下二度、同最高二度、午後八時半零下四度

十五日 昨晚より朝迄の降雪五寸位、午後積雪合計一尺二三寸位となる、終日雪、風なし溫度、午前十時零度。同最低零下六度、午後六時零下三度、同最高一度。午後八時零下四度

十六日 雪、午後より吹雪となる。午後積雪合計二尺五寸位。午後より北の風出で、時強風あり。温度。午前十時零下一度、同最低零下五度、午後六時零下四度、同最高零下一度、午後九時零下五度

十七日 晴、風なし。温度。午前七時零下十二度、同最低零下十四度、午後五時半零下四度、同最高十六度、午後九時零下八度

十八日 晴、無風（但し國境線の屋根では西風強し）。温度。午後七時半零下四度、同最低零下九度、同最高二十度、午後九時零下五度。（此の日鹿島槍登頂、所用時間十五時間）

十九日 晴、時々曇り、午後九時頃霰降る。北風あり。温度。午前十時六度、午後十一時一度

廿日 午前中曇後雨。午後曇り時々雪降る。風なし。温度、午前十時五度、同最低零度、午後五時零度、同最高八度、午後十時零度

廿一日 曇り、西南の風あり。温度。午後一時一度、同最低零下二度、同最高二度、午後七時零下四度、午後十時零下六度

廿二日 午前二時頃より雪が降り出し、午後曇る。西南の風あり、午後六時頃より東北の強風に變る。温度。午前十二時零度、同最低零下六度、午後四時零下四度、同最高三度、午後七時零下五度

廿三日 曇り、西北の風後西南の風。温度。午前六時零下四度。同最低零下七度、午後六時零下二度、同最高七度、午後八時半零下五度

廿四日 早朝は薄曇りで無風。（午前九時半より雪が降り出し、國境線の尾根では物凄い吹雪。此の日、小舎一大冷澤西俣一爺岳一扇澤一大町）

廿五日 晴（大町滞在）

廿六日 晴（大町一鹿島造林小舎一大町）

大冷澤の地名に就て 本誌第二號に私は「三月の鹿島槍ヶ岳」と題する一文を書いた。所が其後地名に就ての聞き違ひなどを見出すに至つたので、前文を訂正する爲めに私は再び筆をとらねばならぬ破目になつた。

第二號に於て「中岩」の日向尾根と稱したものは實は「鎌尾根」であつた。之の尾根は陸測五萬分之一圖幅『立山』の東端に當つて「平村」と記してあるがこの「平」「村」との字の中間を走るものである。

「中岩」は概略圖が示す様にもつと南方にある。之は巨岩ある爲めに稱ばれたらしく、「中岩澤」とは云はない様だが澤全體の意にも用ひてある。この澤の本谷は國境の冷池附近から發するので、日向尾根とは「中岩」にかぎつたものでなく、日射の關係から鹿島ではつねに「日向」「日影」の語を用ひてある。従つて昭和五年一月二日及び十二月十八日の登路はこの鎌尾根に據つたもの、同年三月二十二日の登路はその直ぐ南の澤を國境まで登つたのであつた。この澤は無名の様であるが長大なものであり且つ鹿島槍の登路として重要なものであるから何とか名前があれば便利だと思ふ。

次に注意を要することは「布引の頭」である。之は鹿島では「乗鞍槍」と稱し、「布引」とはこゝから南方に延びた國境尾根の長く坦々たる所を云ふさうである。こんなことは良いとして陸測五萬分の一圖幅には「布引岳」として記されてあるが、この地圖の位置が可成り違ふのである。地圖にある布引岳は冷池の直ぐ北方にある小高い所に當つてゐるが、吾々が實際に呼ぶ三角形の高點布引の頭はこゝより可成り北方に當つてゐる。既に御承知の事と思ふがこの點が明かでないで冷澤の地勢が全く混亂して判らなくなるから一言書き添へた次第である。

この外地名に關しては色々聞いてゐるけれども大して必要でないものが多いから此處では省略して置く。前記堀田君の登山記録に於て用ひた名稱は現在私達の間で正しいと信じた呼び方に據つたもので、挿入の概略圖で良く判ることと思ふ。併し乍ら今尚必ず正確なものであると斷言することは出来ない。

（逸見眞雄）

要 約

昭和5年(1930)12月25日～昭和6年1月5日の記録。爺岳小屋から国境線伝いに厳冬期第二登。

メンバーは、磯野計藏、中森長太郎、鈴木英雄、安達泰三、堀岡清。

行程は、12月25日 大町－瀧小屋－畠山小屋。

26日 棒小屋乗越下往復。

27日 畠山小屋－扇沢出合－本谷出合－種池小屋。

28日 爺ヶ岳の手前まで往復。

29日～31日 滞在。

1月1日 種池小屋－爺ヶ岳－冷池－鹿島槍ヶ岳－種池小屋。

2日 種池小屋－畠山小屋。

3日 滞在。

4日 小屋－扇沢出合－種池小屋－棒小屋乗越下－畠山小屋。

5日 畠山小屋－大町。

※三角点のある南槍の登頂である。

記録 自一九三〇年十月 一日

至一九三一年五月三十日

北アルプス

劔、立山、後立方面

鹿島鎗岳 (東京商大)

一行 磯野計藏 中森長太郎 鈴木英雄 安達泰三 堀岡清

人夫(有明) 中山彦一 高橋益司 近藤一雄

十二月二十五日 曇 大町(九・三〇)－瀧小屋(三・〇〇)－畠山小屋(六・一〇)

二十六日 曇後晴 棒小屋乗越下まで道をつける。

二十七日 晴 畠山(六・四〇)－扇沢出合(七・三〇～八・〇〇)－本谷出合(九・二五～一〇・三〇)－種池小屋(二・一五)

種池小屋は、雪に埋れて所在が判りにくいだらうと思つて一、二日幕營するつもりで来た處、案内簡単に見つかつて食糧の貯へてあるまゝに、籠城をきめこむ。

二十八日 晴後吹雪 爺ヶ岳の手前まで行ってみる。二十九、三十、三十一日 滞在
一月一日 晴 小屋（五・五五）—爺ヶ岳（七・〇〇）—爺ヶ岳を越した所（スキーを履く）（八・
一〇～九・二〇）—冷池（一〇・〇〇）—スキーデポ（地圖の布引岳の手前）（一〇・四〇）—
鹿島鎗岳（一一・四五～一二・〇〇）—スキーデポ（一・〇〇）—種池小屋（四・三五）

燃料が残り少なくなったので、この日天気が悪ければ一旦畠山へ下る筈の所に、好天気に恵まれた。
小屋から爺ヶ岳を越す迄はアイゼン。それから先の針葉樹林は雪が深いからスキーを履いた。此
處で雪庇が崩落して磯野が大冷澤の西俣を二百米許り落ちたので、約一時間空費した。頂上に達
した頃からは吹雪の氣味となり、小屋に歸り着いた頃には可成激しくなつてゐた。

中食は歸途スキーデポですます。爺ヶ岳（歸途）は黒部側を巻いた。

二日 吹雪 小屋（一二・〇〇）—畠山小屋（四・三五）燃料が無くなったので、吹雪
を冒して畠山へ下つた。アカヌケの下では小さな板狀雪崩に遭ふ。

三日 雪後晴 滞在

四日 晴 小屋（四・〇〇）—扇澤出合（五・〇〇）—棒小屋乗越と種池の間の尾根上
（九・一五）—種池小屋（九・三〇～一一・四〇）—棒小屋乗越下（一一・五五）畠山小屋（二・
三五）

岩小屋澤岳に登るつもりで朝早く出發したのであるが、針ノ木の上に嫌な雲がかかってきたので、
小屋を片付けて歸つた。往路既に本谷とアカヌケの谷には大きな雪崩が出てゐた。

五日 雨後曇 畠山小屋（一・三〇）—大町（七・三〇）

* * *

20. 加藤文太郎 「冬山單獨行 鹿島槍ヶ岳」『單獨行』より

昭和十六年八月二十五日刊 朋文堂發行

要 約

昭和6年(1931)2月11日の記録。厳冬期の鹿島槍ヶ岳登攀。

メンバーは、加藤文太郎。

行程は、2月11日 鹿島村ー冷沢ー北俣と西俣の出合ー鹿島槍ヶ岳ー北俣と西俣の出合ー冷沢ー鹿島村。

※単独で鹿島村から冷池を経て厳冬期第三登。

昭和六年二月十一日 晴霧 鹿島村午前四・三〇 冷澤徒渉六・一〇 北俣と西俣の出合八・〇〇
〇 スキー・デポ午後一・三〇 冷ノ池二・三〇 鹿島槍ヶ岳四・四〇 零下一八度冷ノ池六・〇〇
スキー・デポ八・三〇 北俣と西俣の出合九・三〇 冷澤徒渉一一・〇〇 鹿島村午前〇・〇〇

鹿島村から丸山迄は毎日一回やつて来たので、此の日は四回目だつた。丸山の下で冷澤の川を渡つてからは、北俣と西俣の出合を左岸ばかりに行く。一ノ澤迄に二ヶ所程スキーをぬぐ所があつたが、大分おどかさされた西俣等はとてもスキーに適したすばらしい谷だつた。西俣へ押し出す雪崩は主に、下の方は南側の岩壁のある谷から、上の方では正面の岩壁からである。後者のものはほゞ谷全體にひろがるので油断がならぬと思ふ。大體冬期は降雪と降雨の日をさければめつたにやられる事はないと思ふが、なるだけ此の谷では北側の尾根に沿つた方がよい。此の谷の下の方は、北側に溝が一本通つてゐるが、両側の尾根迄は随分廣く、すばらしい谷だ。僕は上部正面の岩壁の下で北側の尾根へ取附たが、其の時登つた谷等はステム・ボーゲンに理想的な所だつた。この尾根は岳樺の疎林でとても気持のいゝものだつた。二千二、三百米の所をスキー・デポとした。其處から本尾根迄は、岩場はなし雪もやわらかく平凡な尾根傳ひだつた。本尾根の取附きにも問題になる様な雪庇はなかつた。冷ノ池附近には相當大きな雪庇が東側へ出てゐたが、三月頃程の事もなさゝうだし、つらくてもタンネの中を行けば心配はない。此處から鹿島槍の頂上迄は長い事は長いが、風が強い丈で悪場はなし雪もかたく樂だつた。頂上には東京商大の人々が立てた岳樺の小枝があつて、それに行の名前を書き入れた中山彦一様の名刺がバットの空箱に入れて挟んであつた。僕は無斷で失禮だと思つたが、一寸嬉しかつたので名前をそれに小さく書かせてもらつた。そんなわけで濃霧で何も見えなかつたが頂上には立つたに違ひないと思つてゐる。歸りは下りなので他の尾根等へ迷ひ込む様な事はないかと心配したが、迷ひ込めさうな所はなかつた。冷ノ池あたりへ引返した時はもう暗かつたので西俣へ下る例の尾根もよくわからず、少々迷つた。スキー・デポから北俣と西俣の出合迄八百米の下りは、谷全體がとてもすばらしい粉雪で、暗くなかつたらいくら僕でも三十分とはかゝらなかつただらう。また一ノ澤あたりも中々いゝ所だつた。

鹿島村では狩野久太郎様の所へ泊つた。とても親切な家だつたし、山小屋と違ふので二十時間の登行もこたへなかつた。それはすぐ後の二月十三日に寢具さへない畠山の小屋から針ノ木岳と蓮華岳に往復したんだし、二月十五日には上等の山小屋だつたが、猿倉から白馬岳へ登つて神城驛迄歩けた位なんだから天候が一番悪い時だつたが、まづ二日に一日は山に登れると思つた。しかし完全に晴れた日は、僕の居た二月八日から二月十五日迄の間に十二日の一日だけであつた。狩野様は鹿島岳の奥が晴れると快晴に成ると云つたし、大町あたりの笛や鐘の音が聞えると天候は崩れるとも云つた。鹿島岳へ入つた凄いい連中の話を聞いただけでも来た甲斐があつた。

(一九三一・五)

21. 堀田彌一

「早春の黒部川側より鹿島槍ヶ岳及び五龍岳」

『立教大學山岳部部報』第三號

昭和六年七月十五日刊 立教大學々友會山岳部發行

要 約

昭和6年(1931)3月20日～4月9日の記録。黒部川東谷から鹿島槍ヶ岳、五龍岳登頂。
メンバーは、堀田彌一、小原勝郎。

行程は、3月20日 宇奈月－柳河原駅－黒部川遡行－猫又取入口。

21日 猫又取入口－新鐘釣温泉。

22日 新鐘釣温泉－不帰谷－祖母谷小舎。

23日 祖母谷小舎－南越の上－祖母谷小舎。

24日 滞在。

25日 祖母谷温泉－南越－餓鬼の田圃－餓鬼谷の岩小屋。

26日～28日 滞在。

29日 餓鬼谷の岩小屋－東谷山の尾根－東谷野営。

30日 野営地－鹿島槍ヶ岳頂上－東谷野営地。

31日 野営地－五龍岳頂上－東谷野営地。

4月1日 野営地－東谷山の尾根－餓鬼の田圃－祖母谷小屋。

2日・3日 滞在。

4日 祖母谷小屋－不帰谷－新鐘釣温泉。

5日～8日 滞在。

9日 新鐘釣温泉－猫又取入口－宇奈月。

※附記として、山岳部による積雪期の鹿島槍ヶ岳及び五龍岳の登頂の経過が記されている。

こゝに私は早春の黒部川側よりする鹿島槍ヶ岳及び五龍岳の登山記録を記すに當り、積雪期の黒部川(平の小舎より下流に就いて)を中心とせる登山を對象とし、聊か書添へて登山記録を補はうと思ふ。而して便宜上左の項目に分けて記す事とする。

- 一、積雪期の黒部入り
- 一、準備と偵察
- 一、登山記録
- 一、根據地、其の他

積雪期の黒部入り

立山群峯と後立山の連山を區切る黒部川の名は登山を志す人々に依つて最近餘りにも知られ過ぎてゐる。併しながら一度積雪期に入れば世人の稱する所謂神秘境とされ、登山界に於てすらも可成り縁遠いものとされて居た。それは冬春の雪山を知る人々に依つて最も恐れられる雪崩の危険を多分に有してゐると言ふ事



東谷に面せる鹿島槍ヶ岳

小原勝郎

は此處に記す迄もない事である。

併し私の常として山は人に縁遠ければ縁遠い程、知られなければ知られない程、知りたい、行つて見たいと言ふ氣持は如何ともする事が出来ないのである。此の氣持は積雪期の黒部川を深く押し這入つて之を圍む山々に登つて見たいと言ふ憧憬を豫てから私に抱かしめたのである。以來私は常に積雪期の黒部川の狀態に注意を怠らなかつた。そして黒部附近の山に這入る度に或は山案内等と或は獵師等と又時としては仲間と雪に埋れた黒部川を語り、其の様子を聞く事が楽しみとなる様になつた。又最近は冬春の立山及び後立山連峯より黒部の谷の偵察を忘れなかつたのである。而して昨年（昭和五年）の四月其の第一回の試みとして御山谷を根據とし、針ノ木・スバリ・赤澤・鳴澤岳及び内藏之助平・黒部別山の登山を成し、漸次下流の方へも研究を進めて來たのであるが其の最も困つた問題は黒部川に這入る入口の事である。それは白馬や唐松を越して祖母谷に這入る事も、扇澤より棒小舎澤に這入る事も出來よう。又猫又山を越して小黒部の中ノ谷の岩小舎に這入る事も出來る一中ノ谷の岩小舎は折尾谷小黒部出合よりも數十間上流の川縁にあり、完全に折尾谷の領分なるも愛本・音澤・内山村等の黒部下流地方の獵師及び片貝谷の獵師等の如き昔から此の岩小舎を使用せしものは皆之を中ノ谷の岩小舎と稱して居る。私は之に従つて呼んで置く。

併し積雪期の黒部川は下流即ち宇奈月方面より這入る事に於て私の興味を最も強く引くのである。而して宇奈月方面より入山せんとすれば頻々として起る雪崩の爲に積雪尺に達せずして道の通行は全く杜絶される。私は此の雪崩の危険が出来るだけ遠避かる良い登路を捜したいと思ひ獵師等を訪ねて根據とす可き祖母谷小舎・中ノ谷の岩小舎或は之等を繋ぐ獵師路に就いて再三教はつたのである。そして其の結果登路の對象として申分ないものも數々得る事が出來た。次に大體それ等に就いて記して見よう。

1 宇奈月より祖母谷小舎に至る登路に就いて

前述の如く積雪期には宇奈月より祖母谷小舎に至る軌道及び林道は黒部特有の物凄い雪崩に依つて絶えず、至る所、不規則に襲はれ、それが爲め軌道のトンネルも全く塞がれて仕舞ひ、通行不可能となるのである。されば昔からの獵師獨特の通路、獵師路なるものに依るのが最も至當であると思ふ。即ち祖母谷小舎に至るには宇奈月より黒部川を渡り新鐘釣温泉（錦繡温泉とも言ふ）に至り不歸谷を登り百貫山と不歸岳の最低鞍部を越して祖母谷を大體谷通り下つて祖母谷小舎に至るのである。今之を登路の對象として詳しく記して見よう。

宇奈月・新鐘釣間は今こそ柳河原に日電の發電所があり、猫又に其の取入口があり、新鐘釣には立派な建物があるがその昔はそれ等のものも全く無く、獵師達は深い川をあちらへ渡りこちらへ渡りして川壁をさけ、雪崩をよけて通つたと云ふ。それは積雪期の爲めに餘程減水してゐるにしろ尚ほ身體をひどく濡さなければならなかつた。彼等は今日の登山者等の如き準備は勿論なかつた。彼等にとつて着てゐる衣類を濡す事は全く痛手である。それが爲めに深い所は寒氣身にしみる嚴冬に於てすら裸體となり衣類は頭にくゝりつけ渡渉を了へて再び着物を着ると言ふ方法をとつたと言ふ事を聞いてゐる。然るに最近に至つてはそれ程の事をしなくても行ける様に成つた。それは日電の發電所が出來た爲めに柳河原・猫又間は非常に減水してゐて大抵は腰を濡さずして通れる様になつたからである。それにしても勿論三四十回の渡渉は必要である。又宇奈月より柳河原發電所迄はほんの短距離だが冬も常に人が行き來し、軌道は通れるし、猫又・新鐘釣間は軌道或は舊林道に沿ひ天候次第で通行が出来るからである。其の時の雪の狀態にも依るだらうが宇奈月・新鐘釣間は一日行程としては一ぱいである。

新鐘釣・祖母谷小舎間は先づ不歸谷を登つて行くのだが其の黒部本流に合する數十間上流と又其の數十間上流と二個所に瀧がある爲め之を捲くのに可成りの時間を必要とする。此の瀧を越すと一面雪崩の爲めに谷は埋れて歩行には申分ない様に成つて居るが此の谷は兩壁が急立して居て峽い爲めに新雪の來た後や日中は成可く通行を避けなければならない。不歸谷は下流半分（大拔下より下流）は全く一面のデブリーの爲めにスキーの使用は出來ないが上半分（大拔下より上流百貫山と

不歸岳との最低鞍部迄)は十分スキーも使用出来るし、大拔下附近の二三の小瀧は初冬以外は雪崩の爲め悉く、埋るから心配はない。又百貫山と不歸岳との最低鞍部より祖母谷へは場の良い谷筋を下るのでスキーの使用も出来ると思ふ。祖母谷へ下つてからは此の谷通り祖母谷小舎迄の途が相當悪く、捲き路もしなければならぬ。川も一二度渉らなければならぬと言ふ具合でスキー使用は勿論出来難いと思ふ。

斯くして祖母谷小舎に至るのであるが是は積雪期に宇奈月より祖母谷小舎に至る最も安全なる最も近いルートであると言ふ事は私は確信して居るのである。積雪期の黒部も祖母谷小舎迄入つて仕舞へばしめたもので後立山側の内少くも鹿島槍ヶ岳・棒小舎澤以北は相當な偵察と憶測に依つて可成り自由にルートを探つて行けると言ふ事は冬春の黒部に少しでも興味を持つて居る人々に依つて十分了解が出来ると思ふ。而してそれに就いての詳細は此處では避け、次には宇奈月方面より立山側に至るものに就いて少々記す。

2 宇奈月より小黑部に入る登路について

冬春の季節に黒部より立山方面の登山を志す者は何人も其の最も重要な根據地として、小黑部の中ノ谷の岩小舎を知らなければならぬ。而して此の岩小舎に入るにも夏路に依る事は殆ど不可能であると言ふ事は前述に依りてわかる事と思ふ。それ故に私は此處に其の最も適當なる登路として昔からの獵師路を擧げて置かう。

之は宇奈月より發して新鐘釣に至る間の事は先に記した通りである。新鐘釣よりは先づ釣橋を渡り對岸に達してから夏路の數百米上方までに登り大體之に平行して行き、小舎の平にて一旦夏路へ下り、再び小舎の平より上方へ登り南に尾根の窓の様に成つた所を一つ越せば小黑部のチジヤクと言ふ谷の上に出る。そしてチジヤクを下れば小黑部南平に達し、それより小黑部谷を谷通り半里近くにして中ノ谷に達する事が出来るのである。而して此の途にしても尚ほ雪崩の危険が多分にある爲めに午前中に通行するのが良いと思ふ。幸にして小舎の平には日電の小舎があるから之を利用して二日行程とし、午前中だけ歩く様にすれば雪崩の心配は可成り遠ざけられると思ふ。中ノ谷の岩小舎を使用すれば毛勝或は猫又を越して片貝谷に下るもブナクラ谷へ越して早月川に出るも又池の平・内藏之助平・劔方面・仙人谷へも越す事も出来るし、それから仙人の尾根を越し黒部本流の折尾谷を下つて鐵索を渡り對岸餓鬼谷に達して後立山側に至る事も出来、可成り廣範圍に互るルートを發見する事が出来るのである。

以上二項は大體宇奈月方面より黒部入りの登路を示したものであるが其の外に後立山を越して入るもの及び立山・毛勝連峯を越して入るものがある。それ等に就いてはこゝでは極く簡単に列挙して置かう。

後立山を越して入るもの

- 一、本年一月私達が行つた如く、白馬より清水の尾根を下り、不歸岳と百貫山の最低鞍部にて更に不歸谷へ下つて新鐘釣に至るもの(昭和六年一月四日、斯波・小原・小林・堀田に依つて行はる)
- 一、白馬より清水の尾根を下り、不歸岳・百貫山最低鞍部より祖母谷へ下り、祖母谷小舎に至るもの
- 一、本年(昭和六年)一月清水の尾根を下つた時見た様子よりして中脊山の尾根を下り、祖母谷小舎へ至る事も良いと思ふ。中脊山の尾根には鍋さへ置いてある獵師の岩小舎のある事も聞いて居る
- 一、八方尾根より唐松を越して大黒鑛山跡・餓鬼の田甫(地圖の一六六八・七米の三角點のある附近)を経て南越を下り祖母谷小舎に至るもの
- 一、唐松より餓鬼の田甫に至り、餓鬼谷へ下つて餓鬼谷岩小舎に至るもの
- 一、大冷澤西侯或は北侯中岩より棒小屋澤(獵師小舎あり)に入るもの

- 一、扇澤より棒小屋澤に越すもの
- 一、大澤小舎より赤澤・スバリ岳の鞍部に至り、大スバリ澤に下り、黒部本流の鐵索を渡り御山谷小舎に至るもの
- 一、大澤小舎より針の木岳を越して小スバリ澤を下り、御山谷小舎に至るもの
- 一、針の木峠を越して平の小舎に至るもの

立山及び毛勝連峯を越して入るもの

- 一、スゴ或は立山温泉より鳶山の尾根を越し、ヌクイ谷より平の小舎に至るもの
- 一、立山温泉よりザラ峠を越して中ノ谷を下り、平の小舎に至るもの
- 一、室堂より一ノ越を越して御山谷に入り、イタヤ峠を経て中ノ谷へ下り、平の小舎に下るもの
- 一、一ノ越を越して御山谷を下り、御山谷小舎に至るもの
- 一、劔ヶ御前の小舎より富士の折立と眞砂岳との間の谷を下り、内藏之助平に至るもの
- 一、劔ヶ御前の小舎より、眞砂岳に至りハシゴ谷乗越に通づる尾根を、尾根通りハシゴ谷乗越に至り、内藏之助平に入るもの
- 一、劔ヶ御前の小舎より劔澤を下り、ハシゴ谷乗越へ登り、内藏之助平に入るもの
- 一、早月川よりブナクラ谷を登り、折尾谷へ下り、小黑部の中ノ谷の岩小舎に至るもの
- 一、片貝川南又谷を登り、猫又を越して折尾谷へ下り、小黑部中ノ谷の岩小舎に至るもの

以上の中白馬を越して中脊山の尾根を下るもの以外は悉く獵師或は登山者に依つて積雪期に人跡を記したものであると聞いてゐる。而して之等は最も合理的な黒部入りのルートであると思ふ。尚前記の如くして入つた根據地と根據地とをつなぐルートに就いては此處では略す事とする。

準備と偵察

今度の黒部入りを計劃したのは昨年（昭和五年）八月の事であつた。其の計劃を示せば大體次の如くである。

- 第一日 宇奈月—新鐘釣温泉
- 第二日 新鐘釣温泉—不歸谷—祖母谷小舎
- 第三日 祖母谷小舎—餓鬼の田甫—餓鬼谷岩小舎
- 第四日 餓鬼谷岩小舎—東谷山の尾根を一九〇〇米邊の鞍部にて乗越す—東谷野營
- 第五日 東谷野營—鹿島槍ヶ岳往復
- 第六日 東谷野營—五龍岳往復
- 第七日 東谷野營—餓鬼谷岩小舎
- 第八日 餓鬼谷岩小舎—黒部川を渡る(鐵索利用)—黒部川本流に注ぐ折尾谷の岩小舎にて野營
- 第九日 折尾谷岩小舎—仙人の尾根を越す—小黑部中ノ谷の岩小舎
- 第十日 中ノ谷の岩小舎—中ノ谷—毛勝岳—釜谷山—猫又山—折尾谷—中ノ谷の岩小舎
- 第十一日 中ノ谷の岩小舎—小黑部谷—池の平—ハシゴ谷—内藏之助平（別班内藏之助生活班の野營地に泊る豫定）
- 第十二日 内藏之助平—劔ヶ御前の小舎（内藏之助班を合せ劔班を作る豫定）

此のコースの第一回の偵察は昨年（昭和五年）八月祖母谷小舎を中心として行ひ、獵師山本常造を同行した。そして先づ餓鬼の田甫へ出掛け祖母谷小舎—餓鬼谷岩小舎—東谷及び鹿島槍ヶ岳・五龍岳の登路に就いて偵察し相談し合つた。翌日は祖母谷小舎より百貫山・不歸岳最低鞍部に出で不歸谷へ乗越し、此の谷を詳しく踏査して新鐘釣に出た。不歸谷は夏は二三の小瀧もあり決して歩き良い谷ではないが冬春の黒部へ入らうとする人々にとつては最も重要な通路の一つである事が充分了解出來た。此の第一回の偵察により後立山側に就いて既に十分なる自信を得た私は山本に獵師仲間より同行人夫の物色を依頼して置いたのである。

第二回の偵察を兼ねた登山は九月山本常造を同行して行つた。即ち

九月二日 宇奈月—祖母谷小舎

- 三日 祖母谷小舎－樺平－水平道路－アゾ原
- 四日 アゾ原－仙人谷－池ノ平小舎
- 五日 池ノ平小舎－小黑部谷－中ノ谷岩小舎
- 六日 中ノ谷岩小舎－折尾谷－猫又山－片貝谷の南又谷へ下る

之は黒部川本流に注ぐ折尾谷の偵察、東谷と餓鬼谷の全容を對岸から見たいと思つた事、小黑部谷の詳しい踏査、中ノ谷の岩小舎の位置其の具合、毛勝・猫又の登路としての折尾谷の踏査等で、中ノ谷に就いては先年下つて見て様子がわかつて居るので今度は偵察の必要はなかつたのである。此の旅を以つて大體コースの下調べも終つたので積雪期に於けるそれに對して十分なる憶測を下す事が出来る様になつた。で早速祖母谷小舎・中ノ谷岩小舎に食糧を上げる様に山本に依頼した。そして三月入山の事に就いても時々通信して相談する様に言つて置いた。

然るに其の後彼の通信が全く要領を得ない事が多々あり、依頼して置いた準備に就いての手ばかり等を慮り、第三回の偵察は食糧・器具等の準備を兼ねて十一月初旬祖母谷小舎を中心として行つた。此の時は既に三月入山のパーティも小原、私と言ふ事に決つて居たので二人で出掛け、外に獵師山本常造・山本竹次郎の二名を同行した。祖母谷小舎では十日間程滞在したのであつたが天候は思ひの外悪く、唯餓鬼の田甫（積雪二尺位）に二回出掛けたのと中脊山の尾根へ一度出掛けて（清水の尾根の偵察）望遠鏡にてそれぞれコースを調べた外に何處へも出掛ける事は出来なかつた。併し旬日に亘る滞在に獵師等の経験・踏査等に就いて色々聞かされ、最早冬春の黒部に就いての想像は手に取る如く明瞭になつた。それから此の間に準備したものは祖母谷小舎へ米二斗五升（外に獵師等の分は四斗あるので不足の分は之を譲つてもらふ事にした）、味噌一貫目、醤油一升、砂糖十五斤、小豆一升、食鹽その他此の行で残した罐詰小量、スキー（長さ五尺）二臺等で外に薪等も十分用意して置いた。スキーに就いては色々考へたが結局一つは使用の出来ない範圍が割合に多い事を豫測し携帯の便の爲めと又他の一つは地形急峻の爲め長いスキーを十分使用する事は難しいと思つた爲め態々五尺のスキーを作つたのだが、結果として見れば是が非常に有効であつたと言ふ事を書添えて置く。之を祖母谷小舎へ運んで置いたのは三月入山の際は祖母谷小舎迄殆どスキーの使用が出来ないと荷物多量を慮つた爲めである。又小黑部中ノ谷の岩小舎へも米一斗五升、味噌五百匁、醤油一升等を運ぶ爲め既に用意してあつたのだが、悪天候の爲め遂に其の實行が私達の滞在中に出来なかつたので、それ等の物品の運搬、中ノ谷・餓鬼谷兩方の岩小舎の手入れ、岩小舎には薪を集めて置く事、餓鬼谷落口にある黒部川本流の鐵索を十分に試して置く事等をくれぐれも依頼して下山した。

人夫に就ては黒部保勝會の黒部登山案内組合には冬春の山に十分経験ある者もなく又山案内としても未だ十分ならざる様に聞いて居たから獵師仲間より選ぶ事にした。即ち當地では黒部の主とも云れて居る佐々木助七の息子で音澤村の獵師佐々木市次郎（四八）と愛本村の獵師山本竹次郎（四六）の二名に決定した。それは此の二人が範圍こそ狭いが多年山に這入つて冬春の山に對する注意は行きとゞいて居る様に思はれたからである。書き後れたが豫定日數に就いては餘り問題にして居なかつた。勿論一ヶ月を越す事は十分覺悟して居た。

尚之は入山の時に成つて知つた事だが餓鬼谷落口附近にある黒部川本流を渡る鐵索が腐つて使用危険となつて居り、人夫等が修繕しようとしたが新雪が來て其の仕事に取りかゝれず、餓鬼谷落口にて黒部川本流の横斷が出来なくなつた爲め一部コースを変更しなければならなくなつた。

即ち、宇奈月－新鐘釣温泉－祖母谷小舎－餓鬼谷岩小舎－東谷（鹿島槍ヶ岳・五龍岳）－祖母谷小舎－新鐘釣温泉－中ノ谷岩小舎（毛勝岳・猫又山）－内藏之助平－劔ヶ御前小舎である。

登山記録

1 黒部川

三月十九日、先づ愛本村の獵師山本常造の家を訪ねると今度の山行きに同行する獵師佐々木市次

郎・山本竹次郎の兩名も既に來て居て私達の來るのを待つて居た。暫らくの間雑談に耽つた後兩名（人夫）と共に宇奈月に至り、荷物の分擔、一通りの打合せを濟ませて人夫等を一旦歸し、翌朝早く出掛けて來る様に約束した。黒部鐵道よりは態々吉澤氏に來て戴き、色々面倒を見て戴いた事を深く感謝する。

翌二十日人夫等に依つて起され入山には絶好の天氣であつた。荷物は昨日すつかり出來上つて居たのでゆつくり支度をして八時二十分小原と私の一行は人夫二人と共に宇奈月を出發した。鐵橋を渡つて軌道通り三十分位にして柳河原驛（軌道の停留所）に着く。之より先は軌道の通行危険の爲め河原に下ることとする。黒部川も柳河原附近では可成り廣い河原をなして居り、其の右岸を暫らくぼこぼこ埋りながら歩くと岩壁は忽ち行く手を遮り、先づ第一回の渡渉をしなければならなくなつた。續いて二回三回と頻りに川を彼方、此方と横斷し或は川縁を渡つて森石澤の出合を越した時には黒部川本流の横斷も既に九回に達した。しかし天氣も良く川も割合に淺く膝をちよつと越す位で最も氣にして居た黒部川の渡渉が苦勞と言ふよりも却つて面白半分と言ふ氣持にまで成り得るを喜びながら雪の消えた川縁の大きな石の上で食事を攝つた。それから二度ばかり渡渉をすると黒薙川の出合に來た。時に十一時半。此の頃突然何處からともなく出て來た嫌な雲が空を包みかけた。いまに降つて來るんぢやないかと氣にして居たがそれは豫想外に早くやつて來た。河原は腐つた雪がもぐつて歩き辛いので成可く川縁通り行く。二回位渡渉をして本流に雪橋のかゝつた所を横斷した頃早くも雨に見舞れて仕舞つた。それから尚ほも十數回渡渉を重ねてサンナビキ谷（サンナビキ谷）の少し手前に來た頃は全くのどしや降りと成つて仕舞つた。上下兩方からの水漬けに身體中に寒氣もやうやく滲みて來るし、それに人夫等の荷物も私等のリツクサツクも全く重かつたのである。當惑の結果近くの岩陰に避難し、二時間位焚火をして寒さと疲勞の回復につとめた。地響と共に其處、此處に落ちる底雪崩は目前に見えて、或る瞬間には恐怖心が起り、或る瞬間には好奇心の手傳ふ愉快さが伴ひ、全く私達の心中は穩でなかつた。此の日は新鐘釣温泉迄行く豫定だつたが此の分では少しでも近い所に泊るのが良いと言ふので猫又谷出合附近にある日電の取入口に泊めてもらはうと言ふ事に決め、又もや此の岩陰を抜け出してぢやぶぢやぶ川を渡る事十數回、やつとの事で取入口に到着した。それは夕方の五時頃であつた。取入口の人達は喜んで私等を迎へて下さり、其の晩は電氣炬燵にのんびりと足を伸して眠る事が出來たのには全く感謝の外はなかつた。

明れば二十一日昨日の雨も跡かたなく晴れ亘り、全く良い天氣である。取入口の人達にはお禮をのべ、九時五十分猫又取入口を出發した。雪は割合に硬く輪樑ではさして潜る事もなく、軌道に沿ふて雪の黒部川を眺めながら良い氣持に成つて歩く事が出來た。天氣が良くて午前中の通行故に雪崩に對して心配も薄い事が何んと言つても此の日の最も愉快なわけであつた。眞白な河原に走る激流と言ひ、勇壯に聳え立つ東鐘釣山の岩壁と言ひ、雪に包まれた溪谷の美さを歎賞せざるを得なかつた。二度ばかり軌道のトンネルをもぐり抜けると東鐘釣山の岩壁の下の鐵橋に出た。之を渡り對岸に行き又トンネルをもぐり、トンネルの中途にある抜穴より出て吊橋を渡れば新鐘釣温泉である。十一時五十分新鐘釣温泉に到着。温泉の番人は外に出て自分等を迎へてくれる。冬ごもりの番人等にとつてはやつぱり人間は懐しいのだらう、何くれとなく世話をやいてくれる。山なればこそ知り得る厚い人情を私は深く喜ばざるを得なかつた。午後は荷物の整理に急しかつた。持つて來た食糧等は大體二分して一つは東谷の方へ、一つは小黑部の方へとし、鹿島槍ヶ岳、五龍岳の登山を終へれば一旦此處に引返さねばならないから小黑部入りの分は此處に残し、東谷の方へ持つて行く荷物だけを四つに分けてそれぞれ荷造りをし、翌朝は早く出掛けられる様に準備をして置いた。

2 不歸谷

二十二日は朝起ると良い天氣である。併し斯様な谿谷では空の一部しか見えなくて兎角其の一日の天候は見定めにくいものであるが、此處に長く冬ごもりをして居る人達の經驗に依れば似合谷の頭に雲がかゝつたり風がついたりすれば天氣が直に崩れ、良く晴れて居れば其の日は大丈夫であると言ふ。幸にして此の日は似合谷の頭も晴れて居たので天氣は間違ひないだらうと直に出發準備

に取りかゝる。温泉の番人等には一先づ別れを告げ、家から連れて来た佐々木の犬と此處に居た二匹の犬と合計三匹の犬も私等の仲間に加り、午前七時新鐘釣温泉を出發した。温泉のすぐ裏の薬師堂の所よりアイゼンを着け、東鐘釣山の南方のちよつとした出尾根を越せば河原に出る。それから直ぐ藪の多い急斜面を少し登つて横に切れれば再び河原に出る。之で問題の瀧は二つとも越したのである。後は谷一つばいの雪で一步々と歩行を續ければ良いのだ。此處にて谷は忽ち狭ばまり兩壁は急立し、兩側の枝谷から落る雪崩は對岸に打當て、數丈の高き山を成して居た。それが幾つも續いてゐて、一つ一つ越して行くのは恰も山を越へ谷を越へ峠を越へて行く様な氣持ちであつた。其の中に先頭を走る犬共は頻に吠え出した。見れば一匹の大猿を圍んで居る。佐々木の一ぱつは猿の足に當り、とうとう木に追ひ上げられて仕舞ひ遂に私等の手によつてしとめられて仕舞つた。祖母谷小舎での楽しみに少しの肉を携え、残りは雪中に埋めて歸りに取つて行く事にして先を急ぐ。十時三十五分大拔下の雪崩の安全な場所を選んで食事を始めた。此の頃から雪面も水分を含み解けかゝつたので輪樫を穿いて登高を急いだ。不歸谷も此處（大拔下）から先は全く其の様子が變り、急な開けた谷となる。スキーでも充分登れるが輪樫の方が良い。それは頻々として落ちる雪玉が雪崩を醸した場合によけ易いからである。潜る雪を踏みしめて上へ上へと眞直ぐに登る私等も以外な勞力の爲めに時々先頭を交代して進まなければならなかつた。中程迄登つた時百貫側から落ちた濕つた雪の上層雪崩にちよつと肝を冷したが大きくならないで直ぐ止つた。一昨日の雨は此處では雪であつたと見えて上へ行く次第にその量が増えて来る。雪は輪樫にくつつくので先頭の苦勞は増すばかりだ。それでも一時四十五分にはとうとう百貫山と不歸岳の最低鞍部に登り着いた。一月より雪量はずつと多い。白馬ののんびりした姿、鹿島槍ヶ岳は見えないが五龍岳の魅惑は心を唆る。少憩の後祖母谷へと急ぐ。下りは輪樫が引掛かつて餘り歩き良い事もない。

祖母谷は谷としては餘り良くない、ことに直ぐ下には悪い瀧がある。百貫側は此處少らく急壁をなしてゐるので川を渡つて對岸中脊山側に至り、横に切つて進む。やがて悪い場所も瀧も通り越したので再び百貫側に移り、大體夏の林道に沿うて行く。此の日は思つたよりも雪が深くもぐつたので勞れも多い、祖母谷小舎は可成り遠く感じられた。その中に温泉の煙が見え出したので小舎が近づいた事が明瞭になり、何んとなしく嬉しかつた。小舎の横の釣橋は川縁に突き出てゐる雪の爲めに通行しにくく、川を渡つて小舎に着いたのは午後六時三十分だつた。

3 祖母谷小舎

祖母谷川祖父谷出合の左岸に建てられた祖母谷小舎は夏の蒸さ苦しくて騒々しいそれに引換へて、今は何たる落着のある静けさであらう。それは祖父谷の方が僅に開いてゐるのみで他が堅固な山壁で圍まれて居て一見暗い感じがする様に思はれるが實際はそれが爲めに却つて落着いて居て雪に埋れた祖母谷川の清らかな流れと共に仲々朗な良い感じもする。ことに小舎の附近には温泉が出て居て炊事其他萬端に對しても好都合であり、氣温もいさゝか温い様に思はれる。勞れ切つて小舎に辿り着いた時直ちに這入り加減にして温泉に浸り、雪に埋れた山々を眺めながら追憶に耽るのは全く良い。それは其の日の苦勞を忘れさせ、新たな登高欲を起させる爲めに適當な休息所となる。登山の根據地としても楽しい山小舎としてもこんな良い所は少いと思ふ。併しながら前年小舎が雪崩に襲れた事があるので次の事を附言して置く。

以前の祖母谷小舎（現在の小舎の數間前方に建てゝあつたもの）は四五年前に雪崩の爲めに全く破壊されて仕舞つたのである。是は獵師等の言ふが如く縣廳の人等が炭を焼かせる爲めに小舎の上方を伐採した事に依つて生じたものであり、現在の小舎は雪崩には全く安全な場所であると思ふ。併し數十年間出た事がない所に雪崩が起つた實例を聞く事が度々あるから、先づ使用する前に其の年の天候や雪の状態に注意してかゝつた方が間違ひないと思ふ。例へば雪が例年よりも非常に多くて森林が或る程度以上に埋り、クラストして其の上に新雪が一尺以上も積つた時とか、小舎の上方の森林が人或は自然の力に依つて破損された場合等の如きは此の小舎の使用を避けた方が良いのではないかと思はれる。又屋根上の積雪多量の爲めに小舎が潰れる心配もある。と言ふのは此の小

舎の屋根の傾斜は割合に緩くて屋根板が腐つた時には雪は屋根から滑り落ちないで積るばかりであり、此の雪が日光の向で片方のみ早く解け、片方には平均のとれない重量がかゝるから潰れるのである。此の實例は雪國では度々ある事だし、現に私等の此の小舎滞在中（四月一日の晩）にも屋根上の雪の片落で小舎が倒れんばかりに振動したが幸にして其の振動に依り他方の雪が落ちた爲めに安定を得る事が出来た。でこう言ふ様な事が豫感がする時には此の小舎より數町上流祖父谷に岩小舎があるからそれに逃るか、其の他の安全な場所に手早く越さねばならぬと思ふ。

二十三日、昨夜は勞れて居て早く寝て仕舞つたので此の日の午前中は小舎を片附けたり、荷物を整理したり、食糧の目算を立てたりするに急がしかつた。午後は更に根據地を餓鬼谷岩小舎に進める爲めに食糧其の他此の小舎で使用しない様な防寒具や器具を南越の上迄運んで置く事にした。午後一時私等はスキーを穿き人夫等は輪櫛で小舎を出發した。大體夏路通り南越の谷に入り、谷は雪に埋つて居るので谷筋通り登る。ザラメ雪は殆ど潜らないでスキーでは非常に樂だ。それに引き替へ人夫等は輪櫛だが可成り潜るので苦勞をして居るらしい、常に遅れ勝ちだ。黒部の如き悪い山に住んで居る獵師等にとつてはスキーは享樂にのみ使用するもので實際の山歩きには役立たないとのみ思つて居たらしい。其の有効さに驚いてゐる。南越の谷が二俣になつてゐる處からは奥鐘山と餓鬼の田甫の鞍部の千五百米邊から落ちてゐる谷（現在の夏路の附いてゐる谷）を大きくヂクザツクに登つて行く。人夫等は輪櫛で眞直ぐに登るのだが尚ほ遅れ勝ちだ。三時三十分南越の上に着く（餓鬼の田甫より奥鐘山に至る尾根の千五百米邊）。一時に展望が開け劔岳の鋭い峯が頻に雪煙を揚げ、際立つた仙人山の尾根が深い谷一つ隔てゝ險阻に横たはり、毛勝・猫又も木の枝の疏を通して見える。朝から良く晴れて居た此の日の天氣は漸く崩れかゝつたと見えて、白馬岳の頂は薄雲にぼけてゐる。此の邊では白馬に風が附いたり、雲がかゝつたりすると天氣が直に崩れてくるそふだ。私等は大きな青木の下をちよつと堀つて持つて來た荷物を全部油紙で包んで此處に残し、再び小舎へと歸路を急いだ。ザラメ雪は自由に滑れて面白い。人夫等は益々スキーの調法なのに驚歎する。時々彼等を待ち合せて小舎に着いたのは五時五十分頃であつた。直ぐに温泉に飛び込んでのんびり汗を流してゐると早くもぼつりぼつり雨が降り出して來た。

二十四日は起きて見ると烈しい雪降りて終には外へも出られない程の吹雪となつて仕舞つたが小舎が良いので何の不自由もしなかつた。暇に任せて作つたゆで小豆は全く美味であつた。

4 餓鬼谷の岩小舎

二十五日、昨日の吹雪もすっかり止んで天氣は上等、準備を整へ七時二十分スキーを穿いて祖母谷小舎を出發した。昨日はあれ程降つたのに積雪量は割合に少い。新雪の量僅に四五寸とは、獵師の名言「春の雪と隣の親父にはおぞむな（おそろしがるな）」にびつたり當嵌まる。尤も此の言葉には春の雪はいくら降つても直ぐ解けて仕舞ひ歩き易くなると言ふ意味も含んで居るのである。さて私等は小舎を出てほんの暫く歩く中に新雪の下の雪が非常に硬いのに氣が附いた。そしてかゝる状態に於てスキーで急斜面を横切る事は最も危険であり困難な事であるから直ちにスキーをアイゼンに穿き換えた。潜るので獵師等の輪櫛の跡に



餓鬼谷の岩小舎

小原勝郎

ついて行く。南越の谷はすっかり埋つて居る所迄来た時自分等はアザラシを充分にきかせて谷筋通り眞直ぐに又スキーを穿いて登った。新雪があつても斯う云うデブリーの澤山ある谷はやはり短いスキーの方が使用上確に有利だと思つた。南越の谷が二俣に成つた所からヂクザツクに登るのがスキーでは雪を切つて落して困るだらうと心配して居たのだつたが、此の邊は新雪も可成り深くてスキーのエツヂが下の硬雪に達する事が無く、大きくヂクザツクに登れば差し支へはなかつた。人夫等は雪が段々濕つて来て輪樑の爪にくつ附くので困つて居た。やがて南越の上に出ると新雪に飾られた山々は一入際立つて其の峯々を白銀に輝かして居た。私等は青木の下より一昨日置いて行つた荷物を掘出して分擔した。夏路は此處から尾根の南側を横切つて居るのだが、此の日の雪質は急斜面を横切るに適せず尾根通り行く。餓鬼の田甫へ着いたのは、丁度午頃であつた。こゝから眺める鹿島槍ヶ岳は仲々立派で登高欲を湧き起させるに充分だ。此の平（餓鬼の田甫）は日當りが非常に良く雪が濕つて歩けない程にくつ付き出した。スキーの底に一尺近くもくつ附いたのには全く閉口した。それでも此の平を突き切つて仕舞ふと餘りくつ附かなくなつたので助つた。餓鬼谷へは木の込んだ急な尾根筋を下つて行く。スキーが短いので何うにか使用が出来たのは有難かつた。私等の下つた尾根の下で川縁より一段上つた處は岩小舎である（標高千米附近、温泉の出る處より二三十間下流）。午後二時半岩小舎に到着。

此の岩小舎は最初日電の人夫等に依つて使用され、其の後數人の獵師も使用して来たそうだが岩小舎としては非常に不完全なものだ。唯大きな岩に丸木を五六本立て掛け、その上に古ぼけた防水の布が一枚かゝつてあるだけである。中は雪が餘り吹込んで居ないが雪解けの水はぢやぶぢやぶ滴れて居て、之が自分等の泊り場だと思へば少々情無い氣持にならざるを得ない。それでも雪上に火を焚く苦勞と寒さが幾等か避けられるので助つた。佐々木は薪を採り、山本は岩小舎の手入れをし、小原と私は水場を作つて炊事の手助けをし、各々自分の仕事を終へて小舎に落着いたのは六時も過ぎて居た。焚火で岩が温まるのは良かつたが雪が解けて水が滴れるので不自由千萬、遂に油紙を冠つて寝なければならなかつた。

二十六日の早朝は天氣が良かつたが俄に曇り出したので出發を見合せた。人夫等は油紙を載せて屋根を作つたり、岩と木の間に泥を詰めて水が滴れない様に苦心して岩小舎の手入れを行つて居る間、自分等は睡眠不足の勞れを休める爲めに晝寝をした。午頃に成つて陽が當つて来たので外へ出て日向ぼっこをして居ると、人夫等がスキーを持ち出して来て滑る様は餘りに滑稽で暫くの間皆の笑も止まなかつた。其のうちに天候も又段々悪く成つて来て三時半頃から雨となつた。

二十七日、昨日の雨は夜に成つて雪に變つたのであらう。新雪が少し積つて居る。天氣はすっかり曇つて居て今にも降り出しそうだ。天候は定まらないし食糧は少し不足の様だから人夫等をして祖母谷小舎へ米を取りにやる。十時頃出發。日當りの良い此の岩小舎に雲の切れ間より差し込む日光の爲めに雪解けの水が又もや落ちて来る。外へ出て日向ぼっこをするのは何よりの慰めだ。

二十八日、朝は一點の雲もない良い天氣だつたが九時頃から俄に崩れ出し、雪さへちらちら降つて来る。三月の末だのにこんな天候の定らないのは全く嫌になる。併し日が當らなくて水の滴れないのは嬉しい。十一時半頃ぼうとよつ（人夫の連れて来た犬）がひよつこりやつて来たので、人夫等が戻つて来たなと思つて外へ飛出す。以外に早く戻つて来たのに氣を良くし、スキーの享樂に一ときを過した。やがて大きな薪も用意され岩小舎一ぱいに火が焚れた。その傍で愉快的夕食を始めた頃は風さへ加はり、外は全く吹雪と化して居た。私等はかゝる滞在の長く續く事を恐れた。それは日數が長くかゝる等と言ふ事よりも、寧ろ不便な岩小舎では下らない事で不愉快になつたり嬉しく成つたりして、意氣銷沈し勝ちだからである。力一つぱいの登行、目指す山頂が一日も早く来る事を祈つて寝につく。

5 東谷野營

二十九日、昨日までの悪天候を見事裏切つた快晴である。滞在で氣が弛んで居たせいか朝寝をして、

遽しい支度の後午前七時二十分岩小舎を出發した。雪は割合に硬くアイゼンを付けて餓鬼谷の右岸を横切つて進む。忽ちにして谷は狭まり岩壁は行手を遮る。雪橋を利用して對岸に悪場を避る事二三回にして又右岸に進路を取る。谷は雪崩で埋つて廣く成つて来る。そして地圖に於ける餓鬼谷の「谷」の字の所迄來た時、東谷山から出て居る谷に登路を求めた。雪は段々深く成つて潜つて歩き辛い。日當りで濕りかゝつた雪がそろそろくつき出し又もや自分等を悩ました。谷は廣まりスキーの使用も出來そうに成つたのでスキーを穿く。毛勝・猫又、續くウド谷の頭は陽光を浴びて輝き互つて居る。やがて私等の登つて居る谷が二俣に成つた所で右の谷に入り、東谷山の尾根の千九百米の鞍部を目指して進む。上に行く次第に雪質も良くなり、十一時四十分東谷山の千九百米の鞍部の頂上に着いた。目前に輝く鹿島槍ヶ岳の秀麗な姿を暫くの間見とれた後、明日登る可き登路に就いて探索した。そしてそれを東谷と牛首山の方から落ちる其の最も大きい支流との間の尾根に求めることが出來た。此の尾根の上の方が強い光に輝いて居るのを見て、山頂に用のない人夫等はあの氷の所だけは行き度く無いと言ふ。彼等は山頂の氷が非常に恐いものであると想像したに違いない。立山・劔・毛勝の群峯も實にすばらしい眺だ。併し東谷の野營が暇取るから餘りゆつくりも出來ない。直に東谷へとスキーを向ける。即ち此鞍部よりちよつと東に切つて南に尾根を下る事ほんの暫くにして又谷を一つ東に横切り、再び尾根について下れば東谷の牛首山の方から落ちる谷との出合（標高千九百九十七米の處）に出た。時に午後一時。私等は雪橋を對岸に渡り、荷物を下して直に野營地の撰擇に取り掛つた。あちらこちらと探した結果大體三つの候補地を得た。其の一つは牛首山の方から落ちる谷との出合にある大きな岩で、岩小舎の形を爲してある。之を利用すれば其のまゝ使用出來て最も便利だ。山本が之を力説する。併し雪山に這入るものの常として、若しそれが數日間雪崩に對して安全なる雪質の状態に置かれるも、かゝる大きな上の開いた谷の下に寝泊りする事は絶體に避ける可きであると言ふのが佐々木の意見であつた。私は佐々木の意見に従ひ、更に第二の野營候補地に就いて考へて見た。それは牛首山の方から落ちる谷の出合より東谷の本谷に沿うて半町程登つた臺地で風當りの少い良い場所であつた。併し私等は野營の道具としては天幕一つ持つてみないのである。僅に信州大町から取り寄せた四十八枚張りの油紙が二枚あるのみだつた。かゝる準備で深雪の中で野營するに最も大切な事は地形の利用と焚火である。此の二大條件が此處では可成り不利だ。ことに雪上の焚火は色々な方法があるも尚ほ困難な事である。私等は第三の野營候補地を物色した。そしてそれを牛首山の方から落ちる谷との出合より二町程上流の東谷の廣河原（地圖に於ける東谷の東と一一九七の標の中間位）に求めた。其處は可成り好條件の場所であつた。直に野營地と決定して準備に取り掛かつた。

次に大體其の野營方法に就いて記す。

此の私等の野營地として選んだ場所は百米位の廣い河原の眞中を東谷の川が流れて居り、其の川縁であつた。何處でも大概は川縁の一米乃至二米位は積雪量が割合に少いものである。此處も矢張りそうであつた。私等は川縁の雪を巾三米、奥行二米位に仕切つて悉く川の中へ捨てゝ仕舞つた。



東谷の野營

小原勝郎

そして其の上には木を組合せ、二枚の油紙をきちんと載せ、更に其の上に木の枝を冠せて屋根を作り、又下にも木の枝を澤山敷いた。之で屋根が出来上り三方が雪の壁で、川に面した入口を除いては隙間の無い小舎の様な恰好のものが出来上った。だがそれでも未だ不充分だ。川面より吹き上げる寒い風を避ける爲めには川縁に石を積み、其の上に大きな焚火をしたのである。私等は斯様な野營方法を取つたのだがそれには勿論充分なる薪が必要だ。又荷物過重でスコップを持つて来なかつたので、川縁の雪を取るにも硬い雪は全部鋸で切つて川へ投込んだ。兎に角鋸は此の野營で一番大切な役割をしたのである。皆で分業して力を揃へてやつたので七時には出来上り、旨しい晩飯に有りつけた。座りながらにして水は汲めるし、寒さの點も大丈夫なので雪中野營としては先づ大成功であつた。之で野營の問題も一先づ片付き、後は氣に成るのが天候だつた。幸にして其の晩は一面に星が輝き、翌日の天氣も何うにかいゝ様に思れたが最早や頂上も最後の一日に迄追ひ詰め、後の運は天候に任さねばならぬと思へば只管それを念ぜずには居られなかつたのだつた。

6 鹿島槍ヶ岳

三月三十日、未だ十分睡眠も取らないのに人夫等は起きて炊事の支度をして居る。何故か良く眠れないので起上る。三時半だ。綺麗な星空。今日こそは立派な天氣だ。此處から鹿島槍ヶ岳へは殆ど下りのない一直線の登りで割合に近い。總登高距離が一七〇〇米突位で此の日の雪質からして先づスキーは不用である。其の方が勞力的にも時間的にも確に有利だと思つたからである。餘り潜らなければ一時間四〇〇米突の登高は左程困難な事ではない。休憩其の他の故障等に要する時間を通算しても登り六時間、下り三時間合計九時間（實際に要したのは七時間）もあれば十分だらうし、出發も餘り急がなかつた。それに暗い間の登高は身心共に勞を來たす憂ひがある。數日間の野營で身體の勞れてゐる私等にとっては精力の節約は最も大切な事である。兎に角明る成つてから出發する事にした。周りが山稜で圍まれてゐる此の深い谷は夜明の訪れるのが割合に遅かつた。すつかり準備をして待つて居る中に次第々々に暗い幕は何處ともなく消え去つて、東谷の朝は靜に明離れて來た。何んと氣持のいい朝なんだらう。全く人氣のない雪に埋れた谷間の空氣は澄み切つて居た。こんなに靜な氣持のいい朝は何時又味へる事か。

午前五時五十分アイゼンを付けて私等四人は野營地を出發した。登路は豫定の如く鹿島槍ヶ岳頂上より東谷の一七九七米突の標の處迄延びて居る尾根にとつた。歩き良い硬雪を踏みしめて尾根を眞直ぐに登つて行く。廣くもないが瘦せてもいない、傾斜もそれ程急でない、登るには適當な尾根だ。大きい木は澤山あるが邪魔にもならない。別に急ぐ積りでもないが足は自然に早く成り勝だ。五六百米突はじきに登つて仕舞つた。見れば劔の鋭い峯が朝日に輝いてゐる。其の前には仙人山の尾根が深い谷間に座つてゐる様だ。小憩の後又登高を續ける。上へ行くに従つて段々雪質も變つて來て潜る。遂には輪樫を携帶してゐる人夫等を先にしてゆつくり進まなければならない様に成つた。傾斜も急に成り、青木の森が込んで來る。それでも休まず登高は續けられて居た。尾根は俄に緩くなつて木も疎に成り眼界は開く。雪は斷然粉雪に化した。暫らく尾根の南側を横切つて進めば平の見通しの良い、氣持のいい處に出る。此處から見た五龍岳は丁度屋根の様な恰好をして居る。東谷の野營地ではさして見榮えないが此處で見れば又いい山だ。五龍岳から鹿島槍ヶ岳に續く山稜も絶壁をなして東谷に落ちてゐるのは實に立派だ。人夫等は之から上へは氣が進まないと言ふので歸へす事にした。そして野營場の手入と薪をとる事を頼み、體も休める様に言つてやつた。小原と私は簡単に食事を攝つて八時五十分又歩みを續けた。雪は潜つて苦勞だが歩速をちつとも弛めようとはしない。それは休む事に依つて却つて身體の調子を崩す事を恐れたからである。其の中に鹿島槍ヶ岳が斷然其の秀麗さを増し、續く北槍とならんで其の西北面が東谷にえぐれ落ちてゐる姿こそは實に立派だつた。八峯のキレットも眞正面に見える、全く險惡だ。歩きながらも此の景色を見る事は怠らなかつた。森林帯を全く脱して仕舞つた頃からはいよいよ雪も硬く成つて來て氷の様だ。高度のせいか何時ともなく吹き出た風は身に滲みて來る。急な所を一箇所注意深く登れば廣々とした頂稜である。そこから僅にして十時四十五分遂に私等は鹿島槍ヶ岳の頂上に達した。眺望は相變ら

ずいゝ。併しそれよりももつと嬉しい事は私等が此の山に因縁の深い事だ。即ち信州側より小原が昨年の三月に、私は昨年の十二月に此の頂に立つた。それが今又越中側より登り得たのである。自分等にとってはそれだけで充分だつた。馬鹿げた労力も苦痛も忘れさせ、何故か求めて行く山頂、止むに止まれぬ山の旅は行く度に、登る度に山への魅惑を増すばかりだつた。

私等は暫らくの間立止つて深い思ひ出に耽つた後、盡きぬ名残りを残して此の山頂を後にした。越中側より吹き上る寒風を真正面に受け、登つた時の足跡を辿つて下りを急ぐ。登りは苦勞だが下りは早い。何時しか森林帯の所迄来て仕舞つた。深い雪も今は何等の心配も苦勞もない。唯踏み跡について下り足を軽く運ぶだけだつた。混んだ木の間をぬつて震動の來ない軟雪の上を飛び下つて行く。下の方へ来てからは雪も締つて大分硬い。グリセードや其の他の色々な滑り方を利用して野營地に戻り着いたのは午後一時に十分前であつた。

兩側は山壁に依つてはつきりと區切られ、其の眞中を廣々とした河原が五龍と鹿島槍ヶ岳を繋ぐ險惡な山稜に突當る迄伸びて居る東谷は、深雪に埋れて居るが矢張り春らしかつた。暖い陽光が谷一つばいに投げられ、さらさらと流れる清らかな水は所々出て居た。何んと長閑な気分だらうか。既に一つの望みを果し得た私等は此のいい氣分を十分に味はう事が出來た。野營場は人夫等の手に依つてふかふかと青木の技が敷かれて蒲團に優る氣持良さだ。暫らくの間寢袋に潜り込んで明日の登高に備へる爲めに勞を休めた。晩は空一面降る様な星だつたが、月に大きな輪がかゝつて居て何んとなく翌日の天氣が心配でならなかつた。

7 五 龍 岳

三月三十一日、夜明けの東谷は薄暗い靄で包まれて居て、はつきりとした天氣ではない。曇つて居ると言ふ程でもないが空は一面にぼけて居て、昨晚の月に暈が掛つてゐたのを思ひ出し、何んとなく天候が氣に掛かる。昨日の登頂でいさゝか安心したせいか勞れとだれ氣味で何事にも氣が進まない。併し一日の休養に依つて天候が崩れたら、野營の日數も重なり、却つて身體の調子を害するばかりだ。それが爲めに長い間待ちに待つた五龍岳の登山が出來なくなる様な事があつたら、それこそ取り返しがつかない。一刻も早く今日の登高を敢行して安心しなければならぬと、無理に元氣を出して準備に取り掛かつた。人夫等は道具や防寒具の不備と毎朝早くからの奮闘で身體も勞れて居るし、又頂上にも何等の興味も無さそうだつたから、一日ゆつくり休養させる事にし、同行しない事にした。登路は昨日鹿島槍へ登る途中から良く見て置いたので何等躊躇する事もなかつた。即ち地圖に於ける東谷の千五百米邊のガレの標の所から五龍の頂上に眞直ぐに伸びて居る谷筋を登る事にした。

此の日も雪が硬いから先づスキーは不要だ。それに東谷の廣い河原の半里程を除けば急斜面でスキーの使用が困難な事である。六時十五分、小原と私はアイゼンを穿いて野營地を出發した。廣々とした緩い平の様な東谷は硬雪で全く歩き心地がいゝ。三十分餘にして眞直ぐ五龍の頂上迄通じて居る谷の下迄来て仕舞つた。此の谷から出た雪崩が東谷の本谷迄押し流し、山の様に盛り上つて居る。直ちに左に折れて此の谷を



五龍岳の東谷側

小原勝郎

登る。半町程行くと瀧がある。此の瀧も雪の無い時は相當に大きいものだらうが、今は上から押し流された雪崩に依つて雪が被さつて居り、水の流れ落ちて居るのが見えるのは僅に二三米であつた。右岸の雪上を辿つて登り、岩壁を二三米横に切つて瀧の上に出る。之から先は愈々何の障害物もなく、谷は急だ。雪は硬くて休む時などは雪をピツケルで切つて足場を作るか、腰の置き場を作つてかゝらなければ全く不安定だ。五龍の頂上迄續く此の急斜面には幾度か斯うした手数のかゝる休憩も必要だつた。併し私等は餘りゆつくりした休憩は出来なかつた。それは天候が餘り思はしくなかつたからである。空は薄雲で曇り勝だ。それに寒い風が盛んに吹き立ち、何處からともなく吹き飛ばされて來た雪片が硬雪の上にさらさらと音を立てて落ちて來るのであつた。此處で之だけの風なら頂上では何んなに酷いだらう等と想像すると、此の日の身體の悪調子と共に登高欲は灯ち碎かれんとした。併し長い間待ちに待つた絶好の機會をこのまゝ見逃す事は出来ようか。出来得るだけの努力を續けなければならぬとお互に勵まし合つた。其の中に朝日も時々當つて鹿島槍ヶ岳の姿は冴え互つた。それは私が是迄鹿島槍ヶ岳を見た中で一番立派なものに違ひなかつた。登高が段々續けられて行くと今度は硬雪が割れて潜る様になつた。薄い硬雪の下は全くの粉雪であつた。こゝで私等は又一苦勞をしなければならなかつた。其して上へ行くに従つて硬雪も益々薄くなり、仕舞ひには全く粉雪となつて仕舞つた。丁度雪が粉雪に成つた邊の傾斜は幾分緩く成つて居た。併しほんの暫らくだったが所々風で押しつけられた雪は板状雪崩を起しやしないかと慎重なる足取りで進まなければならなかつた。割合に短距離の間の粉雪状態が過れば愈々氷の様な硬雪である。暫らくの間休んで最後の登攀の爲めに準備をととのへ、又登高を續ける。此の頂上間近の最後の二三百米の登高が私等には非常に苦痛であつた。それは傾斜が再び急になつた事と身體の調子が悪くて食欲が減退し、流動物かクリームビスケット位しか食へなかつたからである。それでも先程からの天候が崩れる事もなく、却つて風勢が弱くなつたので、ガラガラした岩を少し攀つて、午前十時四十分遂に頂上に達する事が出来た。

私等は今登つて來た跡を見下してあの時引き返さなくて良かったと喜びに満ちた。そして又此處でも鹿島槍の頂上と同じ様な懐しい感激に満たされた。見下す眞白な八方尾根も今は思ひ出の種だ。周りの山々は奇麗に飾られて居る。いゝ気持ちに成つて岩陰に暫らくの間休んでビスケットで食事を攝つた。下りは矢張り登つた跡通りに下る。所々注意を要した所もあつたが概しては斷然樂だつた。それに最早や登路の心配も天候の心配も無く全く氣輕なものであつた。登る時休んだ粉雪の所でちよつと休んだ後大股にどんでん足を運んで東谷の出合に下つたのは十二時三十分であつた。此處で初めてアイゼンを取り、ぶらぶらと軽い足を運んで野營地に戻り着いたのは午後一時であつた。天候も先刻よりはずつと良くなつて今はいゝ天氣だ。私等は之で此の野營の目的も果す事が出来た。望む山へも登つたし氣樂に成つて仕舞つた、ザラメ雪の上をスキーで散歩するのも、野營場で雑談に耽るのも喜びに溢れて居た。

8 登山中止

昨晚仙人の頭に雲が掛つたので天候の崩れる事を豫感して居たのだつたが、四月一日の朝は起きて見ると豫想通りにしとしとと雨が降つて居た。二日間の苦闘は遂に私等に幾多の感激と喜びを與へてくれた。此の上の望みとしては唯休養だけだつた。併し此の不自由な野營ではのんびりした休養の出来る筈がない。雨も構はず斷然と東谷の野營を引き拂ふ事にした。そしてこう降つては餓鬼谷の岩小舎も尚不便だから、一氣に祖母谷小舎迄戻り、餓鬼谷の岩小舎に残された荷物は明日取りに行かうと言ふ事に一決した。

午前九時三十分荷物を纏めて野營地を出發。大體來た時のルートに従つて進む。段々登つて行く中に雨は曇となり雪となつて、東谷山の尾根を乗越す鞍部の頂上では全く粉雪であつた。此處からは一飛ばしに餓鬼谷の出合迄滑り下りた。輪樑の人夫等は可成り遅れたが、雪崩の危険のある此の日は安全地帯迄の休憩を避けなければならなかつた。高度のせいか此處では又雨であつた。暫らくの間待つて居ると人夫等もやつて來たので又出掛ける。今度は來た時の様に餓鬼谷を下らないで、

右岸の尾根に附いて餓鬼の田甫の方へと眞直ぐに登る。少し登ると又雪となり、益々激しく降つて来る。二時間餘も費して漸く餓鬼の田甫の附近迄來たのだつたが、其處では激しい吹雪で獵師等でさへも方向を見定めるに相當困難した。三十分間位彷徨ひ歩いてやつとの事で餓鬼の田甫に出て、方向を取り戻した時分は物凄い吹雪であつた。それから南越の谷を逃る様にして下り、祖母谷小舎へ戻り着いたのは午後五時二十分であつた。衣類はすっかり水を通し、一時は凍える程の寒さだつたが最早や安心だつた。圍爐裏を圍んで温いお茶を啜つた時は家へでも歸つた様なゆつたりした氣持になる事が出來た。

二日、疲れて熟睡して居る間に人夫等は餓鬼谷の岩小舎へ荷物を取りに行つた。自分等は午頃に成つてやつと起きて見ると外は吹雪いて居た。晴れ間を見て温泉に這入つた後人夫等の爲めに火を焚いて温いお茶を作つた。彼等は六時半頃びしょ濡れに成つて歸つて來た。そして餓鬼の田甫附近では昨日に優る吹雪だつたと言つて居た。

三日は一日中快晴であつた。併し是迄不便な野營や苦しい登行の爲めに一日だつてゆつくりした休養が出來なかつたので今日こそは思ふ存分に寛ぐ事にした。外は來た時と比べると雪も大分減つて居る。雪崩も可成り落ちて仕舞つて山は所々地肌を現して居る。暖い春光は温泉に浸つて居る自分等に思ふ存分投げ掛けられて居る。春だ、全く春だ、自分はこんなに強い春の印象を受けた事が何處であらうか。小舎内では残りの食糧品は未だ澤山ある。之等を美味しさうなものからどんどん食つて行くのは私等の山行には珍しい豪遊振りだ。一週間の不便な野營と粗食の後の斯うした事は忘れ難い楽しい記憶を残させたのであつた。

四日は矢張りいゝ天氣だつた。愈々此の小舎ともお別れだと思へば何んとなく名残り惜しかつた。午前六時五十分祖母谷小舎を出發。來た時と同じルートをとどつて新鐘釣温泉へ戻つたのは午後の五時半であつた。不歸谷の雪崩も殆ど落ち盡して居て氣樂だつた。新鐘釣では自分等の安否を氣遣つて居たそうだが無事に歸つて來たので皆非常に喜び、又鐘釣の日電の人等も態々無事を喜びに來て下さつたのに全く感謝の外はなかつた。

併し其の晩私等の登山にとつては致命的の出來事が起つた。それは人夫等が祝ひ酒を呑んだ後で「登山と言ふものは斯んなに辛いものなら、此の先を同行する事は何うしても嫌だ」と言ふのであつた。そして幾ら宥めても説き聞かせても彼等には此の先の登山に對する意志は全く無く成つて仕舞つて居た。こゝに其の原因に就いて記す事は避る。併し同じ山に憧憬れて行く人の中でも獸の跡を追ふて満足する人と、山頂を得て満足する人との氣持の間には斷然たる相違がある事を發見した。自分等は此處で人夫等に背かれた事は不便な岩小舎生活や過重の荷物を背負つて未知境に進まねばならぬと言ふ過勞な事になつて仕舞つた。そして敢て此の先の登山を續けるにはもう一段の進歩と研究が必要であつた。其の晩は小原と二人で熟慮した結果、明日再び人夫等を説いて尚ほ同行を承知してもらへなければ残念ながら此の先の登山は中止しなければならない、そして改めて入山しようと言ふ事に歸着したのであつた。

五日は殆ど暴風雨と言つた様な天氣であつた。滞在を利用して言葉を換えて色々と人夫等を説いて見たが矢張り駄目であつた。斯うして此の登山も愈々こゝで中絶と言ふ事になつて仕舞つた。此の上は一日も早く下山して入山仕直さうと思つたのだつたが、六日、七日、八日の三日間は吹雪と激しい雪降りが續き、九日にやつと宇奈月に下山する事が出來、遂に黒部入りの再擧も出來なかつた。今となつては次期を待つより外はない。

附 記

以上で大體此の登山記録を了へたのだが、尚参考迄に積雪期に於ける鹿島槍及び五龍岳への部員の足跡を極く簡単に纏めて置かう。

一九二九年十二月

五龍岳・唐松岳 逸見眞雄 堀田彌一 竹澤長衛 (人夫)

十四日 晴 四谷―八方中繼小舎

十五日 晴 八方中繼小舎－唐松小舎－八方中繼小舎 荷物運搬
十六日 晴 八方中繼小舎－唐松小舎 唐松岳登山、不歸偵察
十七日 晴曇後小降 唐松小舎－五龍岳－唐松小舎（時間 七時間五分）
十八日 二十日 曇雪又は吹雪
廿一日 曇 唐松小舎－四谷

一九二九年十二月－一九三〇年一月

鹿島槍ヶ岳 逸見眞雄 堀田彌一 志鷹喜一（人夫）
卅日 曇 鹿島村－大冷澤二俣手前に野營準備
卅一日 曇 鹿島村－野營地
一日 吹雪後曇 風強し 滞在
二日 晴後吹雪 野營地－北俣鎌尾根登高、國境直下－野營地（時間 九時間十分）
三日 七日 雪又は吹雪 歸京

一九三〇年三月

鹿島槍ヶ岳・爺ヶ岳 逸見眞雄 小原勝郎 櫻井一雄（人夫）
廿二日 晴 鹿島村－鎌尾根の南側の谷を登る－鹿島槍ヶ岳－鹿島村（時間 十三時間）
廿三日 晴後曇 休養
廿四日 晴 鹿島村－西俣登高、國境近く右の尾根を登る－爺ヶ岳－南峰－長ザク源頭より下る－鹿島村（時間 十二時間四十分）

一九三〇年十二月

鹿島槍ヶ岳・爺越え 堀田彌一 斯波悌一郎 逸見眞雄（爺ヶ岳のみ） 櫻井一雄（人夫）
十二日 晴 鹿島造林小舎より大冷澤北俣を鎌尾根の下まで偵察
十三日 十六日 曇雪模様又は吹雪 滞在
十七日 晴 翌日の偵察とラツセルに笹喰附近まで往復
十八日 晴 鹿島造林小舎－北俣鎌尾根登高－鹿島槍ヶ岳－鹿島造林小舎（時間 十五時間）
十九日 晴時々曇 滞在 逸見來る
廿日 廿二日 雪又は曇 滞在
廿三日 曇 西俣出合まで翌日のラツセル
廿四日 曇後吹雪 鹿島造林小舎－西俣長ザク登高－爺ヶ岳－扇澤を下る－大出（時間 十四時間三十分）自動車にて大町に至る

一九三一年三月－四月

鹿島槍ヶ岳・五龍岳（黒部側より） 堀田彌一 小原勝郎 人夫 佐々木市次郎 山本竹次郎
廿日 晴後雨 宇奈月－猫又取入口
廿一日 晴 猫又取入口－新鐘釣温泉
廿二日 晴 新鐘釣温泉－不歸谷－祖母谷小舎
廿三日 晴 祖母谷小舎－南越の上－祖母谷小舎 荷物運搬
廿四日 吹雪 滞在
廿五日 晴 祖母谷小舎－南越－餓鬼の田甫－餓鬼谷の岩小舎
廿六日 廿八日 雨、小雪
廿九日 晴 餓鬼谷の岩小舎－東谷山の尾根千九百米邊－東谷野營
卅日 晴 野營－鹿島槍ヶ岳－野營（時間 七時間）
卅一日 晴 野營－五龍岳より東谷の千四五百米邊に落ちて居る谷筋を登る－五龍岳－野營（時間 六時間四十五分）
一日 雨後吹雪 野營－東谷山の尾根千九百米邊－餓鬼の田甫附近－祖母谷小舎
二日 雪後吹雪
三日 晴

- 四 日 祖母谷小舎－不歸谷－新鐘釣温泉
五 日 八日 雨、吹雪又は雪
九 日 晴 新鐘釣温泉－猫又取入口－宇奈月

根據地、その他

積雪期の黒部流域に於て登山の對象となる山小舎は可成りある。併し之等の山小舎も距離が非常に接近して居たり、或は地域的の不利からしてそれ程を爲さないものもあり、實際上役立つものは僅に平、御山谷の兩日電小舎、棒小舎澤の獵師小舎、祖母谷小舎、新鐘釣温泉位だと思ふ。而して以上の山小舎のみにては尚積雪期の黒部を對象とせる登山が非常に不便であり、且又範圍も可成り限定される。此の不便と範圍の限定を避ける爲めに山小舎以外の根據地をも必要とする。即ち岩小舎に依るか、野營に依るかしなければならぬ。

岩小舎と言つてもそれが殆ど普通の小舎と變りない程の立派なものもあり、野營に等しい程の不自由なものもあり、又手入れや發見に依つて是迄知られて居なかつたものも使用が出来る様に成り、個數とか使用の可否に就いても明瞭に示す事は困難である。それで此處では今度の登山關係で實際に知り得た中ノ谷の岩小舎と餓鬼谷の岩小舎だけを擧げて置く。野營に就いてはそれを敢て行へば如何なる場所でも差し支へないだらうが、天候と雪崩の危険が多分にある冬山、ことに黒部流域に於ては場所の選擇が最も重要な事だと思ふ。又荷物多量に成り勝ちの事からしても出来るだけ地形を利用し、過多の野營道具を省かねばならぬ。斯様な事等を考慮し、山々に至る好位置としては東谷と内藏之助平が最も好適地だと思ふ。

併しながら以上に擧げた山小舎・岩小舎及野營地が悉く根據地として常に絶對安全地帯であるとは言明出来ない。殊に（其等の中の或るものは）附近が雪崩の通過路に當つて居るものさへあり、稀に見る變調な天候や積雪状態の年は根據地にあつても尚ほ注意を怠らず、危険の前兆を發見した様な場合は躊躇しないで安全地帯に進退す可く、出来るだけ廣く登路に就いても研究して置く必要があると思ふ。又出入りにも雪崩の危険地帯が多いから天候以外の滞在をも豫定しなければならない。即ち日數と食糧は餘分に見積つて置く事が必要だと思ふ。

天候や雪崩に就いては未だ入山の経験も淺い事だし、獵師等の言ふ事も個々別々な事が多く、充分な事は知らないが、極く簡単に記して見ようと思ふ。元來天候と雪崩は切り離す事が出来ない程密接な關係があるものであるが、黒部流域に於ては特にそうである。即ち谷を背景とする處が多く、悪天候其のものから來る障害又は危険が割合に少い様だが、それに準じて起る雪崩には最も恐る可きものがある。或る場所は好天氣であつても其の前日に降れば出掛られなかつたり、或は午前中以外の通行が危険であつたりして、同じ天氣でも其の場所々々に依つて左右され、行動は常に束縛され勝である。而して雪崩發生の最も重大なる條件が天候にありとすれば常に怠りない注意を以つて其の變り目を豫知す可きである。然るに黒部の如き深い谷間に於いては空の一部分しか見る事が出来なく、天候に騙される事が少くない様だ。それで其の場所獨特の天候の目標等は益々必要である。例へば新鐘釣温泉では似合谷の頭、祖母谷小舎附近にては温泉の煙、餓鬼谷、東谷にあつては仙人の尾根等の如きは良く其の日の天候の目標として助になる事が大である。

又雪崩其のものに就いては私の黒部入り中では音もない様なものには相遇する事も目撃する事も出来なかつたので知らないが、音を立てて落ちて來るものは敏活な行動に依つて障害を避け得る事が非常に多いと思ふ。私の経験したところでは一月の不歸谷、四月の不歸岳・百貫山最低鞍部の祖母谷側の谷筋で雪崩發生の音と共に逃げて前者は片足を埋めたが、後者は全く逃れた。又落ちるのを附近で見て居ると音がしてから下迄到達するに充分逃れるだけの餘裕があるものが非常に多い。而して雪崩の音と共に進退して之を避る事は此の地方の獵師等も常に行つてゐるものであり、私如きものゝ記す迄もない事だが黒部へ入山する人は充分心掛けて置く可き事と思ふ。

以上は私の二三の積雪期に於ける黒部入りの経験より特に氣附いた事で未熟ながら付け加へて置く事とした。何等かの参考となれば幸甚である。

[昭和六年五月稿]

要 約

昭和6年(1931)3月26日～4月3日の記録。唐松岳から鹿島槍ヶ岳縦走。

メンバーは、伊藤愿、工樂英司、長谷川清三郎。

行程は、3月26日 白馬館－細野(丸山宅)。

27日 滞在。

28日 細野－北俣－細野。

29日 細野－中継小屋－唐松小屋。

30日 滞在。

31日 唐松小屋－大黒の南のコーラ遠見尾根とのジャンクション・ピーク
－五龍本峯－露營地。

4月1日 滞在。

2日 露營地－キレット下－再びキレット下－露營地。

3日 露營地－北峯と南峯とのコーラ南峯頂上－西俣出合－鹿島－対山館。

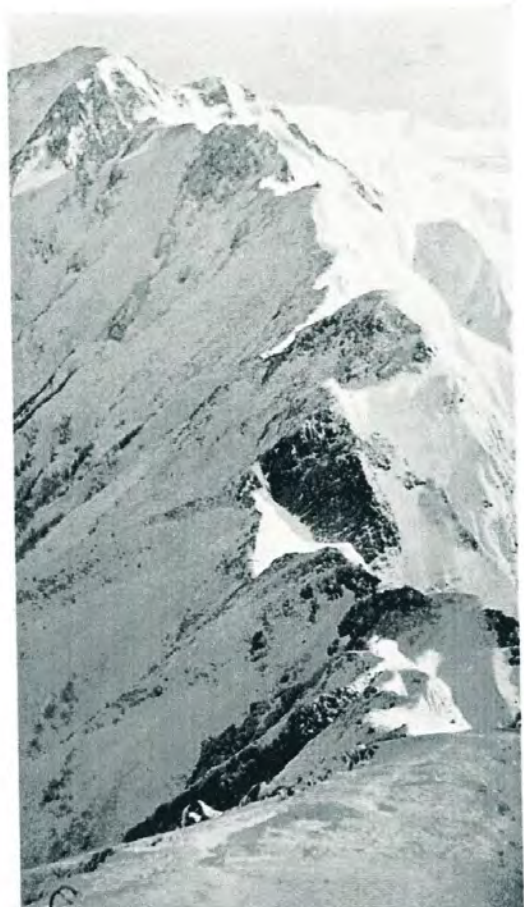
※このコースの縦走は、山口勝氏、穂刈三壽雄氏がトレースしていると、註1に書かれているが、どちらも厳冬期とは言い難く、この記録を積雪期初縦走と認めたい。

1931.3.26－4.4の紀行

伊藤愿(リーダー) 工樂英司(以上京大) 長谷川清三郎(三高)

春期に於ける後立山連峯の登山については報告第一號に於て、神戸商大田中伸三君の記述にその概観を得られるであらう。

今回我々の取つたコースは、唐松小屋を中継として五龍岳より鹿島槍へと尾根縦走をするものであつた。僕の知つて居る限りに於て厳格な意味の積雪期に於ける此の尾根の縦走は僕等のパーティ以前には無い様に思ふ。(註1)それは此の尾根縦走が決してクライムとしての困難さを持つて居るからでなく、途中に於てビバックを餘儀なくされる所のコースだからであらう。しかも五龍と鹿島槍との間にその露營地を求めらば、何れに求めたにしてもいざ天候險悪といふ場合の逃げ道がない。といふのは雪崩の危険に曝された谷以外に比較的容易に下り得る尾根コースは全然ない。此の點に今迄此のコースに手を付けられなかつた最大の原因がある様に考へられる。即ち此の登山は決してクライムそのものゝ困難のために取残されたものではなくしてその登山に必要な手段一主とし



五龍岳(八峯キレット付近より)

伊藤 愿

てビバックーの困難さから取残されたものであらう。僕等が此の尾根の縦走をやるについて精神的に最も大きい指示を與へたものは Paul Bauer “Im Kampf um den Himalaja” であつた。勿論此の登山は此の書を手にする以前に計畫したものではあつたけれど、此の書は此の登山の實行に當つて僕等にその取るべき方法の多くを suggest し又多くの自信を與へてくれた。

僕等のパーティの3人は此の尾根に對して全く未知であつた。それ故僕等は結果に於て夏道を知らなかつたと云ふ理由で多くの時間的なロス—それは此の登山をより困難なものとしたけれども—を負はなければならなかつた。そして僕等が夏道を知つてゐる人夫を伴はないで敢行した事は決して無暴な企てでなくしかもそれは僕等の意圖の前に何等の責をも感じさせるものではない。

僕等が此の登山のために準備した食料は3人分全部で大要次の如きものである。(註2)

味付ロシヤパン (棒)	20 斤	ミルクパン	12 枚
ビスケット	100gr.	バター及ペイスト	900gr.
ソーセージ及ハム	1000gr.	チョコレート	350gr.
コゝア	112gr.	砂糖	900gr.
干杏	200gr.	メリーミルク	5 個
生レモン	2 個	紅茶	少量

尚唐松小屋滞在中に小屋備付の米約五合を使用した。

登山用品として僕等が特に此の行のために準備したものと云つては無いが、露營用として巾 2 米深さ 1 米半の Zudarsky Zeltsack を携行した。それはセルロイドの窓を持つて居り、その窓が紐によつて開閉出来る装置のものであつたが、後に記す様な事實のために Zeltsack に窓をつける事の可否は一考する必要がある。附けるとすればその作り方を充分考へねばならぬ。

スキーは勿論携行せず、輪カンヂキを用ひた。しかもそれは最後の冷澤の下りに用ひられたに止る。

3 月 26 日。23 日から崩れ出した天気はなかなか回復しさうにない。どす黒い雲が後立山の連峯をおほひつくして僕等の山は見えない。26 日の夕方から雨さへ降り出した。その晴れ間をやつと利してとにかくまとめ上げたルックとスキーを肩に四ツ谷の白馬館を出て細野の丸山静雄の所まで出かける。此の日天候が悪くて猿倉から歸つて來た丸山が快く僕等を招じ入れた。

3 月 27 日。天候はまだ回復しない中繼小屋の使用が依然として今年も不可能だと云ふので出かけるわけにも行かない。細野のカヤ場でスキー練習をやる。

3 月 28 日。9 時すぎになつて空は一面の青空になつた。ソレツと云ふので出かけたがもう出かける頃には南の方の山からだんだん雲の中へ這入つて行つた。スキーは丸山の家に残して出發。カヤ場から北股を登つて右手の尾根に取つた頃西南から吹きつける風に雪さへまじつて來た。仕方がないので引返す。

3 月 29 日。昨日の夕方から降り出した雪が薄化粧をしたが天気は不思議に上々。

細野(8.07)－中繼小屋(1.00～1.55)－唐松小屋(3.37)

幸に尾根通りは風もなく天気は良すぎる位だつた。中繼小屋は勿論雪にうづまつて使用は不可能。國境の尾根へ出て小屋の入口の雪をかき初めると、西風が猛烈に吹きつけて來た。30 分もかゝつてやつて小屋へ這入る。

3 月 30 日。昨夜からの風が猛烈に小屋のまはりで唸つてゐる。4.00 起床。總ての準備をすまして 6 時に小屋から這ひ出して見たが猛烈な風と黒くよどんだ劔とが僕等の出發を止めさせた。風は夕方になつてやつと止んだ。此の二夜の小屋滞在中僕等は出来るだけ炭火を小さくした。従つて夜など相當に寒かつたが幸ひに一酸化炭素中毒から脱れ得た。

3月31日。

出発(7.10)－大黒の南のコル(8.50)－遠見尾根との Junction Peak(9.45)－五龍本峯(11.15～12.00)
－露營地(4.15)

風はやゝ南寄りの東微風。空は快晴と云ふのではなく天気はさまで良いとは思はれなかつたがとにかく出発する事にする。すぐアンザイレン。オーダー工樂、長谷川、伊藤。牛首から大黒へかけてのアンサウンドロツクは凍りついてゐて比較的安定である。雪庇の上は所々ボソボソと落ち込むが、雪は硬くフロストしてゐるので基部を歩いて氣持のよいクランポンの軋む音を聞いて居ればよい。大體夏道をつたひながら遠見尾根のジャンクションへ出る。第一峯は夏道通り越中側に行く。此の時五龍の頂上に二個人影を見た。呼んだが答はなかつた。だが此の時間に頂上に立つたとなると、しかも北から行つた形跡がないから、僕等は勿論その人達が僕等の行かうとするコースを逆に來た人達だと思はなければならなかつた。残念だつた。第二峯はリッジを傳ひ頂上へ出る。頂上の名刺でさきの2人の人達が立教の堀田、小原兩君である事を知つた。そしてそのルートは黒部の東谷よりのものであつた。萬才を叫ぶ。

口がかわいてサンドウキッチが喉を通らぬ。紅茶でやつと流し込む。天候は依然良くない。

頂上からの下りはあまり良くない。夏道は殆んど判らぬ。雪と岩とのコンビネーション。それに雪が南向きのためにゆるんでゐて始末がわるい。4.15、キレットの北のピークの手前のコルに着く。キレットの下まで降りてビバックする豫定だつたが僕は細野で引いた軽い風邪のために相當に體が弱つて來たので、それに偃松のある所がよからうとすぐそこを露營地とした。尾根の上で適當な snow hole を掘る所もなく雪庇の上は少々氣味悪いのでそのガラガラ石をならして偃松を敷いて腰を降す。風がないから大丈夫だらうと一寸も風に對して防禦されて居ないガラガラ石の上で Zeltsack を引かぶつたが、これが今度の行中の最も大きな失策にならうとは思付かなかつた。

しばらくうつらうつらと眠つたのだらう。烈風がテントを吹きまくり風は同時に雪を伴つて僕等を覺した。両手でしつかりテントをつかんだまゝ夜を明かす。

4月1日。あたりは新雪で化粧をしてゐる。そして風はやゝ止んだが朝食をすませるや否や又猛烈となつた。テントはまるで風船の様にふくれ上つて今にも吹き飛ばされさうになる。それをしつかりつかんでゐるつもりが何持の間にかすつぽりとはづれる。此の嵐が午後3時までつゞいた時、もう何時テントが破れるかもしれないと思つた。不吉な豫感がする。靴を脱いでみた長谷川がやつと靴をはき終つたと思ふと Zelt は窓の所から異様な音を立てゝ引きさかれた。あやふく逃がさうとした破れた Zelt を掴んで3人は小さく寄り集つた。だが嵐は何時まで續くだらう。このまゝで居たら嵐は恐らく此の破れたテントを更に小さく引き千切つて了ふだらう、そして最後の時が來るだらう。伊藤が思ひ切つてテントを出た。猛烈な風と雪が顔をなぐりつける。雪庇の上に小さな snow hole が出來た。そこらに散亂したものをかき集めて雪穴の中へころげ込んだ。瞬間的な此の行動を終へてやつと口のやける様なあついコゝアにありついた時にはあたりは暗かつた。そして僕等の第二夜は始まつた。此の夜は昨夜よりも冷かつた。でも風あたりの少い事がどれ位安易な氣分を與へた事か。

4月2日。午前2時頃から嵐は止んだ。それは26時間の嵐だつた。名残の風がテントのすき間からもれる。ふるへながらの一夜は明けた。朝焼けだつた氣温は相當に低く、外へ出るとみんなこほりついてしまふ。だが僕等は前進しなければならない。凍てついたクランポンを凍てついた紐でやつと足にしばりつけて、よろける足をふみしめて出發する。

出発(6.50)－キレット下(8.20)－再びキレット下(11.40～12.10)－露營地(1.30)

劔に雲がかゝつてゐる。鹿島の方は暗くて見えない。新雪をかぶつて夏道らしいものもわからぬ。時々迷はされながら垂直に近い岩壁の立つてゐる所から越中側へ急な雪溪を下る。新雪が深くて歩

き難い。200～300 米も下つてから細い急な雪溪を登る。右手の尾根へ取付かうとするが駄目。とうとうリッジまで出たが恐らくそこが本當のキレットだつたのだらう。凍てついた岩は雪とぴつたりとひつついてスキー靴にクランポンをはいた僕等の足を受けつけない。思ひ切つて同じ所を下る。此處で僕等は 2 時間と云ふ大きいロスを負はなければならなかつた。風は次第に強くなるしあたりはいよいよ暗い。劔は全く雲でかくれた。更に南側の細い雪溪を登る。後から吹きつける風は段々強くなり天候は再び全く悪化してしまつた。やつとリッジまで出た時風はもう僕達の前進をはぐんだ。一步一步ピッケルにすがりながらやつと進む。遂に僕等は再び此の尾根の上にビバックを餘儀なくされた。キレットの下まで下つて少しでも風あたりをさげ様とする氣持は充分あつたけれど猛烈な風に向つては下る事さへ出来ない。それに急な雪溪の下りは更に大きいアルバイトを僕達に要求するにちがひない。雪庇に掘つた小さな snow hole へ僕等はクランポンをはいたままの着のみ着のまゝですはり込んだ。長谷川と僕はザイルを解いて岩角にまきつけた。そしてそのザイルにまたがつて腰を下した。伊藤はザイルにつながつたまゝだつた。食料は豫定の日數を既に過ぎて相當に窮してゐる。今夜は飲まず食はずだ。破れ切つたテントをやつと頭の上にかぶつてみんな無言になつた。風が新雪を吹き上げて来てテントの間へたまる。體がだんだんちぢめられてくる。何とかしようとして飛び出したけれど、結局吹き込む雪を多くするだけで何の益もなかつた。だがこうしてゐる間も僕等の最も大きな不安は明日天氣が良くなるかどうかと云ふ問題だつた。明日もこれだつたら、そして此の嵐がまた 26 時間のものだつたら、僕は今更の様に逃げ場所を考へなければならなかつた。唯一の所は、それは東谷にある立教のテントだ。だがそれとても一體まだあるだらうか。そして僕等を收容してくれるだらうか。否一體そこまでも逃げられるだらうか。吹き込んで来る雪にはもうあせつても仕方がないとあきらめた。3 人がだまつてしかも何ともしれない氣持を抱きながらめいめい勝手に何かを考へつゞけてみた。そして時々凍え切つた手と足とに氣がついてしばらくごそごそと體をうごかすだけだつた。氣温は猛烈に降下したらしい。嵐は依然として續きながらさすがに月のある夜だ、テントは明るかつた。“僕等はまだ生きてゐる”僕は獨りさう考へつゞけてみた。

4 月 3 日。午前零時頃から嵐はやゝおさまつた。そして月は皎々として輝き出した。雪を掘り出すためにテントをぬけ出すと、そこにはもう鹿島槍が手にとる様にある。月光にてらし出された雪の山々は僕等を威壓する様に輝きつゞけてゐる。だが少しでも外へ出ようものなら、着てゐるものはみんな凍りついてカチカチになつてしまふ。昨日の嵐に毛皮の手袋を何處かへ無くした僕は—しかも手袋と云ふ手袋はみんなカチカチに凍りついてしまつたので—靴下を手にはめなければならなかつた。右手の薬指と小指の先が凍傷でやられたのかしびれてしまつた。うす明るい朝の日がさして来たがテントは少しもあたたまらない。(—15°C—5.30A.M.) やつとコツヘルを取出して火をつける。砂糖湯でパンを流し込んで腹をふくらせる。フラフラする足をやつとピッケルでさゝへて出發。

出發(7.10)—休憩(7.50～8.10)—北峯と南峯とのコル(8.50)—南峯頂上(10.10～10.35)—晝食(10.50～12.15)—西澤出合(3.10)—鹿島村(6.45～9.30)—大町對山館(12.00)

全く失はれてしまつたバランスをピッケルでやつと支へて一步一步と前進する。偃松に凍りついた新雪の樹氷がクランポンでザクザクと破れる。越中側をトラバースして北峯の南へ出る。南峯の最後の取付きは相當急でべつたりと雪をかぶつてゐる。30 米の step cut がなされた。(この日のオーダーは伊藤、長谷川、工樂)

頂上の喜び。そしてもう僕等の前途には祖父へのなだらかなリッジがあるだけだ。だが僕等 3 人にはピークを得た喜びよりも無事に此の山旅も終るであらうとの喜びの方が大きかつた。積雪期に於ける新しいルートを今僕等の手によつて開拓し得た喜びよりも、さしにも暴威を振つた自然の力

の前に僕等はたゞ自分等3人の力を見た。そして3人共頂上の喜びを叫ぶ事さへも忘れ切つて居た。

僕等は鎌尾根を下る事にしてすぐその junction まで下つた。ビスケットとミルク。ギラギラと輝く春の陽の光の下で今こそ僕等は高らかに“エーホー”を叫びつづけた。

指先の感覚がないので見合せたら3人共二三本先が眞白だつた。だが僕等がすぐその場で云ひ合つた事は“あの嵐にたつたこれだけですんだのか”と云ふ意味の事だつた。

國境から鎌尾根への下り口は雪庇はなかつたが2米位の垂直な雪の壁になつてゐたから登りには少しは困難かもしれない。尾根の上から見たカクネ里本流には雪崩の走つた後を見なかつたが(註3)冷の澤には澤全體にすばらしいデブリーを見た。それはづつと以前に出た大きな二次の跡だつた。4月1日の新雪によつて生じたと思はれる小さな雪崩跡は認められたが、それが2日の朝の日射による小さい scale の二次であるかどうかはわからぬ。此の大きな雪崩跡は西澤の出合まで走つて止つて居た。果して奥の何れの谷から出たものが最も大きくて西澤まで走つたものかは一寸定め難かつた様に思ふ。

全く暗くなつて鹿島の狩野久太郎方へ着いた。そして突然の來訪と僕等の山での行動が狩野の人達を驚かせた。久しぶりの米飯の御馳走になつておぼろにかすんだ月の下を、クランポンを入れて急に重くなつたルックを肩に小熊ツ原を経て大町へ出た。

以上僕は今回の登山の紀行の概要を書き記した。そして僕が此の登山を終へてから今までそして今もなほ僕の頭から去らない一つの事は、此の登山がたとへ厳格な意味での積雪期に於ける此のコースの最初のものであつたにしても、決してそれが僕等に何等の重要性を與へるものではなく、僕等が Zudarsky Zeltsack 一枚で此の尾根に於てなした3夜のビバックが3人に取つてより重大な問題であつたと云ふ事である。

そしてそれは此のコースが今日まで残されてあつた最初に述べた理由をより強く裏書するものでしかない。と同時に天候さへ良ければ何の困難もなしに甚だ容易に通過し得るコースである事を示して居る。しかも僕等の得たビバックに対する經驗は恐らく今後の僕等の積雪期登山に於て取るべき方法と方向とを指示する多くをもつて居る事を信ずる。そしてそれが勿論僕等3人にのみ止るものでない事を信じてゐる。(1931.5.)

註1. 唐松小屋より此の尾根を縦走するコースはづつと以前松本市の山口勝氏、又1930年に穂刈三壽雄氏のパーティによつて夫々積雪期に通過されたものである由。兩氏に照會の後確め得た。不幸詳細な回答が共に得られなかつたのは遺憾であるが、4月乃至5月の雪の少なくなつた時期のものであるらしく嚴密な積雪期登山に屬するかどうかはわからぬ。なほ唐松小屋より五龍岳の日歸り登攀は尾根筋コースにより本年(1931)年までにすでに多數の記録が残されてゐる。

又唐松小屋より五龍岳に登り遠見天狗尾根を鹿島村に下るコースは今年(1931)慶應山岳部のメンバー及び日本山岳會の冠松次郎氏のパーティにより夫々別々に決行された由を聞いた。

註2. 僕等は適當な食料統制によつて大してその不足を感じなかつたけれど細野重雄氏によれば(三高山岳部報告第9號の1. 冬山の食料について)此の食料は1人1日平均2886.6カロリーとなる様であつて、明かに統計にあらはれた必要カロリー以下である事を示してゐる。之は僕等がアブノルマルなビバックのコンディションによつて食慾減退を來して居た事によるものであらう。

註3. 4月中旬冠松次郎氏が遠見天狗尾根より撮影されたるカクネ里の寫眞によりカクネ里の三方の岸壁には無数の雪崩が崩落してゐるのを見る事が出來た。しかしその何れもが谷をうづめるに足る様な大きいものでなく崩落地點で止る様なものであるため上から見た時にカクネ里本流に雪崩が出てゐない様に見えた事がわかつた。

要 約

昭和6年(1931)10月11日～18日の記録。カクネ里から鹿島槍ヶ岳北壁主稜登攀。
メンバーは、伊藤愿、藤田善衛、遠山富太郎、工樂英司、扇田彦一、上遠野、大木謙一、
平吉功。

行程は、10月11日 大町ー鹿島村ーアラ沢出合上手キャンプ。

12日 キャンプ地ー大沢出合キャンプ。

13日 滞在。

14日 キャンプ地ー大沢出合ーカクネ里側の沢ビヴァーク。

15日 ビヴァーク地ーカクネ里キャンプ。

16日 キャンプ地ー雪溪ーテラスー主稜ーハイマツ尾根でビヴァーク。

17日 ビヴァーク地ー北槍頂上ー国境尾根ーキャンプ。

18日 キャンプー大沢出合上流ー営林署小舎ーヤナバ。

掩護隊・メンバーは、遠山、扇田。

行程は、10月16日 キャンプー雪溪下端ーギャリーー崩れのある所ー雪溪ーキャンプ。

※初めての北壁バットレス登攀の記録である。

1931.10.11ー18の紀行

パーティー 伊藤愿(リーダー)、藤田善衛、遠山富太郎、工樂英司、扇田彦一、上遠野、大木謙一、
平吉功、人夫 近藤一雄、太田辰治。

1931年の秋山のプランとして吾々はカクネ里を選んだ。其の目的は鹿島北槍を中心として此の谷を繞つて展開されたバットレスの登攀に在ることは言ふ迄もない。幾多の先輩諸氏に依つて殆んど踏破し盡された觀ある今日の日本アルプスに於て、それは最後に取残された最も興味あるものゝ一つとして山思ふ者の心に大きな魅力を感じさせるには十分な存在で有つた。

先づ最初にカクネ里の地誌的説明を簡単に前置きたい。鹿島北槍がその東北に東尾根と五龍への國境尾根とを界して、急傾斜をなして落込んだ谷がカクネ里である。陸測五萬の集成圖『白馬岳及立山近傍』にはチャンと名稱が入れられてゐる。

其れの持つ特徴の最も顯著なるものは、北槍を中心に屏風を建てた様に展開された素晴らしいバットレスと、大川本流出合附近迄現はれてゐる典型的なU字谷で有らう。大川のV字谷を遡つて來た者が一度カクネ里に入るに及んで、底の平かなU字谷への鮮かな變化に驚くに違ひない。此U字谷の成因に關しては近來我國の氷河問題も再燃して來た事で有り専門家の研究に委ねるが、水流の兩側堆積した岩石が何れも角の削磨されて圓味を帯びた大小雑多のものから成れるを觀て、我々にも他の溪谷とは全く違つたもので有る事だけは判然した。陸測五萬を觀て此のU字谷を想像する事は一寸むづかしからう。又此谷の底に立つてバットレスを見上げた實感は、五龍の方から眺めて想像してゐたそれとは全く違つた遙かに潤から豪壯なもので有ると共に、恰も氷河の堆石の様に眞中を水流に打抜かれて長く續いた岩石の堆石から來る感じは一種言ひ知れない陰慘な蕭條たるもので有つた。此谷の全景を見る事が出来るのは遠見尾根から丈けで有らう。冠氏著『日本アルプス大觀』に収められた美事な寫眞は此U字谷を現はして餘す所が無い。

バットレスに就て今少し記し度い。その高距は雪溪が終つた線から頂上迄岩壁の部分丈で800米

は充分有る。其の地形は極めて複雑で有り、幾本もの岩稜とガリーから成つてゐるが、日射しを横に受けて縦縞の様に幾本もの襞を浮び上らせた所は正に文字通りの **Buttress** である。登攀に當つて最大の難物は約 2100 米—2300 米の間に横に帯の様に引かれたヴァーティカルの部分で有らう。部分的には完全なオーヴァーハングを呈する所がある。此の地形は恐らく此の谷を繞る斜面の殆んど全部に及んでゐると言つて好い。私達が下つたドーム(東尾根)から北へ派出した尾根のカクネ里側の澤にも判然と出てゐた。

尚此バツトレスの地質に就て觀察した大木君に依ると、其の下半部は花崗岩から成る或る高度から上尾根筋全部は輝石安山岩から成つてゐる。此の兩者の間に蛇紋岩の細い層が露出してゐる、が私達はバツトレス正面の登攀中之等の遷移に就て判然とした觀察を爲し得なかつた。

全體的に見て岩質は堅硬であるが削磨されて滑らかな岩肌を呈し、穂高や劔等の尾根筋で見るとザラザラしたホールドの好い岩肌とは全然感じが異なる、澤歩きで瀧へツリの時の岩の感じと思へば好い。斯んな岩には鋏靴よりもむしろワラヂかさもなくば **Kletterschule** が適當だらうが、私達は雪溪その他の理由からトリコニーで終始した。

次に簡単な **Historical Survey** を試みよう。古くは 1919 年 8 月日本山岳會員沼井鐵太郎氏が鹿島川の水源を極めるため、大川を遡行してカクネ里と大川本流との出合に露營して白岳に出られたものがある。氏の文中(山岳第 15 年 1 號)にはカクネ里を左俣として居られるが之に關して詳しい記述は無い様である。尚氏の文中慶應の豊邊氏が五龍から天候不良の爲め此出合へ下られた事が記されているが、そのルートが明かでない。其の後文献に表はれた所では此谷に入った人の事を聞かない。

最近になつて 1930 年の夏立教、神戸商大、1931 年夏の R.C.C.等の人達が足を入れてゐるが、實際に登攀を試みられたものは未だ聞いてゐない。我が京大山岳部の先輩達に依つて既に之迄幾回かの偵察が試みられてゐる。1930 年 8 月には先輩西堀、今西兩氏及び部員賀屋隆三の三名に依つてカクネ里入りが決行された。8 月 30 日その登攀が試みられ約 2300 米の線に達したが、天候悪化のため不幸途中から引返すの餘儀なきに到つた(寫眞ルート参照)

次いで私達今回の登攀であるが、私達が此行を爲すに當つては西堀今西兩先輩の有益なる教示に負ふ所大なるを特記しなければならない。

以下紀行を述べる。

1931 年 10 月 10 日 京都發

11 日 晴 大町—鹿島村—アラ澤出合上手でキャンプ

大町から鹿島村迄自動車を利用する、狩野氏宅で食糧を仕入れる。營林署小舎を経て大川林道を進む、所が此の大川林道に就て鹿島の里で尋ねた所に依ると、アラ澤出合の少し上手迄しか開いてないとの事、之をスツカリ信じて了つたのが間違ひの基で道が高廻りしているのをテツキリ天狗道だと思ひ込み大川本流を遡行する事暫くでキャンプ。

12 日 晴 キャンプ地—大澤出合キャンプ

前日の續きで大川遡行、ルートを見附ける時間を少しでもセイヴするため先發隊として伊藤、工樂、扇田の三名身輕にして出發、本隊は先發隊の所々に残して行くラベルに依つて容易に進める。間もなく左岸に入つてゐる相當大きな澤を大澤と考へ右岸の尾根を登りかけたが、展望が開けると共にその誤れるを見出し引返して大川遡行、渡渉に相當苦心した揚句左岸の林道を見出した時には、一同啞然として言ふ所を知らず、大澤出合下流左岸のテラスにキャンプ。伊藤リーダーは上流コイザルドホシ附近迄偵察。

13 日 雨 滞在

夜中から降り出した雨が止まない、ポカンとしてゐるのも詰らないので大木君の氷河に關する講義を聴く、對岸絶壁には瀧が掛つた、大川の増水物凄し、此日工樂餘儀なき用件の爲め唯一人雨中を下山する。

14日 晴 東尾根ドームより派出せる尾根を経てカクネ里側の澤にビバーク

一昨日の偵察の結果と降雨に依る増水の爲め大川本流遡行を断念して、大澤出合上手から東尾根續きの尾根を登りカクネ里に下ることにする。9.15 キャンプ發、尾根は1600米頃から猛烈なブツシュ逆茂木になる。トツプを交代して山刀で切開いて行く。美事(?)な尾根道が出来て行く、誰かゞ京大ルートだと叫ぶ、7時間にわたる藪との苦闘の後、私達はカクネ里の水流を眞下に見下す地點に達した、高さは1900米附近と思はれる。直ちに下りにかゝつた、が一時間も経たない中に邊りは夜の氣配に包まれた、適当なテラスを見出してビバークする。

15日 晴 Biwakplatz—カクネ里キャンプ(1800米)

食パン半斤と砂糖水が一人分の朝食である。リーダーは之でカロリーは充分なるを説いた。下りにかゝる、直下はヴァーティカルに落ちた岩壁だ、澤は悪い見込みをつけて、左に草附きの急斜面をトラヴァースして、ブツシュの尾根を下る、が此尾根は途中で切れて了つた。更にトラヴァースして尾根に取附くのは止めて断然澤を下ることにする。二つ許り瀧をヘツルとその下に又大きな瀧が待っている。よし來たと右に巻いてペロツとした岩場の上で一先づ休んで腹を作る。此岩場は樂なルートを見附けて簡単に下つた。後に樂にカクネ里に出た。思つたより潤やかな谷、天氣晴朗、少し遡つて1700米の邊で左岸にキャンプする。正午を少し過ぎた。一通り整理が済むと偵察に出掛ける、明日の登攀に取るべきルートを求めて。雪溪は案外雪が軟い。之ではピツケルを揮ふべくもない。雪溪の移動を調べるため石を横に並べる。まるで子供の遊び見たいだ。キャンプに歸つて焚火を圍み乍らルートに就て語つた。結局本隊は北槍頂上左寄りから眞直ぐに下つてゐる主稜をアタックすることになる。掩護隊は1930年のルートを取り本隊を掩護し乍ら東尾根ルート開拓に決定、初めの豫定は種々のバリエーションを取つてやることになつてゐたが、入山に意外の日數を費したので断然頂上への Direct route を選んだ。

16日 晴

快晴に恵まれて勇躍して出發、雪溪下端で八峰キレット、祖父を経て歸る上遠野、大木、太田と別れる途中迄行くと云ふ近藤は遂に掩護隊のメンバーに加はつた。先づ遠山のノートを借りて掩護隊の行動を述べよう。

掩護隊

遠山、扇田、近藤(人夫)

7.10 camp(1700m)發 7.30 雪溪下端(1820m)。8.30~8.40 岩場をこえし所、ギャリーの下端(2000m)。10.00~10.30 ギャリーを登りきり ridge に出る(2220m)。11.25~12.45 崩れのある所、引き返す。(2330m)。2.55 雪溪に出る。(2100m)。4.40 camp 着

雪溪の途中で本隊と分れ、左手の中程に見える大残雪(最高のものと思はれる著しいもの)の右側に下りてゐる尾根の端にとりつく。anseilen, オーダー前述。堅硬な花崗岩。上部はブツシュ、まいて、一つ上のギャリーの下に出る。このギャリーも下は堅い花崗岩露出せるも上部は薄く土を被り steep grass をなし、支へになるもの一つなく、稍不快であつた。登りきれば最初の尾根、辛じて歩き得る程度の幅。且この部分は平なれど少しく下にて急落す。小灌木散生す。この上部又急にして、ridge の正體なくなる。主に steep grass 稍左目にかんば、はんのき等の枝を利用して登る。

大残雪と略同高度と思はれる附近、一寸した崩れのある部分(camp 上方よりも指示し得)にて、晝食。本隊を見るに、尚遙かに下にて、本日中に東尾根までの距離の2/3を行き得るや疑しき程なり。大聲を發し、前途尚長きを告ぐ。彼等頗る元氣にて一路邁進せんとするものゝ如し。折柄怪しげなる cirrus 及び Nimbus めきたる雲多く現れたる故、我等は東尾根ルート開拓の任務を放棄し下る。しばらく下り、登りの尾根の一つ上方の尾根を下る。だけかんばの大木疎生せる steep grass なり。雪溪に接する部分のみ、堅硬なる花崗岩露出し、快適なり。雪溪は既に縁の岩より浮いて、クレヴァスを作る。のぞきこみし範圍にては、すべて、堅硬成る岩床よりなる。ザイルをとき、雪溪に這ひ上る。(下りのオーダーは登りの逆なり)

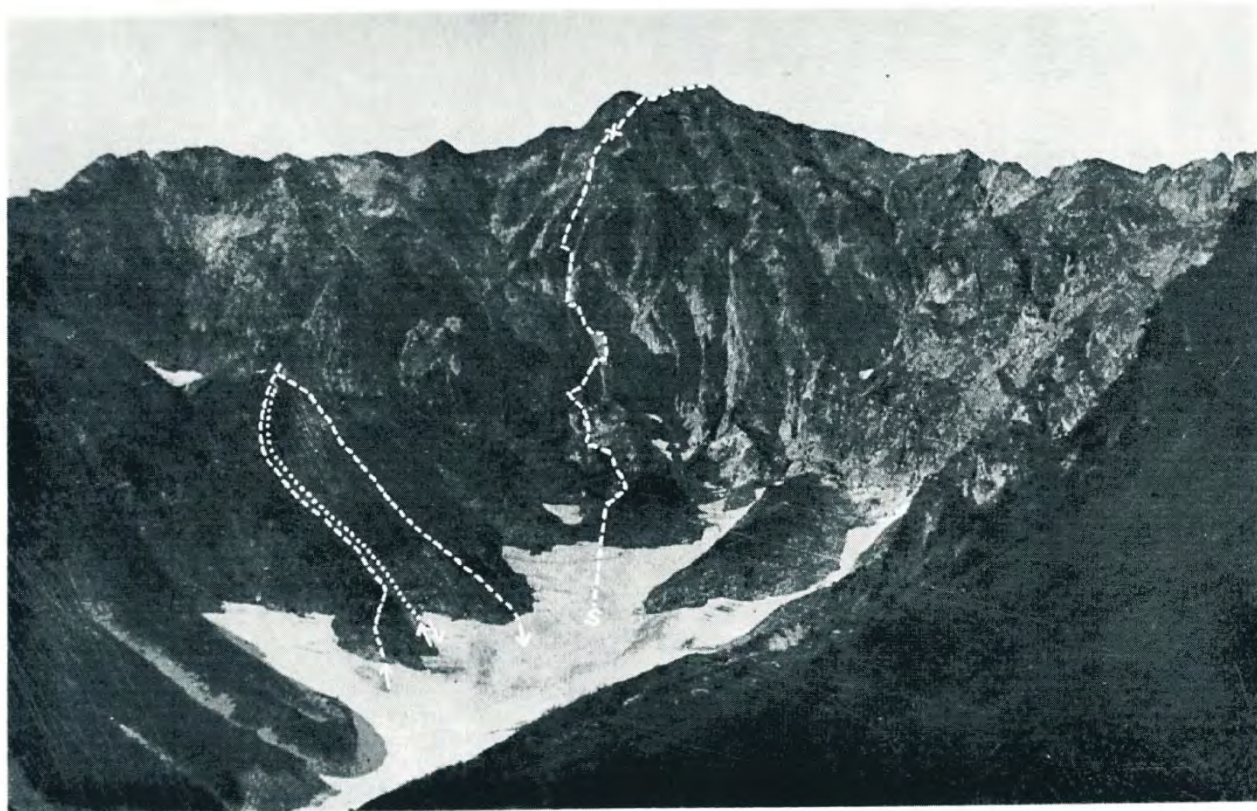
空模様愈悪く、時々頂上隠るゝに至る。幸にして 6 時半には雲退きて、本隊と燈火信号をなす。彼等北槍の次の peak の右下、近き所にあるを知り安心す。豫期の如く、彼等五龍とのコルに向ふを知る。天候の今しばしもたん事を祈りつゝ寝る。

本 隊

伊藤、藤田、平吉

7.10 キャンプ發—7.30 雪溪下端—8.30 アイゼンを着けてアンザイレン—9.00~9.25 雪溪上端、アイゼンを脱いで出發—11.45~12.30 第1のテラス、晝食—1.05~1.10 左寄りの第2のテラス—1.45 オヴァーハングの下—2.40 右にトラヴァースして主稜へ取つく—3.10~3.20 主稜のレツヂ—3.45 第1のハヒマツ終り—4.30 第2のハヒマツ尾根取りつき—6.30 Biwak(ca.2700 米)

雪溪を登ること一時間で傾斜が増して來たのでアイゼンを付ける。クレヴァスがあるのでアンザイレンする。順序は藤田、平吉、伊藤、左寄りのクレヴァスに入つて雪層を調べる。不透明な部分と透明な部分とが互ひに重なつてゐる。クレヴァスが幾本も入つてゐるが巧く超えて目的の主稜の向つて左側の雪溪の上端でクレヴァスに入りアイゼンを脱し、雪溪の下面と河床の岩盤との間には大きなクレヴァスが開いて底氣味の悪い暗闇をその奥に湛えてゐる。サア之から愈々岩との取組み合ひだ、右寄りに主稜へ取附く、岩は硬い、浅いガリーを左に見て少し登ると逆層で岩質が脆くなる。傾斜は強い、此の斜面を 40 米許り登つて左にトラヴァースする、ホールドが悪いのでミドルはトップをジツヘルするため少し高みへ登つたが適當な足場が見出せない、先に少しトラヴァースして適當な場所に達してトップを待つ。その斜面を横切ると左側の深く切り込まれたガリーに出た。再び岩はサウンドになりホールドも好くなつたが、一面に薄氷が張りつめてゐるためトリコニーが効かない。一々ピツケルで足場を切つてジツヘルする。此のガリーを 70 米も登るとその上が一寸廣いテラスになつてゐる。ガラガラ石で一杯だ。直ぐ上は稍アンサウンドのフェースが續



鹿島槍カクネ里

平吉 功

----- 1931 年ノルート
..... 1932 年ノルート

く。水がシヨボシヨボ落ちてゐる。落石を避け携帯テントを被つて晝食を取る。雪溪上端から此のテラス迄 2 時間 20 分を費してゐる。此處でトツプを交代して再び行動を起す。順序は平吉、伊藤、藤田。此のテラスから左に小さい尾根を経て、又一つ大きなガリーが入つてゐる。此のガリーの向側は赤味を帯びた割られた様な岩壁が高く聳え凄愴な感じだ。此邊の地形は複雑を極めてゐる。少し左寄りから取つて右寄りに進む。フェースの様な部分を左寄りに登つて第 2 のテラスに達した。之から上が愈々悪場になる。下でにらんで置いた眞直ぐに立つた尾根がすぐ上に聳え立つ。ブッシュが一杯附いてゐるがヴァーティカルで一寸取りつけそうもない。その左上にはオヴァーハングの紫黒色を呈した岸壁がのしかゝつてゐる。右は之もヴァーティカルなガリーを距て、主稜がスツキリと際立つた稜線を見せてゐる。唯一のルートは眞上の尾根の下を左にトラヴァースして左の大きなガリーに入るものである。例の尾根のフェース寄りにガリーを登り切ると一つのテラスに達した。第 3 のテラスと言つて置く、眞上には例の紫黒色のオヴァーハングをなせる逆層の壁が突立つてゐる。水のある時には瀧になるだらう。今にも落ちて來さうな岩塊が危つかしく覗いてゐる。落着いて居れる所ではない。トツプの登攀中後の二人はルツクを頭から被つて落石の要心だ。右へ今の尾根續きの柵を越すと右側のガリーに出る、見上げると最後の難場がペロツとした岩膚を見せてヴァーティカルだ。その右續きは主稜である。左に眼を轉ずると今登つたガリーを経て柱の様な岩壁がパツンと立つ。物皆威壓的だ、サア愈々ピトンかなと一先づ三人が集つて如何にして突破すべきかを考へる。ペロツとした壁の右下に一寸した柵を見出したので之に向つて右へトラヴァース氣味に取附く、暫くは傾斜はあるがホールドの好い岩場だったが、その上がブツシュになつてゐる。之の約 10 米位のピッチが思つたよりも傾斜が強く且つ下の岩場がアンサウンドで足場が頼りないため登攀は極めて困難であつた。正直の所眞柏の幹のハンドホールドが無かつたら恐らく手も足も出なかつたらう。扱て柵から上であるが、吾々は右に立つてゐる主稜のナイフエツヂに登ることに決した。傾斜はあるがホールドは好い、が最後の悪場丈けに皆極度の緊張を示した。此約 50 米のピッチを登り切ると傾斜は緩かになつて狭い柵になつてゐる。之で難場はピトンなしに無事に切り抜けた。三人の口からは思はずエホゝが高く叫ばれる。掩護隊はもう雪溪に下つてゐる。互いに呼應する更に登攀を續ける。暫くは主稜のハヒマツ漕ぎ、25 分の後此ハヒマツは切れる、この邊から見た右側のガリーを経てたフェースのスケールは斷然大きい。左のガリーを登る。ツルリとした岩であるが、順層でホールドが大きいので愉快地に登る中右側から漸次逆層に變つて來た。左寄りに行く、再び傾斜が増しホールドが悪くなる。思切つて左の尾根に入つてハヒマツを漕ぎ、此のハヒマツを抜けて又一つ左のガリーに移る。再び小さなハヒマツの尾根を横切つてガリーに出た頃には暮れ易い秋の日射しは薄暗くなつて來た。六時だ燈火信號の約束の時間だ。伊藤と藤田はキャンプに燈火信號をやる、平吉はビヴァクの高地を探す。ハヒマツの中に三人がヤツト横に並べる丈けの平地(?)を見出して之を **Biwakplatz** に決める。燈火信號に成功して明日の八峰廻りを告げ、ハヒマツの枯木を集めて危つかしい焚火をする。水筒の紅茶を温めて夕食を濟した。愿は邪魔になるハヒマツの太い幹をナイフで丹念に切り始めた。賀屋の鰹節以上の根氣のよさ、お蔭でハヒマツの大きな薪が得られた。ランタンを熱源にして携帯テントを頭から被つてアンザイレンのまゝハヒマツの幹と上の岩にジツヘルして寝る。時々吹き上げる夜風の寒さに目を覺ます。

17日 雨

**5.50 Biwakplatz ca. 發-6. 20 東尾根ジャンクション-6.30~45 北槍頂上-7.50~8.05 キレット
掘みの最下部-8.55 國境尾根の-10.00 最低地點-12.10 キャンプ着**

待遠しかつた仄かな朝の光に見渡せば空は一面の雲である。氣に掛つてみた昨日のシラスがどうも本物になつたらしい。やがて日の出と共に雲がムラムラと動き出した。陰慘の極み、風が出た、霧が物凄く信州側へ吹飛ばされる、急いで行動を起す。昨日のアンザイレンのまゝ、岩、草付き、ハヒマツのコンビネーションを 30 分で頂上直ぐ左のジャンクションに達した。東尾根は冠氏の通られたらしい切開きがハツキリ残つてゐる。雨中を 10 分で頂上着互ひに喜びの握手を交す、晴間

に南槍が見える。ザイルを解いて下りにかゝる。キレット搦みの道通し行く、國境尾根で大木、上遠野のものらしい、足痕を見出した最低鞍部から陸測五萬に本流との出合から初めて國境尾根の方へ入つてゐる大きな澤を下つてテントの直ぐ下に出た、此の澤のガレは物凄いものだつた。霧でよく見えなかつたが、兩側の岩壁は相當大きなものだつた。雪溪も長さに於てはカクネ里本谷にも匹敵す。

18日 時

7.35 キャンプ發—8.10 瀧—11.40~12.35 尾根の上で昼食(1800 米)—1.20~.35 京大ルートの尾根の切開き—3.10~.40 大澤出合上流—6.20~.55 營林署小舎—9.30 ヤナバ着

本谷との出合迄下つて瀧を搦み右へ尾根を往路に取つたドーム續きへ上る。往路の切開きを下る。案外早く大澤出合についた。營林署小舎から下手で大川を渡渉強行して築場着自動車で大町へ。

附記

記録係であつた藤田が書けないので急に私の所へお鉢が廻つて來た。詳細な記載やスケッチを持つ藤田が筆を取つたら立派なものが出来たと思ふ。疎漏の點はお詫びする。

24. 大塚信久 「巖冬期鹿島北槍の登頂（北俣本谷より）」『山』No.456
昭和58年6月20日刊 日本山岳会発行

要約

昭和7年（1932）12月24日の記録。鹿島槍ヶ岳北槍の登頂。

メンバーは、大塚信久、中隈武夫。

行程は、12月24日 鹿島造林小屋－西俣出合－笹喰－北槍－鹿島造林小屋。

※巖冬期の鹿島北槍に、北俣本谷をダイレクトの登り、吊尾根に達して登頂したのは、この記録が最初である。

鹿島槍ヶ岳の積雪期登頂記録を調べているうち、いままで知られていなかった新しい記録を探り当てた。数年前、大町鹿島の“山のおばばの家”（鹿島山荘）に泊まったとき、まだおばば（狩野きく能さん）は元気で、有名な「登高記念帳」を見せてもらったことがある。おばばが亡くなったのは昭和五十二年一月だから、その一年ほど前の夏のことだが、堀田弥一氏の「昭和五年十二月十八日、快晴を迎ひ鹿島槍ヶ岳に登頂す。昭和五年十二月二十六日」という記帳などいくつかノートに書き留めてきた。その中に「昭和七年十二月二十四日、青山学院山岳部大塚信久、中隈武夫、鹿島造林小屋を出発、笹喰より左俣を登り、ゴルジュ状の上にスキー・デポす。斜面急にして非常に悪し（北槍と南槍の間のゴルジュを登り北槍に登頂）」とメモしてある。カッコ内はもっと詳しく記されていたのを要点だけ書いたものだが、積雪期の鹿島槍ヶ岳の登頂記録を集めてみると、巖冬期の鹿島北槍に、北俣本谷をダイレクトに登り、吊尾根に達し登頂したのは青山学院の記録が最初のものであった。

積雪期の鹿島槍登頂の年譜は次のようになる。（不登の記録は除いた）

- ① 大正十五年三月三十一日、一高旅行部浜田和雄、石原巖、鹿島村から爺岳を経て積雪期初登（石原氏は『一高旅行部五十年』の「雪の鹿島鹿島槍ヶ岳」に「ようやく鹿島槍ヶ岳北峰到着、午後二時二十分、これまでが精一杯であった」と書いているが、北峰とあるのは南峰である）
- ② 昭和五年三月二十二日、立大逸見真雄、小原勝郎、案内桜井一雄、鹿島村から北俣中岩沢をつめ国境尾根に立ち鹿島南槍積雪期第二登。
- ③ 昭和五年四月三日、神戸商大田中伸三、藤井隆蔵、富川清太郎、鎌尾根から第三登。
- ④ 昭和五年十二月十八日、立大斯波悌一郎、堀田彌一、案内桜井一雄、鹿島造林小屋より鎌尾根を経て巖冬期初登。
- ⑤ 昭和六年一月一日、東京商大磯野計蔵ら、案内山中彦一、爺岳小屋から国境線伝いに巖冬期第二登。
- ⑥ 昭和六年二月十二日、加藤文太郎単独で鹿島村から冷池を経て巖冬期第三登。
- ⑦ 昭和六年三月三十日、立大堀田弥一、小原勝郎、東谷野营地より鹿島槍登頂、越中側からの初登。

以上の記録を総括するといずれも三角点のある南槍の登頂で、昭和六年四月三日、京大伊藤愿、工樂英司、長谷川清三郎の隊は五竜から鹿島槍への積雪期初縦走を記したが、これもキレットの野营地から越中側を巻き、北槍と南槍のコルに出て南槍に立っていて、北槍は踏んでいない。

これまでの記録からいうと、積雪期の北槍に立ったのは昭和八年一月四日、立大斯波悌一郎、湯浅巖が巖冬期の白馬岳、鹿島槍、爺岳初縦走の途中、キレットから稜線沿いに北槍に達し、南槍を通過したのが最初であった。青山学院の記録はこれに先立つ巖冬の北俣本谷からの北槍初登で登山史上からもきわめて重要なものである。このほど鹿島の「登高記念帳」の話から青山学院OB中川武氏を通じ大塚氏が健在であることを知り、同氏にその登山概要をあらためて書いていただいたの

で、ここに発表しておきたい。

『青山学院の鹿島槍の記録』山崎安治

大塚信久「厳冬期鹿島北槍の登頂（北俣本谷より）」

昭和七年十二月二十四日、鹿島造林小屋（○・三〇）—西俣出合—笹喰（六・〇〇）—スキー・デポ（二・〇〇）—北槍（三・〇〇）—造林小屋（八・三〇）

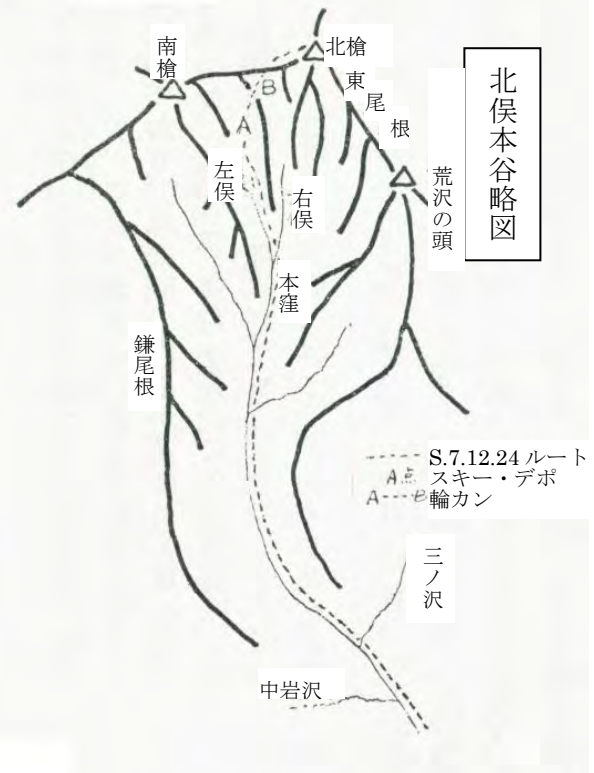
基地を鹿島村より造林小屋へ移す。西俣出合（二俣）への道は夏道を避け沢筋にとる。水量少なく渡渉数回、二俣より笹喰までは夏に見られた数米の岩石も積雪に埋れて起伏もない純白のスキーゲレンデである。高度を増すにつれて笹喰付近は亀裂が生じており粉雪が舞い上がる。この付近は黒部側からの風の影響が大きく、本窪付近に達した頃は吹雪となり、時折り猛烈な奴がやってくる。

これから上部は急斜面で雪も深く、輪カンでは不能。ターンは困難だが狭い谷をジグザグに登る。左右の岩壁から小さな泡雪崩が降り注ぐ。二五〇〇米のゴルジュ状の上部に達したのは二時。本窪より八時間近くを要した。このあたりは両側が壁状になり尾根に取り付けない。ゴルジュを抜けた上部をスキー・デポとしてここから輪カんで登る。胸までもぐる五十度近い斜面である。北槍からの支稜に取り付き、アイゼンにはきかえ、やせた岩場をすぎると吊尾根である。南槍の北面は優秀に雪を付けている。黒部側より吹き上げる激しい風で目が痛い。劔は目前に控えている。太陽がかすかに現われ、遠見尾根を隔てて、真白な八方尾根が望まれる。カクネ里は見えないが、天狗尾根は雪庇を乗せてのしかかっていた。

（付記）登高中、笹喰付近で数カ所板状雪崩の潜在個所を目撃した。この現象はこのあたりの地形がオープンになっており、黒部側の烈風が運びくる風成雪の作用であろう。この日、造林小屋内の午前零時半の温度は摂氏零下二十度。鹿島村でも異常な冷え込みであったという。二五〇〇米のゴルジュ付近では風の影響は少ないが、登高は急斜面と湿潤性の雪、地形の狭小のためスキーのターンは思うにまかせず苦闘した。冬期登山者には、この地域の風成雪雪崩が一大関心事である。特に風成凍雪の滑落と、その流動に伴う乾燥性新雪雪崩は予期し得ない。

北槍より派出する右俣の積雪期の登高は非常に困難であろう。四月末、後立山縦走のとき、この谷を下降するのにザイル使用を余儀なくされた。雪が春の陽光で腐り、苦労の末二俣へ下り鹿島村へ出た。

（後記）この登高記は半世紀前青学 OB レポート II に載せた記録に添記したものである。この登高に同行した後輩の中隈武夫君が凍傷で両指の切断は免れたものの、以後の山行に支障を来たしたのは残念である。



25. 湯浅 巖 「冬の後立山縦走—白馬岳より種池小舎まで」
『立教大學山岳部部報』第五號
昭和八年六月三十日刊 立教大學々友會山岳部發行

要 約

昭和7年(1932)12月21日～1月5日の記録。白馬岳から鹿島槍ヶ岳、種池を縦走。

メンバーは、斯波悌一郎、湯浅巖。

行程は、12月21日 松本—四ツ谷—猿倉小舎。

22日 滞在 白馬尻附近往復。

23日 滞在 葱平下往復。

24日 滞在 大雪溪往復。

25日 滞在。

26日 猿倉小舎—白馬頂上小屋—頂上—白馬頂上小屋。

27日 滞在。

28日 頂上小舎—不歸—唐松小舎。

29日・30日 滞在。

31日 唐松小舎—五龍岳—ビヴァック。

1月 1日 ビヴァック—八峰キレット小舎。

2日・3日 滞在 キレット附近偵察。

4日 キレット小舎—鹿島槍ヶ岳—爺岳南峰頂上ビヴァック。

5日 ビヴァック—種池小舎—扇沢—籠川谷—大町。

一定したそして貧しい防寒具食糧等を持つて天候其他の状態の最悪な巖冬に於いて、山頂から山頂へと前進を続け、其の途上に於て遭遇する色々な困難に打勝ち、同時に其の氷雪上の色々な経験を得たいといふ動機のもとに、此の後立山縦走の計畫が立てられたのである。冬季に於ける後立山連峯の個々の峯頭への登攀も現在では小区域を除いては殆ど登り盡されてゐるが、此の全山稜縦走は未だ誰も手をつけてゐなかつた。此の事についても興味が一層加へられ、私達の此の山稜に對する關心は大きなものであつた。此の縦走をなす場合に針の木峠より始めるのと白馬岳から始めるのと何れをとる可きかは一つの問題である。全山稜を綜合して考へた場合私は後者の場合が順當なものであると思ふ。それは比較的悪い不歸及び八峰キレットを先に通過して鹿島槍ヶ岳から針の木峠に至る容易なコースを後にすることは天候状態の悪い此の連峯に於て一考されるべきものである。尤も不歸附近についてのみ云へば唐松小舎から北進するのが凡ての場合に於て好都合であらう。

準備としては十月に斯波が白馬岳、鹿島槍ヶ岳の縦走をなし、唐松小舎・キレット小舎への食糧運搬の手配を行ひ、十一月私は冷小舎に僅かの食料と羽根のシュラフザツクを置いて來た。

器具としては二人用のツダルススキーツェルトザツク・ザイル二〇米・スコツプー丁・コツフエル二個・テルモス三個ビヴァック用の敷皮として羚羊の毛皮一枚・輪標其他を携帯した。

登 山 概 略

一行 斯波悌一郎 湯浅巖 人夫 横川藤一(白馬頂上小舎迄)
七年十二月廿一日 曇後晴 松本—四谷—猿倉小舎

廿二日 雪 滞在 白馬尻附近迄行く
 廿三日 曇後雪 滞在 葱平下迄行く
 廿四日 曇後雪 滞在 大雪溪迄行く
 廿五日 雪 滞在
 廿六日 晴後曇 猿倉小舎－白馬頂上小舎－頂上往復
 廿七日 吹雪 滞在
 廿八日 晴時々曇 頂上小舎－不歸－唐松小舎
 廿九日 雲 滞在
 卅日 雲 滞在
 卅一日 晴後雪 唐松小舎－五龍岳－ビヴァツク
 八年一月一日 小雪強風 ビヴァツク－八峰キレット小舎
 二日 曇時々雪強風 滞在 キレット附近偵察
 三日 霧強風 滞在
 四日 晴後雪 キレット小舎－鹿島槍岳－爺岳南峰頂上にてビヴァツク
 五日 晴後曇 ビヴァツク－種池小舎－扇澤を下る－籠川谷－大町

猿倉小舎－白馬頂上小舎

廿一日に猿倉小舎に来てから我々は毎日大雪溪附近まで行つたが悪天候のためいつも追ひ返されて、張り切つた登高心を打ち挫かれ遣瀨ない小舎生活を續けて居るうちに廿六日がやつて來た。温度は非常に低い（午前四時零下十二度）。静かな黎明の林間の中を軽い粉雪にラツセルの苦しみも無く、我々は頂上小舎へ向つた。寒氣は厳しく手袋を二重に穿いた指先が凍りそうだ。思はず兩杖をグツト強く握りしめた。今冬は例年に較べて積雪量は少い。常に出てゐる長走澤には雪崩の痕はなかつたが、白馬尻には早や白馬主稜から出たものらしい雪崩の痕があり、其のデブリは馬尻附近を一杯に掩うてゐた。まだ陽のさゝない大雪溪をラツセルの苦痛もなく登る。仰ぐ白馬から小蓮華へかけて山稜の雪は朝の光を受けて薔薇色に染つて居る。三合の雪溪からは例によつて扇狀のデブリが大雪溪の中頃まで押し出てゐた。此の附近から雪も締つてきて大きくヂツクザツクを畫いて登るうちに、葱平下の急斜面に來るとスキーは横滑り出したのでアイゼンに穿き替へてスキーをトラージェンして眞直ぐ登る。今日は雪崩の氣配は全々なかつた。堅く締つた雪の上をアイゼンの爪を氣持よく利かし登ることが出來たので案外早く小舎に着くことが出來た。小憩の後頂上を往復したが霧で何も見えなかつた。

頂上小舎は炭、毛布、米、味噌は大分置いてあり小さなストーブも備へ付けられてあるが、積雪期の小舎としては至つて不完全なもので毎年これを使用する者の苦痛は炭火の炭酸瓦斯にやられる事である。我々も餘程注意して鹽を入れたりしたが矢張激しい頭痛に悩まされ通した。

小舎（午前五・四〇）－白馬尻（六・五〇～七・〇〇）－葱平（九・四〇～一〇・一〇）－頂上小舎（一二・〇〇）

頂上小舎－唐松小舎

二人が小舎を出た時は越中側から身に泌みるような猛列な寒風が吹きまくつてゐた。凍り付いた様な星の光は冷やかに満天にきらめき、青白い曉に浮ぶ劔、立山の峰々は未だ静けさをたもつてゐる。山稜の雪面はアイゼンの爪がさゝらない程堅いクラストを呈してゐる。杓子岳を越中側にまいて鑓岳との鞍部に來た時、先づ眞白な白馬の頂が曙光を受けて眞赤に染まると次第に山稜の朝は静かに明けて行つた。鑓岳からは廣い雪稜の硬雪を踏締めて行けばよいのだ。然し風蔭側には所々新雪の吹溜りがある。天狗の大下りは夏の不愉快なガラガラに反し、一面の雪の斜面で注意して一步一步下り、一つのピークを越えて最低鞍部に來た。パンとコゝアで腹ごしらへをなし愈々アンザイ

レンをして不歸の登りにかゝる。幸にも此の頃は風も止みどんよりとした穏かな日となつた。岩稜を少し登るとオーバハンク気味の岩峯の所に出た。夏路は信州側を絡んでゐる所で、今は不安定な粉雪が積つてゐて始末が悪い。越中側は例の絶壁をなしてゐるので、どうしても此の雪面のトラヴァースをしなければならぬ。私のヂツヘルで斯波は其の雪面に足を踏み入れると、軟い粉雪は崩れ落ちてとても通過が出来ない。次



カクネ里と北槍北壁

小原勝郎

に岩峯の信州側より直登を試みたが逆層の岩で不成功に終つたので、最後に岩壁のトラヴァースを試みる。岩面を一寸登り雪面に出た偃松の頭を唯一の足がかりとして、岩壁にへばりついて苦闘の末、遂に向ふの雪底の上に立つことが出来た。次にリツユクをザイルで渡したが二個一緒につけたので重味が加はり引上げ得ず私もその雪庇上に行き二人で引上げる。此處で私達は二時間餘費した。此の時奥不歸の頂に二個人影を見とめた（唐松小舎から遊びに来られた東京の人と人夫）。頂の直立した岩峰は低い細い偃松の頭だけ雪の上に出てゐるのでそれを手がかりにリツヂ通し登り瘦せた岩稜に出た。それから一寸して奥不歸の針金のある所の登りであるが比較的容易だつた。粉雪の深く積つた所あり、氷乃至堅雪にステツプを切りながらコンティニューアスに登り奥不歸の頂に来てザイルを解いた。悪場を了へた我々には唯硬い雪稜を歩けば良いのだつた。

不歸で緊張した場所は矢張り信州側をトラヴァースする所のみだ。次の直立した岩峯は雪が少なく偃松の頭が手がかりとなつたが雪の多い時はどんなであらうか。唐松小舎から来た場合此等は偃松或は岩角をピレーピンとしてアブザイルンによつて容易に下りられる。我々は冬のどんよりした絶好の登高日和にめぐまれて簡単に通過が出来たが、冬の厳しい寒氣、強風の此の岩と雪の嶮稜の通過は如何ばかり困難を與へるものであらうか。

白馬頂上小舎（午前六・三〇）－白馬岳（八・〇〇）－不歸キレット最低鞍部（一〇・三〇～一一・〇〇）－奥不歸（三・〇〇～三・一〇）－唐松小舎（四・〇〇）

唐松小舎—ビヴァツク—八峰キレット小舎

小舎から大黒岳附近までは新雪が深くて歩き難い。夏路は雪に隠れて全々見當らない。白岳から五龍岳へは尾根通り登つた。時々強く吹く風に此の瘠せた岩稜の登りは可成り緊張した。特に最後の登りに普通は越中側の雪面を登るのであるが、私達は眞直ぐ登つたので悪い登りの様に感ぜられた。岩面の氷結してゐる上に新雪が薄く積つてゐるのでいちいちそれを排除しピツケルを振ひながら登つた。かくて深い新雪の五龍の頂に達した頃は劔の頭に雲がかかつて天候は悪い徴候を示して來た。

五龍の下りは南向きのため雪がゆるんでいて悪い状態であった。先に下つてみた斯波が足を踏み込んだ重量でその下から雪崩始めたので驚いてピツケルを雪中深くさし込んで止つた。此の附近は相当急な傾斜をなし、又風當りが激しい場所なので廿九日、卅日の兩日の降雪は風のため表面が薄いクラストを呈してゐたがアイゼンで踏み込んだので破れてその中の粉雪が流動し、それが表面と共に落下したのである。注意して見ると附近には所々罅が出来ていて少しのシヨックでも受ければすぐ崩落しそうな状態だつた。尾根筋に於ても此の種の雪崩に注意するのを知つた。天候は段々悪化し霧が濃くまいて遂には細かい雪が降り始めた。巨大な雪庇が信州側に乗出してゐる。尾根の雪は軟らかで時には膝を没する有様で登行は極めて捗らない。瘠せた尾根の上下が續く。複雑な地形をなして登路の判断がつかない。常に忠實に尾根通しを傳つて行く。先刻から吹き出した風は刻々其の強さを増し遂に山稜は吹雪と化した。いくら焦つても小舎は無かつた。小舎が吹き飛ばされたのではなからうか、或は雪中深く埋れてゐるのではなからうか、といふ不安の念さへ起り一層焦燥を感じた。冬の短い一日は遂に吹雪と共に暮れ我々の前進は完全に阻止されてしまつた。然し此の時の二人の結ばれた力と自信は強かつた。「ビヴァツクをしよう」「うん」と速座にこう決めた時には二人は既に尾根上の雪庇にスノーホールを掘つてゐた。然し深雪の山稜の一日のアルバイトに疲れ切つた身體には深く穴を掘る元氣は無かつた。相当雪を深く掘り下げる方が寒氣等に對して有利であると教へられてゐたのであるが一尺も掘ると早速ツェルトザツクを引きかぶつた。暖い紅茶は我々の焦燥を癒やし落ち付かした。かくて我々は固パンを嚙りながら吹雪く此の氷雪の山稜に凍る一夜を明かし昭和七年を送り新しい年を迎へたのだつた。

元旦の朝も物凄い吹雪だつた。猛烈な寒氣に凍りついた手袋、帽子をつけ、亂れ勝ちな身體のバランスをピツケルで支へながら、吹き狂ふ雪稜の幾つかの隆起を越して、二人は顔面と手先を凍傷にやられ消耗しきつた體をようやく小舎に辿り着かせたのだつた。

キレット小舎は風當りの強い鞍部に建てられてあるので全く雪中深く埋れてゐるやうなことはない。殆んど露出してゐて積雪期の小舎として換氣は充分に出来て餘り煙たくも無く立派な頑丈な小舎である。然し室内は隙間から吹き込んだ雪にさながら水晶の御殿の様だつた。米、味噌、醤油は小舎常備のものを使用し副食物其他を秋に上げて置いた。それは約十日間の滞在に支へるだけの食糧と、針ノ木峠迄の食糧（オートミール・固パンを主食とし飯は喰はない豫定だつた）であつた。此の小舎の窓越しに眞正面に見える劔、立山の峯々の朝な夕な美しい眺めは小舎の生活を印象づけるものである

卅一日 唐松小舎（午前八・三〇）－五龍岳（一二・五〇）－中食（一・三〇～二・〇〇）－ビヴァツク（六・〇〇）

一日 ピヴァツク（午前七・三〇）－キレット小舎（一〇・〇〇）

キレット小舎—爺岳—扇澤

三日間の小舎の蟄居から解放されて一月四日小舎よりアンザイレンして出掛ける。風は微風で立山方面に悪い雲が掛つてゐた。小舎から最初のピークは急傾斜面にステツプを刻み乍ら登る。針金が所々出てゐる。登り切つて越中側を絡んでゆく所は粉雪が不安定に積つてゐるし一寸悪いが針金を掘り出して樂に通過出来た。それからキレット上迄は直ぐだ。

キレットの兩側の岩壁は殆んど深く垂直をなしてゐて、夏の信州側を絡んで下る所は巨大の雪庇となつて通過は不可能である。眞直ぐアブザイレンによつて下る外は越中側へ急な雪面を下り、再びキレットの基底へ出ることは出来るが、新雪が深くて歩き難く時間的にも大變損であるし、又雪崩の危険も多分にある。始めからキレットを通らずに行くには、小舎の鞍部から直ぐ越中側に下り舊夏路の尾根か其の左の澤を國境尾根に出ればよい。鹿島槍方面から來た場合は皆このルートによらねばならぬ。

さて我々は偃松を掘出してガツチリした其の根にザイルを結び付けて約十五米のアブザイレン

をする。ザイルが固くて滑り悪く、ザイルでリュックを下したりしたので二人が基底に立つには卅分も費した。基底は非常に狭く越中側には急勾配な雪溪が續いて、カクネ里側は雪庇となつてゐる。夏路通り對岸の壁に沿つて少し下ると針金が無くなる。此處から越中側の雪面に出る迄の所が非常に悪かつた。それは不安定な軟い粉雪が積つてゐて今にも崩落しそうで、斯波は左手を雪中深くさし込み、いちいち足で踏固めながら廿米のザイルを一杯に張つてやつと通過が出来た。後は快くクラストした雪面をトラヴァースして山稜に出る。豪壯なる氷雪の鹿島北槍の北壁が目前に聳立してゐる。威嚇的なその障壁。山稜に出れば平凡な登高である。北槍でザイルを解く。カクネ里には雪崩の痕は見當らなかつた。釣尾根は簡単な雪稜である。鹿島南槍の登りは岩間の凍結した雪面にステップを刻んで、我々は遂に頂に立つことが出来た。堅き握手が交された。冷ノ小舎迄はなだらかな雪面を軽い足で馳せ下りればよいのだ。

冷池の側に新設された冷ノ小舎は積雪期の対象とはならない程不完全なものである。もつとも此の小舎は夏期使用の目的に建てられたものであり、積雪期には寝具、燃料の備付が無いので十一月に羽根ブトンと僅かの食糧を置いた。その時積雪量の多い此の附近とて、小舎の埋没するのを恐れて傍の木に目標の旗を結び付けて置いたが屋根が出てゐて容易にその存在がわかつた。小舎内は雪が侵入し殆んど使用出来ない状態である。

我々は冬の八峰キレット附近の様子について全然不明であつた。それ故にキレット小舎から鹿島槍まで相當に時間がかかり疲労も覺えて爺岳を越へて種池小舎迄行けない場合に此の小舎を使用せんと、萬一の事を考慮して前述の如く羽根ブトンと若干の食料を置いたのであるが、豫想に反し短時間で然かも大した困難もなくキレットを通過することが出来たので正午に冷ノ小舎に着けた。そこで屋内に入りキレット小舎を出発してから初めて休息を取り、置いてあつた物を持つて小舎を出た。此の頃は既に爺の頂は雲霧に覆ひかくされてゐて天候は悪い徴候を示してゐたのかゝわらず我々は前進を思ひ止まらなかつた。雪の侵入した小舎とは云へ我々が此處で一夜を明かしたならば或は豫定の通り見事に縦走に成功したかも知れない。然し其の時の二人の心は唯登行慾に燃えてゐたのであつた。種池小舎まで行けば後は一日のアルバイトにて針ノ木峠に達することが出来るといふ逸る心があつたからだ。小舎から冷乗越附近までは膝を没する軟い粉雪に荷も増したことゝて登行は捗らず大いに悩んだ。天候は益々險惡となり越中側よりの寒風は頬を横なぐりに吹きつけ、それはやがて雪を交へて眼界は全く遮られて仕舞つた。やつと爺岳南峰らしき所に立つた。然し私達は此處で思はぬ失敗をなし、後立山縦走の敗北の一原因を作つた。それは濃霧のため方向を過つて南峰より南に派出した尾根を下つてゐる事に氣が付き、再び極度に疲労しきつた體を南峰頂上まで運ばした頃は既に四邊は暗に包まれて方向は全然解らなくなつた。こゝに再びビヴアツクを餘儀なくせられた。然し今度は羽根のシユラフザツクがあるので心強かつた。夜雪は止んで時々吹く風にツェルトザツクはハタハタと音を立てる。

五日の朝がほのぼのと明けて來た。一面の雲海に浮ぶ純白の峰々は赫く旭日を受けて黎明が輝き初める。靜かな氣持のよい朝だ。南峰から種池小舎のある附近までは僅かな距離である。スカヴラの雪稜を馳せ下りて、針葉樹が僅か其の頭を出してゐる中に、屋根の先端をほんの僅か認むるのみで完全に埋没せる種池小舎をやつと發見する事が出来た。早速小舎を掘り始めたが、此の時二人には最早それを續ける元氣は無くなつてゐた。シヤベルを投出して煙草をふかす。すつきりと晴れ渡つた空にその白雪を輝かす針ノ木一帯の峯々に憎惡の念がむらむらと起つて來た。小舎を掘り出すには一日は充分かゝる。たとへ小舎内に入る事が出来ても食糧、薪炭は無い。針ノ木峠までは今の雪質状態では一日では不可能だ。もう一度のビヴアツクによつて針ノ木峠まで至るフアイトは二人には無くなつてゐた。倦怠と疲労が二人を襲つた。ここに私達は種池以南の縦走を放棄して倉皇として輪標を穿いて扇澤に下つた。然し私達には尚困難が附纏つてゐた。小舎の前から直ぐ扇澤に下つたので非常に悪い所が多くあり、雪崩の危険性が多分にあつた。二ヶ所瀧が出てゐて通過するのに骨がおれた。かくて籠川谷出合に出て振り返つて眺めた山稜は雲の動きが烈しく、天候は悪化を

示してゐた。

四日 小舎(午前七・三〇)－キレット上(八・〇〇)キレット基底(八・三〇)－鹿島槍岳(一一・四五)冷小舎(一二・三〇～一・三〇)－爺岳南峰(三・五〇)－再び南峰にてビヴァック(七・〇〇)

五日 ビヴァック(午前七・三〇)－種地小舎(八・〇〇～八・三〇)－扇澤に下る－龍川谷出合(一一・五〇)－畠山小舎(一・一〇～三・〇〇)－大町

以上の如く後立山縦走は冬季特有の悪天候に禍されたのと(快晴は一日も無く、午前中晴であつた日が四日、後は降雪で常に西北の強風が吹いてゐた。天候の變化に對する經驗を積む事と、悪天候に氣を腐らす事なく何時までも天氣と對抗するだけの執着が必要だ)色々の原因で私達の忍耐がゆるんだため全く失敗に了つた。然し此の山稜に二回のビヴァックの尊い經驗を獲得する事が出来たのは大なる収穫であつた。かくの如く峻烈な寒氣に苦い體驗を嘗めたが、パーティに確固たる精神が結び付けられてゐたならば如何なる大きな困難にも打ち勝つ事が出来るといふ事を明確に證明した。

私達はビヴァックに對する準備は殆どなしてゐなかつた。不時の場合を考慮して羚羊の毛皮を持參したことは非常に有効だつた。先づ此の毛皮を敷物として寒冷に對して或る程度まで防ぐことが出来た。毛皮は雪に對して防水物より遙かに有効である。ツェルトザツクは二人用のものであつたが、小さくて足を充分に延ばす事が出来ず夜中に足が痺れて困つた。又何を爲すにも窮窟で身動きさへ出来ない始末であつた。大きいものが必要である。靴下を新しいものと替へてルツクに足を入れたが非常に暖かで効果があつたが、明る朝靴が凍りついて穿くのに大變だ。蠟燭を二人で一夜中持つて暖をとつてゐたが、蠟燭が一寸の間でも消えると直ちに寒冷が身に迫つて來る。我々は極度の疲勞に何もなす元氣がなく、食慾も進まず時折固パンを嚙つてゐたのみで、氣温の測定さへ出来なかつたのは甚だ遺憾だつた。五龍岳下で食事をなす際にツェルトザツクをかぶつたが其の時の外部の温度は零下十度で内部の温度は零下一度であつた。ビヴァックをなしてから相當時間が経過した午後十時頃に測つた時はプラス一度であつた。此の時外部の温度を測る事を忘れたので内部温度との差異を記することの出来ないことは甚だ遺憾である。然し此の時外は強い寒風が吹きまくつてゐて今までの經驗によつて考へると零下十五度位であつたらう。二時三時頃になると我々の呼吸が苦しくなり始め、蠟燭の焰も自然に消え易くなり、燐寸もつきにくくなる。これは炭酸瓦斯がテント内に充満した爲であらう。我々は着のみ着のまゝで一夜を明かしたが第二回の際は羽根のシュラフザツクがあつたので心強く相當に睡眠を撮り得た。この事實からして夏のシュラフザツクと毛皮さへあれば随時にビヴァックをなし得ると思ふ。然し計劃的のビヴァックと不時の場合のそれとは精神的に大なる差異がある。ともあれ寒冷から來る疲勞と睡眠の撮り得ない場合の多いビヴァックは如何に困難であるかといふ事を教へられた。

要 約

昭和8年(1933)3月17日～4月3日の記録。天狗尾根から鹿島槍ヶ岳、北壁試登。

メンバーは、小原勝郎、湯浅巖。

行程は、3月17日 松本—大町—四ツ谷—黒菱小舎。

18日 黒菱小舎—唐松小舎。

19日 唐松岳往復。

20日 唐松小舎—五龍岳—八峰キレット小舎。

21日 滞在。

22日 小舎—キレット—北槍—小舎。

23日・24日 滞在。

25日 小舎—キレット—カクネ里—天狗尾根—北槍—小舎。

26日～29日 滞在。

30日 小舎—北の鞍部—カクネ里—二俣—シラタケ—五龍岳—小舎。

31日 滞在。

4月1日 北槍北壁試登。

2日 小舎—北槍—冷北俣—鹿島村。

3日 鹿島村—大町。

※北槍登攀をねらってカクネ里に下降し、蝶形岩壁の向かって右尾根にアタックしたが、傾斜が強く、おおいかぶさるような氷壁と堅い青氷にはばまれ撃退された。

積雪期の後立山連峯は近年増々多くの登山者に依つて新しいルートを開拓されつゝあるが、未だに唯一つカクネ里のみ餘り人跡を印して居ない。殊に嚴格なる意味の積雪期に於けるカクネ里を中心とせる登攀は自分の知る限りに於ては今までには全然行はれて居なかつた。それ故に此の行に對する豫備智識としては積雪期以外に此の地方に行かれた方々の積雪期に於ける憶測、及び寫眞或ひは鹿島村の人々の話等を綜合した漠然としたものより得る事が出来なかつた。

根據地に就いては始めカクネ里の何處かへキャンプを張つて放射狀に登る豫定であつた。而してカクネ里に入る登路として考へられるのは、一、鹿島村より大川を溯行しカクネ里に入るもの、二、鹿島村より大川を溯行しアラ澤を登り天狗尾根を越してカクネ里に入るもの、三、唐松小舎より白岳を越し遠見尾根よりカクネ里に入るもの、等であるが三、を除いた他の登路は何れも途中一泊を要し又決して樂なルートとは云へず、カクネ里に入つてもベース・キャンプを設ける場所に就ても疑問視され、又長期間雪中キャンプに要する食糧燃料及び防寒具は莫大な量になるので斷念してしまつた。



八峰キレット小舎

小原勝郎

其處で次に自分等は八峰キレット小舎を根據地ときめ四谷、八峰キレット小舎 五龍を越して入る事にした。然しキレット小舎からカクネ里に下るルートは判然と擧げる事が出来ず 小原勝郎 の困難はあるとしても何處からか下れるだらうと云ふ豫測を立てた。今考へて見るとキレット小舎使用はキャンプに依る不自由な生活とエネルギーの消耗等は少しも味はずより樂に愉快的な生活を送る事が出来た。

登山概略

一行 小原勝郎、湯淺巖、人夫 櫻井一雄、キレット小舎マデ他二名

三月十六日 新宿夜行

十七日 晴 松本—大町—四谷—黒菱小舎

十八日 晴後雪 黒菱小舎—唐松小舎

十九日 小雪強風 滞在 唐松岳往復

二十日 曇一時雪強風 唐松小舎—五龍岳—八峰キレット小舎

廿一日 霧強風 滞在

廿二日 晴 小舎—キレット—北槍—小舎

廿三日 霧強風時々雨 滞在

廿四日 霧強風 滞在

廿五日 曇後雪 小舎—キレット—カクネ里—天狗尾根—北槍—小舎

廿六日 雪後霧強風 滞在

廿七日 晴 滞在

廿八日 霧強風 滞在

廿九日 晴 滞在

三十日 晴 小舎—北ノ鞍部—カクネ里—二俣—シラタケ—五龍岳—小舎

卅一日 曇後小雪 滞在

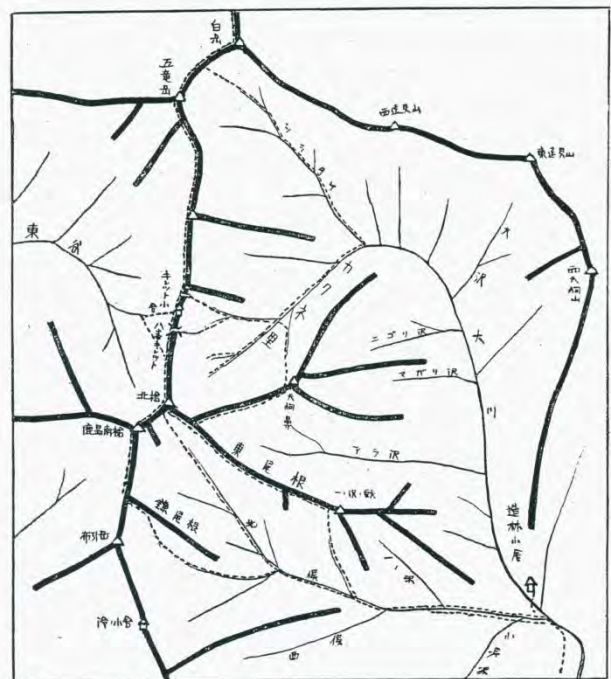
四月一日 晴 北槍北壁試登

二日 晴 小舎—北槍—冷北侯—鹿島村

三日 晴後曇 鹿島村—大町

三月廿二日 晴 北槍往復

カクネ里附近の偵察と其れへの下り口を見付ける目的で八時四十分北槍へ出掛けた。曉方より一點の雲もなく晴亙り風一つない。荷物運搬を終へた人夫二名は唐松小舎へ、自分等は北槍へと別れた。キレット基底へは約十五米程アップザイレンして下りた。基底は越中側から吹きまくる風の爲に 二米程の雪庇が出て居た。其の下からカクネ里へ急なルンゼが落ちて居るが 約五十米程下で左折して居るので其の先は見へない。兩岸は急峻な岩稜と其れを蔽ふ 大きな雪庇で天狗尾根の下半部が見へるだけで カクネ里の視界はさえ切られて居る。小憩の後リツヂ通り北槍へ向



鹿島カクネ里附近概略圖

湯 淺 巖

ふ。雪も固く樂に十一時三十分頃に着く。脚下から東尾根のナイフリツヂが右に冷澤、左にカクネ里を分けて下方に延びて居る。カクネ里の様子を見に少し下つて見たが此處からは殆んど垂直に近い雪面がカクネ里に落ち込んで中程の岩壁は見へずカクネ里の下半部が見へるばかりだ。小舎附近の國境尾根からは幾つもの巖尾根が出て居るが何れも狭く下方が急に落ち込んで下れさうもない。此の分では澤を下らねばならないが、此處から瞰下するカクネ里は思つた程未だデブリも少く澤を下るのも一寸氣味が悪く思はれた。北槍と南槍との鞍部で中食を攝り歸路に著く。キレットの南側の壁が登れないので舊夏路のある尾根を東谷に下り又小舎迄登り直した。小舎着三時、結局今日の偵察は餘り得る所なくカクネ里への降路は未だに確定し兼ねた。

三月二十五日 曇後雪 天狗尾根登攀

二日の滞在の間湯淺と色々相談の結果カクネ里へ下るルートをキレット基底からカクネ里へ落ちて居るルンゼを下り、天狗尾根を北槍へ登る豫定を立て、ビヴアツクの準備をして小舎を出發したのは七時三十分であつた。小舎からキレット基底までは三日前のステツプが残つて居たので前よりはずつと早く八時三十分に着いた。早速自分等は小舎のザイルと自分等のザイルとをつないで出来るだけ長くし、夏道のワイヤーにヂツヘルして下へ投げおろした。そしてアンザイレンして基底の雪庇をかき落した。崩落した雪は物凄い勢ひで雪崩て行き、突當りの岩にぶつかつて左折して落ちて行く。ルンゼの上部約二十米は殆んど垂直をなし、其の下部も約六十度程の傾斜をなして居る。其の上陽が當らないのと雪崩の通路であるためか殆んど氷に近い固い雪でアイゼンのツアツケも二三分しか喰ひ込まぬ。傾斜のまだ急な所でザイルが足りなくなつたので小舎のザイルは基底から下げた儘にして自分等のザイルだけを取つた。之は最初からの計畫で此のルンゼを下つて行つて若しも瀧にでもぶつかつた際に其の附近にヂツヘルす可き物が見付からない場合はピツケルを雪中にさして之にヂツヘルし湯淺と自分だけが下り、人夫櫻井をして其のピツケルを持って、再びキレット基底へ登り小舎に歸らしめ其の場合に上部の急斜面をそのザイルに依つて登れる様にして置く爲であつた。

此の頃から天候は悪化して來て先刻まで柵の様になびいて居た灰色の雲はもう今では朝焼けに紅色に變化して來た。然し自分等は天候の悪化よりも此のルンゼの下が何んなになつて居るかゞ遙に大きな心配であつた。上部を振り返つて見ると兩岸の岩稜には越中側から吹き飛ばす雪の爲今にも崩れそうに雪が積つて居るので氣味が悪い。下向きにステツプを切るのがとても苦しいが一刻の休養も出來ず黙々と下つて行つた。ルンゼは下の方で大分左へ曲つて行き嬉しい事には瀧らしいものは見當らない。時々上の方からザラメ状の雪が落ちて來るのに神経を尖らして一時間程下つて行くと此のキレットからのルンゼは 國境尾根から出て居る大分大きな傾斜もゆるい他のルンゼと合して居る。そしてその下方はカクネ里に眞直ぐに延びて居て瀧一つすらない。一同思はず萬歳を叫ぶ。猶元氣を出して北槍の北壁の見へる所迄降りて行つた。カクネ里は昨日の雨で出たデブリで物凄い。早速天狗尾根の登路を偵察したが、簡単に雪面の廣いゆるやかな所を丁度天狗の鼻の上部へ取付けるのでカクネ里の大圈谷の上部をトラヴァース氣味に對岸に渡り尾根に取付いた。時に十一時二十分。豫定より大分早く着く事が出來たので此の分では途中ビヴアツクの必要もなからうと天狗尾根を北槍へ向つて登つた。此の頃から遂にチラチラと雪が降り出し北槍の頂も其の北壁もすっかり霞んでしまった。尾根は大體固くクラストして居たが豫想外の瘠せ尾根でカクネ里側に出て居る雪庇に注意しつゝ登つた。二千四百米程の所で悪い所があつたが偃松が出て居てハンド・ホールドが得られ樂な登高であつた。北槍に着いたのは二時、小舎へは再び越中側を迂回して四時に着いた。

三月三十日 晴 シラタケより五龍岳

三日間の悪天候を昨日の快晴で雪を落ちつかせた上今日は廿五日キレット基底から下つた時見て置いた小舎の北の鞍部から出て居る大きなルンゼをカクネ里に下り二股よりシラタケを登つて五龍を越し國境尾根を小舎に戻つて来る豫定でビヴァツクの仕度をして六時小舎から輪標で出掛けた。北の鞍部迄は小舎から僅か十分程で行ける。一步カクネ里側に踏み込むと國境尾根から吹き飛ばされた雪の爲にとてもぬかり先が思ひやられたがデブリからデブリへと固い所を見付け乍ら下る事が出来た。此のルンゼは上部が擴がつて居て太陽の照射時間も長く雪崩が発生し易く、三日間の降雪は昨日の快晴に殆んど雪崩切つてそのデブリはカクネ里まで押出して居た。天狗尾根よりの雪崩は小さなものでカクネ里迄押出して居ず國境側からの雪崩もカクネ里の中程まで押出して居たがカクネ里の圏谷を一杯に掩ふ様な雪崩は出て居なかつた。

デブリ以外の雪面は腰まで潜るので左岸のデブリを漁り乍ら二俣に向ふ。二俣の出合には二ヶ所瀧が出て居たので左岸の上部の急斜面をへつゝシラタケに出た。谷には風一つなく太陽の直射に蒸されて、だらけ勝ちになる身體を引締めて登高を續ける。シラタケの上部はカクネ里に劣らず大きく開けた圏谷をなし遠見尾根側は緩傾斜をなして居るが國境尾根側は澤山な枝澤と小支稜が入り込んで複雑な地形をなして五龍の頂は判然と見分ける事が出来ず、色々議論し合つたが纏まらないので大體見當をつけて急なルンゼを登る。此のルンゼは非常な急傾斜をなし正午頃の太陽は雪面を溶かし濕潤性を帯びた雪は雪崩の危険が多分にあつた。アイゼンを穿いたり輪標に替へたり思はぬ苦勞をして最後の急傾斜を國境尾根に出て見ると其處は五龍岳の頂から數へて第一峰と第二峰の鞍部であつた。此處から五龍岳までは二三分で行ける。小憩の後頂上へ向ひ二時三十分に着く。尾根を雪庇に注意しつゝ小舎へと向ふ。小舎着六時。

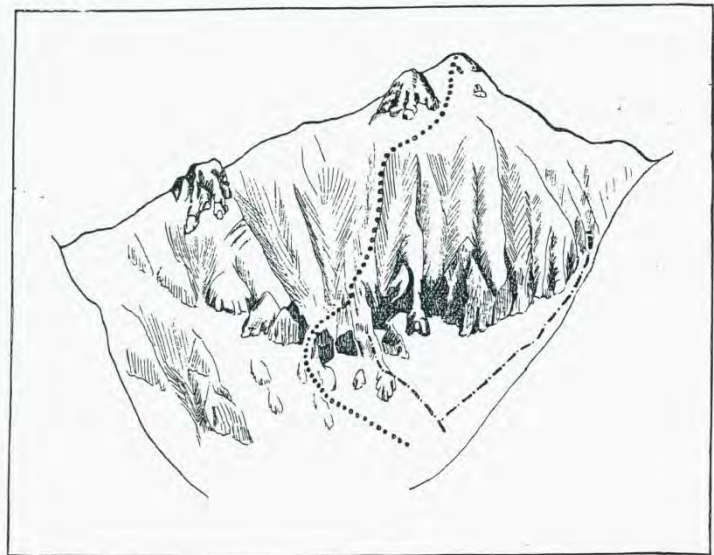
四月一日 晴 北槍北壁試登

今日こそは常に偵察を怠らず強い憧憬を持つてみたカクネ里より北槍北壁の登攀の日だ。荷を出るだけ少くする爲櫻井に餘分な防寒具や食糧を持つて北槍の頂に行つて貰ひ四時迄に頂上で會ふ事に打合せ、自分等二人は大きな希望を持つて六時半小舎を出掛けた。北の鞍部からのルンゼをカクネ里に下り豫め偵察して置いた一番左の大きな瀧のあるルンゼの右の瘦せた岩稜へと向つた。例へ其の岩稜を乗り越しても尚其上垂直に近い氷の如き雪面が北槍に續いて居り頂へは之をトラバース氣味に登らねばならぬが、それは困難に思へたので急に豫定を變更して北槍の主稜の直ぐ左の瀧のあるルンゼに取付いて岸壁の下へと近寄つて行つたが下から見て想像したより比較にならない程悪いのに驚いた。一步一步ステップを切り乍ら登行を續けたが、雪質は上部からたゞきつける雪崩の爲堅く締つて一つのステップを切るのも樂では無い。傾斜は増すばかりで終ひには目の先きの雪面にステップを切る程になり、おゝひかぶさる様な氷壁と想像外の大きな蒼氷の瀧を見上げた時既に自分等は一步も前進出来なくなつて居た。残念だが此處で登攀を放棄し引返す事にした。時に九時。ザイルに依つて傾斜の緩くなつた邊りまで下りたが此の急斜面を下降するには登攀に費したよりも二倍の時間と體力とを費した。茲に私達の北壁の登攀は敗北してしまつたが、他日又自分等の仲間の中に此の登攀を試みる時少しでも役立つ爲に自分等は更に再び一番右のルンゼに取りついて見たが、太陽の照射を受ける事の極めて少いこのルンゼは登るにつれて完全に氷になり、氷にステップをきざんだ経験のない自分等は一つのステップに何度となくピツケルを振つた。何とかして國境尾根にでも取付き度いと懸命になつて努力したが、再び氷壁に全く行路を阻まれてしまつた。此處から天狗の鼻が遙に下に見え目測ではあるが二四〇〇米邊りまでは登攀出来たが又退却を餘儀なくされてしまつた。午後一時であつたが今日は此の上登攀を續ける元氣もなく、北槍の頂で待つて居る櫻井が心配して盛に「エツホー」を叫んで居るのを聞きつゝ勞れた身體を元氣づけ

乍らヂツヘルを重ねてルンゼを下り再び朝希望に満ちて下つたルンゼを登つて小舎へ六時に戻つた。

キレット小舎附近の登路

キレット小舎からカクネ里に下るには自分等の選んだルートとしては、一、キレット基底から下るもの、二、北の鞍部より下るものの二つで、前者は斜面が急で雪崩の危険が多分にあり、キレットを基底へ下る時と、基底からルンゼを暫く下る時の二ヶ所ザイルを使用しなければならない點で後者に劣る。後者は第一に下り口に雪庇が出来ない状態にあり、其のルンゼは比較的緩やかで下迄瀧がなく其上東に面し兩岸に障害物がなく雪崩も一帯に早く落ちてしまふので降雪後一日の快晴を待てば翌日からは九十九パーセントの安全さ



北槍北壁スケッチ

小原勝郎

..... 豫定ルート
- - - - 試登ルート

を持つと云ふ點でカクネ里へのルートとしては最上のものと思ふ。又尾根はキレット附近の新夏路の他は舊夏路を大體變らずに歩いたが唯キレットの南側の路のみ信州側にあるので越中側から吹き寄せる雪ですつかり覆はれて大きな雪庇が出来て北からも南からも通過出来ず唯キレットの北側の路は越中側について居る爲通過出来る。故に北槍から小舎に至るには、何うしても一度越中側の東谷へ少し下らなければならないが舊夏道を下らず、もつと上部にある二つの澤が私達の常にとつたルートである。然し雪の多い時には注意しないと雪崩の危険が充分あると思はれる。小舎から北槍までも荷の多い場合はキレットでザイルを使用したり、リュックをおろしたりして居る間に一旦東谷に少し降りて登りなほす方が時間としても徐り違はない様に思はれる。

カクネ里と北槍北壁

改めて云ふ迄もなくカクネ里とは大川の上流のカール状をなした大窪谷を云ふのであるが、其の周圍は險惡な岩壁に依つて圍繞されて居る。中にも北槍の北壁は積雪期に於ては急峻な氷雪の壁と岩壁と隨所に懸かる蒼氷の瀧に依り容易に登攀を許さない。昔カクネ里は平家の落武者の隠れ棲んだと云ふ傳説があるが、積雪期に於ては斷へ間なき雪崩の崩落に人間はおろか羚羊も棲めさうもない。北壁よりはもとよりあらゆる所から發生する雪崩は全てカクネ里に集り、自分等は日を異にしてカクネ里を見る度毎にデブリの變化を見た。

殊に五月初旬再びキレット小舎を訪れた時にあの純白であつたカクネ里は全層雪崩の爲に酷たらしく褐色に變つて居りそれは如何に大きな雪崩が出たかを語つて居た。

北槍北壁は自分等は短時間接したに過ぎないが登攀に際し最も手強いのは約二一〇〇米から二四〇〇米邊りの北壁の中央を横斷して居る岩壁である。其の岩壁の上部は北槍を頂點として三角形になつて居て、凹凸の少い非常に硬い雪面の急斜面である。三角形から垂線を引いてキレット側の半分は上部は急斜面の雪面、下部は登攀不可能と思はれる程、殆んど垂直の氷壁である。天狗尾根側の半分は天狗尾根に近附くに従つて傾斜はゆるくなつて居る様だが、それでも上部をトラバース

する時等は餘程雪質に恵まれ、熟練した登攀者でないと困難な事と思はれる。結局直線的に成可く緩傾斜の所を念入りに探して氷壁に身を投げつけて、先ず岩壁を越す事が出来れば其の上部の硬雪面は根氣よくピツケルを振へば、登攀は可能であらう。

積雪期の登攀時期としては矢張冬期が最悪で三月上旬より四月上旬までが良いと思はれる。五月になれば表面の雪が緩んで頻々たる雪崩の惹起及び軟雪の爲足場の不安定に登攀はより困難になる様に思はれる。

東尾根よりキレット小舎

茲に三月の北檜北壁の敗北は再び自分を惹きつけてならず四月下旬再びカクネ里を訪れ北壁登攀の再擧を試みんとしたが之又悪天候に患ひされ其の機を得ず、唯往路東尾根を登つたゞけで引歸返さざるを得なかつた。

一行 小原勝郎 湯淺巖 堀田彌一 (先輩)

四月二十八日 新宿夜行

二十九日 晴 松本一大町一鹿島村 先發の堀田、湯淺と會ふ

三十日 晴後霧 鹿島村一北俣に入り一ノ澤頭の西方鞍部よりのルンゼを登る一ノ澤頭一北檜一八峰キレット小舎

五月一日 曇後晴 滞在

二日 曇後雨 滞在

三日 雨後雪 滞在

四日 晴 滞在

五日 霧強風午後晴 キレット小舎一鹿島槍一鎌尾根一冷澤一鹿島村

四月三十日 晴後霧

午前三時鹿島村を出發し大川と冷澤の出合を三時五十分通過し夏道に沿つて進む。雪は一ノ澤を暫く行つてからあつた。笹喰の手前から一ノ澤頭の西方鞍部より出て居るルンゼに入り氷結した大きなデブリの上をヂクザクに登る。兩岸はスラブをなしルンゼの上部は傾斜が急になつて居たが約一時間で簡単に東尾根に出る事が出来た、時に七時。此處からは北檜に續く山稜と上部の岩場がよく見える。尾根は案外瘠せて居てアラ澤側には今にも落ちさうに雪庇が張り出して居る。アラ澤は三月天狗ノ鼻から見た時は雪がベツトリとついて居てよく見へたが今は凄慘な姿に變つて居る。

尾根の雪は腐つて居て急斜面のトラバースには非常に注意を要した。然し第一の岩峰の下迄は大した苦勞もなく登れ岩峯の下より左側のルンゼに登り第一第二岩峰のコルに出る。第二岩峰は一寸面白さうに思はれたが相當の荷があつたので敬遠してアラ澤側をトラヴァースする事にし、アンザイレンをしてステツプを切り始めたが、ステツプを切つても雪がザラザラとくづれて足場が得られないので又左側のルンゼに登り第二岩峰の上部に出た。後は雪の多い尾根を登るばかりで北檜の頂に着いたのは二時頃であつた。此處で濃霧に蔽はれ東谷へ迂回す可きルートが判らなくなり暇取つたが、間もなく霧も晴れ五時四十分小舎に着いた。

重いリュックと悪雪質に餘分なアルバイトを費したが然も尚一日で樂に鹿島村からキレット小舎に入る事が出来た。荷が軽く又早春の雪の状態ならば東尾根上部の岩場を通つても充分一日で小舎に入る事が出来よう。

要 約

昭和8年(1933)4月2日~3日の記録。東尾根から鹿島槍ヶ岳登頂。

メンバーは、田口二郎、近藤實、伊藤新一。

行程は、4月2日 鹿島村—大川冷出合—北股西股出合—中岩沢北股出合—Ⅲルンゼ入口
ビバーク。

3日 ビバーク地—東尾根上—Ⅰジャンダルム—Ⅱジャンダルム—北槍頂上
—中尾根を下る—ビバーク地—鹿島村。

※三ノ沢をつめ東尾根に達し、鹿島槍ヶ岳北峰登頂を果たす。

パーティ 田口二郎、近藤實、伊藤新一

1933年4月2日 鹿島村(1.50P.M.)—大川冷出合(2.45~3.00)—北股西股出合(4.40~5.00)—中岩澤
北股出合(5.40~5.50)—Ⅲルンゼ入口ビバーク(6.00)

3日 ビバーク地(5.30A.M.)—東尾根上(7.30~7.50)—Ⅰジャンダルム到着(8.40~8.50)—Ⅰジャン
ダルム頂(10.30~10.55)—Ⅱジャンダルム(1.00P.M.)—北槍上(1.45)

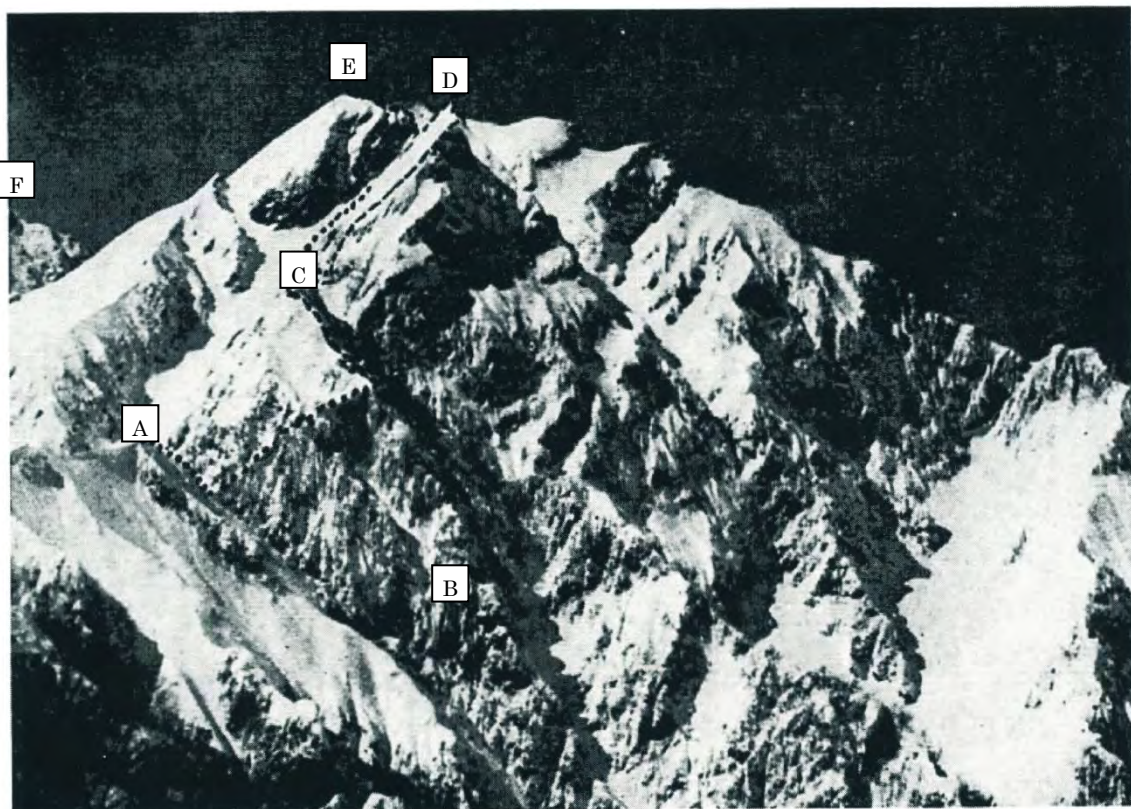
昨年3月下旬に試登して見たが深雪のため引返したので、今年は4月に入ってから登ることにした。丁度其の頃は約5日間の天候が良好に續いて居た爲に雪崩に關してかなり安全な豫測をなしえてみた。すなはち北股に落ちこむあらゆるルンゼから落ちるべき雪はすべて滑落し去り、今や雪崩の休止期に入つたと云ふ事實である。實際4月1日の荒澤偵察の際には3時以後は全く雪崩音を聞かなかつた。

私達は幸運にも上記の良状態に恵まれたので4月2日すなはち鹿島村へ入つた翌日出發したのである。昨日の偵察で大體自信がついてゐたので、3時頃北股西股出合につくように村を出た。例の如くすばらしい天気である。大川の出合をすぎて丸太橋を渡ると八峯キレットに居た立教の衆が下りて來たのに會ふ。やがて袂を分つて、私達はもう大分日影も早くなつた北股奥の森林帯にスキーを走らせた。西股出合を過ぎると一週間ばかり前の雨で出たらしい、すばらしい高次雪崩が隆々と澤全體を押し流してゐる。此のデブリの間に行くのがまた馬鹿に時間を喰つたが、やがて東尾根から北股へと下りてゐる最奥部のルンゼ即ち所謂三ノ澤の入口へ着いた。既に此の澤は暗い影に没して青白い國境線の skyline の上が輝かしい黄金色に彩どられてゐる頃だつた。直ちにビバークの準備にとりかゝる。此の地點は高度にして1,500m許りの上に谷の中なのでビバークにはかなり好條件に恵まれてゐると云はねばならない。ありつたけの防寒具をきて、夕食のミルクパンをかぢる。此の夜は寒氣其の物よりも、むしろ湿雪とツェルト内の露による湿氣に悩まされた。翌日、熱い紅茶とオートミールの朝食の後、あらゆる荷物を残し、(岩登用の五本手袋をのけて)輪カンで三ノ澤を登つた。しばらくして三ノ澤が右折する所でアイゼンに穿きかへる。澤の雪はよくしまつてゐてアイゼンには絶好の condition だつた。2時間で尾根まで出る。(寫眞B點)。尾根は既に陽の爲にもぐつて來る。これよりアンザイレンして出發。Ⅰジャンダルムの下まで one at a time と continuous を交ぜて進む。

Ⅰジャンダルムの下には多分昨年5月兒島氏が荒澤から登られたと思へる急なルンゼが終つてゐる。私達が心配してゐたⅠジャンダルムの南面は充分雪が落ちついてゐて、下部100mの one at a time で行つた所をのけると、上部の100mは唯急な雪面を continuous で進むだけだつた。

II ジャンダルムは一番右端、すなはち荒澤側の 40m ばかりの岩稜が一番早く行けそうなので其處を登り出す。しかし意外に悪く、スラブ上の氷面と岩になれないアイゼンが非常に時間を喰って頂に出たのが2時間後だった。そこから荒澤の頂までは坦々たる雪稜だが不眠がこたえてかなりつらい。荒澤の頭から最後の細い雪稜と急な斜面を登ると北槍頂に出た。其の頂もはや午前中の天候は完全にくづれ、南槍は既に霧にかくされ、黒部側から盛に霧をふき上げて来た。急いで鞍部にかけて下り、アップザイレンして中尾根を下る。しばらくするとクラストがとけて居たので *sitting glisade* で 1,000 m 許り下のゴルヂユまで飛ばす。素晴しく痛快だった。ビバーク地までやつて来ると完全にへたばってしまったが、雨にでもふられては大變なので、いそいで、すべてを引つからげ、デブリの間を頑張つて下つた。

出合で尾根をふりかへると其の黒い岩壁には灰色の霧がまとひついて陰鬱に空を区劃つて居た。鹿島村へ着くともう眞暗になる。



一ノ澤の頭より
鹿島槍東尾根 (1932年3月) 田口二郎

..... 1931年5月 ----- 1933年4月

- A点 1931年5月パーティ取付点
- B点 1933年4月パーティ取付点
- C点 1931年5月パーティ露营地
- D点 I ジャンダルム
- E点 荒澤の頭
- F点 鹿島南槍

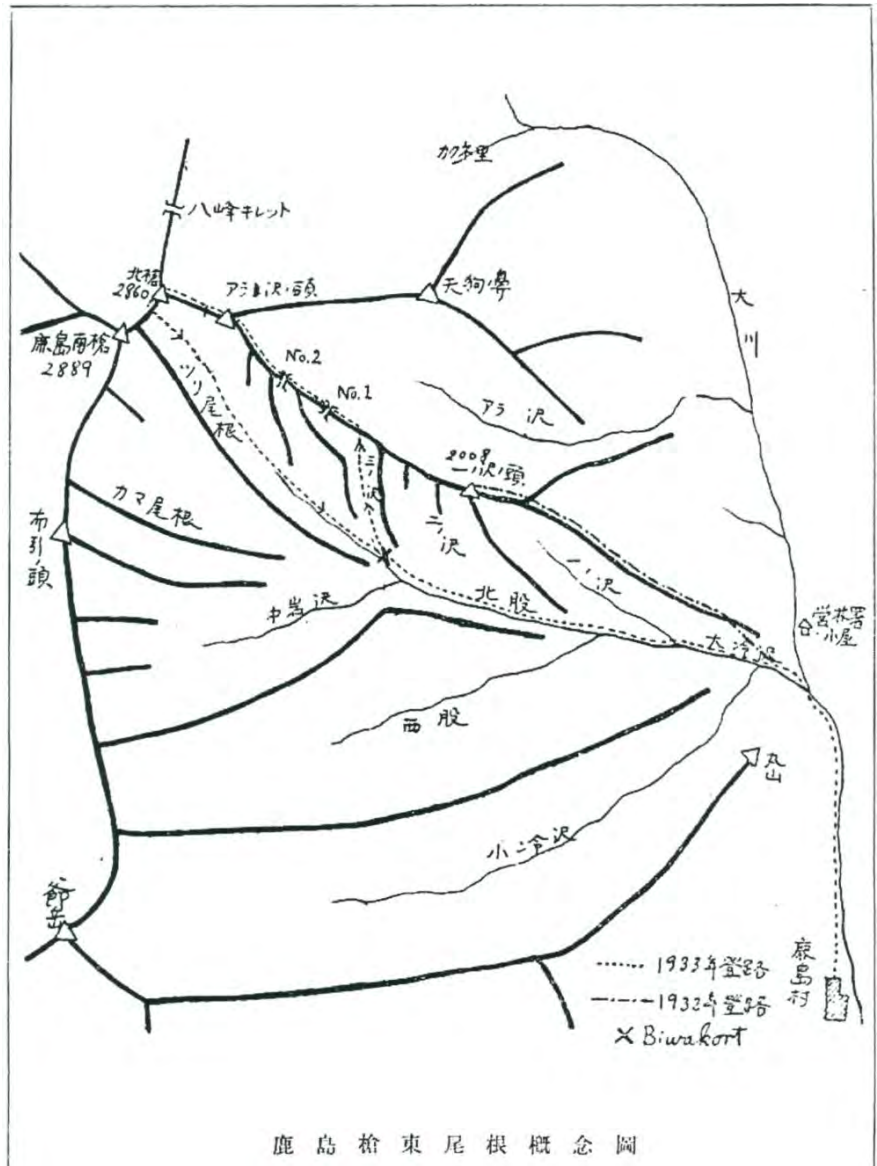
紀行は簡単ながら大體以上の如くである。大體鹿島槍東尾根は夏季に冠氏に依り1回、5月に東大の川口氏等と同志社大學の兒島氏によつて（兩者ともその登路を異にするが）登られてゐる。私達は兼ねて春季のすなはち、まだ雪景を多分に保持してゐる頃の東尾根に登つて見たいと思つてみた。そして今度偶然好條件に恵まれて登攀し得たが、それはかなり愉快なものであつた。たとへば5月に瀧の出てゐる所が3月頃は出てゐない事とか、這松がほとんどかくされてゐる事とか、岩がよくしまつてゐる事などは、それを條件付けるものである。

過去二回の體驗からすべてを論ずるのは甚だ大膽なことであるが、5月の紀行等も参照して考察する時、私は東尾根を冬季に登攀する事は殆んど出来ないと思つてもよからうと思ふのである。なぜならば東尾根から北股に出てゐる三つの澤、即ち一の澤、二の澤、三の澤の内、前二者は途中を胸壁に絶たれ、後者はそれはないにしても、非常に急峻な狭いルンゼである。冬季の積雪状態に於ては、たとへ、このルンゼが雪崩の危険を無視し得る状態にあつたとしても、恐らくすばらしいアルバイトとなり、したがつて非常な時間を要求するにちがひない。一の澤の頭からの尾根づたひのルートも多大なる時間を要することは必然である。日本の山としては比較的大きいそのスケールのために二回或ひは三回のビバークを必要とするかもしれない。圖

私達が非常な輕荷でもつて登り得た岩壁も、冬季の積雪状態、特にビバークの重荷を以つてしては又大なる困難がともなふであらう。しかし私はすべてのこれらの困難性を排して一月の東尾根を試みる眞摯な登山者の存在を期待する。私達の登攀に要した時間は、合計18時間である。したがつて勿論あの condition に於いては一日で行ける譯である。しかし私達がビバークしたことはあらゆる點で此の登攀に益する所、大であつたかと思ふ。

私達が非常な輕荷でもつて登り得た岩壁も、冬季の積雪状態、特にビバークの重荷を以つてしては又大なる困難がともなふであらう。しかし私はすべてのこれらの困難性を排して一月の東尾根を試みる眞摯な登山者の存在を期待する。私達の登攀に要した時間は、合計18時間である。したがつて勿論あの condition に於いては一日で行ける譯である。しかし私達がビバークしたことはあらゆる點で此の登攀に益する所、大であつたかと思ふ。

ビバークについて別に特別の用意はして行かなかつた。唯、カポツクを尻へ敷いたことは甚だ効果的であつた。しかしあの様な forced bivouac では完全なる睡眠は勿論望まれない。しかしあんな時に人夫でも雇つてスリーピングバツグを用ひたら一私達としては一寸なし難いが一更に翌日の登攀はすばらしかつたのであらうと思つてゐる。



*** ** ***

最近に於ける鹿島槍に対する甲南山岳部の行動を極く簡単に唯時間記録のみをあげて置く。

鹿島槍東尾根 Party 田口一郎 西村雄二

1931年5月14日-15日

鹿島村(5.55)-大川出合(6.35~.45)-小冷澤出合(7.05)-一ノ澤(7.25~.35)-西俣出合(7.55~8.20)
-ルンゼに入る(9.10)-瀧附近(10.30)-東尾根上(12.30~1.30)-岩壁下ビワーク地敷(3.30) ビワー
ク(7.00)-岩壁下(7.40)-岩壁上(9.00)-アラ澤ノ頭(9.15)-鹿島北槍(10.00)-北南槍コル(10.20~
11.00)-西俣出合(1.00~.30)-鹿島村(3.00)

鹿島槍東尾根試登 Party 田口二郎 近藤實 伊藤新一

1932年3月22日

鹿島村(6.00)-大川・冷澤間の尾根に取りつく-一ノ澤頭(1.55~2.45)歸路同じ-村(5.15) 連日の降
雪に積雪深く引き返す。

(關西岳聯報告 第三號『冬の鹿島槍』より 田口二郎・記)

28. 前田光雄ほか 「大川澤源流」『關西學生山岳聯盟報告』 第六號
昭和十年刊 藤田喜衛、關西學生山岳聯盟事務所發行

要 約

同志社パーティ

昭和9年(1934)3月26日の記録。積雪期の鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁初登攀。

メンバーは、入江保太、神野錦一。

行程は、3月26日 キレット小屋ーカクネ里底ー主稜下部ーキレット小屋。

関西学院大学パーティ

昭和9年(1934)7月25日～26日の記録。

メンバーは、塩津正英、西村悦三、杉本寛二、鷺池雅司。

行程は、25日 出発ー第三の瀧ー第四の瀧ー第五、第六の瀧ー第七の瀧上ー露營。

26日 露營地ーテント。

浪速高校パーティ

昭和10年(1935)3月21日～22日の記録。

メンバーは、中村英石、今西壽雄、谷口千之吉、吉田達三。

行程は、3月21日 出発ーカクネ里出合ー国境尾根ーキレット小屋。

22日 露營地ーキレット小屋。

前田 光雄
中村 英石
鹽津 正英

今日では、既に探り盡された感の有る後立山連峰信州側に於て未だに大きな登攀の對稱として、數多くの變化ある、ルートを取り得る所として、殊に積雪季に於て初登攀の目標とされて居る、鹿島川の大川澤源流に聳えるカクネ里北壁と、五龍岳東面の壁にわたる連障の東面に就いて、大體の概念と共に、簡単な此の地の、歴史を顧み、1934年から35年にかけての聯盟加盟校の、ビッグクライムを、ピツクアツプして纏めたいと思ふ。

非積雪季は別として、積雪季に於ては、カクネ里北壁にした所で、大きいとは言へ、800m位の壁で、五龍東面の壁に於ては、200, 300m位の壁の部分さへ有り、さまでクライムとは言えないが、後述する如く、根據地に就いて相當入るのに手間がかゝり、此の爲に、より一層登攀の對象となるのではないかと思ふ。

大川澤は古く、1908年、7月三枝威之助氏が此處を下つて居られる由だが(冠氏、後立山連峰)詳細な文献は見当たらない。1918年8月沼井鐵太郎氏が、初めて、大川澤を遡行して白岳に出られた(山岳第15年1號)以後、大川澤源流に入った記録は、目立つた物は無く、1930年頃から、立教、神戸商大、R.c.c.京大等が入られた位の物だったが、京都帝大パーティによつて1931年北壁ルートが、拓かれてから、相當な數のパーティが、大川澤源流に足をふみ入れて居る。斷つて置くが、此處で述べて居る大川澤源流とは、カクネ里及シラタケ澤のみの事を指して居る。

カクネ里北壁

カクネ里北壁の地形に就いては、學聯三號にも、述べられて居るから、重複を避ける意味で、簡単に述べやう。

カクネ里北壁は、今更此處に喋々する迄も無く、鹿島槍岳の北槍から、此を頂點として略々、三角形をなして、カクネ里へ落込んで居る岩壁で、壁としての大きさは、長さ約7・800 m 位で、平均傾斜は50° 位で有るが、2100 m から、2300 m 位に、帶狀に壁一面に廣がつた著しい部分があり、所々は、オーバーハングを爲して居る。

壁は幾本もの岩稜と、ガリーから成り、地形は複雑を極めて居る。積雪季に於ては、その幾本もの岩稜は、或は雪も附けぬあらはな岩肌をむき出しにし、或はスノー・リツヂを形成し、クラストとても、年や時によるのは勿論の事、風當りによつただけで、キラキラ光る蒼氷の所も有れば、其處からあまり距らない所で、岩の上に頼り無い雪が乗つて居ると言つた様な困難な條件を示し、ガリーからは、小さいながらも、塵雪崩を發生し、或は蒼氷の瀧などが懸つて、登高者を阻んで居る。

積雪季、下から見上げる人の目に直に寫る左手の蝶形岩壁の右の尾根から、右へ、五枚の助にも似た岩稜が落ち込んで居り、壁の右半分をまいて、右上方へ大きな左レンゼが入つて居て、此が積雪季に國境線へ出るルートとして、又北壁登攀への補助ルートとして、撰び得る様に思へる、が然し、雪の調子によつては、雪崩の危険も充分に有る。

左半分のルートとしては、やはり、最も長い所の主稜附近のレンゼを登るのが良いと思はれる、非積雪季に割に樂なルートとなる主稜そのものは、鋭いスノー・リツヂの連続で恐らく、登攀はよほど條件の好い雪質でなければ不可能だと思ふ。

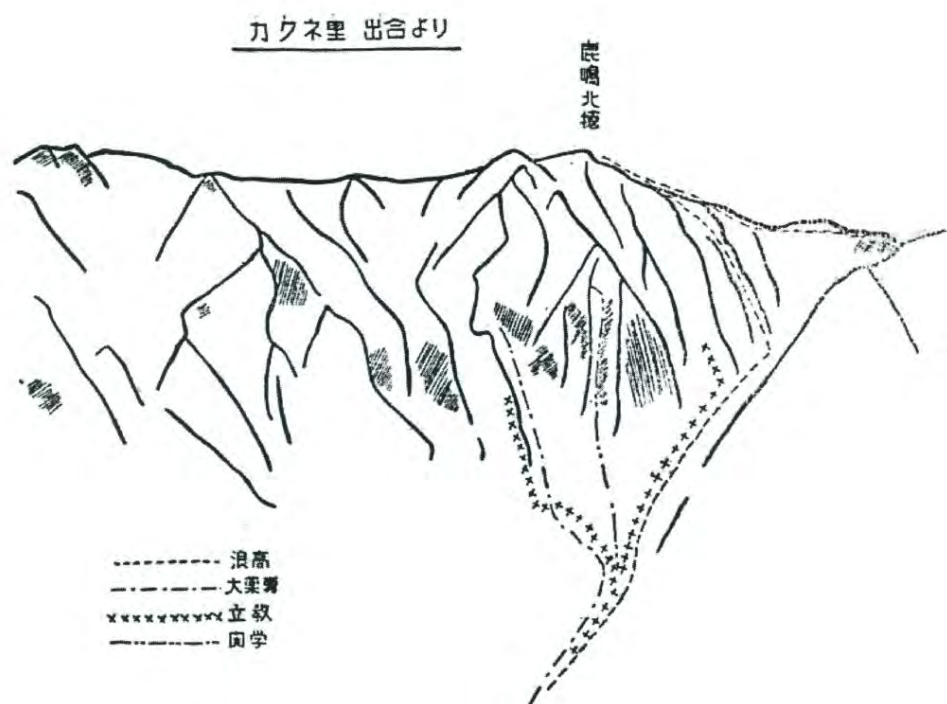
カクネ里北壁は、非積雪季に於ては、1931年10月、京都帝大パーティにより、その主稜を攀ぢるルートによつて初登攀せられた後、1932年の甲南高校、1933年の浪速高校、1934年の關西學院、其他多くのパーティにより、此をトレースされて居る。就中、關西學院大學パーティに依る、1934年夏、主稜の右の壁に向つて爲されたアタックは最後の難場を切抜けんとして、事故を起し、退却の已むなきに至つたものゝ完成せられたと見做るべき大きなバリエーションルートで有る。

積雪季に於ては、1933年の春、立教大學パーティにより、北壁アタックの火蓋が切れ同パーティは、主稜の下の部分と、右半分のレンゼへ取付いたが、共に撃退されて居る。1934年3月には、同志社大學パーティが、主稜左のレンゼを登り、主稜の左側を搦んでヴァーティカルな部分を抜け切らうとする

際、事故を起して、其の儘下つてゐる。

1934年12月末から1月にかけて、早稻田大學パーティが、遠見尾根から、テントを三ヶ所に建設して、北壁に迫らんとしたが、天候不良の爲、退却の餘儀なきに至つて居られる。

1935年3月から4月にかけて、カクネ里北壁アタックに、浪速高校、早稻田大學、大阪藥



専の三校のパーティが、集中した結果、浪速高校パーティにより、右へ入るルンゼから、北壁の右の部分に登るルートが完成され、カクネ里の積雪季初登攀は完成された。然しながら、より困難と思はれる、北壁の左半分、則ち、主稜附近には、未だにいくつものヴァリエーションルートを取り得、登攀の対象として、更に手強い物と思ふ。

次に關西學院大學パーティ、及び、浪速高校パーティによる記録を添記する。

同志社パーティ

1934年3月26日 曇

パーティ 入江保太 神野錦一

記録 キレット小屋發 (a.m.6.30) - キレット北側をルンゼを下る - カクネ里底 (a.m.7.00) - 主稜下部に取付き、しばらく登つて東尾根寄りにトラバースーフエース右を直登蒼氷にアイスハーケン2回ロックピトン1回使用 - 2200m附近にて再び主稜へトラバース 2300m 附近にて再左へトラバース中アクシデントを起す (p.m.2.00) - カール ボーデン - キレット小屋 (p.m.5.30)

關西學院大學パーティ

パーティ、鹽津正英 (リーダー) 西村悦三、杉本寛二、鷺池雅司

記録

1934年

7月25日 晴

出發 (a.m.7.55) - 取付き (a.m.10.00~10.20) - 第三の瀧の上 (p.m.0.30) - 第四の瀧 (p.m.2.00~2.30) - 第五、第六の瀧を越す頃より曇り出す。第七の瀧上 (p.m.5.15~5.30) - p.m.7.00頃アクシデントを起し、其處で一夜を明す。

7月26日 雨

夜明より下る。テント着 (p.m.1.00頃)

紀行

今度我々の取つたルートは、鹿島北槍頂上直下の、垂直の中廣い壁の右側に、眞直ぐに深く喰入つたルンゼで有る。此のルンゼは高さにして、全高距の約半分に及んで居る。右側に、相當ハツキリした稜が出て居て、ルンゼの上まで有る。左のリツヂは□位登つた所で切れて、其の上は壁となつて、ブツシュに續いて居る。下からの偵察に依つて、ルンゼに登り切るか、途中から左の壁に出て、壁から上に草付きに出るか、だと見た。然しルンゼの最後は全然見えず、左の壁は、少しオーバーハング氣味に見えた(實際はさうではなかつたのだが)

取附は瀧の下が大きなシュルンドになつて居るので、右側のサウンドの岩から、アンザイレンして取付く。(オーダー・鹽津・鷺池・杉本・西村)。連續した瀧には、皆水が落ちて居る。第3番の瀧の上にトラバースするのに、2時間餘を費す。第4の瀧は短く、比較的樂で有つた。第5の瀧は右の草付きは垂直で、上の岩がハングして居て駄目なので、斜左上にトラバースして急な草付きまで行き、ハーケン2本を使つて、瀧の上に出た。(約2時間を要す。) 此處で左側のリツヂは、小槍状ヂヤンダルムとなつて切れ、上は壁に續く。第6、第7の瀧は簡単に登れた。ルンゼはこの上から急に狭ばまり、一人も無理な位で有つた。奥が深く、判然としなかつたが其の後に壁が立つて居るらしい。

左の壁は少し上からブツシュが出て居るが、果してトラバース出来るかどうか、疑問で有つたが、兎に角、調べる事にして壁に出る。左へ左へ、5、6ピツチ出ると、上に20mばかりで、ブツシュに出られ、ブツシュに出れば、傾斜緩く、後は簡単に思つて、登る事に決める。

逆層氣味で、左に寄り切つた所に、少し草付きが有る。10m登つて、リング・ハーケンを打ち、更に登高を續けたが、力盡き、アクシデントを起す。時に早くも夕闇迫り、登攀出來ず、餘儀なく、其處で一夜を明す。(鹽津正英・記)

浪速高校パーティ

1935年3月21日—及び22日

パーティ、中村英石、今西壽雄、谷口千之吉、吉田達三

記録

出発 (a.m.3.00) —カクネ里出合 (a.m.5.50) —第二回朝食 (a.m.7.50) —氷壁下 (a.m.11.25)
氷壁上 (p.m.2.30) —國境尾根 (p.m.4.15) —キレット小屋 (p.m.7.00)

紀行

3月21日 晴後曇吹雪

1時起床、気温一〇°、然し、天候は思はしく無い。カクネ里始め、すべての谷は霧につままれてゐる。少し大膽過ぎると思つたが、出発する。カクネ里出合まで尾根傳ひに出やうと思つたが、ひどくもぐるので、眞直ぐ、白岳澤へ降る事にする。カンカンに凍つた雪崩道で、氣持は良かったが、途中2ヶ所ばかり瀧が有り、意外に時間を喰つた。其の上霧の中で、カクネ里出合を見逃し、無駄足を踏み、カクネ里を登り始めた時は、既にほのかに夜が明けて来た。もぐる輪坎に悩みつゝ登りつめて、A點にて食事を攝り別動隊T. Y. と別れて動き出す。霧は切れたが、早くも空は崩れ始めとても半日とは持つまいと考へたので、最も樂さうな一番深く入つたリンネを擇んで出来るだけ早く登る事にして急ぐ。テラテラに凍つた雪崩跡を、休む爲にのみステップを切る様にしてどんどん登つたが、9時頃になると上の方から荒れて来て、小さなわぼうが出初めた。左側のルンゼに入る手前でクレヴァスが薄氷に覆はれて居るのにつかり胸まで呑まれた。危険を感じてアンザイレンする。此のルンゼに入る頃より雪崩は相当大きくなり、氷面と粉雪が錯雜して来てバランスが取りにくくなつて来た。たゞピツケルのシヤフトの確保が有効に利くので信賴して登りつめると、突然パツと40m程の壁に突當つた。左側は比較的ゆるく粉雪を着けて居るが、深くて動きが取れない。正面はべつたり氷が張つて硝子細工の様に光つて居る。其の上5分に一回位づつわぼうを吐き出すルンゼが上端に三つも口を開けて居る。「どうする」とIを振り返ると「行かう」と答へる。「よし、やるぞ」と、ピツケルを頼んで置いて取附いた。こんな氷を豫期して居なかつたため、ハンマーの尖端は丸くなつたまゝである。岩の方にはホールドが見當らぬので、氷を切り落すわけに行かぬ。頼り無い手掛りを大切に用つて3m程登り、短いピトンを一本打つて見た。手答へ無く頼りになりさうに思へなかつた。更に斜上に2m程登つたが、雪崩の落ちて来る路が最も樂さうで、氷も厚かつたので、まさか吹き飛ばされはすまいとそれでも念の爲もう一本打つて置いて、之に沿つて登つて行つた。然し5mと登らぬ内に雪崩は段々大きくなり、ともすればさらはれさうになるので、又一本打つた。これで腰のピトンが無くなつたので、ルツクから取り出さうとした時、又一つどつと来た。「おのれつ」と頑張るはづみにパツとルツクを奪はれてしまつた。幸ひピトンが2本手に残つたので氣を取り直して登攀を續ける内、今度はどうした事か力と頼むハンマーがするりと外れて飛んでしまつた。手袋は幾度替へても駄目なので凍つたまゝにして置いたのが悪かつたらしいあらゆるものが硬く凍つてしまつてデリケートなバランス等とても取れぬ。それでも次第に此の苦闘に馴れて来た。ピトンを握りしめて手掛りを切り、後はアイゼンの齒にまかせて眞つ直ぐ攀つて行く。氷の厚い所で一度確保をなし、更に登る内に又ピトンを一本落してしまつた。何時傷けたか手袋が眞赤になつて居る。残つたものはピトン只一本。傾斜は少しゆるくなつたが、今まで上を飛び越す様に落ちて居たわぼうを眞正面から被る様になつて来た。ボンヤリした不吉の豫感が腦裡をかすめる。不安な確保を操りかへし死物狂ひの登攀が續いた。やつと此の壁を切り抜けてさて上はと見上げると期待に反して、まだ急なルンゼが續いて居る。然も表面のみ薄くクラストして中はサラサラしたざらめ雪である。踏み込んでしまへば登る事が出来ぬ。二人、別のルートを取つて這ふ様にして登る。益々ひどくなる雪崩と闘ひつゝ、烈しい頑張りを續けて、辛うじて上の緩傾斜の所に出た。

其處は意外に廣く、胸に達する粉雪が風に煽られては、下へ下へと落ちて居る。わぼうの發生地

らしい。よく今迄、此の大量の雪が落ちて来なかつた事だと、神に感謝せずには居られない。實際、翌朝までに、今のリンネから、素晴しく大きなのが出て居た。此の雪の中を泳ぐ様にして、北槍指して登って行つたが、思ひの外時間を喰ふので、あと 200m位で頂上といふあたりで、北槍下 130 m 位の國境尾根に出た。

吹雪の中で簡単に食事をすまして、キレットへ下る。サポーターパーティを呼ぶと聲のみするが何處に居るか分らない。豫定してゐたキレットに綱を垂して貰ふことも出来ず雪の状態が悪かつたので、搦むのに時間を取つた。キレット小屋へ泊る。

22日 晴

サポーターパーティーはルートの間違へキレット北の谷、小屋裏近い處へ露營したのだつた。お互の無事を祝しながら共にテントへ歸へる。(中村英石記)

五龍岳東面

五龍岳東面に關する文献は殆ど無い。シラタケ澤は相當舊くから入れてゐるが、五龍東面が狙はれ始めたのは割に新しいのぢやないかと思ふ。

細野の部落附近から、五龍岳を眺めると、通例割菱の頭と呼ばれる岩峰が、殊に積雪季に於ては、明らかに見え、氣をつけて見れば、其の頭は2つに割れて、其の間から、主峰の白い頭が見える。此の2つの頭を、南寄りの物をP II、北寄りの物をP Xと假稱する(別圖参照)。五龍東面は、八方尾根から見ても、大して凄く見えず、縦走路から見ても僅に、其の1部分が南の方からは見えるが、北の方からは全然見えない、遠見尾根から見た其は、最も美しさと凄さを持つて居る。

五龍東面に關する登攀史を見ると、關西大學が割に舊くから入つて居り、壁附近のクライムは1933年頃からだと思ふ。

五龍岳東面は、平均傾斜は、一寸表し難いが、壁の下からの平均ならば、 30° 位だらう。大きさとしては、最も長いG 2で現した尾根でも、500m そこそこで、それ程迄の登攀では無いけれども、遠見尾根から、積雪季にカクネ里をやる場合、第二のクライムの對稱として、まんざら捨てた物でも無からう。

五龍岳の岩峰は大體ルンゼAより南、P IIから始まり、ルンゼAより北は大した興味も無い所だ。

P Xからは、2つの尾根が分岐する。此を北から、G1、G2、と假稱した。G1は最も困難と思へる急傾斜の岩稜で、短いが、シラタケ澤に落込み、非積雪季のクライムは、此の尾根か、G5と假稱する物の他は、藪か、ガラガラで、面白くないと思ふ。

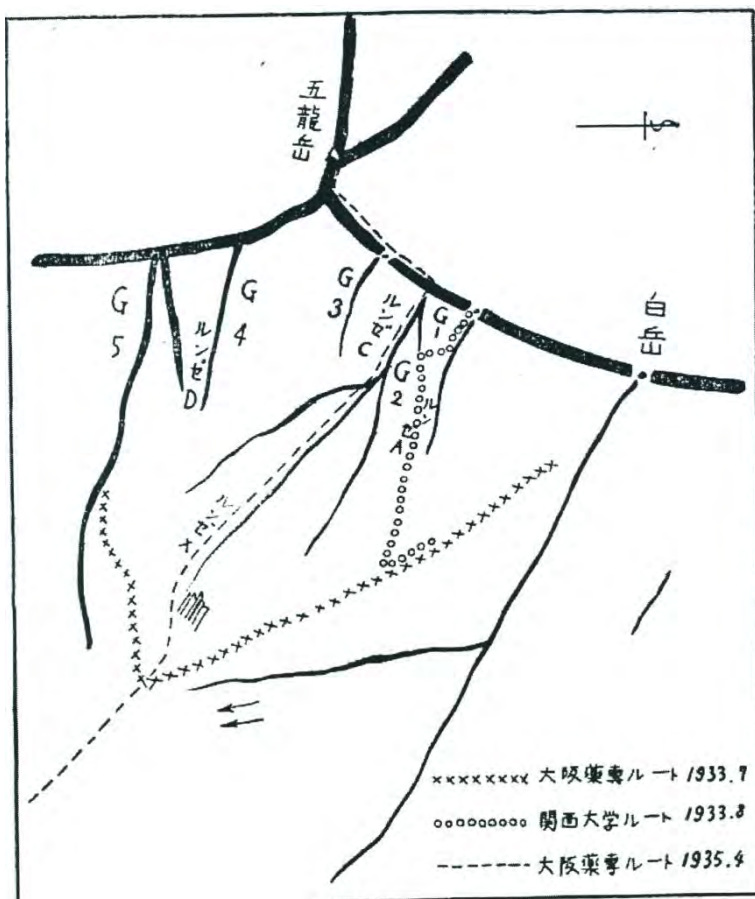
G2は、上の部分は 45° 以下のやせ尾根、中の部分は、途中で3本の尾根に分岐するが、中央の物以外は、殊に南側の物は、樺を含む草附きと言ふより、急斜面の藪で、全然面白く無からう。此の尾根だけは積雪季でさへ、木が出てゐるので、登る氣にもならないだらう。中央の物は、下に100 m 位の、平均傾斜 45° 位の壁を持ち、南側の尾根との間に、登攀ルートとなり得るルンゼが有るが、夏はヒドイ藪だ。北側の物は、壁の續きとして、或は一寸面白いかと思ふ。非積雪季には草附きの岩だ。此の尾根が3つに分岐する所は、尾根の上を歩いて居ては、一寸氣づかぬ程で有る。と言ふのは、此の邊は、ガラガラの緩傾斜で、おまけに尾根だらうかと思ふ程だゝつ廣い。

圖でG3で現した物は、到つて短く、積雪季には、ルンゼCを直登した方が面白いだらう。G4は、壁を持つ短い、すつきりした尾根である。G5は非積雪季に於ては割に急な壁を持つ尾根で、屋根筋は下の方は藪なのだが、積雪季に於ては、すばらしい、部分的に幾本もの所謂ヒマラヤ筋を現して、數段になつて、落ちた岩と雪とのコンビネーションで、長さに於ても、G2の中央の物に匹敵し、兩側の傾斜も相當強い岩壁に雪のついた物だし、クライムの對象として、五龍東面中最も手答への有る稜だと思ふ。

P點は、夏の終り頃からは巾の廣い瀧が、一番、早く露出する所で、積雪季には、東北側の谷から、相當大きな雪崩が出る。

つけ加へて置くが、非積雪季に於ては、壁のクライム等に於ても、相當藪と闘はなければならない事は覺悟せねばなるまい。

此處へ最初に入られたのは1933年春、立教大學パーティで、Aルンゼを登つて居られるらしいが、此のことは判然としない。同年夏7月に、大阪薬專パーティが、G5に取付いたが、豫想外に手強く、壁を登つて、尾根へ出たゞけで、退却して居るが、此だけに、少し時間を喰過ぎたにしても、登降に10時間を要して居る。其の8月、關西大學パーティが、G1に取附いたが、撃退されて、ルンゼAをトラバースして右の尾根を登られた。1935年春には、關西大學パーティがアタックせんとして、天候に災されて退却した後、早稲田大學及び大阪薬專の兩パーティが、カクネ里北壁クライムの第2目的としてアタックした。早大パーティは、G1を登つた様だが、詳細は判らない。大薬專パーティはG2をルンゼXから登つて、尾根通しにPXに出て、五龍に登り、尾根の偵察を爲したが取付きから、休憩時間を除いて、正味4時間でG2を完登した。(前田光雄記)



根 據 地

大川澤源流のカクネ里北壁及び、五龍東面を覗ふ足だまりとして、第1に、八峰キレット小屋を擧げ得るが、此は五龍東面を覗ふ足だまりとしては、小々遠すぎる。然し、此は前者のみの場合は、積雪季、非積雪季を通じての根據地となり得る。此の他に利用すべき手近かな小屋は無く、すべてテントに頼らねばならない。

今迄に、大川源流を覗ふ足だまりとして、用ひられた所は、非積雪季に於ては、殆ど皆が皆、カクネ里カールガーデン附近、シラタケ澤に沿ふ僅かな平、と言つた様な物で、此には問題は無い。

積雪季に、此迄、テントを張つて、足だまりとして用ひられた所は、どうしても遠見尾根以外には困難で、1. 大遠見の次の頭(浪高)、2. 白岳(早大)、3. 大遠見の次の頭より出合に出た尾根の1800m位の所(早大、大薬專)の3つで、3の物が、カクネ里へも、シラタケ澤へも、共に入る目的には、最も都合が良いと思ふ。ブナの林の中に相當廣い平があり、3つの中では、最も居心地も良いだらう。(前田光雄記)

〔附記〕以上の如く、カクネ里、五龍東面は、半ば探り盡された觀が無いでも無いが、未だに、ビツグクライムとしての充分の價値があり、殊に積雪季に於ては、テントを押し進める上に、何等かのシステムが研究され、北壁にても、右半分則ち、主稜の左又は右のルンゼを登つて、メインリツヂを乗越し、其の側面を登るルート等の可能性も存分に認め得られるだらう。

最後に此の拙き筆を擱くにあつて、種々貴重な資料をお貸し下さつた各校の方に厚く御禮申し上げます。誤記の點が有りましたら、御知らせ下さらば、幸甚に存じます。

29. 山崎安治 「嚴冬期鹿島槍北壁の完登—村田愿氏の手記より」『穂高星夜』

昭和三十三年六月一日刊 株式会社朋文堂発行

要 約

昭和10年(1935)12月27日～11年(1936)1月11日の記録。鹿島槍ヶ岳北壁主稜登攀。メンバーは、灘波清一、小西宗明、尾関正二、小林雄次郎、山田兵輔、村田愿。

行程は、12月27日 ベースキャンプ建設。

28日 休養。

29日 カクネ里偵察(灘波、山田)

30日 休養。

31日 キャンプスノー・コルーキャンプ(灘波、小林)、
キレット小屋へサポート(尾関、山田)

1日 停滞。

2日 キャンプスノー・コルー北壁登攀—鹿島槍ヶ岳頂上—露營(村田、
小西)

3日 露營地—キレット上—キレット底部—露營。

4日 露營地—キレット登攀—キレット小屋。

5日～10日 吹雪のため滞在(明大山岳部、慶大医学部とともに)

11日 キレット小屋—キレット沢—カクネ里—キャンプ—神城。

早稲田が五月の谷川岳マチガ沢で新人の訓練を目的とした合宿をはじめて行ったのは、昭和八年のことだが、これは各登山団体が近ごろこぞって行っているいわゆる谷川岳合宿というもの草分けではないかと思う。早稲田では、勿論それ以後毎年かかさずにこの合宿を行って、すでに二十数年に及び、大きな成果をあげているのだが、この合宿は何分にも多数の新人が参加するので、その道具を準備するのがいつもひとさわぎであった。肝心のピッケルなども方々から借り集めてきて間にあわせることも珍らしくはなかった。私がはじめてこの合宿に参加したのは昭和十三年のことであるが、合宿が終って土合の山の家を引き上げてきて、道具の整理をやらされていた時のことである。リーダーの一人が、これは愿さんのピッケルだなといいながら窓ぎわのテーブルにおかれていた一本のピッケルを取り上げてみせてくれた。山ノ内の、番号はたしか六〇〇台だったと記憶しているが、やや小ぶり、よく磨かれてはいたが黒い斑点が一面に附着した貫禄のある業物であった。変っているのは頭部のリベットが三本とも銅で出来ていて、これがまた一種のすごみをこのピッケルに与えているように思えた。当時村田さんは学部二年に在学中であったが、昭和十一年夏の前穂高東壁のアクシデント以後、山から全く遠ざかっていたので、そのピッケルを上級生が谷川岳の合宿に借りてきたのだと思う。私はこれが冬の鹿島槍北壁をやった村田さんのピッケルかと敬畏の念にかられてまじまじと手にとって眺め入ったことをいまでも生ま生ましく思い出すのである。村田さんとはその後一、二度部室でお目にかかったことはあるが親しく話をうかがう機会は全くないまま卒業されてしまった。

当時、部の記録というものは殆ど未整理の状態、問題の昭和十一年一月の鹿島槍の記録も、サポート隊のものだけはあったが登攀隊の行動は記録用紙にも記載されていなかった。したがってその当時の新聞の切抜きなどから僅かに登攀の様子を想像するよりほかなかったのである。

戦後当時のリーダーの一人である今村正二氏にこの記録をまとめていただくよう何度かお願いしたのであるが、一番重要な登攀の記録がないため、そのままになっていたのである。ところが最

近村田氏からの便りによって、同氏の手もとに当時の登攀の様相を克明にしるした手記が残されていることを知り、お願いしてこれを送っていただくことが出来た。はじめは早大山岳部史編集上の一資料とするつもりだったのであるが、このはげしい、ヴィヴィッドな登攀をそのままにしておくにしのびず、特に同氏の許可を得て、ここにこの登攀記を発表することにした。日本の登山史上からみてもこれは一つの貴重な文献となるものだからである。

早稲田が鹿島槍北壁の積雪期登攀をねらって遠見尾根に向ったのは昭和九年十二月で、この時は白岳頂上までキャンプを進めただけに終り、ついで昭和十年三月の第二次遠見尾根合宿では吹雪と強風にさまたげられ後立山主稜を前進して北壁を攻撃するという予定を変更し、大遠見より白岳沢へ落ちている支稜上に前進キャンプを設けて二回正面からのアタックを試みたが失敗に終わった。この三月二十一日浪高パーティによって右方ルンゼから北壁登攀が記録されたため、昭和十年十二月の第三次遠見尾根合宿は厳冬期の正面からの完登を何とかして記録せずんば止まずというすさまじい闘志をもって行われた。参加者は灘波清一、小西宗明、尾関正二、小林雄次郎、山田兵輔、村田愿の六名で、十二月二十七日春のキャンプ地にベース・キャンプを建設、二十九日灘波、山田カクネ里偵察。三十日休養。三十一日の快晴を利し灘波、小林の二名がまず登攀を試みたが、積雪多量のため一〇〇米の垂直に近いバンドを越したただけでまたもしりぞけられた。この日尾関、山田はキレット小屋へサポート。そして年の改った昭和十一年一月一日は風雪のため停滞。二日小西、村田の二名により二回目のアタックが行われた。村田氏の手記はその朝の出発から始まっている。

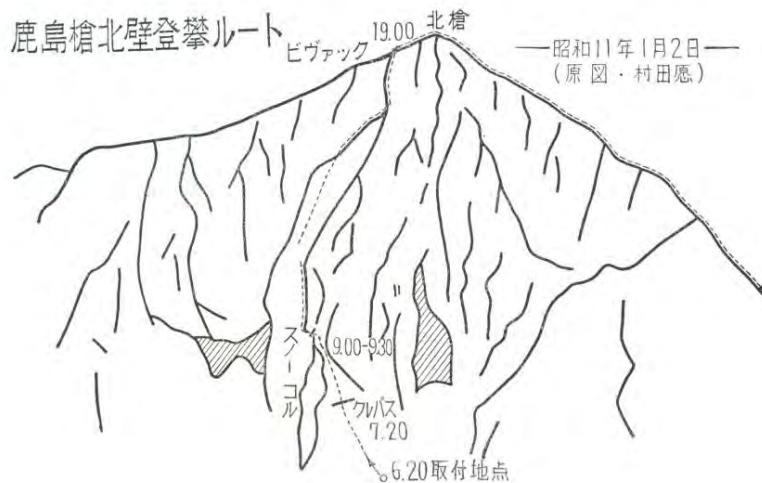
× × ×

星はあまりに輝きすぎていた。気温は比較的高く零下八度を示している。風も大してなくいささか生ぬるく感じられるくらいである。必然的に今日の天候の崩れを示して一抹の不安があった。しかし今日を見逃しては再びアタックの機会を掴むことは不可能だ。是非とも今日は登らなければならない。午前二時四十分天幕発、峭壁に取囲まれたカクネ里は三十一日にくらべて雪はずっと締っていた。二人は同僚のラッセルの後を黙々として懐中電燈の光を頼りに北壁へ北壁へと一步一步輪かんの跡を印していった。

五時過ぎには夜は次第に明け始め、鹿島槍の頂がまず桃色に染められ、それがやがて天狗尾根、国境尾根のあたりに拡がっていった。振り返れば遠見尾根のはるか背後に戸隠、妙高の連山が朝もやの中にほの白く横たわって望まれる。

六時二十分、同僚の激励の言葉を浴びながら互いに堅く握手をかわし必勝を約して袂をわかった。四つの人影は未だ薄暗いカクネ里の底へと次第に小さくなってゆく。その後姿を眺めながら、よしみんなのためにも必ず今日は登るぞといよいよ決心を固めた。七時輪かんにアイゼンにはきかえアンザイレンした。ところどころに無気味な口を開けているクレバスを警戒しつつ、ラッセルを交替しながら急な斜面を威圧するかのように迫って来る北壁に向ってステップを切っていった。ときどきカクネ里の底から姿は見えないがヤッホー、ヤッホーの叫び声が聞えてくる。二人とも手を休めてそれに応じた。

斜面を登りつめて上を見上げると、灘波、小林両君苦闘五時間にわたる努力の跡が歴然と眼に映じた。高さ約十五米、幅一米余の路が、黒々と傾斜六十度余の壁に通じているではないか。われわれ二人はしばしば驚威と感謝の眼で顔を見合わせた。北壁登攀の鍵はまさにこれなのだ。この路を通過すれば楽々とスノー・コルに立つことが出来る。それから約一〇〇米余の急斜面をどうにか切抜ければ後はただルンゼを伝って行くだけで、別に技術的困難を要せずに頂上に達することが出来ると見当をつけていた。両君が五時間を費したところを僅かに一時間足らずで楽々とスノー・コルに達した。ちょうど九時であった。予定よりも一時間早く着いたわけだ。このぶんでは、今日中にキレットまでは勿論、天幕に帰ることが出来るなどと餅を嚙りながら二人で話し合った。



約三十分の後ピッケルを振り、始末の悪い不気味なモンスターを打ちこわしながら、コルの真上の尾根に確実な足場を刻みつつ登攀を開始した。一時間も登ったころ、いつの間にか灰白色の深い霧がわれわれを包んでしまった。そして雪が降り出した。予期していたこととはいえ、こうも早く崩れ出すとは思わなかった。やがてガリー状ルンゼに下りかかったころ、いよいよ降り出した雪はわれわれを悩まし始めた。ルンゼの

雪は柔かい上に深く、傾斜は急である。見上げると青白い氷の壁があたかも城塞の如くにいくつも重なって厳然とそそり立っている。その上方にパッと白煙が上る。サーッと静かな音を立てて、特有の表層雪崩が押しよせてくる。ぐっと頭を下げて行き過ぎるのを待つ。顔に入りこむ粉雪はしばしば息がとまる程だ。幾回となく間歇的にこれが襲ってきた。この状態ではどうしても前進不可能となり、ルンゼを横断して向うの尾根に取付かねばならなかった。雪崩は次第に数を増し、大きくなって来るが思うように進めない。胸までもぐる軟雪である。ちょうどルンゼを渡り切った瞬間、いままでない大きな奴がドーンと雪崩がいて、二人の苦闘の跡をかき消して落ちていった。あんなのにやられたらたまったものではない。二人は顔を見合せて無言のうちに喜び合った。

尾根の雪も不安定であった。偃松の上に積った雪は全然クラストしていない。踏めばいくらでもぐる。それに片方は落込んでいて危険である。それで尾根の側面の比較的雪の浅い所を選んで雪を払いのけ、偃松を出し、これを手掛り、足掛りに登って行くことにした。全く非常なアルバイトである。雪を払いのけ夏の状態にして登るようなものだから。

天候はますます悪くなる一方だ。ときどき雪崩の怒号が耳を驚かせた。時間は刻々と過ぎて行く。見通しさえきかなくなった。これでは日のある内に頂上に着けるかどうか危ぶまれてきた。しかしわれわれは一度たりとも引返すなど考えなかった。目指すのは頂上だ。ここまで来た以上退却より登攀をつづけ頂上に達するのが身を守る最上の方法だと見極めをつけていた。パンを喰べる時間も惜しい。休む時間などあろうはずはない。全身の筋肉を張り切らせて偃松に噛りついた。体力の消耗は甚しく、十分位で腕はしびれて利かなくなる。偃松の中に首をつつ込み、枝に顎を引っ掛けなどしてやっとのことで手を休め氣息の恢復を待つといった始末である。あらん限りの力をふりしぼって頂上へ、頂上へと登りつづけた。このような状態で三〇〇米も登った時、尾根の平たくなって雪の斜面につづいている所に出た。ここがスノー・コルより出た尾根との合致点であろうと推定され、頂上は間もないことと想像された。もはやあたりは薄暗くなってきた。この斜面を登り切ると、小さい岳樺の生えた高さ約二十米ばかりの岩のフェイスに出た。殆ど垂直に近い壁である。小西がまずリュックを下して岳樺や岩角を頼りにフェイスを登った。リュックを引上げるのにかなりの時間と労力を費し、私がお後につづいた。岩の上は僅かに平坦なやっとな人が並んで立てる程のテラスとなっていた。やっところを登り切ったころ、あたりは全く夕闇にまつまれている。しかし約二十米上に頂上直下らしい岩塊がぼんやりガスの中に見出された。これをみて安心したせいか、疲労が急に身にしみてどうにも休息をとらないではいられなくなった。スノー・コルで餅を二切れ噛ったきり、いままで何も咽を通さなかったのだから無理もない。パンを一本取出しテルモスの暖い紅茶にのどをうるおした。約十分の後、最後の頑張りとして、岩塊をめざして急峻な斜面の雪を蹴った。日は完全に暮れた。細心の注意をくばりながら殆ど手探りで岩を攀じたが、幸い手強いもので

はなかった。これを登り切った時、かすかに国境線らしい水平線がちらりと左手に見えた。

目的は達した。北壁はわれわれの足下だ。この喜びをどうして心の内に圧えておくことが出来る。疲労に硬ばった頬の筋肉は自ずと微笑となって和らいだ。思えば幾度かわれわれの頑強な攻撃を手きびしくも退けた北壁である。われわれの努力はついに報いられた。

まず固い握手を交して成功を祝した。ちょうど午後七時であった。ここでザイルを解いてただちにビヴァークの用意にとりかかった。雪をかきのけ、深さ一米、二人が向き合って腰かけられるような穴を掘り、ツェルトザックをかぶった。ローソクの火に手をかざしてまずチェスターフィールドの一本に最初の慰安を求めた。携帯口糧、乾パン、チョコレートを噛りながら夜の明けるのを待った。疲労もさして感じない。これも成功の喜びと、なおもわれわれを試煉しようとする山に対する警戒心に気が立っていたせいであろう。時間の歩みはのろい。外は吹雪である。サラサラと音を立てて雪がツェルトを打ち、風が背中をバタバタ打つ。

一月三日午前六時、ツェルトの中がだいぶ明るくなってきた。どうやら夜が明けたらしい。しかし依然として吹雪である。外を覗くと中の明るい割にはまだ薄暗い。もう少し天候のよくなるのを待つことにした。七時四十分再び外に出ると少しはおさまり、ときどき雲に太陽がぼんやりうつる程になった。これ以上回復の見込みもないのでツェルトを払いのけた。

われわれのビヴァークしたのは頂上より約五十米下方の雪稜であった。鹿島槍山頂には吹雪が荒れ狂っていた。周囲を眺めたが、見えるものはただ自分達を包んでいる乳白のガスのみ。聞えるのは吹雪の声とアイゼンのきしみだけだ。八時、二人はキレット小屋に向った。夏は頂上から一時間足らずで達し得られるのから推測して、少なくとも四時間くらいで小屋へ入れるものと想像した。ルートは最右方、カクネ里に沿った国境尾根である。しかし吹雪の煙幕の中でのルートの発見は困難そのものであった。この尾根と見定めてつき進むと、ガスの彼方にぼんやりと尾根らしいものが隠見する。さては間違えたかと引返し再び隣の尾根につき進む。幾度かこんな状態を繰り返した。風は向い風で、吹雪は容赦なく頬に打ちつける。ヤッケを通して寒気が身にしみてくる。予定の時間ははるかに過ぎた。午後になると吹雪は一段とはげしさを加えて周囲に狂喚する。いまはもう荒れ狂う自然の翻弄にまかせて、焦悴し切った足を引きずるのみだ。少し歩んでは身体を雪中に投げ出して氣息の恢復を待ち、また進む。また身体を投げ出す。このまま寝入ってしまいたいような気になる。どうしても休息が必要だ。だが、いささかの風を避ける場所とてない尾根の上だ。午後一時過ぎ、やっとキレットの上に達した。

降り口の偵察がまた困難そのものだ。ガスに閉じこめられた視野は狭い。谷を覗けば猛烈な勢いで吹き上げてくる風雪にマツ毛は凍りつき、バリバリと頬の肉が硬直する。目を開けることは勿論、顔を向けることも出来ない。向う側の峻嶮な岩壁がときどきガスの合間に瞥見される。黒部の谷からすさまじい唸りを立てて吹き寄せる風雪の合間に、見えかくれするその岩壁は二人の冷え切った魂を縮み上らせるに十分だった。これではどうにも手のほどこしようもない。まず休息とエネルギーの補給が必要だ。僅かに風当りの少ない岩の根本に穴を掘り周囲に岩塊を積み上げて風をさけようとしたが、強烈な風の力はすぐそれを潰してしまう。ツェルトをかぶろうにも、気球の如くふくらみ吹き飛ばされそうである。やっとのことでツェルトを被り、腰を下ろすことが出来た。僅かに暖みを残したテルモスの紅茶が腹にしみた。軍食糧、イーストなどを喰べながら天候の静まるのを待った。

十二月三十一日の尾関、山田両君のキレット偵察の報告によると壁の棚にそって夏路の針金が露出しているとのことだった。これを見つけ出せばしめたものだ。よしこうなれば仕方がない。われわれは決心した。ハーケンを打つ金属性の音が吹雪の中になりひびいた。小西が懸垂によって降り口の偵察を試みたのだ。私は寒気にかじかんだ手に握りしめたザイルを静かにたぐり出した。小西は私の視界から消えた。不安と期待の混った沈黙がつづき、ザイルは徐々に繰り出された。突然ピタリとザイルの動きが止まった。どうしたのだ。その時「おい針金が見えたぞ」私は風の唸りに小西の声を聞いた。すぐ私もその後につづいた。そこは吹きすさぶ風が雪の附着さえ許さぬ約七十度

の傾斜の草つきである。吹き上げてくる風の力に身体は持ち上げられそうだ。凍りついてカチカチになった土の中にアイゼンの歯を踏み入れた。こうした斜面を五米ばかり下ると、垂直の岩壁に変わった。と私のアイゼンの歯はカリカリと岩を搔いて歯先は下にいる小西の頭をかすめた。

一米ばかり針金が見出された。山田、尾関が掘り出したものだろう。八十米ほど壁にそって進むと、キレットの底部に到着した。そこはちょうどはるか日本海の彼方から剣をこえ、黒部谷を横断して吹き寄せる風が、集中してカクネ里へ雪崩こんでゆく真只中だ。早速向う側への登攀にとりかかった。しかし軟雪がべっとりとした八十度あまりの傾斜の登り口は、高さ僅か十米ばかりだが、どうにも手のつけようがない。ずるずると雪はもぐって、かえって下へ降りるようなものだ。すっかり雪を搔きのけて岩を露出するより方法がない。二人はピッケルを振って雪を搔き始めたが時間を喰うばかりで一向に捗らない。夕闇と吹雪が仕事をさまたげる。突然二米程上にいた小西が私の上に落ちてきた。二人は十米ばかり沢を流されたが、幸い雪が軟かかったので何事もなかった。だがべったりと座り込んだ二人には再び登攀をつづける気力はなかった。日は全く落ちて、眼前を吹き通る粉雪が見えるのみである。もう午後七時を過ぎていた。ビヴァークするにも格好な場所が見当らない。注意深く闇の中を約三十米後戻りして岩壁の雪を削り、やっと二人が並んで腰を下せるようにしつらえ、ハーケンを打ち、ザイルを結んでツェルトを被った。ローソクも僅かに昨夜の使い残りがあまるばかり、マッチも湿って用をなさず、暖をとることも出来ない。昼間のアルバイトによって出た汗は凍りつき、ひしひしと体のしんまで寒気がしみる。

靴下を取り替えようにも、新しい替えはもうない。背中を伸すことも出来ない窮屈な場所だ。紅茶は飲みつくしてしまったが、幸い二罐の携帯口糧で餓を凌げた。刻一刻短くなってゆくやっとなつけたローソクの焰をじっと見つめながら、ともすれば閉じようとする瞼をぐつと見開いては押し寄せる睡魔とたたかいつづけた。午前二時ごろそろそろと広がった蟻の中にジジッと赤い芯が倒れこむと同時に、一すじの白煙を最後にツェルトの中から明りと温気が奪い去られた。それから夜明けまでの数時間は、寒気と睡魔との応戦に暇がなかった。暖い炉辺に蹲まりうつらうつらとしている自分を思っていると「おいっ」と呼ぶ小西の声にハッとわれにかえる。ともすれば夢の世界と現実の世界とのけじめがつかなくなる。互いに声をかけ合いながら、夢の世界に迷い込むのを制し合った。夜の明け始めると共に僅かに寒気も静まったので、私は凍傷をおそれて外しておいたアイゼンを、かじかんだ手で苦心して取付けていた。その時アイゼンはどうしたはずみかすると手からはずれてツェルトの外へと滑り出した。取りおさえようとツェルトをくぐり出てあっと驚いた。なんと危い所へビヴァークしたものだ。ほんの数十センチ向うは絶壁だ。よく足元の雪がずり落ちなかったものだ。手を伸してアイゼンを掴もうとすると再びずるずると滑り出したまま深い沢へカラランカランと金属音をひびかせて落ちていってしまった。小西の輪かんも夜中いつのまにかツェルトをくぐり出たのかどこにも見当らなかった。

一月四日、午前七時四十分、再び昨日苦心をした雪の除去をつづけて、約二時間を費しやっとなキレット登攀に成功した。二日二晩のアルバイトにふらつく足を引きずりながら小屋に向った。昨日同様正面から打ちつける吹雪とガスに悩まされルートの判定が容易でない。突然ピッケルを握る手の指先の感覚に異状を感じて、手袋をはずしてみると、にぶく灰色に変っている。完全に凍傷だ。私と前後して小西もまたやられたけれどもどうすることも出来ない。六組の予備の手袋も使い切ってしまった。ちょっと雪で揉んだだけで小屋へと急いだ。

午前十一時半、瘤を一つ越えた時ひょっこり待ちあぐねたキレット小屋が真白な姿を晒しているのが見下ろされた。二人は疲れも忘れて駆け下りた。そして小屋の扉に手をかけぐつと開くと、おっ！そこには赤々と火が燃えているではないか。そして数人の人影があった。午後十二時二十分であった。二人は中に飛び込むと同時にくたくたと土間に座り込んでしまった。努めて平静を保とうとしたけれども、疲れ切った肉体はどうしても理性の命に従おうとしない。先客に対する挨拶さえ碌にいえない程疲労がどっと出てきた。先客は後立山縦走中の明大山岳部本目田、合木、慶大医学部の諸君と人夫たちであった。恵まれた熱い味噌汁、一服の煙草、二人にとっては終生忘れられ

ぬ醍醐味であった。凍傷の手当の後、焚火の側で数時間死んだように睡眠を貪った。二人は食糧の準備は皆無であった。ただ三十一日に偵察に来た山田、尾関が五箱の携帯口糧をおいていったのがあるだけであった。われわれを含め全部で九人が生活するのに小屋にある食糧は味噌、味噌漬少々、梅干若干、パン六十本、大阪薬専の固パン七十九枚、米二升五合にすぎず、すべての食糧は明、慶の方々の好意に甘えるほかはなかった。

× × ×

一步死の世界にふみこみながら、見事に生還したこのすさまじい登攀は、キレット小屋への到着をもって無事に終わったのではなかった。二日から始まった暴風雪は、その後一向におさまる様子もなく、一月の十日を迎えても依然狂ったように吹きすさんでいた。食糧の不足のために小屋にとじこめられている人々は、一様に身体の状態に異状を呈し始め、さらに悪いことには燃料も不足を告げてきたのである。村田氏の手記には『この疲労し切った身体では白岳を廻り天幕に帰るには、もう一日のビヴァークに耐え得られるかどうか危ぶまれ、また沢を下るには雪崩の危険を考えるとつかぬ行動は許されない』と進退に窮した悲痛な言葉がしるされている。そして十日、これ以上の滞在は許されなくなったため、全員で会議を開き、その結果明日はどんな天候であっても小屋を出ることに決め、二人はもし吹雪なら天幕に戻らず、明、慶の隊とともに冷小屋から大町に向う悲壮な覚悟を固めたのである。

幸いにも十一日午前三時ごろいままで断え間なく荒れ狂っていた風雪はぴたりと止み、小屋の入口から月光が流れこんできた。勇躍支度をととのえ、鹿島槍から冷に向う明、慶の人々に別れ、二人は午前六時小屋を出発、キレット沢からカクネ里に入り、白岳沢の出合で出迎えに登ってきた灘波と会い無事を喜び合うと共に、二人が出発以来十日間下と連絡が全く切れたため遭難事件として新聞に大きくとりあげられ、非常なさわぎとなっているのを知ったのである。天幕に午後一時到着、一息入れ、ただちに遠見小屋を経てこの日の夜神城のツタ屋まで下って一段落となった。

こうして厳冬期の鹿島槍北壁は、二人のはげしい闘志と、すぐれた技術と、体力と、さらにこれに加えて沈着な行動によって完登の記録がつくられたのである。それは日本の登山史上にも特記されなければならない勝利の記録であった。

なお、山岳三十六年二号“極地法と明神岳東稜”の報告の中で、この鹿島槍北壁の登攀を一月一日としてあるが、これは一月二日、また、灘波、小林兩名の第一回攻撃は十二月三十日とあるが、これも三十一日の誤りなので、この機会に訂正しておきたい。

(昭和三十二年十一月)

30. 小西宗明 「巖冬期の鹿島槍北壁～昭和11年1月の記録～」
『リュックサック』80周年記念号
2000年（平成12年）11月11日刊 稲門山岳会発行

要 約

昭和10年（1935）12月27日～11年（1936）1月11日の記録。鹿島槍ヶ岳北壁主稜登攀。

メンバーは、灘波清一、小西宗明、尾関正二、小林雄次郎、山田兵輔、村田愿。

行程は、12月27日 ベースキャンプ建設。

28日 休養。

29日 カクネ里偵察（灘波、山田）

30日 休養。

31日 キャンプースノー・コルキャンプ（灘波、小林）、
キレット小屋へサポート（尾関、山田）

1日 停滞。

2日 キャンプースノー・コル北壁登攀－鹿島槍ヶ岳頂上－露営（村田、
小西）

3日 露営地－キレット上－キレット底部－露営。

4日 露営地－キレット登攀－キレット小屋。

5日～10日 吹雪のため滞在（明大山岳部、慶大医学部とともに）

11日 キレット小屋－キレット沢－カクネ里－キャンパー神城。

※29の登攀、小西宗明の記録。

積雪期における鹿島の北壁の登攀は、この冬が最初の試みではなく、昭和9年の夏季登山をその偵察として始め、同年の冬期、翌10年の春季および冬季と合わせて積雪期2回、夏季2回のルート研究を行い、今冬で5回目の登攀であるが、われわれとしては十分にその勝算はあったのである。

われわれ一行は灘波清一君をリーダーとして尾関正二、小林雄次郎、村田愿、山田兵輔、小西の6名であった。25日より幸いに快晴に恵まれ、3日間を費やして大遠見より白岳沢に向かって派出する尾根を400mばかり下った台地にテントを張った。ここは雪崩および北壁までの距離を考慮して最も接近し得る地点である。

前回の灘波、小林両君のアタックのあとを受けて1月2日（昭和11年）深更2時半、輝く星空のもと私たち2人は4人の同僚に守られて、四方急峻な峭壁に囲まれたカールの底を黙々と北壁に向かって近づいて行った。灘波、小林両名によってスノー・コルまでのルートが明確になった今、真っ向から主稜にアタックする以上、その上方100mばかりの急斜面をいかにして早く切り抜けるかが重要な問題であった。この日星は煌々と瞬き、気温は比較的に高く、午後まで快晴を持続することの無理であることを知りながらも、またの機会を期待することは不可能であるため、私たちは是非とも北壁を完登すべくひたすら前進を続けた。

7時、アンザイレンし、アイゼンを着け、4人の同僚にサポートの労を感謝し、一行に別れを告げてラッセルを交代しながら、快くクラストしたルンゼにステップを切り始めた。

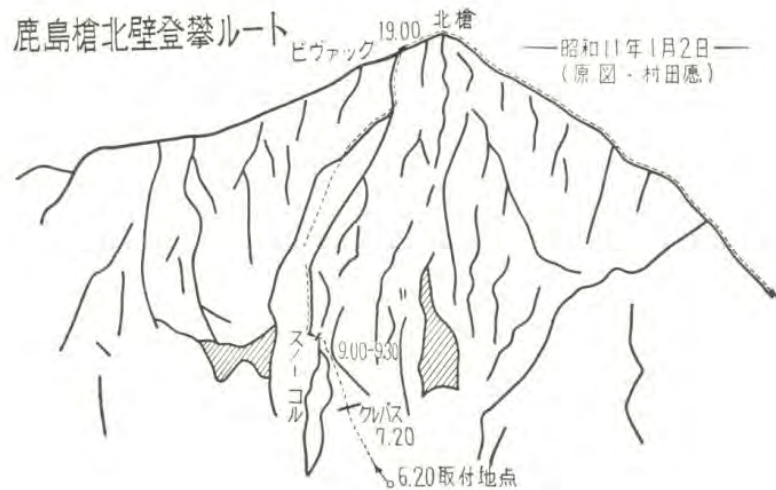
スノー・コルに近づくにしたがって、灘波・小林両君によって岩肌までも雪をかきのけてくれた幅2尺のルートが歴然とスノー・コルに続いているのを知った。先蹤者の貴いアルバイトに感謝を表しつつ、楽に9時、スノー・コルに達した。30分の休息の後ピッケルを振るって不気味なモン

スターを一つ一つ崩しながら一步一步確実な足場を刻んだ。

夢中に登山を続けている時、いつの間にか天候は激変して行先はガスにさえぎられ、雪さえ降ってきた。同時に間断なき北壁特有のシュタウプラビーネンが飛沫を上げて崩落し始めた。ルンゼを登って登頂せんとした初めの計画は、この天候激変による雪崩発生によって完全に覆された。

不安定きわまりないはい松の尾根を、非常な労力を費やしながらかつて登り続けた。予期したより時間は非常に長くかかり、スノー・コルから4、50m登るのに2時間以上の時間を費やし、夏季の登攀から考えて、果たして日のあるうちに頂上に達するか否か、かすかな不安を覚えた。

しかし下ることを考えない私たち2人は、夜になろうと、いかに吹雪続けようと頂上に達するまで、われわれには休息はなかった。雪の斜面をなおも執拗に登りつめると小さい岳樺の生えている岩のフェースに出た。それは完全にパーティカルで、ほとんどオーバーハングにさえ感じた。



ガスはいよいよ濃く、吹雪も雪崩も量とスピードを増して怒号し続けた。私はリュックサックを肩からはずして岳樺や岩角を頼りにしゃにむに攀じ登った。リュックサックの引き上げに相当の時間を費やし、この頃から視野は全くさえぎられ、身辺に夕闇の迫るのを感じた。その時上方約20mあたりにボンヤリと頂上直下を思わせる岩稜を認めた。夏の記憶を思い起こしながらたがいに励ましあい、急峻な雪面を雪をかき分け、かろうじて岩稜のもとにたどり着いた。

細心の注意を払ってほとんど手探りでその岩稜を登り切って目を上げた瞬間、眼前にボンヤリと水平の国境線を見たとき、私たちは登山者として最も尊い瞬間、すなわち征服感に酔ったのであった。2人は疲れも忘れて頂上に駆けずり上がった。北壁はついに終わったのだ。

12時間の悪戦苦闘はついに報いられ、午後7時、私たちは水平な国境線の上に立った。最初に頭に浮かんだのは、ベース・キャンプに居残る4人の笑顔と、東京出発の際に激励してくれた先輩の真剣な面影であった。直ちにビバークの用意をして雪に穴を掘り、ツェルトザックを被った。私たちの心は完登した喜びにつつまれ、ビバークの辛さもさほど感じず、ローソクをともし、冷たくなったパンを噛りながら一夜を明かした。

翌3日、ガスはなお深かったけれども吹雪の狂奔は少し静まり8時半露营地を出発した。北槍頂上を通って、ガスのため道を間違えながらも雪の良くしまった国境尾根を黙々とキレット目指して下った。正午ごろより吹雪はまたしても狂い始め、視界は完全にさえぎられた。午後1時ごろ辛うじてキレットの上に出た。まずキレット偵察のためザイルで確保しつつ底をのぞき込もうとしたが吹き上げる烈風に眉毛も凍りついて目をあけることはもちろん、顔を向けることも出来ない。この天候ではいかんとも手の下しようがないのでツェルトザックを被って、吹雪の静まるのを待った。

2時間ほど経過して吹雪の静まるのを認めたので、残りの紅茶に最後の元気をつけ、キレットに向かって下降し始めた。凍った岩にハーケンを打ち込んで懸垂した。底に降りた時同僚によって掘り出された針金を見つけた。その時私の頭上に黒い塊が落ちてきた。身を避ける暇もなく、私の頭

をアイゼンの鋭いつアツケがかすめた。手をやるとべつとりと血がついた。悲壮な決心をもってなおもキレットの底を登りつめ、ダイレクトに国境尾根に向かって登攀を試みた。そこは岩ともブッシュとも雪面ともつかぬ不安定きわまりない斜面で、雪を落としながら強引に登行を試みたが、どうしたはずみか足を滑らして3mばかりスリップし村田君と一緒に10mも沢を流された。

これによって2人は前進を断念してビバークと決め、雪の斜面に穴を掘った。その晩はローソクもほとんど無く、午前2時頃からマッチも湿って暖をとることができず、昼のアルバイトによって出た汗が凍りつくように冷たく、体の芯まで寒を感じた。わずかに残った携帯口糧を嚙りながら一晩中一睡もしなかった。

4日、夜が明けてビバークした場所のあまりの急斜面であったのに驚きながらツェルトザックを片づけて出発の準備にかかった。その時村田は不覚にもアイゼンを片方、私は輪かんを沢の底に流してしまった。再び沢を登って昨日スリップした斜面を細心の注意をもって2時間あまり費やして攀じ登った。瘤を一つ越した時、眼下に2日間待望してきた真白なキレット小屋を見て2人は狂喜して駆け降りた。

北壁の下でアンザイレンして以来、私と村田君の精神と肉体を固くつないできたザイルを小屋の入口で初めて解いた。まさに1月4日午前11時半、小屋に入ると同時に今まで張りつめていた身も心も緩んでそこにすわりこんでしまった。小屋には慶大医学部石川、辰沼、明大山岳部小寺、木目田、合木の5人と人夫がやはり吹雪のため滞在していた。2人は慶應、明治山岳部の方々の厚い凍傷の手当てと不足な食糧を快く分け与えてくれる好意に甘えて、来る日も来る日も吹雪に明け暮れた。幾度となく吹雪の小止みを利用して下山を思い立ったが、食糧の欠乏のため身体がふらつくのでアクシデントを警戒して下山を思いとどまった。腹の減らぬよう出来るだけ寝て暮らすことにした。

忍従の6日間は何の変化も無く夢のように過ぎていった。食糧は次第に欠乏して遅くとも12日にはたとえ荒天をおかしてもキレット小屋を去らねばならない。

11日、記憶せよ！ 1月11日午前2時。今までの烈風も静まり、小屋の戸口に走った私達の目前には月光を浴びて聳え立つ白銀の劔の姿があった。その神々しい姿、私たちはなにかに祈りたいような気持ちで3時頃から出発準備に取りかかった。

午前6時、慶明の諸君に今までの厚意を感謝して小屋前の瘤を越しカクネ里に向かった。

久方ぶりに見る輝かしい太陽、打って変わった静かな山の姿、10日前攀じ登った北壁を右手に眺めて当時の苦闘を追想しながら足取り軽く沢を下った。白岳沢の出合まで来たとき、「ヤッホー」の声とともに転がるように沢を駆け降ってくる灘波君の姿を認めた。「よく登ったぞ」どんな言葉よりも山友だちのこのひと言はうれしかった。

(昭和10年1月26日の「アサヒ・スポーツ」より)

※注) 小西、村田両名の安否を気遣う灘波らは、万一を思い、一応の手筈だけはしておこうと1月7日、麓の神城村に下山して東京の本部などへ連絡した。これが新聞社の知るところとなり、“遭難”報道が各紙の正月の紙面を賑わせた。

31. 小谷部全助 「記録 荒沢奥壁北稜」
『白馬 不帰 鹿島槍』現代登山全集 第4巻
昭和三十六年六月三〇日刊 東京創元社発行
(初稿『針葉樹』第九號 昭和十二年七月二五日刊 東京商科大学一橋山岳部発行)

要 約

昭和12年(1937)3月15日～4月1日の記録。鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁北稜登攀。

メンバーは、第1次サポート隊…小林重吉、鷺崎雄四郎、宮城恭一。

第2次サポート隊…森脇芳之、大塚武。

登攀隊…小谷部全助、森川真三郎。

行程は、3月15日 神城—遠見小舎上第I天幕(CI)。

16日・17日 滞在。

18日 滞在、一部荷上げ。

19日 滞在。

20日 CI—大遠見上CII。

21日 CII—小遠見下—CII。

22日 CII—天狗尾根CIII。CIII—カクネ里—二俣—CII(2次サポート隊)。

23日～27日 CIII滞在。CII滞在(2次サポート隊)。

28日 CIII—北稜M峰上ビバーク。CII—五龍岳—CII(第2次サポート隊)。

29日 小舎岩—CIII。

30日 CIII滞在。

31日 CIII—CII。

4月1日 CII—CI—神城。

※積雪期の鹿島槍ヶ岳奥壁北稜の初登である。北壁は、

昭和11年(1936)1月、早大パーティによる、北壁主稜登攀。

昭和11年(1936)1月、立大パーティによる、北槍北壁最左端のリッジ登攀。

計 画

吾々一橋山岳部は穂高涸沢に於ける全員合宿に、或いは新しい形式による冬の北岳行等に於て、個人的並に団体的に貴重な経験を積んだ。而して世を挙げてヒマラヤ謳歌の潮流にも拘らず、黙々として登攀能力、団体精神の涵養に努め、内容薄弱なるジャーナリズムを排して、人と人との和親の裡に、超然たる大自然を讃美し、かつ詠歎のみによる退歩を警戒しつつ鋭意アルピニズムの末流を奉じて来た次第であった。

これ等の経験を出来得る限り生かして、学生として長期の休暇を得べき三月には全員を以て意義のある登行を試み度いという希望は、かねてからあったのである。即ちエキスパートに対する意義とビギナー養成並に全員合宿的な気分とを混然折衷せしめた如き登山を心に猫いていたのである。

其処で最初は丁度穂高小舎が未建設だったので、先ず徳沢を根拠にして此処よりビギナーを一次サポートとして奥又白ノ池にCIを設け、更に二次サポート隊によってCIIを前穂高頂上に、三次サポートによってCIIIを奥穂頂上に、CIII宿泊のメンバーをサポートせしめて登攀隊のみ涸沢コルのCIVに前進して、最後に滝谷の最困難部をアタックしようという大計画をたてたのであった。即ち本邦登山界は従来の如き意味の登山に於て殆んど行詰りを来し、最早積雪期すら初登攀の望み難くなった今日、客体たる山岳そのものとは幾分離れて登山の内容、方法或いは登攀の大いさという人に属する性質のものを強く表面に浮び出させる以外、限られたる本邦山岳に於て実践アルピニズ

ムの発展を望めなくなって来たともいう事が出来よう。

かくの如き意味から従来の考え方に依ればアブノーマルとも見られる様な大計画を打建て、登攀そのものの大いさ困難さを故意に増大せしめて、より高峻なる海外遠征のままならぬ憂さをかすかに晴すと共に、熟練の程度に応じて各天幕より各自手頃の登攀にいそしまんとした次第であった。

従って穂高という山岳そのものが唯一最強の動因ではなく、唯以上のファクターがよく揃っていた為に決められたに過ぎず、この目的にさえ適うならば敢て場所は剣でも後立山でも或いは富士でも差支えはなかったのである。こういう訳で新しい試みたる穂高計画が決められ、之をプリントに刷ったり器具の準備を始めている間に、家事の都合とか体の調子が悪いとか色々な理由で不参加を申出る者が続出し、遂にはたった七名に激減して了った為涙を呑んで中止し、この位の人数並にメンバーの素質に適合する程度に登山の大きさを縮小して、さて何処が好いかと物色した所、吾々が以前から関心をもっていた鹿島槍がここに取挙げられた訳なのであった。即ち積雪期末登攀の荒沢奥壁をねらう事になったのである。

従って北岳バットレス行と同様、本邦登山史に於ける殆んど終末的な積雪期初登攀を目指すと同時に転換期に於ける色彩を多分に含み、更にスキー合宿の効果も期待するという色々な条件を具備せしめんとする意図もあって、結局遠見尾根から極地法に依ってアタックする事に決定したのである。勿論登行の拡大化の為に遠見小舎は全く無きものと仮定して終始吾々の天幕のみに頼り、遠見小舎辺に設置する第一天幕でスキー合宿を行い、爾後漸次根拠を進めて最後に天狗尾根二、三四〇メートルの第三天幕から奥壁をねらい、サポート隊は大遠見上の第二天幕を根拠として五竜岳等に登るといふ風に計画をたてたのであった。

荒沢奥壁に関して

鹿島槍東面に喰込む荒沢北俣（「針葉樹八号」には右俣と記せるもの）の奥壁が如何に峻険豪壮であるかという事は、少くとも大学山岳部として知らぬものはあるまいと思う。

後立山一帯の積雪期登攀が近年の如く殷賑を極め、文明の波が雲海を突破して雪の山頂に漂っている今日、そして猫も杓子もヒマラヤヒマラヤと恰も本邦山岳をマスターし切ったオーソリティーの如くにうそぶく今日この頃、今は残り少き処女岩壁の牙城を高く安曇平の彼方に聳立せしめて虚飾と安逸の世相をせせら笑っているのであった。

荒沢の地形に関してはこの方面に近年活躍を続けられた浪高山岳部の方達による詳細なる報告が「関西学連報告、第七号」に掲載されてある外、「針葉樹、第八号」に私が十一月の偵察を記し、又本書記録欄二八頁には五月北稜を完登した際の報告もある故、徒らに屋上屋を構えるの労を省略する。積雪期に関する説明としても随時登攀報告の内に於て述べておくから、写真並に附図参照の上宜しく御賢察を乞う次第である。

次に荒沢に関する登攀史の如きものに就ても、同じく「学連報告、七号」に殆んど余す所なく報告されてある故、ここでは比較的直接に奥壁登攀に関すると認められるもののみを簡単にピックアップして見る。

先ず、登攀とは直接関係はなかったかも知れないが、とも角この奥壁を初めて見付けられたのは矢張り関西の方々であった。然し真剣に北俣奥壁の登攀を志して這入ったのは一九三四年十一月、当部の森脇と私を以て嚆矢とするのではないかと思う。その後一九三五年七月、遂に浪高山岳部の今西、木村両氏により南稜が、そして同じく小林勘次郎、松井両氏によって北稜が初登攀されたのである。この時の所要時間は取付から荒沢ノ頭迄、南稜が八時間十五分、北稜が九時間四十五分であった。その後、未だ全然右の報告に接しなかった私と森川は積雪期の準備を兼ねて一九三六年五月、北稜の登攀に成功。この時の所要時間は八時間五十五分であった。

次に積雪期の登攀を目指したものとして、一九三六年一月浪高先輩の方達が荒沢から天狗尾根の下方へ天幕を張って偵察に入られたが、（「学連報告、七号」参照）直接登攀を目的としたものとし

ては立教大学山岳部の方達が初めてで、矢張り同じ頃、極地法による天狗尾根登行をなした際に同大学のパーティーによって荒沢奥壁が試みられたが失敗に終わったとの由。「(日本山岳会会報、五四号)参照) 同じ年の春再び浪高の方々は今度は東尾根一ノ沢頭下に天幕を設けて奥壁を目指したが、この時もまた偵察に終わったとの事である。そして一九三六年から七年へかけての冬期にも奥壁は人を寄せつけず、かくして一九三七年の三月になり、北岳バットレスで腕をみがいた吾々の周到なる計画の下に悪天候に拘らず一挙にして北稜を完登して了ったのである。なお同じ頃矢張り奥壁を目指して浪高山岳部の方達が鹿島から這入り天狗尾根の下方へ天幕を張っておられたが、無惨なアクシデントを惹き起して計画の挫折された事は誠にお気の毒な次第であった。

登行報告

パーティー 第一次サポート隊……小林重吉 鷲崎雄四郎 宮城恭一
第二次サポート隊……森脇芳之 大塚武
登攀隊……小谷部全助 森川真三郎

三月十五日 半晴 神城下川宅一遠見小舎上第一天幕

諸荷物、食糧の準備、発送等々。出発前の慌だしい焦々した気分も汽車に乗込んで了うとサラリと晴れて、早くも楽しき雪山の生活を夢見る。だが近頃登る山が尖鋭になつて来たせいかこの儘懐しい東京も再び見られぬのではなかろうか、何とか無事目的を果して帰り度いものなどと胸奥深く心配を意識する様になった。吾々が行う山登りをスポーツというなら、かかるスポーツ程直接生命の安否に関するものは又とないであろう。

前もって発送した荷物の他に吾々持参のものがかなり多く、松本駅の乗換え等には全員まるで罹災民の避難よろしくといった態。神城では一先ず下川宅へ落着いて汽車の疲れを休める。前もって送った荷物は既に悉く遠見小舎へ運搬したという。更に人夫を一名雇い十一時半出発。

線路から半町程で一面の雪となる。遠見小舎迄は人夫の往復が繁く固い踏跡あり、スキーはトラージンして登る。小舎着四時。附近の積雪約二メートル。スキーには好適の所だ。早速小舎へ届いた荷をほどこき、小舎の上部へ吾々の根拠地たる第一天幕を設ける。一応仕事を済ませて皆が落着く頃、雪山の第一夜は静かに吾等の天幕に訪れ、ランプを囲んで歌い語る種は尽きない。

三月十六日 半晴霧浅し C I 滞在

荷上の準備をしたが、あまり霧が深いので中止し、一同天幕の近所でスキー練習をして暮す。今日も気温高くザラメ雪で滑降にはもってこいの状態。午後関西学院の方々小舎へ来る。今日は森脇がやって来るので三人用天幕を一個増設。六時近く腹を減らして森脇到着。同勢七人車座になって、今晚は美味しいハヤシライスにソーセージの丸焼等々、更に紅茶に煙草が続き、まるで温泉あたりの合宿と大差ない気持である。やがて「天気が悪くなりそうな話」さえ盛に飛出す。

三月十七日 吹雪強風 C I 滞在

まさか昨夜騒ぎ過ぎた為でもあるまいが、夜の中に山はすっかり怒って外は白濛々の吹雪だ。気温もぐんと降って昨日迄の駘蕩たる春山は忽ち厳冬の峻烈さに早変わりして、サラサラと天幕を打つ粉雪のリズムも何となく身を引緊める様。隣りの天幕に寝た三人は、たった一間位の距離を大騒ぎして飯を食べにやって来る。それでも飯が済むと「象足」などつつかけて吹雪について小舎へ遊びに行くのだ。森脇、森川、大塚はこの天気にも拘らずスキーに余念がない。やがて雪達磨よろしくの恰好で練習組が小舎へ戻るとストーブを囲んで一しきり馬鹿話に花を咲かせる。吹雪は益々募り、夕闇に包まれた頃天幕へ帰ったが、寒気は激しいし吹雪は息もつまる程猛烈だし、おかしい話だがすぐ鼻先の天幕迄えらく辛い思いをしてしまった。それでも皆天幕におさまってラディウスの青火を囲むと、まるで外とは異ったなごやかな雰囲気がかもし出されて来る。張綱はヒュウヒュウと物凄く唸り天幕のはためきが烈しい。このはためきにつれて煙草の煙が右左に戸惑いするのも面白い。この猛吹雪に隣の天幕へ寝に帰る三人は又しても実際辛そうに戻って行く。

三月十八日 吹雪 C I 滞在 一部荷上げ

朝の内やや好転したので宮城をC Iに留守させて皆で荷上げに出発したが、小遠見へも着かぬ内に再び雪が舞い始めて来たので尾根上の顕著な岳樺の下に置いて戻る。霧さえ巻いて視界を奪われたので一同散らぬ様ステムを強くかけてかたまって滑降、勘が当たって灰色の幕を破って突然大きく遠見小舎が現われた時はホッと一安心した。吾々は雪まみれになった序でに小舎の附近でスキー練習をする。素晴らしいパウダーで愉快地滑れた。

三月十九日 小雪後晴 C I 滞在

朝一寸首を出して見ると相変わらず雪がチラチラ降っているので又ごろりと寝こんで了う。スキー練習過度で皆一様にぐったりとして惰眠を貪り、本当に起き出した頃はもう昼近くなっていた。妙に明るいので天幕を開くと久し振りに新鮮な陽光が目を射たのにはがっかりして了う。関学の人達は皆荷上げに出発したそうだ。天気の良い日に荷上げして、こんな快晴に滞在なんて凡そ愚の骨頂だが、食糧も十分あるし一日位遊んでも大した事はあるまいというので又スキーに熱中する。すっかり興が乗って暗くなっても天幕へ戻ろうとしない。何だかこれからの前進さえ気づかなく感ぜられる程吾々は落着いて遊んで了ったものだ。幸い明日も晴天らしいので一同気を引緊めて一度にC IIへ移転して了おうと覚悟を決める。

三月二十日 晴後小雪 C I - 大遠見上C II

早暁の内に飯を済ませ、各人荷物の整理、分担にいそしむ。三人用天幕はC IIIに使用する故たたんで荷上げする事とし、ここへは六人用一個のみ残す。シールをつけて一同C Iを出発したのは七時五十分。十八日に荷を置いた所で一休みして、当座に必要なもののみの組換えを行い一部を又残す。大遠見の一つ上のピーク二、二〇〇メートルの頂き着十一時四十分。ここにC IIとして比の冬北岳の第二キャンプに使用した天幕を張る。前から霧がうるさかったが雪さえチラチラ舞い始めて来たので、一次サポートの役目を果たした小林、鷲崎、宮城の三人はここで腹ごしらえをするや急いでC Iへ戻る。

比の天幕は悠々立てる程丈が高く、七人は十分泊れる大きさなので四人では実に広々して感じが好い。ここも尾根の真上で風当たりが強いので防風壁を築く。薄い雲霧を通してC IIIを設置すべき天狗のピークもそれと指点出来るが馬鹿に遠く見える。

三月二十一日 快晴後曇 C IIより小遠見下往復、荷上げ。

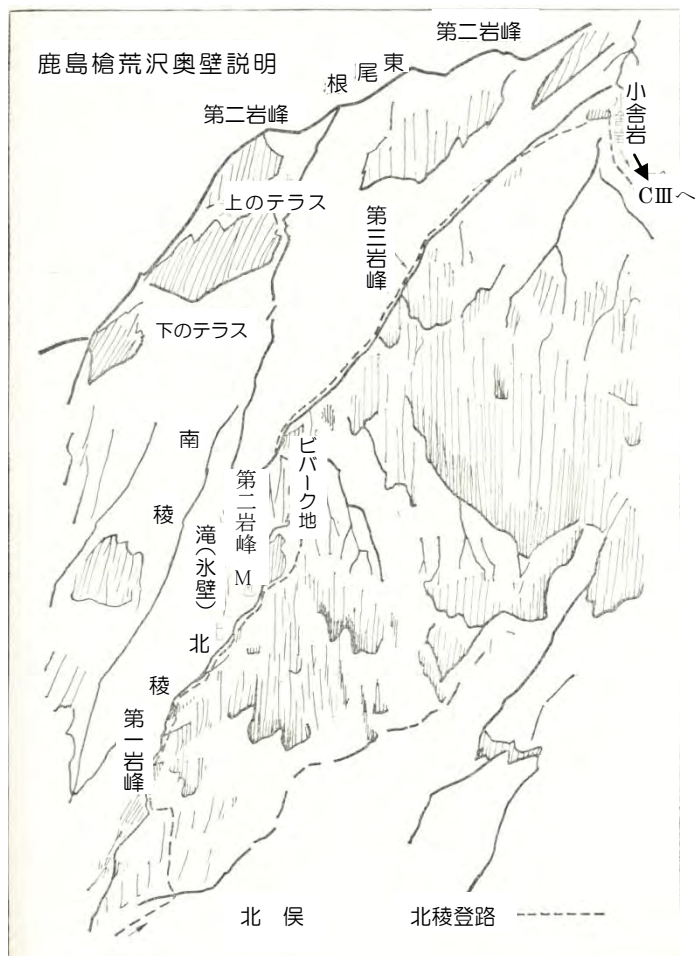
後立山連峰のモルゲンロートは天幕を赤々と染め、清浄な雪はピンクとブルーを映して、えもいわれぬ美しい世界を展開する。居ながらにして、こんな大観に自由に接し得られるのも実に天幕なるが故である。吾々は全く天幕の位置を決めるにも、よくよくの事情のない限りピーク突端の様に眺望のすぐれた箇所を選び、陰気なシェルターは努めて避けている。又眺望以外の一つの理由としてもピーク頂上の様な所は落込んだ鞍部等より却って風当たりが弱い場合が多い。(即ち下から吹き上げて風の主流は上へそれて了う事が多いのに鞍部は風の主流が直接に乗越してぶつかる)。そして防風壁さえ頑強に作れば風も恐るるに足らず、却って風が積雪を吹飛ばして埋没を防いでくれる便がある。之に反してシェルターは多くは吹溜り勝ちで明朗な雪山の生活には向かず、安全さに於ては補強工作如何で両者大して異なるものと思う。

今日は昨日残した荷を取りに行くだけ、四人揃ってダウンヒルオンリーの滑降を楽しむ。途中から雲海の中に没入して展望が利かなくなって了った。C Iへ遊びに行こうと思ったが霧が浅いので止して戻る。防風壁の強化をした後、早くから天幕に這入って明日の前進の為色々荷物の整理に努める。外の寒気加わり好晴を思わせる。今日はスキー滑降で濡れ物が出来たので石油コンロ二台を使用して乾燥を始めたが、二台の火力で天幕内の温度は急騰し下部で二十二度C、上部は立っていらぬ位暑くなって、上に紐をわたしてぬれた物を吊すと忽ち乾いて了うのであった。これではヒュッテの乾燥室と変らないが飯時などは裸になり度い位暑い。

三月二十二日 快晴 C II - 天狗尾根C III

C II発七時二十分。天幕、登攀具及び二人約六日分の食糧を四人で分担した結果、一人宛平均四貫位で済んだ。天幕から直かに南下する支尾根を関学のラッセルに従って降り三十分位で関学天幕着。

尾根が平になった森林帯でカクネ里、五竜東壁等の登攀には其儘絶好の根拠地である。其処から尾根を右にはずれ白岳沢より二俣着。八時四十分。二俣の岩小舎（針葉樹八号三三頁参照）も完全に現れており使えそうである。九時出発、雪に埋れたカクネ里の圏谷には春の陽が谷いっぱい躍り、進む程に肌はじつとりと汗ばんで来る。キラキラとまぶしく反射する山々の、ものうい様な沈黙を僅かに破るものは時折遠くに響く雪崩の音のみ、北壁も思いなしか陽炎にゆらいでいる。重いラッセルをゆっくりゆっくりと続け、カクネ里を可成り登った所で天狗ノ鼻へ直接上っているくの字なりのルンゼに登路をとり一直線に上へ上へと頑張る。雪崩の心配は今の所全然ない。幾度かラッセルを交代した挙句漸く天狗ノ鼻のピーク約二、三四〇メートルの突鼻に出る。十二時二十分。尾根には既にアイゼンの跡があったが之はかねて聞いていた浪高生のものではないかと想像する。天狗尾根を登ったトレールが見え小舎岩辺に人影さえ見える。此処は三年前の十一月、鷹野や森脇とジッヘルした儘二日目のビバークをした所で、寒いそして陰惨な初冬の夜風に吹かれながらコッヘルを懐いて雪をとかしたりした事などがまざまざと思出される。



した所で、寒いそして陰惨な初冬の夜風に吹かれながらコッヘルを懐いて雪をとかしたりした事などがまざまざと思出される。

早速このピーク頂上に吾々の最後の根拠たるC III建設にかかる。三尺程雪面を掘り下げ防風壁も頑丈に作って天幕がすっぽりと中へ隠れる様にした。一応掘った所で四人囲って昼食を撮りながら休んでいると天狗を途中迄登って引返した浪高生四名が天幕へ戻るのに会う。まだ二人後から来る由。

二時、森脇と大塚は二次サポートの役目を果たしてC IIへ向け出発。森川と私は尚も防壁強化に努め、乏しいながら下に敷くブッシュも集ったので愈々天幕を張ろうとしていた頃一もう太陽は北槍の彼方に沈んでいたから四時頃だったろうか、先刻荷上げに来て戻って行かれた関学パーティーの方が一人、息せき切ってやって来て、浪高生二名がカクネ里にスリツプして重傷した旨を話し、之を下の浪高キャンプに伝える様依頼されたので私は天幕建設を森川に委ね、早速アイゼンをつけ、パンと電燈を持って出発。浪高のトレールに従ってどしどし天狗尾浪を下り、標高差五百メートル余を下った頃浪高キャンプに着いて遭難事情を報告。現場に赴く浪高生二名と共に再びC IIIに戻った。ずっと前から日は暮れたが幸い月が非常に明るいので救援には絶好の夜である。遭難事情がはっきりしておらないし、関学の方達及び当部の森脇、大塚もおそらく助力しつつある事と思い、吾々二人は若し必要ある時は伝令をよこせば直ちに出勤する旨を現場に向う浪高生二人に申し伝えて自重する事にした。

(二次サポート隊報告—二時登攀隊と別れて三十分の後、カクネ里へおり立つ。折から北槍の上に着いた夕日がカクネ里奥に屏風の様な陰影を作って物凄。この時奥の雪面に小さい黒い点を認めたるも人間とは気付かず下る。二俣よりC IIへ向って登る途中関学急使来り浪高生二名の遭難を告ぐ。直ちに現場に引返す。遭難者一名雪穴にうずくまっている。三、四丁上のデブリの中に更に一人いる由。どす黒い血塊を吐き腹痛を訴う。墜落原因は天狗尾根の雪庇の崩壊との事、時々つぶ

やく。関学の方達と協力して上にいる今一人の遭難者引下しにかかる。この方は既に意識なく時々うわ言を発し、絶えず身体を痙攣しつつ唸る。漸く下の遭難者の所へ引ずり下した頃は既に七時を過ぎ、東の空には月上り圏谷の中は明るい。関学パーティーのスキーで橇を作り遭難者二人を引いて九時頃二俣に至る。出合より十間ばかり上の岩底の下に寝かす。十時過ぎ急報により浪高天幕より二人天狗のCⅢを経て来る。十一時、既に用のなくなった吾々二人CⅡに向う。二十三日午前一時天幕に帰着す)

三月二十三日 晴 CⅢ滞在

遭難救援の応援依頼に備えて晴天だが一日天幕で待機しつつ休養。昼近く漸くシュラフザックを脱け出し、のんびりと食事。三日の晴天続きで登攀には絶好のコンディションだがこの際次のチャンスを掴むより他ない。若し今日一日下から何の音沙汰もなく明日晴れたら断然奥壁をアタックしよう決心して靴の塗油、登攀具の整備など済ませておく。眺望非常によく、のんびり一日を過す。荒沢奥壁の北稜は凄く急な雪稜と化しているが第一、第二(M)岩峰の難場は殆んど雪をつけず悪絶無双を誇っている。知らせがない所を見ると遭難の方も何とか始末がつくものらしい。隔絶した此処では唯無言の山々が吾々にこだまを虚ろに返すばかりで浮世の出来事は露程も届かない。

夜CⅡへ向け燈火信号を発したが返事なし。恐らく遭難騒ぎで忙しいものと想像し別に心配せず。

(CⅡ一滞在。朝遭難救援に遠見小舎より三名天幕通過。吾々は午後四時二俣に下り、貸した物の一部返還さる。天幕へ戻る途中、CⅢより燈火信号あるも、こちらからは間に合わず。夜分も救援隊八、九名天幕を通過す)

三月二十四日 吹雪後快晴 CⅢ滞在

今日こそ奥壁アタックを敢行しようと午前三時に起きたが、外は吹雪で残念ながら中止。これで次のチャンス迄は相当長く待機を余儀なくされる事はこの頃の北アルプスの常だが、全然忘れてチャンスを逸した訳ではないので幾らか慰めもつくというもの。かなり烈しい降雪だったが午後から急にカラリと晴れて了った。気温は変則的に高く、素手で雪を掴んでも何ともない。風もなくうらかな春陽を浴びて吾々は天幕の防壁を強化したり、たわむれに雪人形を作ったりして徒然を慰めた。雲海は一、九〇〇メートル辺から下を完全にその波濤下に埋めて、吾々はまるで絶海の孤島にでもいる様な感じである。夜、月光に照し出された四周の大観は実に素晴らしいものであった。CⅡと燈火信号をかわして互に無事を祝す。

(CⅡ一滞在。五時半遭難者一名を背負った六、七名天幕を通過、食糧若干分与す。遭難者松井君は元気であった。七時半浪高先輩一名、人夫を連れて現場へ向うべく通過。カクネ里の中は雲たれ込めたるも上は晴れて美し。燈火信号成功)

三月二十五日 吹雪 CⅢ滞在

かなり烈しい吹雪である。長期籠城を覚悟し、食事を極度に減らす。オジヤ極少量を二回、ミルク二回、ソーセージ半分が一日分であるから努めて体を動かさぬ様、一日シュラフザックにじっと寝て暮す。吹雪は一向勢を弱めず遂に天幕は埋って了う。しまいには段々吹き積って今に雪崩で埋められた様に身動きも出来なくなるのではないかしら等と心配になったが、ままよとばかりシュラフザックに頭を埋めて寝込んで了う。CⅡも滞在。

三月二十六日 吹雪 CⅢ滞在

今日も相変わらず憂鬱な吹雪は続く。風の咆哮は凄じく響くが防風壁が完全な上、天幕が雪に埋っている為、大して風は感じない。読む本もなく、十分な食糧もない。狭い天幕に二人身を横えて、吹き荒ぶあらしの音に耳をすますばかり。ラヂウスのシューシューという音と嵐の音とが吹雪の幕営に於ける音響の全部であり、妙に印象に残った。小便の為、一大決心をして入口を開け、積雪を排して天幕の外に出ると、烈しい寒気を伴った暴風雪は忽ち身をさいなんで、この儘天幕の傍で凍死していきそうな気がして来る。一昨日作った雪人形は首まで埋没してまるで凍死体の様に無気味である。やや天幕の内張が湿気を帯びて来たが大した事はない。今日の食事は朝オートミール一杯、夜オジヤ極少量のみ。食糧豊富なCⅡの連中がうらやましい。

(CⅡー滞在。朝起きると新雪が防風壁と等高になり、天幕の下縁が雪に圧せられて内部は暗くなる。吹雪は益々つもの。二時、遭難者松村君を引いて人夫等約二十名来る。ラッセル胸を没し目覚しき活躍であった。やがて雪面は天幕と同高になり、立てたスキーが僅かに雪面に出ているのみ。埋没を恐れて掘るも効果なし。用便に困難す)

三月二十七日 晴強風 CⅢ滞在

天幕を埋めた雪を排除しサッパリとする。雪煙濠々として、北檜などはまるで別の山の様に物凄く見える。この近所の尾根筋も高々とナイフエッジに吹溜って見違える様だ。後、風静まり好晴となる。寒気強く-10℃を降った。愈々明日は攻撃できそうだ。体力を充実すべく晩飯を堪能し明日のアルバイトに備える。

もう五日間もCⅢの退屈生活が続いたので幾分ノスタルジアに罹ったのか、早くやるべき事を済ませて家へ、都へ帰り度くなってしまった。それと共に登攀前の、審判を受けるような重苦しい空気の圧迫からとに角逃れ度くて堪らなくなって来る。残されたヴァリエーションルートの険峻に立ち向かう気持は、率直に言うなら、それは決して美しいから憧れるのではなく、困難なるが故に男の一人間の意地を張り全能力を以て突貫して見たいという方に近いのだろう。矢張り人が何と言おうと、こういった気分は征服欲という言葉に最もよく表現されていると思った。

奥壁北稜の登攀

三月二十八日 快晴 CⅢー北稜M峰上ビバーク

午前二時起床。天幕の外に凍りつく様な月明に青白く照し出されている。顧る中空に北檜が月光を肩越しに浴びて尾根筋をにぶく光らせ、ゆっくりと旋回するパイフェン迄この世のものとは思われぬ神秘さを宿している。愈々機会到来だ。勇躍して天幕の外に飛出す。吹雪後で新雪が深いのでアイゼンの上に輪樫をつける。天幕の後始末をよく行い、張綱には、吾々が今暁北稜に向って出発した旨を記した紙片をぶらさげて出発したのはまだ夜も明けぬ五時であった。深いラッセルを続けて荒沢北稜へ下るルンゼの入口に出た。深雪のルンゼで雪崩の心配はない事もなかったが既に昨日一日で出るべきものは出て了った事と高をくくって、それでも一直線に静かに静かに歩み下った。北俣との出合で漸く陽が出たらしいが妙に雲海が多く、美しいモルゲンロートを呈しないのが、悪場へ向う吾々には些か不安だった。北俣は物凄いデブリだらけで蜿蜒と下流遙かに及んでいる。溢れるばかりに積った奥壁の雪と氷は登攀不可能にさえ見える。北稜下端着六時二十分。小憩後、やや右上(下から向って)から取付く。雪溪からリッジへ雪面が工合よく続いている所である。ここは下から仰ぐと簡単に見えるのでアンザイレンもせず私がトップになってステップを刻んだが暫く行くと傾斜は意外に急になり、途中辛くもバランスを保ちつつ二人アンザイレンする。上は岩壁で、どうしてもトラバース気味にリッジへ出なければならぬが、非常に急で肩がつかえぬ位にステップ、否、途を切り開くのは容易ではない。リッジへ出るとしばらくして第一号岩峰に突きあたる。七時半~四十分。岩峰は七分通り雪に蔽われているが後三分の二メートルばかりの為リッジ通しは全然駄目なので夏場通り、左手へ巻かなければならぬ。このトラバースもバンドが積雪の為はっきりせず嫌な思いをする。漸く左側のやや可能的な岩壁下に出た。そしてこの岩場を攀じるのだが夏場ですらかなり緊張した所だけに自信はなかった。リュックサックは勿論森川の所に残す。先ず基部にピトンを二カ所打込んで登攀を始める。一々、ピッケルで届く限りの雪を丹念に落してかからなければならぬので、下で確保する森川の頭上には滝の様に雪がふりかかる。

きりきりとアイゼンは岩にきしり、全神経をもって、ホールドを求めつつじりじりと攀じ進む。やっと最難所を突破して、更に確保のピトンを打ち、右へトラバース。かくして第一岩峰の上部に立ったが饅頭形に大きく吹溜った雪のブロック上には容易に登れず、長い時間をカッティングに費してやっとその上に立って森川を確保する。ザイルを途中のカラビナから一応はずして之で荷物を先ず引き上げ、次に森川がピトンを抜きながら上がる。

仰ぎ見ればM峯迄の急峻なリッジには巨大な茸を幾つも重ね上げた様に積雪のブロックが充満

し、之等は何れも垂直、乃至はオーバーハングして下に臨んでいる為、徹底的な堀割工作をしなければ登れない。かくしてピッケルは間断なく動かされ、一步一步と溝が出来て行く。こんなに遅々たる、そして苦しい登攀は全く初めてである。森川も同じ場所で一時間も二時間も伸びないザイルを嘆じ且つ心配している。ある個所では巨大な茸状雪塊に阻まれて突破出来ず、そのオーバーハングした基部に沿って横ざまに溝を掘り、ぴったりと腹這いになって、辛くも可能的な斜面までトラバースした様な事もあった。かかる雪塊の間にはいくら崩しても一向広くならない様な鋭いナイフエッジの雪稜が恐ろしい落とし穴を蔵して控えている。森川昼食のパンを天幕に忘れたが、私が万一の用意に持参したパンで助かる。かかる時、僅かの不注意が生命に関する重大な結果を惹起する事をよくよく注意すべきである。

やがてM峰から三十メートル程下部の岩場へ来た。ピトンは全然利かない。私は下の雪稜で森川に確保されながら何度も空身でこの小さいながら手応えのあるスラブの岩へ突進んだがどうしても突破出来ない。今ここでつまって了ったならば吾々は一体どうなる事だろう。勿論戻る事は死を意味する位危険だ。私は撃退されて考えた。いざとなったら露岩の少ない側の斜面を北俣迄転落して助かろう等と無鉄砲な事までその時は真剣に考えたものである。結局、幾度かの失敗の後、ルートを少し右寄りに採って辛くも上へずり上れた時は思わず歓声を発して了った。だが又憎い茸雪がすぐ連続して行手を阻んでいるのには実際うんざりする。もう時間は驚く程経過して、北稜から太陽の最後の光が東へ飛去ると共に、とたんに雪は固く凍って了った。腕はだるくなるし雪は固い。この茸雪に深い溝を掘って上へ立つ迄には随分苦勞し、時間は遠慮なく過ぎ去って了った。温度はぐんと降って、ぬれた手袋の裂け目からピッケルや岩がニチャリと無気味に吸付き始めた。この途中で夕陽に映えた第三天幕に人影を認め「ヤッホー」を叫ぶ。

愈々問題のM峰（第二岩峰）である。この直下附近の傾斜は実に急で雪もスラブの岩壁を薄く蔽うに過ぎず、満足な確保はとても望めない。しかし基部に近く、やや脆いがピトンの利く岩が露れており、ピトンと短いブッシュに掴まって垂直三メートル半あまりの壁を攀じて漸くM峰のつけ根に附着する雪のバンドに出られた。時は既に四時半。

夏場は今少し下から向って左側へ抜けたのだが、今はなめらかな氷が一面に閉して不可能である。右側は本当は険しい岩壁で到底登攀の対象にはなり得ない所だが今ではすっかり雪が附着して、どうやらバンドを為している。

直ちにM峰の下部にピトンを打込み、とに角森川をあげる。もうたとえ前途の望みはなくとも此処以外屯する所がない。夕闇迫る悪場で先の見通しもつかず、疲れを休める時の気持は悲壮である。しいて平気を装うて談笑する内にも、心に湧く生命の不安を互に深く意識し合った。

左か右か？ 夏場の経験から余程左へルートをとる度だったがスラブの岩と氷は全然人間を受けつけない。下は目くるめく絶壁である。結局どうしても右のバンド以外ない。M峰をぐるりと右へ廻ると途中バンドの雪が非常に薄くなって切れそうになったが、慎重に渡ってどうやら安全な雪のブロックに移る事が出来た。ここからM峰の上迄雪が続いているから何とかかなりそうだ。傾斜は上へ行く程急で吹溜りが頭上にオーバーハングしている。のしかかる雪の堆積を頭で打ち壊したり、ピッケルを真上にふりかざしたりして悪戦苦闘の数時間の後この難場を克服し、M峰上の雪稜上に出た時は、まさに暗闇一步手前で、森川がやっと上って来た頃は既に夜の七時になっていた。これで北稜の最難箇所はやっと終ったのである。しかしこれから上も夜道は油断がならないし、かなり疲労もしたので、一先ず此処でビバークする事に決し雪稜をならして二人はそのまま座り込んで了う。両側は切り立った様な峻崖なのでザイルの一端を岳樺に確保せしめる。雪との激しい格闘で、吾々のウィンドヤッケはぬれてバリバリに凍り、不快な寒冷が身内に走る。残りのパンを食し、ココアで生気を取戻した後、愈々ツェルトザックを被ってロウソク等つけようと取出した所、又しても不注意からツェルトザックをアッという間に荒沢の谷深く取落して了う。再度の失敗にくさったが今更泣事でもないので吾々は着のみ着の儘向い合って夜を明かす事にした。緊張の為疲労は自覚しなかったが、この寒いのに拘らず兎角私は堪らぬ睡魔に襲われて度々森川に起された。凍える

手足を暖める為、森川がバタバタと手足をたたく音が思い出した様に、遠く夢の世界に聞える。うっとり目を開くと大町の灯がチラチラと瞬いている……。そのうちに綺麗な月が吾々を照し始めた。鋭い雪稜、雪壁は青く、岩壁は飽く迄黒い。

…………ふと辺りが暗くなったので空を仰ぐと妖しげな雲が北檜の上から東へ盛に飛んでいる。これはいけない。吾々は天候急変を直感して直ちに再び登攀を開始した。時に午後十一時半。凍ってしびれた手足を伸して立ち上ると体がふらついたが間もなく元通りの調子に戻る。霧越しの月光で茫と視界はわかるが傾斜が全然わからないので懐中電灯をつけた。ビバーク地から三十メートル余の所で急な雪面をトラバースして大きなリッジへ出る。第三岩峰もリッジの左を行けば全然問題はない。天候は果して悪化の一途を辿りサラサラと雪さえ頬を打ち始めた。その内に傾斜も緩く、ラッセルが深くなって来たので私は輪標をつける。かくして漸く小舎岩へ着いたのは二十九日の午前四時半。小舎岩の東側のコンケーブした所に大きな雪洞を見出して、二人其処に這入り込み倒れる様に寝込んで了った。

(CⅡ-二十八日、五竜岳登頂。五龍白岳間ザツテルにシーデポす。立山・剣方面の眺望よし。天狗ノ鼻に登り行く関学パーティー見ゆ。今頃は当部の登攀隊も荒沢の壁にいる事であろう)

三月二十九日 吹雪 小舎岩-CⅢ帰着

…………森川にゆり起される。吾々は小舎岩の雪洞にいたのであった。烈しいアルバイトの疲労と雪洞の優秀な為とで着のみ着の儘にも拘らず全く前後不覚に寝入って了った。外はもうかなりの吹雪になっている。平和な雪洞に未練を残して外へ飛出す。吹雪と霧で唯白い斜面が下に広がっているのみ、一体どれが天狗尾根なのか見当がつかない。暫くじっと下を凝視しているとかすかな幕の切れ目に尾根らしきものを見当をつける事が出来、アンザイレンした儘どしどし下り始めた。天狗尾根を下る場合右側(上から見て)は直ちに荒沢へ急崖をなしているのだから左、カクネ里の方へさえ迷わなければ好いのである。天狗尾根自体の傾斜も決して緩くはなかったが非常な悪場の直後なので吾々は至極気楽に下る事が出来た。降雪は愈々募り見る見るラッセルが深まる…………。

随分下降したが一向尾根が予定の如く平にならない。変だ変だと思っている内に吹雪の幕の切目を通して、すぐ左手に奇妙な山脈が同高に連っているのが見える。一体どこだろうと地図迄出して調べたが判らない。吹雪の具合でカクネ里の方があんなに見えるのだろうという事にして尚も下降を続けるとやがて今度は荒沢側がすけてきて、北稜が間近に見える。そこでやっと吾々は尾根を一つ右に間違えた事を悟り、うんざりして引返した。成程そうして見ると先刻の山脈こそ天幕のある天狗尾根主稜なのである。

かくして降りしきる雪を冒して無事CⅢに戻った時は心から安心し切って了った。時に十一時半。天幕はもう埋没している。今朝以来、実に三十時間ぶりでザイルをはずし、色々始末を良くして天幕に這入った。どうせ大した食糧も残っていない事は判っていたので、吾々にとっては暖いシュラフザックだけがせめてもの慰めだった。ところが天幕の内には意外にも関学パーティーの御好意で吾々の最も欲していた食糧が補給されてあったのには恐縮して了った。ここに厚く感謝する次第である。

今迄の苦しい登攀を回顧する余裕もなく、唯休養のみを欲して、吾々は再び今度こそ暖い天幕内で待望のシュラフザックに身を埋めて快よい睡魔の手に吾と吾身をぐったりとゆだねるのであった…………。

(CⅡ-朝、登攀隊の様子を聞きに関学天幕迄往復。昨日決行の由、壁の途中で声あり、姿は見えずとも元気との事安心する。食糧若干補給されたとの事に感謝する)

三月三十日 雪後半晴 CⅢ滞在

午前九時目覚む。実に昨日午後三時から十八時間の余も眠り通した訳である。今日CⅡへ戻り度だったが、体の疲労がまだ残り、その上降雪直後なので自重して滞在とする。

(CⅡ-滞在。未だ登攀隊戻らず、帰られない程の悪天候でもないのにと再び心配する。燈火信号せず)

三月三十一日 半晴 CⅢ撤収－CⅡ

愈々この離れ小島にもおさらばである。天幕をたたみ、背負子に荷造りを済ませて懐しいキャンプ・サイトを後にしたのは十時十分。荷は案外軽かったがラッセルは重い。交互に先頭を代ってカクネ里を一直線に下降、二侯着十二時二十分。同発一時二十分。ここから白岳沢を経て関学天幕に至る。登りのラッセルにはかなりへたばった。関学も撤退を始めたらしく天幕はたたまれ、人影はない。其処から上はラッセルがされてあったので楽にはかどる。CⅡ着四時半。今迄の小天幕に較べると此処は豪華なものだ。森脇、大塚も随分心配していただけて非常に喜んで、先ず紅茶、次に美味しいハヤシライスとたらふく御馳走してくれたのには欠食勝ちだった吾々はすっかり嬉しくなっていた。明るいランプの下に再び相会う事が出来た四人は遭難事件や奥壁の事等積る話に夜をふかした。外には皎々たる月光が明日の好晴を約するかの如く荘厳な雪山を照し出している。明日は一気に下山だ。

(CⅡ一朝早くシラタケ経由天狗尾根へ行かんとするも、途中にて天狗尾根より下る人影を見て戻る。以上CⅡ報告大塚武記す)

四月一日 晴後雪 CⅡ撤収－CⅠ－神城

五時起床。昨夜決めた手順に従ってどんどん事を運び一切の荷造りを完了して出発したのは九時半。各自物凄く荷が多く、これではスキー滑降でもないというので三人はトラージンして輪樑。私だけスキーをつけた。やはりスキーの方が遙かに早く遠見小舎着十一時。一時間遅れて輪樑組の森川来り更に遅れて大塚、森脇と人夫然たる格好宜しくのそのそとやって来る。CⅠは全然異常なく無事撤収。すべての荷を整頓して小舎に残し、人夫に搬出させる事とする。小舎発三時。ここからはほんの手廻りの荷のみ背負ってスキーを楽しみつつ下山。途中から又暗雲低迷して雪模様となる。神城下川宅着四時四十分。

大町行バスに一同乗り込んだ時の嬉しさは、折柄益々烈しくなって来た降雪の为一層強く感ぜられた。無事所期の目的を果して全員揃って帰京し得る喜びは登った山が困難なる程痛切に感ずるものである事は今更いう迄もないが、同じ箇所を志した浪高の方達の惨めな遭難があっただけに、吾々は実に感慨無量であった。

最後に尊き犠牲となられた浪高山岳部員松林君に対して謹んで哀悼の意を捧げる。

■小谷部全助氏は、東京商大山岳部 OB。この登攀は後立山連峰において、もっとも輝ける初登攀であり、北岳バットレスにおける氏のパイオニア・ワークとともに、日本の登山史に執筆されるおおきな価値をもっている。東京商大山岳部部報『針葉樹第九号』に発表された。

要 約

昭和16年(1941)3月22日～28日の記録。鹿島槍ヶ岳荒澤奥壁南稜登攀。

メンバーは、佐谷健吉、伊藤文三、中山和世。

行程は、3月22日 鹿島村。

23日 停滞。

24日 鹿島村－荒澤出合(第1回荷上)

25日 鹿島村－荒澤出合－南俣出合－荒澤出合

26日 荒澤出合－北俣入口－東尾根－北槍－ツリ尾根－

27日 ー冷沢小舎

28日 冷沢小舎－荒澤出合キャンプ撤収。

東京帝大スキー山岳部

まへがき

後立山連峯の盟主鹿島槍の懐深く鹿島大川澤が喰込む源流には、幾多の障壁が形成される。それ等の中、東尾根と天狗尾根に挟まれる荒澤奥壁は、豪壯雄大といふ點に於てはカクネ北壁に一步を譲るが、狭い荒涼たる谷には底知れぬシュルンドが口を開けて奥壁に近づくを阻み、又東尾根第一岩峯から殆んど垂直に北俣に落ち込む六百米の壁は險惡を極め、カクネ北壁にやうやく積雪期初登攀の凱歌が擧げられた後と雖も、處女岩壁の誇も高く安曇野の彼方に聳立して居たのである。

併し昭和十年七月遂に荒澤奥壁の北稜と南稜とが同時に浪速高校パーティーによつて初登攀された。その後積雪期には容易に人を寄せ付けなかつたが、昭和十二年三月に至つて東京商大の精銳小谷部、森川兩氏によつて北稜が完登された。けれ共南稜は未登のまゝ今日迄殘され、今回の我々の登攀となつた次第である。前の二つの登攀は「關西學聯報告7號」及び「針葉樹9號」に夫々掲載されて居り、そこには今西氏及び小谷部氏によつて荒澤の地形及びそれ以前の登攀の歴史が詳細に説明されてあるから、それを參照して戴くことにして、茲ではカクネ北壁及び荒澤奥壁攻撃の根據地に就いて一言してそれを補ひたいと思ふ。

根據地として最も好適なのは天狗の鼻にキャンプを設置することである。何となれば取付に際しては天狗の鼻から、カクネ及び荒澤北俣に落ち込むルンゼを下降すれば直接北壁及び奥壁の底に出ることが出來、又歸途に於ても荒澤の頭から天狗尾根を下降するだけでキャンプに達することが出來、かくて壁自體の登攀の前後に於て體力を消耗するのを防ぎ得るからである。もし前進キャンプをツリ尾根に設置するならば、安全性は更に増加するであらう。そして天狗の鼻にキャンプを設置するには、普通二つのルートが考へられる。一つは、昭和十年から十一年の冬期に於て立教大學がヒマラヤ行に備へてポーラーシステムを実施されたときのルー



トで、鹿島村から鹿島大川澤を遡行し荒澤出合から天狗尾根の最端部に取付いて天狗の鼻に至るもので、途中我々がジャンクションと呼び慣れてゐる岩峯の下の林中に中継キャンプを設置する必要がある。その二は、昭和十二年春東京商大のとられたルートで、遠見尾根から白岳澤に下降しカクネ出合を経てカクネ里に入り、圏谷の底から天狗の鼻に登るものである。この場合には大遠見或ひは大遠見から白岳澤に出てゐる側稜の中途に、中継キャンプを設置せねばならない。即ち二つのルートの中何れをとるにせよ、最少限二つのキャンプが必要とされる。かくて北壁及び奥壁攻撃に際して、多くの日数と強力なる援護隊が必要とされる事情は明白になつたと思ふ。併し残念なことには、我々はかゝる條件に恵まれなかつた。それ故雪崩の危険の少ない夜中に荒澤谷底に潜入し、夜明けと共に奥壁に取付き、登攀後キャンプには戻らず冷澤小屋に逃げ込むといふ無理な行動に出でざるを得なかつたのである。

登 攀

パーティー 佐谷健吉、伊藤文三、中山和世

昭和十六年三月二十二日～二十九日

二十二日 鹿島村。

二十三日 降雨のため停滞。

二十四日 荒澤出合まで第一回荷上。前日の雨が木の枝に凍結して、踊子の衣裳のやうに七色にきらめくのが美しい。今年は雪が少いせい、いつもなら荒澤出合の少し手前に、デブリで架かるブリッジがない。橋を架けて渡る。

二十五日 第二回荷上。天幕を張り終へた午後五時、日も蔭つて最早雪崩の危険も去つたと思つたので偵察に出掛ける。果して荒澤の谷底沿ひに奥壁に近づくことが出来るであらうか、積雪期には誰も通つたことのない谷底だけに、不安にかられながら狭い陰惨な谷底を辿つて行つた。やがて瀧にぶつかる。左岸の岩壁についた雪を慎重にトラバースして辛うじて上に出ることが出来た。瀧の上部で谷がグツト屈曲するや急に開けて、荒澤奥壁がその全貌を眼前に展開する。そこからは東尾根側及び天狗尾根側から押出したデブリに埋まれ盡された谷底が蜿蜒と北俣入口まで續いて居る。愈々明日は奥壁へ突進することが出来るのだ、激しい闘志が心の中に湧いて来る。出来るだけ上までラッセルして置きたかつたが、日が暮れてしまつたので南俣出合から引返した。

荒澤出合の天幕の中ではオプティムスが青い焰をボウボウ吹いて活動し始め、明日に備へて牛肉のバタ焼を鱈腹つめこんだ。九時シュラフに入つたが、頭が冴えて寝つかれない。荒澤にまつわる思ひ出が走馬燈のやうに次から次へと浮んで来る。峯が月光に青白く輝いてみた夜、遭難の報を受けて現場に急いだこと、激しい風雪の中を死體をのせた重い橇をひつぱつたこと、高校時代の熱情の凡てを山に誓ひ合つた僚友を失つた悲しみ、而も僕等の目標は東京商大の手に落ちてしまつたのだ、そして残る南稜と思ひ乍らも、それを果さずして櫻並木に花吹雪散る日、待稜を下らねばならなかつたこと……。幾度か懐中電燈をつけて枕元の時計を見た。

二十六日 三時起床。四時半キャンプ出発。昨日のラッセルが終る頃早くも夜はほのぼのと明け始めた。どす赤い朝焼に絲を引くやうな雲が流れて天氣が不安だが、今日一杯はもつてくれるだらう。北俣入口から俄然股から腰まで潜り始める。先日の雨もここでは雪だつたに違ひない。喘ぎ乍らラッセルを續け八時南稜に取付く。先づ雪崩路の氷に丹念にステップを刻み、その中途から露岩の下を捲いて稜線に出ようとしたが、岩の下が悪く細いブッシュに擱まつたり、岩と雪の間に手をつつこんだりしてやうやく稜線に出た。平凡な雪稜がしばらく續き、それが切れて壁になる。南稜は北稜のやうな明確な稜をなさず、むしろ岩塊と稜とリンネの錯雑した壁と言つた方がよい。

オーダーをI-Sに変更して左手のアイス・リンネに入る。下から見ると簡単そうだが、取付いてみるとツルツルのアイス・リンネでおまけに傾斜がとてきつい。Iは巧妙なバランスでピッケルを振り乍ら登つて行くが、ザイルは仲々延びようとしなない。やがて姿が見えなくなる。ザイルが延び切つたが、Iは確保の場所がないとどなる。ハーケンを打つ音が聞えて来る。Iの所まで

行つて見ると、アイスハーケンがリンネの真中に半分程打つてあるだけだ。而も太陽の熱で今にも抜けさうだ。Iが一米程登つて露岩にハーケンを打つてやうやう安全感を取り戻す。そこでオーダーを變更し、Iの打つたハーケンに確保され乍ら突進する。リンネを少し出て右手の露岩にアイゼンを喰ひ込ませそれを遮二無二つゝきる。だが雪の一杯つまつたリンネが相變らず續き傾斜は緩くならうとしない。ピッケルのシャフトをさしこみ、そしてをいて足場を丹念に踏みかためるといふ機械的な労作を繰返すだけだ。腕が抜けさうに疲れ果ててピッケルが仲々上へさしこめない。やつとリンネを抜けリンネと尾根の接合点を踏みならして取付以來初めて二人並んで休息をとる(一時)。ビスケットを嚙らうとしたが乾き切つた咽喉を通らない。テルモスのココアを飲みペーストを少量舐めたのみ。そして二人とも無言でじつと坐つてゐた。

そろそろ東尾根第一岩峯から出てゐる尾根にトラバースせねばならない頃だ、そして今見れば急な雪の斜面を距てゝそれらしい尾根があるが、ほんとにそうだらうか、壁の傾斜が益々急になつて行くので焦躁が心を掠める。又オーダーを變更してトラバースを開始し、三ピッチで尾根に着く。豫期通りの尾根だつた。荒澤の瀧はづつと下になつて隠れてしまひ、夏瀧の上部に雪溪となる急なルンゼが見えるやうになる。尾根には樺や、偃松が頭を出してゐるが、傾斜が急であり雪もやわらかいので、折角踏みかためた足場がすぐ陥没してしまふ。樺の枝に掴まつて遮二無二登るより仕方がない。遅々とした労作を幾ピッチとなく繰返すが、何處まで行つても尾根は盡きようとする。そのうち濃い闇が僕等を包み始めた。遂に瀧の上のルンゼに逃げることに決し、慎重なトラバースを繰返して、ルンゼに入った。午後六時あたりは眞暗となり、雪さへちらつき始めた。濡れた手袋を毛皮の手袋に代へ、アイゼンの上にワガンをつける。それからルンゼにつまつた粉雪のラッセルに苦しみ乍ら上へ上へと頑張つた。九時四十分東尾根着、第二岩峯を越えたところである。北槍に向ふ。

さつきのルンゼのラッセルで最後の精力を消耗して體がふらふらする。息がきれるのですぐ休みたくなる。相當度せたところもあるのだが、疲労と暗闇のため恐怖などは感じない。北槍に着くと越中側から膚を刺すやうな寒風が吹き上げて來た。矢張りふらふらし乍らツリ尾根に下り、そこから眞一文字にルンゼを馳せ下る。途中で歩くのが厭になりシッティング・グリセードで飛ばす。グリセードが飛ばなくなつてから冷澤小屋まで随分長く感じた。雪は激しくなりしししと降りつのはつてゐる。休むとそのまま眠りこんでしまひさうだ。何くそとふらふら歩き始める。遂に午前二時半冷澤小屋に辿り着いた。あかあかと燃えるストーブのそばで待受けてゐたNの手厚い介抱を受けた。Iの手の中指と足の親指と中指が凍傷で青黒くなつてゐた。

二十八日 キャンプ撤収。

(佐谷健吉記)



「針葉樹・9」所収
小谷部氏の寫眞より

33. 勝沼 将〔登嶺会〕 「鹿島槍北壁正面尾根」『岳人』第 114 号
 昭和 32 年 10 月 1 日刊 中部日本新聞社発行

要約

昭和 31 年（1956）6 月 10～11 日の記録。登嶺会・勝沼将、野瀬、設楽、高橋の 4 名による鹿島槍ヶ岳北壁正面尾根、無雪期の記録。

本文にもあるが、鹿島槍北壁正面尾根は昭和 10 年（1935）7 月 19 日、甲南高校喜多豊次氏他三名によって初登攀されている。翌日には浪速高校の今西寿雄、七里清二両氏によって第二登がなされた。

★一九五六年六月の記録

鹿島槍北壁の登攀は、従来、殆ど学生団体によって行われてきたが、最近ようやく一般団体の注目するところとなった。

当会も後立山連峯研究の一ブロックとして、創立以来かなりの回数を鹿島槍に向けてきたが、一九五五年春、大冷沢を中心とした各ルートの研究も一応完成したので鹿島槍の第二の段階として、北壁の無雪期を対象に、一九五五年八月、五六年六～七月、五七年五月の四回にわたってアタック。直接尾根、中央ルンゼ、正面尾根、正面ルンゼ、主稜、ピークリッジの登攀を行った。

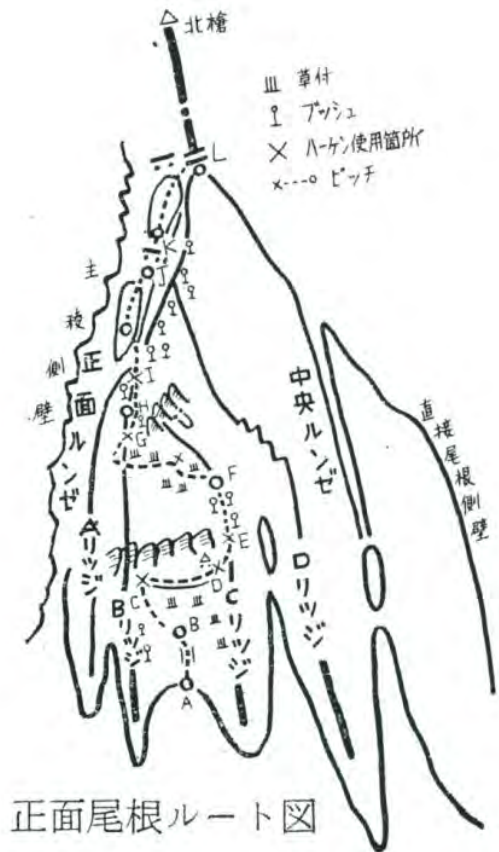
鹿島槍北壁についての概要、およびわれわれの登った大半のルートについては、大阪大学山岳部によって本誌五五号に紹介されているが、正面ルンゼおよび正面尾根の報告を欠いているので、北壁の地形をより正確にする意味において、その一つ正面尾根の記録を発表させていただく。

★正面尾根

パーティ 勝沼、能瀬、設楽、高橋。

六月十日（晴）カクネ里への下降は昨日の偵察で容易だった。下降した沢は、天狗ノ鼻から一〇〇米ばかり下の雪田より右に下りて、>字になってカクネ里に落ちこんでいる。当時、クレバスのなかったのはこの沢だけだった。

昨日は下降路を探すのに懸命で充分ルートの偵察もしていない。登攀ルートを検討しながらの登高はややもすれば遅れがちになる。洞クツ尾根末端で第一回の食事をすましたのは既に十一時。最初の計画では、直接尾根へも一パーティ送る予定だったが、パーティの弱体化を恐れ、正面尾根だ



けにした。例年に較べて雪は多いようだったが、洞クツ尾根末端から取付までは到るところクレバスだらけで、それを除けながらの登行はかなりの時間を要した。結局は雪が多かろうと、少かろうと、時期がくれば、切れるところは切れてしまうのであろう。

取付は幅五米程のクーロアールで下半一五米は岩場。その上は急斜面の草付で上部は大きなバンド（註・遠見尾根からも、それと指摘でき得るほど大きなものでB～Cリッジ間にまたがり二〇米程の長さを持ち、右側に行くに従い幅広くなる。Cリッジ側に四、五人は楽に入れる岩小屋があるので、岩小屋バンドと呼んでいる）に終わっている。

岩場は一見やさしく見えるが、上のクラックになるあたり非常に悪く、トップの設楽は、クラックを右に逃げて突破する。岩場の上はテラスが全然なく、B点あたりに適当なアンカーレッジを見つけて四人ばらばらに立っている始末だった。その上は急な草付で左側にある灌木をたよりに登るより外にはない。B点から岩小屋バンドまで四〇米一ぱいだった。バンドの上はものすごいオーバーハングで全く手がつけられず、下の圧倒的に切れた草付を見ながらCリッジへ逃げる。

この辺の岩は殆どハーケンがきかず、打ちこんだハーケンが歌い始めると岩がリスに従って割れてしまう。どうにか打ちこんだビレーイングピンに身をたくした設楽が、再びトップでこれを突破したが、ここは高度感だけの問題で技術的にはそうむつかしくないように思えた。岩小屋とCリッジの間は小さなクラックになつていて高度感を殺すのに都合よくできている。CリッジE～Fは再びブッシュ漕ぎで四〇米一ぱい。この辺で見た中央ルンゼはその側壁があまりにも凄まじく、ちよつと登高欲とは縁遠いほどである。Cリッジの最後はオーバーハングの壁になつて正面尾根メインリッジに消えている。

F点から右側草付には、岩小屋バンドの上のオーバーハングした上部にあたる場所を登るわけだが、灌木の殆どない垂直に近い草付は、見るからにやつかいな代物らしい。テラスの五米ほど上部にビレーイングピンを打ち、全員緊張の中に能瀬が登る。はじめ10米程左へトラバース。二、三本の灌木を頼りに二〇米程直上するとCリッジがハングしてメインリッジに消える下に出る。そこでハーケンを打ち、再び左へトラバース、Bリッジを廻りこんで順層になつた岩場に出る。

この辺から尾根の傾斜は若干落ちてくるが、相変らずテラスがない。能瀬との連絡もAリッジをはさんで、声のとどかず全くとれない。ただザイルが重そうに少しずつ伸びてゆくだけである。時間はすでに一時間もたっている。日は既に落ちて終つた。やがてザイルが止まつてしきりに何かわめくのが聞こえる。空身でビバークの用意がないのを心配して勝沼が上の状態の全く判らないままザックを届けることにする。設楽のジッヘルで真暗の中に勘だけの登攀が始まる。

伸び切つたザイルは六〇米一ぱい。途中、何回も伸び切つたザイルを流してもまだ足りず苦しい登攀だった。ようやくのことで能瀬のいるG点についたが、やはりテラスがなく、能瀬が岳樺の木にぶら下がるようにしてザイルをたぐつていた。時刻はもう八時。しかしあまりにも不安定な場所でビバークもできかねるので、テラスを探すべく能瀬が行動をおこしたとたん、真暗の中から飛んできた落石にうたれて、勝沼は顔面にかなりの負傷をしてしまつた。やむ得ず、岳樺の木にぶら下がるような苦しいB・P。六〇米伸び切つたザイルの下では、設楽、高橋がB・P。

[コース・タイム] 天狗ノ鼻 (八・〇〇) - カクネ里 - 洞クツ尾根末端 (一〇・〇〇～一一・〇〇)
- 取付 (一二・〇〇) - 正面尾根 B・P

十一日 (晴) 気がかりだつた天候も今日一日は持ちそうだ。寒さしのぎに五時行動を開始する。まず下の二人がこちこちの体で登つてきて昨夜来の久瀧。まず飯という設楽の挨拶に一本の岳樺の本

に四人が止つて珍妙な食事をした。

この上はあい変わらず、テラスのない草付を、ブッシュ頼りの登撃がつづいた。予期せぬB・Pにすつかり消耗して、精神的にも、肉体的にもかなり苦しい。三〇米二ビッチ半。ようやくI点につくと尾根の傾斜は、ぐんと落ちて、正面ルンゼ（註・主稜、正面尾根の間のルンゼで適当な名称がない。報告上必要に迫られ、位置の関係からわれわれは正面ルンゼと呼んでいるが、一九三六年夏、関学が中央ルンゼを登攀し正面ルンゼと呼称したことがあるので、わずらわしい感がしないでもない。他に適当な名称があればそれに従いたい）と正面尾根の高差も殆どなくなり、ただ正面尾根の、>の曲り角のカンテ状の岩壁だけが一際目だつて高いだけである。ここでアンザイレンを解き、正面ルンゼに下り、事実上の登撃終了とともに、ありつただけの食糧を出して休養をほしいままにした。

ここからは具合よく残っている正面ルンゼの雪渓に思い思いのステップを切つたり、比較的草付のない岩を選んで登り、J点に達した。正面ルンゼはここで正面尾根のカンテ側壁と主稜の側壁とで約二〇米程のチムニー滝を形成している。高橋が長身にものをいわせて突破すれば、後はもう雪渓をたよりにL点まで、ここで初めて国境稜線にお目見得した。

これから上はどこを登つても同じことだが、どうせならとご丁寧に正面尾根にブッシュを漕いで二時間。真直ぐ北槍に飛び出した。

〔コース・タイム〕 B・P（五・〇〇）－J点（九・〇〇～一一・〇〇）－L点（一三・〇〇）－北槍（一五・〇〇）－天狗の鼻（一八・〇〇）

〔後記〕 正面尾根は、一九三五年七月一九日、甲南高校喜多豊次氏他三名によつて初登攀され、その翌二十日、浪速高校の今西寿雄、七里清二両氏により第二登がなされた。なお、一九四一年～四二年頃関西学院が登つたらしいが、これは詳細不明。この尾根の登攀は決して快適とはいえず、端的にいうならば、急峻な草付の悪さというより他にない。無雪期よりむしろ積雪期に期待したいと思う。



正面ルンゼ（一九五七年五月に登攀）の記録は、前記の正面尾根のものと同時にここで発表させていただく予定で、原稿を一応まとめたものの正確な登攀ルート図ができないので、これは一応見送ることとし、再び登撃の機会をえてより正確なルート図を作成、後日誌上をかりて発表させていただきたいと願っている。なお、正面ルンゼという呼称は正面尾根と並行したルンゼであるところから、われわれが便宜上命名したものであつて他に適当な名称があればそれに従いたいと思つている。

（勝沼将記）

（事務所・東京都文京区蓬来町六一、豊田方）

34. 阿部和行〔紫岳会〕「鹿島槍荒沢奥壁―南稜の成功と北稜の遭難―」

『岳人』第218号

昭和41年3月1日刊 東京中日新聞社発行

要 約

昭和40年(1965)12月25日～昭和41年1月10日の記録。鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁南稜の成功と北稜の遭難。極地法的なテントの進め方を実践。これまで厳冬期(1月)の登攀はされていない。

メンバーは、9名。アタックメンバー南稜―平田、渡辺 北稜―三好、日阪(にっさか)。

行程は、12月26日 大町鹿島狩野宅 荒沢の偵察

27日 荒沢尾根末端―I 峯

28日 I 峯―II 峯コル(C1 地点)

29日 II 峯―III 峯まで工作

30日 南稜隊C1―C2―III 峯、北稜隊北俣―第一岩峯―M岩峰下

31日 南稜隊4P―第二岩峯―C2 北稜隊M岩峰―1名遭難

1月1日 南稜隊C2から救出―荒沢頭―小舎岩

2日 南稜隊M岩峯―小舎岩

3日 大町へ連絡 C2へ

4日 鹿島狩野宅において協議。遺体搬出を決定。

5日 前日からの雪で救助作業難航、鹿島―大谷原。

6日 大谷原―天狗尾根1700m地点にC1。

7日 天狗ノ鼻にC2。

8日 風雪激しく行動中止。

9日 風雪続き、搬出中止を決定。下降する。

10日 この日全員鹿島へ下山。救出は5月以降に。

一九六五年十二月～一九六六年一月

はじめに

すでに長い間、鹿島槍にかかりきりになっていたわれわれであったが、ここ数年、なぜか正月の鹿島槍から遠ざかっていた。しかし会の二ヵ年計画の最後の冬山に、高度な水準の対象として再び鹿島槍がとりあげられ、荒沢が選ばれることになった。今回の冬山の目的は、登降の困難な尾根にテントを進めて最後にバリエーションルートを登攀することであり、その意味で荒沢は最も目的にかなった対象であった。

まず第一に荒沢尾根までのアプローチは荒沢をつめるものであるが、これは雪崩を十分に警戒しなければならず、雪崩についての高度な判断を必要とする



荒沢尾根II 峯より奥壁 65.12.29

こと、第二に荒沢尾根は一九五三年十二月に紫峯山岳会が初登して以来、春には数パーティが登っているものの、冬には第二登がなされていないことと、このせまい尾根で極地法的なテントの進め方を行ってみること、第三には我々の知る限りでは奥壁の南稜、北稜とも厳冬期には登攀されていないこと、などがあげられる。最初の予定では、荒沢尾根から奥壁登攀後、再び荒沢尾根を下降する計画であったが、荒沢を再び下ることは雪崩の危険が倍加することになるので、東尾根上のC2にアタック隊を収容後、東尾根を下降することに計画を変更した。なおわれわれの方針として無雪期に偵察など行わず、いきなり厳冬期に入ることをたてまえとしているので、今までに登ったルートは数年前の五月の北稜だけで、他はいっさい未知であった。

以上の計画のため、できるだけ重量をきりつめたが、出発直前に流感による隊員一名の不参加のため、一人当たり約五〇kgの重荷となった。

ア プ ロ ー チ

十二月二十五日

十八時十三分発「彩雲」で全員九名新大阪出発。

二十六日 薄曇後雪

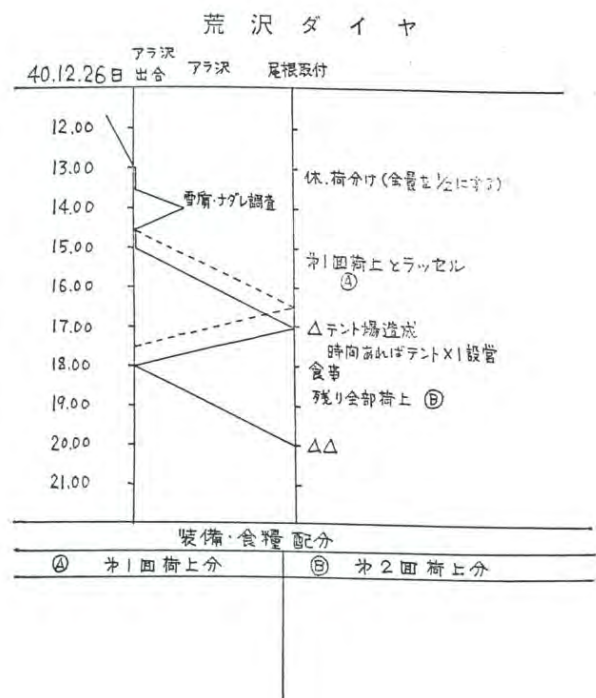
大町からマイクロバスで鹿島と大谷原の中間まで入る。この日は荒沢の偵察ときめていたので荷を置いて鹿島の狩野さん宅へ寄って朝食後、再び戻って大川沢へ入る。入山が早いためか、わずかに雪面がへこんだトレイルがわかるだけで、膝ぐらいのラッセルを続けて荒沢出合へ着き、天狗尾根の取付きの対岸にテントを張る。ここから荒沢尾根の取付きまでの沢筋は雪崩を警戒して、別表のようなアラ沢ダイヤなるものを用意したが、荷が重いため荒沢通過は翌日まわしに変更した。しかし雪崩のための雪質調査に三名が先行して滝を巻いた地点まで達し、この夜の新雪が少なければ大きい雪崩は出ないとの確信を得た。

この報告によってさらに工作隊三名は滝の高巻きにザイルを固定し、ゴルジュ状の地点まで偵察して帰る。

二十七日 雪後晴

重荷のまま一気に尾根まで達するのは疲労が多くなり、雪崩の時間にも引っかかることになるので荷を二分して第一回荷上げは七時発、ゴルジュ状入口の岩の下にデポして引返し、第二回荷上げは九時十分発、そのまま一気に荒沢尾根末端へ十三時四十五分着。その頃から空は晴れ、北俣の奥に奥壁の一部が空高くそそり立ち、その手前にあくまで急峻に伸び上った荒沢尾根が立ちはだかっているのが眺められた。積雪量は平年より少なく、気温も高く茸雪もほとんど出ていないように思われる。途中両岸から小さい湿雪雪崩が出て雪煙をかぶるが五月の新雪程度で危険は全くなく、その後二日間は雪が安定していた。

一部の者はデポ地点へ下降し、十五時三十分、尾根末端を登りつめた雪面のBC地点へ荷上げ



を終る。この間にテント一張り而建て工作隊はI 峯までラッセル。

荒 沢 尾 根

二十八日 晴後雪

工作隊三名は先行してラッセルとザイルの固定を行なう。荷上隊は、工作隊の一時間半後にテント一張りその他を持って出発。I 峯上の雪稜に岩壁が立ちはだかった所で工作隊に追いつく。工作はこの岩壁の下部にそって右上へザイルを約百m固定し、北俣へ分岐した尾根のコルへ到着。この地点で荷上隊は二分し、一隊は工作の後を登り続け、一隊はBCを往復。コルの上部は五mの岩場があり、そこから広い不安定な雪面が約百m続いているのですべて固定ザイルを張る。小さい尾根を右にまわりこんで登りついたII 峯直上の尾根上に少しゆるやかな斜面があり、工作隊はII 峯を越えたコルに達したが、時間の都合上ここをC1 地点とする。テントの右は北俣へ急峻に落ち込み、左は南俣へ急な斜面が続いた所で、テントの外ではあまり油断のできない場所である。

二十九日 雪ガス晴ガス

C1 から工作隊三名が出発（八時）。II 峯を越えると尾根は急になり、不安定な雪の尾根を登りきるとIII 峯のc 峯につく。ここから尾根は極端に痩せ細り、雪のすばらしいナイフエッジが続く。c 峯から僅かに下ってワカン一つの幅のリッジが少し。その先は背丈ぐらいの岩があり、これを登ると雪稜がb 峯へ続く。リッジはb 峯でほとんど直角に右へ曲がり、手の切れそうなナイフエッジの雪を落とすと、ワカン一つの幅がやっと乗る左右垂直のリッジになる。その先にかぶった雪を横穴を掘るようにして落としていくと岩の小さい棚が現われて右上へたどる。棚の切れた所から尾根上へ出たところはa 峯の少し手前。ナイフエッジ通しにa 峯に立ち、下り気味になって岩の小さい段を下りるとギャップの手前の僅かに広い所へ立つ。この雪を掘って横木を埋め、支点にして懸垂気味に約十五mでギャップにおり立つ。ここも人がすれ違える幅はない。

ギャップから約十五mはブッシュまじりの草付急斜面で、途中に古い固定ザイルが残っていた。まわりの斜面よりやや小高い尾根状の不安定な雪をラッセルして登ると、小さい雪庇が出た所が東尾根であった（十五時）。今までの荒沢尾根にくらべると東尾根がひどく広々として見える。荒沢尾根の固定ザイルの総延長は五〇〇mを越えた。

一方、荷上隊はBCを撤収。C1 からおりて来た二名と一緒に昼すぎC1 着。すでにテントの張ってある狭い尾根の上の雪を切り開いて、段ちがいにテントを張る。右側は人が通れる程度、左側はシートの外側へ足で立つぐらいの広さしかない。荷上隊のうち二名はザイル工作の仕上げにIII 峯まで登って工作隊と一緒に帰ってくる（十七時三十分）。

この日は一日中雪崩の音が絶えなかった。今までは雪もあまり降らず、気温も大して下らない。奥壁も雪が少ないままである。気圧配置はこの天候が長く続くとは思われず、崩れだすと大陸の高気圧が張り出して条件が悪くなりそうだが、まだ二日ぐらいはぐずついたまま続きそうである。やっ



とC1を作って全員集結したところで、アタック隊を收容するC2もまだできていない。連日の行動で多少疲れているかもしれないが、奥壁のアタックは一日延ばせばそれだけ条件が悪くなる。夕方、リーダーからあすアタック出発の提案が出て、夕食後検討する。体のコンディションや気象条件からみて出発にきめ、あわただしい準備を終えて寝る。

三十日 ガス後風雪

サポート隊のテントでは三時三十分から食事用意。アタックメンバーは南稜が平田、渡辺、北稜が三好、日阪。いずれもリストでチェックして準備を終え七時三十分C1出発。ガスの立ちこめたさえない天気だった。ラッセルを予想して両隊ともワカン一足ずつ持参。

一方、荷上隊はテント一張りをたたみ、十時十五分出発、C2に向かう。固定ザイルに助けられⅢ峯に立つ頃はガスでアタック隊は見えない。ギャップの通過と東尾根への急斜面で時間をくい、十四時頃東尾根着。早速、C2の設置にかかる。ガスの切れ目に北稜隊が第一岩峯とM岩峯の間あたりを登るのが見え声援を送る。この頃から雪がひどく降りはじめ、見るまにテントを埋めだした。十五時二十五分C2完成、下降に向かうが、荒沢尾根への斜面は雪庇を越えた吹きだまりで雪が全く不安定だ。

ザイルを固定しながら下降し、新雪をどんどん雪崩させておける。登りのラッセルの跡はほとんど役に立たない。ギャップへおり立つのに再び時間をくい、Ⅲ峯側へ登りついた頃は風雪になっていた。

雪の間から南稜隊がすでに下のテラス附近まで登っているのが見え、トランシーバーで交信する。北稜隊はあまり距離が伸びていない。天狗尾根から見るのと違って、荒沢尾根から見る奥壁は南稜が雪のリッジばかりで取付きも心配したほどでないのにくらべ、北稜は第一岩峯、M岩峯の下あたりも手ごわそうである。幸いなことにM岩峯の上の茸雪はまだ発達していない。しかし今の速度からすると明日はせいぜい小舎岩まで抜けられる程度であろう。そして更に荒沢の頭を回って東尾根第二、第一岩峯を下ってC2までもう一日かかる。南稜隊は明日中にC2まで入れそうだ。再び幕が下って姿を消した両隊に声援を送ってC1へ十八時十五分着。

南稜の登攀

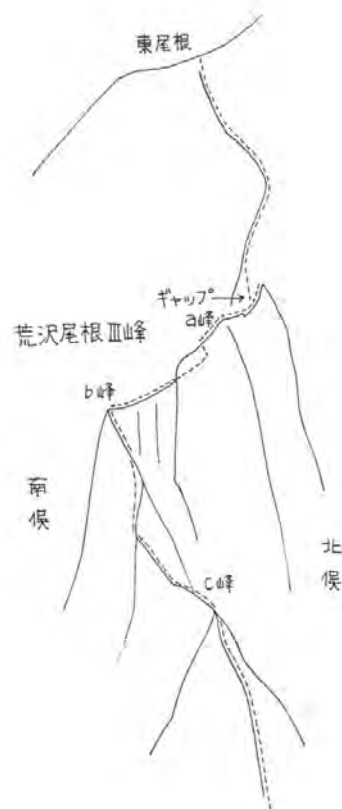
十二月三十日 ガスのち風雪

荒沢のギャップの固定ザイルの下へさらにザイルを通して荒沢の北俣へ下降。北稜隊は腹まで雪にもぐりながらのラッセルで本谷を横切って行った。北俣左ルンゼを横断、アイスリネ右の尾根末端着、直ちに登攀開始（八時四十分）。

1P（ピッチ）ルンゼ状、スラブ上の雪をだましつ直上し尾根へ出る。2Pブッシュつきの急な雪稜。3P雪稜。4P岩峯につき当り右へトラバース気味に登るが悪い。5・6P雪。7Pで南稜右手の扇状雪壁ルンゼ横断。ハーケンでアンカーし、扇の左手雪壁をトラバース、8・9・10P。ここで荒沢尾根とトランシーバーで交信。さらに2P登って下のテラス右端の小岩壁下につきビバーク（十七時頃）。

三十一日 風雪

八時四十分発、小岩壁の右を巻きブッシュを右上ぎみに登る。4P悪い雪壁頂上。5P雪壁直上してAフェイス直下の稜へ飛



び出す。6・7・8 Pは稜を忠実に登り、十四時二十分東尾根に抜け出した。同時登攀もあったが計20 P (ザイルは八^ミ六十^ニをダブルに使う)。全体としてブッシュと雪の日本式登攀であった。

十五時、第二岩峯登、途中降雪のためトレースが消えた東尾根をたどり十七時C2に入った。

この日、C1からの荷上隊には雪のためアタック隊はまったく認められなかった。前日からの降雪のため十時三十分頃、本谷を落下する大規模な雪崩があり、その雪煙は北稜や荒沢尾根の上まで吹き上げてきた。北稜隊は苦戦しているらしく、風向きによってはどなり合っているのが手にとるように聞こえる。夜の交信で南稜隊はC2へ入ったことを知ったが、北稜隊の日阪の悲愴な叫び声を聞いたと伝えてきた。荷上隊でも北稜隊のピッチの遅いのを気にしていた折でもあり、一瞬不安な空気に包まれる。その後の夜の交信で北稜隊の三好の声は聞こえるのだが、日阪がどうかなったことしか聞きとれず、C1からでは手の下しようがないので一切をあすに持ち越すことにする。

北稜の遭難

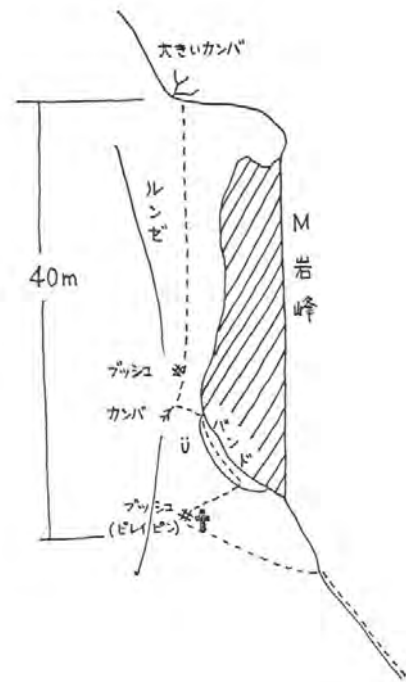
十二月三十日 ガスのち風雪

本谷の雪はきのうの晴天で落ち着いていた。九時十分、北稜の末端を出て右側の沢のデブリに登り、途中から北稜の斜面に取りつき、胸までのラッセルで第一岩峯下の尾根上に出る(十時三十分)。休憩後アンザイレンして第一岩峯を左に巻き、残置ハーケンと新しくハーケン一本を打って第一岩峯に立つ(十二時三十分)。

股までのラッセル三十^ニで六^ニの高さ七十度の傾斜のコブを右に巻き3 Pで休憩。日阪の調子は悪くない。その上の傾斜六十度の岩の上の雪を落としながら三好トップで登るが腕力がつき、日阪トップで手がかりのない岩を絶妙なバランスで乗り切り、M岩峯下六十^ニの水平な雪稜に出る。二人並んだときは十七時頃で雪を削って座りこみビバークザックにもぐる。体は雪で湿っていたが特に寒くもなく、重ね着もせずに夜をすごす。

三十一日 風雪

昨夜はやはり寒くたびたび目が覚めては温いものを作って飲んだ。八時半頃ツェルトをたたんでみたら、夜の雪でツェルトが半分ぐらい埋っていた。日阪トップで左にトラバース。二十^ニ登ってブッシュで確保。これも相当な悪場で、これをこなした日阪のコンディションは悪くなかったように思う。トップ三好に交代。M岩峯基部の傾斜したバンドに出るがかぶり気味。ハーケンを一本打ち左に二^ニの小さい樫にザイルシュリングをかけてランニングビレイする。そのままルンゼにはいり、凍った雪にステップを切って四十^ニほとんどいっばいでM岩峯上の大きい樫に達した(十四時三十分)。セカンドの日阪は五^ニぐらい登ったが急に力がかかり、下の見透しがきかず声もとどかないので少しずつザイルを伸ばす。こんな状態が三回、一時間ぐらい続いていたので樫にザイルを固定して三好がおいてみると、日阪はザイルにぶら下がってすでに気力がなく、ただザイルを伸ばしてくれというだけだった。再び登ってザイルをゆるめておいてみるが状況は変わらず、トラバースのところで振られてしまうとのことだった。ザイルシュリングでプルーシック結びにして登ってこいといってもうまくいかず、ルンゼの途中のブッシュで確保して振られるのを少なくして登らせてもやはり振られてしまう。ザイルの途中を結んで手がかりの輪を作っておろすが、その



少し上のブッシュがつかめず、ザイルを一たぐりする力がなく再びぶら下がってしまった。

ザイルを伸ばしてくれというのでもう一度登って伸ばし切っておいても、相変わらずぶら下がった形になっている。すでに暗くなりかけてヘッドランプで見ても体勢がよくわからない。ただザイルを伸ばしてくれというばかりで、この頃から多少精神の混乱状態をきたしていた。

苦心して日阪の位置までおりてみたが、すでにアイゼンを雪にけりこむ力がなく、三好も足場が悪いため体勢を立て直してやるのがせいっぱいだった。そのうち目を開いているのに目が見えないと告げ、次第に意識がなくなって両手から力が抜け、呼んでも返事せず、けいれんを起こして動かなくなる。三好はもはや手の下しようもなく呆然とたたずむばかり。やがて気を取り直して状況を記録しようとした手帳も手袋の間から落ちてしまい、仕方なくその横でビバークにはいる。

三好は一人でも北稜を抜け出られると考えたが、万一のことがあればこの状況を伝える者がなくなるので救出を待つ方針をきめる。

永い夜が明け、C 1との交信でやっとパーティの者に状況が伝わる。そして永い一日、救出を待ったが小舎岩へ救出隊が着いたのがおそく、再び永い夜にはいる。

救 出

四十一年一月一日

早朝の交信でC 1は北稜の状況を知る。C 2からは前日の南稜隊が三好の救出に出発するが、荒沢の頭を越えて小舎岩に到着したのが十四時だった。固定用ザイルを荒沢尾根で使い切っているためにその時刻からは手の下しようがなく、二名は天狗ノ鼻の他のパーティへ応援を求めに行き、そのまま天狗ノ鼻泊りとなる。一方、荒沢尾根では四名がC 1からC 2へ入って時間切れとなる。

二日 雪

天狗ノ鼻の二名は神戸FRCの好意でザイルを借り、協力してもらって小舎岩から下降に移るが、最初の百ばかりはザイルの固定点がなく、多少不安定な雪のリッジを強引に下降を続ける。木の出たところからザイルを固定しながら下るが、なかなかM岩峯まで到達できない。

一方、C 2から二名がビバーク用意と荒沢尾根ではずしたザイルを持って小舎岩に着いたのが十四時頃。ただちに北稜を下降、先発隊と合流したのがM岩峯上であった。見れば太い樺にザイルが固定してあり、先日のトップの到着地点だとわかったが応答がない。別のザイルを使って懸垂でM岩峯下へ出てみてはじめて状況がつかめた。

すでに遺体となった日阪はザイルで確保されており、三好は立ち上がって出発の用意をしていた。M岩峯上からザイル二本をおろし、まだ元気な三好を確保して登る。最後に三人で力を合わせて遺体を引き上げようとしたが到底無理なことがわかったので、仕方なく遺体はザイルで確保したまま残し、途中M岩峯までの固定ザイルもそのままに小舎岩まで帰る(十七時三十分)。FRCの好意でそこへ張っていただいた三人用テントに三好を収容し、二名は天狗ノ鼻へ下降して泊る。

遺体搬出のために

一月三日 快晴

遺体の処理などのために北稜の下降にかかるが、前夜来の強風でトレースは全く消え、雪も非常に不安定で危険が感じられたので、遺体搬出は後日のこととして一名は天狗尾根を下って鹿島と大町へ連絡に、他は再び荒沢の頭を越えてC 2へ帰る。この日、荷上隊はC 2から荒沢尾根を下ってすべての荷物と固定ザイルを外してC 2に集結した。

一方、鹿島へおくれてはいった一名が東尾根一ノ沢ノ頭まで登ったとき、東尾根を下ってくるパーティに遭難の報をきき、直ちに引返して大阪へ連絡し、大阪では出動の態勢にはいった。また大町へ下った者から詳細を大阪へ流し、明日東尾根から下山するのを待って対策を協議することとす

る。

四日 雪

大阪から集まった会員と下山者合わせて十七名が鹿島の狩野さん宅で協議。会員の稼働状況や精神的なコンディション、そして積雪状況などをにらみ合わせて、直ちに遺体搬出という方針を決定。五日から十日まで六日間、延べ九十四名の会員を動員することにする。

五日 雪

搬出隊の食糧や燃料を大町へ購入に出る者、さらに現場から搬出するにはザイルだけでは困難なので長野県警察本部と長野岳連のご好意で遭難救助用具の借用に出る者、さらに天狗尾根へ先発する者などごったがえしたが、そのいずれもが前日からの大雪で足をうばわれ、鹿島から大町まで歩いて行ったり、天狗尾根どころか大谷原までやっとたどりついたり、第一日目からまったく予定が狂ってしまった。

六日 晴

やっと晴天となり、行動が軌道に乗り出したが前日のおくれを取りもどすに至らず、天狗尾根の一七〇〇付近にC1を作る。

七日 雪

二日間の大雪は今までのトレースをまったく消したうえ、さらに胸までのラッセルを強いられて遅々として進まない。二十一時頃やっと天狗ノ鼻にC2設営を終る。ただし救助用具や食糧の大部分は第二クロアール下にデポしたままとなる。

八日 風雪

C2から出発したものの風雪はげしく小舎岩までも達せられず、またデポへ下降途中で雪面に数回亀裂がはいって雪崩の危険が非常に大きくなったので行動を中止する。そのため小舎岩に作る予定のC3の雪洞は断念する。一方、C1からの荷上隊もラッセルに苦しめられ、途中でC2との交信の結果引き返す。

九日 雪

依然雪は降り止まず、昨日のラッセルの状況から判断して、このままでは到底搬出できないし、また場合によっては天狗ノ鼻からの脱出にも危険性があり、隊員の休暇の都合や食糧の不足など一つとして有利な条件がないので、遂に今回の搬出を中止し、午後C2撤収、下降に決定する。C1からは雪崩を落としながらラッセルを行い、天狗ノ鼻の下りはすべてザイルを固定して十九時頃全員C1に集結。

十日 晴後曇

大陸の高気圧の進度が予想外におそく、予定より一日おくれて晴れたのはまったく皮肉である。この日全員鹿島へ下山。

以上の報告のとおり、今回の搬出はまったく失敗に帰し、遺体をM岩峯下に残したままとなったことは家族の方をはじめとし、関係官公庁、さらに今後、北稜登攀を目的にしておられる方々に大変ご迷惑をおかけすることになって申しわけなく、当会としては条件が良ければ三月下旬、最終的には五月初めを目標に遺体搬出を行なう予定としておりますのでご了承いただきたく存じます。

(文責・阿部和行)

35. 長沢修介・千々岩玄〔大町山の会〕 「爺岳西俣奥壁奥ノ稜」『岳人』第239号
昭和42年9月1日刊 東京中日新聞社発行

要約

昭和42年(1967)5月1~3日の記録。爺ヶ岳西俣奥壁奥ノ稜登攀の記録。

アタック・パーティは渡辺捷夫と千々岩玄。

ルートは、西俣BC-西沢-C沢出合-岩壁基部取付-逆U字岩壁上部-奥ノ稜-稜線。

一九六七年五月の記録

これは大町山の会がこの年の五月に後立山で試みた登攀のうちの一つである。もう一つはラウンド鹿島槍であった。

爺岳北峯の東北面、西沢の奥にある壁は夏の鹿島槍を登った人は鹿島槍の本谷側に目を奪われてしまって、一見赤茶けたもろそうに見えるこの壁を見逃してしまうことが多い。しかし、残雪期や積雪期に一ノ沢出合付近や高千穂平などから見ると、日本ばなれした美しさに登攀意欲をそそられることだろう。

われわれも積雪期の爺岳に足跡を残し、最後にこの壁に取り組んだのは六二年一月であった。この時は三日間雨のためついに行動できず、引き返すことになってしまった。

六三年春、五月の連休を利用して、この壁に二隊を送り、右稜および中央稜の完登を得ることができた。

この壁は、右稜、中央稜、そして一番大きい左稜の三本のリッジと、右・中央稜間のA沢、中・左稜間のB沢、左稜・冷尾根間のC沢の三つの沢から成っていると思われていた。しかし、六三年頃からもう一本C沢の奥に大きなリッジがあるのではないかとということが話題になりはじめた。



西沢より奥ノ稜を見る

以後機会あるごとにこの壁の偵察をしたが、はっきりしないままに、奥ノ稜の存在をみとめていた。

六六年の冬、鹿島槍東尾根を登った仲間から一ノ沢頭付近からのこの壁の写真を見せられて驚いた。左稜の左にもう一本、立派なリッジがあるではないか。しかも下半部は岩壁に近くほとんど爺岳北峯ピーク近くへ突きあげているのである。

こうして、われわれは再度この壁へ挑む決意を固め、五月の入山となった。

五月一日 雨

雨の入山のため、BC予定地西俣出合着一三時、BCを建設。午後はずにそなえて休養、計画

を話し合う。

二日 晴

三隊に分かれて偵察、一隊は西沢から冷尾根に取りついて冷尾根側から、一隊は左稜を登って左稜側から、他の隊は西沢から高千穂上部に出て国境から、いずれも正午に国境で会って偵察の結果を話し合うことにした。その結果、両側とも取付点となる場所は見当らず、結局下部の逆U字形の岩壁正面をルートに取るか、逆U字の左側カンテに取りつくかがキーポイントであることがあきらかになった。

もう一つ、最後の主稜へ出る壁は大きな雪庇が今にも落ちそうにのしかかっている通過不能の状態に近い。これは上部からサポート隊を出して上部工作することにした。

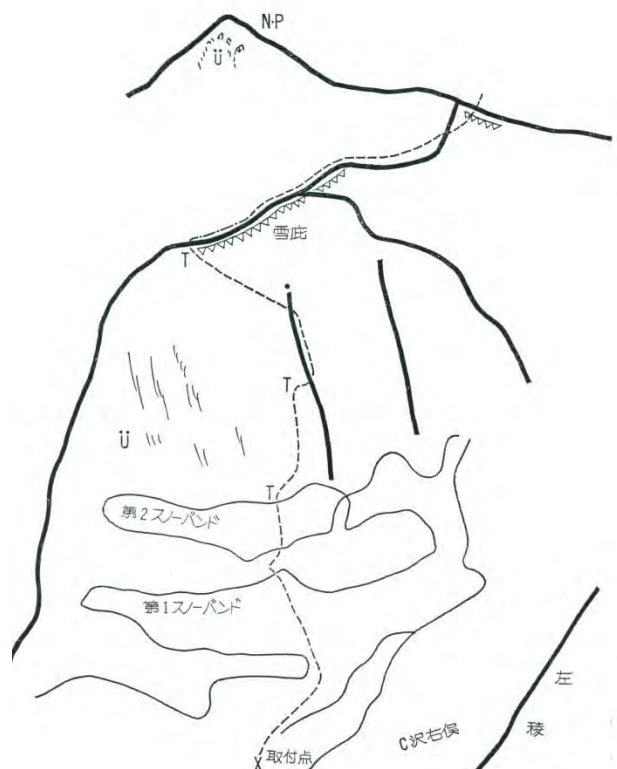
三日 晴

西俣のテント地を、夜空の星を見上げながら、ヘッドランプの灯を頼りにサポート隊とともに出発する。アタック・パーティは渡辺捷夫と千々岩玄のペア。

西沢を詰めて、さらにC沢を詰めなければ、奥ノ稜には取りつけない。気温が上昇すると、C沢上部からは落石が頻繁にあるので、少しでも早く奥ノ稜の下部岩壁基部まで行きたいのである。西沢のツメに達する手前で、しらじらと夜が明けて来て、正面に奥壁の岩壁が黒く姿を見せて来た。やがて、一日の晴天を約束するかのように青空に明るい光が感じられた。

西沢のツメでサポート隊と別れて、C沢出合へ急ぐ。急な斜面は次第に傾斜を増して来るので、思うようにピッチがあがらない。落石とブロックの通過した跡が大きな溝を作っている。落下物に注意しながら一人ずつ素早く渡る。C沢出合から沢はやや左手に伸びており、その正面に、逆U字形をした奥ノ稜の下部岩壁が聳えている。黒々とブッシュのついた岩壁の中央部に一本（第二スノーバンド）とその下に一本（第一スノーバンド）、計二本の太いスノーバンドが入っている。きのうの左稜、および冷尾根からの偵察の結果、この岩壁の左リッジも、また右側の雪面もルートには不適當だという結論が出ていた。果たしてこの正面岩壁を登れるのかどうか、若干疑問を抱いていた。しかし、こうして、いざ岩壁の基部に近づいてみると、それほど威圧感を受けない。第二のスノーバンドまで登って、その右のリッジに取りつければ、どうにか登れそうである。C沢では、落石もブロックも唯一のルートを進んで落ちていたので、その通路の雪は深くえぐり取られている。出合付近では冷尾根側を登ったが、一般的にC沢は左稜側を登った方がよさそうだった。われわれの眼前を拳大の石が空を切って飛んで行った。まだ六時過ぎだというのに、早くも沢の上部では崩壊がはじまったのである。左稜から派生している岩稜の陰で、軽い腹ごしらえをし、C沢出合から一時間半ほどで、岩壁の基部についた。

正面やや右手から第一スノーバンドへ達している傾斜の強い雪面から取りつく。右斜上へ五〇度、ルンゼ状の所を落石に気を配りながら登ると、第一スノーバンドの入口である。コンティニューアスで四〇度ほど直登すると、上部に行くにつれて傾斜が強くなっているこのスノーバンドの出口に達する。出口付近のカンバの木で確保し、隔時登撃をはじめ。左へ三〇度ほどトラバースし、もろい草付の岩をカンバの木を頼りに越えると、傾斜のゆるい草付となり第二スノーバンドへ達している。草付で細いカンバの



木を頼りに直登するのは心もとなく、右斜上へ一五分トラバース気味に進んで第二スノーバンドへ入る。入口で確保し、四〇分このバンドを直登する。傾斜はやや強いが、雪が割合しまっており、意外に楽である。丁度四〇分でここを抜けて、バンドの出口の雪の小テラスにステップを切り、岩にビレーする。ここから右へ小さなリッジをトラバースして越える。草付の岩に確実なステップを切りながら一〇分ほどトラバースすると、草付岩の凹角に入る。岩の雪は硬く、高度感もあり、取付点まで登って来ているC沢が、下方に細く伸びているのがよく見える。凹角の中の左手の壁を、頼りにならないカンバの木にホールドを求めたり、細かい岩を頼りに登る。この凹角は下部岩壁の中央やや右寄りに位置しているのだが、登攀中は、凹角の中を登るので、左右両側の状態がつかめないのが残念である。忠実に凹角を二五分ほど登ると、畳一枚ほどの大きさの岩があり、その岩の直下のカンバの木の下、および岩の右に小テラスがある。草付のテラスであるが、小休止に適当な所で、サポート隊と無線連絡しながら、高度感を楽しむ。このテラスから五分右へトラバースし、リッジに這い上がる。若干の残雪をつけたこのリッジを約四〇分登る。草付が主体であるが、核心部は岩であり、快適なピッチである。凹角、およびこのリッジが下部岩壁の核心部である。この二ピッチは、両者ともカンバの木があるが、頼りにならないので、結局は草付のバランスクライミングを要求される。ブッシュがひどくなる手前でカンバの木にビレーして、七～八分左斜上へブッシュ混りの岩を登る。かぶり気味の岩を右から越そうとしたが、脆くて越しにくい。やむを得ず左からカンバにアブミを掛けて乗越す。上部には岩壁の終了を示す大きな雪庇が張り出して、まともには越せそうもない。カンバを頼りに強引に左にトラバースし、雪庇直下の大きなカンバの木を目指して進む。カンバの木のそばの岩にハーケンを打って確保した。右の雪庇は越せないで、この岩を左に巻き、ブッシュをくぐってハイマツが顔を出しかけている不安定で急な雪壁へ取りつく。左手はピッケルをできるだけ深く差しこんで右はハイマツの太い枝を求めて、一〇分この雪壁を登ると傾斜のゆるい雪面に出た。鹿島槍の東尾根や冷尾根が手近かに眺められ、見晴らしがよくなった。下部岩壁を突破し、岩峯の上に立ったのである。後半の雪稜、雪壁に備えて、大休止をして、昼食のパンをかじった。ここから上は雪の登攀である。平坦に近いが、細い雪稜を進む。左稜側は大きな雪庇となって、冷尾根側もこんもりと雪をつけており、一見幅広く思えるが、実際は細いので稜の中央を忠実に進まなければならない。四〇分一ぱいで、この緩傾斜の部分は終了し、ブッシュのついた小ピークに突き当たる。左稜側は雪庇が今にも落ちそうで登れないし、冷尾根側は急な岩壁なので取りつけないので、正面からこの一〇分ばかりのピークを越える。ここからあとは雪庇もなくなり、次第に傾斜を増す雪のナイフエッジとなる。左右ともバツサリと切れており、ゆるんで来たスノーリッジは無気味である。下部岩壁の取付以来、つるべ式にザイルトップを交代して常に一気に八〇分ずつ登って来たためか、お互いに疲れを感じる。スノーリッジは八〇分続き、稜は灌木とハイマツになり、後立山連峯の主稜に突き上げている。主稜は目前に迫っているものの、これからが困難そうである。

われわれはスノーリッジの消えた所から、右に一分下り、稜の側面の雪壁をトラバースすることにした。雪の状態はきわめて悪化して来ており、思うようにステップも切れない。傾斜は強く、スリップでもすれば、C沢右俣に一気に流されるのは間違いない。中間のカンバの木からやや下って三〇分トラバースすると、主稜直下の垂直に近い一五分ばかりの雪壁に着いた。この雪壁は赤岩尾根を登ったサポート隊が、ルートを工作してくれていたもので、問題なく登れた。ハイマツをつかんでぐいと乗越すと、立山、剣岳の山々が顔を見せてくれた。登攀終了である。サポート隊も含め、全員で登攀成功の握手を交わした。

西俣BC (三・四〇) - 西沢のツメ (四・五五) - C沢出合 (五・二五～六・四五) - 岩壁基部取付点 (七・〇五～一〇・一五) - 逆U字岩壁の上 (一〇・五〇) - 登攀終了 (一一・五五)

(長沢修介・千々岩玄・記)

36. 伊藤弘・内田博文〔大町山の会〕 「鹿島槍ヶ岳一周」『岳人』第239号
昭和42年9月1日刊 東京中日新聞社発行

要約

昭和42年(1967)5月27日～6月1日(6日間)の記録。鹿島槍ヶ岳一周の記録。
ルート前半は柳沢昭夫と伊藤弘のペア。

27日、大谷原－西股－三ノ沢－東尾根荒沢ノ頭。

28日、荒沢ノ頭－天狗のコー－白沢岳出合－西遠見－遠見小屋。

後半は、内田博文、荒木宏治のペアに交替。その他は全員で五竜小屋までサポート。

29日、神城駅－遠見小屋－五竜小屋。

30日、五竜小屋－五竜頂上－与兵衛沢出合－鹿島ウラ沢出合－二股－牛首のコー。

31日、牛首のコー－コヤウラ沢出合－ギジダル沢出合－布引沢出合－二股出合－冷池小屋。

1日、冷池小屋－西沢－西股－大谷原。

一九六七年五、六月の記録

われわれは鹿島槍へ四季を通じて足を運んだが、それは東面の一部であったり、荒沢の一部や、カクネ里の一部であったりして、大きい鹿島槍全体から見ると、わずかほんの小部分を知ったにしか過ぎなかった。

そこでこの大きな山を一周しようという計画をたて、何回かの偵察の後、最も条件のよい五月下旬を選んで決行した。

はじめに計画した荒沢下降が天候に災いされてできなかつただけで、あとは計画通り進み、後半は天候にも恵まれたので予定より、三日早く下山することができた。

以下はその時の記録である。

五月二十七日 曇後雨

ルート前半は柳沢昭夫と、伊藤弘のペア。

まだ残雪多い三ノ沢の出合から二ピッチで右股と左股の出合に着く。両沢ともクレバスや滝が多く、またブッシュも見えて、藪こぎでも大分シゴかれそうだった。結局沢をツメるのをあきらめて、中央の尾根に取りつくことにした。

出合から草付の尾根を一ピッチ登ると、高度差六〇～七〇メートルの逆層垂直壁につきあたった。が、ここは壁右肩のシャクナゲの茂みからんでエスケープしたが、壁の頭から三ノ沢右股へは、鋭く落ちている草付と残雪のまじった約一〇〇メートルのきつい斜面へ出て、ピッケルで支点を作りながら慎重なトラバースをする。ここから小さなブッシュの斜面を五〇メートルほど登ると、直角に交わる尾根筋に出た。



棒小屋沢より鹿島槍を望む

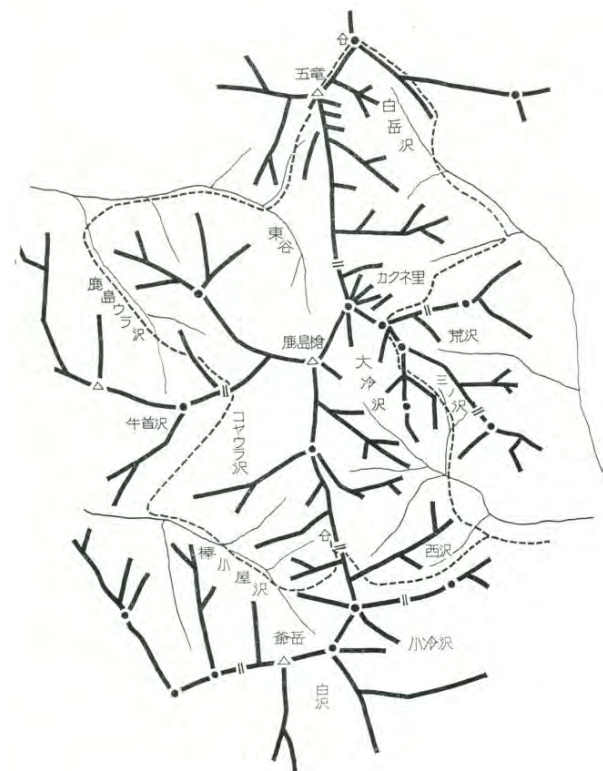
それまで濃い霧のため視界をさえぎられていたが、一瞬霧の切れ間に三ノ沢右股をへだてて長大な東尾根とゴツゴツした第一岩峯、第二岩峯を望むことができた。

登った尾根は東尾根とほとんど平行して上部に延びている。ここからしばらく尾根を忠実にたどったが、密集したシクナゲ帯を越すのに一苦労させられたところがあった。ここを過ぎると、左側に残った雪面を利用してまわりこむようにブッシュを逃げて約二〇分の岩壁の下に出た。この岩壁の右側がまた大きなシクナゲの群である。そこを縫うようにして一五〇分ほど上部のツガの木を目指して登った。やはり相当な藪こぎである。ここを突破すると、あとは歩きよい岩まじりの尾根になった。そこを二ピッチ登ると、尾根は二〇分のギャップで断ちきられていた。

ここではじめてザイルを使った。ハイマツを支点としてルンゼ状ギャップの左側沿いにアップザイレン。三ノ沢左股にスパッと切れ落ちたここまでの尾根に直角に交わった痩せた岩尾根の上に出た。この尾根を登りつめると再びギャップ状の壁が現われた。ここは右側のブッシュ沿いに下って小さな残雪に立つ。ここからゆるいガラ場を登りつめると、東尾根荒沢の頭直下に出ることができたが、いっこうに晴れない濃い霧のために現在地点を確認するのに苦労させられた。われわれをサポートするTとMの待つ荒沢南股出合まで、ここから下るのが予定であったが、天候もわるく、時間的にも無理なので、この日のうちに合流するのをあきらめて行動を打ちきる。

荒沢の頭真下でツェルトを被ったが、夜半激しい降雨にあったものの割合快適に過ごすことができた。

タイム 大谷原発 (七・〇〇) - 西股 (八・〇〇) - 三ノ沢出合 (九・〇〇) - 最初の壁 (一〇・〇〇) - 第二の壁 (一一・四五) - ギャップ下 (一六・一五) - 東尾根荒沢頭下 (一六・三〇) - ビバーク決定 (一七・三〇)



二十八日 曇一時雨

荒沢へは下らず、天狗の科尔からカクネ里に下るように計画を変更。

きのう同様の濃い霧の中で、行動を開始する。ビバーク地点から約五分で荒沢ノ頭に出る。頭から右に延びる天狗尾根に残置されたフィックスロープとシクナゲの枝を利用しながら、予想外に早く一気に天狗の科尔まで下ることができた(荒沢ノ頭から科尔まではほとんど残雪はない)。ここでサポート隊と予定変更を交信して下降にかかる。

最低科尔から壁に近い壁面を四〇分のテトロンザイルを一杯に使い、二人でシクトリ虫のように一〇ピッチほとんど直線に下降すると、五〇分もある垂直な滝に前途をはばまれた。ここで下降不可能となったので、偵察の後、右側の草付の岩場をトラバースしてブッシュ帯に入り、ダケカンバに捨て縄をかけ、今にも崩落しそうなブロックの下をくぐりぬけて小さな残雪のルンゼの壁を左にへつるようにして、

二回のアップザイレンで四〇分下り、滝右岸の岩上に出る。ハーケンを支点として滝の中央部にある小さなテラスに出ようと三〇分下降する(テラスからはまだ滝の下部を見ることできない)。

左岸三〇分手前にある大きなダケカンバを支点とするためには滝をトラバースしなければならぬのだが、テラス付近にハーケンを打つことができずに直接確保で草付の壁をだましながら目的

のダケカンバにたどりつく。これに捨て縄をかけて一五〇㍎の空中懸垂をし、さらに四〇㍎のダブルのザイルをのぼしてラントクルフトの縁に立つことができた。この約三時間半の下降に終止符を打ってカクネ里に出る。

ここで再び激しい雨にあったが、下降を終えた安心感から鼻歌まじりで白岳沢出合まで下る。出合の滝は露出していたがわずかに二回の小さな徒渉で越すことができた。白岳沢はまっすぐつめて、五竜岳G0対岸の急な雪のルンゼをルートに西遠見に出た。ここで明日入山してくる後半パーティを待ちながら遠見小屋で一夜を明かす。

タイム ビバーク地点発(六・一〇)ー荒沢ノ頭(六・一五)ー天狗のCOL着(七・四五)ーCOLより下降開始(八・三〇)ー下降完了(一二・一〇)ー白沢岳出合(一三・五〇)ー西遠見(一八・〇五)ー遠見小屋着(一九・三〇)

二十九日 晴

遠見小屋前で、前半ルートを終わった柳沢、伊藤パーティは、後半ルートの内田博文、荒木宏治のパーティにバトンタッチをし、全員で五竜小屋までサポート。

後半パーティのタイムは、
神城駅前発(六・四五)ー遠見小屋着(一一・〇〇)ー遠見小屋発(一二・〇〇)ー五竜小屋着(一七・〇〇)

三十日 曇後晴

サポート隊と五竜岳に向かう。G3付近に多量の残雪があり、また昨夜かすかに新雪があった模様でハイマツにその跡があった。一面の霧の中でサポート隊から激励を受け、内田と荒木は東谷へ足を向けた。頂上から縦走路を五〇㍎くらいキレット寄りにくだったところから、右の支稜に入って三〇㍎ほどでハイマツの斜面をトラバースして、吹き溜まりの痕跡を残す大きな雪面に出た。この雪面は東谷与兵衛沢の最上部で、雪は一・五㍎ほど続いているのが霧の切れ間から見い出せた。これで安心とグリセード

で下降。カモシカとクマの出現であわて、いっそうスピードアップ。東谷合流点上方一五〇㍎付近に滝(二〇㍎)が現われていたので、左岸のいやな草付をまき、滝下に下降、再び残雪上に出て出合へ。出合は、川幅約八〇㍎くらいで、鹿島側からのデブリは非常にきたなくこの沢とは対照的だった。剣の北東面がまぶしい。広い河原にはカモシカの足跡があるだけだった。大きいのが一頭一〇〇㍎くらい先を横ぎって、対岸へ駆け上っていった。左岸を二㍎ほどくだると、兩岸が急にせまって、流れは曲がり、左岸からの尾根が突き出た廊下状の下方が、鹿島ウラ沢出合であった。その突き出た左岸の尾根に取りつき、これを乗り越して、ウラ沢側の崩落をズリおける。鹿島ウラ沢も東谷とまったく同じ広い河原で最初予定した左岸への取付点が、ブッシュと急なルンゼのために見い出せず、ズルズル上流へ引きこまれてしまった。そして最も奥の二股付近では、落石が多く一度ならず右岸へ飛びのいた。天気が良いので雪はくさって苦しい登りだった。東谷とウラ沢の中間尾根に取りついて二〇〇㍎ほどで尾根上に出る。朝のうちは霧の中だった五竜の頂、そして下降した沢がはっきりと確認できた。尾根上三〇〇㍎ほどで牛首のCOLのピークに立った。そこは鹿島ウラ沢の大きな崩落で、雪はほこりにまみれていた。

タイム 五竜小屋(六・一〇)ー頂上(六・五〇～七・二〇)ー残雪取付(七・五〇～七・五五)ー与兵



牛首より鹿島槍をのぞむ

衛沢（八・二〇～八・二五）－与兵衛沢出合（九・三〇～九・四〇）－鹿島ウラ沢出合（一一・〇五～一一・三〇）－二股（一三・〇〇）－牛首のコル（一六・三〇）

三十一日 晴

昨夜だいぶ冷えたのでコヤウラ沢の下降には、アイゼンをつけ快適にくださった。沢の中程で小さな滝（一〇㌢未満）が続出、F3（二〇㌢）でアップザイレン、約一五㌢で再び雪の上へ。下半分は非常に荒れていて、いたる所に崩落があつて歩きにくい。

コヤウラ沢出合には、関電の取水口があり、そのうえ人影を見た。ガックリといったところ。棒小屋沢も広い河原で水量は多くギジダル沢出合まで、ほとんど残雪がなく、布引沢出合できなかった雪を踏む。鹿島側が一般に急で取付点が見い出せなく、そのため忠実に沢をつめて、爺北峯に突き上げる沢に入ってしまう。この沢は雪の量が非常に多く、雪の塔が二カ所に見られた。急な雪の登り一・二キほどで、右手のルンゼに入り、ダケカンバとシラビソの林を横ぎって、冷乗越付近に出、冷池小屋に入る。

タイム 牛首のコル（七・一〇）－第三滝下（七・四五～七・五五）－コヤウラ沢出合（一〇・〇〇）－ギジダル沢出合（一〇・三〇～一一・〇五）－布引沢出合（一一・三〇～一一・三五）－二股出合（一二・〇〇～一二・四〇）－支尾根（一四・二〇）－北峯支尾根（一四・四五）－冷乗越（一五・一〇）－冷池小屋（一五・三五）

六月一日 晴

冷乗越から夏道ぞいに下り、ガラ場の下部から西沢に入ったが、ここも雪が多かったのでグリセードで下降、迎えに出たサポート隊と沢の中程で合流した。

タイム 冷小屋（八・〇〇）－赤岩尾根ガレ下（八・三〇～九・〇〇）－西沢サポート隊と合流（一〇・〇〇～一〇・三〇）－西俣（一二・〇〇）－大谷原（一五・〇〇）

（伊藤弘、内田博文・記）

37. 上田勝則〔門司山岳会〕 「鹿島槍ヶ岳北壁―中央ルンゼー」『岳人』第248号
昭和43年5月1日刊 中日新聞出版局発行

要 約

昭和42年(1967)4月28日～5月3日の記録。鹿島槍ヶ岳北壁―中央ルンゼの登攀。

メンバーは、上田・猪尾。

行程は、4月28日 大谷原から西俣出合

29日 停滞

30日 北俣本谷―鎌尾根―南峯頂上―キレット小屋

5月1日 停滞 カクネ里底までに偵察

2日 キレット小屋―中央ルンゼ取付―F5乗り越し―北峯―キレット小屋

3日 キレット小屋―北峯―南峯―ダイレクト尾根取付―西俣出合

※北壁中央ルンゼの積雪期登攀には、アッセントクラブの吉尾弘、篠原隆夫、林与四郎によって昭和38年(1963)初登されている。

一九六七年五月の記録

鹿島槍ヶ岳の北壁は北峯から信州側に派出された天狗尾根と、五竜岳へ向かう国境の主稜との間に囲まれた、この国では数少ない大氷壁で高差八〇〇ほどと言われ、各ルンゼは雪崩に磨かれて蒼白く輝いている。中央ルンゼはこの北壁のほぼ中央部にくいこみ、直接尾根側稜と正面尾根Dリッジの間に深くえぐられたせまい暗いルンゼで中間でくの字型に屈曲している。ルートは全容は、天狗の鼻からもキレット小屋からも見えず、鹿島槍で最も困難なバリエーション・ルートである。この中央ルンゼの積雪期は一九六三年三月、アッセントクラブの吉尾弘、篠原隆夫、林与四郎によって初めて登られた。



取付点より天狗尾根



取付点よりカクネ里

ルートとしては、天狗尾根の最低コルから北壁に向かって水平にトラバースして取りつくものと、キレット沢へ下ってから取りつくものがあるが、私たちは後者を選んだ。キレット沢への下降地点はキレット小屋から五竜岳側へピークを一つ巻いたところで、ここからキレットB沢をカクネ里の底まで下った。このキレットB沢は傾斜は急だが、アイゼンがよくきき、クレバスも見あたらず簡単に下れた。

カクネ里の底からは、中央ルンゼに向かって堅く急な雪壁を登り、キレット小屋から約一時間半で取付点に達した。

私たちの感じたことを少し記すと、朝暗いうちに取りつくとしたら、取付点までのクレバスの有無その他を偵察しておくべきである。また、ルンゼ上部に陽があたると、雪や氷の上を音もなく石が落ちて来る。逃げ場のないゴルジュ内だからいっそう危険である。スピーディな登攀が要求されるので、レベルのそろったペアがツルベ式に登るのがもっともよいのではないかと思う。

アイゼンは八本爪と出歯の十本を使用した。十本の方が有利だった。もう一つは、ルンゼの中間で正面尾根の側壁にそって左右に三〇センチほどの間、巨大なツララが何十本もぶらさがっていて、そこから落ちて来るしずくはまるで豪雨のようだった。私たちは早くルンゼから抜け出したいばかりに雨具もつけずに通過したので全身が、びしょぬれになり、ガタガタふるえながらのつらい登攀になった。全ルートのポイントとしては、下部ではF 5の乗り越しと、上部は難しい割目と最後の直接尾根へのトラバースだと思う。

行動記録

四月二十八日 曇後雨

大谷原から西俣出合へ。一丸山小屋を出るところから雨になり、一ノ沢出合付近からは残雪が出て来た。西俣出合に幕営。

二十九日 雨 停滞

三十日 快晴

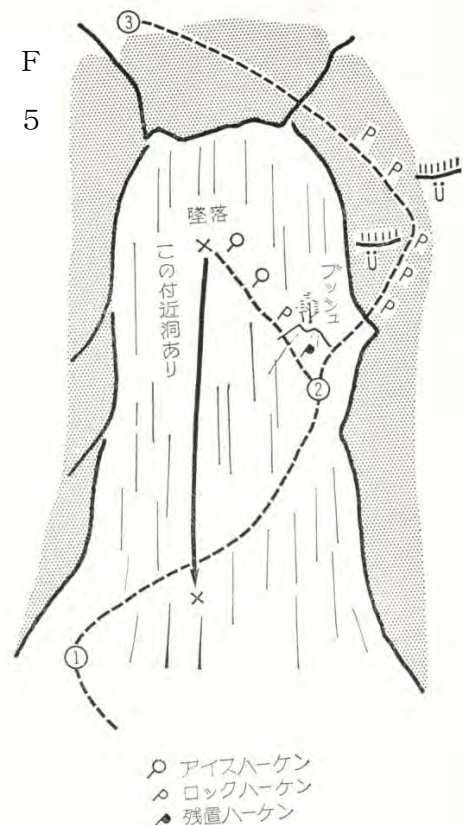
西俣出合にテントを張りっぱなしにして、キスリングをかついだまま、末端の北俣本谷側から鎌尾根に取りついた。稜線の雪庇は先行パーティがトンネルを掘ってくれていたのだから楽に乗り越す。南峯頂上でアイゼンを着け、キレット小屋へ下る。キレットの通過はザイルを使った。

五月一日 風雨 停滞

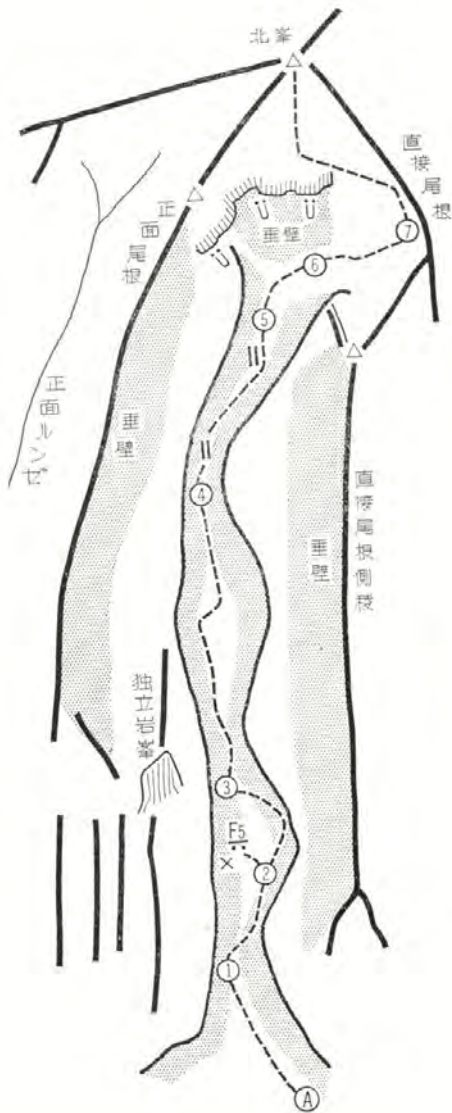
低気圧の通過でこの日も停滞、予定が狂ったので計画していた中央ルンゼ登攀、主稜下降、正面ルンゼ登攀の継続を放棄し、中央ルンゼ一本にしぼる。夕方になって雨が上がったので、キレット沢を下ってカクネ里の底まで偵察に出る。

二日 快晴

一時二十五分、まだ寝しずまっているキレット小屋で、私はパートナーの猪尾に起こされる。時間をかけてゆっくり朝食をとり、アイゼンをつけて二時五十分には小屋を出発。暗い空には星が輝いていた。二人はキレット小屋の北のコルからキレットB沢をカクネ里の底まで下った。ひんやりした朝の空気が実にうまい。こんどは北壁に向かって一步一步アイゼンをきかして登っていった。私たちの前には北壁が白く立ちはだかっている。やがて中央ルンゼ入口の雪のテラスに着いた。しら



中央ルンゼ略図



じらと明けてくる北壁。黒と白のコントラストが実に美しい。もう頂には朝日があたっているのだろうが、ルンゼの中はまだ暗い。二人はザイルを結び合う。図のA点である。

五時、私をトップに登攀開始。堅雪の壁にピッケルとアイスバイルを使って約三〇分登り、F 5の下に出る。図の2。このピッチはやがて堅雪から氷になったので、アングル型アイスハーケンを打ちこんでビレイし、猪尾を上げる。F 5はブルーアイス、二〇分の氷瀑だが、その右側をからんで比較的楽に登れた。そのピッチでは真赤に錆びたハーケンにカラビナが残っているを見つけ、ザイルシュリングを通し、ここで一度ピッチをきった。F 5も半分登った。上半は傾斜も垂直に近く、難しそうだ。リスを掘り出してロックハーケンを一本打ちこみ、左斜上にステップを切って三十分ほど登り、二五分のアングル型アイスハーケンを打つ。さらに一分登り、二本目のアイスハーケンを打つ。この時ヘルメット大の落石が私の右腕をかすめてカクネ里へ落ちていった。ルンゼ内は逃げる場所がないので恐ろしくなった。さらに三本目のアイスハーケンを打ちかけた時、甘い氷のステップが崩れて一分ほど落ち、ザイルにぶらさがった。別図の×点である。アイスハーケンは二本とも抜け、最初に打ったロックハーケんで止まった。F 5は部分的に空洞があったが、中を水が流れているものさえあった。私は猪尾のビレイ点までゴボーで登ったが、氷の状態の悪い氷瀑を敬遠して右側のハングした壁にハーケンを二本打ち、二

十分ほどアブミで登ったが、リスがなくて三本目は打てず、猪尾に代わってもらった。彼は空身で私の到達点まで登り、やはりハーケンが打てずバランス限界で一分ほどずり上がり、ようやく三本目のハーケンを打つ。さらに二本のハーケンを打ち F 5 の落口に立つ。図の3。猪尾から合図があり、ここで彼のザックとともに私も F 5 を乗り越す。ここでトップを交代し、かなり堅い氷の溝を三十分ほど登ると、ルンゼが広がった。正面尾根側の垂壁に半分ほど入ったアイスハーケンが残っていたので、これをビレイにして猪尾を迎える。時折、小石や氷片が落ちて来る。次のピッチは傾斜の落ちた雪壁を三十分ほど登って、ルンゼの幅が最も広がったところでピッケルを根元まで雪に打ちこんでビレイする。このあたりがルンゼの中間で、上半は右にカーブして傾斜が強くなって来る。次のピッチは正面尾根の側壁にそって巨大なツララが下っており、しずくがさかんに落ちてくる。全身びしょぬれになってその中を登り、三五分ほど登ってこの豪雨から解放された。さらに一分ピッチ雪壁を登ってチムニー状の滝の下に着いた。図の4の上。正面尾根の側壁にアイスハーケンを打って猪尾を確保する。チムニー状の滝は五、六分あり、チムニーにはびっしりと氷が張りついていたが両手両足を突張ってサイド・バイ・サイドで登りきると「ザイルがいっぱい」と合図があり、ここでビレイ。この上は積雪期初登攀の記録がある一分ほどの難しい割目（図の5下）で、右側の岩壁に錆びたハーケンが連打されていた。猪尾トップで右側の岩壁に連打されているハーケンをアブミをかけかえながら、巧みに登っていったが、上部で不用意に利用した古いザイルシュリングが切れたのでアブミに乗ったまま、今度は猪尾が五分ほど落ちたが、幸い怪我もなく、間もなくここを登りきり、私の視界から消えて行った。確保している間は全身が濡れているのでとても寒

く、陽の光が恋しかった。猪尾からの合図で私もつづいて、この割目を抜ける。堅雪の狭い急なルンゼを猪尾のビレイ点まで登ると、彼は二本の残置ハーケンを利用していた。ここまで来るとようやくルンゼから抜け出した感じで、頭上がハング帯でおさえられた垂壁になっている。いよいよ最後の直接尾根へのトラバースだ。五ノほど上を直上したパーティが打ち残したと思われる赤いアイスハーケンが見える。このトラバースは積雪期初登攀の記録にはハーケンを使い果たしたのでボルトを一本打ったとあるが、雪に埋まっているのか見つからず、六一七ノの右の垂壁に見える残置ハーケンまで四本のハーケンを打ってトラバースし、さらにホールドのかわりにまた一本打ちたして三ノほどトラバース。ザイルが一五ノほどのびて、カンテ状に出ると一度ピッチを切る。私もつづいて登る。このルートは一番苦労したピッチである。図の6。ハーケンを打ちこむリスもなく、非常に難しかった。中央ルンゼを足下にするのもあと数ノだ。カンテ状のビレイ点から猪尾は右上の岩壁にリスを見つけてアイスハーケンを一本、ロックハーケンを二本打ちこみ、こんどは直上して直接尾根の大きな雪塊にステップを切り、十二時二十五分登攀終了点について。図の7。

ここまで来ると、あの不気味な落石の心配もなく、日光をいっぱい浴びてゆっくりくつろいだ。一時間半ほど休む。後は北壁上部の登攀を残すだけになった。私たちは北峯をめざして直接尾根をコンティニュアスで登っていったが、午後の日射が雪の状態を悪くしてしまったのでスタカットに切りかえて、直接尾根の左側の雪壁を登り、北峯に十五時十分着。キレット小屋まで一気に下る。

タイム キレット小屋発（二・五〇）－中央ルンゼ取付点（四・二〇）－中央ルンゼ取付（五・〇〇）－F5乗り越し（七・五〇）－登攀終了点（一二・二五）－終了点発（一三・五〇）－北峯（一七・一〇）－北峯発（一七・二〇）－キレット小屋（一八・一〇）

三日 快晴

キレット小屋を六時出発。

北俣ダイレクト尾根を下る。第二岩峯まではキックステップで下り、第二岩峯はアブザイレンし、北俣側に切れている急な雪稜をコンティニュアスで下り、第一岩峯は鎌尾根側の雪壁を巻く。その下のルンゼはキックステップで下り、四日ぶりに西俣出合のテントに帰った。

ダイレクト尾根を初めて下ったのだが、それほどの困難もなかった。南峯から西俣出合へのもっとも近い下降路である。

タイム キレット小屋発（六・〇〇）－北峯（八・二〇）－北峯発（八・四〇）－南峯（九・二〇）－南峯発（九・二五）－ダイレクト尾根取付点（一一・〇〇）－西俣出合BC（一一・四五）

この登攀に携行したのは左のとうりである。

プラチナ・ザイル一〇ノ、四〇ノ一、テトロン・ザイル九ノ、四〇ノ一、アブミ（カラビナ付二段）四、
ロック・ハーケン一七、
アイス・ハーケン五、
カラビナー八、
アイスバイラー、
アイスハンマー一、ボルト三、
ツェルト（ナイロン）一、
プタンガス・ボンベ（予備）一、
コンロ（ボンベ付）一、
ザイル・シュリング長二、短三、
ピッケル二、
ピトンホルダー一、
食糧品三日分、その他小物。

（上田勝則・記）

38. 岩崎元郎〔昭和山岳会〕 「鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁北壁」『岳人』第262号
昭和44年5月1日刊 中日新聞東京本社発行

要約

昭和43年(1968)5月1日～4日の記録。鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁の北壁登攀。

メンバーは、岩崎元郎、高梨真。

行程は、5月1日 荒沢出合―天狗尾根取付―荒沢大滝―南俣。

2日 北壁登攀。1～5ピッチ。

3日 北壁登攀。6～7ピッチ目。天狗尾根着。北槍、南槍往復、天狗尾根最低コルへ。

4日 荒沢下り。

※昭和12年(1937)7月、浪高パーティによる北稜・南稜の登攀が荒沢奥壁の最初の記録。

昭和12年(1937)3月、小谷部全助による積雪期北稜の初登。

昭和41年(1966)紫峯山岳会のパーティによって荒沢尾根開拓。

G・D・Mパーティによって南壁及びダイレクトルンゼ開拓

一九六八年五月の記録

狭く荒涼とした荒沢の奥に険悪な様相で聳え立っている壁、それが荒沢奥壁である。天狗尾根と東尾根とに小さくせばめられた荒沢の空には、鹿島槍北壁・カクネ里のもつ華々しい詩はない。

一九三七年七月、浪高パーティによる北稜および南稜の登攀が荒沢奥壁の最初の記録であり、また小谷部全助氏による積雪期北稜初登の記録を知らぬ人はあるまい。その後、紫峯山岳会のパーティによって荒沢尾根が、G・D・Mパーティによって南壁およびダイレクトルンゼの各ルートが開拓された。

私たちのいう「荒沢奥壁北壁」とは、荒沢カールの底からみて向かって右側、北稜と天狗尾根との間に広がる脆い岩、ブッシュ、草付によって構成された高度差約三〇〇mの壁である。

以前からこの壁は注目されていたらしく、荒沢奥壁に関する文献は多少ともこの壁にふれているが、その評価はまちまちであった。他人の評価がどうであろうと、一つの壁にルートが交錯するような現在、人の手に触れていないということは大きな魅力である。

事実、私たちの登攀したルートは、お世辞にも快適とはいえないクライミングであったが、そこにはやはり未知の魅力があった。

G・D・Mによって開拓された南稜と東尾根との間の壁が「荒沢奥壁南壁」と呼ばれているのに対応して、私たちが完登したこの北稜と天狗尾根との間の壁を「荒沢奥壁北壁」と呼ぶことにしたい。

登攀記録

パーティ＝高梨真、岩崎元郎。

五月一日 晴。大谷原での喧騒も、大川沢沿いの山

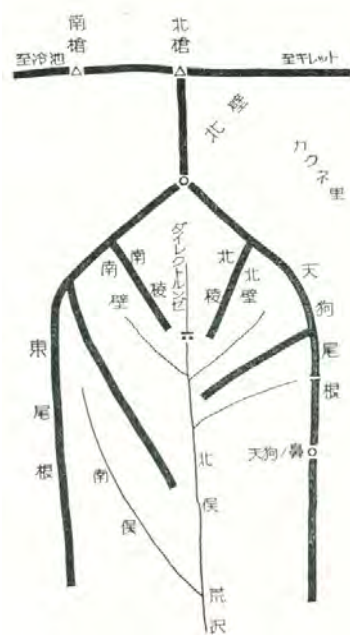


荒沢奥壁北壁を望む 撮影・高梨 真

径に入ると、静かな二人だけの山となる。荒沢の出合で朝食をとりながらのんびり休んで、いよいよ荒沢に入る。

流れを二、三回渡り返し、天狗尾根の取付を過ぎると雪の上を進むようになる。荒沢の大滝までは一時間あまり、ほとんど右岸の雪の斜面のトラバースであった。大滝はクレバスが大きく開いているので、右岸の樹林帯を大きく高まき、落口上部の雪渓にアップザイレンで下る。この高まきは荷が軽ければ簡単だし、岩が乾いていれば落口へ続くバンドをスムーズにトラバースできそうに思えた。重荷のためもたもたしていた私たちは、ここで後続のF山岳部二人パーティに先を越された。

翌日、南稜を登った彼らがアクシデントを起こし、一人が亡くなれるということを、この時は予想もしなかった。私たちは互いにあいさつし、あす登るルートなどについて、二、三言葉をかわしたのだった。



大滝から上は、谷は完全に雪に埋まり、ところどころデブリの散乱した単調な雪渓登りがはじまる。重装備の私たちはなかなかピッチがあがらない。天気は五月晴れ、暑い！太陽はもう夏の日射しだ。

南俣の出合を過ぎて北俣の一段と急になった雪渓を追いつめられたような気持で登る。日射にゆるんだブロックの落下がはじまったのだ。この北俣のゴルジュ帯では逃げ場がない。やがて谷はカール状に広がり、目指す荒沢奥壁が前方に大きく聳え立って圧倒する。私たちは、天狗尾根の最低コルへつきあげるルンゼの対岸の雪の斜面にテラスを作ってビバークサイトとし、のんびり荒沢奥壁北壁の偵察をすることにした。

何回かの準備会で、私たちは北壁の左半分を形成する菱形岩壁をルートと決め、そのつもりで登攀用具を準備してきたのであるが、ここから見たかぎりでは菱形岩壁は非常に脆そうで、上部のルンゼからのブロック雪崩の落下通路ともなっており、ルートとするにはあまりにも危険であった。あれこれ検討の末、北壁のほぼ中央から右ルンゼの雪渓にのびている岬状リッジを右からまわりこみ、稜上のテラスに出ることにする。(岬状リッジの左側は菱形岩壁基部へあがる狭いルンゼ。落石、ブロック雪崩の通路となっている)

のテラスに出ることにする。(岬状リッジの左側は菱形岩壁基部へあがる狭いルンゼ。落石、ブロック雪崩の通路となっている)

稜上のテラスから北壁の中央部、菱形の周辺と灌木帯とのコンタクトラインを登ったらどうかということになった。当初予定していた菱形岩壁よりウィークポイントが多いようで、悪くても一晩のビバークで抜けられそうだ。準備した登攀用具も半数はデポに残し、左記のものを携行することに決めて、明日にそなえ早めにテラスに横になった。

メインザイル (一^三×四〇^五)、補助ザイル (九^三×三〇^五)、カラビナ二〇、ハーケン三〇、アイスハーケン二、埋込ボルト五、アブミ二、捨ナワ五^五、ハンマー二

二日 晴。五時前に起床したのだが、準備に思わぬ時間を費やし、ビバークサイトを出発したのは七時二〇分になっていた。

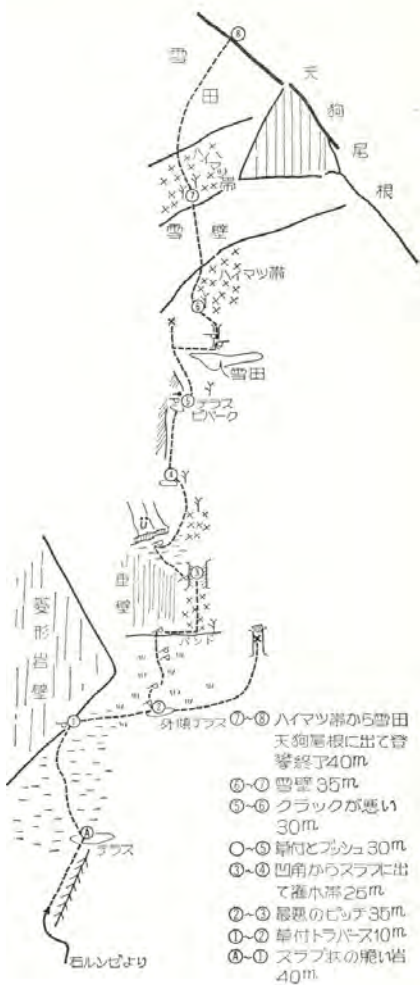
南稜には行動中のパーティと、基部でビバークしたF山岳部との二パーティ、北稜には一パーティが取りついていて、雪は比較的よくしまっているが、デブリの上はまったく歩きにくい。私たちが右ルンゼの雪渓を登りはじめるところ、北稜のパーティはなぜか下降していった。右ルンゼは次第に急になり、ときおりスノーボールが落下してくる。一カ所亀裂が入っていたが、一時間ほどで岬状リッジの末端につく。

小休止の後、岬状リッジを右から回りこんで、具合よくシュルンドの開いていない所から稜上に出る。四〇^五ほどザイルをつけずに登ると二人用テラスがあり、リッジはなんとなく壁に吸収される。

ここでアンザイレンし、岩崎トップで登攀開始。十時であった。最初のピッチは身体が堅い。粘

土を固めたような脆い岩を四〇分ほどいっばい登ると菱形岩壁に突当る。積木を重ねたような岩の隙間にハーケンを打ち高梨を迎える。ハーケンは意外によく効いていた。

二ピッチ目は、そのまま高梨がトップに立って草付バンドを一〇分ほどトラバースし、外傾テラスに出てピッチを切る。雪が溶けたばかりの濡れた草付は嫌らしい。岩崎が後続しようとして一歩踏み出した瞬間、「ドドーッ！」と腹の底に響く音とともにブロック雪崩の第一号が落下してきた。雪塊がうなりをあげて飛んでいるのは、鼻先五〇センチだ。壁に身体をぴったりと寄せてはいるものの、あまりいい気持ではない。どうやら静かになったようだ。「行きますよ」と声をかけてふたたび一歩踏み出したその瞬間、「ドドーッ！」ときた。今度は運悪く左肩に一発くらってしまった。これが五月の荒沢奥壁の歓迎のあいさつなのか……。



やっと高梨のいる外傾テラスにトラバースし、ここから右上に攀じて凹角に入るが、脆いハングを乗越せずテラスに戻る。

三ピッチ目、高梨がふたたびトップに立って、頭上の草付壁にアタックを試みる。濡れていまにも滑りそうな壁をトップは巧みなバランスで高度を稼ぐ。途中、ハーケンを四本使用して垂壁に突き当たり、基部のはがれ落ちそうな草付バンドをだましまし右へトラバースする。そこに灌木があり、バンドは切れていて、ルートは頭上の垂直のブッシュ帯に入るほかはない。まったく腕力だけで登るこの部分は非常に厳しく、空身で攀じて上部の凹角に入り、小ハング下でビレーする。三五分。

きのうビバークサイトから偵察したときは、横から眺めたせいか、比較的傾斜の緩い壁に思えたが、実際登ってみると傾斜は強く、右ルンゼの雪渓が股の下に見える。

四ピッチ目、この凹角の左壁にハーケンを打ちアブミを使って左上のスラブに抜け出る。外傾したスラブを右にダケカンバめがけて登り、灌木をたよりにテラスに上がる。二五分。前記した菱形岩壁は、その菱形の頂点と小屋岩とを結んで不明瞭な稜を形成しており、その左右はかなり大きな雪のつまったルンゼとなっている。そのため、残雪期の荒沢奥壁北壁はブロック雪崩に必ず遭遇するといえよう。

五ピッチ目、ルートは右方ルンゼの右手の急峻なリッジを攀じていく。右へ天狗尾根側へ巻き込んで二人用テラスまで三〇分。セカンドがテラスに上ったのが一八時。ここでビバークとする。

三日 晴。快適なビバークだった。予報は天気悪化を伝えていたが、東の空はバラ色に輝いて太陽が顔をみせた。

六ピッチ目、高梨トップで登攀を再開する。六時だった。まず左上の岩と雪とのコンタクトラインにルートを求めたが意外にてこずり、雪田の上端を右にトラバースして、クラックにハーケンを連打してアブミを一カ所使って乗越し、ダケカンバでビレーする。三〇分。

七ピッチ目、ハイマツ帯を抜け、雪壁を攀じる。快適である。三五分。八ピッチ目、ハイマツ帯から傾斜のおちた雪田をキックステップで高度を稼ぎ、九時三十分天狗尾根に出て登攀終了。四〇分。

北槍、南槍を往復して天狗尾根の最低コルへ下ったのは十五時三十分、荒沢のデポへ二十分足らずで駆け下り、ふたたびビバーク。

四日 雨のち晴。昨夜から雨が降り出す。五時半、逃げるように荒沢を下る。出合に立ったとき、いつしか雨は上っていた。
(記・岩崎元郎)

39. 元井芳正〔神戸FRC会員〕 「天狗尾根から 荒沢スキー滑降―荒沢尾根」
『岳人』309号
昭和48年2月1日刊 中日新聞東京本社発行

要 約

昭和44年(1969)5月1日~5日の記録。天狗尾根~荒沢<スキー>、荒沢尾根登攀。
メンバーは、6名。元井、寺井、井口、酒田ほか。
行程は、5月1日 信濃大町―荒沢出合―荒沢尾根末端。
2日 荒沢尾根―天狗尾根上―元井のみBCからスキー滑降―荒沢尾根
II峯下。
3日 荒沢尾根II峯―III峯―東尾根第II岩峯基部。
4日 基部―荒沢ノ頭―天狗ノ鼻BC。
5日 天狗尾根下降―荒沢

一九六九年五月一日～五日の記録

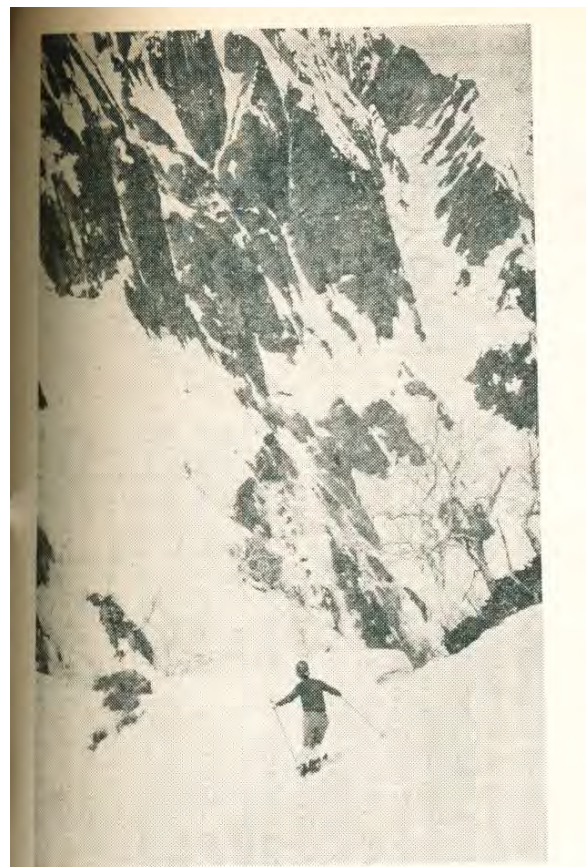
すばらしい景観の天狗の鼻BCを後に、荒沢をスキーで一気に下降、ニツ玉低気圧で風雪に見舞われた荒沢尾根を、十二ピッチ、二回のビバークで登った。

クラブでは初めての、その冬の天狗尾根正月山行は、メンバーの不調と、他会の遭難救助協力などが重なって、思うような活動ができなかった。そのため、今回の山行はレギュラー訓練に、特に意義のあるものにしたと考え、計画をすすめてきた。無雪期の今難な登攀能力が養われはしたというものの、積雪期登攀の醍醐味を知らなくては、山のよさを知ったことにはならないというのがチーフリーダーである私の信念であり、メンバーにその一部でも味わってもらい、私の考えに共鳴して欲しいと思って計画をすすめた。

本山行は、まず荒沢を遡行、デブリの状態など、積雪期の谷の遡行知識を植え、その行程中に今回の登攀目標である荒沢尾根の、雪の付着具合をできるだけ近くから観察する。さらにスキー滑降も試みようとしていたので、滑降コースの下検分も含めようというものであった。レギュラーがアタックしている間、残る新人二名が、入会初めての山行を有意義に過ごせるよう、景観の素晴らしい天狗ノ鼻にBCを設け、レギュラーメンバー一名を付き添わせることにした。

荒沢から天狗ノ鼻BCへ

五月一日(晴) 早朝信濃大町の冷たい朝の空気



天狗尾根を滑降する。前方は北壁

にひとり、姫路東芝山岳部のI君が、チャーターした車に便乗させてもらって、メンバー六名出発する。大町の街はずれの山麓から眺める残雪輝く鹿島槍、爺ヶ岳の山容があまりにも美しいので、車を停めてもらいカメラにおさめる。今春は雪解けが早いのであろうか、大谷原まで車を乗り入れることができた。気温九度。

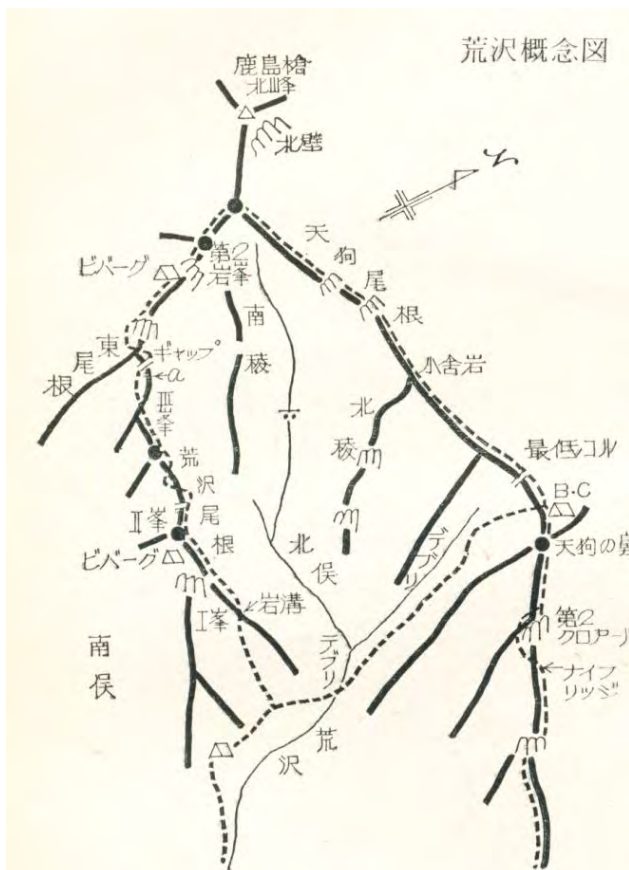
朝食や柔軟体操を行なって大川沢へと向う。春の沢身はとてものどかなもので、小鳥がさえずり、夏道の雪もすっかり消えうせ、雪解け水の流れの音を聞きながら、右岸の車道からこわれかけた吊橋を渡って、左岸の夏道を進む。荒沢出合手前の吊橋で右岸へ渡り、ここから残雪を踏みながら十時十五分、荒沢の出合に着く。谷が狭ばまり、当りの悪い所だ。水量が多い。

休憩後、少し奥へ入った天狗尾根取付点に荷を降して、二名を荒沢の溯行が可能かどうか偵察に出す。しばらくして急いで戻ってきた。S会の遭難者引き降し隊が下ってくるころだという。そうするところへA氏をCLとする隊が下ってきた。この正月に荒沢奥壁北稜のM岩峯で、疲労凍死をしたN君の収容作業を無事なし得たとのこと。

この収容作業のために、正月山行以来六甲山系で、全会員総出で着々と予行演習を実施していることを耳にしていたが、さすがのその心がまえがうかがえるパーティの動作に、ただ目を見はるばかりである。これも友を思う山仲間の心のあらわれであろうと敬服させられる。作業経過をCLから報告され、ともによろこびの気持ちを感じる。この後、交友のあるM・H君から上部の様子を聞いたが、荒沢尾根はそうとうに雪の状態が悪いように見えた、と聞かされる。H君はキノコ雪にはこれが効果的だ、といて植木用の小スコップをくれた。

十三時二十五分出発。少し溯行した所から右手上方に美しい滝が見られる。そして、本谷の滝場に着くが溯行できず、右手の急斜面の枝尾根を約一〇〇m高巻して、滝上部の雪渓に降りる。ここから急に谷幅が広く、明るい雪渓登行となる。目の前が開け出し、荒沢奥壁が次第にその全容を見せてくる。天狗尾根側から数本の緩傾斜の枝尾根が派生し、左手東尾根側は壁状となっていて、今にもブロック雪崩が落ちてきそうな谷である。二～三度くねるように広い雪渓上を溯って十七時、

荒沢尾根末端に到着する。設営の間、三十分ほどスキーを楽しむ。



二日(晴のち雨) 気温二度。五時にテント撤収。その後のひとときをウグイスなどの小鳥のさえずりに耳を傾けたり、荒沢尾根下部の急な斜面を歩きまわっているカモシカを眺めて出発。本谷を少し溯行した地点から、谷いっぱいを埋め尽したデブりの上をゆく。それも三〇〇mでなくなり、荒沢本谷を左に見送って、右手の天狗尾根最低コルへ突き上げている谷へ入る。行動中、時折り足をとめては荒沢尾根の雪の付着具合を眺めると、不安定な状態で尾根上に乗りかかっているキノコ雪は実に悪そうだ。登攀のカギは、登攀中のルートファインディングいかんによって決まるであろう。

谷も幅を狭ばめて急な登行となり、最低コルへ向かう途中から、ルートを右手天狗ノ鼻への尾根に突き上げる急な雪の斜面にとる。途中か

ら急なうえに亀裂の多い斜面となったため、新人がもたつきだしたので、ここで空身にさせて天狗尾根上に出た。

設営の間、天狗尾根上で鹿島槍北壁を背景に、スキー滑降の足ならしを行なう。天狗尾根上には二パーティの入山者しかいず、正月とはうって変わって静かなものである。設営が終わったのを見届けて、酒田に後のことを頼んでアタックへと向かう。

BCからスキー滑降

九時四十分出発。メンバーは元井、寺井、井口の三名。元井だけBCからスキー滑降に入る。最低コルへの小ピークからスピードをつけて、大胆に二～三回大回転を行なって亀裂の多い、登路にした急な雪壁へと滑降する。後から下ってくる二名はアイゼンであるが、雪質の悪さも加わって苦労をしている。こういう斜面では、スキー下降の方がなんといても有利である。

斜面の幅が狭い所から斜滑降と回転を混えて下り、最低コルからの沢身に合する。ここからデブリが多くなり出したので、谷中央部のコースをはずして、斜滑降と横滑りを混じえての滑降で、天狗尾根側の斜面にコースをとって右俣本谷との出合につく。ここから下部は、谷一面を埋めつくしたデブリである。かつて三月の剣岳池ノ谷左俣をスキー滑降したとき、下部での頭の芯まで痛くなるほどの滑降を思い出して、滑る気が起らず、ここでスキーをはずすことにした。天狗尾根側のブッシュにスキーを結びデポする。

荒沢尾根の登攀

十二時半、南俣出合から荒沢本谷への二つ目のクローアールから取りつく。雪壁を右上へつめた尾根に上がり、ノーザイルで十五分岩溝を登れば、スラブ上に不安定に付着した雪壁に出る。右上へと気を配りながら登った後、急な雪稜の登りが続く。スタカットで行動すべきなのだが、メンバーの調子がよいので時間を稼ぐ。気温があがり過ぎたのか、雪が湿りきっている。やがて、亀裂の多い雪稜を登っていると、雨がパラつき出した。

この上、少し登ればⅡ峯上に出るであろうが、先はながいことだし、Ⅱ峯上に出てしまつては、風当たりも強いにきまっている。濡れてのビバークはいやなものだと、雪稜の少し左下のハイマツ帯に、格好の場所を見つけて腰をおろして、雨宿りをする。しかし、やみそうにはないので、ビバークと決める。十五時天狗ノ鼻のBCと交信、明日の北アは風雪に見舞われると知らせてくる。

十七時、降雨激しい。二十二時半BCと交信すると、二つ玉低気圧の接近の知らせを受ける。長期戦を予測して食糧の節減に入る。夜中、南俣側に不気味に雪崩の音が頻繁に起こり、すさまじいばかりである。零時半、ラーメンを三人で分け合って食べる。

三日（曇のち風雪） 五時半にBCと交信する。山岳地帯には風雪注意報が出されているとのこと。ツェルトをめくって空もようをうかがうが、嵐の前の静けさといった天気で、雲のあい間から朝日がもれている。BCパーティのことが不安でもあり、テントの張綱の締め直しと、防風壁の補強を指示する。とにかく天候悪化の前に、荒沢尾根の核心部を抜け出しておこうと、七時二十分、行動を開始する。いちおう、大事をとってスタカットで登攀を行なう。

1 P（三〇分）、雪稜を少し登るとⅡ峯上に出る。ここから尾根はちょうど刃の上を行くようなもので、馬乗りにもたがって進む。2 P（三〇分）は雪稜と岩場を少し登る。3 P（二〇分）は雪稜。雪質は柔かいが気持のよい登りである。4 P（三五分）雪稜の後、左手の岩肌を二〇分登る。この後は雪壁の亀裂沿いに登行。5 P（三五分）は北俣側の急な雪壁を登る。この頃から小雪がチラつき出したが、視界はまだよい。十時、BCと交信。

6 P (三〇時)、南俣側のハイマツ沿いに登って、約六時脆い岩場を登る。降雪が激しくなる。
7 P (三五時) は、北俣側に切れ落ちた垂壁を、右上に五時トラバースした後、雪稜と雪壁を登る。
8 P (三〇時)、岩稜をやや南俣側に登ってテラスで休憩。9 P (三〇時)、岩稜づたいに登るとヒョッコリⅢ峯の上に出た。振り返ると、荒沢尾根には北俣側に見事なまでにキノコ雪が張り出している。

10 P(三〇時)、ギャップとなる。一〇時ほどの懸垂下降が可能であるが、ビレーピンをとるのをやめて、少し戻って南俣側へ下降し、ギャップへとトラバースを行なう。雪がやむ。11 P(二〇時)は、ギャップから草付の不安定な雪の斜面を登って、大きなダケカンバの木の上にもたがってビレーする。12 P (三五時)、このピッチで困難な場所は終わりではなかろうかと考え、最後の飾りを井口に登らせてはと考え、彼にトップを交替したが、風雪と深い雪壁の登りに手こずっている。一五時ほど登ったところで約三時スリップをしたので、やむなくそれ以上登らせるのをやめ、交替して急な雪壁を右上へ登って核心部を抜ける。

ここからコンティニューアスで東尾根上へ出た。気温がさうとう下り、カチカチに凍結した視界のきかない風雪の中を、十五時二十分、東尾根第Ⅱ岩峯の基部に到達する。BCへ早く帰りたいところだが、メンバーの疲れもあり、今夜はここでビバークと決める。

四日 (風雪のち曇) 夜中降り続いた雪でツェルトは雪で圧せられ、次第に身動きがしにくくなるほどであった。低気圧も通過しきったであろうはずだが、悪天候が続いている。七時二十分出発。視界のきかない風雪のなか行動を開始する。岩稜を少し登ったあと、急な凹角壁の登りとなる。気温が低く、カラビナに手袋がくっついてしまって離れない。約十八時で乗越す。ここからラッセルを行なって荒沢ノ頭に到着。休憩ののち、天狗尾根を下降し、十二時、天狗ノ鼻のBCに戻り、酒田の作ってくれた温かいミルクコーヒーに舌つづみをうった。この夜は昨夜の悪天候とはうって変わり、東に大町の灯が眺められた。

五日 (快晴) 今朝はカンカン照りの五月晴れとなり、新雪に覆われた北壁や荒沢奥壁の雄々しい姿をみせつけられ、また来るときまでの別れが惜しまれる。次回の山行はぜひとも北壁直接尾根を登攀、その足でキレットからカクネを一気にスキー滑降を試みよう、と心に強く誓いながらテント撤収にかかった。

下山路を荒沢に予定し、スキーをデポしてきたのだが、こう天気がよくては新雪雪崩と、新人のこともあり、予定を変更せざるを得ない。八時十分、記念写真を撮って天狗尾根を下降。適当な深さの新雪で下りやすい。第Ⅱクーロアールの下、ナイフエッジ状になった雪稜上の歩行に、気を良くしながら下降を続けるが、トレールがないので、五月の連休の山行とは思えない静けさだ。突然、荒沢ノ頭直下を起点に大雪崩が発生。大音響とともに荒沢本谷に大瀑布となって落ちていった。いやなブッシュこぎもなく下降して、十三時五十分、荒沢に降り立った。

(神戸 FRC 会員)

40. 山本淳〔山口大学体育会山岳部〕 「後立山縦走」『岳人』第294号

昭和46年12月1日刊 中日新聞東京本社発行

要約

昭和45年(1970)12月18日～昭和46年1月4日の記録。後立山(白馬岳-針ノ木岳)縦走。

メンバーは、縦走隊4名(新人訓練を兼ね、途中メンバー2名交代する。これにサポート隊が支援。合計12名参加。) L山本淳、竹野隆恒、梶川彰、井出恒夫、原田成治、藤原秀晴。

行程は、12月18日 白馬駅-親ノ原-鶴峯-天狗原

19日 天狗原-白馬大池-小蓮華-白馬岳

20日 村営小屋-杓子と鑓のコー-鑓ヶ岳-天狗小屋

21日～27日 風雪の為停滞

28日 天狗小屋-不帰一峯-二峯北峯-唐松岳-唐松小屋-五竜小屋

29日 停滞

30日 五龍小屋-五龍岳-キレット小屋-大キレット-鹿島槍北峯-幕営地

1月1日 鹿島槍南峯-冷池-種池-新越乗越

2日 停滞。鳴沢岳手前までラッセル。

3日 新越乗越-赤沢岳-スバリ岳-針ノ木岳-針ノ木峠-大沢小屋

4日 大沢小屋-大町

一九七〇年十二月—七一年一月の記録

われわれは厳冬期後立山合宿の締めくくりとして、白馬岳-針ノ木岳縦走を計画し、残雪期、夏山、秋山と偵察をかさねた。その結果、遠見尾根からは新人訓練、および上級生のリーダーシップ養成をかねたサポート隊を入れることにし、縦走隊は四名で、五竜までの前半と以後の後半をそれぞれ十日分の食糧で縦走することになった。縦走隊は二年部員の養成のため五竜で二名メンバーチェンジすることにした。また入山は母池から、下山は蓮華岳大沢尾根を使うことにした。

幸いにして、前半十一日間、後半七日間で終えることができたが、前半の不帰ノ嶮および後半の八峯キレットを好天をつかんで一日で通過したことが、成功の鍵であったと思う。

記録

縦走隊=パーティ=L山本淳(四年)、竹野隆恒(二年、前半)、梶川彰(二年、前半)、井出恒夫(三年、後半)、原田成治(二年、後半)、藤原秀晴(専攻生)

一九七〇年十二月十八日(曇時々晴、後風雪) 白馬駅で九時半までバスを待ち、親ノ原へ入る。リフトを使用して鶴峯へ向かう。ここでワカンをつけていよいよわれわれだけの世界が始まる。ラッセルは深くはないが、入山の時はいつも苦しいものだ。成城大小屋をすぎて小尾根に取りつき、天狗原の手前で風雪となる。天狗原に入って風雪は本格的となったので祠の横に幕営する。

〔タイム〕 親ノ原(一〇・〇〇)-鶴峯(一二・一〇)-天狗原(一五・〇〇)

十九日 (晴時々曇) 天気がよいので天狗小屋までのつもりで出発する。雪がしまっておりラッセルはほとんどなし。乗鞍の登りは右手のダケカンバの疎林の中に行く。上部はクラストしており、ワカンでは苦勞した。乗鞍頂上でアイゼンにつけかえ、大池小屋の横を通過して小蓮華の登りにかかる。このあたりまでくるとさすがに風が強い。三国境をすぎるとさらに風は強くなり地吹雪をとまなう。白馬岳頂上あたりから不調を訴える者が出たため、村営小屋付近に幕営する。

〔**タイム**〕 天狗原発 (六・三〇) - 白馬大池 (八・一〇) - 小蓮華 (一〇・四〇) - 白馬岳頂上 (一四・〇〇) 村営小屋 (一四・二〇)

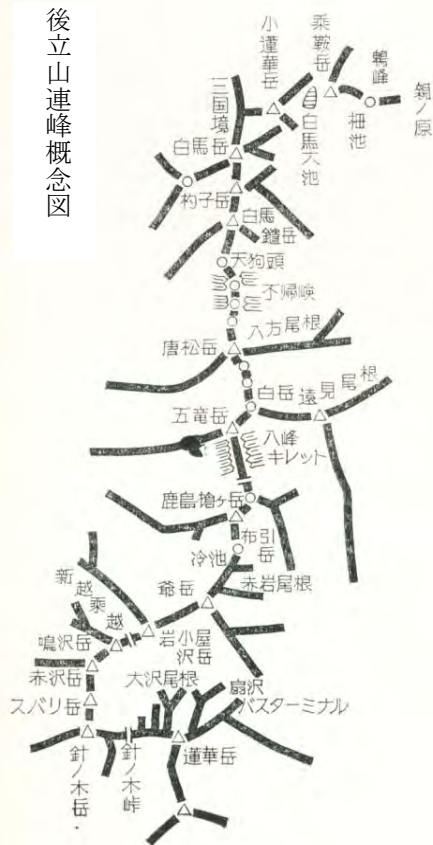
二十日 (晴後曇) 状況によっては不帰を越えるつもりで出発したが、天狗尾根まできて上空はすでに厚い雲に覆われてしまった。天狗の大下り、不帰二峯の状態もわからぬし、不帰二峯頂上まで幕営地もないので、ここで天気を待つことにする。トランシーバー交信の結果、サポート隊は五竜アタック中とのこと、天狗小屋泊まりを告げる。その後二名で天狗の大下りを偵察した結果、それほど悪くはなく、夏道通りに下れることがわかる。しかし不帰二峯の状態はわからない。



縦走路からの鳴沢岳

〔**タイム**〕 村営小屋発 (六・四〇) - 杓子と鐘のコル (七・五〇) - 鐘ヶ岳 (八・五〇) - 天狗小屋 (九・四〇)

後立山連峰概念図



二十一日—二十七日 (風雪) 停滞。

二十八日 (晴) 待望の晴天。快調にとぼし、休みなしで不帰一峯まで行く。天狗の大下りもほんの一部をバックステップで下った以外、なんということもない。これからいよいよ二峯の登りにかかる。最初は夏道どおりに鎖、はしごを利用して登る。夏道が信州側をまいている烏帽子岩は、まず直上を試みるがむずかしく、夏道上に張りついた雪をラッセルして行く。念のため残置ハーケンとハイマツを利用してザイルを固定する。

次の岩稜も夏道は信州側についているが、われわれは数メートルの壁を直上してリッジ上に出ることにする。ここにも残置ハーケンがある。まず空身で登ってザックは吊り上げを行なった。リッジ上は全くのナイフエッジで、新雪が不安定についており少々緊張させられる。ナイフエッジをすぎるといよいよ北峯直下の雪壁であるが、われわれはほぼ夏道をたどった。ところどころフィックスがあり、針金も出ているが傾斜は急であり、雪が氷化してカッティングを要するところもある。北峯の肩に出るまでは緊張の連続だったので頂上での一服はまた格別の味であった。二峯から唐松岳までは夏道をたどる。唐松小屋から牛首岳にかけての岩稜は少々悪い。

大黒岳付近はラッセルが深く、意外に時間を費やし、白岳の登りにかかる前に日没を迎えてしまった。五時半の交信でサポート隊に出迎えを依頼する。やがて白岳の頂上に灯りが見え、十日ぶりの再会を喜びあった後、五竜小屋に入る。

〔タイム〕天狗小屋発（六・四〇）－不帰一峯（八・三五）－二峯北峯（一二・三五）－唐松岳（一三・五五）－唐松小屋発（一四・三〇）－五竜小屋（一八・三〇）

二十九日（風雪） 停滞。

三十日（晴） 二名をメンバーチェンジして鹿島槍に向かう。五竜の登りは長いフィックスがあるが、例年と違い雪がべっとりついていてトラバースできず、一カ所岩稜のトラバースに緊張する。下りも長いフィックスがあり、利用させていただく。八峯キレットは稜線を行くがたいして緊張するところもない。ただキレット小屋に下るところが少々悪い。大キレットでは三パーティ、十人が登ってくるのを二時間近く待った後懸垂下降する。鹿島槍の登りはもろいブレイカブルラストでステップがくずれやすくやや緊張する。北峯アタックの後、夏道の分岐点付近に幕営する。

〔タイム〕五竜小屋発（六・五五）－五竜岳（八・一五）－キレット小屋（一二・一〇）－大キレット発（一四・三〇）－鹿島槍北峯（一六・三〇）－幕営地（一六・四〇）

三十一日（風雪） 停滞。

七一年一月一日（晴後曇） 天気はあまりよくなかったが次第にもちなおし、少し遅く出発する。風強く顔がいたい。元日アタックのパーティが続々くる。冷池付近はテント村ができている。爺ヶ岳のトラバースにうんざりし、種池付近のラッセルに悩まされて新越乗越につく。

〔タイム〕幕営地発（七・五五）－鹿島槍南峯（八・三〇）－冷池（九・二〇）－種池（一一・四〇）－新越乗越（一五・二五）

二日（風雪、一時晴れ間） 停滞。昼ごろ鳴沢岳手前まで、ラッセルに出る。

三日（晴） 一気に下山のつもりで出発する。快調にピッチをかせぐ。スバリを越えたところでサポート隊と交信する。サポート隊は扇沢のバスターミナルについたところであった。秋山で不安定な新雪に悩まされたスバリの下りもなんの苦労もない。針ノ木岳からの大展望はすばらしい。リッジどおしに針ノ木小屋に下ってほっと一息つく。下山ルートの大沢尾根も秋の偵察とはうって変わってブッシュがかくれ楽である。尾根の中間点付近でサポート隊と出会い、再会を喜びあう。以後はサポート隊のトレールに助けられて容易に下降をおわる。

〔タイム〕新越乗越発（六・四〇）－赤沢岳（八・二五）－スバリ岳（一〇・〇五）－針ノ木岳（一二・一〇）－針ノ木峠（一二・二〇）－下降開始（一三・三〇）－大沢小屋（一六・三〇）

サポート隊＝CL 奥本一美（四年）、井出恒夫（三年、前半）、上田定（三年）、原田成治（二年、前半）、竹野隆恒（二年、後半）、梶川彰（二年、後半）、増田恭孝（二年）、川本長雄（二年）、吉原英明（一年）、岡部益雄（一年）

一九七〇年十二月十八日（曇時々晴） 神城でお互いの健闘を祈りつつ縦走隊と別れる。スキー場から直接尾根に取りつく。かすかにトレールがあり、順調に進む。小屋の前で幕営する。

〔タイム〕神城発（八・五〇）－神城スキー場（九・三五）－遠見小屋（一三・三五）

十九日（曇後晴） 大町の灯が美しい。尾根すじははっきりしており順調に進む。昼前に西遠見につく。

〔タイム〕遠見小屋発（六・三五）－小遠見（八・三五）－西遠見（一一・二五）

二十日 (晴) 白岳の斜面はべっとり雪をつけている。リッジ通しに行く。二ピッチで五竜小屋に着く。五竜アタックに向かったが、ここもべっとり雪をつけていて、トラバースできず途中で引き返す。

〔タイム〕 西遠見発 (六・二〇) - 五竜小屋 (八・四〇) - 小屋発 (九・四五) - 小屋 (一三・三〇)

二十一日 (霧後晴) 停滞

二十二日 (風雪) 天気はよくないが視界はある。天気も午前中はもつと判断して唐松アタックに向かう。大黒あたりで風雪となったがとにかく唐松小屋まで行く。この頃には本格的な風雪となり唐松を目前にアタックをあきらめる。初めて冬山らしい天気となった。

〔タイム〕 五竜小屋発 (六・三〇) - 唐松小屋 (八・三〇) - 五竜小屋 (一〇・三五)

二十三日-二十七日 (風雪) 停滞

二十八日 (快晴) すばらしい天気。五竜アタックに向かう。一週間の風雪に剣が真白に雪をつけている。五竜アタックはすべてリッジ通し。夕刻、星空の下に縦走隊が到着する。久しぶり全員がそろいおそくまで話がはずむ。

〔タイム〕 五竜小屋発 (五・三〇) - 五竜岳 (七・三〇) - 五竜小屋 (九・一五)

二十九日 (風雪) 停滞

三十日 (快晴) 再び縦走隊と別れ、サポート隊は遠見尾根を下る。続々と登ってくるパーティで、トレールは一級国道なみ？神城のスキー場でテントを張る。

〔タイム〕 五竜小屋発 (六・五五) - 神城スキー場 (一一・二〇)

三十一日-七一年一月一日 神城にて縦走隊との交信を待ったがついに交信できなかった。

二日 (曇) 縦走隊は針ノ木断念と判断し西俣に入ることにする。大谷原についた頃から天気は回復し、縦走隊は赤岩尾根を下る可能性はなさそう。

三日 (曇) きのう下ってこなかったのも、縦走隊は針ノ木まで進んだものと判断して扇沢に向かう。稜線の天気を下界では判断しにくいことと、トランシーバーでの交信がうまくゆかないのでサポート隊は苦勞する。

扇沢にきてようやくトランシーバーが通じる。本日中に大沢尾根を下ってくるといふことで、すぐサポート隊も大沢尾根に取りつく。五〇〇ほど登ったところで縦走隊と会う。その夜は大沢小屋前で幕営し、残った食糧を夜中までがんばって平らげた。

〔タイム〕 扇沢 (一〇・一五) - 大沢小屋 (一一・三〇) - 縦走隊合流 - (一四・三〇) 大沢小屋 - (一六・三〇)

四日 (雪) 縦走無事成功。一年生をトップに雪の中を下山のとき、かすかな満足感にひたった。

(記・山本淳)



五竜岳・鹿島槍遠望

41. 鳥屋部忠治〔東京緑峯山岳会〕「鹿島槍荒沢奥壁―南稜から鹿島槍北峯への記録―」
『岳人』第298号

昭和47年4月1日刊 東京新聞出版局発行

要 約

昭和46年(1971)3月20日～22日の記録。

鹿島槍ヶ岳荒沢奥壁南稜の登攀。北俣左ルンゼ―南稜―北峯の登攀。

メンバーは、4名。内野元博、荒木直樹、小林常雄、鳥屋部忠治。

行程は、3月20日 大町―鹿島―荒沢出合―荒沢尾根末端。

21日 荒沢尾根末端―南稜取付。

22日 東尾根(登攀終了)―北稜―大谷原―鹿島。

後立山連峰の雄、鹿島槍ヶ岳には大きく分けて三つのバリエーション・ルートがある。大冷沢北俣周辺、ルート数こそ少ないが北壁と同等の困難さをもつ荒沢奥壁、そして最後に悪絶を誇る北壁である。

私たちの会では、大冷沢北俣の各ルートは先輩がすでにトレースしており、北壁は三月合宿で数本のルートに登っている。しかし荒沢奥壁は積雪期においてはまだ入っていなかった。

装備の発達した今日、少人数でも鹿島槍の壁は登れると思ひ、仲間と数年前からその機会を狙っていた。社会人であるわれわれには日数の余裕がないので、約三日で登れる壁としては、アプローチが問題であり、天狗尾根から北壁はラッセルがある場合は日数的に無理と思われた。したがって比較的早く取りつける荒沢の谷底をつめ奥壁への登攀を計画した。このルートは取りつくまでは時間的に早い、雪崩の巣である荒沢をつめるため危険度は高い。だが日没に行動し、積雪の状態を見分けることができれば通過可能と確信を得た。

人員については、ラッセルは多い方がよく、壁に取りついたら場合は三人より四人で二パーティに分かれた方が有利と判断し四人で計画を練った。

初日は予定どおり荒沢尾根の末端でビバーク。二日目は下のテラスでビバーク予定であったが、上のテラスまで登れたのは好天に恵まれたためである。このため三日目には時間的に余裕があり、稜線散歩を楽しむこともできた。

今回登ったルートは先蹤者が登ったルートより左寄りである。つまり北俣左ルンゼ側から取りついていたが、南稜上に出るまでは雪壁であり、技術的には問題ないルートである。体力、技術的にも同等のメンバーであり、全員調子もよかったことが比較の日数をかけずに登攀できた理由と思われる。以下その記録である。

記 録

昭和四六年三月二十日―二十二日

パーティ＝内野元博、荒木直樹、小林常雄、
鳥屋部忠治

三月二十日(快晴) 大町からタクシーで鹿島部落へ入り、狩野宅で朝食をとる。登山届を書き、大谷原への平坦な道を歩き一時間で着。大冷沢を左に見ながらまっすぐ大川沢へと入る。川原伝いにトレールを追って行き、



荒沢北俣から南稜(左)と北稜(右)

途中堰堤を越ししばらくして発電所の用水取入口を過ぎると、他のパーティがあまり入っていないのかトレールが悪くなる。右岸沿いに行くと荒沢との出合に着く。ここは台地になっており雪崩の危険もない。荒沢奥壁登攀の場合、荒沢の谷底をつめるときのベースは、ここから先にはない。空は晴れわたり、時間も一〇時半、雪崩の発生する時刻であり、荒沢両岸からの雪崩が恐くて沢に入ることはできない。予定どおり日がかげのまで待つ。

一六時、日が西へ傾きはじめていたのでワカンをつけ荒沢へ入る。二〇〇^分ほどで天狗尾根の取付である小さな尾根が左岸から出ている。これを過ぎるとトレールがなくなり、荒沢もいよいよ陰惨な感じが強くなってくる。膝くらいまでのラッセルがあり、ところどころに両岸からの大きなデブリがある。約三〇分進み一五^分ほどの滝を越すと沢がだんだん広くなり、やがて奥壁上部が見えてくる。沢の真中をラッセルし、南俣出合を快調に通過して、荒沢尾根末端に着くと暗くなってきたのでビバーク地を探し、四人で一つのツェルトに入る。

〔タイム〕 狩野宅発（八・一五）－荒沢出合（一〇・三〇～一六・〇〇）－荒沢尾根末端（一八・三〇）

二十一日（晴）夜は思ったより暖かく全員熟睡できた。月が美しく無風状態であり、今日も天気はもつだろう。闘志満満、日の出とともに出発する。ラッセルはなくなったが傾斜が強くなり、デブリで歩きにくい。しかし北俣に入ってから下流の無気味さはなくなり明るい感じになってきた。七時南稜末端に着く。取付の壁はアンサウンドロックで登れそうもないので、左に回り込み北俣左ルンゼに入る。ルンゼは広く急峻で雪崩の跡が無気味に残っている。二〇〇^分直上し、右の南稜から落ちている雪壁の下に着く。この壁から南稜上に出ることに決め登攀用具を出す。内野・小林と荒木・鳥屋部の二パーティにザイルを組み登攀開始。

一、二ピッチは傾斜のきつい浅いルンゼを直上、トップがステップを切るとスノーシャワーとなり、下にいる者はこれを頭からかぶる。八〇^分で全体がおおいかさっている感じの下部岩壁帯に突き当たり、樺の木を利用し確保する。

三、四ピッチ、右の南稜に向かって壁の直下を、ピッケルとバイルを利用し、微妙なトラバースを六〇^分行なう。すでに荒沢尾根の上に太陽が顔を出し、気温が上昇しはじめているので時々小さなブロックが落ちてくる。全員南稜上に集結した直後、下部岩壁帯のブッシュに詰まっていた雪が崩壊し、われわれの通過したトレールをきれいにさらってしまったのには驚かされた。

五ピッチ、雪稜を八^分登るとブッシュでハング状になっている壁が現われる。左右とも巻くことはできず、正面から太いブッシュにぶら下がり、腕力で強引に登り三^分でこれを乗り越す。上部は雪壁となり一〇^分直上すると樺の木が出ている。これにぶら下がるようにして後続を確保する。

六ピッチ、両側に雪庇が出ており、すっぱり切れている急峻な雪稜を、ピッケルとバイルで、雪庇をたたき落としながら七^分慎重に直上すると、傾斜が落ち平坦な雪稜が一五^分続く。

七ピッチ、取付に露岩があり、これを左に巻き約五^分でハイマツの出ている壁に突き当たる。ハイマツ帯に入るとザックが邪魔になり、体が浮き上がる。完全な腕力登攀で強引に直上する。七^分でハイマツの壁を抜けると上部は急な雪稜となり二〇^分直上する。傾斜がだんだん弱くなり下のテラスが目前にあった。

八、九ピッチ、傾斜のゆるい雪稜を八〇^分ラッセルする。技術的には問題ないが、雪の状態が悪く雪崩が心配だ。できるだけ早く登る。二ピッチで下のテラスに着く。取付からここまでの九ピッチは雪崩に対しては一瞬の油断もできないルートであったが、下のテラスは傾斜のない広い雪田であり、緊張感から解放される所である。高度感があり今朝登ってきた左ルンゼは、南稜と荒沢尾根からの雪崩の通路となっている。

下のテラスの雪田を右へ五〇^分トラバースして右端の雪稜に出ると、本谷がすぐ右に見えてくる。薄く雪のついた岩稜を二〇^分登ると傾斜は強くなり、雪の付着状態が悪く、アンサウンドロックのためリッジ通しに直上不可能となる。本谷側の壁を回り込み、細いブッシュを利用して軟雪の壁をジワジワ高度を稼ぎ、二ピッチ右斜上する。この六〇^分は意外に悪く時間をくう。

トップが壁を抜けたころすでに薄暗くなりはじめてきた。安全を考えここから四人が一パーティとなる。上部は傾斜が少し落ち雪壁となっている。四〇分直上するとナイフエッジになり、左手に上のテラスが浅いルンゼを一つ隔てて現われる。トップが出たころ暗くなり、ラスト小林はライトを出して登る状態であった。雪稜を掘り、なんとか四人坐れる広さにし、ザイルでセルフビレイをとりツェルトに入る。昨夜に比べ今夜は厳しいビバークになるだろう。眼下の大町の灯は美しく、空には星が素晴らしい。

〔タイム〕 荒沢尾根末端発（五・三〇）－南稜取付（八・一〇～三〇）－ビバーク地（一九・〇〇）

二十二日（晴）今日も天候は素晴らしい。厳冬期には望めない三月の特徴だろう。夜は交代で仮眠をとったので全身体調は良好である。南稜上部は広い雪稜となって東尾根に突き上げている。傾斜も弱く技術的には問題ない。一ピッチ目はハイマツの出ているリッジを四〇分直上、二、三ピッチ目は雪稜をダイレクトにステップを切り、登攀終了点である東尾根に飛び出る。四人集結して成功を喜び合った。

時間もあり、天候もよいので北峰に向かう。途中第二岩峯は二〇分の岩場となっており、古いフィクスト・ロープが残っていた。荒沢の頭を越え北峰に立つと、右に五竜、白馬、

正面に剣、左に槍ヶ岳の展望が開ける。写真を撮り、カクネ里北壁の見物を楽しんでのんびり下山する。第二岩峯の下降にはザイルを出しアップザイレンする。

下降ルートは東尾根は長大な尾根となって東方へ延びている。広い雪稜を下って行くと、徐々に急斜面になり、第一岩峯が現われる。好天のため雪が腐っていて、ステップを切るとスタンスが崩れ時間がかかるのでザイルを出して下降する。

さらに雪稜を下降して行くと、やがて三ノ沢右俣上部の広い斜面に出る。状態がよければ三ノ沢を下降する予定であったが、デブリがものすごく下降不可能の状態であったので、できるだけ荒沢側の斜面を下降して、二ノ沢の頭とのコルに着いた。

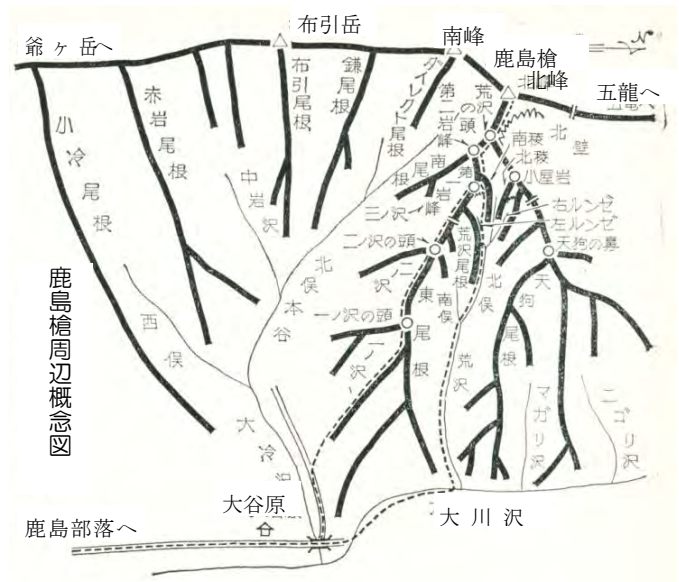
尾根は少し登り気味になって、二ノ沢の頭に立つ。ここからは南稜上部の展望がよいのでしばらく見物して行くことにする。東尾根は傾斜も落ち、広がって樹林帯となる。腐った雪は膝までもぐるので非常に歩きにくい。

一ノ沢の頭を過ぎ、しばらく単純な樹林帯を下り、東尾根の傾斜がなくなったあたりで右下へ張り出している急な尾根を一気に下ると、大冷沢の川原に到着した。ちょうど発電所の取入口のある付近であった。ここからはもう大冷沢左岸の林道を二〇分も行けば大谷原へ着く。日光浴を楽しみながら大休止をし、ザックを整理する。

夕焼けの鹿島槍を振り返りながら狩野宅へ着くと、婆さんが笑顔で迎えて下さる。お茶をご馳走になり、今回の記録を登山帳に不慣れた毛筆で記入してしめくりとした。

〔タイム〕 上のテラス発（六・五〇）－登攀終了点（七・四五）－北峰（九・三〇）－大谷原（一四・五〇～一六・三〇）－狩野宅（一七・三〇）

（記・鳥屋部忠治）



42. 合田敏夫・森田正行・篠原清 〔関西クライマースクラブ〕
「厳冬期不帰二峯東壁下部・上部三角形岩壁」『岳人』第 308 号
昭和 47 年 2 月 1 日刊 中日新聞東京本社発行

要 約

昭和 47 年（1972）2 月 14 日～20 日の記録。不帰二峯東壁・上部三角形岩壁登攀。
メンバーは、L 合田敏夫・森田正行・篠原清の 3 名。

行程は、12 月 14 日 白馬村細野－黒菱－八方尾根－不帰沢支尾根
15 日 唐松沢－・二峯ルンゼー下部三角形岩壁取付
16 日 下部三角形岩壁登攀（中間地点まで）
17 日 下部三角形岩壁登攀－甲南コル
18 日 上部三角形岩壁登攀（中間地点まで）
19 日 上部三角形岩壁登攀－不帰二峯南峯の頭－唐松小屋手前ビバーク
20 日 唐松小屋－八方尾根－白馬

※三角形岩壁については、1956 年（昭和 31）4 月中旬の独標登高会による下部岩壁の記録があり、以後幾つかのパーティのトレースがあったが、これまで厳冬期の記録はなかった。

一九七二年二月の記録

積雪期における不帰で、登攀のもっとも困難と思われる三角形岩壁の登攀を考えたのは四、五年前からであった。その頃はまだ技術的、精神的にも力不足であり、登攀できなかった。しかし、ここを一つの目標とし、いつの日にかの登攀を胸に秘め、その後トレーニングを積み重ねてきた。

一九七〇年に入り五月、九月と不帰周辺に偵察を兼ねて入山したが、三角形岩壁の登攀は、悪天候その他により果たせなかった。七一年になり、どうやら、われわれの力で登攀できそうになったので、七二年二月中旬にいよいよ実行に移すことを決定した。

三角形岩壁に関しては、一九五六年四月中旬の独標登高会の下部岩壁の記録があり、それ以後も、五月の残雪期には多くのパーティにより下部岩壁はトレースされていたが、厳冬期の記録はなかった。

はじめから下部三角形と上部三角形の岩壁を継続する予定で、偵察のため四月十五日に四名で不帰に入山した。その結果は、上部三角形においては降雪中の登攀や、トップの大墜落などで苦闘を強いられはしたが、それでも下部－上部を入山から下山まで四日間で完了することができた。この経験をもとにしてさらに計画を練り、ルート、装備などを研究していった。行動日数は、七日、予備日として三日の計十日間を見込んだが、結果は全日行動となり、計画どおり七日間で終了した。

（記・合田）

パーティ＝L 合田敏夫、森田正行、篠原清

七二年二月十四日（風雪）

細野からのケーブルは、強風のためゴンドラが動かず、しばらく待たされたが一〇時三〇分頃から再び運行された。一一時五五分、黒菱からワカンをつけ、軽いラッセルを続けながら八方尾根を登る。第三ケルンのあたりは風雪が厳しく、バランスを失って転倒しそうになる。この上から、不帰沢に降りている支尾根を下降していくが、下降中、雪面に亀裂が走り一瞬緊張する。沢に下降す

る地点をビバーク地に決め、さっそく整地にかかる。一六時。

十五日 (快晴のち曇り)

六時五〇分、ビバーク地を出発し、アンザイレンして唐松沢に降り立つ。沢内は強風のためか、クラストしたところが多く、ラッセルは膝までだが、吹き溜まりは腰くらいまでもぐる。一、二峯間のルンゼに入り、下から数えて二番目のルンゼ下から、四〇分間隔のコンティニュアスで登り、ルンゼが右に折れる地点から雪壁を三ピッチで下部三角形岩壁取付のコルに出られた。コルからナイフエッジとなった雪稜を一ピッチのぼし、取付点に出る。一四時五五分。

陽はまだ頭の上だが、早々に雪洞掘りにかかる。雪庇を利用し、少し狭いが換気口までついたしやれたのができあがった。

天候はほぼ安定し、星が輝いており、今回もわれわれは、ツイているようだ。

十六日 (晴)

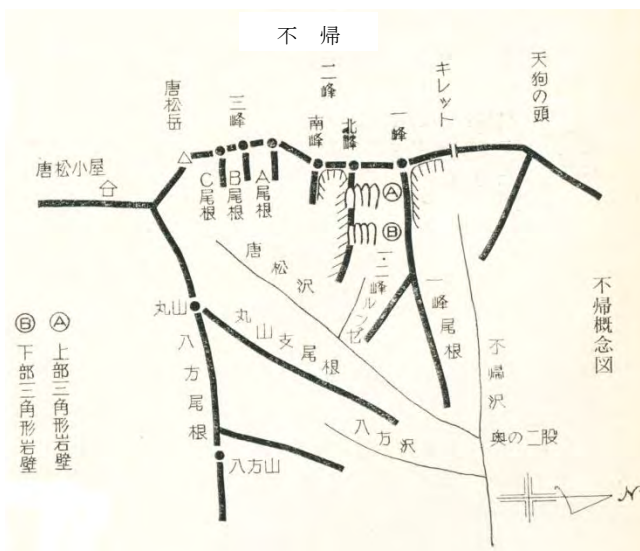
雪洞の前からすぐ取付である。時間に無駄がなく、気分がよい。トップ合田で七時登攀を開始する。氷の張り出したバンド状クラッグを避け、一段下から左上気味に登るが、スラブに張りついた氷は薄く、出だしから苦闘を強いられている。それでも不安定な氷を頼りに徐々にずり上がり、クラック出口の残置ハーケンに達した。それよりアブミトラバースで左の氷のスラブに移り、カッティングで直上し確保点の外傾したレッジに立った。

狭い不安定なレッジだが、アブミを使ってなんとか確保体勢を整え、ラストを迎えるとともに早々にトップを追い出す。トップの合田はきわどいバランスから右の外傾スタンスに立ち、アイスハーケンを打ち加え人工で直上で、小レッジに技け出す手前のフリークライムのところでしばらく躊躇していたが、意を決したらしく「落ちるかもしれないぞ！」の声を残してレッジに達した。

レッジから左へのトラバースも、雪壁と変わった今は悪いらしく、はでに落ちてくる雪塊のわりにはザイルはのびない。レッジから五分ほどで確保地も、氷化した雪壁の下ではなす術もない。さらに左へトラバースを行ない、カンテ状の雪壁から頭上の凹角に入り、中間部でボルト埋め込み“OK”の声がかかる。この確保地も狭く、二人がやっとなので、一段下に森田にとどまってもらい、傾きはじめて陽を気にしながら次のピッチにかかる。ルートは一段下のバンドのようだが、合田はここからでも行けそうだと、トラバースをはじめ。横手に詰まったキノコ雪に突き出されるような格好で右に出て、不明瞭なバンドを



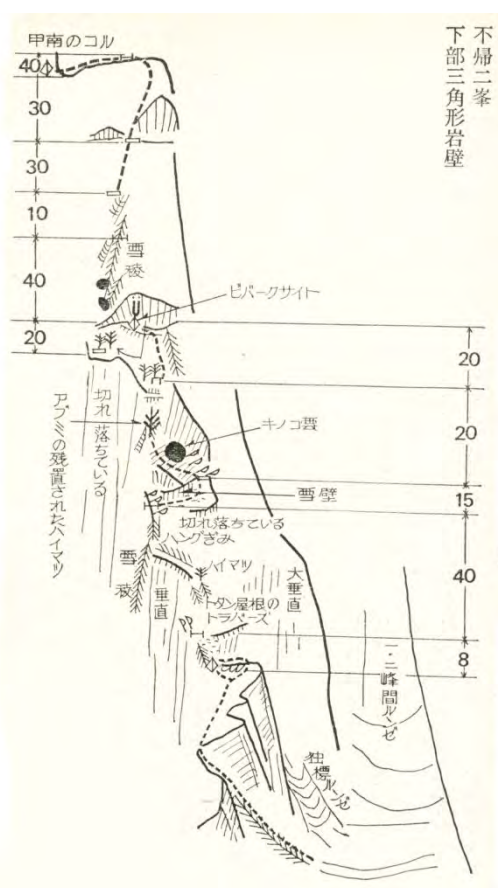
下部三角形岩壁4ピッチ目の凹角



右にトラバースして視界から消えていった。やがてザイルが三分の一ほどのびたところで合図があり、すぐ後に続く。細いブッシュを頼りに、雪壁のバンドを右へトラバースし、初登ルートの凹角の中間部に入る。これより頭上の凹角出口にはキノコ雪が詰まり、ルート通しの直上は不可能のようだ。まず人工で直上し、キノコ雪下のブッシュを掘り出し、アブミをセットしてキノコ雪の迂回を試みる。スラブに張りついた堅雪に、アイゼンの出爪だけを頼って左に出、出口から垂れ下がったハイマツの末端をがっちりとつかんだ。確保しているわれわれから思わず“やった！”との声が出る。抜け口にアイスハーケンをたたき込み、凹角から抜け出す。それより氷化した草付を左へトラバースし、すぐ上のブッシュに達した。三人が集結するころ、あたりはもう薄暗くなっていた。

きょう最後のピッチにザイルをのぼすため、合田が行動を開始する。右上に氷化したバンドをたどり、雪壁に出て左上にザイルをいっばいのぼし、一枚岩の壁の下でシュルンドを見つけビバークの準備にかかる。一七時四〇分。

ここはルートより上に四〇メートルほどはずれているが、あす懸垂下降で正規のルートに戻ればよい。ツェルト内に落ち着き、差し入れの角ピンを回す。下部岩壁の核心部を終えたという安堵感から酔いもころよい。



十七日 (曇り)

はっきりしない夜明けだが、見通しがきくようになったので七時出発する。昨夜のうちに埋め込んだボルトを支点に懸垂下降で、正規のルートのダケカンバまで戻り、登攀を再開する。

まず雪壁から木の枝を利用して壁の上にはい上がり、左手の雪を崩し、氷化したルンゼに入る。ルンゼ内をカッティングで進み、中間部のキノコ雪下を、頭を押さえられた苦しい姿勢からアブミを使って左手に移り、一段と斜度を増した不安定な氷壁を慎重に登り、右手の雪のリッジを崩して灌木で確保を取り、後続を迎える。ここからルンゼ内を二〇メートルのぼし出口付近でピッチを切り、後は快適な雪壁をアイスバイルとピッケルのコンビネーションで頂稜直下まで進む。

最後の胸のつかえるような雪壁を右上し、雪庇を避けて頂稜にはい出す。突然に、真黒な上部三角形岩壁が、渦まく霧の中から眼前に立ちはだかる。予想したはずの光景だったが、はじめて接するような驚きと、戸惑いがあった。

一息入れて落ち着きを取り戻し、鋭い雪稜をピークまでたどり、さらに四〇メートルで甲南のコルに着いた。一三時。

時間は早いですが、予定通りコルに雪洞を掘り、残った時間でコルからの下降五〇メートルと、上部岩壁一ピッチ目のフィックスに出かける。夕暮れまでのほぼ三時間を費やし、フィックスを終えた。上部三角形岩壁も氷の発達が著しく、あすからの登攀が憂慮される。それにくずれはじめた天候が気がかりだった。

(記・篠原)

十八日 (雪)

六時五〇分、新雪で雪崩の出そうな甲南ルンゼを、固定ザイルをたよりに五〇メートル下ると、取付点

の雪壁に切り開いておいたテラスに出る。さらに広げ、合田、篠原を迎えると、すぐさま、ひっきりなしに塵雪崩のかかる上部三角形岩壁にとりつく。

氷の凹角から、右斜上する草付バンドへの二五段は、前日二時間ほどかかって固定しておいたザイルがある。ステップを捜し、難なく固定ザイルの終わりまで登る。あと一〇段でなんとか三人集結できそうなテラスに出られるのだが、壁がかぶり気味の上、バンドが草付の壁状となっていて、ホールドもリスも全然なく、どうしても思い切れず、前日はここから下降してしまったところ。意を決し、氷の草付にステップをきざみ、登り出すともうアイスバイルを振る余裕もなく、蹴り込んだアイゼンの出歯だけをたよりに一〇段登り、草付にアイスハーケンを打ち、後続を迎える。

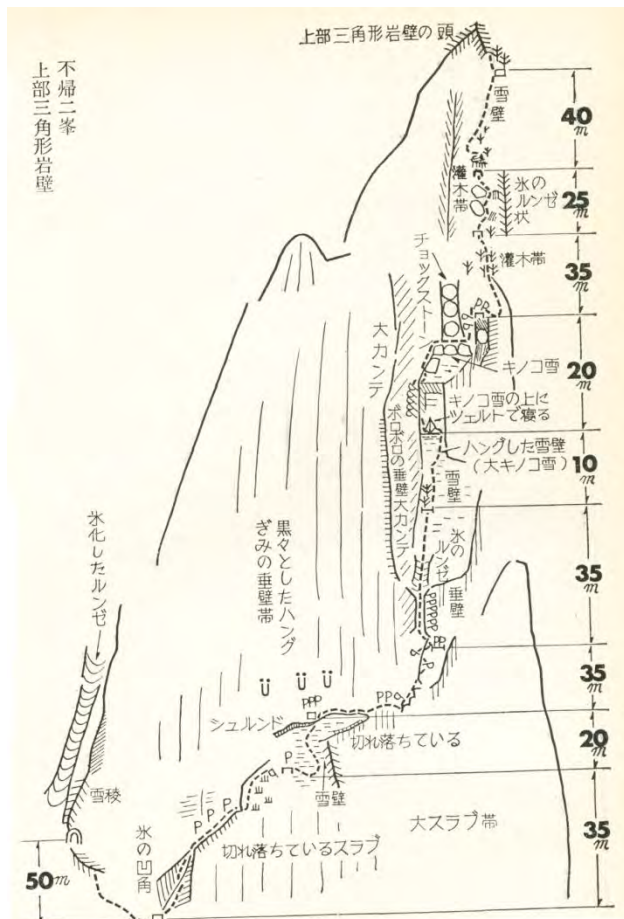
ここからは右へ五段トラバース後、ハング目指し凍雪にアイスハーケンを打ちながら登るが、ハング手前の雪壁は、グラニュー糖のような雪のため溝を掘り、体重を分散させ、シュルンドに入り込み、雪壁をくずして、ボルト、ハーケンでビレイする。

ラストからカラビナ類を受け取り、雪壁を崩しながらトラバースしていく。雪壁が雪のバンド状になるところまで来て、はじめてキノコ雪の上にいることに気がついた。しかし、比較的安定していた。あと三段でクラックからチムニーへ続く壁に出れるのだが、細々とした雪のバンドは足を置いたとたんに崩れ落ちてしまった。しかたなくハーケン一本打ち込む。しかしまだ届かず、さらにボルトを埋め、振り子で向かいのグサグサの壁にアイスハーケンを打ち、トラバースを終える。すぐ上部岩壁のキイポイントのクラックからチムニーを見上げる。計画の段階では、多分青氷がびっしりつくと思っていたが、どこにもない。

雪を手当たり次第落とし、アイゼンの爪の摩擦をたよりに垂直の小フェイスから、雪の詰まったクラックを登り、チムニー入口でアブミビレイする。

三人集まると、全員のアブミを持ち、垂直のチムニーへとりつく。雪を落としながら人工で登る。出口は一面氷が張りつめ、ホールドが全然わからない。幸い浮き石がコンクリートされていたため、ザイルシュリングをセットしてアブミで乗り越えることができた。さらに滑り台のような凍雪の雪壁にステップを切り、所々にアイスハーケンを打ち、ブッシュでピッチを切る。

合田、篠原が続き、荷上げを済ませる。ハングした雪壁に体が入るほどの溝を作り、チムニー登りで抜けきると、三方を垂壁に、上は水平に突き出たハングによって囲まれ、キノコ雪上の快適なテラスへ、全員顔をそろえた。一五時四五分。



十九日 (曇りのち風雪)

六時三五分発。六台のアブミを持って合田が登り出す。ハングを左から人工で登り、見えなくなるとまったくザイルがのびず、雪がハングの先からさかんに落ちてくるだけ。ボルトを打つ音が聞こえて少しのびる。そしてまた止まる。二時間もかかってやっとOKがかかった。ハングを越えて見るとテラテラのスラブの上に、いつ落ちるかわからないようなキノコ雪が積み重なり、空身でしかもザイルがあるのに悲鳴をあげた。腹這いになり、右へトラバース後、人工で直登するのだが、ここもまたキノコ雪で登れず、左から新たにハーケンを打ち込んで越えた。

テラスは三人集まるには狭すぎるため、合田を送り出す。テラスから右へトラバースをしていく合田の足元の雪が崩れる。やがてスラブが出てきて、アイゼンがきしむ。ピンがしっかりしていないので、その度に肝を冷やした。

灌木帯に入り、順調にザイルがのび出す。ザック三個と篠原を上げ、次のピッチを登り出す。最初キノコ雪をキックステップで下り、ザイルにぶら下がるようにして、右へトラバースして灌木帯に入り直上する。垂直に近い灌木帯だが、幸いなことにキノコ雪がなかったので登攀は楽であった。しかし、荷上げのザックは枝に引っかかってしまい、篠原が引っ張りながら上げた。

次の壁には、キノコ雪が積み重なっていたが、幸いなことに、ルートには二個ほど引っかかっているだけだった。合田はブッシュにザイルシュリングをセットして、アブミでハングした小フェイスを越し、キノコ雪を二個右寄りに抜けたらしく、登ってみると針金のような細い木の枝に、ブルージック結びでアブミが残置してあったのには肝を冷やした。

確保点は三人集まるには狭すぎるので、やむを得ず篠原は一段下でとどまっている間に、最終ピッチを合田がアブミを使って垂壁を越え、ハイマツの上に不安定に積もった雪壁を左から回り込んで登っていった。ザイルは四〇メートルいっばいのびた。さらにピッチをのぼしていくと、カンバの木でビレイしていた篠原も、荷とともに上がる。一応ここが上部三角形岩壁の終了点と思われた。時計を見ると一五時一〇分。

いつの間にか視界が一〇メートルとなく、それに雪が降っていた。荷上げ袋の装備と登攀用具を分担し、降雪の激しくなった雪稜を登る。

一六時二〇分、風雪の不帰二峯南峯の頭に出た。あとは稜線を一時間ほどで唐松小屋へ着くだろうと、たかをくくって稜線を飛ばしたが、さらに強まる風雪と、夜のためルートがわからなくなってしまい、一七時三〇分、黒部側の斜面でビバークすることにした。

風洞を掘ろうとしたが、たちまち氷が出てきてすわるのがやっとの広さしか作れなかった。その夜は一晩中、二時間おきに交代でラッセルに出た。そうしなければ押し出されるような雪だった。

二十日（風雪）

猛風雪で明けた。七時五十五分、視界は依然五メートルとなく、ルートは全然わからなかったが、きのうの稜線まで上がることにした。稜線へ出たとたん、顔に氷が張りつき、湿った靴は鉄板のごとく堅くなるのがわかった。幸い一時的に視界が開け、先の見通しもたち、安心した。

稜線は強風のため雪が吹き飛んでいて、暴風雪と寒気さえなければ夏より快適な状態で歩くことができた。

唐松小屋へ入った時は、足先はまったく感覚がなく、顔は部分的に白くなっていた。あまりの風雪のため、小屋でビバークするかを協議したが、低気圧が太平洋岸から去ったとしても、発達した大陸の高気圧は衰えることはないだろうと判断し、九時二〇分小屋を出た。八方尾根を信州側へ越えたとたん、ウソのように風雪はバツタリとやみ、雪だけとなった。登攀中の思い出話をしながら、スキーヤーでごったがえす丸い八方尾根を下った。

（記・森田）

43. 近藤和美〔東京こぶし山ノ会〕 「鹿島槍ヶ岳荒沢尾根」『岳人』第331号
昭和50年1月1日刊 中日新聞東京本社発行

要 約

昭和48年(1973)12月30日～昭和49年1月3日の記録。鹿島槍ヶ岳荒沢尾根の登攀。

メンバーは、L近藤和美、島田秀夫、藤原賢吾、米持繁の4名。

30日 鹿島集落～大谷原。

31日 荒沢出合～荒沢尾根取付～I峯。

1日 I峯～II峯手前。

2日 II峯～(キノコ雪)～III峯d峯。

3日 III峯d峯～a峯～東尾根ジャンクション。

いっそうやせ細った岩稜は、どこが尾根の真上かわからないほど大きなキノコ雪が続き、ヒヤヒヤしながら進む。

キノコ雪に苦闘する

当会の七四年正月合宿は、荒沢尾根アタック隊(当初奥壁北稜への継続を目指していた)の行動を中心に、サポートと新人教育を兼ねて東尾根と、天狗尾根にもパーティを送り、総勢二〇名であった。結果は意外なほどの好天続きに恵まれたが、予想以上のキノコ雪の発達と深雪のラッセルに日数をとられ、北稜への継続は断念し、三隊から選抜した五名で、五竜岳への縦走を果たした。以下はそのうちの荒沢尾根隊の行動記録である。パーティはL近藤和美、島田秀夫、藤原賢吾、米持繁の四名。

十二月三十日(雪) 鹿島から入山。この日は荒沢尾根末端まで入る予定であったが、降雪のためにあきらめ、東尾根隊とともに大谷原まで進んだのみ。

三十一日(曇のち雪) トレールがついている大川沢ぞいに荒沢出合へ。昨日の降雪もたいしたことはなかったし、曇天なので午後まで待たなくても、雪崩の危険は少ないと判断し、直ちに入谷することにする。すぐ右上、天狗尾根へとトレールは上がって行き、そこから先の谷通しはまったく先行者の通ったようすはない。

苦しいラッセルが始まったが、荒沢のバリエーションへのプロローグとしてはふさわしいと思える。だが一方では、雪崩への恐怖感を心の隅に抱きながらの遅々としたラッセルに、あせっても仕方ないよと、開き直った思いもいづく。そのうえ荒沢下流はまだ充分流れが埋まりきらず、通れる所を選んで左右の雪壁をトラバースして行くが、対岸へ移る時のルートファインディングに神経を使う。

それでも奥へ進むにつれ、谷底の積雪も増し、流れは一見埋まっているように見えてくる。ところがこれが曲者で、実はヒドンクレバスのようになっていて、とうとう近藤が踏みぬき、脇の下まで穴にはまりこんだ。しかし、辛うじて冷水につかるのをまぬがれた。ポイントの一つであった滝の通過は、右岸のバンドを通過してあっさり解決できた。判断どおり積雪は安定していたようで、兩岸とも雪崩の気配はまったくなかった。

やがて谷底はますます積雪を増し、もうヒドンクレバスの心配もなくなった。しかし、前方に見え始めた荒沢尾根の末端はなかなか近づかず、そのうち雪がチラつき始めた。ようやく二俣に近づいたが、急に傾斜が強まり、デブリの積もった斜面に登らされる。二俣はデブリの溜り場となっており、その手前との段差が傾斜を強めている。

二俣からほんのわずかに北俣に入った時、背の低い緩い雪稜となっている荒沢尾根のテールリッジ越しに、南俣上部からの雪崩を発見、急いで逃げようとしたが、深雪のため思うようには走れない。幸い雪崩はあまり大きなものではなく、われわれはそのコースから外れてもいたので、余波の雪煙をかぶったにとどまった。雪煙の洗礼を受けたわれわれは、こうなったら一刻も早く安全地帯へというわけで、テールリッジ中ほどの一本の目立ったカンバの木目指して登って行った。

カンバ近くの雪稜の背に達してひと休みし、いよいよ荒沢尾根の登攀開始である。テールリッジが傾斜を強めるあたりは、ブッシュがかなり密生しており、その上に未完成なキノコ雪がかぶさっているため、それを避けて稜の右側のクローワールの雪壁から取りつくことにする。

ワカンをアイゼンに着けかえ、だんだん傾斜を増す雪壁を登りつめ、いちだんと急になって岩肌の露出した所へ達した。ここでアンザイレンし、近藤がトップで左の急峻な軟雪の雪壁にルートを求める。できるだけ直上したかったが左へ左へと追いやられる。こんな急な所に、よくこれほど多量の雪がとどまっていられるものだと感心させられながら、一步一步踏み固めて左斜上し、ザイルいっぱいちょうど尾根に出る。うまい具合にもくろみどおりブッシュの途切れた所へ出たので、ここからは尾根伝いに登ることにする。

途中で日が暮れたが、ランプをつけてラッセルをがんばり、ドーム状のⅠ峯の頭に出る。強まってきた降雪の下、急いで島田自作のビバークテントを張る。

〔タイム〕 荒沢出合発（九時五分）－荒沢尾根取付（一四時三五分）－Ⅰ峯（一八時五分）

一月一日（曇のち晴） 昨夜の新雪五〇センチ。南俣からは何回か雪崩の轟音が聞こえたが、朝方になってほとんど止んだ。いきなり腰を没するラッセルで始まり、馬の背状の雪稜を進む。わずかに下ってコルを通過。一〇〇センチあまり進むと岩壁に突き当たる。ルートはこの岩壁の下端にそって雪壁を右斜上し、北俣から上がってくる支稜がコルになっている所へ出る。

不安定でしかも急峻な雪壁なので、近藤が空身でルート工作に出る。軟雪なので距離の割にやたら時間がかかる。ザイルを三本継ぎ足し、約九〇センチでやっと支稜上に出る。着いてみるとそこはコル状にはなっていない。雪稜を少し進むと、灌木にふちどられた五センチほどの小岩壁にぶつかる。島田がトップで灌木の左の雪壁を切り崩した後の草付壁から岩壁の上に出たが、ここから上はこの登攀随一の、実に急峻なほとんど垂直に近い雪壁であった。約二五センチのぼし、雪壁を切り開いてレッジを作り、ピッケルを打ちビレイ。

次は近藤がトップに立ち、相変わらず急峻な雪壁を



直上したが、このあたりは手近に灌木一本出ていないので、何の確保手段もとれず、もしトップが墜ちたら全員を引きずりこんでしまう。少しのミスも許されぬ緊張した登攀となる。急峻で軟雪の雪壁は垂直のラッセルであり、鼻先に対面している雪を踏み固めつつ登ると、頭上には次々と雪のオーバーハングができてしまう。約二〇分登ると雪壁がいったん段になった所へ出たのでピッチを切る。

ここからは雪壁は徐々に斜度を緩めるが、亀裂がいたる所に走り、その乗っ越しに技術が要る。今日もランプの世話になり、藤原と島田が一回ずつトップに立ち、やがて月明の下、平坦なやせた雪稜に出てビバーク。

〔タイム〕 出発（八時三五分）－ビバーク地（一八時四五分）

二日（快晴） おだやかなビバークと思っていたのが、夜半から強風が吹き出して、テントを吹き飛ばさんばかり。広い場所に張っているわけではないので気が気でない。風は夜明けとともに収まったが、そのために出発が遅れた。目の前のⅡ峰のドームに向けてノーザイルで出発。途中、カンバの生えている所が急で足場が固まらず苦勞する。約一〇〇分でⅡ峰に立った。

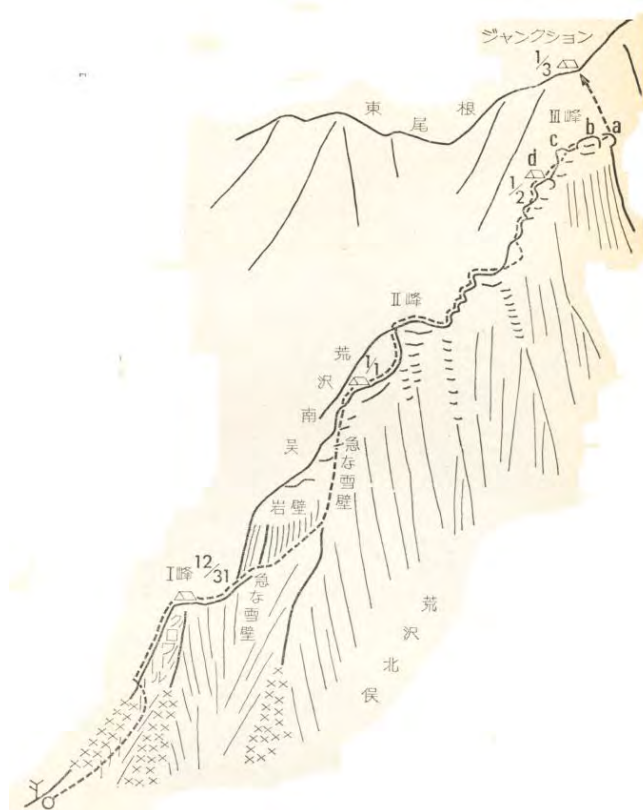
ここで二組に分かれてアンザイレンする。まず近藤・米持組が先行する。緩く下ってコルを過ぎ、いよいよ荒沢尾根の真骨頂であるキノコ雪が乱立、連立するⅢ峰の登りである。最初のキノコ雪は雪のオーバーハングを切り崩して直登。次の大きなキノコ雪は左側に露出している岩の方に回りこみ、ハーケンを打ってビレイする。次のピッチで尾根に戻る。次のブッシュの出たキノコ雪は両側とも切れ落ち、正面からステップを切る。崩れやすい雪に苦勞して突破。

ここで島田・藤原組がトップに出、大小二個のキノコ雪を越えると、雪稜の正面に幾重にもキノコ雪が積層している。正面突破は避けて右へトラバースし、ブッシュの出た凹状雪壁に入る。急だがランニングビレイがとれるので安心だ。尾根への出口にキノコ雪がかぶさっているので、左へトラバースして尾根に戻る。さらにいくつかキノコ雪を突破し、やがて飛び切り大きなキノコ雪の下に着く。

再び近藤がトップに立ち、キノコ雪のハンクが大きいので右からまいて越そうとスッパリ切れた雪壁のトラバースを試みる。しかし、雪が崩れて墜ちそうになり、改めて正面突破に挑み、一本のピッケルをホールドに、もう一本のピッケルで雪を切り崩して上に出た。少し登ると小さな雪の円頂に達した。貴重な資料にした紫岳会の記録（『岳人』二一八号）によると、Ⅲ峰c峰であることが判ったが、キノコ雪の状態は比喩ものにならないほど発達している。

まだ時刻は早い、残された障害の大きさについて藤原の意見などあり、今日はここで泊まることにし、キノコ雪のドームの上にテントを張る。なお実際には前記資料によるa峰の先に、もう一つピークが存在していたので、今後一つずつずらして呼ぶことにしたい。したがって現在地はd峰となる。

〔タイム〕 出発（九時五分）－Ⅱ峰（一〇時一〇分）



三日（快晴） 今日も快晴だが、雲海が出ていて荒沢尾根が浮かび、われわれのつけた一筋のトレールが見降ろせる。大きな困難が予想される今日は、見通しがつくまでずっと近藤が空身でトップに立つことになり行動開始。雪稜を少し進むと長さ二〇m、両側がほとんど垂直の幅約二〇mのやせ尾根となる。細いだけに雪稜が崩れそうで、おっかなびっくり向こう側へ渡り、そこに直立する、昨日少し手をつけかけたキノコ雪に挑む。高度感は抜群、スリルあるこのキノコ雪との数十分の闘いの末上へ出る。

昨日までよりいっそうやせ細った岩稜は、どこが尾根の真上か判らぬほど大きなキノコ雪の雪稜が続き、ヒヤヒヤしながら進む。尾根が直角に右曲する c 峯の特大キノコ雪は、右からまわりこんで容易に頭に立つ。ここから再び左右垂直のやせ尾根となり、馬乗りになって前進。岩稜の露出した b 峯にかかる。

北俣側のバンドを掘り出して進み、行き止まりから稜上に出る（残置ハーケンあり）。この岩稜は文字通りナイフエッジで、ザイルなど簡単に切れそうだ。立つことなど思いもよらないのでまたがったが、この先に背丈より高くキノコ雪が発達している。またがった姿勢のままではキノコ雪のてっぺんまでピッケルが届かず、下だけ削って前進したのでは崩壊した時トップが危険と判断、稜通しに代る突破ルートを探り、南俣側の垂壁を 10m 懸垂。そこから崩落寸前の雪壁とブッシュまじりの垂壁を左斜上する。

やがて頭上に張り出したキノコ雪にはばまれ、トンネルを掘り、雪のチムニーを掘り抜いて b 峯と a 峯のコルに飛び出す。文章にすると簡単だが、この部分は十分な見通しを持って、ザイルをのばしたわけではなかったのが精神的に緊張したが、それだけに登攀の甲斐があった。

尾根は左折し、荒沢尾根の頂点 a 峯へは、藤原がトップで二つの大きなキノコ雪を越して立つ。すぐ先がギャップで、支点用に持ち上げたストックを深く埋めこみ、二つのキノコ雪のある垂直の一〇m 余の雪壁を懸垂。ギャップもひどくやせた尾根だが、東尾根側斜面に突き当たったとたん尾根は消えてしまう。

あとは東尾根上まで雪壁の登りである。島田がトップで灌木まじりの急な雪壁を一ピッチ登り、続いて藤原がトップで複雑にキノコ雪の張り出した雪壁をぬうように登る。やがてサポート隊がラッセルしてくれた四〇m のトレールの下端に着く。

〔**タイム**〕 行動開始（七時五分）－東尾根ジャンクション着（一八時三〇分）

44. 倉下秀洋〔大町山の会〕 「屏風尾根―スバリ岳中尾根登攀―爺ヶ岳縦走」
『岳人』第331号
昭和50年1月1日刊 中日新聞東京本社発行

要約

昭和49年(1974)1月1~4日(4日間)の記録。スバリ岳中尾根～爺ヶ岳の記録。

メンバーはCL柳沢昭夫、SL松原繁、倉下秀洋、浅川とみ子。

1日 扇沢―屏風尾根―コル(雪洞)

2日 雪洞―稜線直下―中尾根登攀―デポ地(雪洞)

3日 雪洞―稜線―種池小屋(雪洞)

4日 雪洞―爺ヶ岳―東尾根―鹿島部落

今回の目的は冬の岩登りをし、縦走によってパワーを養成し、スキーでスピードアップをという欲張った計画だ。

雪洞泊まりで軽量化

私たちの四十八年度の冬山合宿は、後立山山域での分散形式をとることにした。合宿が大世帯になると、ともすると各メンバーの優れた面を出し切れなかったり、また、地域の山岳会としてオールラウンドな山登りを志向していかなくてはならない―などの理由からであった。それで、不帰一峯尾根、爺ヶ岳南尾根、岩小屋沢岳新越尾根、スバリ岳―爺ヶ岳縦走、スバリ岳中尾根―爺ヶ岳の五パーティを出すことになった。不帰一峯を除いて、他のパーティはすべてお互いにサポート体制がとれるよう、スケジュールを組んでの入山であった。

われわれのパーティの目的は、フルコースをいただくというもので、少々満腹気味ともいえなくはないが、冬の季節風をうけて比較的混んでいない山域での岩登り、縦走、そしてスキーを積極的に用いてスピードアップをしようという点にあった。冬期の岩登りの経験をし、縦走によってパワーを養成し、スキーも使いこなせるようになるねらいは、これからも積雪期の山を目指そうと思う岳人にとって、もっと考えられていいのではないか。

これらの多様な行動様式をカバーしてくれるフィールドとしては、スバリ岳屏風尾根、中尾根、爺ヶ岳への稜線、東尾根は、ほぼ満足できるものであったといえよう。また、今回の合宿の性格上、軽量化は大きなポイントであったので、テントを持たずにオール雪洞とした。使わない時のスキーの重量は疲れている時などはこたえた。最初は稜線でもスキーを使う予定であったが、疲労と重荷のため使えず、アイゼンとピッケルの姿で稜線を行くメンバーのザックに、スキーをくくりつけている姿は、スマートとはいえたものではなかった。

さらにわれわれは心拍数測定を行ってみた。これは疲労健康状態を知る上からも貴重であった。休息時、就寝時のわずかの時間を利用しての簡単なものではあったが、ラッセル技術、基礎体力、酸素分圧の低下の要因を示唆された。何か欲張りな合宿のようでもあったが、メンバーは各々自分の楽しさを追求した。ちなみに計画書の表紙には、「楽しい仲間と楽しい山をして豊かな心」と記されてあった。

メンバーはCL柳沢昭夫、SL松原繁、倉下秀洋、浅川とみ子。

一月一日 扇沢までは冬期はバスが入らないので、積雪があるとバス道を歩かなければならないが、幸いなことに扇沢ターミナルまで車で入ることができた。六時、小雪が降る中を四名はシールを効かせて出発。屏風尾根は大沢小屋付近からスバリ岳と赤沢岳の中間の稜線に突き上げている尾根であり、その取付までは広い雪原状になっているので、目指す尾根をしっかりと確認しておく必要

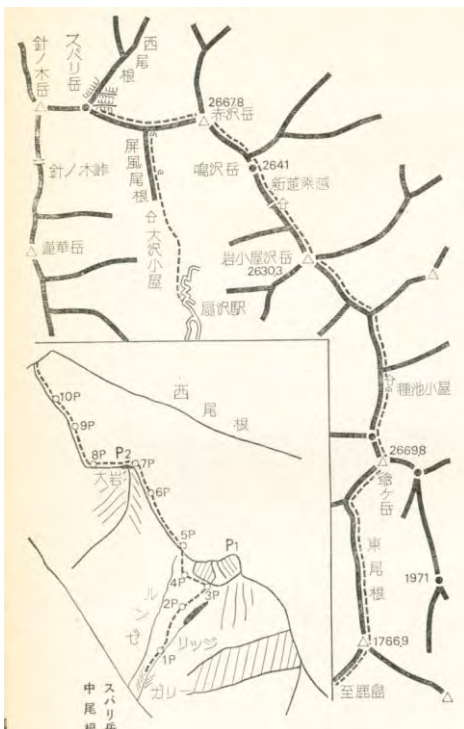
がある。

取付の台地についてひと息入れ、スキーをワカンにはき替える。尾根の末端部は急登で、右手に広い赤沢が走っているのを見ながら登り始める。急登が終わって樹林帯を抜けた所、最低コルの手前に雪洞を掘った。

【タイム】扇沢ターミナル（六時）－屏風尾根取付（八時半）－コル（一四時半）

二日 七時に雪洞を出発。この屏風岩尾根は部分的にはヤセている所もあり、荒天時や疲れている時などは慎重な判断と行動が要求されるが、ルートファインディングはむずかしいというほどのものではない。背後の蓮華岳、そして針ノ木岳を眺めては早めにラッセルを交代して頑張る。九時半、稜線直下の窪地に荷物をデポし、スバリ岳中尾根の登攀に向かう。

この尾根は一〇ピッチ前後のすっきりした岩稜で、中間にP1とP2の二つのピークを有しており、それが美しいリッジで結ばれている。取付へは尾根手前のゆるいルンゼを下降すれば末端に回りこめるが、時間が遅くなっていたので、P1とP2の間のルンゼの右手をつめてコルに出ることにする。黒部湖から吹き上げてくる風は雪を吹き飛ばし、信州側とは積雪量が格段に違うのには驚かされる。



風は冷たかったが絶好の登攀日和で、アイゼンを付け、手袋をはめてのⅢ級程度の岩稜登攀を楽しむ。七ピッチ目の核心部は右に回りこみ、細いバンドと小さなホールドの高度感のある登り一〇ピッチで、再びリッジに出た。あとは岩稜どおしにコンティニューアスでピークへ出て、デポ地に戻り雪洞を掘った。

【タイム】雪洞出発（七時）－稜線直下デポ地（九時半）－中尾根登攀開始（一〇時）－デポ地雪洞（一五時半）

三日 爺ヶ岳に向かって縦走に移る。岩小屋沢岳を過ぎたあたりでスキーをつけてみたが、昨日の登攀の疲れと重荷のため、シュプールは長くは続かなかった。結局はほとんどアイゼンで歩きとおすことになった。稜線の信州側は見事な雪庇ができていた。種池小屋に着いて雪洞を掘る。

【タイム】雪洞出発（七時）－種池小屋（一四時）

四日 今日も晴天が続き、嬉しい悲鳴を上げたくなる。一時間で爺ヶ岳中間峯に到り、ここから東尾根を下降する。この尾根は、最初は急で広い尾根が白沢天狗尾根とのジャンクションまで伸び、そこから鹿島槍を左手に見ながらのヤセた尾根が樹林帯へと下っている。ジャンクションまでスキーで下ろうと思ったが、昨日の経験から少々無理と判断、樹林帯まで降りてスキーをつける。木々の間をよけたりくぐったり、時にはぶつかったり、メンバーの技術の差がはっきりついた。

【タイム】雪洞出発（七時）－爺ヶ岳（八時）－鹿島部落（一五時半）

今回は天候に恵まれて予備日を消化することなく計画どおり運べた。平坦地や広い尾根であればスキーの効用は絶大で、ワカンをつけたパーティとは体力の消耗、時間的にもかなりの差がみられた。ベース形式での入山の足としてのスキーは、今後大いに多用したいものである。縦走形式ではかなりの部分にスキーを持ち歩くことになる。地形的に有効にスキーをつかえる山であれば問題はないだろうが、スキー技術の努力次第では、不適當と思われるフィールドでも、かなりその目的を達することが可能である。われわれのメンバーのスキー技術の差は早いものと遅いものでは一時間近くもでてしまった。山行にスキーを使おうと思うなら、何よりも山スキーに努力すべきである。そして、スキーを滑るためにルートを設定するのではなく、登下降の方法として考えていくことが大切だ。

（記・倉下秀洋）

45. 竹中 昇 「鹿島槍より剣へ〈黒部別山を越えて〉」 上
一九七九年三月一日～二十六日の記録 『岳人』第三八五号
昭和五四年七月一日刊 中日新聞東京本社発行

要 約

昭和54年(1979)3月1日～15日の記録。鹿島槍ヶ岳から剣岳。

メンバーは、寺本正史、駒宮博男、竹中昇。

行程は、3月1日 大町―大谷原―荒沢出合 BP。

2日 停滞。

3日 BP―天狗の鼻 SH (雪洞)。

4日 SH―右俣下降中止―SH。

5日 SH―北壁主稜取付―登攀中止―SH。

6日 SH―荒沢ノ頭―鹿島槍北峯―南峯―冷池小屋。

7日 冷池小屋―爺ヶ岳―岩小屋澤岳―鳴沢岳―赤沢岳 SH。

8日 SH―Ⅱ峰―右俣―赤沢出合―西北尾根末端部 BP。

9日 BP―大タテガビン沢出合―取付―P5支稜―P4支稜

10日 BP―P3・4のコーランザイレン地点。

11日 停滞。

12日 BP―P3―P2・3のコー―P2―P1・2のコー。

13日 BP―第1尾根 P1―南尾根 P1BP。

14日 BP―南峯―ハシゴ谷乗越 SH。

15日 吹雪。

●はじめに

黒部の雪にたどたどしい足跡を印してから、もう四年になるのだろうか。デモーニッシュなまでに雪の黒部がぼくを惹きつけて止まない。

この四年間、七六年三月の「大タテガビンより八ッ峯」そして七七年三月の「鹿島槍より剣」の積雪期飛驒山脈の横断、七七年十二月から七八年一月にかけての「日本海・親不知より槍」の積雪期飛驒山脈の縦走、そしてこの「ふたたび鹿島槍より剣」と、積雪期飛驒山脈の縦走と横断「縦と横の山旅」を追い求め続けてきた。そのいずれもが、黒部を巡る山登りであり、「横」を考える上で欠くことのできない黒部であった。そしてぼくにとって黒部とは黒部別山を意味していた。

今回の山行は、リーダーに寺本正史を得、メンバーとして駒宮博男、それにぼくを加えた三人の山仲間で行った。寺本は、千葉工大山岳部のOBであり、七六年ナンダ・デヴィ隊のメンバーでもあった。駒宮は東大スキー山岳部のOBで、若い意欲的なクライマーである。そして、ぼくはいまだに山に遊び呆けている早大山岳部OBである。

日本山岳会の中に、関東の学生山岳団体の集まりの場である「学生部」というセクションがある。ぼくらはそこで知り合い、OBの会を作り、去年の秋からともに鹿島槍、黒部、剣で山登りを実践してきた。それが今回の「鹿島槍より剣」と結実していった。

この山行の準備として秋に三ノ窓、ハシゴ谷乗越、冷小屋の三カ所へ食糧、燃料等のデポ品の荷上げを行い、正月に後立山から黒部への下降路に予定していた赤沢岳西尾根の偵察を行った。そして、最終的な計画は次のようなものであった。

〈三月一日〉大町より入山。天狗尾根一五〇〇_北地点 〈二日〉天狗ノ鼻 〈三日〉荒沢奥壁北稜登攀
〈四日〉鹿島槍北壁主稜登攀、冷池小屋 〈五日〉赤沢岳西尾根Ⅱ峯 〈六日〉西北尾根末端部 〈七、

八日) 大タテガビン第一尾根登攀(九日) ハシゴ谷乗越(十日) マイナーピーク東面スラブ登攀(十一日) ハッ峯I峯(十二日) ハッ峯主稜登攀、三ノ窓(十三、十四日) 剣尾根よりドーム稜登攀(十五日) チンネ左稜線登攀(十六日) 赤谷山(十七日) 毛勝山北峯(十八日) サンナビキ山北峯(十九日) 僧ヶ岳(二十日) 宇奈月へ下山

二十一日～三十一日まで予備日(十一日間)。

在京連絡所は東大スキー山岳部OBの伝田克彦さんに引き受けていただいた。そして二月二十八日、学生部の若い仲間たちに送られ、夜行列車で新宿を発った。

●鹿島槍

三月一日(雪) 深々と雪の降る早朝の大町駅にアルプス号は滑り込んだ。タクシーで大谷原まで入る。「さあ、行こう」と、寺本リーダーの一声で「鹿島槍より剣」が始まった。膝までのラッセルに難渋しながら大川沢を溯って行く。荒沢出合手前の昭電取り入れ小屋を今宵の宿と決め、一息つく。しかしそれも束の間、大谷原から登って来た監視人にすげなく吹雪の中に追いやられ、出合の東尾根末端部にツェルトを張る。

〔**タイム**〕大町(九・四〇) 大谷原(一〇・四〇) 荒沢出合BP(一五・四〇)

二日(吹雪) 終日雪が激しく停滞。

三日(晴れ) 上流に豪壮な奥壁を持つには随分と貧弱な荒沢出合を渡り、雪の少ない天狗尾根に取りつく。通り馴れた尾根を汗かきながら黙々と登って行く。陽がまぶしい。一昨日、昨日の降雪で状態は芳しくない。天狗ノ鼻に雪洞を掘り、荒沢、北壁登攀のベースとする。

〔**タイム**〕BP(七・〇〇) 天狗ノ鼻SH=雪洞(一七・〇〇)

四日(晴れのち吹雪) 晴天、登攀日和だ。しかし雪の状態が悪い。右俣を下り始めると、何と胸までも潜る。「ヤバイ」と、雪崩の危険を感じた瞬間には尾根に登り返していた。燦々と照る陽が恨めしい。すごすごと雪洞に戻る。取ってつけたように昼から吹雪となり、「行かなくてよかった」と妙な納得をする。

〔**タイム**〕SH(六・〇〇) 右俣下降中止(七・〇〇) SH(八・〇〇)

五日(晴れのち曇り) きょうも晴天の朝を迎える。荒沢の状態の悪さを見越し、北壁を登るべくカクネ里へ下ることにする。北面の故か雪の状態は荒沢に比べるとよい。カクネの里は、白いメルヘンの世界だ。静寂な谷を北壁主稜を目指し登って行く。

主稜の取付九時。寺本トップでスノーコルを目指し登攀開始。スノーコルは登攀者を拒むかのように、両雪庇を発達させている。直接にこのコルには取りつけそうにもない。コルへのルンゼの途中でピッチが切られる。二ピッチ目、駒宮が正面ルンゼ側の灌木混じりの側壁に取りつく。氷の上に新雪がふかふか積もり、ルートの状態は最悪のようだ。二時間半でザイル二ピッチが伸びる。雲行きがにわかになんて怪しくなってきた。このルートの状態からしてどうも北壁上での三ビバークは必至のようだ。登攀続行か否かの判断が難しい。いったん天狗ノ鼻に戻ったほうがよさそうだ。「帰ろうよ」と、寺本が力弱く皆に呼びかける。北壁に打ちひしがれて再びカクネの里に下り、天狗ノ鼻へと登り返した。

〔**タイム**〕SH(六・〇〇) 北壁主稜取付(九・三〇) 登攀中止(一四・三〇) SH(一八・三〇)

六日(雪) 再度北壁アタックを期し雪洞から出てみれば雪が降っている。やむを得ない、天狗尾根に登り、冷池小屋へ向かう。

行程の長いこの山行で、じっくり腰を据えて荒沢と北壁に取り組む気持ちの余裕が、今のぼくらには、どうしても生まれてこない。意地を貫き通すにはぼくらの目指している山登りはあまりに大きすぎる。ぼくにとって、この「鹿島槍より剣」は鹿島槍のバリエーションルート、特に北壁が登れなかったことにより、北壁失敗の時点でその価値を減じてしまった。「しかたないよ竹中、この状態では、この先をがんばろうよ」と、寺本が慰め、励ましてくれる。

気を取り直し、一步一步悔しさを押し殺し天狗尾根を登って行く。荒沢ノ頭に出ると、急に風が勢いを増し、視界も悪くなる。主稜の終了点を通り過ぎる時、「ここに出てくるんだなあ」と、誰彼ともなく吐息をついている。

鹿島槍北峯に到着。霧の中の山頂。ぼくらは、今、剣へのスタート台に立った。北風はぼくらをせき立てる。吊尾根を渡って南峯に立ち、冷の小屋へと駆け下る。

〔タイム〕SH(七・〇〇) 荒沢ノ頭(一二・〇〇) 鹿島槍北峯(一三・〇〇) 南峯(一三・四五) 冷池小屋(一四・五〇)



●赤沢岳西尾根

七日(晴れ) デポ品の再梱包に手間取り出発が遅れる。次の課題は赤沢岳の西尾根の下降だ。爺、岩小屋沢、鳴沢岳を越え赤沢岳へ。岩小屋沢あたりから振り返る鹿島槍の双耳峯は実に美しい。しかし、ぼくらはその荒沢と北壁が登れなかった……。

鳴沢の頂から見る八ッ峯、大タテガビンは迫力を持っている。西尾根も見える。次なる課題に意欲を持って取り組もう。赤沢岳を少し下った西尾根と西北尾根とのジャンクションに半雪洞を掘る。寺本は一日中雪盲に悩まされていた。

〔タイム〕冷池小屋(八・〇〇) 赤沢岳SH(一五・三〇)

八日(曇りのち雪) 雲行きが怪しい。急いで懸垂下降の支点を捜し下降にかかる。この西尾根は正月に三人で登っているのだから勝手は知っている。主峯とI峯とのコルまで懸垂下降の連続。I峯は、スバリ沢側を巻き込む。雪の状態は、西面の故かよく締まっている。ノーザイルでII峯へ。III峯が“猫の耳”と呼ばれている所だ。II・III峯のコルへと再び懸垂下降でおり始める。雪が降りはじめてきた。赤沢の右俣がすぐ下に見える。「忠実に西尾根を辿るか、ショートカットして右俣に下ってしまうか」を、思案する。悪天の中、III峯からの下降は長いし、難しい。右俣に下ろう。雪はまだ小振りだ、今のうちならまだ雪崩の心配はなかろうと判断する。側壁を懸垂下降すること四ピッチで右俣に降り立つ。しかし降り立つや吹雪となり、塵雪崩が落ちてくる。膝まで潜る赤沢を泳ぐように出合へと抜け出た。

赤沢岳西北尾根の末端部にツェルトを張る。積雪期黒部別山、丸山登攀のベースはここしかない。積雪期の黒部峡谷は今回で三度目だが、今年が一番雪が少ない。それでも雪の黒部は幻想的だ。

〔タイム〕SH(六・三〇) II峯(八・〇〇) 右俣(一〇・四五) 赤沢出合(一一・一五～五〇) 西北尾根末端部BP(一二・〇〇)

●大タテガビン

九日(晴れのち曇り) 次の課題は、八ッ峯と並び今回の山行の核心部ともいえるべき「大タテガビン第一尾根」だ。

「青春の一時期、あるものに打ち込んだことは」と問われれば、ぼくは即座に「積雪期の黒部別山」と答えるだろう。それほどまでに打ち込んでいるこの山は、一見すると確かに藪山であるし、剣の本峯からは何の変哲もない丘にさえ見える。が、一転して後立山から眺めると、大岩壁である。急峻なリッジ、ルンゼを持つ魅力ある登山対象に化す。この不可思議な二面性に魅かれるとともに、この藪山には日本土着の山登りがあるのではと思いつけてきた。

身支度を整え、夜明けとともに黒部の峡谷を大タテガビン沢出合へと進む。峡谷の積雪は極度に少ないが、尾根には雪が多く、キノコ雪が発達していそう。

出合に到着。大きなデブリは見当たらない。出合の雪のデルタを横切り、第一尾根の取付に出る。陽が谷に当たり始め、ブロックが一つ二つ勢いよく落ちてくる。この第一尾根は、七六年三月、ぼくが運よく積雪期の初登攀を果たしている。今回も初登時と同じくP5ルンゼ（仮称）から一尾根主稜への取付ルートを取る。急峻な雪のP5ルンゼを四ピッチの登攀でP5支稜（仮称）に出る。ここで昼食。黒部川を見おろすと釣人が一人で上流からやって来て、出合からぼくらを見上げている。誰なのだろうか。おかしな人だ。もっとも向こうも「おかしな奴がおかしな所を登っているわ」と思っていることだろう。

再び今度は、P5支稜からP4ルンゼ（仮称）を登り始める。日射で雪が腐りだしてきた。ルートはどんどん伸びて行く。P4支稜（仮称）に辿り着き、続いてP4まで急峻な灌木のリッジを四ピッチだ。P4・牛ノ角の基部に到着。言葉どおり天空に突き出ている。驚いたことにこの基部に鶴嘴があるではないか。測量人が運び上げたのだろうか？牛ノ角は、二〇〇mの毛のり岩壁だ。ここを寺本が苦勞して登り切る。日はすでに沈んでいる。

〔タイム〕BP（五・三〇）大タテガビン沢出合（八・二〇）取付（八・四五）P5支稜（一二・〇〇～一二・三〇）P4支稜（一四・四五）P4BP（一八・〇〇）

十日（曇りのち雪のち雨）今日はP3・4の科尔への懸垂下降から始動する。二ピッチで降り立つ。生暖かい。雲行きも怪しい。科尔からP3まで標高差は約二五〇m。最初の一〇〇mは急峻な雪稜だが、ザイルは用いずにぐいぐいと登って行く。後の一五〇mのP3への登りが第一尾根登攀の一つの大きなポイントである。アンザイレンする頃から湿雪が降りだす。

「ヤバイですね。どうしましょうか」と駒宮はいうが、ツェルトを張るスペースさえここにはない。P3目指し登る以外にない。急峻な雪のルンゼを登り、灌木の急なリッジに取りつく頃から遂に雨となった。雨足は徐々に強くなってくる。この第一尾根は、特にP3への登りは、垂直に近い急傾斜だ。灌木があるが故に登れるといってもよい。1ピッチ四〇m登るのに一時間以上も費やす。全身びしょ濡れだ。トップを登る駒宮が、猫の額のようなかろうじてツェルトが張れるビバークプラッツを見つける。急いでツェルトを張る。しかし、このプラッツにしても、決して雪が崩れないという保障はない。ましてや雨模様だ。ツェルトをザイルで岩壁に固定する。ラジオは二ツ玉低気圧の通過を報じていた。

〔タイム〕BP（七・〇〇）P3・4の科尔（八・三〇）アンザイレン地点（九・三〇）P3直下BP（一六・三〇）

十一日（吹雪）冬型の気圧配置となり、終日吹雪が続く。小型の石油コンロでは気休め程度にしかな濡れ物も乾きはしない。一日中寒さに震えながらの停滞となる。ラジオから流れる檜山文江の朗読する「アンネの日記」だけが唯一の慰めだ。

十二日（晴れ一時曇り）晴天の朝を迎えたことにまず安堵する。まだP3までも時間がかかるし、第一尾根の終了点である南尾根P1まで、とても一日では辿り着けまい。しかし、明後日中にハシ

ゴ谷乗越までは行きたい。

あいかわらず灌木混じりの急峻なリッジが続く。そして極めて不安定な雪壁を攀じ、雪稜を渡り、P3直下のコル状の場所に出る。P3への最後のつめを慎重に登り、ようやくP3に到着する。P2・3のコルへ懸垂下降で降り立ち、P2への垂直の灌木の壁に取りかかる。苦しい登攀が続く。ハッ峯のあの美しい雪稜を早く登りたい。P1・2のコルへの下降も二ピッチの懸垂下降だ。コルの雪を削り取りプラッツを作り終えたのは、すでに二〇時を回っていた。

〔タイム〕BP(六・三〇) P3(一四・三〇) P2・3のコル(一五・〇〇) P2(一七・〇〇) P1・2のコル(一九・〇〇)

十三日(晴れのち雪) 食糧はもう今朝で底をついた。何としても今日中に南尾根に抜けねばならない。

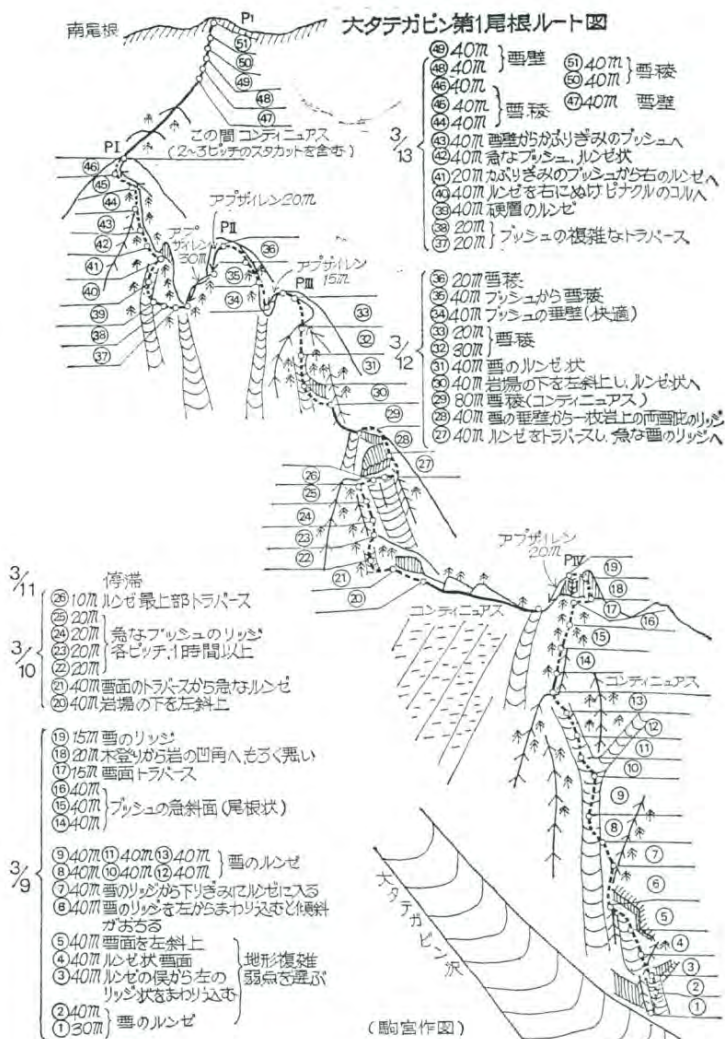
P1へは、大タテガビン沢側をからみながらP1の肩に出る。さらに急峻なルンゼ、灌木の垂壁、不安定な雪の垂壁を登り切り、P1へ。長く苦しかった第一尾根の核心部は終わった。しかしまだ南尾根は遠い。息つく暇もなく、雪が降り出し視界の悪い中を南尾根P1へ続く不安定な雪稜をコンティニュアスで辿っていく。霧の切れ目から南尾根を確認し、ようやく南尾根P1の頭に立った。最後に一粒残ったコンソメを回し飲み、濡れたシュラフに入るが、寒くて眠れない。明日はハシゴ谷乗越に着けそうだ。それが唯一の支えだ。

〔タイム〕BP(六・三〇) 第一尾根P1(一七・〇〇) 南尾根P1BP(一八・三〇)

十四日(晴れのち吹雪) 空腹の一步一步は実に空ろなものだ。ステップが思うように決まらない。南峯に到着。ハシゴ谷乗越は指呼の近さだが、なかなか距離が縮まらない。持てる力を振り絞り乗越に辿り着く。秋に駒宮が駒大山岳部の芳賀君の協力を得て荷上げたデポ品を回収する。そして、内蔵助谷側の斜面を少し下った所にあった雪洞を広げ、疲れた体を横たえる。午後からは吹雪。

〔タイム〕BP(七・三〇) 南峯(九・〇〇) ハシゴ谷乗越SH(一一・二〇)

十五日(吹雪) 終日吹雪が猛り狂う。(つづく)



竹中昇 「鹿島槍より剣へー黒部別山を越えて 下」
一九七九年三月一日～二十六日の記録 『岳人』第三八六号
昭和五十四年八月一日刊 東京新聞出版局 発行

要 約

昭和54年(1979)3月16日～26日の記録。鹿島槍ヶ岳から剣岳。

メンバーは、寺本正史、駒宮博男、竹中昇。

行程は、3月16日 ハシゴ谷乗越SH－三稜大岩－P1基部BP。

17日 BP－P3－P4・5－I峰SH。

18日 停滞。

19日 BP－V・VIのコル－VII・VIIIのコルBP。

20日 BP－八ツ峯の頭－池ノ谷乗越－剣岳本峰－三ノ窓。

21日 三ノ窓SH－小窓－池ノ平山－大窓－赤谷山BP。

22日 BP－ブナクラ乗越－猫又山－釜谷山－釜谷山・毛勝山南峰コル。

23日 SH－毛勝山北峰－西谷ノ頭－ウドの頭－サンナビキ南峰－滝倉山・
サンナビキ北峰中間点BP。

24日 BP－滝倉山－滝倉山・駒ヶ岳中間点SH。

25日 停滞。

26日 SH－駒ヶ岳－僧ヶ岳－宇奈月尾根－宇奈月温泉。

三月一日、大町から入山、鹿島槍ヶ岳北壁を登るべくカクネ里に下ったものの、悪天候にはばまれ登攀を断念せざるを得なかった。これで今回の縦走の価値観が減じられたという気落ちはあったが、気を取り直し天狗尾根から鹿島槍に立ち、稜線をたどって赤沢岳西尾根を下降、雪の黒部川畔に立った。

ここからが今山行の核心部、大タテガビン第一尾根の登攀である。P5ルンゼからP1まで五日間の苦闘でようやく丸山南峰に着いたのは三月十五日だった。

●八ツ峯

十六日(快晴)十四日からの降雪は稜線で一帯近くにも達した。ラッセルは腰まで。剣沢への下降路を、ハシゴ谷第一尾根にとる。

ぼくらの次の課題は「八ツ峯」だ。計画ではマイナーピーク東面スラブから二稜だが、この十四日からの積雪量を考えれば、とても登る気にはならない。ぼくが勝手知った三稜を登ることにする。

剣沢に降り立ち、懐かしの三稜末端部大岩へ。ハシゴ谷第一尾根の下降中、小さな板状雪崩が出て、肝を冷やす。雪はまだ不安定だ。

三稜をP1基部のアンザイレン地点を目指し、腰まで潜るラッセルに難渋しながら進んで行く。P1基部に到着。雪が落ち着いていない。これではサルスベリのルンゼ登高は、非常に危険だと判断し、まだ昼前だが、ツェルトを張ることにする。日がかげってから、サルスベリのルンゼへのトラバース地点に、明日の行動に備えザイルを固定しておく。

〔タイム〕ハシゴ谷乗越SH(七・〇〇)三稜大岩(九・〇〇)P1基部BP(一一・〇〇)

十七日(曇りのち吹雪)昨日の午後太陽に虹がかかり、今日の悪天が予想されたが、雪も締まっているので出発する。P3、P5の三稜の難所も、平凡な雪稜の乗っ越しにしか過ぎない。七六年、七七年の前二回に比べ易しい感じがする。雪のルートは状態により難易度が大きく左右されるよう

だ。P6あたりから降雪となり、I峰直下からは目もあけられぬような猛吹雪となる。ようやくI峰に立つ。前進は無理だ。長次郎谷側に雪洞を掘り、逃げ込む。

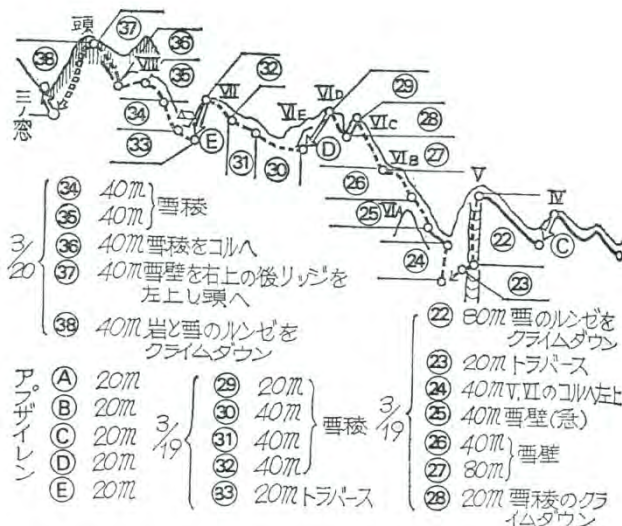
〔タイム〕BP(六・一五) P3(七・三〇) P4・5のCOL(九・五〇) I峰SH(一三・一〇)

十八日(吹雪)終日吹雪き、停滞。

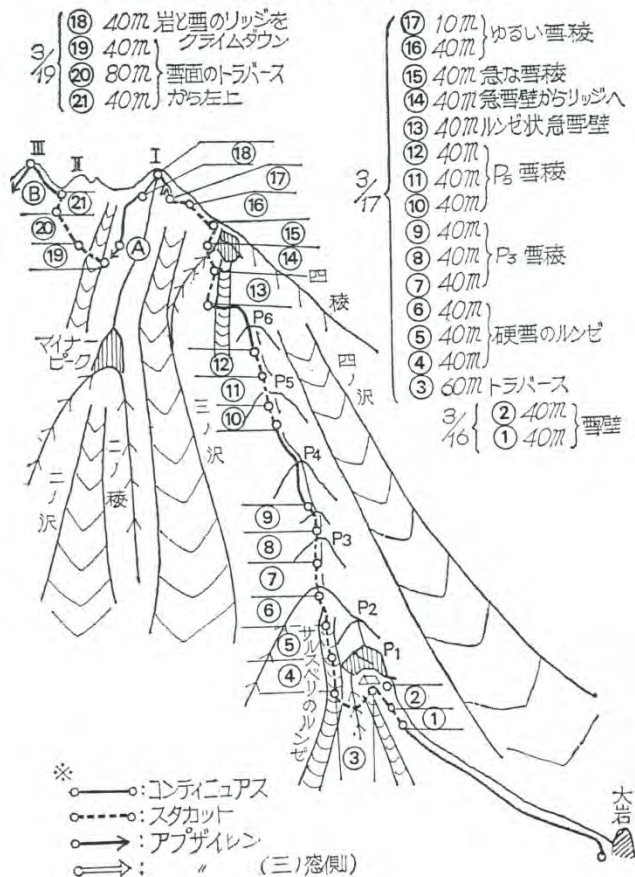
十九日(晴)晴天だ。美しい八ツ峰の主稜の全貌が目の前に展開している。しかし昨日の降雪で深いところでは胸までも潜る。岩と雪が不安定にミックスした稜を下り、懸垂下降を混じえながらトラバース気味にI・IIのCOLへ。II峰は長次郎谷側を巻く。紺碧の空に映える八ツ峰の白き雪稜は、何度来ても素晴らしい。しかし、今日は、何とラッセルの重たいことか。III、IV峰の下降は竹ペグを支点に取り懸垂下降する。V峰の長次郎谷側の急峻なルンゼを八〇クラッキングダウン、V・VIのCOLへトラバースする。

午後の登攀は、さらに湿ってきた雪の重いラッセルとなる。VI峰の登りが長く苦しい。VI峰の頂上に着く頃は皆少々疲れ気味である。VI・VIIのCOLには、懸垂下降で降り立つ。日が沈んで行く。VII峰だけは超えておこうと、気力を奮い起こし、重い足取りで懸命にVII峰への長い雪稜を辿る。VII・VIIIのCOLに懸垂下降で降り立つ。雪稜を削りビバークプラッツを作る。

〔タイム〕BP(六・三〇) V・VIのCOL(一三・二〇) VII・VIIIのCOLBP(一八・二〇)



八峰I峰3稜から八峰主稜ルート図



二十日(雪のち曇り時々晴れ)小雪が舞っている。早く八ツ峰を抜けねばと思いつつ、VIII峰の急雪壁に取りつく。胸までつかえる雪壁にアイスバイルとピッケルを交互に打ち込みVIII峰へ。視界が悪い。乳白色の中、どこが雪稜でどこが雪底かの境目がわからない。一瞬の霧の切れ目を縫って頭への登路を取る。駒宮が頭に立つ、続いて寺本が、ぼくが立つ。苦しい八ツ峰だった。

池ノ谷乗越に降り立つ頃から、天候回復の兆しが見え始めてきた。本峰へ急ぐことにする。九時五〇分、剣岳本峰に辿り着いた。鹿島槍から黒部別山を越えて今この剣に来たのだ。しかしぼくにはまだ北方稜線が残されている。今ここから早月を下れば、暖かな町の生活が待っている。そう思うと下りたい衝動に駆られてくる。

ぼくは、去年の春にこの剣で尊い一人の後輩斎藤幸吉君を亡くしている。ぼくが彼の遺志に応え

られるとしたら、それは一生懸命に山に登る以外にない。そして、いつの日か今度は「鹿島槍より剣」を早稲田の若い現役連中とやってみよう—と思う。バリエーションルートを一〇本も含めた国内で求められる最も厳しい山登りをしよう。

本峰での記念撮影を済ませ、次なる課題北方稜線を目指す。長次郎のコルへの下り口あたりで、霧が晴れ八ッ峯の全貌が望める。美しい雪の稜に刻み込まれた一条のトレール。ぼくらはあの雪稜を辿って来たのだ。

三ノ窓に到着。学生部の現役連中の北方稜線パーティと会う。久しぶりの再会に話が弾む。千葉工大山岳部の人たちが掘っておいてくれた雪洞に入り、デポ品を回収し、午後の一時をゆっくりと休む。

計画では、チンネと剣尾根の登攀を行うことになっていたが、如何せん、宇奈月までの縦走を考えるなら日数も足りないし、シュリングもほとんどなくなってしまった。

〔タイム〕BP(六・三〇) 八ッ峯の頭(八・〇〇) 池ノ谷乗越(八・二〇) 剣岳本峰(九・二〇~五〇) 三ノ窓(一一・三〇)

●北方稜線

二十一日(曇り) 三ノ窓を宇奈月目指し出発する。学生部パーティのトレールがあり助けられる。連中は本峰を経て大日へと向かった。天候は曇天。大窓付近で小雪がちらつき、気温が高いので大タテガビンの悪夢のような雨の再来かと嫌な気分になるが、まもなく雪は止む。大窓の頭からの下りはカチンカチンにクラストし緊張させられる。白はげ、赤はげの難所はさして問題ない。

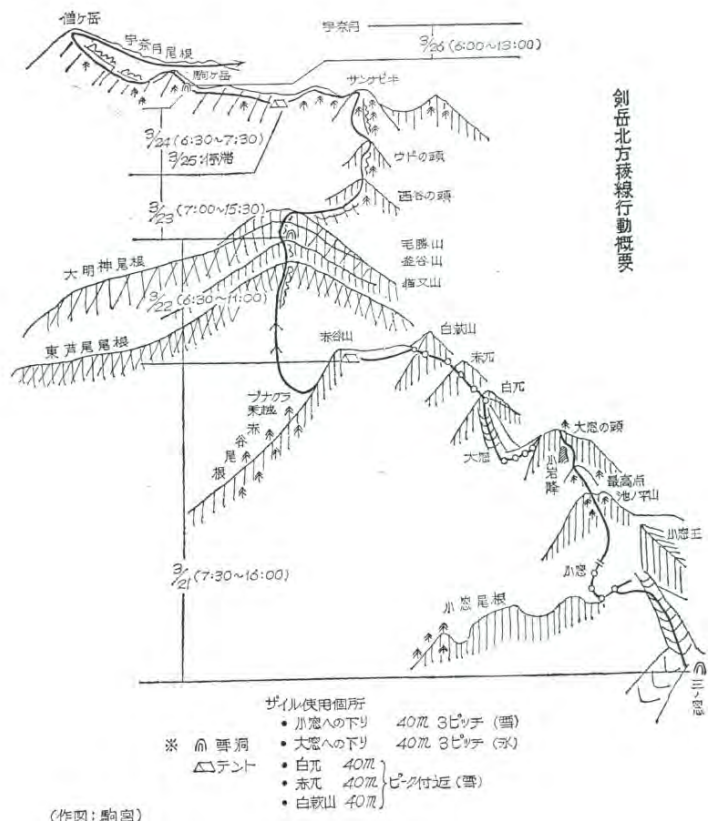
北方稜線に入り、楽しい気分で歩みが進められる。赤沢岳西尾根、大タテガビン、八ッ峯と緊張の連続から一転して稜線の漫歩。実に愉快だ。しかし、北方稜線は遠く長い。毛勝三山が実に大きい。この山の乗っ越しが北方稜線縦走の成否を決めそうだ。展望を楽しみつつ、夕刻、赤谷山に到着。

〔タイム〕三ノ窓SH(七・三〇) 小窓(九・三〇) 池ノ平山(一〇・三〇) 大窓(一二・五〇) 赤谷山BP(一六・〇五)

二十二日(地吹雪のち吹雪) 今日毛勝の乗っ越しだ。これさえ越せば後はなんとかなる。まずは猫又山。ブナクラ乗越からの長い登りだ。積雪の状態により雪崩が心配な場所だが、今日は大丈夫だ。猫又山あたりから吹雪となり、釜谷山を越える頃から風雪が強まり前進が難しくなる。毛勝山南峰とのコルに雪洞を掘る。

〔タイム〕BP(五・〇〇) ブナクラ乗越(六・五〇) 猫又山(九・五〇) 釜谷山(一〇・五〇) 釜谷山・毛勝山南峰コル(一一・一五)

二十三日(快晴) 台風一過で快晴となる。疲労が溜まっているのか朝寝坊してしまう。まだタガは緩められない。稜線は風が強かったせいかラッセルはさほどない。毛勝山に到着。ぼくらの目指す



最後の峰僧ヶ岳が遠くに望める。まだ行く手は長い。できる限り早くウドの頭、サンナビキを通過しよう。毛勝の乗っ越しとともにこの二つの山の通過も北方稜線縦走の大きなポイントだ。日が高くなるにつれ、アイゼンに雪の団子が付着し苦勞する。ウドの頭、サンナビキを超える。

〔タイム〕SH（七・三〇）毛勝山北峰（八・〇〇）西谷ノ頭（九・〇五）ウドの頭（一〇・四〇）サンナビキ南峰（一三・四〇）滝倉山・サンナビキ北峰中間点BP（一五・二〇）

二十四日（曇りのち吹雪）二ツ玉低気圧の通過が予想される。できるだけ進んで、適当な所で雪洞を掘り悪天に備えよう。ところが一時間もたたぬうちに天候は悪化して吹雪となる。駒ヶ岳と滝倉山との中間点で稜線の黒部側に雪洞を掘る。

〔タイム〕BP（六・一五）滝倉山（七・〇〇）滝倉山・駒ヶ岳の中間点SH（七・三〇）

二十五日（吹雪）停滞。

二十六日（晴れ）稜線は思いの他にクラストしている。こうなるとしめたものだ。快調に歩き駒ヶ岳へ。八時、待望の僧ヶ岳に立つ。遙かに鹿島槍が望まれる。北壁が悔やまれる。最後のフィルムに僧ヶ岳での三人の勇姿を収め、宇奈月への下りにかかる。宇奈月尾根の不明瞭な分岐点も寺本の的確なルート判断で通過する。宇奈月の温泉町が眼下に見える。有磯の海も望まれる。駆けるように下る。昼過ぎ、雪のない春の様相となった宇奈月にゴールインする。二十六日間の長きにわたった山行が終わったのだ。

●おわりに

雪の状態が悪く荒沢奥壁、鹿島槍北壁が登れず、チンネ、剣尾根が日数不足で登れず、当初の計画は三分の一ぐらいしかこなせなかった。これは悪天にもよるが、プランナーとしてのぼくの不本意による所大であったと思う。時間が許すならば、三度「鹿島槍より剣」を試みてみたい。具体的には、「鹿島槍北壁～牛首尾根～剣沢大滝～八ッ峯マイナーピーク東面スラブ～八ッ峯I峰二稜・主稜～池ノ谷剣尾根」と、バリエーションルートに焦点を絞った密度の濃い「鹿島槍より剣」を考えている。

ぼくは、この四年、良き山仲間にも恵まれ、未完ではあるが一連の「縦と横の旅」を追い求めることができた。ぼくの持てる力は極めて弱いし、技も極めて拙ない。こんなぼくを支えていたのは、近世の風狂・芭蕉が元禄の頃に厳しい旅の中で追い求めた詩を、今の厳しい山登りの中で直截に鑑賞し、そこから何ものかを創りたいという意欲であった。

あとがき

昨年実施致しました企画展「アルピニズム誕生 昭和初期の鹿島槍ヶ岳登山史」に伴い刊行した同名の企画展図録が、鹿島槍山域における大正時代から昭和初期にかけての研究史と位置付けると、本書はその研究史を証拠付ける第一次資料に相当するものにならうかと思えます。既に当時実際にフィールドで活躍された方々の多くは他界された方も多く、当時の現場を知る人も少なくなつてまいりました。当時を知る関係者に聞き取りを行ったり、文献の所在を確認するなどのこうした作業は、地味ではありますが必ずや後世に役立てていただけるものと一同がその思いで取り組んでまいりました。あるいは重要な証言や文献を欠落してしまった事も考えられます、今後はさらに皆様から情報をご提供頂き、後続する後立山登山史に記録作成に役立てていきたいと考えております。ご指導の程、宜しくお願い致します。

大町山岳博物館では、平成 20 年から後立山登山史検証作業を行つてまいりました。その先頭になつて事業を進めてまいりました柳澤昭夫山岳博物館館長が平成 22 年 3 月 23 日、本書の刊行はもとより念願であつた後立山登山史の作成も道半ばに逝去いたしました。これまで館長を長きにわたり支え、ご厚情を賜りました大勢の皆様、館長に成り代わり御礼申し上げます。引き続き山岳博物館では柳澤館長の遺志を受け継ぎ、微力ではありますが邁進してまいりたいと考えております。引き続きの叱咤激励をお願いできればと考えております。今後とも宜しくお願いを申し上げます。

最後になりましたが、本書をまとめるにあたり、以下の教育機関、研究者、個人の皆様に貴重な書籍や資料、ご助言を頂きました。ここにご芳名を記して感謝の意を表しますとともに、厚く御礼申し上げます。

(清水 隆寿)

〔団体〕

社団法人 日本山岳会 桂書房 大修館書店 朋文堂 五月書房 東京創元社
東京中日新聞社 一高同窓会 稲門山岳会（早稲田大学山岳部） 立教大学山友会
明治大学山岳部 針葉樹会（一橋大学一橋山岳会） 東京農業大学山岳部
大町民話の里づくり「もんぺの会」 松本市立博物館附属施設旧制高等学校記念館
大町山の会

(順不同・敬称略)

〔個人〕

伊藤 達夫 松永 敏郎 宇津 力雄 児玉 茂 松本 憲親 齋藤 一男
西本 武志 砂田 定夫 佐々木 誉実 酒井 國光 佐伯 郁夫 成川 隆顕
宮澤 美渚子 加藤 智司 麻植 正弘 木下 守 榛葉 伸男 栗原 久
山田 新 堀田 弥一 小原 晴子 松本 武子 荒井 泰三

(順不同・敬称略)

「北アルプス登山史資料 1 鹿島槍ヶ岳登山史」

発行日 平成 22 年(2010) 3 月 31 日 発行
発行・編集 市立大町山岳博物館
〒398-0002 長野県大町市大町 8,056-1
TEL. 0261-22-0211 FAX. 0261-21-2133
URL : //www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
E-mail : sanpaku@city.omachi.nagano.jp



小谷部全助

2010